

日本研究第38集

装丁 岡村元夫

日本研究
第38集
目次

海女にからみつく蛸の系譜と寓意

——北斎画「蛸と海女」からみる春画表現の「世界」と「趣向」

鈴木 堅弘 13

「東京銀座資生堂」の誕生

——福原信三と銀座イメージの構築

戸矢理衣奈 53

一九二五年近代中国東北部(旧満洲)で開催された

大連勧業博覧会の歴史的考察——視聴化された満蒙

竹村 民郎 81

古丁における翻訳

——その思想的変遷をさぐる

梅 定娥 121

野口米次郎のラジオと刊行書籍に見る「戦争詩」

——『宣戦布告』と『八紘頌一百篇』を中心に

堀 まどか 187

異郷での彷徨

——「上海」の一解法

中川 智寛 221

松村謙三グループ…自民党政権の対中パイプ

——一九五九—一九七二

翟 新 233

〈研究資料〉

オイゲン・ヘリゲル著

「日本民族の生活と文化における伝統」全訳と解題

翻訳・秋沢美枝子
解題・山田 奨治

253

〈共同研究報告〉

共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」報告(二)

鈴木 貞美 263

ドイツ・ハイクの生成と俳句再評価

依岡 隆児 265

歴史書の剽窃

——田口卯吉『支那開化小史』偽版訴訟事件の考察

甘露 純規 281

岡田美知代と花袋「蒲団」について

小谷野 敦 297

和辻哲郎の哲学観、生命観、芸術観

——『ニイチエ研究』をめぐって

鈴木 貞美 315

論文要旨 7

英文要旨 v

英文目次 iv

所属並びに論文受付・受理日一覧 iii

『日本研究』投稿要項 ii

論文要旨

(一) 内はキーワード

海女からみつく蛸の系譜と寓意

—北斎画「蛸と海女」からみる春画表現の「世界」と「趣向」

鈴木 堅弘

本論は、春画として最も有名な北斎画の「蛸と海女」を取り上げ、この画図を中心に春画・艶本表現における図像分析を試みた。まず具体的な図像分析に先駆けて、同種のモチーフが「あぶな絵」や「浮世絵」にも描かれている背景を追うことで、近世期の絵画表現史における「蛸と海女」の画系譜を作成した。そしてその画系譜を踏まえて、北斎画を中心とした春画・艶本「蛸と海女」の図像表現のなかに、同時代の歌舞伎・浄瑠璃・戯作などに用いられた「世界」と「趣向」という表現構造を見出すことにより、春画・艶本分野においても同種の演出技法が用いられていたことを発見するに至った。また、こうした図像分析を通じて、北斎画を中心とした春画・艶本「蛸と海女」の表現構造が、太古より連綿と続く「海女の珠取物語」の伝承要素や、江戸時代の巷間に流布した奇談・怪談の要素で構成されていることを読み解いたといえよう。

なお、これらの考察により、春画・艶本の性表現のみに注視しない、新たな見方を提示することができたにちがいない。

【春画 艶本 浮世絵 怪談 北斎 勝川春章 北尾重政 笑ひ 世界 趣向 謡曲】

「東京銀座資生堂」の誕生

—福原信三と銀座イメージの構築

戸矢理衣奈

銀座に有名店は多々あるが、資生堂はその代表格であろう。「東京銀座資

生堂」という商標は海外も含めて広く親しまれている。しかし一八七二年に福原有信が日本初の西洋調剤薬局として創業して以来、資生堂は「東京新橋資生堂」として知られていた。有信の三男、福原信三は経営に参画すると共に化粧品販売に本格的に参入し、意匠部を設立するなど、従来のイメージの一新を図った。一九二一年に「東京銀座資生堂」の商標を採用し、短期間に「資生堂」といえば銀座」という、強力なイメージを定着させる。本稿では信三が五十名を超える文化人らの寄稿を得て完成した「銀座」をはじめ、信三による銀座にまつわる著作を検討し、信三と銀座とのかかわりや、資生堂のブランドイメージ構築の背景について論じる。

福原信三は当時、東京の都市計画を主導していた東京市や内務省に対して、銀座の商店の声を代弁するいわば銀座のスポークスマンとして精力的に活動した。当時の銀座は一九一四年の東京駅の開業に伴う新橋駅の閉鎖や、三越を筆頭にした日本橋のデパートの興隆のなかで、かつてない危機的な状況におかれていた。信三はこれまで正式な町名としては四丁目までしかなかった銀座を八丁目まで拡大する「大銀座」計画や、銀座全体をアーケード化し、建物や通りの景観を整えるとともに銀座の商店が協力して共同入荷を行う提案など、銀座の商店が共存共栄できるように様々な画期的な提案を行った。

信三の提案は新聞などに掲載され、強い影響力を持った。「大銀座」計画を筆頭にいくつかは実現されて、現在の銀座の基盤をなしている。一方で信三は銀座の商店それぞれが専門性を高めて、独自の個性を持つべきであることを強調する。銀座が特色ある店舗の集合体になってこそ、デパートに対抗することが出来るというのである。

資生堂でも化粧品の販売ばかりでなく、資生堂ギャラリーや資生堂パーラーを開くなど、銀座そして資生堂の独自の雰囲気重視した様々な活動を通して銀座への集客に努めた。

福原信三は都市のイメージが企業や商品のイメージに与える力を明確に意識し、化粧品製造やデザインと同時に、銀座という都市のイメージを高めることに尽力した。いまや「銀座」というイメージは資生堂がもつ最大の無形資産のひとつでもあるが、福原信三による銀座全体を見据えた活動がその原点となっている。

【資生堂 銀座 新橋 福原信三 福原有信 東京の都市計画 後藤新平

一九二五年近代中国東北部（旧満洲）で開催された

大連勸業博覧会の歴史的考察——視聴化された満蒙

竹村 民郎

大連勸業博覧会（以下大連勸業博と略す）が一九二五年八月十日に、大連市で幕をあげた。これは博覧会と植民地主義との結合というものの輪郭をしめすのに大きく寄与した。博覧会が開催された時期は、大連市で新市制が施行された年（一九二五年）である。さらに言うならば中国上海市における五・三〇事件勃発及び満洲における国際資本戦が激化し始めた時代でもある。この帝国の危機は合理的な満蒙政策と結びついた「文化主義的支配」と称されているものへの転換を導いていくこととなる。

まさに大連勸業博はこれを象徴するものであり、博覧会を契機として、日満鮮をつなぐツーリズム、ラジオ放送、映画、ライブ・スタイルの新しい形態、都市空間を彩る夜間電飾等の情報・文化装置が一斉に出現した。経済的にも大連勸業博開催期は、大連市における政商的企業家層の退潮と、満鉄及び日本の一流企業、実務的知識人等による大連市経済界への進出に特徴づけられる。さらに言うならば大連勸業博開催期は、大連市のみならず、満洲の日本人社会に満蒙統合や、ラディカルな満蒙認識を呼ぶ世論が沸騰しはじめた時期でもあった。

【大連市 博覧会 南満洲鉄道株式会社 植民地 ツーリズム ラジオ放送】

古丁における翻訳

——その思想的変遷をさぐる

梅 定城

古丁は生涯日本語作品の翻訳を行った。その翻訳は北平（北京）時代、「満洲国」時代、中華人民共和国時代と三つの時期に分けることができる。本論文は主に「満洲国」時代の翻訳を対象とし、翻訳態度の変化を考察するため北平時代には触れるが、中華人民共和国時代については省略する。

満洲事変で北平に亡命した古丁は、中国左翼作家聯盟北方部に入り、中国の労働者革命運動を応援するために岩藤雪夫の小説や蔵原惟人の論文等日本プロレタリア作品を翻訳した。しかし、逮捕されて「転向」、故郷の長春へ帰り、「満洲国」の官吏となった。

「満洲国」での古丁の翻訳については、一九三七年、一九三八年から一九四一年、一九四二年から一九四五年という三つの段階に分けて考察する。第一段階では、石川啄木「悲しき玩具」等現実社会に反抗する作品を翻訳した。これらには、苦悶しながら希望を見出そうとする古丁像がうかがえる。また、その原文の中の左翼的な内容に対する処理の仕方により「満洲国」の左翼に対する厳しい取締りがうかがえる。第二段階では夏目漱石の『心』等文学作品を翻訳した。その翻訳には、古丁の文学技術を学び、漢語を改革しようとする意欲が読み取れる。

第三段階では、大川周明『米英東亜侵略史』等、主に時局的と思われるものを翻訳した。そこからは複雑な心境を抱えながら「大東亜戦争」の流れに乗る古丁像が浮かび上がる。また、『芸文志』に掲載された吉川英治「宮本武蔵」の部分訳からは、古丁の「満人」の民度に対する批判が続いていることも分かる。また、一九三八年から、古丁は、漢語の注音符号の使用や国立編訳館の設立を主張していた。そこに、「満洲国」の「民族協和」の旗の下で、日本文化への同化を強いる政策に対しては漢語と漢語文化を守ろうとする彼の姿勢がうかがえる。

【古丁 翻訳 中国左翼作家聯盟 「満洲国」 「民族協和」 「大東亜戦争」】

野口米次郎のラジオと刊行書籍に見る「戦争詩」

——『宣戦布告』と『八紘頌一百篇』を中心に

堀 まどか

野口米次郎が「戦争詩」を書いた事実は、野口自身や彼の日本語詩歌に対する否定的評価を決定づけてきた。「戦争詩」に、犯罪性や「声の暴力性」の所在、政治プロパガンダの有効性をみる方法は、長く頻繁に行われてきたことである。「戦争詩」が量産された時代は、戦争の時代と重なり、ラジオ

普及の時代と重なっている。たしかに新メディアと戦時期詩歌の相關関係といった視点から考えれば、「声の暴力性」や政治性が濃厚に表出し、決まり切った語句の羅列に過ぎない「屑詩」しか拾えないのは事実だが、それらがその時代の、その詩人の表現の、総体ではない。現在使われている「戦争詩」という用語には、当時「愛国詩」「国民詩」「戦争詩」と使い分けられていたものを一括している問題があり、また、当時の詩人たちが戦時期詩歌に担わせようとしていたいくつかの役割やその諸議論、そして検閲の表現規制の中で「抵抗」を示そうとした詩人達の姿を無視してきた事実がある。

本稿では、野口米次郎の知られている側面と知られていない側面をいくつか具体的に考察してみたい。つまり、ラジオ放送や国策宣撫に関与した面とそれに抵抗を示す詩を書いて「削除処分」を受けたり、若いアナキストから賞讃されていたりするという面である。敗戦後GHQに没収されることになる『宣戦布告』と『八紘頌一百集』を中心に、野口がそこに何を表現したのか、「声の権力者」の抱えた両義性と矛盾とを、解明する。

【戦争詩 愛国詩 国民詩 ラジオ メディア モダニズム 朗読 『宣戦布告』(一九四二) 『伝統について』(一九四三) 『八紘頌一百集』(一九四四)】

異郷での彷徨

——「上海」の一解法

中川 智寛

横光利一「上海」について、まずは登場人物の分析を行った。参木については、虚無的な要素と女性への定まらない心理という背反的造型がなされている点を指摘したが、同時にかなり複雑な人物としても描かれていると見た。

他の人物達についても概観したが、特に宮子に着目し、彼女だけが上海という土地に執着しつつ、それ以外の人物を相対化する役割と読み込んだ。

また、作中に度々盛り込まれている掛詞的言辞を指摘し、登場人物の造型と関連付けられている点を注視した。

【横光利一 「上海」 異郷 彷徨 帰属 国際情勢 唯物 改稿】

松村謙三グループ…自民党政権の対中パイプ

——一九五九—一九七二

翟 新

日本自民党衆議院議員である松村謙三らが国交回復前の対中関係の局面を開拓するために結成した政策グループは、対中経済および文化交流活動に努めたことを通して日中両国の政府と与党の間で政治意思を疎通させるパイプの役割を果たしたことで、日本の保守陣営で日中関係正常化に対する貢献の最も顕著な政治勢力になり、また彼らによって主張された日米安保体制のもとに長期で安定する対中関係を構築することによって日本の国益を最大限に実現させるという戦略的意図と目標は、根本的にその対中政策の特質と射程を制約したのである。

【松村謙三グループ 自民党政権 対中パイプ 日中関係正常化】

オイゲン・ヘリゲル著

「日本民族の生活と文化における伝統」全訳と解題

秋沢美枝子／山田奨治

オイゲン・ヘリゲルが戦時中に出版したもののうち、その存在がほとんど知られていない未翻訳エッセイを研究資料として訳出する。ヘリゲルのエッセイは、日本文化の伝統性、精神性、花見の美学、輪廻、天皇崇拜、犠牲死の賛美について論じたものである。その最大の特徴は、彼の信念であったはずの日本文化に禅仏教論には触れずに、そのかわりに国家神道を日本文化の精神的な支柱に位置づけた点にある。

【オイゲン・ヘリゲル 弓と禅 ナチズム 文化大国】

ドイツ・ハイクの生成と俳句再評価

依岡 隆児

ドイツ語圏における「ハイク」生成と日本におけるその影響を、近代と伝統の相互関連も加味して、双方向的に論じた。ドイツ・ハイクは十九世紀末からのドイツ人日本学者による俳句紹介と一九一〇年代からのドイツにおけるフランス・ハイカイの受容に始まり、やがてドイツにおける短詩形式の抒情詩と融合、独自の「ハイク」となり、近代詩の表現形式にも刺激を与えていった。一方、日本の俳句に触発されたドイツの「ハイク」という「モダン」な詩が、今度は日本に逆輸入され、「情調」や「象徴」という概念との関連で日本の伝統的な概念を顕在化させ、日本の文学に受容され、影響を及ぼしていった。こうした交流から、新たに「ハイク」の文芸ジャンルとしての可能性も生まれたのである。

【ハイク 文化交流 象徴主義 情調 ドイツ文学 比較文学 モダニズム 文芸ジャンル 概念 近代詩】

歴史書の剽窃

——田口卯吉『支那開化小史』偽版訴訟事件の考察

甘露 純規

明治二十四年、明石孫太郎は田口卯吉『支那開化小史』剽窃の理由で告発された。問題の図書『新体支那歴史』は、著作権に関する伝統的な考え方と新しいそれとの違いを提示するものとなった。本稿は、田口と明石の主張に基づき、この剽窃問題の文化的意味を問うものである。

【著作権 剽窃】

岡田美知代と花袋「蒲団」について

小谷野 敦

田山花袋の「蒲団」については、さまざまに評されているが、中には、伝記的事実を知らず、ただ作品のみを読んで感想を述べる類のものが少なくなく、また伝記的研究も十分に知られていないのが実情である。本稿では啓蒙的意味をこめ、ここ十数年の間に明らかにされた手紙類を含めて、その成立経緯を改めて纏め、「横山芳子」のモデルである岡田美知代と花袋の関係を纏めなおし、花袋がどの程度美知代に「恋」していたのかを査定するものである。

「蒲団」は、作家の竹中時雄が、女弟子だった横山芳子への恋慕と情欲を告白する内容だが、芳子のモデルは実際に花袋の弟子だった岡田美知代である。発表以後、これがどの程度事実なのか、論争が続いてきた。戦後、平野謙は、「蒲団」発表後も、岡田家と花袋の間で手紙のやりとりがなされていることから、虚構だったとし、半ば定説となっていた。しかし、館林市の田山花袋記念館が一九九三年に刊行した、花袋研究の第一人者である小林一郎の編纂になる『蒲団』をめぐる書簡集』により、新たな事実が明らかにされた。美知代が弟子入りしてほどなく、花袋は日露戦争の従軍記者として出征しているが、この事実が「蒲団」では省かれている。だが、その際美知代から花袋に送った手紙には、恋文めいたものがあつた。妻の目に触れるものであるから、花袋は冷静な返事をしていったが、花袋が帰国した後、美知代は一時帰省し、神戸で英語教師をしていた兄の実厩の許にあつて、神戸教会の催しで、キリスト教徒の永代静雄と出会い、恋に落ちる。そして神戸を発つて東京へ帰るのに三日かかり、途次に静雄と会っていたのではないかと疑われ、美知代が肉休関係を告白したために親元へ帰されるところで「蒲団」は終わっている。

しかし手紙をみると、永代と知り合ってから、花袋宛の熱っぽい手紙がなくなり、花袋はもとほさほどに思っていないかつた美知代に急に恋着を感じ始めたことが、その後の花袋の美知代宛の手紙に恋を歌った詩がいくつかある

ことから分かる。つまり真相は、美知代からの恋文があったために花袋もその気になったところへ、永代という恋人ができたため美知代の働きかけがなくなつて花袋が煩悶し始めたというものであると分かり、「蒲団」は決して虚構ではなかつたのである。

美知代は花袋との縁が切れてからは、繰り返し「蒲団」における、主として「田中」つまり永代の描き方に不満を述べているが、晩年には、永代との関西での同衾はなかつたと主張している。しかし三日の遅延はうまく説明できておらず、説得力はない。

【蒲団 田山花袋 岡田美知代 永代静雄 虚構 私小説 手紙 伝記】

和辻哲郎の哲学観、生命観、芸術観

——『ニイチェ研究』をめぐって

鈴木 貞美

和辻哲郎（一八八九—一九六〇）の『ニイチェ研究』（一九一三）は、彼の哲学者としての出発点をなす書物であり、同時に、日本におけるはじめてのまとまつたフリードリッヒ・ウイヘルム・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) の研究書として知られている。また、そこに示された考え方は、その後の彼の歩みに、かなりの意味をもつものとなった。本稿第一章では、『ニイチェ研究』の立場、方法、意図を分析し、「宇宙生命」を原理とする初期和辻哲郎の哲学観が大正生命主義の典型であることを明らかにする。第二章「『ニイチェ研究』まで」では、和辻哲郎の最初期の著作にニーチェへの接近の跡をたどり、第三章では、内的経験、暗示象徴、永遠回帰、宇宙生命などのキーワードについて考察し、また同時代思潮との関連をさぐる。第二章、第三章をあわせて、初期和辻の哲学観、世界観（狭義の哲学観、表現観）の形成過程を明らかにする。「結語」では、各章の結論をまとめるとともに、和辻哲郎の初期哲学が、その後の歩みに、どのように働いているかを展望する。

なお、本稿は、和辻哲郎の「哲学」「芸術」観をめぐって、「修養」および「人生論」との関係を探る点で、二十世紀初頭の学芸ジャンル概念編成の解明に資するものであり、同時に和辻哲郎の「宇宙生命」観念と、その形成過

程を探る点において、二十世紀初頭の生命観、とりわけ大正生命主義研究を増補するものである。

【和辻哲郎 ニーチェ 生の哲学 宇宙生命 内的経験 暗示象徴 永遠回帰 哲学観 芸術観 大正生命主義 修養 人生論】

海女にからみつく蛸の系譜と寓意

——北斎画「蛸と海女」からみる春画表現の「世界」と「趣向」

鈴木堅弘

はじめに

日本の江戸時代に描かれた春画・艶本のなかで、世界中の芸術家や評論家を、恍惚と愛欲の幻想のなかへ引きずり込んだ一画がある。葛飾北斎の「蛸と海女」《喜能会之故真通》⁽¹⁾である(図1)。

北斎の「蛸と海女」については、すでに十九世紀後半の時代にヨーロッパへ紹介されていた。この作品の怪奇かつ情欲的な表現が、当時の西欧社会の文壇や画壇にセンセーションを与えた。その西欧人の衝撃の大きさを、彼らの言説から窺い知ることができる。たとえば、北斎についての著作を記したエドモンド・ド・ゴンクールは蛸の情事に溺れる海女の姿に快樂死の境地を見だし、あるいはフランスの人文学者ロジェ・カイヨワは、蛸のイメージについての著作のなかで、この画に描かれた悲壮な好色性に注目し、その恐怖と忘

私の表現について語っている⁽¹⁾。なかでも、十九世紀後半のパリで名の知られた耽美派小説家ユイスマンスは、この画について、つぎのような言説をのこしている。

ぼくの知っている、もつとも美しい版画は実に怖ろしい。それは蛸にのしかかられた日本の女である。浅ましい動物は吸盤で乳房を吸い、口をさぐり、一方では首が下腹部をすする。ピエロのように長い鉤鼻の女の顔をひきつらせた激しい不安と苦痛の表情、と同時に、その額や固くとざした死人のような眼からにじみ出るヒステリックな喜びは素晴らしい⁽²⁾。

このように、近代化の渦中に置かれていた当時の西欧人は、北斎画の「蛸と海女」について、エロスとタナトスが混淆する神秘的な



図1 葛飾北斎「蛸と海女」(『喜能会之故真通』)
 (『江戸名作艶本5 葛飾北斎』[学習研究社 1996年]より転載)

表象として、耽美主義の幻想性のなかで讚美した。また彼らは、こうした死をも予感させる陵辱的な怪奇表現が、脱西文化・脱近代化の文化嗜好に裏打ちされた異国趣味を満足させる表現であるがゆえに評価したのである。そうした結果、北

斎の「蛸と海女」は日本の春画・艶本文化を代表する一画となり、さらには、北斎の名声が西欧社会に広がるにつれて、この画を北斎自身の獨創性に由来するオリジナルな作品として扱うようになった。今日においてもなお、北斎の「蛸と海女」は、性的な怪奇表現のひな形として世に知られている。

ところがこの画には、こうした西欧人の眼差しとは別のところに、その魅力が潜んでいる。彼らのように神秘的な性表現のみに注視しただけでは、北斎が「蛸と海女」の画図に込めた多彩な寓意的世界は見えてこないだろう。この画の魅力をさぐるには、西洋から東洋

を遠望する神秘的な眼差しだけでなく、北斎が生きた時代に立ち返って、その時代を生きた人びとと同じ目線に立つことが必要である。江戸時代の人びとが北斎画の「蛸と海女」に何を見ていたのか、そのような目線に立つてこそ、はじめて北斎がこの画に込めた多彩な寓意的世界を捉えることができるだろう。

そこで本論においては、江戸時代の人びとと同じ目線に立つために、同時代の歌舞伎や浄瑠璃などで用いられた「世界」と「趣向」という表現技法——表現の構図——を用いて、北斎の「蛸と海女」(図1)に描かれた寓意的世界を読み解いていきたい。またこうした画図の表現構成の読み解きを通じて、春画・艶本文化の性表現のみに注視してきた従来の言説とは異なる、あらたな春画・艶本の見方を示してみたいとおもう。

ここで、本論の考察の流れについて簡単に触れておきたい。まずはじめに「蛸と海女」のモチーフが描かれた画系譜についてふり返ってみたい。この考察を通じて、北斎画が近世絵画史に散見できる「蛸と海女」のモチーフ表現の一端として描かれたことを知ることで、このことを踏まえて、まずはその画図から、中世期より受け継がれる説話伝承を参考にして、「世界」を構成する表現要素を読み解いていきたい。一方、「趣向」の読み解きについては、近世期の巷間に流布した奇談・民話を参考とし、「趣向」を構成する表現要素の可能性について考えてみたい。このように、北斎

画を中心とした「蛸と海女」の画図を「世界」と「趣向」の表現要素に分解し、それぞれの要素に既存の物語や巷間の民談を当てはめてみることで、江戸時代の人びとが「蛸と海女」の画図のウラに何を見ていたのか、彼らの鑑賞眼の世界へ分け入っていくことができるだろう。

なお、北斎画の「蛸と海女」に限らず、近世期の春画・艶本表現から「世界」と「趣向」の構図を読み解いていくことによって、春画・艶本の創作志向が歌舞伎、浄瑠璃、戯作本などの同時代の芸能・文芸表現と非常に近い関係にあったことがわかるだろう。このような表現ジャンルを跨ぐような広角的な視野から日本の春画・艶本を眺めてみるならば、そこには、性表現以外にも、じつに多様な文化的要素が含まれていることがわかるにちがいない。またこのことよって、日本の春画・艶本をポルノグラフィと断定し、男女の性表現の解釈に固執した見方を批判的に捉え直すこともできるだろう。

一 蛸と海女が描かれた図像

1 「世界」と「趣向」

ここでまずはじめに、「世界」と「趣向」の定義について述べておきたい。

「世界」と「趣向」は、近世期の歌舞伎や浄瑠璃などの芸能分野

で、その作品世界を構成するための重要な演出理念であった。とはいえ、こうした理念は芸能分野に限るものではなく、戯作をはじめとした文芸分野にも多大なる影響を及ぼした。³⁾特にこの演出理念は、近世期を通じて、浮世草子、黄表紙、洒落本、読本などへ波及し、「笑ひ」をともなう戯作文芸の表現技法としても利用された。

本論においては、こうした演出理念の浸透範囲をさらに広げ、浮世絵や春画・艶本の分野までもその範疇に組み込んで考察していきたい。

それでは「世界」と「趣向」とは具体的にどのような理念であるのか、まずは「世界」の定義から見えていくことにしよう。たとえば「世界」について『日本古典文学大辞典』（岩波書店）では、つぎのように記されている。

歌舞伎・浄瑠璃用語。脚本の執筆に当たって、筋や事件を展開させるための枠組ないし時代背景として利用させる、既知の伝説・物語・先行作、もしくは一定の人物群をいう。

【効果】人々に親しまれた正史や稗史を世界として設定し、人々を容易に劇の中に誘い込むとともに、その安定した枠組の助けをかりて、思い切り大胆に新奇な趣向を働かせ、劇の内容を複雑にしたり、劇の状況に意外性を与えたりするようになった。⁴⁾

この解説文を参考にするならば、「世界」とは、人びとに親しまれた既存の伝説や物語であることがわかる。たとえば「太平記」の世界、「忠臣蔵」の世界、「源氏物語」の世界などである。また「世界」とは、既知の物語世界の首尾一貫したプロットを用いた「作品の中心支柱」ともいえるだろう。こうした作品の縦軸を構成する「世界」は、その作品の読み手がすでに知り得ている内容でなければならず、奇抜な「趣向」の導入にも動じない「お決まり型」という安定性を示さねばならなかった。

一方、「趣向」については、『日本古典文学大事典』（明治書院）に記されたつぎの項目が参考となる。

芸術または遊芸等で、味わいや面白みが出るように凝らす工夫。俳諧では句作以前の段階での、作品の構想や具体的組み立て方の工夫をいい、演劇では作品全体を縦に通す中心の筋を「世界」と呼ぶのに対し、これに新しく加える奇抜な横筋の工夫を「趣向」という。（中略）いわば既成の固定化した「世界」に、新しい興味をもたらすのが「趣向」で、狂言作者の苦心もそこにあった。なお、この「趣向」は戯作作家達にとっても重大な関心事であった⁽⁵⁾

すなわち「趣向」とは、奇を銜う奇抜な表現であり、と同時に、その作品に対して新しい気韻をもたらすものでなければならなかった。「世界」が作品を構成するうえで固定化された安定性を示すものであるならば、逆に「趣向」は自由な発想を許された独自性を示すものであった。たとえば鶴屋南北の『東海道四谷怪談』では、その「世界」は『仮名手本忠臣蔵』の物語世界であるが、そのように思われぬほどに、当時の巷間に流布した「小仏小平の咄」や「隠亡堀に心中した男女咄」などの奇談・民話が「趣向」として随所に盛り込まれている。このように「趣向」は、時世の人情にかない、また自由自在にして可笑しみを含むものであり、その時代の流行に合うものでなければならなかった。⁽⁶⁾したがって「趣向」は、作品の縦軸である「世界」に対して「横やり」ともいえる横軸の構成要素を示したのである。

なお、近世期の演劇作者や戯作者などは、動きのない「世界」よりも、動きのある「趣向」のほうに、創作志向の重点をおいたようである。⁽⁷⁾歌舞伎、浄瑠璃、戯作、浮世絵など江戸時代の文化表現は、つねに作者と読者の共犯協力関係のうえで成り立ち、作者が創作した意図を読者が探り出すという関係性のうえで、作品が愉しまれてきたのである。このため作者は、その表現から思い付く読者の共通認識——ひとつの「世界」——を予測し、そうした認識をいくつかの新奇な話題——複数の「趣向」——によって裏切ったり、変化さ

せたりすることで、読み手に新たな感興をおこさせた。もちろん読者のほうも、自らの認識を裏切るような機知に富んだ作品を求め、新奇な「趣向」を不動の「世界」に組み込む手腕を持ってして、作者の才能を評価した。

こうしたことから、近世期の演劇作者や戯作者は、読者の期待をいかに裏切るか、あるいは読者の情感をいかに刺激するか、そのような感興を引きおこす新たな「趣向」を考えることに表現者としての本領を發揮したのである。

ならば、春画・艶本の表現においてはどうかであろうか。春画・艶本の作者は、読み手に新たな感興をおこす趣向作を意識していたのだろうか。このことについては、近世後期の美人画絵師・深斎英泉が艶本『春情指人形』（天保九年（一八三八頃））の序文で記した言説が参考となるだろう。英泉は、古今の春画を比較して、「古い春画には男女の情交の傍らで朝顔が残らず咲いている情態を描いているのに」と記したあとで、当世の春画・艶本については次のように述べている。

況や 笑画を和印なんぞと洒落て呼なす冊子なんどハ 書肆が
好に任すれば 急案を旨として 趣向を鑿逞もあらず 東都の
青楼の遊の体を 浪花堀江の芸子立に倣ひ 彼開々ハが指人
形 優美の字音で表題に号し仮に 其図の上にせりふを誌して

口画に換るの類 曷巧の縁故あらん 夫是を査したまへと⁽⁸⁾

ここで英泉は、「和印」などと呼ばれた春画・艶本について批判的に捉えている。当世の春画・艶本は、書籍屋の要望に従うばかりに安易な表現を本望とし、新しい「趣向」を考え出すこともできず、江戸の廓での遊戯を浪花の芸子に倣って描いている、と酷評している。英泉が活躍した天保期（十九世紀後半）は、すでにさまざまな草紙屋がござって新たな春画・艶本を刊行する出版メディアの盛行期にあたり、読者の情感や感興を刺激する機知な「趣向」を作品「世界」に穿つゆとりが、作者側になかったようである。だからこそ英泉は、古き春画の創作スタイルに立ち戻るべく指人形と名づけた艶本を上梓し、ここに描いてみせた台詞や画図にはどのような巧みな趣向作があるのか、さあ読者よ、探してみたまえと、その序文に意気込みを記している。この序文から、作者が読者に自らの創作意図を探らせる表現者の趣向主義をかいま見ることができる。と同時に、近世期の春画・艶本の作者が「趣向」を意識して作品を描いていたことを、この英泉の序文から読み取ることができるだろう。

2 北斎の「蛸と海女」

ところで、北斎の「蛸と海女」は西洋絵画のような一枚の独立した画ではない。この画は、北斎筆による艶本『喜能会之故真通』（文化十一年（一八一四））に描かれた一枚の挿絵である。本論においては、「蛸と海女」の画図を考察対象としているため、艶本の他の挿絵についてはほとんど触れる機会がない。とはいえ、「蛸と海女」の画図は、あくまでも艶本『喜能会之故真通』を構成する挿絵のひとつであるために、この艶本の書誌的な側面にも少しばかり触れておかなければならない。

艶本『喜能会之故真通』は文化十一年の春に刊行された色摺半紙本三冊である。画図については、一卷に扉絵と後扉絵を含めて九図が描かれており、三巻ともに同じ構成である。各巻の扉絵には大首の美人画が描かれ、中ほどにそれぞれテーマが異なる春画を七図挟み込み、巻末の後扉絵には画面一杯に男女の性器がクローズアップされて描かれている。この艶本の構成は、喜多川歌麿の艶本『絵本笑上戸』（享和三年（一八〇三））のスタイルと非常に類似しているため、歌麿の先行作などを参考にして組み立てられたと考えられている⁹⁾。また、上巻の画図はほとんどが北斎筆であるのに対して、中巻、下巻は「蛸と海女」などの一、二図を除き、それ以外の大部分は北斎派の門人が代筆している。画図のテーマも「屋形船での逢瀬」や「炬燵での戯れ」など、春画・艶本表現としては定石的なモ

チーフばかりである。そのうえ、この艶本の序文は北斎自身の筆ではなく、弟子の溪斎英泉が代筆したことが指摘されている¹⁰⁾。なお下巻には、まったく同じ構図の絵が二図導入されていることから、版元の要請に依って急いで作画したようすが窺える。

このことから艶本『喜能会之故真通』は、春画・艶本としては比較的オーソドックスな作品形態をもつ、江戸後期に描かれた枕絵といえるだろう。

3 蛸と海女が描かれた図像の系譜

ところで、冒頭でもふれたように、多くの西欧人はこの「蛸と海女」を北斎の独創性が生み出したオリジナルな作品として扱ってきた。ところがじつは、この「蛸と海女」というモチーフは、決して北斎のオリジナルな表現ではない。江戸時代の絵画文化を通観してみれば、じつに多彩に「蛸と海女」を描いた浮世絵や春画に出会うことができる。

まず春画・艶本の分野においては、すでに先行の研究で指摘されているように、「海女にからみつく蛸」の図像は北斎画が成立する以前にすでに二図ほどが世に出まわっていた¹¹⁾。もともと早い時期に刊行されたのが、天明元年（一七八二）の北尾重政による艶本『謡曲色番組』（墨摺半紙本三冊）の挿絵である（図2）。この艶本は「謡曲」のテーマをそれぞれ性秘画に読み替えたもので、各巻に八



図2 北尾重政「蛸と海女」(『謡曲色番組』
〔絵入春画艶本目録〕〔平凡社 2007年〕より転載)

一点の挿絵があり、合計で二十四点の謡曲の主題を扱っている。そうしたなか「海女にからみつく蛸」の画図は、謡曲『海人』を春画調にパロディ化して描かれたものである。そのほかこの艶本では、「女郎花」や「七人狸々」など謡曲のお馴染みのテーマがつつぎと性表現に顛倒して描かれている。

その後江戸の人びとのあいだで、この「海女にからみつく蛸」の主題が評判をよんだのであろうか、天明六年(二七八六)に刊行された勝川春潮(生没年不明)の艶本『艶本千夜多女志』(墨摺半紙本三冊)によって同様の画図が描かれている。この艶本は、狐狸と女性

の情事を描いた猥褻画や、「鬼の念仏」の淫淫を描いた滑稽画など怪奇的な性表現が数多くみられ、春画・艶本における怪異表現を考えるうえで貴重な資料のひとつである。なお、北斎は「蛸と海女」の画図を描くにあたって、あきらかにこれら二画を参考にしたと考えられる。とくに春潮画

『艶本千夜多女志』と北斎画は、「岩場で大蛸が海女にからみつき」、「海女は蛸どもに接吻を求められ」、「小蛸が大蛸の援軍をしている」点など、図像の素材、画面構成の上で、多くの類似点を指摘することができる。

これらの艶本の刊行年代から考えて、重政画や春潮画の方が北斎画よりも先に刊行されているので、北斎がこれらの二画を参考に「蛸と海女」の作画を試みたと十分に考えられるだろう。

それでは一方、浮世絵の世界において「蛸と海女」のモチーフはどのように描かれてきたのだろうか。私見する限りにおいて、もっとも早い時期に「蛸と海女」のモチーフが描かれたのは、山本義信(生没年不明・宝暦期活躍)による『海女』(細紅摺絵)(図3)である。この作品は、およそ延享期から宝暦期に描かれたと推定されており、磯で腰巻きを絞る海女と、その後方で岩場から海女をうかがう蛸が描かれている。ただし、この絵は「あぶな絵」として描かれたために、蛸と海女のからみは描かれていない。「あぶな絵」とは、享保の改革にもなう美人画・性秘画の禁圧政策によって女性の裸体美が描けなくなってしまう¹³⁾ 絵師たちが苦肉の策として女性の生活風俗を描くことを目的とした女絵である。そのため、日常生活のなかで人目に裸体をさらすことの多かった「海女」や「湯上がり女」などが好んで描かれた。またこのような「あぶな絵」の制作を通じて、浮世絵に描かれる海女は、その後そのほとんどが磯で濡れ



図3 山本義信「海女」(『あぶな絵(上巻)』[緑園書房1962年]より転載)



図4 鈴木春信「海女」(東京国立博物館蔵・『青春の浮世絵師 鈴木春信—江戸のカラーリスト登場』[千葉市美術館他2002年]より転載)

た腰巻きを絞る女性として描かれるようになり、上半身を露わにして腰巻きを絞る行為そのものが「海女」を示す記号となっていた。

また、こうしたあぶな絵に影響を受けたと思われる錦絵の創始者・鈴木春信が「蛸と海女」を描いた柱絵判錦絵を描いている。明和六年(一七六九)に刊行された『海女』である(図4)。この絵については「磯で腰巻きを絞る海女」や「岩場の陰から海女を見つめる蛸」など、義信画の「蛸と海女」との類似点も数多く指摘できる。はたして春信が義信画を参考にしてこの絵を描いたのか、その影響関係については定かではないが、富裕町人たちによる俳諧連歌会を

模した錦絵の絵解会などで、この春信画が画図の典拠を当てる遊戯に用いられたとするならば——柱絵ではあるが——、このふたつの作品のあいだになんらかの因果関係があったのかもしれない。

なお、蛸が裸体の海女を窺うイメージは、すでに近松門左衛門の『平家女護島』(初演享保四年(一七一九))にみることができ。俊寛が、桐島の漁夫の娘、千鳥という海女から生業のようすを聞く場面に描かれている。

ゆふ波にかはいや女の丸裸まるはだか 腰こしに浮うけ桶かじ 手には鎌やま 千尋ちひろの底
 の波間なまをわけて海松布刈あまのりる 若布わかぬ 荒布あらかぬ あられもない裸身に
 鱧はもがぬら付き 鱈たらがこそぐる 蛸たこがつめる 餌えさかと思おもうて小鯛こたけ
 が乳ちちに食くひ付つくやら 腰こしの一重ひとへが波なみに浸ひたれて肌はだも見みえ透すく 壺つぼ
 かと心得こころえ 蛸たこめが臍へそをうかゞふ⁽¹⁴⁾

これは、浄瑠璃世界による表現ではあるが、裸体の海女が海底に巣くう魔物たちから侵害を受ける場面が描かれている。その末尾に、海女の臍をうかがう蛸の表象をかいま見ることができ。このような浄瑠璃表現と、義信画・春信画の「蛸と海女」の関連性については不明瞭な点も多いが、「腰の一重が波に浸れて肌も見え透く 壺か」と心得 蛸めが臍をうかゞふ」という描写などは、義信画の「腰巻きを絞る海女を岩場でうかがう蛸」の図像と重なる表現であり、



図5 勝川春章「鮑取りの海女に絡む大蛸」(『浮世絵ベベルコレクション(上巻)』〔日本経済新聞社1976年〕より転載)

双方の類似性を考えることもできよう。ちなみに「壺かと心得」とは「蛸壺の心得」のことであるが、同時にここでは「壺」は、海女の女性器のことを象徴しており、その「壺」をうかがい狙う蛸のエロティックな状況が暗示されている。

さて、話を浮世絵に戻すが、このように義信画から春信画へのモチーフの移行が推測される「蛸と海女」の画系譜は、さらに明和期から天明期にかけて役者絵などで世に知られた浮世絵師・勝川春章の画図にまで続いていく。勝川春章は中判錦絵において「蛸と海女」のモチーフ『鮑取りの海女に絡む大蛸』を描いている(図5)。この春章の画をしてはじめて、蛸と海女がからみ始めるのであるが、蛸が鮑を持つ海女の足首に申し訳なきように巻きつく表象では、まだ春画・艶本におけるドラスティックな好色表現にまでは

至っていない。とはいえ、この画図において、義信画や春信画に描かれたような蛸と海女の空間的距離が一気に縮まったといえる。いふならば、春章の画をしてはじめて、浮世絵に描かれた「蛸」と「海女」が絡み合うのである。この表象において、春画・艶本の「蛸と海女」の妖艶な性表現が成立する一歩手前まで接近したといえよう。

そしてこの「蛸と海女」のモチーフは、その後、浮世絵の舞台から春画・艶本の舞台へ転じて描かれるようになった。先述したようにその後、天明元年に重政画『謡曲色番組』が描かれ、春潮画『艶本千夜多女志』、北斎画『喜能会之故真通』と、つぎつぎと「蛸と海女」のモチーフが春画・艶本に描かれることになった。

ところで、ここで注目すべき点は、春画・艶本において「蛸と海女」を描いた絵師たちは、そのほとんどが勝川春章と何かしらの接点をもっていたことである。とくに春潮と北斎は、春章の直弟子筋にあたる。春潮は、その筆風は鳥居清長の美人画に近似しているが、もともとは春章の弟子であり、北斎の兄弟子に当たる。また北斎も、安永八年(一七七九)に「勝川春朗」として浮世絵界にデビューして以来、春章の弟子筋として、この号を約十五年間にわたり使いつづけた。

他方、北尾重政は勝川春章の親しい画人仲間であり、両者で共作した草紙本『青楼美人合姿鏡』などがいくつか上梓されている。ま

た春画・艶本の分野では、安永二年（一七七三）に刊行された艶本『さかりの花の久しき栄 姿名鏡』がふたりの合作として世に知られている。そのうえ、双方の筆風は極めて類似しており、美人画の人物表現などは、春章画なのか、それとも重政画なのか、判断が難しいほどである。

こうした観点を通じて、春画・艶本に描かれた「蛸と海女」のモチーフを考えてみるならば、そのほとんどが勝川派の範疇のなかで描かれてきたといえるだろう。このことから勝川春章の「蛸と海女」の作画が、春画・艶本において「蛸と海女」の画図を描かせるひとつのきっかけになったのではないかと推測することができる。その意味でも、勝川春章の「蛸と海女」は、そのモチーフが浮世絵から春画・艶本へとその舞台を移行させるターニングポイントとなる作品である。また図像表現に関しても、春章の「蛸と海女」の表象は、「あぶな絵」のような艶のある美人画から、春画・艶本

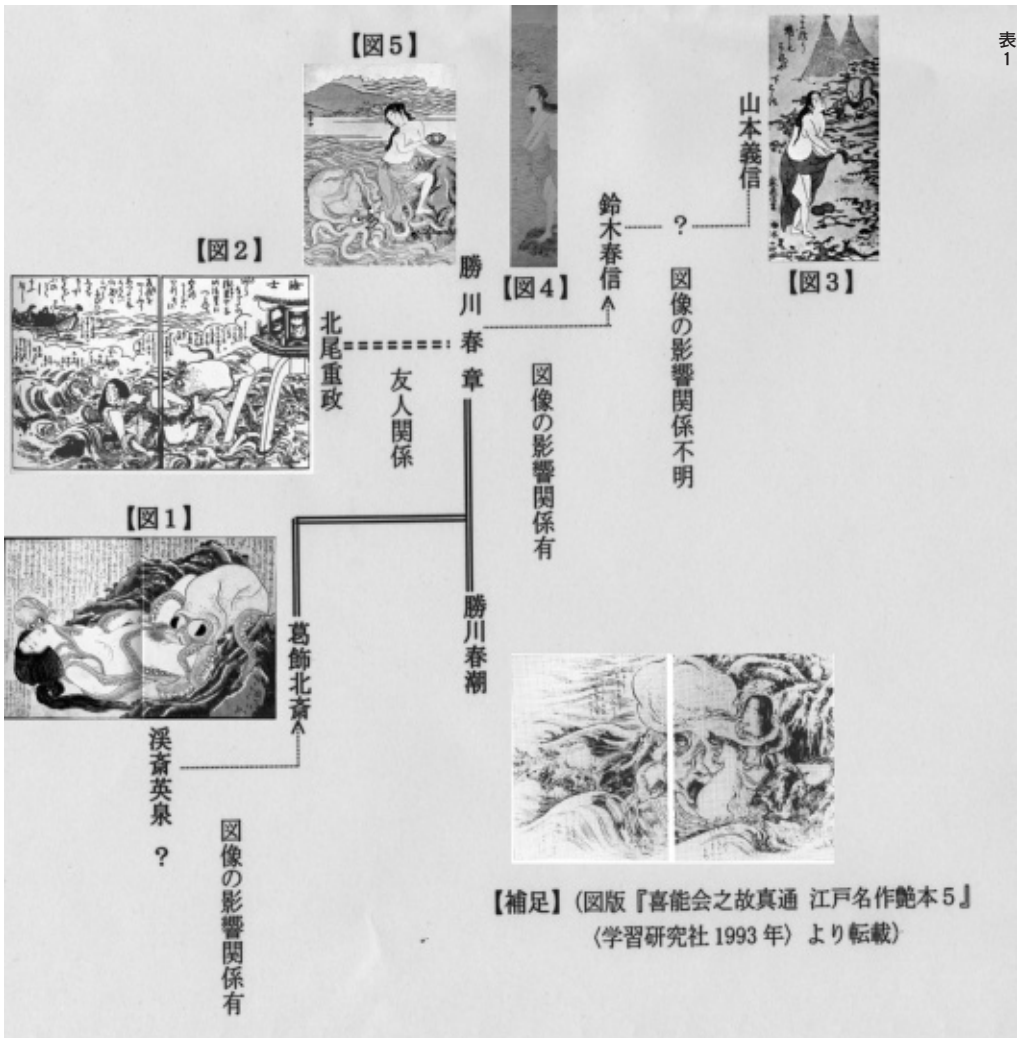




図6 歌川芳員「由井」(『東海道五十三次内』)
 (『妖怪曼陀羅』(国書刊行会 2007年)より転載)

のような色事を描く性秘画へと移る、まさにその過渡期の位置にあたる。

そこで、こうした「蛸と海女」の画系譜を図式化してみると、おおよそ表1のようになるだろう。

このように見ていくと、江戸時代に活躍した絵師たちにとっては、「蛸」と「海女」の図像的な組み合わせそのものがすでに、新奇な可笑しみを与える「趣向」であったのかもしれない。

それはともかく、春画・艶本に「蛸と海女」が描かれる時期に並行して——あるいはそれ以降に——、大判錦絵の分野でも「蛸と海女」のモチーフが描かれている。そのおもな作品を挙げれば、歌川豊国の『あわびを見て』(制作年不明)、歌川国芳の『玉葛』(天保十四年(一八四三)以降)、楊洲周延の『海女と蛸』(明治前半?)などがある。美人画、風物画、

源氏絵において「蛸と海女」のモチーフが、「主題」としてではなく「趣向」として描かれている。

たとえば、こうした趣向作為の構図をもっとも端的に示した作品として、歌川芳員の『東海道五十三次内(由井)』(嘉永六年(一八五三))がある。この小判錦絵は、東海道の宿場街を描いた街道絵のなかの一枚であるが、近世後期になると、この手の風景画は手垢がつくほど数多く描かれた。芳員の『東海道五十三次内』も、そうした街道絵の型式に則ったうえで、それぞれの宿場街に伝わる民談・奇談・名物をもとにした「趣向」を描いている。たとえば、「小田原」では河童の表象が描かれ、「亀山」では見越し入道の玩具が描かれている。とくに「由井」を描いた錦絵では、由井の浜で複数の海女が大蛸に襲われる場面が描かれており(図6)、「蛸と海女」のモチーフが「趣向」として街道絵に描かれる例をそこに見ることができ。なお、じつさいに「蛸と海女」のモチーフが「由井」を主題とした街道絵に「趣向」として用いられるためには、「由井」と「蛸と海女」のあいだに何かしらの関係性が成立していなければならぬだろう。このことについては、近世期に記された地誌類に、そのヒントがかくされている。たとえば、浅井了意の仮名草子『東海道名所記』(万治三年(一六六〇))の「由井」の項には「いやしきあまのしほやきなればしり申さぬよとて過ゆきたり」と記されており、あるいは『東海道名所図会』(寛政九年(一七

九七)には「このほとりの賤女出汐を汲み あるいは鮑拾ふ体 風流にして奇観なり」と記されている。⁽¹⁶⁾ こうした「由井」にまつわる叙述は、芳貞の時代よりもやや以前のものであるが、当時の人びとはこれらの文献記述を通じて由井の浜には貧しい海士や海女が生活しているという認識を得ていたにちがいない。このような地誌類の民間への伝播が、しだいにその土地の名所・旧跡のイメージを形作るようになり、そのイメージは徐々に文献世界を飛び出して、絵画文化においても描かれるようになった。その例を春画・艶本に見るならば、恋川笑山の『旅枕五十三次』(嘉永期(一八四八―五四))である。この艶本の「由井」の項では、海浜で鮑を捕る海女が登場し、その海女と男性の情事が描かれている。⁽¹⁷⁾

同様に絵師芳貞も、由井の浜には海女がいるというイメージを知り得たうえで、街道絵という「世界」に「蛸と海女」のモチーフを「趣向」として織り交ぜたのであろう。

なお、この他にも「蛸と海女」に関わる浮世絵はいくつか存在するが、近世期に描かれた同種の図像を私見する限りにおいてリストアップし、それを制作年代順に並べると表2のようになる。

このように「蛸と海女」のモチーフに絞って、その画系譜を通観してみるならば、春画・艶本に描かれた「蛸と海女」が、決して性表現に閉じた世界のなかだけで描かれてきた表象ではないことがわかるだろう。むしろ浮世絵——あぶな絵・美人画——などの絵画文

表 2

作品名	絵師名	刊行年	技法判型	ジャンル	蛸と海女の描み
『海女』	山本義信	延享から宝暦期	細紅摺絵	あぶな絵	×
『海女』	鈴木春信	明和牟(二七六九)	柱絵判錦絵	柱絵	×
『鯛取りの海女に絡む大蛸』	勝川春章	不明	中判錦絵	錦絵	△
『謡曲色番組』	北尾重政	天明牟(二七六一)	墨摺半紙本	艶本	○
『艶本千夜多女志』	勝川春潮	天明牟(二七六六)	墨摺半紙本	艶本	○
『喜能会之故真通』	葛飾北斎	文花十二年(二八四)	色摺半紙本	艶本	○
『あわびを見て』	歌川豊国	不明(改巳五)	大判二枚	錦絵	×
『海女と蛸』	渓斎英泉	文政期	半紙本端本	艶本	○
『玉葛』	歌川国芳	天保十四年以降	大判	錦絵	×
『玉取り』	歌川国芳	弘化四年(二四七)	大判三枚	錦絵	×
『竜宮玉取姫之図』	歌川国芳	嘉永牟(二八五三)	大判三枚	錦絵	×
『東海道五十三次内由井』	歌川芳貞	嘉永牟(二八五三)	小判錦絵	錦絵	×
『海女と蛸』	楊洲周延	明治前半?	大判錦絵	錦絵	△
『海女と蛸』	月岡芳年	明治前半?	肉筆絵	肉筆画	○
『海女と蛸』	正治	明治前半?	牙彫	根付	○

化との積極的な関わり合いのなかで創り出されてきた表現であるといえよう。このことをふまえて北斎画の「蛸と海女」について考えてみるならば、この画は絵師の獨創性に由来して描かれたのではなく、そこに写し出された虚構の表象は、図像の伝達、表現舞台の移行、絵師の師弟関係など、近世絵画史の大きな潮流のなかでしだい

に形づくられていき、またその一端で勢いよく描出されたものすぎないだろう。

二 「世界」としての「海女の珠取り」の説話

1 謡曲『海人』と春画・艶本に描かれた「海女」たち

ずいぶんと前置きが長くなってしまったが、さつそく北斎画の「蛸と海女」から「世界」と「趣向」の構図を見ていくことにしよう。

そこでまずはこの画における「世界」とはなにかを考えてみたい。画図は演劇や文学と異なり、その作品世界の形象は少数に限られているために、その限定された情報量のなかで時間的要素を含んだ物語性を読み取るのは難しい。とはいえ、作者や読者がその作品からどのような物語世界を読み取っていたのか、彼らの認識のようすを知ることは可能であろう。現に当時の春画・艶本の読者は、性表現の背後に「源氏物語」や「伊勢物語」などの物語世界を読み取り、描かれた秘画が自分の認識とどれだけズレているかを愉しんだ。とはいえ、北斎画の「蛸と海女」から既存の物語世界を抽出するためには、まずはその画図の典拠とされる重政画『謡曲色番組』から読み解かなければならない。

重政画の「蛸と海女」は、謡曲『海人』のモチーフを春画調にパロディ化したものであるが、当時の浮世絵師のあいだで、鈴木春信

の作品にみられるように謡曲の主題を連想させる見立て錦絵を描くスタイルが流行した。重政の『謡曲色番組』も、そうした文化的な流行のなかで描かれたといえよう。

画面の中央には蛸と海女の絡みが描かれているが、その背景には「竜宮の玉殿」、「珠」、「利剣」、「千尋の縄」、「縄を引く人びとの船」の表象が描かれている(図2)。これらは読み手に、謡曲『海人』の「海女が竜宮から宝珠を盗み出す場面」を連想させる記号的要素である。そして作者は、読者が連想する既知の場面を蛸と海女が絡み合うシーンに読み替えることで、春画としての「笑ひ」を演出している。たとえば、海底での蛸と海女の戯れも知らずに——春画表現——、船上では人びとが「なにかもちやげるやうに(持ち上げる)なはが(船)うごきます」と、海女の救出に四苦八苦するようす——既知表現——がいつそう笑いを誘う。

春画・艶本が「笑ひ」の文化と共に成立していることはすでに先行の研究でくり返し指摘されてきたが、その「笑ひ」を味わうために、この画図の背後に謡曲『海人』の作品世界を十分に読み取っていたことは確かだろう。つまり、春画・艶本の読者は、謡曲『海人』の物語が画図の「世界」であるがゆえに、そこから「笑ひ」を引き出すことができたのである。

このことをふまえて、北斎の「蛸と海女」を眺めてみるならば、この画が重政画のような「世界」を、その表現の背後に控えさせて

いたとしてもおかしくはないだろう。北斎画も重政画同様に、その表現の目的は「笑ひ」にあり、重政画からその図像興趣を借用したとするならば、なおさらである。ただ北斎画は、重政画に比べて「世界」の読み取りが難しい。なぜなら、北斎画は重政画よりも後に描かれた作品であり、先行する画図をそのまま借用すれば「おつかぶせ」として安易な表現の烙印を押され、読者から非難される。そのため北斎は、謡曲『海人』を連想させる記号的要素を直接用いて、その「世界」を春画調にパロディ化していない。

とはいえ、北斎の「蛸と海女」から、重政画同様の「世界」を読み取ることは可能である。しかも、そのヒントが図像に添えられた詞書きに記されている。

いつぞはくと(狙い)ねらいすましてゐたかいがあつて(今日)けうと
いふけう(今日)とうく(捕らまえた)とらまへたアてもむつくりとした
いほぼだ(良い)いもよりはなをこうぶつサアく(吸って)すつてく(呑み)
すいつくくして(呑み)たんのふさせてから(堪能)いつそりうぐうへ(吸って)
つれていつて(連れていつて)かこつておこうス(囲って)

ここで北斎は、海女にからみつく蛸に「いつそ竜宮へ連れて行って囲っておこう」と語らせている。この蛸の語りにこそ、この画図から重政画同様の「世界」を連想させるキーワードがある。北斎の

描いた図像からでは、なにひとつ「竜宮」との関わりを示唆できないが、この詞書を読むことではじめて、この画図の背後に「竜宮」の世界が控えていることがわかる。この台詞を信じるならば、海女にからむ蛸は、竜宮へ彼女を誘う龍王の眷属か、あるいは龍王自身であろう。

もつとも北斎自身、この画を制作するにあたって重政画の表現を借用したことを読者に悟らせるために、わざと「竜宮」に関わる詞書を加えたのかもしれない。もちろん、当時の読者は先行する重政画を知り得ていただろうし、その画に謡曲『海人』の「世界」が控えていたことも承知していたであろう。彼らは北斎の作意を十分にくみ取ったうえで、この絵のトリックを愉しんだにちがいない。もし仮にこれらのことを知らなければ、蛸による「いつそ竜宮へ連れて行って囲っておこう」という台詞の可笑しみを味わうことができない。

作者の作意と読者の読みがひとつの画図を通じて一致し、描かれた表象から導き出される認識を互いに共有できてこそ、はじめてその図像を愉しむことができる。この作者と読者のあいだに抱かれる共通認識こそ、まさに演劇や戯作の表現方法で用いられた「世界」の理念にほかならない。

北斎は、春画表現において性的情感を助長させるために執拗なまでにオノマトペの詞書きを記すが、そうした性擬音語のくり返しの

なかに、北斎がその画に込めた「世界」、すなわち「竜宮」にまつわる物語世界のシグナルを見つけだすことができる。

2 海女の珠取り説話

それでは謡曲『海人』から導かれる「世界」とは、具体的にどのような物語であろうか、ここで簡単に触れておくことにしよう。

ために謡曲『海人』の内容を要約すると以下のようになる。

時の大臣藤原房前は亡き母の追善のために讃岐国の志度浦を従者とともに訪れた。そして、そこでひとりの海女に出逢い、むかしこの浦で海中から宝珠を取り上げた咄を聞くことになった。その海女が語るには、唐土から興福寺へ贈られた三つの宝のうち、宝珠だけが海上を運搬する途中で龍王に奪われてしまった。そこで藤原淡海公という御方が、龍王から宝珠を奪い返すために身をやつして志度浦にやつてきた。さらに淡海公は、その浦の海女と契りを結び、御子を儲けた。その御子こそ房前であるという。そこで藤原淡海公は、その子を世継ぎとするかわりに、海中にある竜宮から奪われた宝珠を取り戻してほしいと海女に依頼する。海女はその頼みを受けるべく、千尋の縄を腰につけ、利剣を手に持ち、海のなかへと潜っていた。そして竜宮から宝珠を盗み取り、海上へ逃れようとする、まさにその時に、怖ろしい龍王が海女に襲いかかった。海女は龍王との壮絶な格闘の末、利剣で自らの乳の下をかき切り、そこに珠を押し

し込めた。しばらくして、船上にて千尋の縄を引きあげてみると、すでに海女の命は失われていた。ただ乳の下に宝珠が隠されており、彼女の命と引き替えに珠を取り戻すことができたのである。そして語り手の海女は、その潜女こそ自分自身であると告白する。母として、あるいは幽霊として、房前の前に現れた海女は、その語りを終えると彼の目の前から消えていった。こうして房前は亡き母の霊を弔うために荘厳な供養をおこなった。

なお、謡曲『海人』の物語は、先行の研究によつて、幸若舞曲『大織冠』との物語性の類似と差異が指摘されている。¹⁹ 現に『謡曲拾葉抄』（明和九年（一七七二）刊）には、謡曲『海人』について「世に大織冠物語といへる古き草紙あり、此謡は彼の物語を以て作る也」と記されている。このことから、謡曲『海人』が幸若舞曲『大織冠』の「テキスト」——古き草紙——をもとにして創作されたと考えられてきた。ところが、今日の研究の上では両作品の内容や設定について多くの差異が見られるので、その直接的な繋がりは否定されている。²⁰ とはいえ、同時に謡曲『海人』と幸若舞曲『大織冠』が同根の海女の珠取伝承から創り出されたことが指摘されており、近代的な研究分析が行われていない江戸時代において、両作品が庶民感覚あるいは大衆認識において近い存在——同一的な作品——であったことは『謡曲拾葉抄』の叙述から推測できよう。となれば、幸若舞曲『大織冠』のテキストの「竜宮の場面」を引用して

おく必要があるだろう。

海女も出立を構へけり(身ごしらえした)。五色の綾をもつて身を纏ひ、夜光の玉を額に当て、布綱の端を腰につけ、鉄よき刀わきばさみ、波間を分けてつと入る。たとひ男子の身なりとも、一人海へ入らんことは、毒の魚、竜、亀、大蛇の恐れもあるべきに、申さんや(まして)、女の身とあつて、一人海へ入る事は、類少なき心かな。(数千里の海路を過ぎ、竜宮の都に着く。夜光の玉に照らされて、暗き所はなかりけり。ことさら)見置きたりし道なれば、迷ふべきにて候はず。竜宮の宝殿にあがめ置く水晶の玉、思ひのまま盗み取つて、腰に付けたる約束の布綱を引けば、船中の人々、「あは、約束こかなり」と、てんでに綱を引きにけり。海女は、勇みて潜れば、上よりも、いとど引き上ぐる。今はかうよと思ふ所に、玉を守る小竜王、此の由を見付け、跡を求めて追ふ事は、只、三羽の征矢を射るごとし。既にはや、この綱残り少なく見えし時、船中の人々、「あはや、ほのかに見ゆるは。取り上げよ」と下知するに、海女の跡について、一つの大蛇追うて来る。たけは十丈ばかりにて、鱗に剣をはさみたて、眼は只、夕日の水に映るふごとくなり。紅のごとくなる舌の先を振りたて、隙間なく追つかく。(中略) 船中の人々左手右手にすがつて、「こはいか

に」とて、止めけり。すでにはや、此の綱残り少なく見えし時、大蛇走りかかつて、情なくもかの海女の、二つの足をけちぎれば(食いちぎったので)、水の泡とぞ消えにける。空しき死骸を取り上げ、諸人の中に是を置き、一度にわつと叫ぶ。鎌足御覧じて、「玉は取り得ぬものゆゑに、二世の機縁は尽き果てぬ。胸の間に傷有り。大蛇の裂けるのみならず」と、怪しめ御覧ありければ、此の傷の中よりも、水晶の玉出でさせ給ふ。

唱いとしての謡曲と、テキスト化された幸若舞曲を比較してみると、やはり物語の言語化という知見しやすい形に置き換えられているために、舞曲の方が細部までより綿密にリアリティに描かれている。珠取りの海女と珠を護る小龍王(「大蛇」との交戦の場面では、その生死をかけた壮絶な格闘シーンが目の前に浮かぶようである。当時の舞曲は、この海女と大蛇の戦いを躍動感溢れる舞いで情熱的に演じたであろう。なお、謡曲と幸若舞曲を物語を彩る素材要素(「記号」)を抜き出して比較してみると、「刀を手にして潜る海女」、「縄を引きあげる船中の人びと」、「腰に付けたる約束の布綱」、「宝殿にあがめ置く水晶の珠」と、様々な類似点を見つけ出すことができる。おそらく両作品は、中世から近世にかけての芸能文化史のなかで姉妹関係を示す演目として、人びとに認知されていたのだろう。

また、ここで特に指摘しておきたいのが、これらの海女物語に関する描写要素がすべて重政画の「蛸と海女」において図像化されていることである。となれば逆に、重政画の「蛸と海女」の「世界」は、謡曲『海人』に留まらず、幸若舞曲『大職冠』にまでその範疇を広げることができるだろう。

さらにつけ加えるならば、この海女と宝珠のドラマは、先達の研究によって、中世より続く「海女の珠取伝承」という説話世界の流れを引いていることが指摘されている。⁽²²⁾ その主なものとして、鎌倉末期に成立したとされる『志度寺縁起』《第二巻「讃州志度道場縁起」⁽²³⁾》が研究者のあいだで注目を集めてきた。この讃岐国志度寺にまつわる寺院建立の由来譚は、まさに面向不背の宝珠に関わる海女の伝説である。中国唐の高宗皇帝から贈られた面向不背の珠が志度沖で奪われてしまったために、藤原不比等は志度に来て、海女に頼んで海中からその珠を取り戻してもらった。しかし海女は命を落としたので、その追善供養のために当寺を建立したという。また、この縁起譚は『志度寺縁起絵図』（南北朝時代初期）として絵画化されており、讃岐の観音霊場のひとつである志度寺では古くから唱導のための絵解説法に用いられてきた。なお、当世においても、この縁起譚にまつわる海女の墓が志度寺には遺されている。

ちなみにこの唱導伝流が、さらに時代を経ることで興福寺の春日神社の唱導活動と結びつき、それから謡曲『海人』や幸若舞曲『大

職冠』へと展開していったとされている。⁽²⁴⁾

このように考えていくと、海女が海底へ宝珠を取りに行き、宝珠を護る龍王と争い、そして命を落とす、という珠取物語——ドラマを中心に、中世から近世にかけての文化表現史を通観していけば、『志度寺縁起』（鎌倉末期）↓興福寺縁起（中世後半）↓謡曲『海人』・幸若舞曲『大職冠』（近世前半）↓艶本『謡曲色番組』↓北斎画の「蛸と海女」と、中世から近世末期にかけての時代を、その表現ジャンルを越えてタテに貫く「海女の珠取伝承」というひとつの「世界」が見えてくるであろう。

3 海女の珠取りの説話の図像

それでは一方、近世の図像史において「海女の珠取伝承」はどのように描かれてきたのだろうか。これについては先に『志度寺縁起絵図』（絹本画軸六幅）を紹介したが、この中世期の絵解図では、海中に漂う海女の姿しか描かれておらず、海女と龍王が宝珠を奪い合うシーンは図像化されていない。中世の絵解図のような神社勧進を目的とした唱導段階では、まだこのシーンはそれほど重要ではなかったと思われる。『志度寺縁起』には「龍王惜^シ玉^シ成^シ嗔^リ追^ツ海^人一切^ニ四^支、海^人忽^チ死^ス」の文言は記されているが、この場面の図像化されるのはおそらく幸若舞曲『大職冠』が成立した後の室町後期から桃山時代であろう。「海女の珠取り伝承」の語り場が、寺

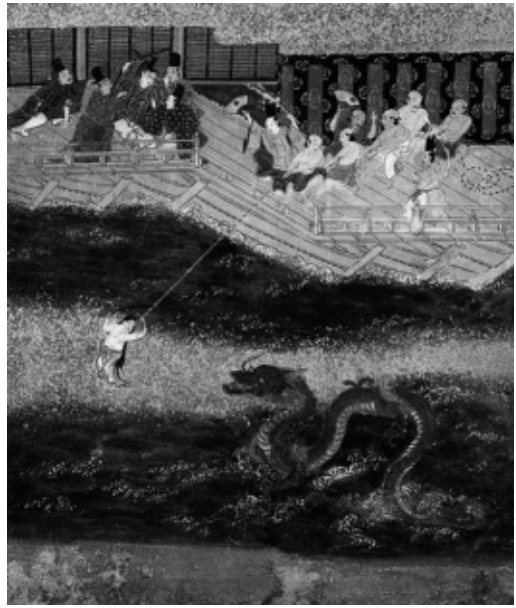


図7 「大職冠図」(ケルン東洋美術館蔵)
 (『秘蔵日本美術大観8』〔講談社 1992年〕より転載)

社縁起を中心とした唱導活動から舞曲や謡曲などの芸能活動へ変遷していく過程のなかで、海女と龍王が宝珠を奪い合うハイライトシーンがクロージアアップされてきたことが、その場面の図像化の流れのなかで読み取ることができる。

とはいえ、中世末期の時代においても、なお「図像」は物語を語り伝えるための補助的な役割しか果たしていなかったであろう。ところが近世を迎え、語りとしての物語はしだいに文字を失いはじめ、徐々に視覚世界だけで表現されることになる。このことは、近世前期に入り、既存の物語世界「源氏物語」「伊勢物語」「御伽草子」を絵巻や屏風絵に描く物語絵がしだいに制作されるようになる状況か

ら読み解くことができる。すなわち、こうした物語絵——視覚表現——の流行こそが、口承や文字に頼らなくても図像としてそのプロットを理解できる共通認識が人びとのあいだに浸透してきたことを物語っており、その絵巻や屏風絵の担い手が貴族階級だけでなく富裕町人をはじめとした庶民階級にまで広がっていったところに、文化史における「世界」——テキストに依らない物語の共通認識——の確立を見るのである。

それはともかく、こうした唱導表現↓芸能表現↓絵画表現の流れのなかで、海女の珠取物語のハイライトシーンは絵巻や屏風絵の舞台で劇的に視覚化されていった(図7)。この結果、近世前期の段階ですでに、この場面は「刀を手にして潜る海女」、「縄を引きあげる船中の人びと」、「海女を捕らえようとする龍王」という物語的な「世界」を裏切らない定石化した記号的要素で組み立てられていくことになった。

そして江戸時代も中期に差しかかると、この場面の浮世絵への展開が行われる。たとえば、この海女と龍王の場面が奥村政信や田中益信によって「浮絵」として描かれるようになる。「浮絵」は一枚版画である以上、その絵から読み取ることのできる物語的な時間軸は失われてしまっている。とはいえ、当時、その浮絵を手にした人びとは、すでにその場面が幸若舞曲や謡曲でおなじみの海女の珠取物語の見せ場であることを知り得ていたために、その表象からおの

作品名	絵師名	制作年代	形態	所蔵
『志度寺縁起絵図』	無款・不明	南北朝時代初期	絹本画軸六幅	志度寺
『大職冠絵巻』	藤原行長印	室町時代後期／桃山時代	卷子一巻	大英図書館
『大職冠図屏風』	山本元休	江戸時代前期	六曲一双	アシユモリアン美術館
『大職冠図』	無款	江戸時代前期	全十二枚	ケルン東洋美術館
『大職冠』	重賢	十七世紀中頃	卷子全三巻	スペイン・コレクシオン
『舞の本絵巻』	無款・不明	寛文期から元禄期	卷子全六巻	チェスター・ビティライブラリー
『浮絵龍宮玉取之図』	奥村政信	元文期から寛延期	横大判紅絵	ベルギー王立美術館
『玉取り龍宮のてい』	田中益信	不明	横大判	神戸市立博物館
『面向不背珠』	鳥居清満	不明	墨本金五巻	国立国会図書館
『龍宮珠とり』	鳥居清重	不明	柱絵	不明
『玉取女』	勝川春亭	文化・文政頃	続物一枚	ナールステック博物館

表3

ずと物語的な時間軸を割り出し、その絵を理解したといえよう。すなわちこのあたりで、テキストを離れた図像表現としての「海女の珠取り伝承」の「世界」が確立することになる。なお、海女と龍王が宝珠を奪い合うシーンを図像化した画図を制作年代順にならべてみると表3のようになる。

ことに歌舞伎や浄瑠璃における「世界」の演出が、「動きのない」常識的表現であるならば、まさにその定義はそのまま「海女の珠取り伝承」の図像表現にも当て嵌めて考えることができる。これらの図像群は、中世より続く物語世界をけつして逸脱するものではなく、

戯作や艶本の演出に比べて極めてストイックな表現である。なぜなら、これらの正統的な絵画表現は、戯作や艶本とは異なり、「笑ひ」の演出を目的にしていなかったために「趣向」を穿つ必要がないからである。太古よりつづく物語の「世界」を美しく描き出すだけで事足りたといえよう。

4 海女の珠取りの「世界」と「笑ひ」

ではここで、海女の珠取物語が狂歌や笑咄などの滑稽譚へ展開していく事例を見ていくことにしよう。

まずは狂歌からである。寛永年間（一六二四―四四）に編まれた『仁勢物語』には、次のような狂歌が載せられている。

玉^{たま}殿^{どの}を海^{あま}人の寄^よりつゝ盗^{ぬす}めれど 竜^{たつ}が追^おひ来^きて食^くはんとぞ思^{おも}ふ^ふ

この狂歌が詠まれた時代は、幸若舞曲『大職冠』や謡曲『海人』が盛んに演じられ、かつ海女の珠取物語の絵巻物や屏風絵がたくさん制作された時期でもあった。おそらくこの狂歌は、そうした芸能や絵画表現の流行性と連動しながら詠まれた歌であり、既存の珠取伝承の「世界」を滑稽表現の舞台で顛倒させた例のひとつである。このような古朴な伝承世界をひねることで「笑ひ」を演出する「遊び」は、まず俳諧や狂歌などから始まり、しだいにその表現の場を

草紙本、浮世絵、春画・艶本などの舞台にまで広がっていった。

なお、延宝七年（一六七九）に編まれた『銀葉夷歌集』には、すでに既存の珠取伝承の世界を離れて「海女」と「蛸」の絡みを連想させる狂歌が載せられている。

本よりも生死の海を離ねは あまの手に入たこの入道⁽²⁶⁾

この狂歌の背後に海女の珠取物語の「世界」が控えているのか、この描写からでは判断できないが、「海女」と「蛸」の絡みを示唆する表現例としては、最も早い時期のものである。

以下、憶測ではあるが、「海女」と「蛸」を重ねた滑稽表現はまずはじめにこのような雑俳文化から生まれ、その後、こうした狂歌の趣致を借用するかたちで、「蛸と海女」をモチーフとしたあぶな絵や浮世絵が描かれたにちがいない。このように滑稽表現の趣意が俳諧・狂歌などの詩文表現から風俗画・浮世絵などの視覚表現へ移行する流れは日本近世の文化的特徴のひとつであり、大胆な発想ではあるが、もしかすると春画・艶本の滑稽表現の源流は俳諧・狂歌などの雑俳文化の戯作精神に求められるのかも知れない。

ところで、このような狂歌が詠われたその後に、こんどは海女の珠取物語の「世界」が笑咄の舞台上で表現されることになる。貞享四年（一六八七）刊行の笑咄集『鹿の巻筆』には、「湯屋の海士」と

題した滑稽話が載せられている。この笑咄は、謡曲『海人』や幸若舞曲『大職冠』のプロットをそのまま借用し、その舞台を「千尋の海底」から「湯屋」に転換したパロディ話である。その内容は以下の通りである。

暮らしむき豊かな大臣と呼ばれる男がいた。この男は色事を好み、つねにりん玉（淫具）を持ち歩いていた。ある日のこと、湯屋へ出向いたおりに、大切なりん玉を盗まれないように手拭いに練みながら湯壺に入っていた。するとその男は、うっかりその玉を湯のなかへ落としてしまった。そして、この失態を嘆き悲しんだ男は、自らが雇い育てた「あま〜」と呼ばれている少女に、次のように頼む。

うちにかいそだての十四五なる女の童ありしに、いまだ名もつけず、「あま〜」とのみよびしに、是をふかくたのみ、「此湯壺の中へ、面妖不思議の玉を落したり。あわれ取り得たらば、汝、われが夫妻にせん」といへければ、「やすきほどの事なり。しかし夜は見へがたし。また、晝女の身にて大ぜいの男入こみのうちへ入たらば、よもそのまゝは歸すまじ。いかゞ」と思ひわづらへば、此人申やう、「さらば、汝裸にて、湯具に此繩結いつけよ。夫そとにひかへたりとおもひなば、さのみ人のよもせまじ」と、かたく契約定めつゝ、「もし、かの玉を取り得たらば、此繩を動かせ。我爰元にてひかん」とて、上り場にひ

かへ居る。⁽²⁷⁾

こうして少女は、大勢の男たちがいる湯壺に入る。ここで海女の珠取物語に描かれた海獣ともが湯壺につかる男たちに見立てられている部分がおもしろい。その少女は湯壺の中で男たちに襲われるかもしれないので、湯具に縄を付けさせ、その縄を動かして助けを求めるよう手配を整える。そして少女は湯壺から玉を取り戻すのであるが、

そのひまに約束の繩を動かせば、その人喜び、引き出したり。されども強く引きたるゆへに、上り場にて胸をやうつて、五體もすくみうちふしぬ。かの人嘆きのたまふやう、「玉もいたづらになり、主もむなしくなりたり」と、ともにうちふし給ふとき、かのおあま息の下にて申やう、「わが臍のあたりを見たまへ」といふ。げにも臍の下に穴あり。かの穴より光明赫奕たる玉をとりいだして、かのおあまもやうく介錯し、ついに身うけて女房にせられた。⁽²⁸⁾

と、この笑咄は終わる。最後に「あま」が生き返り、その男の妻となる部分などは舞曲や謡曲とは異なる大団円の結末である。少女が顛倒して虫の息となる場面などは、海女の珠取物語の愁嘆場を知

り得ていればこそ、湯屋での哀惜の状況がよりいっそう滑稽に感じられるにちがいない。その意味で、この笑咄（『鹿の巻筆』『湯屋の海士』）は、海女の珠取物語という「世界」を「湯屋」という「趣向」で顛倒させた滑稽表現といえよう。こうした演出方法は重政画『謡曲色番組』をはじめとする「蛸と海女」の春画・艶本表現と同じ文法文脈上で考えることができる。となれば、『鹿の巻筆』の成立年代から考えて、この笑咄は同主題の艶本表現の先駆的な作品ということができらるだろう。⁽²⁹⁾

5 「海人」と「珠」の神話的世界

ところで、『志度寺縁起』の系譜を引く海女の珠取物語は、じつは太古より続く「海人」と「珠」に関わる神話伝承の傍系のひとつにすぎないことがすでに先行の研究で指摘されている。⁽³⁰⁾ 死の運命にある海人が海底から宝珠を奪い取るコスモロジーは、すでに『日本書紀』（七二〇年成立）に記されている。⁽³¹⁾ その神話を要約すると、以下のようになる。九月のころ、天皇（允恭帝）は淡路島で獵を行われた。ところが、幾多の獸を目にしたにもかかわらず、獵では一頭も仕留めることができなかつた。そこで天皇は獵を中止し、占いを催し、獸が獲れない理由を神に尋ねた。すると嶋の神から、「獸を獲りたければ、赤石の海底にある真珠を我に祀れよ。そうすれば、ことごとく獸を獲らせてやろう」との託宣があつた。さっそく天皇

一行は在地の白水郎（海人）を集め、海底へ真珠を取りに行く者を募った。ところが、赤石の海はとても深いため、誰一人海底に至ることができないようすであつた。とはいえ、男狭磯という白水郎だけが潜れるかもしれないとの声が上がリ、その白水郎が腰に縄をつけて海底へ潜ることになった。その後しばらくして、白水郎は海面に上がり「海の底に大きな鮑があり、その処が光っている」と皆に伝えた。すると皆が「嶋の神が求める珠はその鮑の中にあるかもしれない」と言ったので、白水郎はふたたび潜っていった。そして、大鮑を抱いて海面に浮かび上がってきた。ところが男狭磯は、その後すぐに息絶え、波の上で命を落としてしまった。ただその大鮑を割くとなかから真珠が現れ、その珠を嶋の神に祀ると、獣が獲れるようになった。それから人びとは男狭磯の死を悲しみ、その墓をつくり手厚く葬った。

この『日本書紀』の神話には、海女が竜宮から宝珠を奪うシーンや、海女が龍王と争う場面などはいっさい描かれていないが、貴人が海人に珠取りの難儀を依頼し、それを決行した海人が亡くなるという「海女の珠取り伝承」の元型プロットをそこに見ることができると。もちろん、この海女と宝珠にまつわる神話的コスモロジーは、『日本書紀』の允恭帝のエピソードに始まるのではなく、それよりも遙か太古に太平洋周辺に分布していた海洋民族の神話伝承の世界まで遡ることができるだろう。ただしここでは、海女の珠取伝承の

起源探しをしているわけではないので、話を江戸時代に戻す。

なお、近世期において、この神話的世界観が、そのまま草紙本に表現された例を見つけ出すことができる。延享二年（二七四五）に刊行された『絵本女貞木』には、西川祐信画による「海女の鮑取り」の画図が描かれている（図8）。しかもその詞書きには、『日本書紀』の允恭帝のエピソードがそのままの形で描かれている。

淡路嶋にて 允恭帝 御狩の時 えものなかりしかば卜兆ありけるに 嶋の神託宣して 此海底に玉あり 是を我にまつり給わく えものを多くあたへんと有しにより（中略）其夫男狭涕をころさんと願ひしかば 妻これをなげきて 千尋の海底に入りて 大嶼を取あがりて 息たえたり 其内に明珠有くとなり 夫のために身をすてたる貞心 いやしき身にはいみじかりし女なりとぞ⁽³²⁾

このことから『日本書紀』に記された神話的世界がより元型に近いかたちで近世期の草紙本に描かれ、太古の物語が江戸時代においてもなお画工文化を通じて伝承されている事例をみることができる。またほかにも近世期の随筆集『煙霞綺談』（安永二年（一七七三））にも、同種の内容の神話物語が記されている⁽³³⁾。

ところで、ここに記された物語を記号的要素に分類してその一部



図8 西川祐信画『絵本女貞木』（東北大狩野文庫蔵）

を取りだしてみると、「男女ともに禪姿」「縄をつけた海人が潜る」「海女が鮑を取る」「その日暮らしの生活」などが考えられる。とくに「海女が鮑を取る」という記号的要素などは、先に見た勝川春章の『鮑取りの海女に絡む大蛸』（図5）の図像要素を思い起こさせる。たとえば、鈴木春信にしても、勝川春章にしても、近世中頃の江戸の浮世絵師はみな、その作風を上方の西川祐信の画図に倣ったことはよく知られている。これが何を意味しているかといえば、祐信が太古の神話物語を図像化し、その視覚化された表象をそのまま春信や春章が図像として受け継いだとするならば、近世前期までは

口頭伝承もしくは文献記述

によって受け継がれてきた神話世界が、祐信あたりから図像表現として民衆に伝承される第三の形態が芽生えたといえよう。³⁴そこには版本の技術向上と草紙本の民間普及が深く関わっているとされるが、長編物語を描いた絵巻物とは異なり、短編の神話や説話が民間レベルに浸透するときに、視

覚表現もその伝承形態となりうる可能性を秘めているといえよう。

ちなみに、勝川春章が「海女と蛸」（図5）の作画にあたって、「海女と鮑」の図像要素を西川祐信の画（図8）から記号的に受け継ぎ、と同時に「海女と蛸」のモチーフについては鈴木春信の画（図4）に倣っていたとしたら、北尾重政の「蛸と海女」《謡曲色番組》を待つまでもなく、春章画の「蛸と海女」においてすでに、太古より続く「海女の珠取り伝承」の神話的世界と、近世的な「蛸と海女」の諧謔モチーフが結合していたことになる。

三 人を取る蛸

1 人を取る蛸の咄

それでは一方、春画・艶本の「蛸と海女」における「趣向」とはなにかを考えてみたい。先ほども記したように北斎画《喜能会之故真通》は、重政画《謡曲色番組》の趣意と形象を借用して描かれたと推測できるために、先にみた海女の珠取物語の「世界」にさまざまな「趣向」を穿った手柄は、北斎というよりもむしろ重政にある。したがってここでは、ひとりの絵師の作品のみを考察の対象とするのではなく、重政画から北斎画までの「蛸と海女の絡み」が描かれた春画・艶本表現の「趣向」について考えてみたい。

ところで、滑稽と洒落は「趣向」の産物であるが、歌舞伎にしても、戯作にしても、作品のタテ軸を構成する「世界」がへひとつ

であるのに対して、作品のヨコ軸を構成する「趣向」は〈複数〉存在する。とくに読本などの長編小説の場合は物語の展開が進むにつれて、新奇な「趣向」がつつぎと導入され、既存の認識で成り立つ「世界」を狂わせない程度にその軸を揺らし続けるのである。そして読者は、作者の仕組んだ複数の「趣向」を見抜くことを愉しんだ。彼らはおのれの見識や経験を駆使して、作者がその作品に仕掛けた「趣向」(ヨコ軸)を探ろうと努力したのである。もちろん、こうした「趣向」の理解は謎解きのようなものであるため、作者が自らその答えを提示することはない。もし仮に作者が趣向作意を暴露してしまえば、それこそ野暮な行為である。

したがってここでは、そのような江戸時代の読者の目になって、春画・艶本の「蛸と海女」に描かれたメタ言語としての「趣向」を見抜いてみたいとおもう。ただし「趣向」があるメッセージ性を含んだ秘された意図である以上、その作品の「趣向」の認定は憶測の範疇を出ることはない。そのことだけはまず初めに断っておきたい。さて、それでは実際に春画・艶本の「蛸と海女」の「趣向」を探り出していこう。

まず最初にその候補として思い浮かぶのが、先述した「蛸と海女」の画図群のモチーフである。この「蛸」と「海女」の組み合わせそのものがすでに「趣向」となる可能性を秘めており、たとえば重政画《『謡曲色番組』は、謡曲『海人』の「世界」に、義信画・

春信画に見られるような「蛸と海女」のモチーフを「趣向」として用いたと推測できる。

しかしながら、もう少し複雑に考えることもできるだろう。

というのも、江戸時代の人びとは「蛸」を人を襲う怪物としてイメージしてきた。

現に、近世期において「人を取る蛸」の奇談が描かれた図像がいくつが存在する。その代表的なものが黄表紙『鮪入道佃沖』(天明五年(一七八五))の挿絵に見られる(図9)。この画図は喜多川歌麿の筆によるものだが、佃沖の漁師が大蛸に肝を吸い取られる場面が描かれている。またその詞書きには、次のように記されている。

(昔)(佃蛸) (沖) (蛸) (漁師)
むかしつくだ嶋のをきに 大きなるたこありて りやうしの
(舟)(めがけ) (吸い込み) (肝) (取りて)(喰いける)
ふねをめかけ 人をすいこみ きもとりとくひける 此事た
びくにて (数多) (漁師) (肝) (抜かれ)
はりやうに出るものなく つくだじまの身つきなく 大きに
(喫き) (35) (蛸) (糞ぎ)
なげきける

ここで、大蛸が漁師を襲い、人の肝を取って食べるという。このような奇談がまことしやかに市井に流布していたのであろうか。

これについては本草書の以下の記述が参考となるだろう。たとえば『本朝食鑑』(元禄十年(二六九七))には「大者八九尺、及一二



図9 喜多川歌麿画 『蛸入道佃沖』
(国立国会図書館蔵)



図10 『日本山海名産図会』(『近世歴史資料集成
第二期第一巻』<科学書院 1992年>より転載)

丈、若斯者長足巻取人、入水而食」と記されており、『大和本草』(宝永六年(一七〇九))には「諸州ニテ大ダコ人ヲトル事アリ」と記されている⁽³⁷⁾。この虚構ともいえる「蛸」の認識が、江戸時代の食物図鑑に記されることで、当時の人びとはその奇談をそのまま真実として受け入れるようになったにちがいない。

そのほか、とくに興味深いのが、寛政十一年(一七九九)に刊行された『日本山海名産図会』の「章魚」に関する叙述である。そこには、

「章魚」(省略) 又北国邊の物至て大なり。大抵八九尺より一、二丈にしてややもすれば人を巻きて取て食ふ。其足の疣ひとつの肌膚にあたれば血を吸うこと甚はだ急にして、乍ち斃る。

犬鼠猿馬を捕るにも亦然り。⁽³⁸⁾

と記されており、北国周辺にいる大蛸は、人を巻いて取って食べるといふ。さらに血を吸い取り、犬や馬などの動物まで捕らえるという。まったく化物のような「蛸」のイメージである。またこの項目でもおもしろいのが、その挿絵である(図10)。「越中滑川之大蛸」と記された挿絵には、川で漁をする漁師が漁船ごと大蛸に襲われるシーンが描かれている。そもそも川に大蛸がいること自体が虚構なのだが、そのことはさておき、この挿絵のおもしろいところは、一枚の画のなかに「虚構としての日常」(上部)と「実像としての日常」(下部)が同時に描かれている点である。雲の表象を仕切板として、上部には大蛸と争う漁師の勇姿が描かれており、下部には旅

人が行き交う日常風景が描かれている。また上部の場面では、大蛸の足が漁師によって切断されていることが見てとれる。一方、下部の場面では、「酒蛸」の店先にその切断された蛸の足がつり下げられている。このことから街道沿いの店の軒先に吊られた蛸の足が漁師によって捕らえられた物品であることがわかる。

このように虚実の事柄が混在した見識が諸文献に堂々と記載されることが近世文化の特徴のひとつであるが、「人を取る蛸」の認識については、本草書の記述が先か、それとも巷間に流布した伝聞が先か、その辺りの事情は詳しくはわからない。ただいづれにせよ、大蛸は人や動物を襲い、その血や肝を好んで吸い取るという記述の多さから、こうした伝聞・奇談が、江戸時代の庶民のあいだで広がっていたことは確かである³⁹。

さて、話を「人を取る蛸」の図像表現に戻すが、極めて単純に黄表紙の図像《『蛸入道沖』》と、春画・艶本の図像《『蛸と海女』》を比較した場合、その違いはそこに性表現が含まれているか否かである。いうならば、春画・艶本の「蛸と海女」の画図から性的表現を抜き取れば、双方の図像はともに「人を取る蛸」の咄を図像化したものと考えることができる。

他方、その「人を取る蛸」のイメージは、「蛸」に付随した奇怪なるイメージを通り越し、烏滸者として人を奪う「笑ひ」の対象となる。たとえば名所図の名手であった上方の竹原春潮斎は『烏羽絵



図11 竹原春潮斎画『烏羽絵欠び留』（東北大狩野文庫蔵）

欠び留』（初版享保五年（一七二〇））という版本に、まな板のうえの蛸が逆に板前を奪おうとする戯画を描いている（図11）。ほかにも蛸が人に取り付く戯画は『滑稽浪花名所』などの錦絵にもみられる。このように「人を取る蛸」の奇談が市井に流布することで、化物としての蛸のイメージが作り出され、その一方で図像表現の上では、化物としての蛸を道化者の蛸に顛倒させることで「笑ひ」を演出してきた。

こうした近世期の蛸にまつわる図像表現史の流れのなかから春画・艶本の「蛸と海女」を眺めてみれば、黄表紙や烏羽絵と同様の文脈から、当時、巷間に流布した「人を取る蛸」の奇談を「趣向」として取り扱い、その「趣向」を物語世界に穿つ際に、人を取る蛸の殺戮行為を女人と戯れる蛸の性行為に転換することで、春画・艶

本的な女性表現の「笑ひ」を演出したといえよう。

2 女を取る蛸の咄

さて、ここまでは「人を取る蛸」の咄の図像表現への展開について見てきたが、次に、この奇談的要素が浮世草子のなかに描かれている例を見てみたい。西鶴の後継者とされる北條團水の『色道大鼓』（貞享四年（一六八七）「巻五・女房三人の行衛」）に大きな蛸入道が女性を連れ去る民間奇談が記載されていることが先達の研究によって指摘されている。⁴⁰以下、その内容を記せば次のようになる。

遠江の国に、住歙祖父という男がいた。夫婦が楽に暮らす以上の蓄えはなく、六十歳になったが、前の女房はふたりともどこかへいつてしまった。そして三人目の女房も、男が畑に出ているあいだにどこかへ消えてしまった。住歙祖父は悲しみ、同じ里の男たちが、松明を焚いて海辺を捜し歩いた。そして、本文には次のように記されている。

榎^榎の瀉^{かた}の岸^{きし}根^ねに。かなしやと女の声たつるを聞て。其方を尋ね見るに。七尺ばかりの入道女を脇^{わき}にはさみて逃行^{にげ}を。あたりに声合せて頼み。十四五人熊手棒^{くまてぼう}山^{やま}拐^{かど}もつてたゝきふせ。まづ女をとりかへし見ればかた息^{いき}になつて。前^{まへ}あたりはや子を産^うし程そこねてかなし。気付水のませてやうく引たて。さて此入

道をよく見れば海にすむ大蛸^{大蛸}なり。⁴¹

なんと大蛸が、その女房を奪い取っていたのである（図12）。里人はその蛸を棒で叩き殺そうとしていたが、そのとき住歙祖父がこれまでの女房もお前の仕業かと入道に問えば、いままで奪い取った女の数を答えたという。そしてその蛸は里人によって伐ち捨てられ、その場所にいま蛸塚^{蛸塚}がのこるという。最後は、民間に流布する「蛸塚」の由来譚で締めくくられているが、浮世草子がリアリズムを演出するために市井に流布する民談を創作世界に用いたことは言うまでもない。おそらく蛸に付随する好色的なイメージがこのような民間奇談を生み出したのであるうが、その故事譚が『色道大鼓』という世上の色事をテーマにした浮世草子に挿入されていた、まさにこの点にこそ、春画・艶本（蛸と海女）の趣向作意の源流を見るの



図12 北條團水 『色道大鼓』（『北條團水集 第一巻』〔古典文庫1980年〕より転載）

でもない。おそらく蛸に付随する好色的なイメージがこのような民間奇談を生み出したのであるうが、その故事譚が『色道大鼓』という世上の色事をテーマにした浮世草子に挿入されていた、まさにこの点にこそ、春画・艶本（蛸と海女）の趣向作意の源流を見るの

である。またここで重要なことは、浮世草子と春画・艶本が、単に「大蛸が女性を奪う」という意味レベルの類似性にとどまらず、これらの民間奇談を「趣向」として用いたと考えるならば、その創作意図や表現構成においても非常に似通っていたと言えるだろう。仮に春画・艶本がその創作意図として『色道大鼓』の挿話を用いたとしても、これらの民間奇談が「蛸と海女」の画図に「趣向」として用いられた表現構造は変わらないだろう。

3 性器としての蛸

もつとも、江戸時代においては、「蛸」そのものがつねに好色的なイメージをともなっていた。たとえば、好色本（浮世草子等）的文芸様式から春画・艶本的図像様式へ性の表現の流行が移り変わるちようにど交差点にあたる時期に刊行された『好色訓蒙図彙』（吉田半兵衛画 貞享三年（一六八六））には、「章魚開」（たこつび）なる一項目が設けられている。いうまでもなく、この書物は『訓蒙図彙』（中村惕齋）の博物学的な図鑑形式をパロディ化した「性」に関する百科事典である。そのなかに「章魚開」なる女性器が絵入りで紹介されており、江戸時代には女性器を「蛸」に見立てたよう、吸いつくような女性器を「蛸」や「蛸壺」と言い表した。

じつさいに春画・艶本のなかには「蛸開」や「蛸なすび」という言葉が女性器の隠語として用いられている。たとえば溪斎英泉の艶

本『絵本美多礼嘉見』（文化十二年（二八一五））には、女性器を次のように形容している。

〔蛸毬児〕 多子玉門は世に云巾着ぼくの類す 毛もほどよくはへ出 常に温あつて 熱気つよく 塵物を入れる時はいぼの如 者 多く有て まらを吸込 深突時は 小宮ひらきて 亀頭におくいかぶさる上品也

そのほか、川嶋信清の艶本『好色松の香』（刊年不明）には「是は飯蛸といふものにて 後家の海中にくだ付居たりけり これぞ蛸開のはじめなり」と記されており、歌川国芳の艶本『葉奈伊嘉多』（天保三年（一八三二））には「どうもゑもいはれぬ妙く開ゆへ眼がさめたらまの皮と二三遍出し入すると中指が勘甚の所へ吸付てぬけぬゆへ きてこそ蛸開一物ではこらへては居られぬはず」との記述もみられる。このように江戸時代には、「蛸」そのものが「女性器」を示す「記号」として用いられた。

「蛸」は粘液を伴うその柔軟な姿態から、古今和洋問わず、好色性を象徴する生き物としても捉えられてきたようである。こうした「蛸」と「性」が重なる普遍的なイメージが形成される背景には、やはり「蛸」に備わる吸引力の生物機能が関わっていたのだろう。そうした実見できる蛸の機能が男性器を引き込んでしまう女性器の

イメージと容易に結びつき、「蛸」が女性器を示す「記号」として用いられるようになったのであろう。その一方で「蛸」には、巷談・民話によって知られているように、人・馬・牛までも呑み込んでしまう怪奇的なイメージも備わっている。そこで、男性器を引き込む女性器としてのイメージと、巷談・民話によって生み出された吸引恐怖のイメージが重なり合い、その結果、「蛸開」なる虚構の表象が生み出されることになったと考えられよう。

となれば、「蛸開」とは世俗に蔓延する「蛸」にまつわるイメージが共同幻想的に凝固することできくり出された性・怪折衷の「記号」にほかならない。

四 蛇が蛸になる咄

1 海女を追いかける「大蛇」

先ほど、ひとつの作品に対していくつかの「趣向」が存在すると述べた。既存の作品から「趣向」を探る行為とは、ある事柄——巷談・物語・記事・事象など——が、その作品にとって「趣向」である可能性を探ることである。したがって「趣向」探しは、ひとつの事態・実証の把握ではなく、その作品に込められた「趣向」の可能性を広角的に検証することにはほかならない。ゆえに、「趣向」を探るアプローチの仕方もまた多様となる。もちろん江戸時代の人びとも、ひとつの作品において作者が意図した趣向作意をさまざまな角

度から読み解くことを愉しんだであろう。そのことは近世中期の江戸町人文化において、皆で錦絵の創作意図をさぐる見立絵解会が流行したことからも推測できる。

そこで先に、春画・艶本の「蛸と海女」の趣向性について「人を取る蛸」の奇談を取り上げたが、ここでは、そのほかの巷談・民話「趣向」として含まれる可能性について考えてみたい。

その考察へのきっかけとして、まずは幸若舞曲『大職冠』の次の部分に注目してみたい。この舞曲テキストの「海女が玉殿から宝珠を奪い取る場面」では、「玉を守る小竜王、此の由を見付け、跡を求めて追ふ事は、只、三羽の征矢を射るごとし。既にはや、この綱残り少なく見えし時、船中の人々、「あはや、ほのかに見ゆるは。取り上げよ」と下知するに、海女の跡について、一つの大蛇追うて来る」と記されている。ここで注目したのは、海女を襲う怪物が、竜宮を司る大龍王（「龍神」ではなく、玉殿の宝珠を守護する小龍王である点である。しかもその小龍王は「大蛇」として言語表現化されている。このことから『大職冠』（テキスト）の物語世界では海女を追走した怪物が、小龍王としての「蛇」であったことがわかる。

この大蛇が海女に迫る言語表現が何を意味しているかといえ、先に紹介した大職冠図屏風や絵巻の図像の読み解きに関わってくる。これらの図像表現は、そのほとんどが怪物の姿を二本角があり、長

い髭を持ち、鱗に覆われた「龍神」のイメージで描かれている（図7）。ただし、その「龍神」なるイメージは、現代のわれわれが「龍」という言葉から連想できる範疇での認識でしかない。果たして江戸時代の人びとがわれわれと同じように、その図像を「龍神」として認識していたかはやや疑わしい。というのも、江戸期の百科事典『和漢三才図会』（正徳五年（一七一五））には「龍蛇部」で「然^モ龍蛇本^ニ類」と記されているように、江戸時代は「龍」も「蛇」も同種の生き物として一括りに捉えられていたようである。ほかにも古今の典籍から諸国の怪談・奇談を集めた『大和怪異記』（宝永五年（一七〇八））の「龍屋敷よりあがる事」の項では、「かの蛇、終に竹のすえより一尺ばかり、ひらくとはなれのぼるとみえしより、黒雲たちまちおほひ雨ふり風はげしければ、みるべきやうもなくして戸をたてて内にいる。しばらく有て雨風やみしとき、近隣より使をつかはして、「足下の屋敷より、たゞいま龍あがりぬ。家内別条なきや」ととふ」として、小さな蛇が屋敷下から黒雲とともに昇天して龍となる咄が記されている⁽⁴⁷⁾。

現代のわれわれは「龍」と「蛇」を明確に区別してイメージしているが、江戸時代においては百科事典のこれらの記述を参考にする限り、「龍」の言語化にあたって「蛇」をイメージしたであろうし、また逆に「蛇」の言語化にあたって「龍」をイメージしたといえよう。ひるがえって言えば、一般にわれわれが想い描く「龍」のイメ

ージの表象も、江戸時代においては「蛇」という語彙から連想される認識のもとで図像化されたとしてもおかしくはない。

このことを踏まえて、『大職冠』が描かれた屏風図や絵巻を眺めてみるならば、『大職冠』のテキストには玉殿を守護する「大蛇」（小龍王）と記されているだけに、そこに描かれた海女を追う怪物の表象は「大蛇」という言葉を視覚的に図像化したものであるといえよう。すなわち、その怪物の表象は竜宮を司る「龍神」（大龍王）を描いたものではなく、玉殿の宝珠を守る「大蛇」（小龍王）を描いたものであり、この視座は次節で記す「蛸」と「蛇」が重ねられてイメージされてきた変相奇談の趣向性を考えるうえで非常に重要なポイントとなる。

2 蛸が蛸になる咄

ところで、貞門派の俳人荻田安静が世俗に流布する怪談・奇談を集めその弟子が公刊した『宿直草』（延宝五年（一六七七））という雑談集がある。そこには「蛸も恐ろしきものなる事」（巻五の六）と題した「蛸」と「蛇」が争う咄が記されている。その咄では、「蛇」が松の木に絡みつき尾を海面に浸して「蛸」を釣ろうとするが、かえって蛸の腕の引力で海へ引き込まれる状況が臨場感あふれる筆致で記されている。結局、この争いは「蛇の運の尽き、纏ひし松が枝、元より折れて木共に海中に入る。「あは」と云ひしが、し

ばしは松も浮き沈みせしが、蛇は終に揚がらず。稍して枝のみ浮きて果てぬ」と、「蛸」の勝利となる。またこの咄には、佐賀藩鍋島家の何某の語りとして「三尺ばかりの蛇、半分程海へつかり居たるが、何時の間にか手長蛸になりて入りぬ。それより蛸を食はず」と、「蛇」が「蛸」になる変相奇談が紹介されている。

もつとも、この蛇蛸化身譚は織豊期の末に編まれた『義残後覚』（文禄五年（一五九六）の「大蛸の事」にすでに記されていることが先行の研究で指摘されており、『宿直草』の叙述も、この豊臣秀次のお伽衆が編んだ雑話集を参考にしたといわれている。

なお、この「蛸化する蛇」の咄は、近世期において比較的よく知られた変相奇談のひとつであり、和漢典籍や本草学の書物にも記載されている。たとえば、『和漢三才図会』（正徳五年（一七一五）の「石距」には「蛇入江海変石距人有見其半変者故多食之則今為」と記されており、あるいは『重修本草綱目啓蒙』（享和三年（一八〇三））では「雲州及讚州ニテハ石距ハ蛇ノ化トコロト云フ 蛇化ノコト若州ニ多シ。筑前ニテハイ、ダコノ九足ナル者は蛇化ト云。八足ノ正中ニ一足アルヲ云（巻之四十「章魚」）と記されている。そこには「蛸化する蛇」の咄があたかも博物誌学の見識として各項目に加えられている。

そしてこの知識化した奇談が、江戸の知識人たちの勉学趣味を通じて、本草書から随筆集へと引き継がれる。近世期の随筆類には、

この「蛸化する蛇」の咄がじつに様々なところに記されている。ためしにそのなかの二例ほどを紹介すれば、たとえば『閑田耕筆』（寛政十一年（一七九九））には、次のような記述がみられる。

章魚の内に、あるひは蛇の化するもの有といふ。ある人の話に、越前にて大巖にふれて尾を裂きたるが、つひに脚に成たり。其間、時をうつせしといへりし。又使し僕も彼国の者にて、是は山より小蛇あまた下り来て水際に漬り、小石にふれ、漸々に化して水に入たりといひき、彼辺にては折々有事ならし。

また、曲亭馬琴の『兎園小説』（文政八年（一八二五））には、次のように記されている。

そのとき蛇は、岩角にしはぐその身をうちつけしを、いとあやしと見る程に、蛇の尾は、忽にいくすぢにか裂けたるが、そのほとりの海水はたちまち黄色になりしとぞ。さりけれども驚きおそれず、猶しも取りな逃がしそとて、終にうち殺してけり。扱引きあげてよく見るに、その蛇、既に蛸に変じ裂けたる処は、足になりて尻さへはやくいで来たるに、頭もはじめの蛇に似ず。俄にまろくふくだみて、さながら蛸に異ならず。（蛇化して為

ほかにも、江戸時代を通じて、『笈埃随筆』『中陵漫録』『倭訓栞』『想山著聞奇集』などの随筆集・雑話集には同種の咄が紹介されている。

本来は巷間に流布する話題であったはずの奇談・怪談が、本草書の記述を通じて博物誌学の組上に載せられることで、そうした噂話があたかも真実であるかのように知識化されていった。そしてその〈合理化〉された知識を近世期の学者や文人たちが享受し、自らの著作に叙述することで、ふたたび人びとの脳裏に確かなる事実として浸透していったといえよう。つまり、こうしたプロセスを経ることで、「蛸」と「蛇」は重ねられてイメージされてきたのである。

であるならば、春画・艶本の「蛸と海女」が描かれた近世後半の時代には、すでに「蛸化する蛇」の咄は、いわば民衆の〈常識〉として捉えられていたと考えられる。誰もが知っている巷説であり、かつ江戸の人びとが好んだ万物変化の変相奇談であるならば、この話題が「趣向」として用いられるためには、あとは戯作者や浮世絵師たちの巧妙な機知テクニツクを待つだけでよかるう。

3 小龍王から蛸への「笑ひ」

それでは、その戯作者や浮世絵師たちの巧妙な機知テクニツクとは何か。「蛸化する蛇」の咄が、春画・艶本「蛸と海女」の「趣向」となる

プロセスを探り出してみたいと思う。

先に、幸若舞曲『大職冠』のテキストにおいて、海女を追いかける小龍王が「大蛇」と明記されていることを指摘しておいた。また、近世前期の大職冠図屏風群に描かれた海女を襲う〈怪物〉の図像が、そのテキストの「大蛇」という言葉を表象化したものであることも述べた。

そこで、大職冠図群の画図(図7)と、たとえば重政画の「蛸と海女」(『謡曲色番組』(図2)を比較してみるならば、両画図の最も顕著な差異は、海女を襲う〈怪物〉が、「大蛇」であるのか、それとも「蛸」であるのか、その違いである。

この違いが表現の顛倒として捉えられたとき、はじめて「笑ひ」が導き出されるのであるが、この「大蛇」↓「蛸」へのパロディ化が絵師の偶然的な思いつきで成されたわけではないところに、春画・艶本表現の魅力が潜んでいる。絵師たちは、より高度な「笑ひ」を演出するために「大蛇」↓「蛸」へのイメージの転換をおこなったが、その転換の根拠としたのが、先に紹介した「蛸化する蛇」の変相奇談であった。しかも彼らは、その奇談を海女の珠取り伝承の「世界」を揺るがす「趣向」として自らの画中に埋め込んだといえよう。

この、「蛸と海女」の春画から「蛸化する蛇」の奇談を「趣向」として見抜いたとき、その鑑賞者は春画・艶本に付随する性表現の

「笑ひ」に加えて、さらに絵師の巧みな趣向作意を見抜くという知的遊戯の快楽を味わうことができる。仮にその「趣向」が絵師の意図に反して深読みの産物であったとしても、江戸の知識人たちは何食わぬ顔をして、自らの慧眼を誇ったであろう。彼らと「趣向」の付き合い方は、あくまでも「典拠である可能性の示唆」であり、そのために考証学などを駆使して、作者の仕掛けた意図を探り当てたのである。もちろん絵師たちはその可能性を鑑賞者に気づかせるための様々な細工をほどこした。こうした絵師と鑑賞者の「趣向」をめぐる共犯関係のなかで、「蛸と海女」の春画は描かれたのである。あえて、これらの画図から絵師の独創性を探り出すならば、先行する大職冠図屏風の図像を性秘画に顛倒させる際に、「人を取る蛸」や「蛸化する蛇」などの巷談・奇談を「趣向」として用いたところであろう。

現代人のわれわれにとつては、古い画図からこうした「趣向」の可能性を探るのはじつに骨の折れる作業である。けれども、江戸時代の人びとは、むしろその骨の折れる作業を積極的に愉しんだであろう。彼らは持ち前の知的好奇心を駆使して、絵師が仕組んだ巧妙な手口を得意気になって探し続けた。そして絵師の作意に気づいたとき、彼らはその枕絵の至高の愉しみ——「笑ひ」——を味わったにちがいない。

なお補足すると、「蛸と海女」の春画が描かれるはるか以前に、

すでに龍王と蛸はアナロジカルな対象として捉えられていた。落語の原点ともいわれる安楽庵策伝の『醒睡笑』（元和九年（一六二三））には、次のような笑咄が収録されている。

海邊の者山家に聳をもち 音信に蛸トコと辛螺シレンと蛤利カマリと三色をもたせやりたり 其文をよむ者なく 三色を見知りたるもなし 文をは物知りの 出家を頼みてきけやとて わさと遠路を行て見せければ 打うなつきていふ様 何も音信の物はないかといふこそ 三色迄候へ共 其物をも見知らぬまゝ 是へ持て参りたりといへは 一目見むとて見れば 山賤みやまよりも猶おとれり去とも口はかしくくて 文をひろげ鞞殿へ申 むすめの大切さに 龍王のへこの根こきにして十はかり 鬼のきくぶし三十斗 手ころのつふて百斗り三いろともに山海の玃物とそよみける（無智の僧）⁽⁵⁵⁾

江戸幕府が誕生してしばらくした時代に、すでに笑咄のなかで「蛸」は「龍王の男根」として人びとに笑われていたのである。

おわりに

以上の考察を通じて、北斎画から遡れる「蛸と海女」の春画表現について眺望してきた。

本論においては、近世期の芸能・文芸ジャンルの表現構造を参考

にしながら、同時代の春画・艶本においても同様の表現構造が見出せることを論じてきた。その結果、「蛸と海女」の春画が、日本文化の基層を連続と流れ続けてきた「海女の珠取り伝承」の「世界」と、近世期の巷間に流布した「人を取る蛸の咄」や「蛸化する蛇の咄」の「趣向」が交錯する、まさにその縦軸と横軸の交点で描かれた表現であることを知ることができた。そして、この歴史軸としての伝承世界に、時世軸としての流行巷談をはじめ込んでいく発想手法は、なにも歌舞伎や浄瑠璃に限った表現技法ではなく、その創意の裾野は春画・艶本の世界にまで広がっていたのである。

また江戸時代の人びとの目線に立つてみるならば、幸若舞曲、謡曲、屏風画に描かれた物語が、春画・艶本の世界でどれだけ読み替えられているのか、その「性」への表現顛倒を「笑ひ」として愉しんだのである。ただし、この「笑ひ」は比較的容易に判断できる第一義的な「笑ひ」である。知的好奇心が旺盛な近世期の人びとが、このディメンションの「笑ひ」で満足したとは思えない。彼らは、さらにその上の「笑ひ」を目指し、その表現が物語の「世界」から逸脱する要因となった「趣向」を探ることを愉しんだといえよう。そして、その「趣向」を見つけ出した、まさにそのときに春画・艶本の最上の「笑ひ」が起こったのである。

このことから春画・艶本文化は、単に性表現のみを扱ってきたのではなく、その創作志向の背後には、時世に流行した巷談や民話な

ど、実に多様な文化的要素が含まれていることがわかるであろう。今回は、北斎画から遡る「蛸と海女」の春画に限って、「世界」と「趣向」の表現構造を探ってみたが、もちろん、近世期に刊行されたすべての春画・艶本がこうした表現構造に従って描かれているかといえば、そうではない。各時代の流行によっても表現スタイルは異なるであろうし、また絵師の創作志向によっても描写の筆法は異なるであろう。ただ、そうしたなかでも多くの春画・艶本が「世界」や「趣向」の表現構成を取り入れていることは確かである。

たとえば、そうした例をいくつか挙げるならば、菱川師宣の艶本『源氏きやしや枕』（延宝四年〔一六七六〕）では、紫式部の『源氏物語』の「世界」に、性行為を暗示した和歌の「趣向」が用いられ、あるいは月岡雪鼎の艶本『女大楽宝開』（宝暦元年〔一七五一〕）では貝原益軒の教訓書『女大学宝箱』の「世界」に、男女の色事の所作を示した「趣向」が込められている。また、勝川春章の艶本『浮世糸具知』（安永九年〔一七八〇〕）では清少納言の『枕草子』の「世界」に、日常的な性風俗の「趣向」が用いられ、あるいは磯田湖龍齋の艶本『色物馬鹿本草』（安永七年〔一七七八〕）では本草書『食物和歌本草増補』（寛文七年〔一六六七〕）の「世界」に、色事に従事する好者たちの「趣向」が業種別に加えられている。

他方、春画・艶本の世界でも、幻想伝承や怪異小説が「世界」として用いられたり、あるいは巷間に流布した奇談・怪談が「趣向」

として用いられた作品がいくつか上梓されている。たとえば、溪斎英泉の艶本『画図玉藻譚』（天保元年（一八三〇頃））では玉藻前伝承の『三国妖狐伝』（初演文化四年（一八〇七））が「世界」として用いられており、また歌川国貞の艶本『恋のやつぶぢ』（天保八年（一八三七））では曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』（文化十一年—天保十三年（一八一四—一八四二））が「世界」として用いられている。一方、勝川春潮の艶本『艶図美哉花』（天明七年（一七八七））では「酒呑童子説話」が「趣向」として用いられ、また歌川国貞の『開談夜之殿』（文政九年（一八二六））では「北国奇談」が「趣向」として用いられている。

このように春画・艶本は、歌舞伎、浄瑠璃、戯作など他の文芸・芸能分野との文化的相互作用を通じて、諸分野の創作志向を積極的に取り込みながら、「世界」と「趣向」という表現構成を性表現の舞台で活用することで、自らのジャンルの独自性を活かしてきたといえよう。

なお、こうした観点から、「蛸と海女」のような〈性怪図〉を考えてみるならば、なぜ春画・艶本に妖魔や狐狸が「性」の虜となっている図像が描かれてきたのか、その理由がおのずとわかるにちがいない。なにも「海女」にからみつく「蛸」が、男性の性的願望の幻影としてその画に投影されたわけではない。もちろん、そうした男のファンタジーを「蛸」に託した見方も考えられるが、⁽⁵⁶⁾「蛸と海

女」の春画はもうすこし複雑な創作意図を含んでいる。

ことにこれらの画図群を近世文化表現の同心円上に加えて通観してみるならば、そこから浮かび上がってくる「世界」と「趣向」という表現技法が「海女」に絡みつく「蛸」の図像を生み出したといえるだろう。妖魔や狐狸が戯れる説話・伝承が、ある時は「世界」として、またある時は「趣向」として、性表現の舞台で自由自在に用いられたからこそ、「蛸と海女」のような〈性怪図〉が春画・艶本に含まれたのである。

このように考えてくれば、「蛸と海女」の春画表現は、北斎の芸術的創意性に由来するものではなく、かつまた男性の性的願望を表出したものでもない。またヨーロッパの人びとが北斎画（『喜能会之故真通』）に感じていた東洋世界を遠望する頹廢的なエロチシズムの魅力とも異なる。この図像表現の創作意図は極めて整合性に富んだものであり、不動の「世界」を揺るがす奇抜な「趣向」が、理路整然と極めてロジカルに、この画にはめ込まれていたといえる。そしてまさに江戸の人びとは、その「世界」と「趣向」の演出から導き出される最上の「笑ひ」を愉しむために、この画を手にとったのである。

そう考えるならば、春画・艶本文化が、単に男女の交わりのみを、その表現の手段や目的としたわけではないことがわかるであろう。もちろん春画・艶本文化の捉え方は多様である。理想化された美し

性を描いた文化、あるいは、自慰の対象となるポルノグラフィの文化と、その解釈はさまざまである。ただ、北斎画からみる「蛸と海女」の画系譜と、その画像分析を通じて、春画・艶本文化の新たな見方をここに提示することができたにちがいない。

注

- (1) ロジェールカイヨワ『蛸——想像の世界を支配する論理をさぐる』塚崎幹夫訳 中央公論社 一九七五年 九八頁
- (2) J・K・ユイスマンス『幻想礼賛譜』田辺貞之助訳、桃源社、一九七五年、三五〇頁
- (3) 湯浅佳子「趣向と世界—演劇・草双紙から読本への影響」(『江戸文学(第三四号)』ペリかん社、二〇〇六年)
- (4) 今尾哲也「世界」(『日本古典文学大辞典(第三卷)』岩波書店、一九八四年、五九六頁)
- (5) 堀信夫「趣向」(『日本古典文学大事典』明治書院、一九九八年、五九四頁)
- (6) 中村幸彦「戯作論」(『中村幸彦著述集 第八卷』中央公論社、一九八二年、一四五頁)
- (7) 郡司正勝「傾奇の形」(『郡司正勝刪定集 第二卷』白水社、一九九一年、一一頁)
- (8) 溪斎英泉『春情指人形』(天保九年(一八三八頃)) (有働義彦 編者『江戸名作艶本八』学習研究社、一九九六年、六六頁)

(9) 辻惟雄「喜能会之故真通」(有働義彦編『江戸名作艶本 五』学習研究社、一九九六年、三頁—六頁)

(10) 林美一「艶本研究 北斎」有光書房、一九六八年、一四六頁

(11) 辻惟雄「喜能会之故真通」(有働義彦編『江戸名作艶本 五』学習研究社、一九九六年、三頁—六頁)

(12) 『謡曲色番組』の作画者については諸説ある。当初、この艶本の作者は勝川春章とされてきた。ところが、現在の研究ではこの艶本の作者は北尾重政とされている。

(13) 吉田暎二「あぶな絵(上巻)」緑園書房、一九六二年、一一一頁

(14) 近松門左衛門『平家女護島』(初演享保四年(一七一九)) (鳥越文蔵ほか校注、『新編日本古典文学全集 七十六』小学館、二〇〇〇年、四八六頁)

(15) 浅井了意『東海道名所記』(二六六〇) (朝倉治彦校註『東海道名所記一』平凡社、一九七九年、一六八頁)

(16) 『東海道名所図会』(一七九七) (林英夫編集『日本名所風俗図会十七』角川書店、一九八一年、一八四頁)

(17) なお、この恋川笑山の『旅枕五十三次』においても「世界」と「趣向」の表現構図を考えることができる。その考察のヒントに、海女と色事にふける男の台詞に「ああ吸いつくようだ、これがおおかた蛸壺だろう」が参考となる。ようするに、絵師の恋川笑山は「由井の浜には海女が多くいる」という従来からの巷説を知り得たうえで、由井之浜での海女の情事を描いている。そしてさらに、読み手に「蛸と海女」の「趣向」を連想させるために、その台詞に女

- 性性器を示す「蛸壺」という隠語を用いている。恋川笑山は街道絵という形式「世界」に、「海女」の図像と「蛸壺」の台詞を用いて、浮世絵や艶本で描かれた「蛸と海女」のモチーフを連想させる「趣向」をうがったと考えられよう。
- (18) 白倉敬彦「春画をどう読むか」(『浮世絵春画を読む(上)』中央公論新社、二〇〇〇年、七頁―二七頁)
- (19) 阿部泰郎「『大織冠』の成立」(吾郷寅之進、福田晃編『幸若舞曲研究第四巻』、三弥井書店、一九八六年、八二頁)
- (20) 阿部泰郎「『大織冠』の成立」(吾郷寅之進、福田晃編『幸若舞曲研究第四巻』、三弥井書店、一九八六年、一一八頁)
- (21) 幸若舞曲『大織冠』(荒木繁ほか編注『幸若舞 一』平凡社、一九七九年、五六頁)
- (22) 阿部泰郎「『大織冠』の成立」(吾郷寅之進、福田晃編『幸若舞曲研究第四巻』三弥井書店、一九八六年、一一七頁―一三五頁)
- (23) 『志度寺縁起』(第二巻「讃州志度道場縁起」)鎌倉末期成立(『中世文藝叢書 九』広島中世文芸研究会、一九六七年、六〇頁―六一頁)
- (24) 阿部泰郎「『大織冠』の成立」(吾郷寅之進、福田晃編『幸若舞曲研究第四巻』三弥井書店、一九八六年、一〇二頁―一三五頁)
- (25) 『仁勢物語』(寛永年間刊(一七世紀中頃)) (『狂歌大観 参考篇』明治書院、一九八四年、九三頁)
- (26) 『銀葉夷歌集』(延宝七年(一六七九)) (『狂歌大観 本編』明治書院、一九八三年、四三六頁)
- (27) 『鹿の巻筆』(『湯屋の海士』) (貞享四年(一六八七)) (小高敏

- 郎校注『日本古典文学大系第一〇〇 江戸笑話集』岩波書店、一九六六年、二一〇頁―二二二頁)
- (28) 『鹿の巻筆』(『湯屋の海士』) (貞享四年(一六八七)) (小高敏郎校注『日本古典文学大系第一〇〇 江戸笑話集』岩波書店、一九六六年、二二〇頁―二二二頁)
- (29) なお、ほかにも春画・艶本の分野では「道成寺縁起」の「世界」を「海女の珠取物語」の「趣向」で顛倒させた図像表現がある。川嶋信清の艶本『好色松の香』(国際日本文化研究センター所蔵本)には「うれしや玉はばいとつたぞ」と、漁夫の擧丸を奪い取った半身半龍の女性が描かれている。「玉を倍取つたぞ」という龍女のセリフは、竜宮の「宝珠」のほかに漁夫の擧丸までも奪い取ることができたことを意図している。
- (30) 阿部泰郎「『大織冠』の成立」(吾郷寅之進、福田晃編『幸若舞曲研究第四巻』三弥井書店、一九八六年、八二頁)
- (31) 『日本書紀』(『卷第十三』) (養老四年(七二〇)) (『日本古典文学大系六十七』岩波書店、一九六七年、四四六頁)
- 唯し一の海人有り。男狭磯と曰ふ。是、阿波國の長邑の人なり。諸の白水郎に勝れたり。是、腰に繩を繫けて海の底に入る。差須奥ありて出でて曰さく、「海の底に大虬有り。其の處光れり」とまうす。諸人、皆曰く、「嶋の神の請する珠、死に是の虬の腹に有るか」といふ。亦入りて深く、爰に男狭磯、大虬を抱きて泛び出でたり。乃ち息絶えて、浪の上へ死りぬ。既にして繩を下して海の深さを測るに、六十尋なり。則ち虬を割く。實に眞珠、腹の中に有り。(『書き下し引用』)

(32) 『絵本女貞木』西川祐信画(延享二年(一七四五))東北大学狩野文庫所蔵

(33) 『煙霞綺談』(安永二年(一七七三))『日本随筆大成第一期四』吉川弘文館、一九七五年、二二六頁―二三七頁)

往古允恭帝、淡路嶋に漁獵したまふときに、海中に光物あつて一向獵なし、因て近国の蛭人を召れ、海底に入て光物を見届来るベキ勅ありといへども、至て深淵たれば勅に應ずる者なし。時に男狹といふ海人の妻とともに田所を下されば入べしと肯ひ、千尋の繩を腰に付海底に飛入、寢久しくして大きな蛭を捕得て浮む。大き三尺四方真珠あり、鶏卵の大きさにて光赫奕たり。此真珠をば所の氏神の社に祭るとかや。男狹は息切没したり。其塚海端にあり、其繩にて積りけるに六十尋ありしといふ。

(34) より正確にいえば、中世末期の「奈良絵本」あたりから、神話や説話世界の視覚表現による伝承形態が芽生えたと見えよう。

(35) 『鮎入道佃沖』喜多川歌麿画(天明五年(一七八五))国立国会図書館所蔵

(36) 『本朝食鑑』(「蛸魚」)(元禄十年(一六九七))東北大学狩野文庫所蔵

(37) 『大和本草』(宝永六年(一七〇九))『古事類苑』

(38) 『日本山海名産図会』(寛政一年(一七九九))『浅見恵ほか訳編』『近世歴史資料集成 第二期 第一巻』科学書院、一九九二年、二三八頁)

(39) そのほか『倭訓栞』(安永六年(一七七七))の「たこ」の項には「大だこの人及び牛馬をとり」と記されている。また、『想山著

聞奇集』(嘉永三年(一八五〇))の「七足の蛸死人を掘取事」の項には「人を取行蛸と聞ときは北國筋又は出羽松前邊の東北海に居る如き」(『近世奇談全集』博文館、一九〇三年)と記されている。

(40) 花咲一男『大蛸に食われた女たち』江戸雑談「三樹書房、二〇〇七年、九頁

(41) 『色道大鼓』(巻五・女房三人の行衛)(貞享四年(一六八七))『北條團水集 第一巻』古典文庫、一九八〇年、三二二頁―三二四頁)

(42) 溪斎英泉『絵本美多礼嘉見』(文化十二年(一八一五)) 国際日本文化研究センター所蔵

(43) 川嶋信清『好色松の香』(刊年不明) 国際日本文化研究センター所蔵

(44) 歌川国芳『葉奈伊嘉多』(天保八年(一八三七))以降) 国際日本文化研究センター所蔵

(45) ロジェ・カイヨワ『蛸——想像の世界を支配する論理をさぐる』塚崎幹夫訳、中央公論社、一九七五年、一二八頁

(46) 『和漢三才図会』(「龍蛇部」)(正徳五年(一七一五))『和漢三才圖會(上)』東京美術、一九七〇年、五〇九頁)

(47) 興雲子『大和怪異記』(宝永五年(一七〇八))『堤邦彦・杉本好伸編』『近世民間異聞怪談集成』国書刊行会、二〇〇三年、八五七頁―八五八頁)

(48) 荻田安静『宿直草』(巻五の六「蛸も恐ろしきものなる事」)(延宝五年(一六七七)) (高田衛編・校注『江戸怪談集(上)』岩波文庫、一九八九年、一六四頁―一六七頁)

- (49) 荻田安靜『宿直草』(巻五の六「蛸も恐ろしきものなる事」
(延宝五年(一六七七)) (高田衛編・校注『江戸怪談集(上)』岩波
文庫、一九八九年、一六四頁―一六七頁)
- (50) 堤邦彦『江戸の怪異譚』ペリかん社、二〇〇四年、一六〇頁
- (51) 『和漢三才図会』(「石距」) (正徳五年(一七一五)) (『和漢三才
圖會(上)』東京美術、一九七〇年、五六四頁)
- (52) 『重修本草綱目啓蒙』(巻之四十「章魚」) (享和三年(一八〇
三)) (小野蘭山『本草綱目啓蒙三』平凡社、一九九一年、二六〇
頁)
- (53) 『閑田耕筆』(寛政十一年(一七九九)) (『日本随筆大成 第一期
一八』吉川弘文館、一九七六年、二四五頁)
- (54) 曲亭馬琴『兎園小説』(文政八年(一八二五)) (『日本随筆大成
第二期一』吉川弘文館、一九七三年、一三九頁)
- (55) 安楽庵策伝『醒睡笑』(元和九年(一六二二)) 序 (岩淵匡編
『醒睡笑 静嘉堂文庫蔵本文編改訂版』笠間書院、二〇〇〇年、三七
頁)
- (56) 田中優子『張形と江戸をんな』洋泉社、二〇〇四年、一一七頁
―一二二頁

「東京銀座資生堂」の誕生

——福原信三と銀座イメージの構築

序

銀座の資生堂でないと、今の人々にはピンと来ない程銀座と資生堂は離れ難い存在である。⁽¹⁾

昭和初期の経済誌が評しているように銀座に有名店は多々あるといえども、現在に至るまで資生堂はその代表格であろう。

しかしながら資生堂は一八七二年、西洋調剤薬局としての創業以来、ほぼ半世紀にわたり「東京新橋資生堂」あるいは「京橋区出雲町資生堂」などとして親しまれてきた。創業者、福原有信（一八四八—一九二四）の三男の信三（一八八四—一九四八）が経営を任せると、ほぼ一九二二年を契機にその店舗の立地は変わらなまま「東京銀座資生堂」へと表記が変わり、新橋のイメージは急速に払

拭されていくのである。この変化は当時も人々の関心を惹いたようだ。一九二五年には雑誌に次の意見が掲載されている。

銀座と言へば資生堂を聯想する者が少くないだらう。あまり遠くない前まで新橋資生堂と書いてあつたがいつの間にか銀座の資生堂になつてしまつた。新橋が東京の關門であつた頃には新橋を少し離れて居りながら新橋資生堂を稱し今また出雲町にありながら銀座の資生堂か資生堂の銀座かとまで言はせるようにしたところ福原さん唯の美術愛好者ではない。⁽²⁾

店名表記の変更は、直接的には福原信三の発案により、資生堂が、松崎天民や与謝野晶子ら銀座に縁の深い文化人ら五十二名の寄稿を得て制作した『銀座』の刊行と軌を一にしている。同書では「銀座

戸矢理衣奈

の去来」(馬場孤蝶)、「銀座の柳よ」(松山省三)、「銀座の
ランデブエツク
Rendez-Vous」(鈴木泉三郎)、「銀座の雨」(北原白秋)など執筆者
がそれぞれに銀座に対する思いを語る一方で、近代銀座を論じた最
初の冊子とされる様盆子『銀街小誌』(二八八二年)の全文や「銀座
街大観・京橋より新橋に至る銀座通りの図」といった、震災直前の
銀座に関する様々な資料が収集されている。有信や信三も寄稿し、
その銀座観や当時の銀座が抱えていた課題を明確に語っている。

同書刊行のきっかけは、後述するとおり、当時の東京市長、後藤
新平が都市計画法の下での路面改良事業の一環として銀座通りの拡
張工事を計画し、銀座の人々の意向に反して、銀座の象徴として親
しまれてきた柳の撤去等を決定したことにある。信三は、影響力の
強い文化人を含めた「銀座の声」を集結させることで、抗議の意を
示したものと思われるが、こうした形での冊子刊行の試み自体が銀
座ではじめてのものであった。本稿では『銀座』をはじめ福原信三
による銀座に関する著作を中心にして、信三の銀座観を検討すると
ともに、「東京銀座資生堂」の強力なイメージが信三により構築さ
れていく背景について銀座史とあわせて検討する。

同時に『銀座』が関東大震災前の一九二一年に刊行された点にも
留意したい。震災後、銀座はモダン都市を代表する存在として、急
速に大衆化が進んでいくが、信三による変革はそのいわば胚胎期に
行われたものだ。震災後の帝都復興計画は、後藤新平が東京市長と

してかねてから都市計画の重要性を認め、人材の育成に努めていた
ため議論を呼んだものの、比較的速度やかに実施されたとされる。銀
座についてもモダン都市が現出する直前の姿はその後の銀座を考え
る上で検討に値するだろう。そもそもモダン都市文化の現象面に
ついては多数の論考がなされてきたが、その背景を経営者の視点か
ら捉える試みは少ない。銀座が小売店の集合体である以上、そこ
には必然的に経営者の意図が存在する。なかでも銀座の都市文化を先
導した資生堂と福原信三の意向は注目に値すると思われる。

なお資生堂や福原信三に関する先行研究は、その大半が資生堂に
よるものだ。³⁾『資生堂社史・資生堂と銀座のあゆみ八十五年』(一九
五七年)、『資生堂百年史』(一九七二年)などの充実した社史や宣伝
史に加えて『福原有信伝』(一九六六年)、『福原信三』(一九七〇年)
などの伝記も刊行されている。資生堂ギャラリーの展示等を通じた
企業文化部の研究・出版活動なども活発で、資生堂や化粧文化に関
する研究紀要『おいでるみんな』も一九九六年以降、年二回刊行され
主として資生堂関係者が企業史の一環として執筆している。二〇〇
六年に和田博文が『資生堂月報』など九百頁を超える資生堂の一次
資料を複製した文献集『資生堂』の監修にあたり、詳細な年表や解
題を記しているが、掲載されている参考文献は二冊を除いてすべて
資生堂やその関係者によるものである。⁴⁾資生堂ギャラリーの活動に
ついては、資生堂の企画のもとで主要紙の悉皆調査による『資生堂

ギャラリー七十五年史一九一九〜一九九四」が制作され、一次資料の宝庫となっているが個別テーマにおける研究が俟たれる状況だ。⁽⁵⁾ 経営学においては佐々木聡らの業績をはじめとする資生堂のチェーンストア研究が行われているが、流通組織研究に重点が特化している。⁽⁶⁾

以上により、従来の資生堂研究においては、資生堂と直接的な関係が薄いと思われる周辺領域さらには社会史全般とのダイナミックな関連が掴みにくい傾向にある。⁽⁷⁾ とりわけ資生堂では福原有信、信三ともに社外での活動が結果的に資生堂の企業イメージに大きな影響を与えており、企業史の周縁に向けた視点は一層重要になるだろう。また、チェーンストア研究を除いては同業他社やデパートなどの動向は極めて控えめな記述に留まっており、資生堂の置かれた相対的な状況の把握が難しい。福原信三と銀座の関係についても、『銀座』刊行以後の動きについては殆ど触れられておらず、本稿で引用した信三の寄稿についてもその多くがこれまで引用されていないものである。

銀座に関しても、エッセイは多数発表されているが研究はきわめて少ない。そもそも、企業研究は資料収集面に困難がつきまとうがそれは小売商店街である銀座研究にも共通するものだろう。藤森照信、陣内秀信、初田享らによる一連の先駆的な研究や、近年の岡本哲志『銀座四百年…都市空間の歴史』（二〇〇六年）など、建築史家

による研究が中心となっている。⁽⁸⁾ 東京の都市計画については越澤明『東京の都市計画』（一九九一年）などで詳述されている。しかしこれも銀座と福原信三との関係については詳述されていない。

本稿では最初に創業者、福原有信と「東京新橋資生堂」の時代について概観したあと、福原信三による『銀座』を中心とした著作を辿りながら、「東京銀座資生堂」への転換の背景を、主に一九二〇年代の銀座をもとに検討していく。

一 福原有信と新橋資生堂

資生堂は一八七二年、創業者たる福原有信、矢野義鉄、前田清則により日本初の民間の西洋調剤薬局として創業した。社名は易経の一節「至哉坤元 万物資生（至れる哉坤元、万物資りて生ず）」に由来し、東洋と西洋の融合を理想としたという。陸軍軍医の松本良順らの協力を得て、新橋には診療所である開陽院を開き、ついで神田等に日本における薬品製造の嚆矢となる製薬工場も開いた。創業当時は複数の経営者の存在を反映し、福原有信が店舗を有し、現在の資生堂の源流となる新橋資生堂のほかにも、日本橋や室町、牛込などに同じく資生堂が存在した。松本良順「大先生」の資生堂への訪問診察日は新聞でも報じられたほどである。⁽⁹⁾ 本稿ではこの新橋資生堂を扱うが、一九三〇年に刊行された小野田素夢『銀座通』には新橋資生堂が「漢方医の領分を侵略」したと記されている。⁽¹⁰⁾

新橋資生堂は創業後まもなく、業績不振に陥るが現在の東京慈恵会医科大学・同附属病院の創設者である高木兼寛が、東京病院の薬局を資生堂に委ねた。贅沢な設備を誇る東京病院との関係は新橋資生堂に高級なイメージを構築するのにも幸いし、資生堂は再び興隆の機会を得た。有信自身も研究熱心で一八八〇年代には『東京薬舗雑誌』、『薬剤誌』など専門誌へ論文や翻訳を次々に寄稿している。

「資生堂福原有信」として「薬物試験及製造簡易法」と題した連載や、「酢酸エーテル製造法の説」「石鹼分析ノ説」など英語論文の翻訳が掲載された。

一八八八年には薬用歯磨やフロリン（整髮料）、ペプシネ飴（胃薬）といった商品の販売も開始された。歯磨ははじめての国産の練歯磨として「ハイカラ」だと話題になった。海軍の御用達ともなり、普及品が二、三銭であった当時に二十五銭と高価ながら、「品質本位」を強調して定評を得た。

一八九〇年代になると東京名所案内といった冊子が次々に刊行されるが、資生堂は「薬舗」として紹介されるようになる。『東洋大都會』（一八八八年）では「今市中の薬舗中、其著名なるもの」の筆頭として新橋資生堂が挙げられ、『東京名物志』（一九〇一年）には、「福原資生堂 ペプシ子飴を以て聞え其他製剤多く又石鹼香水歯磨等を製造販売す」と紹介されている。

一方で福原有信は、日本における西洋風の医薬分業の定着という

目標のもとで多岐にわたる実業界での活動を開始し、後半生においては資生堂以外での活躍が中心となっていた。一八七八年には薬学博士、長井長義のドイツからの帰国を促し、株式会社大日本製薬会社設立に加わった。経営においては当時より「業界界の共存共栄」を重視し、一八七五年頃薬舗会を、一八八二年頃製薬会を、一八八九年には薬剤師会を設立した。後には全国薬剤師連合会長さらには日本薬剤師会長に就任するなど、国内製薬業の草創期の重鎮の一人となっている。

一八八〇年頃には生命保険事業に着手し、日本で二番目となる生命保険会社、帝国生命保険株式会社を設立した。⁽¹³⁾ 東京商工会議所名誉議員や赤十字社評議員、京橋区会議長などの公職や、日本電力株式会社取締役、宇治川電気株式会社取締役などの要職を歴任し、明治後期には名士としての声望を確実なものとしていた。一八九六年には皇太后陛下が逗子来訪の際に「逗子海浜眺望の最高位置」にある有信の別荘に立ち寄り、福原邸前の浜辺を散策された後、「御機嫌麗はしく御帰邸遊ばされた」と報じられている。⁽¹⁴⁾ 有信の娘、美枝も「京橋区出雲町『帝国生命保険株式会社社長福原有信氏の四女』（波傍線筆者）として『読売新聞』に写真入りで紹介されるなど、裕福な実業家として人々に知られるようになっていった。

一八九七年には最初の化粧水、「オイデルミン」を発売した。西洋調剤薬局の伝統を反映した「医学的見地による処方」が強調され、

製品名もギリシャ語の「オイ（良い）」「デルマ（皮膚）」に由来している。現在もリニューアルを続けて販売されているロングセラー商品だ。明治三十年代は日本における化粧品産業の成立期と見做され、化粧品生産高も急増しているが、資生堂の化粧品への進出もこうした時代の潮流を反映したものでしょう。

一九〇〇年に有信は欧米視察旅行に出かけるが、ニューヨークのドラッグストアで化粧品やソーダが販売されている様子に大いに衝撃を受ける。帰国後、薬局内にソーダ水製造機や什器もすべて当地から輸入するなど細部までこだわったソーダファウンテンを開設した。ソーダ水は高価だったが、化粧品のお土産をつけたことから、近隣に住んでいた新橋芸妓が集まるようになり、銀座に「一種の気分」⁽¹⁵⁾を添えるようになった。

二 新橋と銀座

銀座は江戸に栄えずして、東京に繁昌する處。⁽¹⁶⁾

大正末期、このように喩えられているように、銀座は一八七二年の大火で一角が焼失した後、政府が主導して造営した日本初の西洋風街区である。当時の井上馨蔵相の提唱に大隈重信、伊藤博文らが賛同し、由利公正東京府知事との協議を経て、英国人技師ウォート

ルスが設計を担当した。路面が耐火性煉瓦で舗装され、リージェントストリートを模したアーケードのついたジョージアン様式の街並は完成すると「煉瓦地」と称され、「お新しい気分を発散する区域」として人々の耳目を集めた。⁽¹⁷⁾当時、銀座は四方を掘割に囲まれており、銀座に入るには新橋、京橋、数寄屋橋、三原橋のいずれかの橋を渡らねばならず、それゆえに一層独立した雰囲気を保つことが出来た。ここに柳やガス灯などが加わって独特の風情を醸し出したのであろう。⁽¹⁸⁾

この「煉瓦地」は現在の銀座一丁目から八丁目までを含んでいたが、正式な町名としての銀座は現在の銀座一丁目から四丁目に限られていた。現在の五丁目から八丁目にかけては出雲町、竹川町、南金六町など個別の町名があり、通称として銀座とも、新橋寄りの地域では新橋とも称されていた。資生堂が創業した出雲町、その後店舗を拡大した竹川町もこうした「煉瓦地」の一角である。

これらの地域は新橋芸妓が集う花街としても知られていた。

一九〇一年に発行された『新撰東京名所図会』においても「南京六町、出雲町、日吉町、丸屋町、八官町、加賀町、総十郎町、竹川町、南鍋町邊に住む歌妓を総称して新橋藝妓といふ」と記されている。⁽¹⁹⁾新橋は江戸時代を代表する花街であった柳橋にかわり、明治の元勲達の重用を得て繁栄を謳歌していた。資生堂の裏手にはこうした花街が広がっており、福原信三も「私は花柳界の真只中で成長し

た」と語っている。⁽²⁰⁾

一方で新橋は西洋文化の発信地である横浜と直結する鉄道の終点であった。「当時の新橋は東京の玄関口で、彼処から銀座へ人が流れて来る」ため、当時を知る者は銀座も新橋寄りのほうが景気がよかったと口を揃える。

銀座二丁目会の長老達は一九四二年に次のように語っている。

歐羅巴の都市のやうなと云はれた煉瓦地、銀座と云ふよりも煉瓦といふ方で通つてをりました。その煉瓦よりも停車場、東京横濱間しか鐵道のなかつた時の新橋は、遙に顯著なものでした。新橋に停車場があるので、銀座八丁が煉瓦地になる段取りにもなつたのです。(中略)横濱開港以来は公私とも外人の出入がありました。東京になつては激増してまゐりました。早く京濱鐵道が出来たのも其關係からであり、その着發する停車場が新橋であつた處から、日本の大玄關だといふ心持も出て來たのです。若し新橋停車場がなくば、若しくは他の地點であつたらば、煉瓦地の出現も何とあらうか。まして素早く下町離れした、新しい氣持になれたか否か。⁽²¹⁾

新橋に加えて銀座の東には明石町に代表される外国人居留地、築地も控えていた。⁽²²⁾ こうして銀座は「所謂文明に親昵する便宜を生

じ」、「異国風の新繁華街」⁽²³⁾として、地の利とあわせて東京の新名所となつていった。

もつとも、商店街としての銀座は煉瓦地造営のために旧來の住民が立ち退く一方で、不慣れた洋風の建物や湿度の高さなどの問題から新規の居住者が集まらなかつた。空き家では自殺者も見られたことから新橋芸妓たちの間で銀座には幽霊が出るとまで噂されたほどで、当初は大蛇などを陳列した見世物小屋も立ち並んでいた。

一八八〇年代に入ると、情報の集積地という地の利を生かして新聞各社が次々とその本支社を構え始めた。官公庁にも近く、政治結社等も活動を始める。福沢諭吉による最初の実業家社交組織である交詢社も現在の銀座六丁目に設立されている。商店も増加し福原有信も一八八〇年代に「銀座は段々と繁華なところになつてきた」と回想している。⁽²⁴⁾

一八九〇年に刊行された『商人名家東京買物独案内』には資生堂が薬舗として登場するほか、時計貴金属天賞堂、服部時計店のほか洋紙屋や西洋家具店、「明治二十三年の国会開會當時から、銀座のレストランとして、ハイカラの中心だつた」清新軒や三橋亭などの銀座を代表する専門店が登場する。「都下第一の宏壮都下第一の美麗なり」と評され、日清戦争後には日本橋を凌ぐようになった。⁽²⁵⁾

このように明治期の銀座は「男性の街」として発展し、商店も彼らの需要に應えていた。今和次郎の一九二五年の銀座街頭調査でも

女性の洋装は全体の1%だが、男性は三割強が洋装を採用している。洋装をもっとも早くに必要とした皇族や政府関係者、官僚のニーズを銀座の商店が満たしていった。「私の家は靴商ですが、二十三年の国会開設の時には、抱へ靴が非常に売れました。品物が間に合はない位で、殊に売れたのは四ツ折というやつです。多分新たに議員になった人達が買ったのでせう」。谷澤靴店の店主は当時をこのように回想している。⁽²⁶⁾ 資生堂の存在が銀座に「一種の気分」を添えたとされるのも、こうした背景ゆえのことであった。

資生堂の新聞・雑誌広告では明治期から大正初期にかけては「本舗 東京市新橋出雲町角 資生堂 福原有信」「東京市京橋区出雲町一番地 福原資生堂」などが使われており、一九一七年十一月以降は「東京新橋 福原資生堂」で統一されている。⁽²⁷⁾ 「東京銀座 福原資生堂」の表記は一九一三年に一度使用されたのみである。有信の時代の資生堂には最先端の西洋文化の玄関口に加えて新橋芸者の艶やかなイメージの両方を想起することが出来る。「新橋」は、「銀座」よりもむしろ相応しかったものと思われる。

三 福原有信と東京銀座資生堂

有信の時代に一定の伝統と信頼を築き上げた「東京新橋資生堂」であるが、福原信三が経営に本格的に参加すると、一九二二年を契機に「東京銀座資生堂」へと転換する。

福原有信三は一八八三年に福原有信の三男として生まれ、千葉医学専門学校（現・千葉大）薬学科を卒業後、一九〇八年に渡米し、コロンビア大学薬学部で学んだ。⁽²⁸⁾ 現地の薬品製造会社に勤務した後、パリを中心に約一年間のヨーロッパ遊学を経て、一九一三年に帰国した。⁽²⁹⁾

信三が帰国する前年には明治から大正へと時代が移り、銀座も大きな過渡期に直面していた。翌年には第一次世界大戦が勃発し、パリからの化粧品輸入の断絶と好景気を背景に、日本製高級化粧品に対する需要が急速に高まり、国産の化粧品の売り上げは飛躍的に伸びた。⁽³⁰⁾ 信三は一九一六年に化粧品部門を独立させ、資生堂化粧品部を開店し、化粧品の製造販売に本格的に乗り出すとともに現在の宣伝制作部の原点となる意匠部を設立した。現在も資生堂宣伝制作部は、広告やパッケージのデザインから、売り場などのスペースデザインに至るまで代理店に委託することなく、自社内で制作しうる世界でも珍しい総合的なインハウスデザイン組織として知られている。花椿マークや独自の書体は信三によって相次いで制定され、有信の時代の鷹のマークの調剤薬局から大幅にイメージの転換が図られた。そして一九二二年以降、『銀座』の刊行と軌を一にして「東京新橋資生堂」を「東京銀座資生堂」へと変更し、瞬く間に銀座の資生堂という強力なブランドイメージを構築していく。一九二五年には「銀座を代表する店はどこか」との雑誌の誌上座談会においても資

生堂かカフェーライオンかと議論されている。⁽³¹⁾

1 『銀座』刊行の経緯

「銀座を愛する各界の知名文化人が文章を寄せた『銀座』は、四六判、口絵写真二九頁、木版一葉、本文三五八頁という内容で、明治・大正期の銀座を記録し、今ではそのころの最大の資料とまでなっている。それは改修工事で荒される銀座をみての福原信三のひそかな抗議であったかもしれない⁽³²⁾」

のちに資生堂社史でこのように紹介される『銀座』は信三自身も「史外の東京史」の試みと語っているように、銀座に縁のある文化人ら五十名以上が寄稿した。当時としては斬新な形式の書籍である。出版の直接的な契機は当時の東京市長、後藤新平による銀座通りの舗道拡張計画だ。この計画には銀座の象徴として愛されてきた柳並木の撤去と公孫樹への植え替え、舗道の煉瓦の木煉瓦への変更、やはり名物的な存在となっていた夜店の撤去なども含まれていた。これに対して一九一九年に銀座の商店が団結し、日本初の商店街連合会「銀座通連合会」の前身となる「京新連合会」を組織して後藤に陳情書を提出した。銀座の夜店も「京新親睦会」と称した連合組織を作って京新連合会を支援した。

連合会はとりわけ柳の伐採について反対し、「銀座の美観の半ばを占めたる柳樹を抜き去りて代ふるに無趣味の公孫樹を以てせんと

する此の残虐の光景に接して洵に我が手足を断たれ利刃を我が胸に擬せらるるの感あり」と計画変更を強く訴えている。⁽³³⁾新聞各社も銀座に本拠を構えた会社が多いこともあり、連合会に同情的である（もっとも『読売新聞』では「哀れッほい陳情書」だとしてやや冷めている⁽³⁴⁾）。しかし東京市はこうした陳情に対して、時代に応じて先端のものを受け入れてきたのが銀座である、として却下し、一九二一年八月に工事が敢行されることとなった。もっとも後藤も理由なく公孫樹の移植を主張したのではない。公孫樹は現在も東京都の木に指定され、東京大学の学章にもデザインされているように、その原種はアジアにあり、日本あるいはアジアを象徴するに適した樹木として考えられていた。後藤新平自身、一九一六年にすでに『三千年來盆栽に植え来りたる公孫樹を大陸に移し植えて世界的に繁茂させねばならぬ』との長い標題のもとで対外政策論を展開しており、東京を代表する街路である銀座通りに公孫樹の植樹を希望するのは当然であった。⁽³⁵⁾

工事着手直前となる同年七月に福原信三は同書の刊行を決意し、冒頭に次のように記している。

取られる柳の木に執着があつたといふほどでもないのですが、
續いて車道は碎はされる、人道は狭まる、もうこの煉瓦道もア
スファルトになつて了ふのかと思つた時、ふと昔の銀座が戀し

くなつて、せめて後の語り草に、その昔から昨日まであつた銀座を残して置きたいやうな気がしたのです。⁽³⁶⁾

『銀座』は非売品であるにもかかわらず、「出雲町の資生堂では銀座繁昌の今昔を調べ『銀座』といふ冊子を編輯し近く御帰朝の東宮殿下に献納するさうで目下編輯を急いで居る」と新聞でもその刊行が報じられるなど注目を集めた。⁽³⁷⁾ 関東大震災後には、震災前の資料が消失するなかで銀座に関する文献の古典として珍重されるようにもなり、福田勝治による同名の『銀座』（一九三六年）では信三の許可を得てその一部が転載されている。銀座二丁目会による『伸び行く銀座』（一九四二年）でも銀座の長老達が、近代銀座の初期の記録として『銀座』に言及しており、本書の出版自体が資生堂と銀座との連想を強力に高めていることが窺われる。

2 銀座の三大課題

同書では信三自身が「『銀座』の編輯について」を著し、刊行の最大の目的は銀座をよりよくするために皆で考えることにあると強調する。右記の『銀座』刊行を報じる新聞でも「之を機に色々行はれる銀座改造の意見」として、同書が銀座の将来に関する議論を喚起したことを伝えている。信三はきわめて具体的に震災直前の銀座が抱える課題を明示しているが、ここに資生堂が新橋から銀座へと

表記を変更した理由の一端も窺うことが出来る。信三は銀座の課題として以下の三点を挙げている。

① 「銀座らしさ」の消滅

第一の課題は煉瓦街の変遷による「銀座らしさ」の消滅だ。

最初に同一形式で建築されました煉瓦作りの二階家の屋根が棟つゞきになつて、或程度の統一観があり、何處かしら他所との區別計りでなしに、一定した氣持ちがありました。若しあれが一軒々々異なつて、洋風唐造り、土藏作り、純日本風の店屋などが入交つて立ち並んで居りましたら、あんなスッキリした氣持は出なかつたに違ひありません。その證據には銀座以外の何所の小賣店街にも、銀座の氣持ちがなかつたのです。⁽³⁸⁾

リージェントストリートを模してつくられた建造当初の整然としたアーケードは、街の繁栄とともに各々が好みの建物を増改築するなどして様変わりしつつあつた。いまや銀座の象徴でもある和光の時計塔は一八九五年に服部時計店の初代時計塔として建造されているが、煉瓦街の当初の整然とした街並みからすれば大幅な変則となる建物である。変化に対して信三は「現在の銀座は外の小売店街との區別がない」と批判し、銀座独特の魅力が失われていくことを嘆

いている。⁽³⁹⁾

②新橋の凋落

第二に、新橋駅の閉鎖に伴う新橋全体の衰退である。一九一四年に東京駅が開業すると、新橋駅は閉鎖され、⁽⁴⁰⁾新橋そして銀座は西洋文明の窓口そして情報の集積地としての特権的な地位を失うこととなった。かわってそれまで「三菱が原」と称され、ほとんど開発が進められていなかった丸の内に注目が集まっていく。丸の内の街並みは「一丁倫敦」と称され、なかでも建造中の丸ビルは注目的であった。高浜虚子はその建造中からホトトギス発行所として部屋を予約したと高揚感をもって記している。⁽⁴¹⁾

信三は、虚子とは対照的に、新橋を眺めながら嘆息をついている。

目を放てば遠く一帯の緑を背中にして、此の世の務めを済ませた顔の舊新橋のステーションを見ても、私には懐旧の念日に新なるものがあります。

東海道線の終点である新橋は「ステーション」と称されて明治の開通以来、東京の名所であった。⁽⁴²⁾幼少期を新橋で過ごした奥野信太郎は次のように回想している。

新橋ステーションがなくなって汐留駅となったとき、これはもう大分ぼくが大きくなってからではあるが、実に寂しい思がした。それは吉川の洋食につながる、そしてやはり銀座とかかわりのある一本の支柱が、ぼきりと折れた感じがしたからだ。今の銀座はもはやぼくたちが子供心に感じたほど生々しい新鮮な西洋のおいを、人々の心のなかに微風の快さのように軽く波だたせてはくれないであろう。少くとも西洋においては銀座以外にも東京の方々にころがっているようになったからである。⁽⁴³⁾

東京駅の開通は、そもそも商業の中心が新橋のお膝元として発展した銀座から離れていくのではないかという深刻な不安をももたらしていた。信三はこのように続ける。

地理上銀座といふものが、所謂東京の商業中心の区域からは稍放れ過ぎてゐる。そうして愈東京ステーションの表道路路が出来上つて其働きを縦横にする時代には、所謂東京の商業區域は少くも今より更に東漸するものであるといふことは誰しも想像し得る所であらうと思ひます。勿論東京灣築港に伴ひ芝浦一帯の開発如何によつては、其東漸の勢は多少とも緩和せられることではありまじやうが、兎に角、銀座といふものは、東京市の商業中樞区域からいへば少し線を脱しかけてゐることだけは否む

ことの出来ない事実であらうと思はれます。

「此の世の務めを済ませた」のは駄だけではなかった。

一九一〇年に松山省三がカフェ・プランタンを開業すると、ライオンやタイガーなどのカフェーの開店が続き銀座に「新橋花柳界の心胆をも寒からしめるカフェー時代」⁽⁴⁴⁾が始まった。当初、作家や芸術家など知識人の社交場であったカフェーは一九二〇年代を通してその性格をすっかり変化させていく。一九一〇年代初期には「真面目な色恋の沙汰」が見られたもの一〇年代末期には「近頃のカフェー女は私娼化したなどと極論する人もある」とまで評されるようになった。⁽⁴⁵⁾カフェーの興隆は同時に有信の時代から新橋資生堂に風情を添えていた新橋芸妓の凋落を意味していた。一九二〇年代を経るなかでこの傾向は一層顕著になっていく。

今日の時世に於て、若い男と若い女とが最も容易に、最も安価に、一挙手一投足の労で、相接近し、相交錯し得る舞台はカフェーより他には無い。⁽⁴⁶⁾

カフェーの女給は芸妓に比べてずっと手軽な遊興の相手である。ジャーナリストの村島帰之は『カフェー 歓楽の王宮』(一九二九年)においてカフェーの興隆と芸妓の激減を指摘し、カフェー誕生

から十年で女給の数は千年の歴史を持つ芸妓の数と同等に上ると示している。村島はカフェーを「近代感覚の私生児」と称してその魅力を次のように評している。

第一、テンポが早い。手軽である。安値である。それに、待合入りの如くこそこそ遊び、若くは所謂『かくれ遊び』ではなく、堂々大手をふつてくり込むのだ。

現代はスピードの時代である。手続の面倒な(待合は誰でも客とするとは限つてゐない)時間の取る(芸者の来るまでにはどうしても三十分は待たねばならぬ)そして値ひの高い(待合では五円以内の遊びなどは絶対に出来ない)さうしたところに、⁽⁴⁷⁾どうしてスピードのある近代人が寄りつかう。

村島によれば近代人は独身者であれ妻帯者であれ「恋愛気分」を渴望しているのであり、「娼妓の如く、義務づけられて性的要求に応ずるのでは恋愛気分にはそはない」という。

新橋芸妓を鼻屑にした明治の元勳にも高齢者、物故者が増えていった。こうした新橋の凋落傾向は『銀座』刊行後にいつそう顕著になり、一九二〇年代に記された文芸作品にも頻繁に描かれるようになる。

私は今でも時々勸工場の夢をみるがこの景をみることが多い。この階上の裏側の窓から新橋の美妓諸姉の夕化粧の艶姿がみえるとして、若いものたちが事に託してかいまみたものだと今日
日の古老のうちあけ話である。(中略)

足が一步銀座に入ると実にモダンである。何かいい材料にと思つてポカンとしている前をつばめの如く、断髪的美女がかすめて通る
(岸田劉生『新古細句銀座通』一九二七年)⁽⁴⁸⁾

同じく裏通りであるが、新橋から尾張町に至るまでの両側は、つまり出雲町、南金六町、竹川町、惣十郎町、鍋町、三十間堀のあたりは、いはゆる花街としての『新橋』、多くの芸者屋待合が軒を並べ、花月、錦水その他名だたる、しかしモポには余り用のなささうな、しかつめらしい料亭が古めかしいよそほひを凝らしてゐる。

(今和次郎編纂『新版大東京案内(上)』一九二九年)⁽⁴⁹⁾

新橋も昔日の面影なく、ただ荒涼たるものありだネ。

(野村益三『東京見物』帝都教育会、一九二九年)⁽⁵⁰⁾

新橋芸妓も銀座を形づくる一分子ではあるが、真に銀座を愛する人々にとっては余り縁のない代物。(中略) われ／＼近代人

は、芸妓のことぐらゐる資本家と老人にまかしておいても恥にはならぬと思ふ。
(小野田素夢『銀座通』一九三〇年)⁽⁵¹⁾

徳田秋声『縮図』は「晩飯時間の資生堂は、いつにも変わらずしも下も一杯であった」と、資生堂パーラーでの男女の会話からはじまり、第一次大戦後の銀座が回想されている。

この裏通りに巢喰つている花柳界も、時に時代の波を被つて、或る時は彼等の洗練された風俗や日本髪が、世界戦以後のモダンイズムの横溢につれて圧倒的に流行しはじめた洋装やパーマネットに押されて、昼間の銀座では、時代錯誤アナクロニスムの可笑しさ身すぼらしさをさへ感じさせたこともあつた。

(徳田秋声『縮図』一九四七年)⁽⁵²⁾

新橋芸妓屋組合でもこの深刻な危機に対して、芸妓に教養をつけねばならないと「新橋芸妓学校」を開くなど、対策を講じている。学校は資生堂のすぐ裏手に開かれた。組合頭取の川村徳太郎は次のように語っている。

藝妓げいしやがいたづらに舊習きゅうしゆになづんでゐれば、當國あたうてを風靡ふうびてゐるモダンイズムの波なみを乗切のりきることは出来できないだらう。此この風潮ふうかうに順

應^{おう}出^で來^きるやうな教育^{けいよく}を彼^{かれ}等^らにほどこす必要^{ひつよう}がある。藝^{げい}妓^いの商^{しょう}賣^{ばい}といふものが現代^{げんだい}ほど衰^{すい}微^ひしたことはないのである。青年^{せいねん}達^{たち}がカフェーやバーに集^{あつ}まるのは女^{おんな}給^{たま}といふものが一般^{はん}により多くの教^{けい}養^{よう}を持^もつて居^をり、青年^{せいねん}達^{たち}の興^{きよう}味^みに充^{じゅう}分^{ぶん}應^{おう}じ得^とるからである。女^{おんな}給^{たま}等は新聞^{しんぶん}を讀^よみ得^よ、雑誌^{ざっし}を讀^よみ、時代^{じだい}のトピックを語^{かた}り得^とるのである。即^{すなは}ち女^{おんな}給^{たま}等は藝^{げい}妓^いに比^ひ較^{かく}してはずつと摩登^{まげん}であり智^ち的^{てき}なのである、もし十圓^{じゅうえん}のチイッブをやれば女^{おんな}給^{たま}のサーヴイスといふものは大^{たい}變^{へん}である。彼^{かの}女^{おんな}等^らがその摩登^{まげん}な心^{こころ}意^い氣^きにより、藝^{げい}妓^いから客^{きやく}を奪^{うば}ふのは當然^{たふぜん}である。

(川村徳太郎述『新橋を語る』一九三二年)⁽⁵³⁾

元号が改まると、近しい過去もひどく旧時代的な雰囲気^{おんけい}を帯びるようになる。大正期の女性誌でも、旧式だと思われるものに対しては「何うも明治臭^{めいしけう}がぬけていない」などと容赦^{ようじや}がない。新橋はまさに「明治臭^{めいしけう}」を纏^{まと}った地名と化していった。明治のはじめ、新橋は天皇が臨席^{りんせき}されての鉄道の開通とともに華々しく幕を開けたが、大正時代はその潤落傾向を象徴するように新橋駅での明治天皇の葬送にはじまった。『読売新聞』の記事掲載数においては明治期に新橋、銀座、丸の内の項目数はそれぞれ二七三二、八八四、五五であるが、大正期においては九一六、一〇九一、二三六となり、新橋の激減、微増の銀座、そして丸の内の台頭が目立っている。今和次郎による

一九二五年の銀座街頭調査においても、「銀座で一番寂しいのは東側の新橋寄り」だと数値とともに記されている。⁽⁵⁴⁾

新橋のイメージの低下は、化粧品販売に本格的に進出したばかりの資生堂にとつては一層問題が深刻であったと考えられよう。現在でも新橋といえば中年男性という印象が強く、香水や高級化粧品のイメージとは程遠く海外における知名度も殆どない。信三はさらなるイメージダウンを恐れてか『銀座』においては新橋の潤落について詳述はしていないが、ここに新橋から銀座へと店名表記を変更した背景の一端があることは明らかだろう。ほぼ十年を経た後に「交通機関の中心——新橋が東京駅に移りましたので、銀座の中心も移動しました」などと、新橋駅の閉鎖によるショックについて明言し、花柳界の変遷についても次のように語っている。

近代風景はウエートレスが藝妓に代つて銀座の平面を占領しました結果即ち花柳界の推移から大通りの特徴ある商店同様の小賣商が最近横丁にも進出して來ましたので、いはゞ今迄の商店と花柳界との交錯が、商店とカフェーとの交錯となつた譯です。そしてカフェーの性質は全く柳暗の闇を拂つて銀座を花明の巷に改造して了つた様であります。⁽⁵⁵⁾

③日本橋との競争激化

信三は銀座の第三の課題として日本橋のデパートとの競争の激化を挙げている。日本橋と銀座は距離的にも近いうえ、それぞれ江戸の中心そして東京の中心としての意識から対抗関係にあった。銀座は一八九〇年代に入ると日本橋を超えるほどの隆盛を誇るようになったが、一九〇四年には三井呉服店が「デパートメントストア宣言」とともに三越呉服店として開店する。定額販売や陳列販売をはじめ現代的な小売販売方式が採用されるなか、高島屋や白木屋など日本橋を中心とした老舗呉服店も次々と百貨店の業態へと衣替えしていった。「流行」を意識した品揃えや「今日は帝劇、明日は三越」といったキャッチコピーが話題になるなど、近代的な広告も展開されるなかで百貨店と小売店の競争は極めて激しいものになっていった。しかも新たに交通の中心として期待される東京駅は日本橋の至近距離に位置しているのである。

信三はいまや銀座の両側にある「二百四十余の総商店」の一日の売上が東京有数のデパートメントストアの売上高に較べるとずっと少ないのではないかと懸念し、銀座全体での対策の必要性を強調している。

四 銀座発の銀座改造計画

このように震災前の銀座は景観問題、新橋の衰退に加えて丸の内

の台頭や日本橋のデパートとの競合といった憂慮すべき事態に直面していた。こうした状況下での東京市による都市改造計画は、「歴史上の名所を破壊して市区改正の犠牲たらしめん」とする、強力かつ、わかりやすい外圧となり銀座商店の連帯を急速に進めた。⁵⁶ 信三は「銀座」の刊行を通して議論を喚起し、銀座の連携に先導的な役割を果たしながら、銀座の資生堂としての存在感を高めた。同時に「東京銀座資生堂」へと表記を変更したのである。さらに信三は銀座を「よりよく」する方向性を具体的に定めた⁵⁷として、商店、連合会、行政が各々とるべききわめて具体的な対策を提案した。資生堂には「最初の建築評論家」として一九一〇年代から先駆的な建築評論を続けてきた黒田鵬心が一時は社員としても参加しており、信三のブレンとして活躍していた。そして信三の提案は関東大震災により、都市計画への関心が急速に高まるなかで、急速に現実性を高めていった。

1 「大銀座」計画と行政との連携

信三による最大の提案は、正式な町名としての銀座を従来の一丁目から四丁目に加えて八丁目まで拡大するという「大銀座」計画である。

銀座の衰亡はやがて自分の衰亡であるばかりでなく、又東京

市の一の大きな損害であるといふことを考へますと、小さい自分の利益や主張は抛つても銀座住民たる凡ての方と協同一致して、此銀座の両側を一つの銀座といふ小売商店の一大集團としてたたしめたいと、寝ても醒めても考へるのであります。

此意味に於て、私は、京橋から新橋に於ける東西両側の一帯を銀座と見做して、これが丁度一個の小賣商店の集合、デパートメントストアのやうな纏つた感じの下に、假令へば竹川町出雲町のやうな町名は廢して各人が團結したら面白い商賣が出来やうと思ふのであります。

竹川町や出雲町は、創業以来の資生堂の所在地だが、信三は馴染みの町名を廢してまでも正式に「銀座」とするよう求めた。信三には正式に町名を「銀座」に包含することで、台頭する丸の内や日本橋の百貨店に対抗して広域の銀座の連帯を実現するとともに凋落傾向の止まらぬ「新橋」の古いイメージを払拭しようと考えていたものと思われる。当時、話題になっていた「銀ぶら」も、銀座一丁目から四丁目以外では「出雲町ぶら」や「尾張町ぶら」が本当だとして、揶揄する者もあった。一方で信三が震災後に書いた「銀座の新装」では、銀座という名前の伝統は慶長年間から続いており、日本橋との対抗にも有効であるという。

斯くして新生したる銀座の商舗は何れにしる須らく「銀座」なる慶長十七年以來の老舗名前を標榜して世に立つべきである。三越といひ白木屋といひ大丸といひ、その老舗名前に對する世の印象と親しみと信用は誠に偉大なるものである。そして「銀座」なる老舗名前に對してこれを辱かしめぬだけの理解と努力とを以て益々此地の發展を心掛けたきものである。⁵⁷

信三は銀座の中心となる銀座通りについても具体的に将来像を示している。当時は銀座通りには都電が通つていたが、信三はブロードウェイか、フィフス・アヴェニューかと二案を提示しながら「東京市の商業勢力は東漸」するものと考えた場合、「銀座は電車も車も通さずに所謂フィフス・アヴェニューのやうな形に向つて進歩せしめるのが至当である」と考えている。信三はフィフス・アヴェニューを銀座通りの理想像として考えており、この後もしばしば言及している。

信三は一方で、現実的な行政との連携を重視した。これは舗道拡張計画に際して銀座住民の声が充分に反映されなかつたことに対する反省であるとともに、東京市さらには後藤新平に對する抗議でもあるだろう。

それには先づ銀座の住民たる私共は、常に當局者と意志の融合

を計つて、當局者の計畫に十分の同情を表し、其仕事の完成については出来るだけの援助もし、又金錢上の負擔も快よくするやうになりたいと思ひます。と同時に當局者も亦假令へば交通問題についても、単に學者とか専門家とかいふものゝ論議ばかりに耳を傾けずに、其住居せる銀座民の意向とか希望とかいふものを聴いてから其計畫にかゝるといふやうな、順序にして、所謂官民一致の實を擧げたいと思ひます。

そして当局者にも積極的に銀座振興の「名案」を出してもらいたい、という。

銀座附近の住民が銀座に来るのに成たけ便利のやうに、假令へば内幸町の人が銀座に出るために山下門と土橋との間に中間の橋を設けて貫らふとか、又築地一圓を水境の公園にして貫つて日比谷公園の陸公園と對立せしむるとか、当局者は当局者としての名案を出して貰つたら宜しからうと思ふのであります。

信三は「銀座」に京新連合会による陳情書とともに東京市による回答書も掲載し、さらに後藤新平から序文を得ている。信三は、中立の姿勢を保つことによつて、かえつて自らの意図の妥当性を際立たせることを得意としている。後に信三は自らを「緩衝地帯」に喩

えている。様々な意見を消化して、中庸の立場に立つのは孔子の領分であるが、自らの役割はあくまで意見の異なる人々の間にたつことにあるのだという。⁽⁵⁸⁾例えば第二次大戦期に信三は資生堂ギャラリ―で土井晩翠らの協力を得て「失明勇士に感謝する素人美術展」を行つている。信三は当局の摘発を巧妙に免れるように中立的な仕掛けが施された展示をしばしば開いた。「緩衝地帯」として存在感を放つ信三のもとに、多様な分野から有識者が集まつている。

信三はこの後も行政に対して積極的な発言を続けた。後藤新平はニューヨーク市政調査会をモデルに日本初の都市問題に関する調査機関として東京市政調査会を設立しているが一九二二年にニューヨークからチャールズ・ビアード元コロンビア大学教授を半年間招聘した。ビアードは帝都復興に際しても市政調査会の専務理事として提言を行つたが、これに対して信三は一九二四年に「復興したい新家屋 アパートメントとアーケード」と題して『東京日日新聞』に三回の寄稿を行つている。⁽⁵⁹⁾信三は帝都復興問題に関して、「重要問題については各専門大家によつて遺憾なく論じつくされ」、「ビアード博士の二回の来日でその蘊蓄を傾けた立派な意見」を提示されたことに感謝しつつも、「自分は門外漢だが実際の境遇にある事から推して、かくありたいといふ意見」を提議したいとして、銀座の復興のあり方についての見解を示している。

実際に関東大震災を経て都市計画への関心が急速に高まるなかで、信三の改革案は明らかに銀座の復興計画に影響を与えていった。後藤新平は帝都復興計画において、信三の「フィフス・アブエニュー」構想と同じく銀座通りの都電の移転を提案した。電車が通らなくなると銀座が廃れるという銀座住民の懸念で実現しなかったが、一九六七年に都電銀座線が廃止されるまで、後々まで銀座側からも悔いる声が続いている⁽⁶⁰⁾。震災後の一九二四年には、京新連合会が信三が語るように個別の町名を廃して「大銀座」を実現するよう、東江市に請願書を提出した。翌一九二五年には、銀座各町の代表者により、再び「町名改廃と銀座拡充に関する請願」が東江市に提出され、信三も名を連ねている。請願書は「区々たる町名を統一して、帝都の代表的商業地たる銀座の面目を拡充し、世界大銀座街を出現せしむること、帝都将来の爲め最も緊要のことと存ぜられ候」として、「一銀座の名称下に抱擁すれば百利あつて一害なし」と強調する⁽⁶¹⁾。そして一九三〇年には出雲町、竹川町などの町名が消えて銀座五丁目から八丁目として包含され、「大銀座」が誕生した。先述の、『銀座』の刊行を報じた『読売新聞』は、信三の大銀座構想について「尚ほ進んでは銀座一丁目から新橋までを統一的の町として竹川町尾張町などの名称を廃し度いなどの改良意見もある」と進歩的意見として報じている。信三も当時は「空想に過ぎぬ」「勝手すぎる」と弁解しつつ持論を語っているが、十年を経ずして大銀座計画は実

現されることになった。

一方で写真に興味とし日本写真界の草創期の大家としても知られていた信三は、後藤新平の側近で、東京市長を務めた阪谷芳郎が会長となって設立された都市美協会との関係を深めていく。一九三三年に都市美協会が「東京市の街路を主題とした懸賞写真」を募集した際に審査員として参加し、これを機に協会の評議員⁽⁶²⁾、翌年には常務理事となり、一時は会計監査に加わった。都市美協会の会報『都市美』に写真やエッセイを寄稿したり、都市美観にまつわるコンテストの審査や研究会に積極的に参加した。

信三は一九三六年には協会が主催した、今後の開発が期待される「新宿の将来を語る座談会」にも出席し、「わたくし一人銀座から飛び込んで参りました」と遠慮しつつも、「人を寄せる方法、設備などがつくされれば繁栄するにきまつている」とその都市論を語っている。ミラノを例に出しながら、商店街の繁栄のためには何処からでも出入りがしやすいように裏通りにも配慮すべきである、などと見解を述べて会場から拍手を得ている⁽⁶³⁾。

都市美協会の重鎮である石原憲治によれば、信三は日比谷の三信ビルにあった東洋軒で開かれていた毎月の理事会にもよく出席していたという。石原は後に資生堂関係者に対して次のように語っている。

銀座といえば、あなたのところとそれから銀座町会長によくお目にかかりました、都市美という銀座が中心でしたから。広告物がきたないでしょう、東京の看板広告は⁽⁶⁴⁾。

2 銀座商店の連帯とアーケード化

信三は行政レベルでの改革を論じる一方で、銀座の美観、さらにはデパートに対する小売店の連帯という視点から銀座の商店による積極的な連帯を主張する。例えば建築については「銀座一円同じやうな形を追ひ、ウインドから照明の工合まで互に注意して、所謂『銀ぶら』のお客様に十分の快感を与へるやうに」設計すべきだという。歩道の清掃は勿論、銀座全体で協同の配達所を設け、商品券を発行したり、来客用の共同の休憩所を開設するなど「所謂銀座繁栄のために間接に効果あるもの」に対して十分に配慮したいという。「今日の如く各商店無用の競争をして反てお客に不利を与へるやうなこと」をなくし、銀座の商店は共存共栄を目指すべきだと強調する。さらに同業者が組合を作って仕入れを行えば「銀座全体の店が一つの堅い組合組織の下にかたまるやうな事にもなり、それからそれへと思はぬ面白い仕組が湧いて来て、銀座の小売商店は茲に全く其面目を新にすることにならう」と期待する。

信三によれば小売店がデパートに対して劣勢になるのは、小売商店の仕入方法による「当然の帰趣」である。小売業者には共同組織

が不可欠だとして、仕入れ等を共同で行い建物など施設も共有することで合理的な経営が出来る論じている。「大銀座」の存在は共同組織としても相応しく、「人をして『銀ぶら』せしむるだけの種々の機関を有するほど仕合せな」銀座の住人は、一日も早くその歩調をあわせるべきだと強調する。信三はアメリカ留学以来、百貨店に対抗するための小売店の連帯に並々ならぬ関心を持っていた。震災後、資生堂は全国にチェーンストアを展開し急成長を遂げるが、信三はそれに先駆ける形で銀座商店の連帯を唱えている。信三は一九二八年には「日本産業の合理化」と題して五回の新聞連載を行い、ここでは共同精神の欠如を国民的な欠点として糾弾している。

百貨店は恰も多くの細胞から成る一個の有機的細胞の如きもので、是に対して小売業は一つ宛独立せる有機的単細胞の如きものと云ふべきか。それ故に百貨店の繁栄は多細胞による有機的組織そのものの勝利を意味すると共に、小売業者の繁栄策は、即ち単細胞たる各個体を打つて共同の統一的組織化すること以外に求むべき道がないといふ結論を生ずるのである。戦争も昔は単騎の勝負が、克く全軍の集団の運命を決した時代もあるが、現在は集団の力に依つて行ひ、その精鋭なる武器は組織に於ける科学的合理的経営法に相当するのである。然るに日本人に最も欠けて居るものはこの共同動作の欠如と云ふことであつて、

それは畢竟末だ人人が、共同社会の一分子としての存在を深く意識しない思想的欠陥に帰すると思はれるのである。個人なるものは社会人として、初めて考へられることで、即ち個人の働く事も社会の爲め、社会の働くのは個人の爲めに外ならず、従つて社会の繁栄は個人に報いられ、個人が社会の繁栄を導く訳で、いひかへれば社会に対する義務を満足に遂行すれば、個人の権利となつてかへる事になるのであるが、日本人にはこの觀念が如何にも乏しい。それは個人的には他に優るとも決して劣らない我が同胞が、一度び公衆道德の問題になると、啞然たるまでに醜態を發揮することは幾多の例によつても明かである。⁶⁵

一九二五年、京新連合会は大銀座建設に関する請願と共に、京新連合会は東京市に対して「國家百年の計」として「高所より遠視」して銀座通に「美觀堅牢整然たる街区」を建設するよう陳情している。一九三五年には都市美協会が主催して「銀座街設計建築競技」がなされるなど、銀座の美觀を保つアーケード構想への関心は共有され続けていった。現在の銀座においても、銀座通連合会を筆頭にした町会が建物の高さ制限や街灯の色合いをはじめとしたルールを規定し、景觀を重視した独自の街づくりで知られている。本格的な共同組織化には至らなかつたものの、信三は現在の銀座の街づくりの原点において明確な展望を掲げ、先導的な役割を果たした。

信三の関与の詳細な調査は困難だが、信三が政府主導で造営された銀座から、「民」主導へと移行するなかで、銀座振興に最初期から尽力し、継続的にメディアを活用して銀座のスポークスマンの役割を果たしていたことは確実だ。京新連合会にも銀座七丁目会の理事としても参加し、銀座の会合に初期から熱心に参加していた様子が複数の側面に記憶されている。

町内の集まりにはよく出てこられましたね。出られないときは必ず代理がくるというふうでした。(中略) よくは知らないのだが、銀座通りとかなんとかいって、今の連合会ができる当時のいろんなものがございました。今の小松の裏に松本楼というのがあって、そこで会合したりした。銀座通りはバラックではないけない、本建築にするにはどうしたらいいかとかいろんな会合があった。それに一々出ていた。几帳面なところがありましたからね。

単に資生堂だけのことでなく、銀座全体のためという会合に出席するのはお好きだったのでしよう、きつと。⁶⁶

あの時分は夜になったら店を閉めるという銀行とか会社が少ないなかつたが、電車通りだけは九時か十時ごろまで明るくなくちゃという、銀座全体にたいする信三氏のお考えがあつて、そ

れをいろいろな人に話しておられたようですね。銀座の商店街の会合の席上とか、出入りする新聞記者や、いろいろな座談会などでも、上手な言い回しでそのことを言っておられました。

夜おそくまで店を開けていたから売り上げがあるとか儲かるとか、そんな考えは少しも持っていませんでしたね。(中略) 信三氏はああいう人ですから、銀座の商店街の親父さんの集まりなんかにはあまり出られないんじゃないかと思われがちですが、そうじゃなかったですね。いまの言葉でいうと銀座っ子ということですか、草市やなにかのときは夜おそくまでおいでになりますね。またお店も夜おそくまで開けておくので、店のまわりなど見て歩いたり、おそくなつてから帰ってくるころなど、やはり銀座っ子だなあと思いましたね。⁽⁶⁷⁾

3 各店舗の個性化

信三は銀座全体の共存共栄の前提として、小売商店による専門性の特化を強く主張している。その姿勢は一九二七年に資生堂が発行した『御婦人手帳』など、後の著作でより明確になっている。

小売商店を中心とする銀座は、小賣の組織競争に陥つて居る事を自覚しなければなりません。それは商品の豊富、低廉、便利

等で優越なデパートメントストアに對するものであります。詮じつめますと百貨店は普遍化、小賣店は特殊化を理想にして居ります。即ち銀座の商品は百貨店では求められないものでなければなりません。かういふ小賣商店が一つ々々細胞となつて大きな銀座を形づくる時銀座は初めて生きて來ると思ひます。⁽⁶⁸⁾

銀座、小川町、新宿通などの小賣店集中街を考へますと、其街の建築様式、舗道、街燈、街路樹などについて實際的にはどんなのが適するかは専門家にまかせるとして、其土地だけが持つ特殊なものによつて組立てられて居るといふ事は、非常に人を惹き付ける力が多いと思ひます。人は周圍の平凡から離れて何時も變つた變化を望みます。交通其他の物質的な設備も勿論必要ですが、それ以外に小賣店特殊の設備で一つの情趣を帯びさせる事で人を惹かなければならないと思ひます。

信三は「一般的なものの一般化は到底特殊なものの一一般化の力に及ぶべくもない」として、デパートとは対照的に個々の商店の魅力のうえに成り立つ街としての銀座を強調し、「新婚の若夫婦でも恋人同士でも、気軽に散歩し、漫歩し得る様な銀座になつたら、銀座は永久に帝都の銀座として繁栄する」として期待する。

新聞連載「日本産業の合理化」では、銀座に限らず一般論として

も「各々の商品を専門的に深めた、特殊な優良品を扱ふ小売業者が集つて、特殊品の一般化として経営を共同的に行う」ことを強調する。「単に普通商品の陳列ならば外観上勸工場とかわらないし信用もその程度」であるが、「真に一流の資格あるもの」の集合であるからこそ信頼度が増すのだという。

すでに述べた通り、新橋が西洋文化の玄関口としての役割を終え、丸の内をはじめいたるところに「西洋」が感じられるようになっていた。さらに震災後の銀座には松屋をはじめ三軒のデパートが進出する。しかし信三はこれをも「銀座の立体化」としてむしろ歓迎し、あくまで銀座の繁栄の基礎は「特殊な小売商店街」にあると強調する。そして小売店の「特殊なる商品の深さは、百貨店の欠を補ふ線」であり、小売店はまず「眼前の商品をしてその深度を徹底」すべきであるとして、これこそが銀座人の次なるプライドであるとも語っている。⁽⁶⁹⁾

ほぼ三十年後にあたる一九五六年に刊行された高見順編『銀座』には、信三の期待どおりの記述を見ることが出来る。

銀座の商店もまたデパートにはおされているのはいうまでもない。しかし銀座の商店にはデパートに売っていないようなものを売っている店があることも紛れない事実だ。ここに銀座のお

しやれがある。昔は新鮮な西洋の匂いをかかせてくれるのが銀座のおしやれであった。今はデパートにないような凝つたものも売っているところに銀座のおしやれがある。おしやれの意味にも多少こうした変遷がある。⁽⁷⁰⁾

信三は資生堂においても、モダンな「資生堂調」とされるスタイルの確立に尽力した。意匠部を設立し、花椿マークや資生堂書体を制定するなど資生堂独自の意匠を確立したほか、一九一九年には資生堂ギャラリーを開設し、資生堂パーラーも含めて銀座の集客に貢献していった。資生堂ギャラリーは現存する最古の銀座のギャラリーでこれまで三千回以上の展示会が行われている。ギャラリーの展示により当時の新聞の文化面に「東京銀座資生堂」は定期的に登場するようになった。ギャラリーでは絵画のみならずパリ在住の画家らが選んだ最新の服飾品や西洋家具の展覧会なども頻繁に行われた。⁽⁷¹⁾一九二一年の子供服の輸入販売の際には初日に売り切れ、翌日の新聞には急遽、売り切れの広告を出しているほどだ。一九二三年の『資生堂月報』には、西洋式の品物が一般化するなかで、資生堂の独自性への強いこだわりをみることができる。

新意匠の子供服・婦人服・スカーフ・手提袋・洋傘・鏡台・化粧品 此頃では何処でも品物が非常に普遍的になりましただけ

特種のものでつくらうとなさる方が多くなりました。その特種
のものを必ず生むといふ確信をもつて居ります。⁽⁷²⁾

震災後に資生堂化粧品部の設計を担当した前田健二郎は、設計に
あたつて信三からとにかく「資生堂らしい建物」を、と依頼された
と回想する。⁽⁷³⁾ 資生堂パーラーもまた、料理のみならず建築やインテ
リアを含めた全体の雰囲気により資生堂さらに銀座のイメージ構築
に大きく貢献していく。

例えば、銀座七丁目の資生堂などは古い暖簾を掛けている店の
典型的なものだろうか。天井が高いのが一層気分を落ち着かせ
て、英国の一流クラブに入った時の感じを思い出させる。これ
は給仕が男なのも手伝っているのに違いない。

(吉田健一『乞食王子』⁽⁷⁴⁾)

当時あれだけ立派なところは他になかったな。資生堂でコーヒ
ーを飲む時と、ボルドーで洋酒を呑む時は、金持ちみたいな気
がした。その癖たいして懐がいたむわけではなかったから、建
物が立派だった故なのだろうな。⁽⁷⁵⁾ (岩田専太郎『銀座漫想』)

「銀座のサエグサ」の三枝進社長は、資生堂が自分の店ばかりで

なく、街全体の雰囲気までリードし、「銀座の街の文化を育ててく
れた」と語っている。⁽⁷⁶⁾ 建築やインテリア、ましてや都市が醸し出す
雰囲気は単純に機能面から考えれば、化粧品とは全く関係はない。

しかし信三はそうした特徴ある空間の効果が資生堂さらには銀座の
イメージに重なつていくことを明確に認識し銀座の小売店にも大き
く影響を与えていった。信三は「居は人の気移す」とも書いてい
る。やがて銀座の魅力は、再三にわたつて資生堂の情報誌『資生堂
月報』（一九二四年創刊）や販促物などを通して、チェインストアの
展開とともに全国に配布されていった。川路柳虹、川島理一郎ら、
当時の文化人が執筆にあたっている。一九二〇年代末に西條八十ら
の作詞による銀座をうたった流行歌がラジオで頻繁に喧伝されてい
くが、銀座に重点を置いた資生堂の広報活動はこれより大幅に遡る。
それは銀座全体の具体的な将来像を視野にいられたモダン都市の展開
に先駆けた銀座内部からの活動として注目されよう。

五 結 論

以上のように福原信三は一九二二年を契機に「東京銀座資生堂」
の商標を採用するが、それは震災前に危機的な状況にあつた新橋そ
して銀座全体を「銀座」の名のもとで活性化させようという遠大な
計画を背景としたものであつた。『銀座』刊行以後も、信三は積極
的に銀座振興に取り組むが、信三の提案の少なからぬものが実現さ

れており、信三が関東大震災後の銀座の興隆に果たした役割はより注目されるべきであろう。

関東大震災を経て同じ場所に店舗を復興すると、資生堂は次の広告を掲載し、銀座との関係を強調している。

弊社が舊位置に新築いたしましたのも、決してその位置を守るためのものではなく、銀座は将来とも矢張り帝都の中心であることを信じて、資生堂製品を内外に宣伝いたしますにも最も適當の所と信ずるからであります。

化粧品部・薬品部・写真部共に従来より一層その内容を整え最新の設備を凝しました。

高等飲料部は、出雲町時代より遙かに、その設備の典麗なること、飲料の高級なることは弊社の私かに誇といたす所であります。

花部は四時清麗なるものを取りそろえて、その設備の典麗なること、その花の優良なことを誇るに足るものであります。

二階のギャラリーは、展覧会用として設備いたしましたもので、美術工藝の展覧会、個人展覧会の小会場として、場所といひ、その設備といひ正に銀座の誇のみならず帝都の誇であります。

此の度新設いたしましたすべてのものは、皆何れも「資生堂」及び「資生堂製品」の名を銀座に行く方々に深く認識され

んことを希ふに外ならないのであります。⁽¹⁷⁾

資生堂ギャラリーでも、再建後初の展覧会として「銀座回顧展覧会」が開催され、一九二五年には香水「銀座」も発売された。

西にコテイのパーリーがある様に東に資生堂の銀座があります。

銀座をゆききする人々の奏でる交響楽にもいたその匂とその色とその曇形⁽¹⁸⁾

当時は二大化粧品メーカーとして大阪のクラブ（中山太陽堂）と東京のレート（平尾賛平商店）が並びたっていた。一九二〇年に永井柳太郎が衆議院で行った演説、「西にレーニン、東に原敬首相あり」を振って「西のクラブ、東のレート」と称されている。資生堂は当時、大きく両社の後塵を拝していたものの、信三は「国産の舶来品」の製造を標榜し、国内ではチェインストアとして全国展開を図るとともに、早くから海外進出も考慮していた。華やかな「帝都」銀座のイメージは資生堂が同業他社やデパートなどから差別化しうる最大の要因となっていく。「東京新橋資生堂」から「東京銀座資生堂」への転換は、一九二〇年代の資生堂の急速な拡大の起点に位置するものでもある。イメージを重視する海外のプレミアム・ブランドに目を転じて、これほど都市のイメージを自社イメージ

と重ねて強力に意識し、都市計画にまで先導的に参与した例は稀である。

化粧品の開発と同時に都市計画までも視野にいれ、包括的な企業イメージの構築を推進したところに福原信三の独自性があり、資生堂のブランド力の原点を見ることができるといえる。

注

- (1) 『企業』一九四一年十月号
- (2) 山本拙郎「銀座建築印象記」安藤正輝編『銀座』第二号、銀座社、一九二五年、七一八頁
- (3) 外部のものではジャーナリストイックな観点からの著作やエッセイが大半となっている。
- (4) 和田博文監修『資生堂』ゆまに書房、二〇〇六年
資生堂関係者以外による二冊は下記のとおりである。島森路子『銀座物語 福原義春と資生堂文化』毎日新聞社、一九九六年。夏堀正元『銀座化粧品』日本経済新聞社、一九七六年。
- (5) 富山秀男監修『資生堂ギャラリー七十五年史…一九一九〜一九九四』求龍堂、一九九五年
- (6) 佐々木聡『日本の流通の経営史』有斐閣、二〇〇七年
- (7) 銀座史との関係においては『資生堂社史…資生堂と銀座のあゆみ八十五年』（資生堂、一九五七年）が、当時の関係者の証言も含めてもっとも詳細に記されている。

- (8) 煉瓦街完成初期の銀座については野口孝一や三枝進による研究がなされている。野口孝一『銀座煉瓦街と首都民権』悠思社、一九九二年。三枝進「ウォートルスの経歴に関する英国側資料に関して」銀座文化史学会編『銀座文化研究』第六・七・八号、一九九一〜一九九二年

(9) 例えば『読売新聞』一八七八年八月一日号には松本良順の本町資生堂への訪問日が記されている。資生堂が松本の診察日の新聞広告を出している例もある。

- (10) 小野田素夢『銀座通』四六書院、一九三〇年、一一四頁
- (11) 石橋友吉『東洋大都会』服部書店、一八九八年、七一頁。同じ頁には「室町資生堂」も「薬種問屋にして又神薬の本舗たり」と紹介されている。
- (12) 松本順吉『東京名物志』公益社、一九〇一年、二二八頁
- (13) 最初の生命保険会社は明治生命保険会社であり、創業は一八八一年である。
- (14) 『東京朝日新聞』一八九六年三月三日号
- (15) 松崎天民『銀座』筑摩書房、二〇〇二年、七八頁
- (16) 三田村鳶魚「江戸よりも東京」三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、一九二一年、二三頁
- (17) 当初は東京市中の家屋を漸次、西洋風耐火煉瓦に改築する計画があった。
- (18) 煉瓦街建造当時は公孫樹や桜も植えられていたが、銀座が湿地のため相性のよい柳のみが残った。
- (19) 風俗画報臨時増刊『新撰東京名所図会 第十九編 京橋区之部

巻之一』一九〇一年、二四頁。新橋芸妓については次のように解説されている。

「お役所や、官邸の築地辺に、簡単軽便の候補者を物色したのが、所謂今日の新橋藝妓のそれである。粉黛施して濃く柳眉描いて厚く、粧飾華麗を重んずる新橋の妓風は西国武士の成上がり、明治政府の役人たる彼等の意を迎へんとして養成せられたるものである」(一一頁)

(20) 『経済マガジン』一九四〇年六月一日号

(21) 三田村鳶魚編『伸び行く銀座』銀座二丁目会、一九四二年、三〇三頁

(22) 外国人向けの最初の本格的なホテルである築地ホテル館も建造されていた。

(23) 三田村鳶魚「江戸よりも東京」三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、一九二二年、一九―二三頁

(24) 福原有信「銀座の私の店」三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、一九二二年、一五五―一六〇頁

(25) 岩動景爾編著『東京風物名物誌』東京シリーズ刊行会、一九五一年、一二三―一二四頁

(26) 谷澤鞆店の当主が「皮包」として販売していた鞆に対して便宜的に「鞆」という漢字を宛てたところ定着したという。

(27) 資生堂宣伝部編『資生堂宣伝史』資生堂、一九九二年、四五頁

(28) 現在コロンビア大に薬学部は存在しない。

(29) ニューヨークでは後に経営を任せられ、参議院議員ともなった松本昇、画家の川島理一郎らと交友を結んだ。同時代の海外滞在経

験者は帰国するとしばしば銀座に集い、このネットワークが第一次大戦後の銀座全体の興隆を支えている。

(30) ポーラ文化研究所『モダン化粧品史 粧いの80年』ポーラ文化研究所、一九八六年、二九頁。当時最大手のメーカーのひとつ、レト化粧品(平尾賛平商店)の生産量は一九一五年から二〇年の間に八倍に至っている

(31) 安藤正輝編『銀座』二号、銀座社、一九二五年

(32) 『資生堂社史・資生堂と銀座のあゆみ八十五年』資生堂、一九五七年、一一六―一一七頁

(33) 京新連合会「東京市長男爵後藤新平閣下宛請願書」一九二一年五月

(34) 『読売新聞』一九二二年五月十五日号

(35) 『実業之日本』一九一六年一月一日号

(36) 福原信三「銀座の編輯について」三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、三五一頁

この後、福原信三の同書からの引用については特に注記を設けない。なお『銀座』の編集にあたっては慶應義塾大学文学部で学んだ信三の弟の信辰(路草)を通じた交友関係も大きい。

(37) 『読売新聞』一九二二年八月二日号、『同』一九二一年十二月二十四日号

(38) 「追憶の銀座」(資生堂意匠部編・代表高木長葉『御婦人手帳』資生堂、一九二七年、一一五頁)。銀座の景観への郷愁は度々述べられている。

「この建築様式の各々統一されて居た事、青々とした柳、赤い煉瓦

の舗道、青白い四角な瓦斯灯が銀座の特徴でありました。一度橋を渡つてこの一廓に入りますと、一二等煉瓦の別はありましたが、裏通りに却つて昔の面影がありますので、何処にも一種異つた空気が流れて居るのでした。

- (39) 初田亨が銀座の街並みの変遷のモデルを明瞭に作成している。
初田亨「銀座・中央通り 街並み立面図」三枝進ほか『銀座 街の物語』河出書房新社、二〇〇六年、三三―四〇頁
- (40) 新橋は貨物専門の駅となり、近隣地に汐留駅が出来た。
- (41) 高浜虚子「丸の内」『大東京繁昌記』毎日新聞社、一九九九年、八頁
- (42) 岸善四郎編『東京土産』山本常次郎刊、一八八三年。東京の名所として「新橋ステーション」と「銀座の電気灯」が描かれている。
- (43) 奥野信太郎「若き日の銀座」高見順編『銀座』英宝社、一九五六年、一〇頁
- (44) 小野田素夢『銀座通』四六書院、一九三〇年、一二五頁
- (45) 松崎天民『銀座』筑摩書房、二〇〇二年、八二頁
- (46) 小野田素夢『銀座通』四六書院、一九三〇年、八四頁
- (47) 村島帰之『カフェー 歓楽の王宮』文化生活研究会、一九二九年
- (48) 岸田劉生「新古細句銀座通」『大東京繁昌記』毎日新聞社、一九九九年、一一八頁
- (49) 今和次郎編纂『新版大東京案内(上)』筑摩書房、二〇〇一年、一九九―二〇〇頁
- (50) 野村益三『東京見物』帝都教育会、一九二九年、一四五頁

- (51) 小野田素夢『銀座通』四六書院、一九三〇年、一〇頁
- (52) 徳田秋声『縮図』小山書店、一九四七年、三頁
- (53) 川村徳太郎述『新橋を語る』新橋芸妓屋組合、一九三二年、二〇四―二〇五頁

- (54) 今和次郎『考現学入門』筑摩書房、一九八七年、九七頁
- (55) 福原信三『立体化した銀座』『文藝春秋』一九三一年八月
- (56) 京新連合会「東京市長男爵後藤新平閣下宛請願書」一九二二年五月
- (57) 福原信三『銀座の新装』安藤正輝編『銀座』創刊号、銀座社、一九二五年、一―三頁
- (58) 福原信三『身邊風景』資生堂、一九三〇年、五八―五九頁
- (59) 『東京日日新聞』一九二四年一月十六、十七、二十七日号
- (60) 三田村鳶魚編『伸び行く銀座』銀座二丁目会、一九四二年、
- (61) 高橋重吉編『帝都復興史第貳卷』興文堂書院、一九三〇年、一一二―一一五頁
- (62) 懸賞写真の審査員は近新三郎、佐藤功一、成沢玲川、福原信三、有島生馬、板垣鷹穂、秋山徹輔、田野泰弘、池谷慶太郎、石原憲治の十名である。
- (63) 『新宿の将来を語る座談会』『都市美』第十三号、都市美協会、一九三七年
- (64) 矢部信壽による石原憲治へのインタビュー速記録、資生堂企業資料館蔵
- (65) 切り抜きのため、新聞名と発行日の一部不明。一九二八年五月(新聞番号一六一三八号―一六一四四号)

- (66) 矢部信壽による岩松正智へのインタビュー速記録、資生堂企業資料館蔵
- (67) 矢部信壽による藤井貞寿へのインタビュー速記録、資生堂企業資料館蔵
- (68) 資生堂意匠部編・代表高木長葉『御婦人手帳』資生堂、一九二七年、一三三頁
- (69) (65)に同じ
- (70) 奥野信太郎「若き日の銀座」、高見順編『銀座』英宝社、一九五六年、一五―一六頁
- (71) 信三は手ごろな価格の洋風家具の一般化に向けて宮沢家具店と協力している。
- (72) 『資生堂月報』一九二四年十二月三日号
- (73) 矢部信壽による前田健二郎へのインタビュー速記録、資生堂企業資料館蔵
- (74) 吉田健一『乞食王子』新潮社、一九五六年、二〇三頁
- (75) 岩田専太郎「銀座漫想」、『資生堂社史…資生堂と銀座のあゆみ八十五年』資生堂、一九五七年、二二三頁
- (76) 日本ディスプレイデザイン協会企画編集委員会『銀座のショーウィンドウ…一三〇年のデザイン文化史』六耀社、二〇〇四年、二七頁
- (77) 『チェーンストア』一九二八年五月号
- (78) 『資生堂月報』一九二六年三月号

一九二五年近代中国東北部（旧満洲）で開催された 大連勸業博覧会の歴史的考察

——視聴化された満蒙

竹 村 民 郎

一 大連勸業博覧会開催と満蒙統合の理念

満洲の海の玄関口である大連市居住の日本人たちの愛国心に、国際経済戦に勝ち抜き決意が加わったことを明瞭に示したのが、一九二五年八月十日、大連市で開催された植民地最初の勸業博覧会であった大連勸業博覧会である。佐藤組（石炭商）の経営者で商業会議所会頭佐藤至誠は、開会祝辞でつぎのように述べた。（以下、引用は通行の漢字に改めたほかは、中国の呼称も含め、原文のままとした）

惟フニ満蒙ノ開発ハ実ニ百年ノ大計ニシテ又焦眉ノ急務ナリトス、而カモ此ノ地カ日華両国親善ノ要衝地帯ニシテ其産業ノ消長ハ直ニ以テ両国共存ノ福祉ニ関スルコト甚大ナリ今ヤ世界大戦終熄ニ次テ経済戦將ニ酣ナラントスルニ際シ日支両国ノ経済

的融合ヲ一層緊切ナラシムルノ要アル此ノ時ニ当リ本博覧会ノ開会セラレタルハ寔ニ時運ニ適シタルモノ⁽¹⁾

そもそも大連市に物産共進会を開催してはどうかという意見は、一九二三年春ごろから市民の一部に存在した。彼等は「欧洲大戦後沈衰の極に在る財界振興の一助」として物産共進会の開催を検討していたのである。物産共進会開催をめぐる論議は、大連経済界の不況対策的におこなわれていたようにみえる。一九二〇年恐慌と打ち続く不況や銀行の休業等による大連経済界の沈滞を、なんらかの手段を用いて打開しなければ、早晚大連市の繁栄は行きづまるしかないからである。ではなぜこうした物産共進会開催の意見が、わずか二年の間に大連市主催の大連勸業博覧会（以下大連勸業博と略す）として大きく結実したのだろうか。この問題を解くために、一九二



図1 大連市浪速通（『満洲写真画報 大連之部』旅順東京堂、1918年、図はすべて筆者蔵）

四年から二五年にかけての大連市制の変化を簡単にみておこう。

大連市は一九二四年七月市域を拡大して、一躍二十一人の人口を擁する大大連市となった。一九二四年、勅令による関東州市制公布、同年に施行された。これに伴い大連市は新市制を発足させた。新

市制実施にともなって、定員四十名の市会議員の半数を官選として、他の半数を民選とした。新市会の構成は、半数が官選議員であったが故に、民意の代表的機関とは言い難かった。しかし、その結果として一九一五年市制実施以来有名無実に等しかった「市民的自治」がとにかく実現し、ここに初めて内地の都市と同様の自治都市としての形態をもつこととなった。一九二〇年代初頭の大連市は、日本と中国の両国民が共存する国際都市であった。「市民的自治」の実施を契機に、日中両国民の間で「共存共栄の理想境」形成を目的とした「国際的自治」を要望する輿論が台頭した。一九二四年十一月

十二日、新市会が開催されると「今回自治制の施行及大大連の構成」を祝しかつ之を記念するために、一九二五年度を期して市主催の「物産共進会⁽²⁾」の開催を要求する意見書が、新市制に基づく市会議員選挙で当選した新議員の有志から、市理事会に提出された。一九二五年は大連市制実施十周年にあたる記念すべき年でもあり、理事者側もこの機会に記念行事を実施しようという希望を持っていた。このため、物産共進会開催を要求する議案は、なんらの支障なく一気呵成満場一致で即決をみた。

翌一九二五年一月十九日、大連市は博覧会綱領を、新聞記者招待会の席上で公表した。即ち「会の名称を大連勸業博覧会とする」「開催期日を自大正十四年八月十日至同年九月十八日（四十日間）とする」「会場の位置は市内西公園とする」「本会は日華両国産業貿易の改良発達に資するを以て目的とする」等である。⁽³⁾ 大連市は六月十九日、博覧会予算四十万二千四百五十七円を計上した。これより先の二月四日、大連市は関東長官及び南満洲鉄道株式会社（以下満鉄と略す）の社長にたいして補給金乃至寄附金の交付方を依頼した。折衝の結果関東庁よりは二万二千円の補助金、又満鉄よりは五万二千円の寄附金が夫々^{それぞれ}交付された。

それにしても大連市及び市会の博覧会開催の準備は、きわめてあわただしかつた。蚊帳の外に置かれた市民は、物産共進会の計画がこんな形で進行するとは、恐らく誰も想像していなかっただろう。

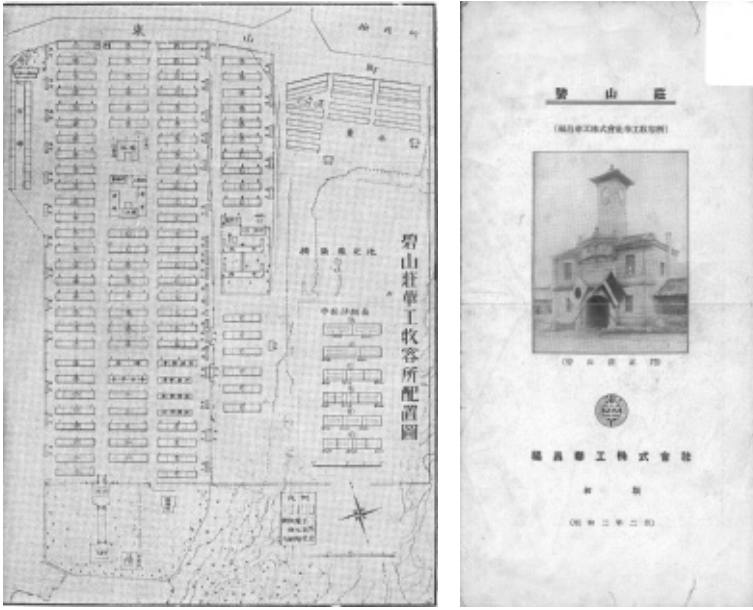


図2 碧山荘華工収容所正門および配置図（『碧山荘』パンフレット、福昌華工株式会社、1927年）

「瓢箪から駒^{ひょうたんからこま}」という言葉を使いたくなる人もいたに違いない。一九〇三年三月、大阪市で開催された第五回内国勸業博覧会が準備に三年四ヶ月を要したのと比較すれば、大連勸業博の準備不足は明らかであろう。もちろん両者の予算規模、パビリオン数、見物客数そのいずれをみても比較にはならないとしても。だが博覧会推進派の

新市会議員グループの、博覧会開催における意気ごみにはきわめて高いものがあつた。彼等は計画が本格化する過程で、当初の目的であつた財界の不況対策をこえて、世界的注視のであつた「満蒙とはなにか」について熱心に議論を重ねた。緊迫をつける国際経済戦の進行のなかで、彼等は博覧会の役割を明らかにしようとしていたのである。彼等の積極的な姿勢は大連市会のみならず、大連商業会議所、ジャーナリズム、満鉄、関東庁等に強いインパクトをあたえ、その結果、大連勸業博の構想は拡大の一途をたどつた。予算規模も当初の十七万円から二十万円に増額修正をみた。

柳沢遊氏の研究は⁴一九二四年、新市制にともなう議員選挙後、大連財界の二大巨頭石本鎮太郎（一九一五年、大連初代市長、豆粕製造業、和盛公司主⁵）、相生由太郎（一九一六年、大連商業会議所会頭、港湾荷役請負業・福昌公司主⁶）であり、中国人港湾労働者収容施設として有名な碧山荘（図2）を一九二二年大連市内に建設している）に象徴される政商的企業家等は、市会、商業会議所のリーダーシップを失い、代わつて弁護士、満鉄社員、ジャーナリスト等の「改革派」が市会を中心に多数進出したことに注目している。彼等はまさに博覧会開催を契機に、大連政財界の革新（Diffusion of Innovation）を主張した政治家グループである。私があえてそういおうとする意味はほかでもない。その革新の実態が、政商的企業家の理念からでたのではなくして、一九二〇年代、大連経済界に基礎をおいた階層であつた

ことに注目しているからである。そして彼等が大連勸業博開催を通じて、そのリーダーシップを強め、大連政財界の合理化の原動力となつて成長していったからである。

一九二〇年代中葉の大連市において、大連市会と並んで重要な経済的役割を果たしていた大連商業会議所は、時局についてのどのような認識をもっていたのであろうか。大連商業会議所が滿蒙に対する産業政策を具体的にどう確立しようとしていたかを検討することは、滿蒙をめぐる国際資本戦に対応した大連市経済界の転換の方向に一つの鍵を与えるものである。つぎに一九二六年六月、大連商業会議所が全国商業会議所連合会に対して提出した『滿蒙産業政策確立ニ関スル意見書』を考察の対象としよう。意見書は滿蒙開發はなぜ急がねばならぬかについて言う。

我が国が滿洲ニ於テ獲得シタル所謂特殊利益ナルモノハ直接支那ヨリ割愛セラレタルモノニアラズシテ幾多ノ生靈ト国努トヲ犠牲ニ供シ他ノ強国ヨリ繼承シタルモノデアルト云フ点ニ於テ一大特色ヲ有スルノデアアル、爾來我が国ハ日支共存共榮東洋和平ノ大義ニ基キ滿蒙ノ開發ニ従事スルコト茲ニ二十年今ヤ支那ニ於テ最モ能ク治安維持サレ日支兩國国民ノ共同榮土タルノ觀アルノミナラズ其經濟上ノ開發ニ努力シタル結果日露戰前開墾サレタル土地僅ニ一百万町歩ニ過ギサリシモノ最近一千万町歩ヲ

超へ、大豆ノ産額六十万ト推算サレタルモノ二百七十万トニ達シ貿易モ亦明治四十年五千二百万海關兩ニ過ギザリシガ大正十四年ニハ五億四千七百万海關兩ニ躍進シタ」⁽¹⁾「抑モ吾人が滿蒙ノ開發ハ國家百年ノ大計ニシテ又焦眉ノ急務ナリト稱スル所以ノモノハ我が国ガ自然ニ恵ルコト頗ル薄ク国土ハ狹隘ニシテ物資菲薄然モ人口過多ナルヲ以テ是非共内ヨリ外ニ發展シテ生キルヨリ外途ハナイ即チ我が国ハ……滿蒙ノ資源ヲ開拓シテ經濟的自給自足ノ大計ヲ樹ツルニアラザレバ國家存立ノ意義ヲ完ウスルコトガ困難デアル……他方支那ノ政情ハ變転窮リナク太平洋ノ爭覇ハ益激烈ニ支那ヲ舞台ニ演ゼラレントスルニ於テ東洋ノ平和ヲ維持スルノ重責ハ一ニ懸リテ我が国ノ双肩ニアル⁽²⁾。

日本にとつて滿洲は資源の供給地であり、資本投下と貿易の市場であつた。さらには対ソ連戰略基地であつた。したがつて我が国が「滿蒙ノ資源ニ依リ食料、燃料、原料等ノ諸問題ヲ解決シ国防ヲ充實シ文化的經濟的ニ益發展」するならば、政治的にも經濟的にも八方ふさがりであつた当時の日本の危機打開策になると、大連商業會議所は確信したのである。それはもちろん一大連商業會議所の問題ではなかつた。日本の現状の危機打開策は滿蒙支配しかないという国民感情が、ひろく醸成されていたのである。

大連商業會議所は意見書でどのような提案をしようとしていたの

だろうか。そこでは満蒙の特産物である大豆、米、塩、石炭、木材、油頁岩等の開発振興策がまず提起された。さらに関東州の特恵税制度の徹底、内地の必需品で満洲より之を補給しうる物資に対し、関税に相当する奨励金の附与、条約に基づき満蒙における日本人居住地の安定を期すること、政府は満鉄の上納金を免除し、之を満鉄の同産業奨励費に充当させること等が提案された。結論的に言うならば、一九二〇年代の満洲における政府事業が何一つ長期戦略をもつた計画を進行せしめるに至らなかった主な原因は、関東庁、満鉄、領事館等の権力体制内部に、統一した満蒙の産業政策が極めて不十分であったことである。朝鮮総督府にはすでに一九二一年臨時産業調査会が設置されていた。同会は水野錬太郎朝鮮総督府政務総監委員長の下、委員として民間側から実業家、銀行家、学者等の有識者がひろく参加していた。これに反して満洲においては、そうした統一した産業政策を確立するためのシステムは、一九二〇年代においても全く欠落していたのであった。さきにもた大連商業会議所による満蒙の産業政策の提案は、まさにそうした官側の著しい立ちおくれをおぎなうためのものであったといえるだろう。しかし在満日本人の大半の者は、植民地経営に対し無関心であったのみならず、我利私欲をこととし、一攫千金の機会を汲々としてうかがっていた。

大連市会や大連商業会議所が大連勸業博覧会前後を境に、大連財界の再生、満蒙産業政策の必要を認識するようになったことはす

に確認した。では『満洲日日新聞』や在野のジャーナリストは、右の課題をどのように認識していたのか。『満洲日日新聞』は博覧会開催を前にした一九二五年七月十六日、「満洲産業界の漸進的曙光」と題した評論を掲げた。即ち同評論は二五年をこれまで「極度に沈衰した満洲の産業」に「漸次に発展の曙光を認め来つた」時期であると評価した。そうした方向として「特恵関税法の制定」「棉花栽培協会や果樹組合成立」さらに「東拓会社が農業方面の事業に低利貸出を敢行」、「満鉄会社が瓦斯事業や窯業等を会社の直営より切り放して独立経営せしむること」等を指摘した。同評論はまた「由来、満洲に在住する邦人の企業」が「関東庁や満鉄に向つて保護若くは補助」を要求したが、それらの事業は「何れも中途にして放棄された」として、そうした官への依存体質を強く批判した。すなわち評論は大連経済に芽生えてきた成長への可能性を、官民共に自覚し一致協力するならば、日華共存共栄の実をあげることができると言うのである。

『満洲日日新聞』は八月十日の社説「大連勸業博覧会」において、大連市で最初に開かれた博覧会の意義をつぎのように述べた。

満洲の如き、粗製原料品の生産地を以て目せらるゝ、特殊の地域にあつては、この種の企ては、最も緊要事たるを失はぬ。殊にわが満洲の玄関たる大連市において、これを開催するは、博

覧会の効果に、何等の割引をもなさずして、その全価値を承認し得る」「滿洲の経済的、文化的開發は、日支共存共榮の根本原則に立脚して、吾人の手によつて、これを実現せねばならぬ」「殊に昨今、財界不況、産業不振の時代にありて、博覧會を開催し、産業界にエポック・メイキングを敢てせんとするは理論において、何人もこれに反対することを、不可能とするところである」「博覧會の開催を機として、ラジオその他の最新文明的施設が多数に出陳せられ、その燦然たる縮図を、目前に展開せらるゝのは、吾人の大に歓迎するところである」「博覧會の効果は、目前の流行よりも寧ろ将来の建設に、一時的の隆昌よりも永久的の創造に、拡充開拓することを目的とせねばならぬ。而してわが滿洲の経済的、文化的開發の契機とせねばならぬと信ずる

このように大連勸業博においては、当初の課題であつた財界不況、産業界不況に対する対策を目的としたのみならず、初めて登場したラジオ放送の実況に象徴されるような情報革命の端緒まで出現した。大連勸業博はまさに巨大な教育情報装置としての性格をもつに至つたのである。第四章で述べるように、一九二五年七月、東京放送局が本放送を開始した。それと比較するとスケールは小さかつたが、大連のラジオ放送開始は僅か一ヵ月後であつた。当時、ラジオ受信

機の価格は高価であり、市民が未だラジオ放送を楽しむ余裕は生活の中になかつた。しかし政府はこの新しい媒体の宣伝力の効果に着目し、いち早く国際政治と経済の両面で緊張が高まつていた植民地大連市にラジオ放送を開始したのである。

大連市における秩序構築で最もその動きが脅威となるのは、いわゆる大陸浪人である。周知のごとく明治初期の民権派と国権派の残滓は、アジア大陸にロマンと冒険を求めたが、それが大陸浪人の系譜である。

では博覧會開催の時期の大陸浪人はどうであつたか。博覧會の翌一九二六年九月、山田武吉は「滿蒙改造の根本的大策 附・東北亜細亜政策」(『日本及日本人』政教社、一九二六)を刊行した。山田は台湾、朝鮮、滿洲にそれぞれ居住した経験の持ち主のみならず、植民地通と憂国の志士をもつて任じた男であつた。彼は一九二五年三月にも「日本の植民地政策と滿蒙の拓殖事業——其の更新と振興の要を論ず」(一九二五)を刊行した。

同書には、浄土真宗本願寺派第二十二世宗主大谷光瑞こうずいが序文を寄せていた。⁽⁹⁾日清・日露戦争期から一九二〇年代までの時期に顕在化してきた滿蒙に対する日本の領土的野望を積極的に主張する大陸浪人として、まさに山田は適材であつた。山田は「滿蒙改造の根本的大策 附・東北亜細亜政策」において言う。

「滿蒙は、対支及び対露政策の消極化と相俟つて、今や全く行詰

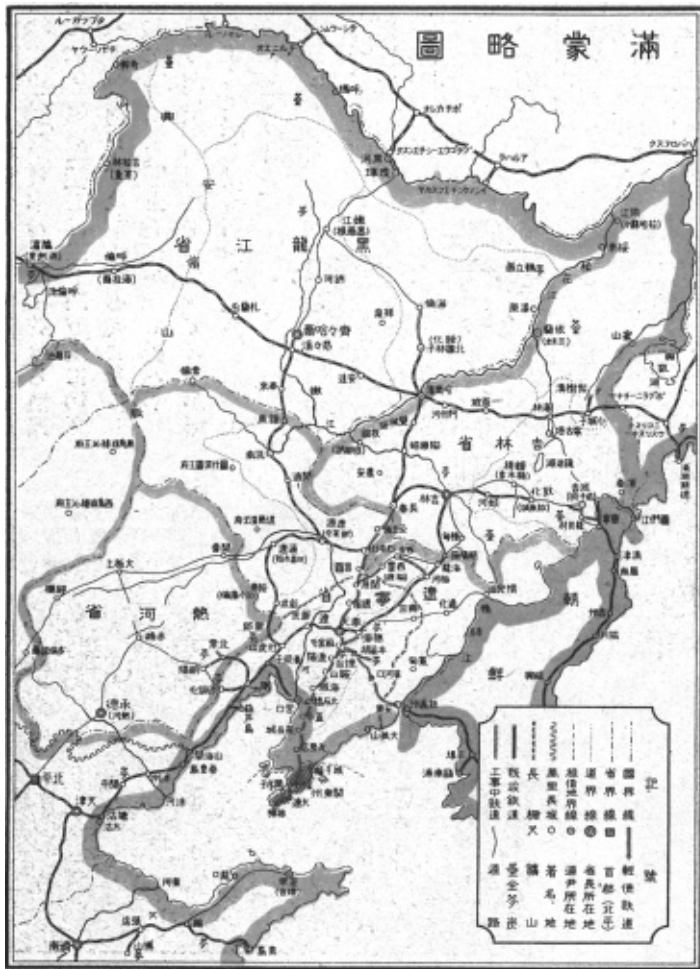


図3 滿蒙略図（『滿蒙と日本及日本人』東京鮮満案内所他）

りの窮地に陥りたり」「然らば滿蒙改造の根本的大策は之を如何にすべきか……卑見を以てすれば『滿蒙を全然支那本部より切離して名実共に完全なる独立地域となす事』是なり」。即ち「清朝発祥の地なるを以て宣統廢帝を擁立して之を滿蒙の主権者とし、日本に於て其の政治、財政、軍事、其他一切の実権を掌握する」ことである。この「滿蒙改造の根本的大策」を断行するため「我国は支那本部に

対しては国交上必要なる問題以外余り深く立入らざる事とし、支那の軍閥を利用して出来ませぬ支那の武力統一を夢想するが如きは断然之を罷め」ねばならない。そしてこの場合付け加えられるべきことは、「在滿朝鮮人を保護する」為にも滿蒙政策を根本的に改めることである。

では、そうした従来の滿蒙政策とはいかなるものであったか。それは「張作霖に気兼ねしたり責任のなすり合ひなどして我が新附の民族たる在滿朝鮮人に對し満足なる保護を与へたる事」が無かつたのである。だから「滿蒙に於ける水田事業の先駆者たる在滿朝鮮人」の中には「不平を起し反感を抱く者」や、「不逞朝鮮人の不穩なる陰謀も行はれ」るに至った。したがって彼等の赤化を防ぐためにも「滿蒙改造の根本的大策」の断行が必要となるのである。また「大策実行後に於て滿蒙の拓殖的開發」が進むならば、「現に社会上の一問題」となっている「知識階級」の滿蒙移住にも好都合となると指摘している。

山田の滿蒙開發の構想は、すでに明らかないように、これまでの不統一且つ不徹底な滿蒙

政策の根本的転換を要求するものであった。それは、山田の「利己的資本主義」を批判する態度や方法からきている問題であった。したがって「大策実行後の経済政策」は、『ギルド』式組合組織のものとなし、自由競争を或る程度制限し、殊に投機虚業の弊と利権屋の跋扈^{ばうこ}は之を極度に抑制^{おさ}しようとするものであった。ここには社会化した組合を基礎にする「組合国家」の実現を夢想していたのである。山田によれば日本人、朝鮮人そして他の民族の人々が、共存共栄する「人生の楽土」は、まさにその線上に実現すると言っているのである。さらに言うならば、そこには偽満洲国の理念とされた「民族協和」のイメージが垣間見られる。そしてこの場合付け加えられるべきは「満蒙は極東露領（西伯利）を介して『ロシア』との関係も亦浅からざるを以て、満蒙改造の根本的大策を行うに方りては、一応之を『ロシア』政府に通じて其の承認を求め、同時に対露政策を確立^{かく}すべきことである。

では、そうした対露政策とはどのようなものであるか。それは『ロシア』との間に東北亜細亜と西北亜細亜との勢力分界を協定し、外蒙古より新疆^{しんきやう}、甘肅^{かんしゆく}、青海^{せいかい}方面への『ロシア』の自由行動は日本之を承認し、而して日本は『ロシア』をして満蒙を基地に薩哈^{サガ}噠^ダ及び沿海兩州より後見^{コイカサ}加爾附近^{カス}までの日本の平和的自由発展を承認させる^せることであった。だがもし『ロシア』がこの分割協定に応じない場合は「止むを得ず剣を抜いて起つ」ことも想定しておく必要が

ある⁽¹⁰⁾。最後に注意すべきことは、台頭する中国の抗日運動に対する山田の見解である。中国人は「二十一箇条問題を叫び、国権回収を叫々し、旅大還附を迫る」が、「此の如きは支那自ら好んで日支間の乖離疎隔を助長する」以外の何物でもない。再びくり返すと大陸浪人たちは、明治国家からはみだしてアジア大陸に雄飛の場をもとめた。彼等は主観的には領土的野心ではなく、大陸の原住民と日本人が共存共栄する王道楽土を建設することを願っていた。しかし実際は異なっていた。彼等は「アジアの盟主」意識を抱き、中国やソビエト連邦の権益奪取の機会を虎視眈々とねらっていた。このような大陸浪人たちの野望のもつとも典型的な表現と思われるのは、山田の満蒙改造論であった。

二 満鉄調査課秘密文書にみる満蒙認識

大連勸業博の主催者側の満蒙認識を検討する場合、国策会社であり、植民地経営機関の満鉄の満蒙認識を確認しておくことは、もつとも重要な課題の一つである。一九〇七年、後藤新平総裁が率いる満鉄は営業を開始した。当時日本は満鉄経営について、鉄道十キロメートルにつき、十五名の駐兵権を得ていた。以来満鉄は南満洲の各鉄道の独占的経営を推進していった。また満鉄は大蛇のごとき鉄道付属地の一般行政権を行使し、都市行政、農地経営、大学以下普通教育等の運営にあたった。このほか満鉄は撫順等の炭鉱、鞍山製

鉄所、商事部門、船舶、港湾、電気、ガス、旅館、地方事業などを兼営した。一九〇七年、満鉄の営業収支をみると、総収入は千二百五十四万三千百十六円、総支出は一千五十二万六千五百三十一円、純益金は二百一万六千五百八十五円であった。だが十六年後の一九二三年には総収入一億八千五百六十九万八千三百二十四円、総支出は一億五千九十万二千七百三十二円、純益金は三千四百七十九万五千五百九十二円へと飛躍的に増加している¹¹。

現在われわれが満鉄の事業経営のアウトラインについて、知ろうとするならば満鉄が編集した『南満洲鉄道株式会社事業概況』等の文書を見ればよい。満鉄の設立からその現勢に至るまでの概況は、われわれが必要とする限りにおいて、ここに要約されている。しかしそこからただちに、満鉄の植民地経営の戦略乃至は国際経済戦への対応、そして満鉄の満蒙認識等を確認することはできない。つまり秘された満鉄の植民地経営戦略に関わるそれらの情報は、公開された文書に記載されることは絶対にありえなかつたのである。満鉄の植民地政策立案に関わる秘められた文書を今日捉えることは難しい。しかし前述したように、満鉄が満洲における植民地経営機関の基軸であった関係上、一九二〇年代における満鉄の満蒙観を確認しておくことは、行論上決定的に重要であることは言うまでもない。当時満鉄において右の課題を分析し研究していた機関があるとすれば、それは満鉄調査課以外には考えられない。なぜなら満鉄調査課

こそは、満鉄が世界に誇る知識・情報のシンク・タンクであり、我が国の政策決定に大きな役割を果たしたからである。同調査課の水準の高い研究調査論文をすべて網羅した『満鉄調査時報』（一九一九年十二月創刊、一九三〇年『満蒙事情』に引き継がれる）は、今日、不二出版によって復刻されている。だが残念ながらこの『満鉄調査時報』のシリーズ中にも、本章が必要とする問題に直接ふれた論文はない。周知のごとく、この他にも一九二〇年十月に満鉄調査課が創刊した『満鉄調査資料』（一九三六年まで一六九号と推定）と題する資料シリーズが刊行されている。

だが、『満鉄調査資料』は未復刻であるために、今日それについて調べようとすれば、国会図書館所蔵のマイクロフィルムに収録された同『調査資料』のリスト（不揃い）を利用する以外にはない。これは甚だ幸運であつたのだが、私は機会に恵まれて、この調査資料シリーズ中の『第三十四編 満洲に於ける外人経済勢力状況』（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課、一九二四年）（図4）及び南満洲鉄道株式会社庶務部調査課佐田弘治郎『支那政治論』（南満洲鉄道株式会社、一九二六年）（図5）を手に入れることができた。以下においてはこの二つの秘密文書によって、問題の緒^{いとち}を見つけたていこう。

一九二二年ワシントン会議で海軍軍備制限条約・中国に関する九カ国条約・中国関税条約などの調印が行われたことは、一九二〇年

代東アジアにおける日本の政治的地位に重大な影響を与えた。同会議の結果日本は日英同盟条約の廃棄、シベリアおよび中国からの軍隊の撤退、山東省の利権の中国への還附、対華二十一ヶ条中の第五

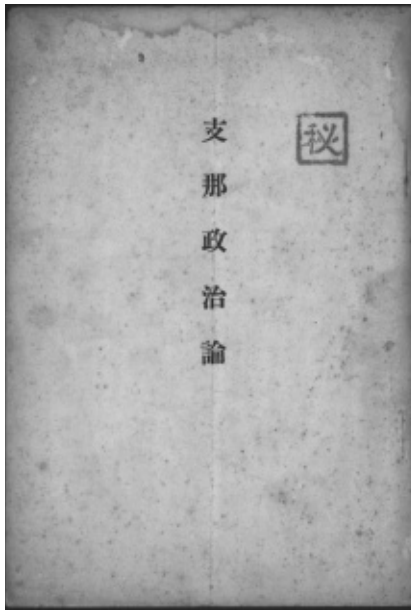


図5 秘『支那政治論』表紙（南満洲鉄道株式会社、1926年）

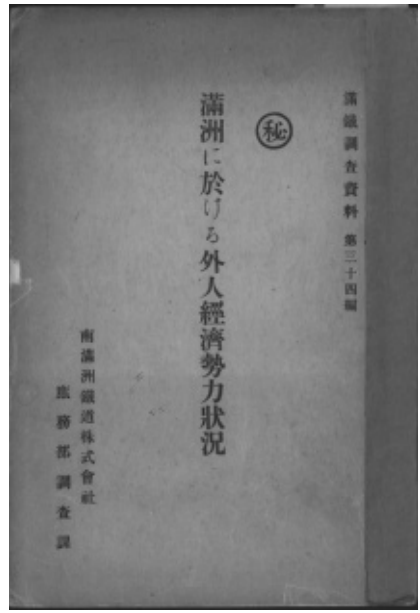


図4 秘『滿洲に於ける外人經濟勢力狀況』（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課、1924年）

項（日本人の軍事、警察、財政顧問を中国政府に置く権利および日本軍の兵器を供給する権利）の放棄、満洲における優先権の放棄等を余儀なくされた。だから佐田も『支那政治論』の冒頭において、ワシントン体制下の世界政治状況の変化に注目してつぎのように述べている。

欧州戦乱後の各国は軍縮会議を開き常備海軍の制限を協定し、外面的には如何にも世界永遠の平和を希望して居るようだが、其の裏面には事実として、寧ろ各国共に将来の世界大戦争の準備に全力を傾注して居る。故に現在の皮相的平和は将来の世界大戦の準備時代と云うべきである。茲に将来の世界大戦を黄白人種の人種的戦争であると仮想して、此の戦争の勝敗を下するに幾多の理由を綜合して、平和的準備時代に於ける大亜細亜主義の実現の成否如何によって、決定すべきものと断言したい。然し此大亜細亜主義の遂行については、其手段として輓近の世界現勢より見て、日支兩國の融化した協力に俟たなければならぬ、従って日支親善又は共栄共存の高潮は、従来の口頭的の統合を叫んだだけでは、到底成果の美果を結ぶことは出来ない。茲に既往の積弊より脱して、将来大亜細亜主義に到達する必成の手段を研究するの必要が生じて来るのである。

大亜細亜主義の実現を目ざして日中両国が一致し、黄白人種の人種的戦争となるべき将来の世界大戦に勝利を得るという構想は、佐田弘治郎の提案にとどまらず、当時の満鉄調査課に台頭していたといわなければならないだろう。そしてそれはその前提として満蒙の「軍事的占領」が想定されるものであったのだ。

日本は将来の大戦乱を仮想し、其の準備行動として国勢調査を行ひ、国民総動員を画策し、武器の改良を行い、学生に軍事的訓練を施し、各方面に着々と改善の実績を挙げて居るが、年々に増加する人口六十余万に対しては、漸次食糧の不足を告げて居る。而已ならず各種改善に必ず原料の生産にも乏しい。要するに、日本の生産力は、需要に充たないというのが今日の現状である。若も仮想した大戦乱が勃発した際には、其の終局に於て、空腹の国民を赤手空拳のまま戦場に立たせることになりはしまいかと思う、茲に日本としては、食糧及其他原料資源を求むるために、自衛上最も可能性に富んだ、支那の一部を軍事的に占領しなければならないことになる。此の一大英断を実現するために、全力を傾注して研究すべきは、支那の国状と民族の心理である。

そして佐田は「此の一大英断」を実現するためには、对中国経営

上日本の基礎地盤としての関東州及び満鉄附属地における植民地政策の転換が必要だといふのである。即ち「民治に於ては、其の住民の面子を尊重することを第一として、徒に殴打罵倒することを慎み、彼等に対して「日本の支那経営上に於ける先導者と視ることが必要」だと言うのである。第二に関東州や満鉄等の日系官公庁や企業等に勤務する中国人に「日本人と平等の待遇を与へねばならないのである。ワシントン体制下満洲における植民地政策転換の問題は、一つは中国人の面子を尊重しながら、彼等との合意をつくりだしていくことであり、一つは官公庁、企業に勤務する中国人の待遇改善の方向である。そしてそれはともに、これまでの植民地政策の破綻が意識されていたのであり、そのかぎりにおいて、一九二〇年代満洲における国際経済戦の中の日本の危機が意識されていたと言わざるをえない。

では一九二〇年代国際経済戦の実態とはどのようなものであったのか。前述した『第三十四編 満鉄調査資料』（以下『満鉄調査資料』と略す）は、その五頁にあたるところで、満洲における米国籍勢力の増大を、つぎのように指摘している。

（ワシントン会議以降―筆者注）米国の満洲発展の野望は一層活気を呈して来た、加ふるに他面露国の政変に依り西比利亞、東支、烏蘇里等の鉄道が混沌状態に陥入るや米国は之等の共同管

理を主張しスチーヴンス氏の大活動を見て北滿に於ける米國勢力の地盤は相当強固に築かれることを得た。

かくの如くして米國は今後益々滿洲に於ける發展を企図しつつある、而して日本の最も注目すべきものも米國の活動にして吾人は常に之に対する用意を怠ることを得ない。

滿鉄はワシントン体制下米國經濟勢力が北滿に目覚ましく發展していることに注目していた。それと同時に滿鉄は一九二〇年代、滿洲における國際經濟戰の基軸は日米兩國の対立にあると想定していたのである。では滿洲における英國經濟勢力の実情はどうであろうか。滿洲における英國經濟勢力の發展は米國のそのように著しいものではなかったが、それはより古くより堅実であった。一八五八年の天津條約によつて、英國は開港地を營口に設定し自由貿易港として開放したときに、まずその發展の第一歩をふみだした。また古くから上海を中心として中國の中部地域の對外貿易は、英國が牛耳るところであった。一九二〇年代、ハルビンを中心とした北滿の對歐米貿易は、多く上海を中繼地としていた。したがつて英國が對滿貿易に於て有する影響力は極めて大きかったのである。では滿洲における獨逸の經濟勢力はどうであったか。獨逸の經濟勢力は第一次世界大戰の敗北により、中國及び滿洲から一掃された。しかしその後、獨逸が奉天の電車敷設権を手中にしたことが象徴するように、

その經濟力の失地回復が着々と図られつつあった。

『滿鉄調査資料』が滿洲における最も強大な經濟勢力として警告していたのは、「英米トラスト煙草会社」（以下英米煙公司とする）と「スタンダード石油会社」（以下美孚洋行とする）であった。つぎに簡単ながら、英米煙公司と美孚洋行について紹介しておくことにする。一九〇二年、米國煙草「トラスト」は英米兩國の製煙草販売業を統一し、さらに支配下の各社をも合併して一大会社を組織し、これを「英米トラスト煙草会社」と称した。このトラストは米國內の刻み、嗅ぎ、紙、巻き等各種煙草の七割五分を支配し、キューバの煙草栽培事業を経営（公称資金三億万ドル）した。一九〇四年以來「英米煙公司」の活動は目覚ましく、資本金は四億五千万ドルの巨額に達し、世界各國の煙草市場を支配するに至つた。

「英米煙公司」が中國に事業を開始したのは一九〇二年頃で、その固定資本のみをもつてして三千万ドル以上であった。一九二〇年代中國における巻き煙草の需要は驚くべき増加を遂げ、その輸入されるものは毎年八十億本以上であった。ここで同公司の中國内の工場をみると、上海、香港には製造工場を設けた。奉天には土產煙草及び米國種煙草を農家に栽培せしめたものを乾燥する工場を有する外、わずかに下等品の蟋蟀（クリケツト）を製造していたにすぎなかつた。このため販売品のほとんど全部は米國及び上海、香港より輸送された。同公司は滿洲には大連及び奉天に出張所があるのみで、ほ

かはすべて代理店制をとっていた。同会社の販売煙草中で売れ行き
の最も良好のものは「三砲台」「刀牌」「ルビークウイン」「孔雀」
「ニューヨーク」等であった。同会社の煙草は中国人に信用を博し
て愛用され、決して他製品の追従を許さず、ほとんど独り舞台の如
き観があった。そして同会社の満蒙における売上高は年額約三百五
十万ドルに達した。一九一四年同会社は中国における煙草の独占販
売を確立するために、中国政府に対して煙草の専売権の委任を要求
した。さすがにこれは中国内の輿論の集中砲火を浴びたのみならず、
諸列強よりの抗議によって中止するに至った（『英米煙公司』前掲
『満鉄調査時報』第二巻第三号所収、一九二二年）。

「美孚洋行」はニューヨークに本店を有する資本金三千万ドルの
大企業であり、米国石油及洋蠟の販売をしていた。満洲においては
奉天に東三省及び蒙古全般を統括する支店を置き、そのほか主要都
市や田舎に至るまで、出張所、代理店等を有し、その販路は満蒙全
般にわたっていた。同洋行の石油は本社工場から輸入され、大連で
罐入としタンク車にて各地に輸送された。同洋行が中国に輸入して
いる石油の量は知ることができない。ただ、つぎの数字によって之
を推察する以外にはないだろう。即ち一九二一年における全満洲石
油輸入量は、千四百四十二万二千四百五十五トンである。ここに詳述
する余裕はないが、一九一〇年代から二〇年代にかけての時期、満
洲における輸入石油の諸統計をみると、満洲輸入石油の大半は米国

石油ということが出来る。しかも米国石油の約八〇パーセントまで
はこれを「美孚洋行」の輸入とみる事が出来る。満洲の石油業界
において「美孚洋行」が断然群をぬいているのもまた当然であると
言わなければならない（前掲『満鉄調査資料』による）。

さて、満洲における外国の強大な経済勢力は、「英米煙公司」、及
「美孚洋行」以外はほとんど見るべきものはなかった。きわめて優
位な経済的地盤に立っていたこの二公司は、その地盤がはなはだ堅
くして容易に動かすことはできなかった。『満鉄調査資料』は六八
頁にあたるところでその状況をつぎのように説明している。

今日支那人にとり切実大需要品たる煙草、石油及び洋蠟等を殆
ど彼等外人が独占しつゝあるは吾人の羨望措かざる所である。
而も如何に僻陬の地と雖も殆ど彼等の手を染めざる所なく其の
活動次第に依つては実に怖るべきものがある。

この言葉は誇張でもなんでもなかった。石油、煙草等はほとんど
日本に産出しないか、技術が低位で未だ欧米のそれに対抗し得ざる
か、または特許の保護法を獲得できないため、日本製品はまったく
競争力をもつことはできなかったのである。『満鉄調査資料』でと
くに注目することは、同書の第六章にあたるところで、満洲におけ
る欧米の文化事業（教会、学校、病院、養老院、孤児院等の展開を見

よ)を具体的に統括したことである。同書は欧米の文化事業の影響力の拡大の下で、その経済勢力が目覚ましく地域に浸透していることの危険性を指摘した。日本の強さはなんと云っても、満鉄の経営とその他数多くの経済システムの確立により、満洲において確固とした地盤を構築したことである。しかしこの日本の優位は、一九二〇年代における外国人の文化事業の目覚ましい浸透によってゆらぎ始めている。だとするならば、日本の弱点はなんだったのだろうか。それは中国の民族運動の昂揚を宥和する目的をもった文化事業の取り組みがほとんど皆無に近かったことである。つまり欧米の優秀な文化力に比肩しうる文化力を持たなかったことである。

いきおい満洲における日本の文化力の貧困は強力な文化事業と連繫した米英の在満勢力の前に頭を下げなければならなかった。『ロンドンタイムズ』は米英の対中国貿易と文化力の関係をつぎのように述べている。「米国の対支貿易に関する苦心経営は決して一朝一夕の事ではない。一九一二年から一五年にかけて及び其以後も続いて米国は支那に於ける地位と勢力とを得んがために全力を注いだ。殊に教育事業に対しては最も力を用い巨額の資金を投じて多数の高級学校を建設し支那人の子弟教育に尽瘁した、其結果支那人子弟の米国を徳とするもの出でて米支親善に導き延いて米支貿易に影響を及すに至った。英国の対支貿易は之と同様でない。英国の政策は精神的事業と経済界の事業との間に何の連絡もないけれども米国の伝

道師と商人とは団結力が甚だ強い」。この「ロンドンタイムズ」の一言を以てしても、米英の対中国文化事業の蔭に政治的あるいは経済的な意図があることは明白であった。『満鉄調査資料』は、終わりなき国際経済戦の時代を直視し、文化力をどう形成するかという提案を行っていたのである。

このようにみてくるならば、この『満鉄調査資料』の結論第八章の提言の重要性はいよいよ明らかになってくるのである。第八章は四つの提言から構成されている。即ち第一は「商人の自覚と商品の改造」、第二は「邦商発展助長機関の完備」、第三は「病院の設備」、第四は「小学校の設備」である。第三、第四の課題はそれぞれ在満日本人の健康の保障のための病院設備拡充と、子供の教育問題解決の前提としての地域の小学校設備改革である。これらは在留日本人の切実な生活上の問題解決についての提言であり、ここで改めて論ずる必要はないであろう。第八章の提言の核心はまさに、第一と第二の課題にあった。まず第一の課題について、『満鉄調査資料』は言う。

邦商品の改造は……日本独特の商品を造るに在る、即ち資本の集中と技術の熟練とに依り品質の向上と価格の低廉とを計ることとは勿論露支人の風俗習慣趣味嗜好を克く研究し之に適するものを造らなければならない、(同、二三七頁)

『満鉄調査資料』の真のねらいは、いわゆる一攫千金を夢みる多くの在満日本人実業家や商人たちが、関東庁や満鉄の保護と依存をたち切れない現状を打破するとともに、資本集中とイノベーションによる商品の品質向上と価格の低下を実現しようとするものであった。『満鉄調査資料』の第三の提言は、前述したごとき、革新を実現し、市場の競争に勝ち抜いてゆく新しい実業家や商人の大量進出を助長する決定的な条件としての、満蒙の各地域における経済情報機関の完備である。これについて『満鉄調査資料』の言うところを聞こう。

現在に於ては日本より商品を取揃へて取寄せるには矢張り四五箇月を要しつつある。之れ日本の商人が対満貿易に熱心ならざると便宜なる取次機関なきとのために依る、……故に満洲に於て需要ある商品を直ちに日本内地より取寄せ得るが如き機関の設立は此の有力なる武器（内地と満洲間の距離の近いこと―筆者注）を活用するの所以である。従つて又対満貿易品の指導改善に任せしめ得る機関（対満貿易機関―筆者注）ともなる。……現在満洲に於ける日本商品陳列館は哈爾濱^{ハルビン}、長春、鉄嶺、安東、錦洲、奉天（最近開設の運びに至る）六箇所である。……在満邦商品陳列館が其の間に何等組織の統一及連絡なく或は満鉄の経営に係り或は日露協会の経営に係り或は商業会議所の兼営に

係り甚だしきに至つては営利会社の経営する所にして而も財源裕ならずそれ自身充分なる活躍をなし得ざると且つは商品陳列館なるものゝ重要さが一般に看過せられつゝあるに依る。商品陳列館なるものが商品を陳列紹介し、貿易実務を補助し経済調査に任じ及び其他商業助長に資する凡ゆる事務を行うものにして商業発展の爲め重要な役目を有し殊に満洲の如き露支人を相手とし外商の競争場裡に伍してその販路の拡張を計る場合には之が完備の必要切なるは少しく心ある者に対して殆ど事新しく論ずるの必要を認めない所であろう（同、二四〇―二四二頁）

大変長い引用となつたが、右の提案の要点はこうである。満洲から英米独等に商品を注文すれば、着荷までには半年近くを要する。これに比較すると日本と満洲の距離が近いために、日本はこの点において大きな強みを有している。しかし現状では日本より商品を輸入する場合にも、やはり四、五ヶ月を要している。つまりは日滿貿易の現状は極めて非効率であるということである。これでは日本は激烈な国際間の経済競争に生き残れるはずがない。そう考えるならば、日本人実業家の自覚と、対満貿易機関の完備が、満洲経済再生の第一歩であることは明白である。この『満鉄調査資料』の見解のすぐれた点は、商業貿易政策に結びついた情報・文化事業の役割を積極的に評価していたことである。煎じつめるならば、『満鉄調査

資料』の方向は、前述した大連市の新市制に基づく市会議員選挙で当選した新議員のグループによる、大連勸業博開催の要求と相通じるものがあつたといえるだろう。両者ともに満蒙における国際経済戦の激化に対する強い危機意識を共有していたのみならず、在満日本人実業家や商人の満鉄依存や、政商的企業家による政財界指導を時代後れと評価していた。つまり両者は「遊蕩の気分の瀰漫している現状」を打破するためには、政財界が今こそ本当の意味での競争力を備えた実業家を育成する一方、博覧会や商品陳列館のごとき情報・文化システムを確立することを国家的戦略として位置付けることが必要であるとする認識において一致していたのである。

私は満鉄調査課の佐田弘治郎と菊田直次が執筆した秘密文書に現れた満蒙認識を中心として考察を進めてきた。しかし佐田と菊田の満蒙観は、満洲の政治、経済についての深い知識をもとにして、極めてアグレッシブな問題が積極的に論じられている。中でも将来の世界大戦の準備として、「支那の一部を軍事的に占領」するという主張は、当時の満鉄調査課内部のかくされた満蒙認識を反映したものととして極めて注目に値する。もとより私はそれをもつて一九二〇年代における満鉄調査課の満蒙認識であると断定するつもりはない。しかし一九二〇年代満洲における国際経済戦の激化が、満鉄調査課内部に尖鋭な満蒙認識をもたらしていたことだけはたしかであろう。

三 博覧会と日中共生の夢

一九二五年五月十五日、上海の内外綿株式会社上海工場でストライキが勃発、さらに三十日、上海の共同租界で内外綿紡績工場の労働者虐殺に抗議する学生二千人余と、英国警官隊が衝突し、警官隊の発砲によって十一人が死亡した。この「五・三〇事件」を機として、抗日運動が遼原の火のごとく全中国に波及した。それから僅か、七十二日後の八月十日、大連勸業博覧会が大連市で開幕した。会期は八月十日から九月十七日までであった。会期中の有料入場者数は七十一万九千六百二十六人、無料入場者数七万四千五百五十三人、合計七十九万三千七百七十八人である。人口約二十一万人の大連市が主催した博覧会としては、観客動員は成功したというべきだろう。この実績は関東庁、満鉄、大連市はもとより、日本政府、各道府県、朝鮮総督府、台湾総督府の絶大な支援の結果であるとともに、植民地で最初に開催された勸業博覧会に対する当時の日本人の心境が明瞭に読みとれる。赤い夕陽の満洲とモダン都市大連に憧れ、博覧会期間中に帝国各地から汽船や鉄道で大連を訪れた人々は、後述するように決して少なくはなかつたのである。

ところで大連勸業博のメインパビリオンとしての四つの本館の内容は出品数総計七万九千七百九十三点で、出品人員は三千四百六人に及んだ。当初博覧会事務所の予定では出品総数五千点としていた

から、約十六倍という好成績となった。しかし前述した抗日運動の結果、予定されていた中国側のパビリオン建設がボイコットされるに至った。上海、青島、天津等のパビリオン設置計画の中止により、特設館計画の前途は憂慮されたが、満鉄、内地の各府県、朝鮮総督府、台湾総督府の支援を得て、とにかく博覧会開場までに十九の特設館が建てられた。そこに窺えるのは、博覧会事務所の事務的未熟さと準備不足といった単純なことではなく、むしろ中国全土に漲っていた激烈な抗日感情と怒りに対する認識不足である。

大連勸業博の会場は第一会場（図6）と第二会場とにわかれている（図7）。第一会場の正門を入ると、第一号、第二号、第三号の各本館が洋式の大噴水池を囲んで整然と配置されていた。第四号本館は朝鮮館、台湾館を越えた東門附近に建てられていた（図8）。正門横には関東庁と大連市役所が共同して出展した陸軍軍用飛行機があつた。観衆は近代文明のシンボルである飛行機を初めて間近に見たに違いない。彼等は空間を飛翔する飛行機の役割に改めて目を向けることによって、時代感覚をぐつと広げたことであろう。しかし陸軍にとって軍用飛行機の出品は、観衆の好奇心を利用しつつ、軍部と市民を結合させる絶好の機会となつた。博覧会が演出した遊びの空間づくりのなかで、特筆に値するものは、お伽の国のパノラマである。場内には海や山河、村落、水車、鉄橋等を配し、その間を縫って模型の汽車が走っていた。このほか実演館、水族館、移動

動物園、曲馬団、中国芝居の無料小屋、海女館、菊人形、迷路、人体変化術や尻尾人間等のキツチュな見世物等の遊興施設も揃えられていた。第一会場と第二会場はエスカレーターで結ばれていた。第二会場は既設の満鉄経営による電気遊園の敷地を利用していた。第二会場でひときわ目をひくパビリオンは、博覧会随一の満鉄特設館である（図10）。三十六メートルの塔が聳える同館は白亜洋風の外観をもっていた。同館の最大の目玉は、夜間屋上から放射されるサーチライトであつた。サーチライトの光芒は第一会場に輝く数万の電飾を圧する壮観を呈した。満鉄社長安廣伴一郎は、大連勸業博開催当日、つぎのような祝辞を述べた。

本会ノ開催ヤ満蒙ノ文化産業ノ開発ヲ資ケ延イテ国交ノ親善、
民生ノ福祉ヲ増進スルモノ豈鮮少ナランヤ誠ニ慶賀欣歎ニ勝ヘ
サルナリ。⁽¹⁾

安廣社長はこの祝辞にもあるように、満鉄特設館の展示の特徴は「満蒙ノ文化産業ノ開発」において、満鉄の果たしている巨大な役割を視覚化して展示したことにある。まさに「リトル満洲」とも言うべき同館は、一階中央に巨大な満蒙の模型盤が飾られていた。盤上には汽車、汽船が電気仕掛けでいっせいに動いていた。炭鉱、製鉄、農林のギャラリーでは、パノラマ式光線によって、満鉄の産業



図 6 大連勸業博覧会第一会場全景（『大連勸業博覧会誌』大連勸業博覧会協賛会、1926年）

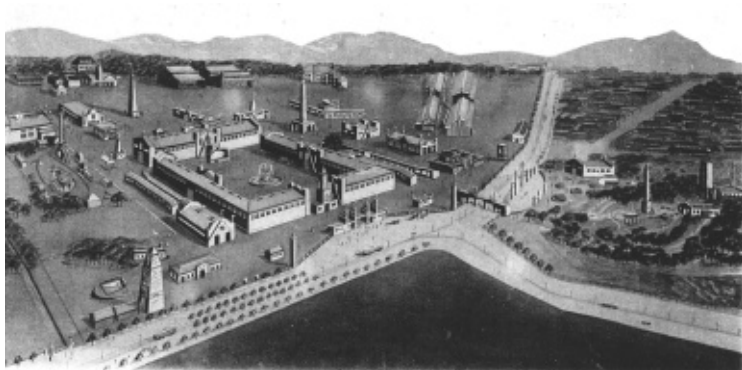


図 7 大連勸業博覧会全景（絵葉書より）



図 8 大連勸業博覧会第一号本館前（右）・第四号本館（左）（『大連勸業博覧会誌』大連勸業博覧会協賛会、1926年）

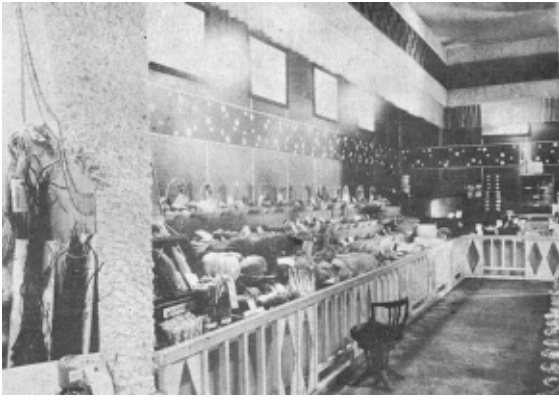


図9 関東庁出品（『大連勸業博覧会誌』大連勸業博覧会協賛会、1926年）

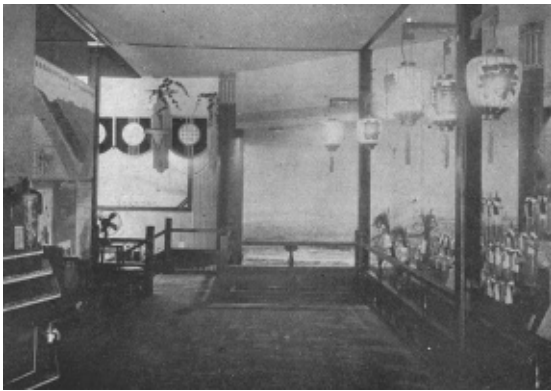


図10 大連勸業博覧会満鉄特設館外観（上）・内部（下）（『大連勸業博覧会誌』大連勸業博覧会協賛会、1926年）

開発の成果が示されていた。二階には農務課出品の植物種子、果実、穀物等がずらりと展示されていた。三階は撫順炭鉱のギャラリーになっていた。一九二五年までに同炭鉱は一日平均一万五千トン、年総量約五百万トンの出炭能力をもつことができた。撫順炭は日本及び海外向けの輸出炭として注目が集まっていた。当時大連港は撫順炭と、大豆、大豆油、豆粕等の積出し港として空前の活況を誇っていた。¹³⁾ 石炭は大豆と並んで満洲を代表するブランド商品であった。満鉄特設館はとくにこのギャラリーを重要視して、撫順炭鉱および撫順市街のパノラマ大模型を置き、露天掘りの炭鉱の採鉱、運搬等

のあらゆる作業をわかりやすく示した。満鉄特設館の展示で最も費用をかけたものは、電気作業所出品の配電装置であった。これは世界的な大連市の配電システムを模型としたものである。大連市内に新築中の電気作業所の模型には、博覧会の一部や電車が配置され、逆光線を用いてそのシルエットが浮き立つように工夫されていた。参考までに一九二三年度末における満鉄による大連市への電力供給の実態を記しておこう。

大正十二年度来の発電供給口数二万六千余、十燭光換算灯数四



図11 大連ヤマトホテル円形大広場とヤマトホテル（絵葉書）



図12 大連勸業博覧会第一会場夜景（『大連勸業博覧会誌』大連勸業博覧会協賛会、1926年）

十七万灯を算し、又同年度中に供給したる電力は千五百五十万五千馬力時なり。更に会社は大連市内の交通機関として電気鉄道を敷設するの計画を立て、明治四十二年九月より営業を開始し……現在軌条延長六万四千二百四米を有す。大正十二年度に於ける客貨取扱数は乗車人員二千百十五万九千人、貨車六万五千屯なり。

（南滿洲鉄道株式会社調査課編『滿鉄の現況』一九二五年、三六頁）。

右の数字からもこの時期、大連市街の膨張ならびに産業の発達に

ともない、満鉄による電力供給の増加が著しかったことが垣間みられるだろう。すでに述べたように第一会場のメインパビリオン群は、第一号から第四号までの各本館であった。第一号本館は大連、関東州そして満洲、中国各地から集められた商品が展示されていた。しかし、第二号、第三号の両本館は、日本から輸出された商品が展示されていた。第四号本館には農林、鉱産製品と工具類が陳列されていた。博覧会事務所にとって喜ぶべきことは、出品申込み締切り後も、続々と内地の各会社、各商店等から出品申込みの連絡があったことである。このため事務所は第二号、第三号両本館の展示面積を増加させ、これら内地から出品された商品をここに収容した。相ついで到着した内地製商品は、そのいずれも理屈抜きにデザイン、品質共に優秀であった。これは一周遅れの「一等国」日本の産業も、第一次世界大戦期から一九二〇年代にかけての時期、欧米列強にキヤッチ・アップするために、日本経済が自立化を実現していった結果であった。例えばこの時期三井は染料輸入の途絶を契機として化学工業部門に進出（三井染料設立の発端）し、また東洋レーヨンをも創立した。しかし概ね財閥は高度の技術開発を必要とし、しかも市場の見通しも不安定な領域への進出はのぞまず、安全確実な分野にかぎって進出した。大戦期以降の経済の「自立化」に貢献したのは、むしろ急速に工場工業化する中小資本であった。彼等は国産化に対する要請をバネとして、優秀な国産消費財を消費者につぎつぎ

と提供した。その一部を紹介すると、豊田自動織機、ナショナルやシャープが製造したラジオ、味の素、仁丹、森永ミルクキャラメル、江崎利一のグリコ、雪印の乳製品、三島海雲のカルピス、御木本の真珠、ヤンマー・ディーゼル、田熊式汽罐、杉本京太の邦文タイプライター、久村清太の帝国人造絹糸、石井茂吉の写真植字機、パイロット万年筆、西尾正左衛門の亀の子たわし等、枚挙に暇がない。また表1に見るように、これらのデザイン的にも優秀で量産可能な新商品群が大連勸業博に大量に出品され、その多くが名誉賞金牌、一等賞金牌などを受賞した（表1参照）。

これらの企業家たちは、二十世紀初頭の後進的経済構造を止揚し、先どりをふくむ経済構造の合理化を実現したパイオニアの実業家であった。このことを比喩的にしめすものは、今日テレビのスポンサーとして著名な企業の大部分が、まさにこれらのパイオニア的企業のなんらかの系譜の上になつていゝという事実であろう。それはともかくとして、内地の輸出商品が多く受賞したことは、第二号第三号両本館の展示に期待していた博覧会事務所の予想通りの結果となつた。かつて第一次世界大戦中の日本は、戦乱の勃発により列強が東アジアに直接介入できず、中国も革命後の内戦のため実力で日本に対抗できない状況を利用して、軍事力を背景として中国にたいする経済的支配権を一挙に拡大した。大戦中日本商品の中国やその他アジア地域への輸出が激増した。ヨーロッパからの輸入に依存して

いたアジア各地域が輸入の途絶に当たって代替品を日本に求めたことも、その傾向に拍車をかけた。当時大阪は中国や満洲を相手に値段で競争し、売るためには手段をえらばぬ貿易を行った。いわゆる「メード・イン・ジャパン」という言葉は、大阪ものに象徴される粗製濫造の安物を意味した。安かろう、悪かろうの商品の大量輸入の結果、満洲においても大阪商人の信用は低下の一途をたどつた。しかし大連勸業博に出品された高品質の国産輸出品の中から、数多くの受賞商品がでたことは、そうした過去の悪評を払拭することとなつたのである。

すでに明らかなように日本からの出品にはイノベーションの結果を反映した数多くの品質優秀な商品が存在していた。また会期中、入場者が毎日平均二万人前後を数えた。これらの事実からひとまず博覧会が成功したといつてよいだろう。つぎに博覧会の宣伝活動を見ることにしよう。一九二五年三月、大連市は博覧会の協賛会を組織し、事務所を大連商業会議所に置いた。前述したように抗日運動の台頭の結果、当然中国人観光客の減少が予想されたから、協賛会は中国側に対する宣伝活動を見合わせた。協賛会は宣伝活動の中心を、日本各地及び満鉄沿線、旅順、大連そして朝鮮、台湾の都市にしばつた。協賛会は、船車割引の実施を、満鉄、朝鮮総督府鉄道管理局、台湾総督府鉄道部、鉄道省、東支鉄道、京奉鐵路局等に夫々依頼した。この協賛会の依頼をうけて、鉄道省をはじめ内外の鉄道

表1 大連勸業博覧会出品審査一覧(抜粋)

名誉賞金牌	
<p>〈第一部 興行及工芸品〉</p> <p>サッポロビール アサヒビール エビスビール 東京大日本麦酒株式会社 硝子及曹達灰 東京朝日硝子株式会社 西陣織 京都西陣織物同業組合 清酒白鶴 大阪 嘉納合名会社 綿糸 綿布 大阪 福島紡績株式会社 福助足袋 大阪 福助足袋株式会社 製茶 静岡 茶業組合連合会議所 あさひ地下足袋 福岡 日本足袋株式会社</p> <p>〈第二部 農産品〉</p> <p>過燐酸石灰及硫曹肥料 東京 大日本人造肥料株式会社</p> <p>〈第三部 林産・畜産及狩猟品〉</p> <p>木材 安東 鴨緑江採木公司</p> <p>〈第五部 鉱産品〉</p> <p>銑鉄類 朝鮮 三菱製鉄会社兼二浦製鉄所 銅真鍮製板管棒類 大阪 住友合資会社伸銅所</p> <p>〈第六部 機械器具〉</p> <p>光学器械 東京 日本光学工業株式会社 理化学器械・蓄電池及医療器械・博物標本 京都 島津製作所 蓄電池 大阪 湯浅蓄電池株式会社 マリエール・鋳物製品・石油発動機及唧筒 福岡 戸畑鋳物株式会社</p>	<p>一等賞金牌</p> <p>〈第一部 工業及工芸品〉</p> <p>鳳梨缶詰 台湾 阿辻商会 味の素 大阪 鈴木商店 大阪支店 ドロップス 東京 佐久間製菓株式会社</p>

<p>ビスケット 東京 東洋製菓株式会社 森永ミルクキャラメル 東京 森永製菓株式会社 煎茶及玉露 京都 辻利兵衛／樟脳・竜腦・カット製剤 大阪 藤沢智吉 医療薬品類 東京 第一製薬株式会社 線香 和歌山 内外除虫菊株式会社 絹織物 東京 久保田清三郎 毛織物 東京 東京毛織物株式会社 友禅モスリン 東京 株式会社白石甚兵衛商店 綿糸 岡山 倉敷紡績株式会社</p> <p>〈第二部 農産品〉</p> <p>豆粕 大連 龐睦堂 過燐酸石灰 大阪 株式会社住友肥料製造所</p> <p>〈第三部 林産・畜産及狩猟品〉</p> <p>燐寸 兵庫 東洋燐寸株式会社 提灯 岐阜 尾関次七</p> <p>〈第四部 水産品〉</p> <p>乾鮑 青森 宇鉄漁業組合 再製塩 大連 東洋拓殖株式会社 大連支店 捕鯨事業及製品 大阪 東洋捕鯨株式会社</p> <p>〈第五部 鉱産品〉</p> <p>特殊鋼 東京 日本特殊鋼合資会社 満俺鉾 撫順 撫順炭鉾機械課</p> <p>〈第六部 機械器具〉</p> <p>扇風機・電気アイロン及標準型誘導電動機 東京 三菱商事株式会社大連支店 写真器械器具 東京 小西六株式会社 各種スプリング 東京 帝国発條製作所 自転車 愛知 株式会社岡本自転車自動車製作所 ヴァイオリン及マンドリン 鈴木政吉</p>
--

は、鉄道運賃の割引を実施することとなった。例えば鉄道省は「内地ヨリ鮮満地方へ朝鮮經由ニテ往復スル二十人以上ノ団体ニ対シテハ五割引大阪商船大連航路ヲ経テ往復スル二十人以上ノ団体又ハ朝鮮満洲ヲ回遊スル二十人以上ノ団体ニ対シテハ当省及満鉄ハ五割大阪商船ハ一割（学生ニ割乃至三割）引ニテ扱フ」こととした。満鉄は「一定ノ割引証引換ニ二三等普通旅客運賃ノ三割ヲ低減ス」ることとなった。汽船運賃の割引についても大連汽船、大阪商船、日本郵船、政記公司等がいずれも団体観覧者（往復）に二割から三割の割引を実施することとなった。船車割引と関連して出品人、関係役員及び一般観覧者に対して、大連市内のホテル、旅館の多くがそれぞれ宿泊料金の割引を行った。

大連勸業博覧会開幕すると、団体旅行割引で、日本人ツアーが、関東州はもとより、朝鮮、台湾、そして内地の各地から、ぞくぞくと大連市を訪れた。十九世紀後半だったらとうてい満洲旅行など高嶺の花だったと思われる人々も、玄海灘を汽船で越え、大陸を走る広軌の列車に乗って大連市を訪れた。大連市の中心には円形大広場があり、広場から放射状に十筋の道路が伸びていた。広場を囲んで美しいヨーロッパ風の壮麗な外観をもった官庁や大連ヤマトホテルが建ち並んでいた。大連市を初めて訪れた日本人見物客の多くの人々は、満洲の玄関口大連の想像以上の目覚ましい発展と、美しく整然たる町並みに、驚嘆したことだろう。例えば八月二十七日付『満洲

日日新聞』は、熊本商業会議所満鮮実業視察団の团长山田殊一（同会議所会頭）が埠頭事務所屋上から全市を展望して、大連市の発展に驚いたと報道した。博覧会開幕以来快晴に恵まれ連日、会場は大入り満員で、日ごとに観覧者が数千名ずつ増加した。六日目の十五日は最初の土曜日であったから、観覧者は午後四時すでに一万三千名を超えた。八月十七日付『満洲日日新聞』によると、奉天、遼陽、普蘭店、旅順をはじめ各地から大連を訪れる観覧者はめきめき増えて、大連市内の各旅館とも大入りとあった。博覧会ブームは大連市内の各方面に好影響をもたらしたが、その反面、市内の活動写真常設館には打撃となり、入場者が減少した。大連市は祝賀気分をもり上げるために花電車を走らせた。花電車は、新時代到来の歓びと希望を端的に表現するシンボルの一つであった。前述した夜間入場者のために博覧会会場は三十万燭光の電飾が輝き不夜城となった。市内の目抜き通りにはイルミネーションや装飾灯が飾られた。このような祝祭的要素の導入によって、博覧会に対する大連市民の関心が高まったのみならず、彼等は都市の楽しさと、観光都市としての大連の魅力を発見した。

満洲日日新聞社を先頭とする各新聞社は満洲内の支局、販売所を利用して、博覧会観覧ツアーを組織した。例えば満洲日日新聞社のハルビン、長春、営口各支局、奉天販売所等は積極的に観覧ツアーを新聞紙上でアピールした。八月二十日付同紙はそうした活動の一

環として、安東販売所が主催した観覧ツアーについて、つぎのように紹介した。

本社安東販売所は市民諸氏の便宜を図り今回大連博覧会の観覧団を組織し之を観博団と名付け日本文支那文両様の宣伝ピラを印刷して安東市内は勿論これを新義州及び安奉沿線に配布する所予想以上に各方面の歓迎を受け参加申込は殺到の光景であるが特に鮮人、支那人側の申込も少からざれば多分二十五日の締切までには定員の百五十名を超過すること、思ふ。加之これより先平安北道庁に於ても同様の計画を発表し公文を以て管内各郡に対し有志の参加を求め居たるも本社安東販売所が愈具体的に本計画を発表するに及び同道庁にては単独にて実行するよりも本社を大連に有する本社安東販売所の計画に参加する方を寧ろ便利とし改めて本社の計画を後援せらるゝことゝなりたる為め此の方面の参加者は相当の員数に達する見込である。

博覧会当局が博覧会に來場することを期待したのは、中国人や朝鮮人の見物客であつた。勸業博こそは民族共栄の場であると主張していた博覧会当局は、中国人による博覧会ポイコット運動に對抗するうえで、数多くの中国人や朝鮮人等に勸業博を観覧してもらいたかつたのである。したがつて彼等にとっては、安奉線沿線や平安

北道内に居住する中国人や朝鮮人からの大連勸業博申込みが少なかつたことは大きな満足であつた。協賛会は滿洲在留日本人約十八万人のみならず、中国人、朝鮮人等を大量に博覧会へ参加させるために、前述の如くジャーナリズムを利用した。しかし新聞の呼びかけだけではその効果はかぎられていた。そこで彼等は中国人の最も好む福券附入場券の発行を実施した。この結果大量の中国人が博覧会を観覧したことは事実である。即ち一等千円の福券附入場券又は一等三百円の福券附夜間入場券を購入して、第一会場に入場した中国人は約十万人に達した。同じく福券附入場券又は福券附夜間入場券を購入して第二会場に入場した中国人は約七万八千人である。

ところで博覧会の勧誘、宣伝活動の結果、日本、中国、滿洲、朝鮮等の各地から大人と小人を合わせて合計約五千人の多彩な

表2 大連勸業博覧会入場団体(抜粋)

団体名	人数合計
天津小学校生徒団体	二五
撫順高等女学校生徒	三一
奉天高等女学校生徒	四八
朝鮮總督府警察官団体	四五
松樹公字堂生徒団体	三七
青島日本中学校生徒団体	五三
鐵嶺日語学堂生徒団体	二三
旅順軍隊	二〇
東京専修商業学校	二六
長春高等女学校	四五
安東第一小学校	八〇
水師營普通学堂	一一
石川県立小松中学校	二〇
名古屋尾張商業学校	二一
公主嶺公字堂	二〇
島根県師範学校	三六
奉天医科大学	二三
中華基督教會	三三
中華民國海軍兵	六一
伏見台小学校	三七
嘉納合名会社	二五

団体客が表2に見るように博覧会に入場した。前述のように、船車、宿泊料金割引、団体割引はもとより、福券附入場券発行など様々な優待サービスが講じられた結果、前述したように大連勸業博覧会当局発表では、入場者は約八十万人に達した。

以上、協賛会の宣伝活動の結果として、大連勸業博覧会の観客の大量動員が実現したことを描いてきた。最後に観客が博覧会を見物してどのような感想をもったかを考えてみたい。橋本喜作『満洲を振出志に』（一九二五年）の七頁から八頁にあたるところに「大連博覧会見物」と題する文章がある。

此博覧会は大連開市以来の催しであるから支那、満洲、朝鮮、日本内地等の物産なり生産品が処せまきまで陳列されてあるは勿論サゾ立派なもので、日本内地ではとても見ることの出来ない程のものであらうと思つて楽しんで行つたのであるが、之れを實見してその貧弱サ加減の偉大なるものあるに驚いたのであります。實際その規模は中々大きいが陳列物は千日前（大阪市ミナミの盛り場——筆者注）あたりの一個の勸商場位に過ぎなかつた……自分の一番当てにして居つた支那の産製品などは何一つ出て居ない、朝鮮の物産といつても実につまらぬもの計りで、満洲の特産品と日本内地のものが少々陳列してあるに過ぎなかつた。……陳列品は斯くの如く非常に貧弱なものであつた

が、併し入場券は大連市が関東庁の許可を得て富籤をつけて売出したのでその売行は大層良ろしく博覧会経費以上相当に剰余金が出来たと言われて居ります。

橋本は一八七三年生まれ、同志社大学を卒業した大阪市の実業家であつた。一九二五年八月、暑中休暇をとつて、大連勸業博覧会を振り出しに、北京から朝鮮まで視察旅行を試みたのである。大連勸業博覧会の陳列についての期待が裏切られたという。こうした橋本の考えの背景にあつたのは、恐らく一九〇三年、大阪市で開催された第五回内国勸業博覧会との対比であろう。第五回勸業博覧会と大連勸業博覧会との規模を比較すると、その差は余りに歴然としていた。即ち大連勸業博覧会の本館の出品総数七万九千七百九十三点に対して、第五回内国勸業博覧会の出品総数は二十七万六千七百十九点であつた。彼が大連勸業博覧会の陳列品は「非常に貧弱なものであつた」と感想を述べたのは、ごく自然な態度であつた。また、橋本は「支那の産製品などは何一つ出て居ない」と言つて居る。大連市は中国、朝鮮関係の出品を喧伝したのに、おかしいではないか。この橋本の不満は、内地から来た見物客の気分を象徴してはいないだろうか。

橋本は大連勸業博覧会に対しては手厳しい批評をした。しかし「満洲の結論」と題した文章の中では、つぎのように柔軟な想像力を使つて、中国の将来を見通して居た。

支那人自身には今日までは目が醒めずに居ったもの、西洋人や日本人から紡績とか毛織物とかその他の電気・工業等いろいろなことを教わって来て今日となつては諸外国人以上に甘く仕事する技術を覚えて来たものが沢山に居る、是等の人々はまだまだ外国人に使われて居るが、併し一旦自覚するところあらんか諸外人はその位置を転倒して却つて支那人に使われなくてはならぬようになるまいものでもないかとも思われます。彼是れと考へ来れば実に将来恐るべき国民は支那人にして日本は今日より提携し以て真に同種同文の国民として相扶助し心より相互相抱擁し合つて行く方法を講じて行くことが最も必要であらうと思われます。(五五―五六頁)

この文章を読んでほつとさせられるのは、中国民族が一度覚醒したならば、世界の大国になるに違いないという点だ。橋本は二十世紀は日中兩國が共存共栄する時代だという認識を明らかにしている。当時は満蒙支配論が加速する真つただ中であつた。だがこれらの言説に欠けていたのは、瑞々しい想像力である。橋本は「よそ者」の目と想像力で、中国の未来を見通していたのである。

ところで協賛会による宣伝活動の区域は、満洲はもとより日本、朝鮮、台湾、中国等にまたがっていた。このため協賛会は積極的に



図13 大連勸業博覧会ポスター (『大連勸業博覧會誌』大連勸業博覧會協賛会、1926年)

記念絵葉書や博覧会勧誘のための様々なパンフレットを用意した。

たとえば『大連勸業博覧會案内』『団体観覧者船車賃割引表』『大連勸業博覧會指南』(華文)『大連案内』『大連經濟一般』『大連記念絵葉書』『江戸絵式石版鳥瞰図』『大連勸業博覧會案内図』『大連勸業博覧會観覧の栞』など枚挙にいとまがない。大連市役所は博覧會宣傳用ポスターの図案の懸賞募集を試みた。七十五点の応募図案の中から審査の結果三点が採用された。一等入選のポスターの図案は、

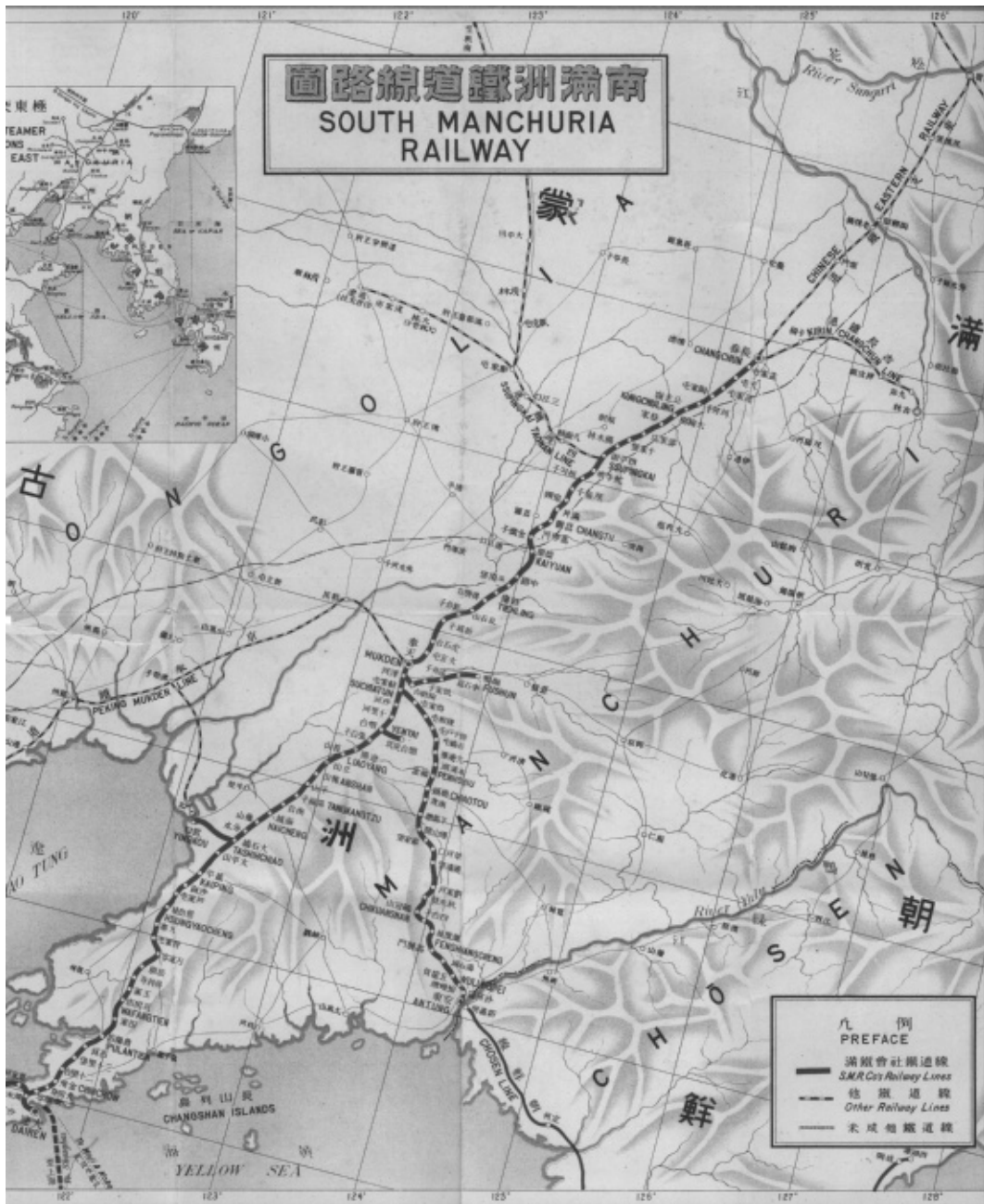


図14 南満洲鉄道線路図

ポスター上部において日中兩國国旗が交差し、背景模様には中国一般の祝慶的代表模様の双喜と鳳凰及び雲模様、麒麟、牡丹の花（中国の国花）が用いられていた。二等の図案についての説明は中国の「若々しき純真そのものを一少女を以て表はし、配するに桜花」をもってしたとある。つまり桜と少女は日中の調和統合を意味していたのである（図13）。

翻って日満間の団体旅行の歴史をつきにみておこう。満洲への団体旅行のさきがけは、一九〇六年七月、文部省と陸軍省の奨励による合同満洲修学旅行である。満洲までの船賃や、満洲内での移動と宿泊はすべて無料であり、旅費は宇品港（広島市）までの交通費、食費のみで、自己負担額は約二十五円であった。破格の優待ツアーは三週間の旅程で実施され、参加者は北海道から沖繩までの中学校以上の男子生徒と教職員（小学校教員も含む）延べ三千六百九十四名であった。¹⁵この合同満洲修学旅行は、高媛氏も指摘しているように、陸軍省の御用船の利用から宿泊施設、旅行コースの選定、戦跡案内まで、すべて軍の丸抱えの旅行であった。¹⁶端的にいえばこの合同満洲修学旅行は、日露戦争直後における戦跡見学と教職員、生徒を結びつけて、軍国主義思想を鼓舞する教育的行事であった。帝国の興亡と兵士の生死がもつとも具体的に斬り結んだ場所が、日露戦争の戦跡であった。合同満洲旅行に参加した生徒と教職員たちは、二百三高地、旅順港などを目の当たりに見た。そこには「帝国」な

るものの発見があった。その結果、彼等の心に自分のことではなく、国家にどう貢献するかという想いが空気のように拡がったに違いない。

それから十九年後の一九二五年、大連勸業博覧会を目的とした大量の日本人たちの団体ツアーが実施された。この団体観覧旅行と、業界、家族、個人等の観覧旅行は、一般的に博覧会見学と旅順戦跡訪問がセットになっていた。しかしこれらの巧みに仕組まれた遊覧旅行は、それ以前にはけっしてなかったような何物かになり、このことが団体観覧旅行や多様な観覧旅行をあたらしい団体ツアーに変えたのである。それが参加者におよぼした結果は、彼等の意識に満蒙そして朝鮮等に対する偏見と差別をつけくわえたことだった。期待に胸をふくらませた多くのツアーリストは、博覧会見学後、はるかに続く大地と一直線に幕進する大型蒸気機関車の迫力に満足しながら、旅順、奉天、ハルビン、平壤、京城等を訪ね、多彩な顔をもつ都市見学と共に各地のエキゾチックな民族文化そして満洲や朝鮮の広大な大地と美しい自然を満喫した。彼等は自由な時間をたっぷり持ったツアーリストであり、もはや一九〇六年の合同満洲修学旅行の教師や生徒等のごとき、緊張したまなざしはそこにはみられなかった。「観光」という言葉は周知のように、国の光を見ろという意味をもつ。国の光とはそこに住む民衆の生活が育んできた文化的蓄積である。大連勸業博覧会を契機としたポピュラーな大陸旅行の展開は、



図15 大連市街図（『大連地方案内』南満洲鉄道株式会社、1927年）

これまで有識有産階級によって独占されてきたアジア観光に終止符をうち、大衆自らによる「観光」の始まりとなった。しかしその「観光」の実態は、帝国の巧妙に演出した「観光」であった。¹⁷⁾

満鉄は十一月一日から行われるダイヤ改正と同時に、二つの夜行列車にせいで機性能重視の一等寝台車を連結すると発表された。八月十四日付『満洲日日新聞』によると、こ

の一等寝台車の特徴は、婦人用の洗面所、化粧室を男子便所と区別し、寝台車に新たにフット・ライトを設け、夜間の安全な歩行を可能にした。寝台内部の照明も改善され、読書する乗客の便宜が図られたほか、男子洗面所の隣にスモーキング・ルームが設けられた。

この寝台車は夜間二十四人、昼間四十八人の定員で、現行の寝台車の定員十六人の寝台に対して、八つの寝台が増加された。要するに満鉄はようやく男性のみならず女性も、夜行列車旅の楽しみが楽しめるように、モダンな一等寝台車を考案したのである。十一月一日から実施される列車ダイヤ改正は、あきらかに当時の旅客の目覚ましい増加に対応したものであった。満鉄は列車ダイヤ改正を契機として、大連―長春間を二時間半短縮して十七時間で運転し、スピード・アップを実現すると同時に、奉天、営口間などの混雑を極めている区間には列車を増発するなど、全面的な旅客サービスの向上を図った。このほか満鉄はスピード・アップした大連―長春間の列車に、初めて三等寝台車を登場させた。満鉄の革新は乗客増加という事情のためではあったが、一等乗客のみならず、三等乗客にも快適な旅行という賜物をしたのである（前掲『満洲日日新聞』八月七日）。

四 ラジオという情報装置

大連勸業博覧会内部の美術館では八月二十日より展示を改め、現代・

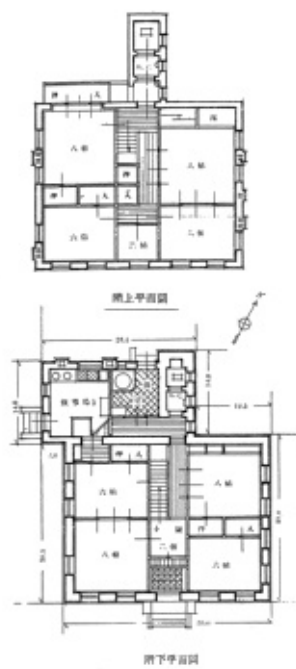
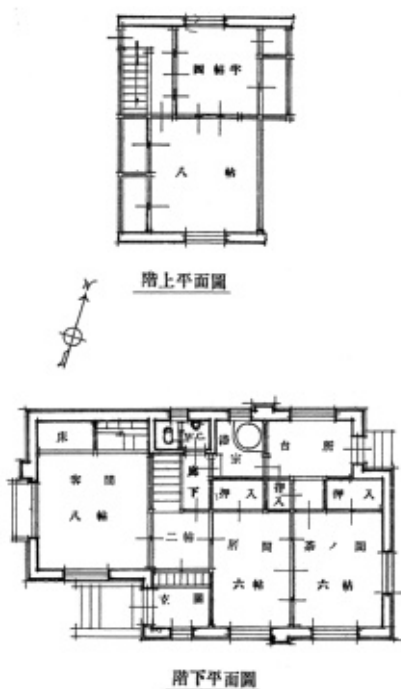


图16 郊外住宅（「郊外住宅实施图集 第一辑 城始编」满洲建筑协会、1924年）

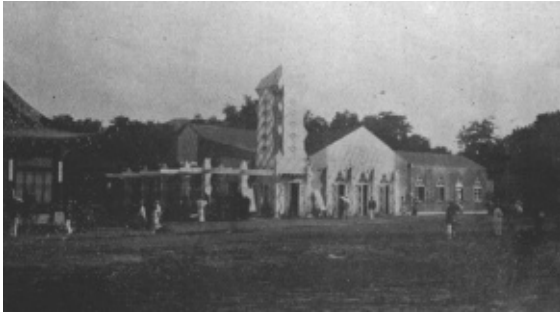


図17 大連勸業博覧会朝鮮館・台湾館（『大連勸業博覧会誌』大連勸業博覧会協賛会、1926年）

古代美術展に加えて、満洲建築協会主催による建築展覧会を開いた。この建築展覧会の目玉となった住宅模型は、俄然見物客の関心の的となった。というのは、寒冷地仕様の住宅の確保は寒冷地の大連に居住する市民にとっては、絶対に必要であったからである。応接間、食堂、浴室、炊事場等の一部実物モデル住宅には、最新型暖房器、炊事兼用の温水暖房器、バスタヴ、水洗便器等がとりつけられていた。これ以外にも実物モデル住宅には、湿度、炭酸ガス測定器など数々の新しいコンセプトにもとづく製品が配置されていたから、見物客が飛びついたのも当然であった。¹⁸ 建築展覧会が企画された背景

としては、一九二〇年代における大連都市リニューアル構想があった。まさに建築展覧会は帝国の威信をかけた都市計画への挑戦の一環であった。即ち二十世紀初頭、大連市は市営住宅、満鉄は社宅の建設で急増する住宅需要に対処したが住宅難は解消できなかった。満鉄社員だけに組合員を限定した大連共栄住宅組合は、関東庁から大連市内南山麓の土地二万坪を借用し、敷地をゾーニングして百三十五戸の庭つき戸建て住宅を建設した。この地域は大連大広場から約一キロメートルの位置にある北向きの傾斜地である。共栄住宅の特徴は浴室、台所、トイレ、暖房設備など寒冷地仕様の住宅に欠かせない部分については、差異が設けられていなかったことである。これより先一九〇八年、満鉄が大連市内に完成させた近江町社宅もまた寒冷地仕様の住宅としては、日本企業による建築においてもっとも質的に完備した低層集合住宅であった。『建築雑誌』は近江町社宅を「満洲に於ける一名物または成績のよい事業の一つ」と評価した。¹⁹ 当時近江町は、大連大広場から南にむかつて緩やかに上る丘陵地の一部にあった。共栄住宅も近江町社宅もともに大連市の中心地であった大広場までは近距離にあり、満鉄社員用住宅地としては理想的なロケーションであった。この二つの住宅建設はその後の大連市内における住宅建設に大きな影響をあたえた。ついでに書き加えると南山麓住宅地は一九〇八年満鉄の近江町社宅建設を契機として、一九一三年大連税関長官舎、一九二五年建築家横井謙介邸等

をはじめモダンな高級文化住宅が相ついで建てられた。一九二〇年代の南山麓住宅地は、大連市随一の高級文化住宅地となった。⁽²⁰⁾ 果たび話を大連勸業博の問題にもどすと、大連勸業博は第一会場に客寄せ的な要素も加味して、エキゾチックなスタイルの朝鮮・台湾の二館を建設した。朝鮮館は極彩色の鮮やかな朝鮮式宮殿スタイルであった。正面エントランス両側に天下大將軍、地下女將軍の像が彫りこまれた柱が飾られた。館内には朝鮮の代表的物産の陳列館と物産即売場が設けられた。台湾館は南国をイメージした白亜洋風の瀟洒な建物であった。内部は全体に亜熱帯植物のバナナ、パイナップル、ウーロン茶の木等が数多く植えこまれていた。館内では台湾特産物が展示、即売された。同館のベランダに設けられた喫茶店では、ウーロン茶の宣伝が行われたほか、時々バナナデーが催されて観客を盛んに誘惑した。『満洲日日新聞』は八月十日付記事で両館をとりあげ、「異国的情趣」溢れた「一番の呼物」のパビリオンであると賞賛した。

『満洲日日新聞』は古き良き李朝文化と伝統の香る国、あるいはエキゾチックな常夏の島といったイメージで、朝鮮・台湾をアピールした。あえて言うならば、ここでは帝国主義支配との関係で、朝鮮・台湾に対する収奪や差別の深化、経済の植民地化にともなう朝鮮・台湾の産業構造の転換等はすべて捨象されていた。こうした『満洲日日新聞』がしめした朝鮮・台湾へのまなざしはおそらく、

当時の満洲在留日本人の大半の者が共有していたとみておさしつかえないだろう。大連勸業博はこうした在留日本人が好む「異国情趣」の物語を編む装置として、朝鮮館、台湾館を建設した。もともとこうした博覧会における「異国情趣」の演出はすでに一九二二年三月十日東京府が主催した平和記念東京博覧会などでも試みられ、そこでは第二会場に李朝時代の宮殿を模した朝鮮館が建てられていた。博覧会における植民地パビリオンは植民地支配のイメージがいに混淆され、歪曲されて操作されていくのかを検証する恰好の実例である。

ところで博覧会開催を契機に、当時最新の文明の利器といわれたラジオ放送が登場したことは見物客のみならず、大連市民を驚かせた。第二会場の音楽堂内に設置されたラジオはすこぶる高声であり、音楽堂周辺に集まった見物客ばかりでなく、ラジオ放送を基点とする約一万九千八百平方メートルの圏内にある入場者たちにも明瞭に聴取された。また第一会場の第一本館前の音楽堂にもラジオ設備が備えられたが、これは音楽堂周辺の小群集のほかには聴取することは困難であった。放送開始とともに会場に鳴りひびくラジオは、博覧会場随一の人気を集めた。社団法人東京放送局は一九二五年七月ラジオ放送を開始したが、これは我が国で最初に誕生したラジオ放送局であった。東京放送局による放送開始は、米国で世界最初の放送局が放送を開始したときから数えて、僅か五年後である。当時

「聴取無線電話」と称したラジオは、通信大臣の監督下に置かれ、高価であったラジオ受信機の購入も全て、政府の許可が必要であった（米国製コーデル四球一形ラジオ百二十円）。このためラジオ放送は金持ちとか超エリートの人たちしか聴くことは事実上不可能であった。なぜ関東庁通信局の監督下にあった大連放送局が、東京、名古屋、大阪の各放送局開局について、いち早く八月九日に放送を開始したのだろうか。それは一言にして言うならば、日本政府・関東庁が大連市の地政学的地位を重視したからに他ならない。つまり前述の如く一九二〇年代における満蒙は、日米英独等の列強による国際資本戦の主要な舞台であった。未だ目鼻もつきそうにない状況にある国際経済戦のヘゲモニーを日本が握るためには、当面の経済活動の行き詰まりを、情報・文化の力で打開することが早道であった。ここにおいてまず日本が満蒙の玄関口たる大連市に放送局をいち早く開局したことは当然であったといわなければならない。実に大連放送局の開局は、満蒙に対する文化支配の拠点が着実に形成されたことの明確な表現であった。満鉄が満蒙の経済・社会的支配の核心であるとするならば、大連放送局は満蒙の情報・文化支配の強力な橋頭堡の構築を意味した。

満蒙（大連）におけるラジオの役割を端的に示したものは、関東庁および大連警察署による大連放送局の放送プログラムに対する事前検閲の開始である。八月十五日付『満洲日日新聞』は関東庁と大

連警察署がラジオ番組の事前検閲について、鳩首協議中であると、放送管理の舞台裏の事情を暴露した。

大連にもラヂオ熱が高くなつて新聞のニュースや知名士の講演から賑やかな音楽まで毎日三回宛放送される昨日はどのような今日のはどうのと市中の噂はラヂオで持ち切つているが左様に期待されているラヂオも大連ではまだ始まつた計りの事として放送の材料も豊富であり公安風俗に触れるような事もないが今後長い間には或いは新聞ニュースでも警察署または検察局において掲載禁止されたものがアナウンサーに依りて放送され折角の掲載禁止も一方において発表され或は思想問題に関する講演などにして事も事過激に亘り当然禁止すべき箇所がそのまゝ放送されて公安維持に影響を及ぼしたり或ひは講演、流行唄等にしても親や子供に聴かしてならぬ風紀上の如何はしい事まで放送されるなど無きにしてもあらずこれ等は独りアナウンサーの放送原稿と口の亡らしよう一つで或は善となり悪ともなるので大連署では公安風俗を取締り安寧秩序を保持する上に早くも此点に着目しこのラヂオも新聞雑誌やフィルムと同様行く行くは検閲する必要あるものとし先づ転ばぬ先の杖頼みと関東庁に対しこれが取締方法について照会する処あつたが関東庁でもまたこれを認め折角放送局の意見を聴取中であれば近々の中に大連署にも受話

機が取り付けられラヂオを聴きながら検閲出来るか或いは放送局と協議の上何等かの方法によつて検閲出来るようになる事であらうと

検閲にあえて反対しないということは、関東庁、警察側の取締りに従うことである。『満洲日日新聞』がこうした姿勢をとらざるをえないということは、ラヂオ放送開始当初から思想的にも社会的にも、大連市の市民的自由は大きく制限をうけていたというべきであろう。当時大連市内のラヂオ放送の普及はどうであつたらうか。大連放送局開局期のリスナーは、僅か四百名程度であつた。八月十四日付『満洲日日新聞』は、開局当時のラヂオ放送についてつぎのように述べていた。

大連のラヂオは放送開始以来非常な好成绩で現在の状態は東京放送局の仮放送時代よりも良好である……満鉄社員倶楽部の如きでは毎晩五六十名も集まつて聴いて居る

この記事からも垣間見られるように、大連市内のリスナーは、満鉄・社員倶楽部等を利用できるエリート社員か、家庭用ラヂオ受信機を所有する満鉄の高級管理職員、高級軍人、高級官僚乃至はブルジョア家庭の人々に限られていた。別の言い方をすれば庶民は大連

表3 大連勸業博覧会会場で上映された活動写真フィルム一覧
(在郷軍人会大連市連合会分会主催)

フィルム題名	巻数
体操	一
野山砲射撃及煙幕射撃	一
生理衛生血液之部	一
村の栄光(兵卒の美談)	四
久遠の光(靖国神社)	三
騎兵障碍飛越の研究(高速度撮影)	一
バスケットボールと角力(軍隊式)	一
新式歩兵小隊攻撃戦闘	三
軍用鳩	一
野砲兵学校の弾幕射撃	一
入営より除隊まで	一
陸軍士官学校	三
線画(眼の錯覚)	二
全日本スキー選手予選大会	一
剣道大会(満鉄道場高野範士御前活躍等)	二
騎兵	二

勸業博の会場に登場したラヂオ放送を聴取することで、はじめて文明の利器ラヂオの恩恵にあずかることができたのである。

八月十四日付『満洲日日新聞』は、東京放送局の人気者であつた女子アナの声に憧れた一リスナーが、彼女へ結婚を申しこんだと報道した。また同紙は八月十六日付紙面で博覧会に設置されている高声ラヂオの夜間放送開始の電波は、市内電車が絶えず運転中にもかかわらず、市内中央に位置するヤマトホテルの玄関に立っている人

にも充分聞きとれたと伝えた。満洲日日新聞社は自社後援の大連埠頭―星ヶ浦海水浴場間遊覧船の船内に、ラジオを設置することで、市民のラジオ熱にこたえた。市民はラジオ受信機こそ無かったが、新聞の「今晚のラジオ」欄を見て、茶の間の会話をはずませた。とにかく新聞は一斉にラジオについての様々なエピソードを報道したので、市民のラジオへの憧憬を増大させた。新聞も放送局に多彩な情報を伝えることによって、市民の意識を啓発するという指導者意識を満足させた。

ところで大連勸業博の会場では、ラジオの場合と同様活動写真が娯楽を求める入場者を引きつけた。大連勸業博で上映された活動写真、暑い夏の素敵なレジャーと、時局について啓蒙する時事映画という二つの側面を持っていた。八月十日付『満洲日日新聞』は、その年七月をもって五周年を迎えた満蒙文化協会による野外映写について以下のように述べている。

……大連勸業博覧会協賛施設としては第二会場に特別野外映写場を作り隔日に満蒙並に内地事情紹介活動写真を映写し一般無料観覧に供する……

ここで簡単に満蒙文化協会について紹介しておこう。同協会は「満蒙文化的開發と在住民共同の福利を増進せしめる」ために設立

された。一九二〇年七月、創立以来日本語で書かれた機関誌『満蒙』並びに、中国語の機関誌『東北文化月報』発行のほか、満蒙事情研究会、講演会、展覧会、日華交歓会、視察旅行等の諸事業を目覚ましく推進してきた。同会の総裁は、初代満鉄総裁の後藤新平であった。後藤新平は満鉄総裁退職後、一九一八年、寺内内閣の外相として、シベリア出兵の外交を指導した。一九二三年、東京市長在任中、後藤はソビエト政府極東代表ヨッフエと日ソ私的予備交渉を行い、日ソ国交回復をはかった。満蒙文化協会の副総裁には奉天軍閥の首領であった張作霖が就任していた。当時日本は張を育成し満洲支配の傀儡にしようとし、張もこれを利用しつつ、勢力を拡大して安徽派、直隸派につぐ第三の軍閥となった。彼は東三省（奉天、黒竜江、吉林各省）を支配し、その領土は仏独両国を合わせたほど廣大となった。彼は一九二七年陸海軍大元帥になって北京政府を掌握した。後藤と張はそれぞれ異なった政治的思惑を抱いていたが、一九二五年大連勸業博開催の時期には、満蒙文化協会の指導者として共に手を握っていたのである。満蒙文化協会は大連勸業博を、宣伝活動のための最大の機会と判断し、活動写真のイベントを提供したのである。又同協会は博覧会協賛事業として、協会内で満蒙文化資料展覧会を開催した。同展覧会は第一室、産業研究資料、第二室、土俗研究資料、第三室、中国特産、第四室、交通、通信資料の各室に分かれており、いずれも中国、満蒙の特色ある資料を展示した。

在郷軍人会大連市連合会分会においても、陸軍省提供のフィルムを用意し、八月二十四日から二十五日まで、大連勸業博の会場で活動写真のイベントを開催した。上映されたフィルムは表3のとおりである。

当時大連在留日本人の大半の者は、満蒙における我が国の既得権益を活用し、満蒙開発により積極的に取り組むべきだと考えていた。つまり中国人の旅順、大連回収運動を牽制し、米英による満蒙にたいする過剰な介入を排除するには、関東軍の武力を背景にした対外強硬政策の振興が必要だということである。在郷軍人会大連市連合会分会の活動写真イベントは、日本軍の戦争準備や軍国主義の鼓吹といったフィルムを映写することにより、大連市民の国家主義的な気分を一層昂揚させることを狙ったものであった。もちろん様々なジャンルのフィルムの映写は、見せ物として十分に見物客を引きつけた。その意味では見物客は特別野外映写場で映像を楽しんでいるうちに、自然と軍隊の巨大な力のイメージを心に刻みこんだのである。

しかし活動写真イベントの見物客は、日本人だけではなく、中国人もいたと考えるのが自然であろう。なぜなら大連勸業博には、日本人の観衆約四十九万人が入場したのみならず、約二十三万人の中国人も入場していたからである。もし仮に少数であったとしても、中国人が前述した活動写真イベントに参加し、靖国神社の記録や、

旅順開城の実況そして、軍隊の演習や兵營の記録等のフィルムを観て、どう思ったであろうか。日清・日露の二つの戦争で旅順や大連に居住していた中国農民は、殺傷されたり戦火で家を失ったりした。例えば日清戦争期の外務大臣陸奥宗光の回想録『蹇蹇録』⁽¹⁾には、一八九四年、中国軍港旅順で、日本軍により多数の中国人が殺害されたとある。

大連勸業博のパビリオン建設の実態や、数々のイベントを子細に考察していくならば、大連勸業博の当初の目的であった「日華共存共栄論の具体化」は、もろくも崩れ、真実の博覧会のキーワードは「満蒙の日本化」であったことが明瞭となる。では大連勸業博とは一体なんであったのだろうか。「大アジア主義」の第一歩は日本の満蒙併呑であるが、まさに大連勸業博は満蒙併呑の文化的装置であったということになるだろう。

凡例

- 一、用字・用語は、原則として常用漢字、現代仮名づかいを用いた。
- 二、年号は原則として、西暦とした。

注

- (1) 大連市役所編『大連勸業博覧会誌』大連勸業博覧会協賛会、一九二六、二二二頁。

- (2) 前掲書、三頁。
- (3) 前掲書、四―五頁。
- (4) 柳沢遊『シリーズ 日本近代からの問い ② 日本人の植民地経験——大連日本人商工業者の歴史——』青木書店、一九九九、一八七頁。
- (5) 一九一〇年二月九日付『東京朝日新聞』は同年五月関東州都督府大島義昌から阿片業者に指名を受けた石本鑽太郎について、以下の如く述べている。
- 「関東州第一の成金とうたわれ、郷里土佐から二度も代議士に選出されたのも阿片専売のお蔭だといわれたし、其後、阿片局（宏済善堂）が関東州の直接指導を受けるようになってからも、当事者はさかんに馳走を受けたものだ」。相生由太郎は一九〇七年満鉄の大連埠頭事務所長に就任し、大連埠頭の荷役作業の満鉄直営化を推進した。一九〇九年同所長を辞した後、福昌公司を創設した。一九一一年、相生は南満洲一帯にわたり猛威を振るったペストの蔓延を憂い、あわせて中国人労働者に対する統制を合理化するため、関東都督府と満鉄の認可を経て、碧山荘を建てた。碧山荘は大連市東山町にあり中国人港湾労働者一万六千人が収容された。大連を訪れた夏目漱石は、「満韓ところどころ」の中で、相生にふれている。ここで注意しなければならないことは、碧山荘では中国人港湾労働者たちの不満と不平をおさえる手段として、療養所、浴場及び劇場、園芸、角力興行等の福祉、慰安施設の他、暖房施設としてオンドルが設けられた点である。また阿片販売や阿片吸引場も設けられていた（松原一枝『大連ダンスホールの夜』中公文庫、一九九八、一六七頁）。
- (6) 『満蒙産業政策確立ニ関スル意見書』大連商業会議所、一九二六、一―三頁。
- (7) 宝性確成『満洲財界の鳥瞰』大阪屋号書店、一九二二、一六八頁。
- (8) 前掲書、附録二二―二四頁。
- (9) 同書については左記論文を参照されたい。
- 拙稿「公娼制度の定着と婦人救済運動（二十世紀初頭大連において）」『環』第一〇巻、二〇〇二。
- (10) 山田武吉「満蒙改造の根本的大策 附・東北亜細亜政策」『日本及日本人』政教社、一九二六、一―二二頁。
- (11) 『満鉄の現況』南満洲鉄道株式会社、一九二五。
- (12) 前掲『大連勸業博覧会誌』三一〇頁。
- (13) 前掲『満鉄の現況』二六―三五頁。
- (14) 二十世紀初頭、日本企業のイノベーションとバイオニア的企業家との関連については、拙著『独占と兵器生産——リベラリズムの経済構造——』勁草書房、一九七一を参照されたい。
- (15) 高媛「満洲修学旅行の誕生」『彷彿月刊』8 特集満洲のツーリズム 二〇〇三年八月号、一〇頁。
- (16) 前掲論文、一三頁。
- (17) 日中間の観光旅行といえ、西原和海氏も言うように、「在満の中国人や日本人たちの日本への旅行」の実態は未だ解明されていない（西原和海×高媛「対談」観光の満洲」前掲『彷彿月刊』8『七頁所収』。日本、中国、台湾、朝鮮相互間の、民衆レベルにおける

観光旅行及び観光事業を構造化した研究については、他日を期したい。

(18) 『満洲日日新聞』一九二五年八月二十五日。

(19) 西澤泰彦「南満洲鉄道社宅群——大連など——曠野の中のユーロピア」片木篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、二〇〇〇所収、五五六頁、五六五頁。

(20) 西澤泰彦『図説大連都市物語』河出書房新社、一九九九、八八—八九頁。南山麓の住宅街の中に、河本大作邸もあった。河本は一九二八年、関東軍高級参謀在任中、張作霖爆殺事件を仕掛けた。彼は停職を命じられたが事件の首謀者としての刑事責任を問われないまま、一九三二年、満鉄理事に就任し、家族を呼び寄せて南山麓に居住した。

(21) 事件の歴史的ドキュメントとして、つぎの著書がある。井上晴樹『旅順虐殺事件』筑摩書房、一九九五。

あとがき

本稿の骨子は二〇〇四年九月十三日から十五日の三日間、中国長春市で開催された国際日本文化研究センター・中国吉林省社会科学院共催による「近代中国東北部文化国際シンポジウム」（近代中国東北部文化国際検討会）で私が行った「大連勸業博覧会の歴史的考察」と題した研究発表に依拠している。国際シンポジウム終了後、かなり時間を経過したが、その研究報告集は遂に刊行されなかった。私はやむなく『日本研究』第38集に拙稿を投稿した。

長春国際シンポジウムで私が研究発表を行ったとき、我が国の勸業

博覧会研究にとって欠くことのできない、植民地の最初の勸業博覧会としての大連勸業博覧会の研究は皆無であった。そうした研究の雰囲気は博覧会研究の閉じられた状況に通じるものであった。専ら内地の勸業博覧会とは何かという課題が、一般的研究関心であった。しかし最近、植民地博覧会についての研究のみならず、旧植民地文化史研究の領域では著しく状況が変わってきたようである。

私は山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』（風響社、二〇〇八）、西澤泰彦『日本植民地建築論』（名古屋大学出版会、二〇〇八）を読みながらそのことを実感している。我が国の植民地文化史研究の大きな方向は、ようやく植民地時代についてのタブー意識や政治的イデオロギー意識の過剰を脱し、開かれた国際的視点からの再評価に向かつているようである。だがさらに問うならば、勸業博覧会は中国にどのような影響を与えたのだろうか。徐蘇斌・青木信夫は「清末における勸業博覧会の受容と都市空間の再編過程——直隸工芸総局の成立事情と日本——」（稲賀繁美編『伝統工芸再考 京のうちそと——過去発掘・現状分析・将来展望——』思文閣出版、二〇〇七）において、一九〇三年開催の第五回内国勸業博覧会を中国がどのように受容したかについて一九〇六年に開催された天津勸業博覧会と、一九〇九年に開かれた成都勸工場事例をあげて考察している。この課題については我が国はもとより、中国においてもほとんど未開拓であったといつてよいだろう。徐氏と青木氏の研究意識の背後には、歴史についてのタブー意識に対する新世代に独自の「違和感」がみられる。

最後にもう一つ、前述した研究者と同様の問題意識を共有した、古川隆久「紀元二千六百年奉祝記念事業をめぐる政治過程」（『史學雜

誌』九月号、一九九四）、同『皇紀・万博・オリンピック——皇室ブランドと経済発展——』（中公新書、一九九八）は、近代日本における万国博覧会構想とは何であったかを明らかにしている。伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』（吉川弘文館、二〇〇八）も近代日本における万国博覧会構想の系譜に関連して、一九〇五年に提起された日本大博覧会構想（中止）と、一九一〇年、日英博覧会の関連性を問うている。万国博覧会は戦前のみならず、現代における重要な国家的イベントである。万国博覧会とは何なのか。振り返るべき時期であろう。

思えば私の博覧会研究が世に問われたのは『大正文化』（講談社現代新書、一九八〇）においてであった。これは我が国で一九一四年に開催された東京大正博覧会の問題を考察し、ひいては我が国近代の国際的同時に明らかにする意図を持ってなされた。私はここではつきりと従来のアカデミズム史学や教条的マルクス主義の方法を信奉する人々の学説を批判した。それだけに当然のことながら、多くの反批判・反撥に直面した。一方、私の方法に積極的な支持を寄せてくれた若い人々も多かった。海外の学界からもプリンストン大学教授、故マリアス・B・ジャンセン、ハーヴァード大学名誉教授アルバート・M・クレイグ、ウィーン大学教授セップ・リンハルト、東北師範大学教授呂元明、北京外国語大学教授嚴安生（二〇〇六年より大手前大学教授）等をはじめ多くの研究者の支持が寄せられた。最近ではニューヨーク大学教授H・ハルトウーニアン『近代による超克——戦間期日本の歴史・文化・共同体——』上下、梅森直之訳（岩波書店、二〇〇七）が『大正文化』を参照している。

それはともかくとして、若い世代が博覧会や旧植民地文化史研究の

領域で考えていることを、私もさらに別の側面から考えてみたいと思っている。二〇〇七年、私はハーヴァード大学教授栗山茂久氏とともに、『博覧の論理』と題した小さな実験的映像作品をつくり、国際日本文化研究センターのセミナーで発表した。この作品で私は一九〇三年に開催された第五回内国勸業博覧会を映像化するとどう表現することができるだろうかと考えたのである。こうした新しい課題について考えると、いろいろ新しい着想が生まれてくるのだが、このあとがきではそこまでふれる必要はないだろう。

拙稿がなるにあたって協力と助言を頂いた国際日本文化研究センター共同研究「近代中国東北部（旧満洲）文化に関する総合研究」（二〇〇一—二〇〇三）に感謝している。共同研究責任者の劉建輝准教授、鈴木貞美教授、稲賀繁美教授は、共同研究のみならず、大連市のフィールドワークや資料調査等でも、惜しめない助言と支援を寄せられ、これが大いに助けとなった。最後に中国長春市における国際シンポジウムに対して、研究を発表する機会を与えて頂いたことに感謝する。

古丁における翻訳

——その思想的変遷をさぐる

はじめに

「満洲国」の文化や文学について数多くの学者が様々な視点から研究に取り組んできたが、資料収集の困難などが原因で、「満洲国」文学、とりわけ「満人」⁽¹⁾文学の研究はまだ資料紹介のレベルに止まっている。文学作品の翻訳についても、これまでふれられてはきた⁽²⁾が、テキストに立ち入っての詳細な検討を行ったものは、まだ見あたらない。「満洲国」という特別な歴史空間の中で、翻訳は特別な意味を持ったはずであり、その検証を通して、翻訳自体の意義を超えて「満洲国」の植民地文化政策に対する「満人」のリアクションが見えてくると考えられる。ゆえに、本論文は「満洲国」の「満人」作家の代表と見なされていた古丁（一九一四—一九六四）⁽³⁾の日本語作品の翻訳について、その動機、方法等を日本語原文と対照し

梅 定 娥

ながら考察する。それによつて、「愛国抗日作家」とも、政治上「反動的な作家」とも評価されてきた古丁の思想の変遷を明らかにしたい。

本論に入る前に古丁の生い立ちについて簡単に紹介しておきたい。なぜなら、そこに彼の対日感情の土台が見えるからである。

古丁の父親は他の大多数の関内（山海関の南）からの移民と同じように山東省から長春に住居を移した。長春で商売をしてそこそこの金持ちになり、若い女性を買って後妻にして、五十歳の年に長男すなわち古丁を得る。

古丁の生まれた前の年、つまり一九一三年に長春駅が築かれ、その後、世界一速い特急列車アジア号が長春を走るようになる。当時の中国の東北地方では、最大の都市は遼寧省の奉天（現在の瀋陽市）で、二番目の都市は吉林省の中心都市吉林市であった。長春は吉林

省のごく普通の小さな町であるが、地方政府は満鉄の土地買いに抵抗した。しかし、満鉄は色々な方法を使って土地を買いとめ、その附属地を近代的な町として建設する。関東軍に守られた満鉄の附属地は中国の中の日本国として、地元の法律等とは一切関係がない。そこで長春市は地元の住民が住む昔ながらの町と日本人が生活する近代的な附属地という対照的な二つのエリアを持つ町となった。

満鉄は附属地の中で中国人の子供向けの公学堂を開いた。地元の住民は自分の子供をそこに送りたいが、古丁も親に長春の満鉄附属地にある長春公学堂に送られていった。幼い古丁は大人たちの満鉄の土地買いに対する不満を聞きながら、毎日昔ながらの自宅のある町から公園、高級ホテルなどが揃った近代的な町に通い、その対照を毎日目にしたはずである。公学堂では近代的な教育を受け、日本語も覚えさせられ、卒業した。古丁は、続いて大都市の奉天にある南満中学堂に進学する。南満中学堂は、満鉄が満洲に設立した二つの中学校のうちの一つで、そこに入学できる学生は豊かな家庭経済と優秀な人材という条件を満たさなければならない。それゆえ、この制服を身に纏う学生は誇り高く、また憧れられる存在である。ここで古丁はさらに日本語を上達させ、夏目漱石（二八六七—一九一六）や石川啄木（二八八六—一九二二）を読み、日本文化や文学に親しんでいった。その時、彼は啄木の短歌の翻訳を試みたという。南満中学堂を卒業した古丁は、地元の東北大学教育系に入る。当時

の東北大学には中国共産党の地下組織があり、大学内で左翼思想の勉強会や活動が盛んに行われていた。古丁はその影響を受けたと考えられる。

一年後の一九三一年九月に満洲事変が起こり、奉天は関東軍に占領され、東北大学の学生は勉強の継続ができなくなり、学長の張学良の後について北平に亡命する。

東北地方が日本に占領されたことによって、中国全土で抗日救国運動の嵐が巻き起こる。故郷を追われて北平に亡命してきた東北大学の学生がその抗日運動の重要な力となる。大学を失った彼等は最初は、北京大学や清華大学等の聴講生になったりした。その中には改めて北平の大学に入学する人もいる。古丁（当時筆名突微）は、そのような学生の一人である。一九三二年九月古丁は改めて北京大学に入学し、一九三三年左翼作家聯盟北方部に加入する。⁵⁾

以上が北京大学に入学するまでの古丁の簡単な経歴である。注目してもらいたいのは古丁の日本に対する感情である。すなわち、満鉄の学校で教育を受けた彼は、日本に対して親しみを持つ反面、関東軍の満洲占領によって反感も持った。このような愛と恨みの織り交ざった対日感情が「満洲国」での古丁の行動を貫くことになる。

古丁は日本語作品の翻訳を生進行っていた。時期によってその翻訳は北平左翼作家聯盟時代、「満洲国」時代、中華人民共和国時代という三つの段階に分けて考えることが出来る（次頁の表参照）。本

論文は主に「満洲国」時代の古丁の翻訳を対象とする。「満洲国」以前のものにはふれるものの、「満洲国」以後のものは省くことにする。また、「満洲国」での翻訳は、全体的に見れば左翼傾向的なもの、いわゆる純文学的なもの、時局的なもの、という三つに分類することができる。それに応じて、「満洲国」での古丁の翻訳を第一段階（一九三七年）、第二段階（一九三八年～一九四一年）、第三段階（一九四二年～一九四五年）という三つの段階に分けて、それぞれ考察する。

一 北平時代の翻訳

中国の左翼作家聯盟は、ソ連のラップ（ロシア・プロレタリア作家聯盟）と日本のナップ（全日本無産者芸術連盟）の影響を受け、一九二五年に成立した革命文学国際局（国際革命作家聯盟）の支部として一九三〇年三月二日に上海で成立した。その中に中国共産党の「党団」が設置され、その外部組織として、共産党の革命活動に呼応して活動するものである。沈端先（一九〇〇—一九九五）、魯迅（一八八一—一九三六）などがその常務委員に選ばれる。一九三〇年九月、中国左翼作家聯盟北方部が北平大学で成立した。一九三三年六月に、北方部の常務委員の改選により、加入して間もない古丁は組織部長に選ばれ、北方部の機関誌の編輯などにかかわりながら翻訳や創作に従事する。この時期、古丁は朴能著「味方——民族主義

を蹴る——」、岩藤雪夫著「紙幣乾燥室の女工」、古川荘一郎著「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」を翻訳した。次はそれらについて検討する。

1 「味方——民族主義を蹴る——」

一九三三年五月に古丁は日本の『プロレタリア文学』一九三二年九月号に発表された在日朝鮮人作家朴能著「味方——民族主義を蹴る——」を翻訳して北方部の機関誌の一つ『文学雑誌』第二号（一九三三年五月）に発表した。土地を取り上げられ、日本に流れ込んだ朝鮮農民朴能文が、高槻の山元農場に来て、安い賃金で雇われ、地主が小作から取り上げた水田を耕す。しかし、間もなく彼は手当てなしに解雇される。地主は耕鋤機を導入するために約束を破ったのである。成文は、「生まれおちてから、至る所で、日本人から受けた、侮辱、迫圧が、日本に来てからいっそう強く感じるようになった」彼は「すべての日本人を憎んだ。軍人や官吏は直接の抑圧者、雇主は直接の搾取者、労働者は直接の競争者として、みんなじぶんらを虐める敵だ」と思っている。怒りをぶつけるところがなくて、成文は途方に暮れる。そこへ日本人の農民組合員が訪ねてくる。彼らは、

「俺らには、日本人朝鮮人の区別がねえ。あるのは、労働者と

表 古丁の翻訳作品

中華人民共和国時代	「満洲国」時代										北平時代					時期		
<p>『生活在海上的人们』／『海に生くる人々』</p>	<p>『箱根风云录』／『箱根風雲録』</p>	<p>『鲁迅著書解題』／『鲁迅著書解題』</p>	<p>『悲哀的玩具』／『悲しき玩具』</p>	<p>『狂人日記』／『狂人日記』</p>	<p>『一夜』／『一夜』</p>	<p>『心』／『心』</p>	<p>『井原西鶴』／『井原西鶴』</p>	<p>『阿忒萊・蒲灵蒲』／『アッタレーア・プリンケプス』</p>	<p>『梦谈』／『夢がたり』</p>	<p>『堂信再来一杯』／『ボーイ、ビールをもう一杯』</p>	<p>『学生与社会』／『学窓と社会』</p>	<p>『米英侵略东亚史』／『米英東亜侵略史』</p>	<p>『歼灭而已』／『殲滅せんのみ』</p>	<p>『宫本武藏』(水の巻・優曇華)(一〜四)</p>	<p>『现代日本文学史略』</p>	<p>『在艺术理论中的列宁主义的斗争／芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争』</p>	<p>『你们不是日本人、是兄弟!』／『味方』</p>	<p>タイトル／原題</p>
<p>葉山嘉樹</p>	<p>楠田清</p>	<p>増田渉・胡風等</p>	<p>石川啄木</p>	<p>ゴーグリ</p>	<p>夏目漱石</p>	<p>武者小路実篤</p>	<p>ガルシン</p>	<p>モーパッサン</p>	<p>中島健蔵</p>	<p>大川周明</p>	<p>高村光太郎</p>	<p>吉川英治</p>	<p>片岡良一</p>	<p>古川荘一郎</p>	<p>岩藤雪夫</p>	<p>森山啓</p>	<p>朴能</p>	<p>原作者</p>
<p>上海訳文出版社</p>	<p>中央電影局東北電影搬製片廠</p>	<p>『明明』魯迅記念特集</p>	<p>『明明』第二卷第三期</p>	<p>『明明』第二卷第四期</p>	<p>『芸文志』第一号</p>	<p>満日文化協会</p>	<p>『芸文志』第三号</p>	<p>『訳叢』 芸文書房</p>	<p>芸文書房</p>	<p>芸文書房</p>	<p>『芸文志』第七号</p>	<p>『芸文志』第十号</p>	<p>『芸文志』第十号</p>	<p>『水流』第二卷第一期 北平水流社</p>	<p>『芸文雜誌』第三・四号合併号 西北書局</p>	<p>『文学雜誌』第二号 西北書局</p>	<p>収録誌／出版社</p>	
<p>一九七九</p>	<p>一九五四</p>	<p>一九三七・十一</p>	<p>一九三七・十二</p>	<p>一九三八・一</p>	<p>一九三九・六</p>	<p>一九三九・十</p>	<p>一九四〇・六</p>	<p>一九四一・十</p>	<p>一九四一・十二</p>	<p>一九四二・四</p>	<p>一九四四・五</p>	<p>一九四四・八</p>	<p>一九三三・七</p>	<p>一九三三・七</p>	<p>一九三三・五</p>	<p>刊行年月</p>		
<p>映画台本</p>			<p>後『訳叢』に収録</p>				<p>日本語からの重訳</p>		<p>『奏凱歌而後已』特輯</p>	<p>実物は確認されていない</p>			<p>実物は確認されていない</p>			<p>備考</p>		

資本家、貧農と地主だ。ところで、あんたらにも俺らにも共同の敵は山元の野郎だ……」「俺ら貧農とお前さんらとは、言わば、兄弟分だからな……」⁽⁶⁾

と話して聞かせる。成文は、その言葉に感激し、

「兄弟!?……」成文は、邪魔立をする民族主義をぐつと抑えて叫んだ「お前さんら、日本人じゃねえ。兄弟だ……」⁽⁷⁾

以上が、この小説の大体の内容である。中国語の翻訳文の末尾に「一九三二年『普羅文学』九月号」とあるが、日本の『プロレタリア文学』九月号の「原稿募集」に「八月号に発表された銘君の『万歳』も本号にのせられた朴君の『味方』も、共に文新宛に送られた投稿の中から選ばれた作品である」⁽⁸⁾と書いてある。つまり、作者の朴能は日本文壇で知られる作家ではなかった。

このような無名の作家の作品を、なぜ古丁は選んで翻訳したのか。理由は民族を超えてプロレタリア階級の連帯を訴えるという小説のモチーフにあると思われる。中国左翼作家聯盟はそもそも国際革命作家聯盟の支部として作られたものであり、当然のこととして国際無産者連帯の考え方に立つ。例えば、『文学雑誌』の創刊号（一九三三年四月）に、建地著の脚本『命令…退却！第二道防線！』が掲

載されている。

舞台は上海戦争を背景に、国民党十九路軍の「傷兵病院」と日本軍の捕虜を收容する「戦時捕虜拘留所」の間のところに設定されている。「日本鬼子」と、上海抗日戦を支持しない南京政府を恨む二人の傷兵が、上海駐在の日本軍の反乱について話す。そこへ、日本兵捕虜の谷黒が語る。日本兵が日本軍閥に騙されて中国に来てしまったことを悟り、反乱したのだ、とその経緯を語る。そして、傷兵も日本軍捕虜も「日本帝国主义を打倒する!」「中日兵士連合せよ!」等のスローガンを叫ぶようになる。また、赤軍の捕虜となった経験を持つ傷兵の口を借りて、共産党の赤軍の親切さが語られる。傷兵たちは、南京国民党政府の退却命令を拒否して自ら抵抗する、というところで幕が下ろされる。

以上のように、この脚本には二つのモチーフがある。一つは、反帝国主义侵略戦争である。この場合は兵士が誤解をなくし、国境を越えて連合する必要がある。もう一つは共産党擁護である。この二つのモチーフはつまり中国左翼作家聯盟北方部の機関誌『文学雑誌』のモチーフである。

「你们不是日本人、是兄弟!」を掲載した『文学雑誌』第二号の「編後」は、この小説について以下のように述べている。

『你们不是日本人、是兄弟!』は朝鮮人の作品である。被压迫

朝鮮人の文学は、あまり中国に紹介されていない。しかも、これは狭隘な民族主義を力強く批判した作品である。(『你们不是日本人、是兄弟！』系朝鮮人的作品。被压迫的朝鮮人的文学、介绍到中国来的很少、而这篇又是有力的批判了狭义的、民族主义。)⁽⁹⁾

と高く評価している。すなわち、この翻訳作品が採用された理由は、朝鮮人文学紹介と狭隘な民族主義の批判にある。古丁は国際プロレタリア革命の思想に呼応してこの作品を翻訳したのである。

他方、翻訳者の古丁は小説の主人公の朴成文と相似した経歴を持つことも見逃せない。日本の占領によって大学を失い、故郷を追われたこと。更に一九三二年故郷は「満洲国」に変わり、「外国」となってしまったこと。亡命者の古丁は、土地を取り上げられ、朝鮮半島を追われた朴成文と同病相憐れむ関係であろう。そして、彼らの共通した敵は日本帝国主義であり、日本の無産者階級ではない。日本の無産者階級はむしろ兄弟である。古丁の狭隘な民族主義を蹴飛ばす精神には、長春公学堂と南満中学堂で培われた日本への親しみがあつたとも考えられる。

言い換えれば、古丁は、日本帝国主義の侵略に反対すると同時に、日本に親しみを持つ。その「親日」の感情を基礎に日本の無産階級の連帯感情が受け入れやすくなる、と考えられる。

その翻訳の方法は基本的に直訳であるが、そのタイトルの翻訳には違う工夫も見られる。「味方——民族主義を蹴る——」のほうが抽象的で理論っぽい。それに比べて、朴成文の感激した一言「你们不是日本人、是兄弟！」を抜き出して題名にしたほうが、感情が強く出されており、生き生きとして説得力がある。

2 「紙幣乾燥室の女工」

これも『文学雑誌』(第三・四号合併号 一九三三年七月)に発表されたものである。岩藤雪夫(一九〇二—一九八九)の原文は一九三二年五月号の『改造』に発表されていた。

女工お道が組合員になる経緯を語る小説である。お道は父親治平と母親の美津とともに内閣印刷局で働いている。治平が鉄や印刷器のローラーを洗う苛性ソーダの池に落ち、煮魚のような死を遂げた後、紙幣乾燥室で働く美津は肺病で倒れ、同じ紙幣乾燥室に勤めるお道も血を吐くようになる。お道は母親の医療費と薬代などのために、紙幣を盗んだことを、紙幣乾燥室長の宮本に気づかれる。宮本が彼女をエサにしようとした時、お道は怒り出し、組合員の庄司らに従ってメーデーのデモ隊に加わる。

資産階級に搾取、圧迫され、労働者は死んだり、病気になるってから首になったりする運命を辿らなければならない。その運命を逃れようとするれば労働組合に入るしかないというモチーフが表現されて

いる。

この小説は、どうして翻訳されたのか。まず、その時の社会背景を見てみる。一九二九年十月、ニューヨーク株式市場の暴落に始まった世界恐慌の影響が中国駐在外国企業及び中国民族企業に及び、生糸、紡績、マツチ、タバコ等の工場が相次いで休業するようになる。おびただしい数の女工が給料を得られず、生活が継続できなくなる。そこで、左翼作家聯盟北方部の上級機関の中国共産党河北省委が、各工場で女工の闘争を組織する。したがって工場が集中した天津では女工闘争が盛んになる。その中には天津恒源紗廠の労働者の休業に反対する闘争が勝利を収めた。

このような情勢の中で、共産党の外部組織に当たる左翼作家聯盟には、女工闘争に呼応した行動が求められる。左翼作家聯盟北方部の組織部長として古丁はもちろんその方針に従って積極的に行動する。彼は、「紙幣乾燥室の女工」を翻訳すると同時に、左翼作家聯盟北方部の関係雑誌『氷流』の第二巻第一期（北平氷流社 一九三三年七月）に「貴重な経験——天津恒源紗廠労働者の闘争（宝貴的経験——天津恒源紗廠工人的闘争）」という詩を発表した。それは天津恒源紗廠女工の反休業闘争の勝利を謳い、闘争経験をまとめた作品である。「紙幣乾燥室の女工」は、中国女工の闘いを応援するために翻訳されたと思われる。では、徐突微は如何にこの作品を翻訳したのか。テキストに立ち入って検討する。

岩藤雪夫の原作には伏字の「×」が多いが、中国語の翻訳文では「×」がほとんど消えている。日本プロレタリア文学では、政府の厳しい検閲を逃れるために、出版社が引っかけりそうなことばをあらかじめ「×」等の符号で隠したりする。これが伏せ字である。日本の読者は日本社会の状況を知っているから、上下のコンテクストから伏せ字のかなりの部分を解説することができて小説内容の理解には、それほど支障はないらしい。しかし、日本のプロレタリア運動にまったく知識のない中国の普通の読者にとっては、「×」は謎にしか見えない。そのため、中国語翻訳文に伏せ字が出せないのは当然のことである。ただ、その伏せ字の部分が翻訳者に正しく解説されたかどうかは問題となる。

「紙幣乾燥室の女工」は、一九八五年十一月『日本プロレタリア文学集・十「文藝戦線」作家集・（二）」に収録される際、「著者による伏字復元が行なわれた」^⑩。古丁の翻訳とそれを比べて、満鉄の学校教育を受けて日本文学に詳しいと思われる若き古丁の日本プロレタリア文学の解説能力を検討する。以下の例は、原文の後ろの括弧の中に岩藤が書き直したことばである。

① 『文句いわずに辛抱しろい、へこたれて××ができるかい、』

（革命）

「別説閑話、忍耐着吧！先畏縮下去、能革命么？」

② 幾百人の労働者が××きただらうか。(倒れて)
不知道要累死了几百个劳动者。

③ 母親の美津もそうだった。父親と一緒に四年つとめて××つちまったのだ。(首にな)

「母親的美津、也是这种办法。和父亲一起做了四年工、就长别了。」

④ 「あれで、労働者を××通せたら、お目にかからねえや……」
(騙し)

「好容易把工人凑到一块、人家上司也瞧不见、白打功……」

⑤ 「××××××って私は好きで××××××生れたんじゃありません、生れて見たら××だったんです……」(印刷局女工 女工に女工)

「印刷局女工什么咧、我并不是得意当女工才生为女工、生下来有的时候、是人啊……」

⑥ 「(省略) 毎朝ああして××××の銅像の前まで行って××××××くるんです……」(楠正成 忠君愛国を誓って)

「每天早晨那么样到××××的铜像前面、行个礼回来。」

⑦ 「オイ、又きてるぜ、門前の××、門内の白色倫理だ。」(私服)

「喂、又来了。门前的守卫、门内的白色伦理教程！」

⑧ 「種はつきねえ××××××……無理もないさ。この印刷局

は××××時代は全組織オウに近かつたんだからな」(*****)
劳農党)

「操心？那也真不怪他！因为这个印刷局在××××时代、工人全都是组织里的。」

⑨ 「へッ、××××××××××××、よしみんな歩けッ！」(私服のやつらに体当りだ)

「嘿、他敢捕吗？他妈的要捕一块去！」⁽¹¹⁾

以上の例を全体的に見れば、「×」はたいてい文字に直されたが、そのまま残されたものもある。残されたのは、固有名詞である。徐突微は、具体的な内容を知らないが、固有名詞であることが分かって、そのままにしたと思われる。

「×」を文字に書き換えた場合については、合っているものと合っていないものがある。合っている場合、二つのパターンがある。

例①は原文と全く合致している。「革命」思想に燃えた徐突微はこのことばを間違えることがないだろう。例②「累死」は「疲れきって死ぬ」の意味で、「倒れる」の意味とぴったりするわけではないが、意味は通じる。

正しくない場合はいくつものパターンに分かれる。例③「長別」(長く別れる、つまり死別)は母親と父親の間のこととなるが、「首になる」は母親と工場側の問題である。このずれは文脈の読み間違

いとことばの問題と考えられる。例④の「好容易把工人湊到一块」（やっと労働者に集まってもらった）と「労働者を騙し通せたら」は意味が全然違う。これは前後のコンテキストからは読み取りにくいので、古丁は自分の理解で適当に当てたとと思われる。例⑤の「印刷局女工」と「女工」はあっているが、最後の「人」は「女工」とずれている。お道は女工という呼び方に反感を持つ。安い賃金で働き、肺病に罹って、首になつたら売春婦になる、という女工の運命に抵抗していると思われる。「女工」を「人（人間）」に書き換えると、「女工」は「人間」と対立概念となり、非人間的なものとなる。それによって、原文のお道の言いたいことがいつそうはつきりさせられ、ブルジョワとプロレタリアとの圧迫と被圧迫、搾取と被搾取の矛盾がもつとはつきりと読み取れる。例⑥の「行个礼回来」（礼をしてから帰る）と「忠君愛国を誓って」とは意味の重さが違う。「忠君愛国を誓う」は、修養団の「修養」の内容で、プロレタリア階級思想と正反対のものである。この一言で工場側の勧めた修養団と労働組合の鋭い対立が分かる。「礼をしてから帰る」としてしまつては、労働者運動を厳しく取り締まる社会背景がそれほど明確にならないし、お道の修養団から組合へと転向することの正しさと難しさが弱くなる。従つて、小説の説得力も弱くなる。このずれの生まれの原因は、翻訳者が日本プロレタリア運動に対抗した勢力と思想に関する知識が乏しいし、それについて調査も行っていないからである。

であると思われる。例⑦「守卫」は一つの会社や建物の安全と秩序のため警備する役目を果たす人であるが、「私服」は特別高等警察で専門に思想犯を取りしめる国家暴力機関である。この二つの性質はまったく違う。

このずれの原因としては、古丁が日本プロレタリア運動に関する情報によく通じていない、特に特別高等警察が工場の労働組合運動まで見張ることを認識していなかったことが考えられる。実は一九三二年二月、小林多喜二（一九〇三—一九三三）が特別高等警察によつて虐殺された事件は、中国左翼作家の間で大きな反響を呼び起こしていた。中国左翼作家聯盟北方部の機関誌『文学雜誌』創刊号（一九三三年四月）に張露薇（生没年不明）著「小林多喜二哀辞」、第二号に郁達夫（一八九六—一九四五）、魯迅等を発起人とする「急逝した小林遺族のための募金啓（為横死小林遺族募捐啓）」^[12]が掲載されている。古丁は特高の存在は知っていたはずだが、こうした場面にまで登場するとは思わなかったであろう。

⑧の「労働党」は固有名詞で翻訳文に××のままに残されている。これも歴史知識の欠乏からと思われる。ここの「労働党」はおそらく一九二九年十一月に結党した大山郁夫（一八八〇—一九五五）を委員長とする左翼合法政党的ことであろう。合法であるから労働者が堂々と組織に入ることができる。例⑨の「私服のやつらに体当たりだ」を「他敢捕嗎？」にするのは、完全に文脈から読み取り間違

いと考えられる。ここで面白いのは、原文にない「他妈的」という内容が加えられたことである。「他妈的」は怒りを表す時使われるぞんざいなことばで、労働者等下層社会の人がよく口にする。このことばが加わることによって日本の労働者の会話が中国の労働者の会話に変わった。実は、主人公の名前お道も「欧弥琪」(ou mi. ㄉㄨ)と音訳されて中国人っぽい名前になっている。

以上の検討を通して、「紙幣乾燥室の女工」における古丁の翻訳は①中国無産者階級革命の情勢に呼応してテキストを選んだ。②日本プロレタリア運動の歴史に関係する知識に詳しくなく、翻訳のための調査がきちんと行われなかった。③古丁は左翼青年で、革命の熱意に溢れているが、革命に対する弾圧の厳しさを十分認識していない、等三点の特徴があることがわかる。①②は、その翻訳の目的が、日本プロレタリア文学を正確に紹介することではないので、原文の背景についての調査はそれほど重要ではない、それより、中国労働者の革命闘争を応援するためのもので、中国風にアレンジすることも必要、と判断されたのかもしれない。③については革命運動が実際にこうむる弾圧の強さを認識していないから、そのための心構えも出来ない、従って、いざ逮捕されたら転向か変節する可能性が高くなる、と考えられる。これは後の古丁の逮捕と変節に繋がるかもしれない。もちろん、これは、古丁一人だけの問題ではなく、当時の左翼青年の通弊であったといえる。

3 「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」

これは左翼作家聯盟北方部の関係雑誌『水流』第二巻第一期(北平水流社 一九三三年七月)に発表された。その原文、「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」は、蔵原惟人(一九〇二—一九九二)が古川莊一郎のペンネームで、一九三一年十月に書き、一九三一年十一月号『ナップ』に発表されていた。蔵原自身が以前に書いた理論を批判したもので、その主な内容は、ソビエト共産党第十六回大会、コミンテルン執行委員会第十一回総会などの開催により、ブハーリン(二八八八—一九三八)の日和見主義的理論の基礎となった機械論、デポーリン(生没年不明)一派の観念論の弱点の徹底的な暴露、哲学におけるレーニンの段階に達した意義の闡明(せんめい)である。また、プレハーノフ(二八五六—一九一八)、ブハーリン、デポーリンに影響された日本のプロレタリア芸術理論を「新しい段階の見地から、即ち国際的・国内的プロレタリア運動の実践に於ける新しい段階の見地から、そして、また哲学に於けるレーニンの段階の見地から」批判し、止揚する。批判された蔵原の以前に書いた理論は、主に芸術と政治の関係、プロレタリア・リアリズムの問題、芸術に於ける形式と内容の関係など六点に及ぶ。その批判の目的は、日本プロレタリア芸術の理論をレーニン

的哲学段階に方向転換させることである。

翻訳の最後に「訳者附識」が付けてあるが、中には主に二つの問題が指摘されている。一つは、ソ連文学はもうすでにレーニン段階に入っている。日本も古川荘一郎のこの文章によってレーニン段階に達した。しかし、中国ではまだレーニン段階に達していない、と。

中国左翼作家聯盟はその課題の一つとして、マルクス主義の芸術理論及び批評理論を確立しようとしている。そのために、先ずソ連と日本の文芸理論を翻訳紹介する必要がある。ソ連のものはロシア語から直接翻訳されるものもあれば(例、瞿秋白(一八九九—一九三三)訳「唯物史観的芸術論」等)、日本語経由の重訳もある(例、魯迅、馮雪峰(一九〇三—一九七六)等の翻訳)。日本の場合は、青野季吉(一八九〇—一九六一)、宮本顕治(一九〇八—二〇〇七)、森山啓(一九〇四—一九九二)、本庄陸男(一九〇五—一九三九)の評論文が翻訳された。一九三二年十二月三十日、コップ(日本プロレタリア文化連盟)の成立後、中国左翼作家聯盟メンバー、日本亡命中の聶紺弩(一九〇三—一九八六)が、上田進(一九〇七—一九四七)の論文「ソ連文壇最近的理論闘争」¹³⁾を翻訳して、ソ連文壇の最新情報を紹介した。また、同じく聶紺弩が、蔵原惟人著「芸術の内容と形式」も翻訳紹介した。古丁のこの論文の翻訳は、それに続いて行われたもので、当時日本プロレタリア文学理論の発展段階についての最先端の論文と思われる。聶紺弩は亡命で日本在住であるが、古丁は北平に

いる亡命学生に過ぎない。古丁の日本プロレタリア文壇の新動向に対するすばやい反応がうかがわれる。

「訳者附識」に指摘された二つ目の問題は、批判行為は自分自身にまで及ばなければならぬ、ということである。

中国左翼作家聯盟の成立前、創造社、太陽社のメンバーと魯迅、茅盾(一八九六—一九八二)等の間で展開された「革命文学」に関する論争が長く続いていた。創造社のメンバー、特に後期創造社の李初梨(一九〇〇—一九九四)らは福本イズムから強い影響を受けたと言われる。古丁は左聯メンバーの思想傾向を把握し、それを念頭に入れながら二つ目の問題を提出したと考えられる。一学生に過ぎない古丁であるが、中国左翼革命文学理論を発展させる責務を担おうとしている。この態度は、その加入してからすぐに北方部の組織部長に選ばれる大きな理由の一つとなったであろう。

次に、この論文における古丁の翻訳について詳しく検討する。

中国左翼作家聯盟メンバーの翻訳には原文に忠実な直訳が多い。その理由としては、①直訳がいちばん簡単な方法で取りやすい。翻訳者には青年学生が多くて、知識の蓄積等の限界もある。②魯迅が直訳を提唱していた。この点について、夏目漱石著『こころ』の翻訳を分析する時詳しく論じる。③直訳した文章には原文の風格がより多く保たれ、外国ものらしい、近代的なものらしい趣がある、と三つ考えられる。直訳の短所は翻訳文が難解になることである。会

話文など短い文章が多い小説の場合は、直訳のマイナスの一面がそれほど感じられないが、論文の場合、特に長文が多い場合は、その弊害が隠せない。次に例を示しながら古丁の翻訳を分析する。

① 日本に於ける芸術理論は、これまで知らず識らずの間にプレハ
ーノフ、プーハーリン、デボーリンのメンシエヴィキ的、右翼
日和見主義的理論＋弁証法的唯物論の単なるカリカチュアーに
過ぎない。福本の極左日和見主義的理論の影響を蒙つて来た。

在日本的艺术理论、到现在、不知不觉的蒙受了浦列哈诺夫、布
哈林、德波林的门塞维克、不过是右倾机会主义底理论＋辩证
法底唯物论的单纯的漫画 (Caricature) 的宗派的极左机会主义
底理论的影响。

原文は、主語が「日本芸術理論」、述語が「蒙つてきた」、目的語
が「〳〵の影響」である。翻訳の文章は主語、述語、目的語が原文と
一致しており、この点は問題がないが、述語と目的語の間の距離、
つまり目的語の修飾語が長すぎて、文章が分かりにくい。二つか三
つの文章にしたほうが分かりやすくなる。

しかし、これほどの直訳なのに、なぜか落とされたことばがある。
それは「福本」という二つの字である。原文の「福本の極左日和見
主義的理論」は福本イズムに限っているが、「极左机会主义」とな

ると、その指す範囲が広くなる。前に触れたように、当時中国では
李初梨らのような福本イズムから影響を受けた「极左机会主义」も
あれば、共産党内部で李立三（一八九九—一九六七）のように直接
ソ連の影響を受けた「极左机会主义」もあつた。このような現状に
対応して、古丁は、対象の特定を避け、多くの人に自己批判をして
もらおうと、「福本」の二字を落とした、という可能性が考えられ
る。

② この問題と関連して文学（芸術）の党派性的問題（レーニン
『文学は×のものとならなければならない』が立っている。

和这问题关联着、有文学（艺术）的党派性的问题在站着、（列
宁·「文学必须成办党的东西」）

中国語では「站着」は「立っている」という意味ではあるが、
「遮るものをクリアするため」というニュアンスがない。ゆえに、
「問題在站着」（問題が立っている）との意味は不明瞭である。よく
意味を考えずに逐語訳的に翻訳する態度といえる。

③ 『我々は内容は卒業したから形式に努力しなければならない』
というような言葉は完全に意味を為さないのである。
（省略）这类话、是不够意思的。

「意味を為さないのである」とは、「意味がない」「無意味」を意味するが、「不够意思的」のいちばん単純な意味でも「意思が足りない」で、これは正確ではない。

④ また芸術作品を唯単に特定の階級的イデオロギーの反映であるというだけでも不十分である。

还有、只说艺术作品是单单位的阶级底意德沃洛基（观念形态）的反映也是不充分的。

訳文に、「的」「底」＝「的」が四つも連用されている。中国語文としてはくどくど洗練されていない。もとの日本語の文章も翻訳体のそれであり、当時の左翼的な風潮に満ちたもので、当時の日本の左翼理論の雰囲気古丁に伝染しているのかもしれない。

⑤ この批判＝発展は、唯最近に於ける国際的及び国内的なプロレタリア運動の実践の観点から、そしてまた哲学のレーニン的段階の観点からのみ為し得るのであって、それは決して、これらの理論によってさへ克服された一切のブルジョア的、社会民主主義的『芸術理論』（日本に於ては平林イズム、青野イズム等々）の復活をゆるすものでないばかりか、反つてそれに最後

のとどめを刺すものである、ということだ。

這批判—發展、祇从最近的国际底及国内底的普洛列塔利亚运动的实践的观点、而且、还祇从哲学的列宁底阶段的观点、才能得到・那决不允许祇要是被这些理论克服就算完事的一切布尔乔亚底、社会民主主义底「艺术理论」（在日本是平林イズム青野イズム）的复活、不仅如此、反而、要给它一个最后的致命的制止⁽¹⁴⁾。

翻訳文の傍線部は目的語「復活」の限定語としては長すぎる。しかもこの限定語の中にはさらに限定と被限定語が含まれている。ますます複雑になる。

古丁は、中国左翼文学理論をレーニン段階に突入させ、またその突入させる際に自己批判の必要性等を、古川莊一郎著「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」の翻訳を通して伝えようとしている。その翻訳の方法は直訳を取っているもので、翻訳文の中に文法に合わない言葉の使い方や機械的な逐語訳が見られる。一方、中国の現実にあわせるために、原文を書き換えた⁽¹⁵⁾りもしている。

北平時代の古丁は、「味方——民族主義を蹴る——」と「紙幣乾燥室の女工」と「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」を翻訳した。それぞれのモチーフはプロレタリア

ア国際連帯の提唱、労働者の闘い、革命文芸理論の建設で、この時期の翻訳は革命のための翻訳ともいえる。これらの作品の翻訳は、中国左翼作家聯盟の活動として行われ、その主な目的は共産党指導下にある革命運動への呼応と応援である。そのため、そのテキストの選択も翻訳もこの目的を中心に行われたことがはっきりしている。中国女工の闘いの参考にするために文戦派、岩藤雪夫の小説を翻訳しながら、中国革命文芸理論の発展を促そうとして戦旗派の蔵原惟人の論文を翻訳した。つまり、日本における党派的な対立は無視していることになる。

翻訳の方法は基本的に素朴な直訳を取っているが、中国の革命運動の現状に合わせて、テキストの内容を多少書き換えることも見られる。その翻訳のやり方から、プロレタリア革命に燃えて、中国革命、とりわけ革命文芸理論建設のために努力する古丁像が見られる。なお、この時期の翻訳からは、古丁は満鉄の小学校・中学校教育を受けたものの、日本左翼文学運動の歴史や弾圧の厳しき、徹底ぶりには十分な知識を持っていないように思われる。

二 「満洲国」時代の翻訳

一九三三年八月ごろ、中国左翼作家聯盟北方部組織部長、古丁は逮捕され、北平の中山公園で他の人といっしょに共産党を攻撃する記者会見をした。その様子が新聞で報道された。その後、古丁は故

郷の長春に戻る。「満洲国」の首都になった長春、今の新京には、新しい建物がどんどん建てられ、街中に建設ムードが漂っている。町の権力者の座に日本人が座っており、辛亥革命によって倒された清の廃帝溥儀が「満洲国」の執政となっている。新文化運動の中で痛烈に批判された四書を民衆は勉強させられており、忠、孝、節等儒教の旧道徳も提唱されている。「協和服」を纏う人が町を闊歩しており、長春はすでに「王道主義者」の町となった。

古丁の六十八歳の父親は他人と共同経営した百貨店が満洲事変によってつぶれてしまい、家族六人が不動産に頼って生活していた。古丁は早く就職して長男として一家の生計を担わなければならぬが、就職口はなかなか見つからない。名前を徐長吉と変え、公学堂時代の先生のコネに頼り、年齢を五歳も偽って、一九三三年の末ごろ漸く国務院統計処属官の職についた。¹⁵その後、一九三四年十月から三ヶ月間内閣統計局統計職員養成所聴講生として訪日した。¹⁶国務院では、古丁は公学堂時代の同級生外文(一九一〇—?)と、中東鉄道で働いた経験を持つ疑遅(一九一三—?)と親しくなり、一九三六年あたりに「芸術研究会」¹⁷を結成して、文学活動を行う。この時の古丁の心境について、疑遅がその回想録の中でこう語る。

……この溝はまさに両民族の間の溝だ。これは大和民族からくる優越感のせいだ。多くの事実はこちらを証明する。例えば、教

育の設備や商品の供給……

あれは溝ではない、格差だ。主人と奴隸、征服者と被征服者の間には、この格差があるんだ。⁽¹⁸⁾

以上の引用は古丁と外文の会話である。北平で『味方——民族主義を蹴る——』の翻訳を通して日本人労働者との連帯を謳った古丁が、「民族協和」のスローガンが掲げられている「満洲国」では、地元民族と優越感を持つ大和民族との間に「溝」を見る。一方、その親友の外文の目には、それは溝ではなく、主人と奴隸、征服者と被征服者の格差に見える。彼らは「満洲国」の中枢機構國務院統計処に勤め、いろいろな情報に触れることができるからこそ、この「溝」や「格差」がはつきり見えていたのであろう。

芸術研究会のメンバーはこのように会話を交わしたり、励ましあったりして、新聞や雑誌に文章を投稿する。しかし、それは、「創作は難しいが、発表はもつと難しい」⁽¹⁹⁾時期であった。彼らに漸くチャンスが巡ってきたのは一九三六年の後半になってからである。その時、古丁らは、弘報処が中国語の総合雑誌を出そうとしていることを知り、昔の先生の紹介で雑誌『明明』の創刊に携わるようになる。彼等は自分で資金を出さずに発表の場を得ることが出来、「方向なき方向」(「没有方向的方向」、内実は文学に「××主義」等のレッテルを張らないという意味)に向かつてひたすら「書く」と刷る」(「写

与印」)ようになる。この雑誌は一九三七年三月に総合雑誌として創刊され、第一巻第六期から純文学雑誌に変わる。一九三八年八月十九号で停刊するまでに、一九三七年十一月に魯迅逝去一周年記念の「魯迅記念特輯」、十二月「日本文学紹介特輯」など特集号を出した。古丁訳「魯迅著書解題」と石川啄木著「悲しき玩具」がそれぞれの特集号に発表された。『明明』の停刊後、古丁らは「芸文志事務会」を結成し、一九三九年六月に芸文誌『芸文志』を創刊する。『芸文志』も第三期で停刊したが、古丁訳夏目漱石著「一夜」と武者小路実篤(二八八五—一九七六)著「井原西鶴」が同誌に発表された。なお、一九三九年十月に、古丁訳夏目漱石著の長編小説『心』が満日文化協会より東方国民文庫の一冊として出される。一九四一年対米英戦争の開始に伴い、「満洲国」も戦時体制に入る。一九四二年、古丁訳大川周明(二八八六—一九五七)著『米英東亜侵略史』が単行本として芸文書房から刊行される。一九四三年十一月、満洲文芸家協会の「満語」機関誌として『芸文志』が創刊され、そこに古丁訳高村光太郎(一八八三—一九五六)の詩、吉川英治(一八九二—一九六二)著「宮本武蔵」が発表される。

このように、一九四五年八月の「満洲国」の崩壊まで、古丁は数多く文学作品を翻訳した。⁽²⁰⁾前にも述べたように、その大体の傾向から見れば、「満洲国」での古丁の翻訳は三つの段階に分けることが出来る。第一段階(一九三七年)、「魯迅著書解題」と石川啄木の

「悲しき玩具」等左翼的傾向の作品翻訳。第二段階（一九三八年～一九四一年）、夏目漱石の『心』と武者小路実篤の『井原西鶴』等文学作品の翻訳。第三段階（一九四二年～一九四五年）、大川周明著『米英東亜侵略史』と高村光太郎著『殲滅せんのみ』と吉川英治著『宮本武蔵』等時局的と思われる物の翻訳。その各段階においての翻訳に、歴史背景と政治環境とはどのような関係を持つのか、それぞれの特徴は何か、それによって古丁の思想はどのように変化したのか、次は、時間順を追ってこれらの問題を検討する。その前に、当時の「満洲国」の社会情勢と翻訳界の実状について紹介しておく必要がある。

中国東北地方は漢、満、鮮、露等二十幾つもの民族が居住している。民族間の交流を図るために、昔から通訳、翻訳の活動が行われてきている。また、中華民国時代から外国文学の翻訳も始まった。一九三二年に建国された「満洲国」が、「民族協和」をスローガンに掲げ、関内と違う文化アイデンティティ、すなわち、中国文化と違った「満洲国」文化の確立を急ぐ。文学分野においては、一九四一年三月に公布された『芸文指導要綱』は上から文化活動全般に対して官僚的な締め付けを強めるものであり、「此の国土に移植される日本文芸を経とし、原住諸民族固有の芸文を緯とし、世界文芸の粹を取り入れ織り成したる渾然独自の芸文たるべきものとす」と述べている。²¹⁾ それでも、この目標の中には「世界文芸の粹を取入

れ」との文句があるので、翻訳は、「満洲国」の政策に沿ったこととして、堂々と行うことが出来るはずである。実際、「満洲国」の政治、経済領域から日常生活まで、翻訳、通訳が活発に行われている。出版界においては、満日文化協会が「東方国民文庫」を出し、中には日本語ものと中国語ものがある。²²⁾ 文学分野も例外ではない。長谷川濬（一九〇六―一九七三）が翻訳したロシア人作家バイコフ（二八七二―一九五六）の『虎』（満洲日日新聞社 大連日日新聞社、一九四二）、『偉大なる王』（文藝春秋社、一九四二）等は日本本土で一時的ブームになった。大内隆雄（一九〇七―一九八〇）訳では、「満人」作家の短編小説集『原野』（三和書房、一九三九）『蒲公英』（三和書房、一九四〇）、古丁著『平沙』（中央公論社、一九四〇）等も日本国内で出版された。

「満人」作家にはそれぞれ日本語、英語、ロシア語に堪能な人がいて、彼らも積極的に世界各国の文学を翻訳紹介する。出版された単行本は、古丁訳の夏目漱石著『心』（満日文化協会、一九三九）のほか、山丁（一九一四―一九九五）編『近代世界詩選』（満洲図書株式会社、一九四二）、芸文志事務会編『訳叢』（芸文書房、一九四二）、李君猛（生没年不詳）訳夏目漱石の『草枕』（益智書店、一九四四）と菊池寛（二八八―一九四八）の『貞操問答』（益智書店、一九四四）等がある。また、馮雪笠（生没年不明）訳火野葦平（二九〇七―一九六〇）の『麦と兵隊』と『土と兵隊』も早くから出版された。

単行本のほかに、新聞や雑誌に発表されたものも多い。

古丁をはじめとする芸文志事務会は、「満洲国」の「満人」文学翻訳界で最も活躍したグループである。彼らは、文芸の歴史が貧弱な満洲文壇には翻訳が必要だ、日本や中華民国と比べたら、「満洲国」の翻訳はまだまだ足りない、と認識し、創作と翻訳に励む。特に、古丁は出版界に世界文学全集の翻訳出版を呼びかけ、一九四二年十一月の「大東亜文学者大会」の分科会で大東亜文化交流のために国立編訳館の設立を提言した。結局、世界文学全集の出版は実現しなかったが、その代わりに『世界名小説選』（一九四一—一九四二）が満洲図書株式会社から出版された（筆者は五号まで確認している）。国立編訳館は満日文化協会等の協力を得、準備が最後まで行われたようであるが、結局その設立が見送られた。

一九三二年「満洲国」の建国、一九三七年日中全面戦争の開始、一九四一年十二月太平洋戦争の勃発、また、日本の蒋介石政府や米英との関係の変化等、時期情勢に応じて「満洲国」で施された文化政策が変わる。この変化との関係を視野に入れつつ、古丁が翻訳したテキストの内容と傾向を分析していきたい。

（一） 第一段階（一九三七年）の翻訳

1 「魯迅著書解題」

魯迅の逝去一年後の一九三七年改造社より日本語版『大魯迅全集』（全七巻）が刊行された。それは「満洲国」にも輸出された。「満洲国」ではそれまで魯迅の作品の中国語版の輸入が禁止されていた。そのため、「満洲国」の「満人」には魯迅作品を読むチャンスがほとんどなかった。

一九三七年、古丁は『大魯迅全集』の各巻の巻末の「解題」をまとめて翻訳して「魯迅著書解題」との題名で『明明』「魯迅記念特輯号」（一九三七年十一月）に発表した。「解題」は全集の各巻の最後に載っていた文章で、執筆者には増田渉（一九〇三—一九七七）、鹿地亘（一九〇三—一九八二）、胡風（一九〇二—一九八五）、松枝茂夫（一九〇五—一九九五）、小田岳夫（一九〇〇—一九七九）などがある。そして、最後に古丁の「訳後贅記」が付けてある。

「訳後贅記」の中で、古丁は、魯迅以外の東洋作家には「全集」の刊行に値する人が何人いるだろうかと問い、魯迅を東洋のもっとも偉大な作家の一人に位置づける。また、「彼（魯迅——筆者注）は人間として一人しかいないし、彼の本は一冊しかないのだ。彼の、今日から昔へ、また昔から今日へと繰り返して論じることの目的は一つしかない、それは絶望の中から希望を見出すことだ」と魯迅の

精神をまとめる。「魯迅の著作に縁がない満洲の読者にも、これだけで魯迅のことがだいたいわかってもらえるだろう」と翻訳の目的を述べる。なお、「満洲には文学があるのか？ これは一つの鏡だ。これを以てわれわれの文学を照らそう」と言う。それは、つまり、魯迅の「絶望の中から希望を見出す」精神を学んで文学創作に励もうとの意味である。

また、魯迅の「絶望の中から希望を見出す」ことを学ぼうと言っているが、満洲の文学者にとって「絶望」とは何か。これについて「満洲国」の文化政策を検討していきたい。

「満洲国」では一九三二年九月に「治安警察法」が公布され、民衆の自由集会を禁止した。それは各地の激しくなるばかりの反日闘争を撲滅するためである。同年十月に「出版法」が發布される。その中に「満洲国」の国家組織の大綱を変革しようとする、国家存在の基礎を危うくする、外交及び軍事機密を漏洩する、国交に重大な影響を与える、あるいは破壊する、国家に対する犯罪を煽る、などに関する出版は禁止される、と規定する。つまり、日本の占領と「満洲国」を認めた上で出版活動を行わなければならないとし、いわゆる「反満」「抗日」の出版物が取り締まりの対象となる。また、「満洲国」のもう一つの重要な政策は「防共」である。一九三〇年の中国左翼作家聯盟の成立に伴い、左翼文学運動が満洲にも及んだ。一九三三年八月から「満洲国」政府系の新聞『大同報』、哈爾濱の

『国際協報』等に、左翼青年が編輯した文学欄が開設され、そこに満洲農村動乱、経済不振、階級対立、民族危機等を暴露する文章が発表される。そのため、「満洲国」政府は「黒竜江民報事件」(一九三六年)、「哈爾濱口琴社」(一九三七年)⁽²³⁾事件を起こし、厳しく取り締まった。左翼作家は蕭軍(一九〇七—一九八八)・蕭紅(一九一—一九四二)のように関内に逃げたり、金劍嘯(一九一〇—一九三六)・侯小古(一九一三—一九三七)のように殺されたりする。また、一九三七年七月の日中全面戦争の勃発によって日本本土は総力戦体制に入り、「満洲国」では左翼的、反日的言論の取締りがいつそう厳しくなる。満洲文芸界の人々は先ず命の保全を考えなければならぬ。ゆえに、「満洲国」文壇からは、進歩的な作品が姿を消してしまい、「小市民の遅れた意識にあわせた」「粗末な武俠、哀情、香艷、探偵を主題にする章回体裁の小説」が盛んになり、「文学の前進」の道を「阻害」⁽²⁴⁾してしまう。また、この風潮を助長するように、第一回盛京文芸賞が通俗文学に与えられた。⁽²⁵⁾

このような政治環境と社会状況の重圧を受け、通俗文学の跋扈する文壇の中で、新文学の発表の場は失われてしまう。満洲の新文学を志す青年たちは、日本民族との「溝」や「格差」をますます大きく感じ、「主人と奴隸」「征服者と被征服者」という意識がますます強くなっただろう。従って、彼等は「絶望」に近い状態に陥ったと考えられる。

古丁の場合には、そうした客観的な原因のほかに、個人的体験も考えられる。

最後の夢も瞬く間に脆くて破れてしまった時、私は何冊かの辞書と一部の文学史を携えてその埃まみれの都市（北平——筆者注）を離れた。……それ以来、私はほとんど絶望に陥ってしまった。アルコールの援けによって日々を送り、忘却と滅亡を求めていた。明日ということは更に思い出すことができなかつた。⁽²⁶⁾

逮捕、そして左翼革命の流れからの脱落と挫折も、古丁をさらに無力にし、絶望させる原因となるであろう。

ところが、「落ち込んで久しくなると、心身とも疲れを感じ、自ら更新を求めるようになる。それで、同じく文学を愛好する何人かの友人が偶然に集まってきて、何も大した目的も無く、ただ励ましあつて読書したり文章を書いたり」するようになる。古丁等は絶望の中から何とか希望を見出し、「淀んだ水面を破り小さな波浪を起させよう」とする。⁽²⁷⁾それは「芸術研究会」の結成と『明明』の創刊につながる。しかし、文学の道を歩み続けていくには、魯迅のような強くて希望を持った人の導きが必要である。

まとめていうと、「魯迅著書解題」を翻訳した目的として主に三つある。一つ目は、魯迅と縁のない満洲の読者に魯迅及び魯迅の著

書の内容を紹介する。二つ目は、絶望に近い満洲の文学者に魯迅をひとつの「鑑」、つまり見習うモデルや目標として提示する。三つ目は、満洲文学者及び自分自身を励ます。この三つの目的には彼の植民地統治文化政策に対する抗争、現実文壇情況に対する不満、自己更新しようとする意欲が見られる。

再び、「訳後贅記」に戻る。本文の翻訳について、古丁は、①原文の中に魯迅の作品の引用がある場合、見つけたものならそのままコピーするが、見つからなかつたものは、訳出する。②原文の中に削除したり、或いは書き替えたりしなければならないところがあれば、削除したり書き替えたりした、という二点を書いている。この二点のうち②のほうが興味深い。いったい、どこを削除して、どこを書き替えたのか。翻訳文を一九三七年改造社版『大魯迅全集』と対照しながらそれを明らかにする。

先ず気がつくのが、各巻末の「解題」に新しく加えたタイトルのことである。例えば、原書の第七巻「解題」の「書簡」というタイトルの下に、すぐに鹿地亘、山本初枝（生没年不詳）、増田渉三人の文章がある。つまり、原文では、以上の作者の文章には独立したタイトルは付けられていない。ところが、古丁の訳の中には、鹿地亘の文章に「这是鲁迅的绝笔」（これは魯迅の絶筆である）、山本初枝の文章に「全都是成办追忆的种子的东西」（すべて思い出の種になつてしまった）、増田渉の文章に「写给日本人的东西」（日本人へ）と

それぞれ新たにタイトルが付けてある。その意図は、「訳後贅記」で述べたとおり、「読みやすくするため」である。

次に、その「削除したり書き替えたりした」ものを検証する。第四卷の『隨筆・雜感集』の巻末の「解題」は胡風が書いたものである。胡風はそもそも中国左翼作家聯盟のメンバーで共産党員であった。その文章には「左翼」や「革命」等のことばが当然出てくる。しかし、古丁の訳文の中ではそれらのことばはすべて消えてしまった。その中には削除されたものもあれば、書き替えられたものもある。

以下の六つの例は中国語訳文章から完全に消えてしまっている。(それぞれ削除された理由はおそらく傍線部の文言があらわした内容にある。傍線は筆者が引いたもので、その内容は文末の括弧にコメントとして入れておく。)

- ① (一九三一年) 九月の……までは、僅かな非合法的活動に留まらなければならなかった。(満洲事変を暗示する)
- ② 反動勢力(民族的な残酷な敵と民族的な暗黒な伝統)(日本を示す)
- ③ 現在の中国に彼が生きて往く限り、当然彼は「新興の無産者」のために力を尽すことになる外はなかった(左翼勢力を指す)
- ④ ソヴェートの文芸理論の中国への最初の紹介であったばかりでなく

⑤ 血腥い統治に対する魯迅の痛々しい反抗を要視せず(左翼取締りのことを示す)

⑥ 上海戦争後の民衆運動の昂揚に乗じて(一九三二年日本軍の上海占領後の民衆の反日運動を暗示する)

書き替えられたもの(矢印の下は訳文)

- ① 中国革命↓中国××
- ② 国民革命の勢力↓南軍的勢力
- ③ 中国左翼作家聯盟↓作聯あるいは作家聯盟
- ④ 無産階級文芸運動↓新興文学運動
- ⑤ 革命文学者↓新興文学者
- ⑥ 民族の敵↓人類之敵
- ⑦ ソヴェート↓新俄
- ⑧ 反動勢力↓陳腐勢力

ほかに「左翼作家」を「作家」、「ソヴェートの共産党の文芸政策」をただ『文芸政策』、「圧迫された民衆」を「民衆」に省略したものがあちこちに見られる。

このように、「革命」「左翼」「無産階級」「ソヴェート」等左翼色のことは書き替えられた。それだけではなく、「反動」「民族」

「血腥い」「庄迫」等のことばも消されてしまった。前者は「左翼」「共産党」を思わせ、後者は「日本の植民地統治反対」、つまり「反日」をほのめかしているからであろう。なお、完全に削除された文章からみれば、「革命」や「抗日」を意味する記述は禁止されていた。このように、「原作者にはもちろん忠実ではなく、読者には誠実ではない」（訳後贅記）翻訳の唯一の目的は、そうしてでも「この文章を読者の前に届けるため」という。このように「削除したり書き替えたりした」行為は、一九三六年「黒竜江民報事件」、一九三七年「哈爾濱口琴社」事件から見られた「満洲国」政府の厳しい取締りに対処するものである。

疑滞の回想録によれば、『明明』はそもそも「満洲国」政府弘報処の要請に応じて創刊されたもので、政府に対抗する「過激な言論」が禁止されている。当然「左翼」とか「反日」を思わせる「過激な言論」は登場しない。古丁のこの「削除したり書き替えたりした」行為は、「満洲国」の共産党と「抗日」に対する厳しい取締りと、「文章を書くためにむだに命を落とす必要はない」、⁽²⁹⁾という古丁のスタンスがわかる。

日本本土では社会主義運動は厳しく弾圧にさらされる時、「伏せ字」で逃れることが発明されたが、「満洲国」でも伏せ字とともに「削除」や「書き替え」の方法が使われる。北平で日本プロレタリア小説を翻訳する時、原文の「××」を読める文字に書き直した古

丁が、逆に「満洲国」で日本語原文ではつきり示された文字まで中国語文に伏せ字にしたり、「削除したり書き替えたり」しなければならなくなる。それだけ「満洲国」の言論弾圧の方が徹底していたことを意味する。このような作業を行う時、古丁の心境はいかなるものであったろうか。「訳後贅記」に「秋夜が寒くて静かだ」（「秋夜冷而静」と書いてあるが、彼の感じたその「寒さ」と「静かさ」の度合いは並大抵のものではないであろう。

一方、これほど厳しい政治環境の中で、自ら「削除したり書き替えたり」してもなお魯迅を紹介したい、という古丁の強い気持ちがかがわれる。直接の社会的活動は行わないものの、北平時代に燃えていた左翼の情熱がまだ冷めていないと思われる。

2 「悲しき玩具」

石川啄木の中国での紹介は、一九二二年に胡適（二八九一—一九六二）の依頼を受けた周作人（一八八五—一九六七）が、「石川啄木の歌」（短歌十七首とその歌論）を「努力週報」に発表したことに始まる。そこには「悲しき玩具」の歌が十五首選ばれた。⁽³⁰⁾

一九三七年十二月『明明』第二卷第三期の「日本文学紹介特輯」に古丁訳「悲しき玩具」が発表され、一九四三年十月に芸文書房からその単行本が出された。「悲しき玩具」の次の啄木作品の単行本（周作人訳）が出たのは、一九八〇年代になってからである。

一九二二年六月東雲堂より刊行された『悲しき玩具』には百九十四首の歌のほか、「一利己主義者と友人の対話」と「歌のいろいろ」の二篇の歌論と、土岐哀果（二八八五—一九八〇）の文章が収録されている。しかし、古丁訳「悲しき玩具」には二篇の歌論と土岐の文章が収録されていない。また、百九十四首の歌の内の百八十八首だけが翻訳され、他の六首は外された。

啄木の短歌は中国新詩発展に大きな影響を与えたが、古丁の「悲しき玩具」の翻訳は、その主な目的が「満洲国」の詩歌発展にあるわけではないようである。彼はその前書きに当たる文章の中でこう述べている。中学時代から啄木を愛読し、その翻訳も試みた。そして、今回の翻訳の直接のきっかけは、

この夏、三中井の『啄木展』を見て、まだ啄木を展示する人がいると思つて、また啄木を翻訳したくなった。（今夏観三中井的「啄木」展、看到有人展覽他、便又想译啄木。

また、

啄木の遺産は短歌だけではないが、いちばん貴重なのは短歌だと言つてよい。

（啄木の遺産不止短歌、但是他的遗产的宝贵的最宝贵的要数短

歌。）⁽³¹⁾

と啄木の短歌を高く評価し、「啄木の短歌は人を深く感動させる原因が『真』にある」と述べている。その「真」とは、「偽りのない感情（不是无病呻吟）」である。

「悲しき玩具」には作者の日常と闘病生活が描かれている。「偽りのない感情」とはそれを指すのであろう。「悲しき玩具」の社会背景には、幸徳秋水等の社会主義革命及び大逆事件でさわぐ明治社会がある。五歳の息子まで「革命」「労働者」等のことは覚えてほどこといわれ、啄木も、この二つのことをよく口にし、革命や労働者へ強い関心を持ったと分かる。しかし、貧しくて、不治の病に罹った啄木は、革命や労働者に対する感情は議論に止まり、それ以上何も出来ない。そのような無力感が彼の日常と闘病生活につきまとう。啄木のこの感情の「真」を高く評価した古丁には、啄木を深く理解した上での啄木のその感情への共感があったと思われる。

疑滞の回想録によれば、一九三六年前後「芸術研究会」を結成した時、古丁は以下のような文章を起草した。

われわれは苦悶している。当然、それぞれの苦悶には、それぞれの特殊な出発点があるはずだ。口を持っているのにもかかわらず、われわれは「おし」か「どもり」だ。目があるにもかか

わらず、われわれはいつも「盲目」だ。「盲目」でなければ、近眼か遠視だ。耳があるにもかかわらず、われわれは「つんぽ」だ。われわれは健全な官能を持った「不具な人間」だ。

われわれはみな聡明だ。呐喊の内に生を求めなければ、沈黙の中で死ぬしかないと知っているからだ。タバコや酒や女——われわれはそれらの中で自らを滅ぼしている。風花や雪月——われわれは、それらの中で麻痺させられている。われわれの生命はそんなにも無用なものなのだろうか。われわれの時間はそんなに低廉なものなのだろうか。われわれは苦悶している。われわれは苦悶を延長するのではなく、昇華すべきだ。⁽³²⁾

その時の古丁は、「満洲国」の社会環境の重圧の中で、自分たちが健全な官能を持っているにもかかわらず、「不具な人間」のように感じている。この「不具な人間」という実感が、病身の啄木への共感を生んでいるともいえよう。それに、当時の古丁も幼い子供を持ち、仕事より文学に熱心な面もある。この二点において、古丁は啄木に理解を寄せやすかったであろう。

「悲しき玩具」の中に悲しい、泣く、病、痛い、葉、寝汗、死ぬなど負の感情を表すことが二十何回も使われ、を通して、啄木の悲しみが脈々と伝わってくる。しかし、啄木は悲しいばかりで

はない、彼は希望をも持っている。次に例をしめす。

①曠野あつちゆく汽車のごとくに、／このなやみ、／ときどき我的心を通る。

仿佛是奔驰旷野的火车似地／这烦愁、／时常时常通过我的心。

②いつまでも歩いていねばならぬごとき／思い湧き来ぬ、／深夜の町町。

涌出了／仿佛永远不得不走似的念头／深夜的一条条街巷。

③かかる目に／すでに幾度いくたび会えることぞ！／成るがままに成れと今は思うふり。

那样厄运／已经遇见过好几次了！／现在心思着…／愿意怎样就怎样罢。

④何なんとなく、／今年はよい事あるごとし。／元日の朝晴れて風無し。

无端地觉得／今年似乎有好的事情。／元旦的早晨、／晴朗无风。

⑤その親にも、／親の親にも似るなかれ——／かく汝なが父は思へるぞ、子よ。

可别肖其父／也别肖其父之父——／你的父亲是这样想着呢、孩子啊。

例①の、「曠野ゆく汽車」とは、勢い強く襲ってくる悩みの喩え

である。これは啄木の悩みを表しているが、前述のように古丁も深い「苦悶」を持っている。例②は深夜の町を何時までも歩かなければならないという作者の不安が読み取れる。不安を抱えながらいつまでも歩かなければならないのか、或いは、この町々を歩きたくないが逃げる事が出来ず歩かなければならないのか、とりあえず、

作者は深い不安を抱えている。「削除したり書き替えたり」しても魯迅を紹介する「健全な官能を持った『不具の人間』」である古丁は、まさにそのような気持ちではないであろうか。例③の「成るがままに成れと今は思うなり」とは、努力しても邪魔が入り期待される目標には達せない、そこで半ばあきらめるような気持ちを感じられる。そのあきらめの中には現実に対する反抗が貫けないあまりの絶望が読み取れる。実は、「愿意怎样就怎样罢」と似た意味の「他去罢」が「魯迅著書解題・訳後贅記」等、古丁の文章の中にもよく出てくる。⁽³³⁾例④は、「何となく」でありながら、期待を持つ。閉塞する明治社会にあきらめずに、新しい社会の将来への期待を持つ。ここに啄木の将来に対する信念が表れている。例⑤の子供は将来の象徴であるから、子供への期待はつまり将来への期待である。このように、啄木は現実を悲しみながら将来への希望を失っていない。ただ、啄木のその期待は、よりいいほうに変わってほしいという善良な願いにすぎない。その実現は病身の自分には不可能で、他の人に託さなければならない。ときには絶望のあまり、自己放棄の感情に

陥ることもある。それにもかかわらず、彼は明日への希望を持ってるのである。これこそ大事なことである。そう考えながら古丁は「前書き」の最後に「詩人は『明日が来るのを信じ』なければいけない」と書いたと思われる。

このように見てくると、一九一〇年ごろの明治期の日本と「満洲国」、という社会背景の違いはあるが、閉塞的な現実に不満を持ち、悲しんだり苦悶したりした点においては、啄木も古丁も同じである。絶望に陥りそうな古丁は自己更新を図ろうとし、啄木の将来への希望を高く評価して、満洲の文学者に明日に希望を持つと呼びかける。そして、「苦悶」を昇華させ、自らの努力を通して明日への希望を実現させようとする意欲も読み取れる。

まとめてみれば、古丁は「悲しき玩具」に表れた啄木の感情に深い理解と共感を持ち、それを借りて自分の気持ちを表す。また、啄木の明日への希望を用いて、自分を含めた満洲の文学者を励まし、文学創作を進めて行こうと呼びかける。これこそが古丁の「悲しき玩具」を翻訳した主な理由と考えられる。

では、どうして百九十四首の歌のうち、百八十八首しか翻訳しなかったのか。はずされた歌はどんなものなのか。

①二晩おきに、／夜の一時頃に切通の坂を上りしも——／勤めなればかな。

②しつとりと／酒のかおりにひたりたる／脳の重みを感じて帰る。

以上ははずされた六首の中の二首である。①は勤めがあるから切通しの坂を二晩おきに上らなければならぬ、ということ、②はお酒の香りの嗅ぎすぎで頭を重く感じながら帰るということを述べている。その内容は、二首とも単純な事実しか述べていなくて、言外の意が乏しい。他の四首も似たようなものである。つまり、この六首は、芸術性が高くないと判断されたのかもしれない。

そもそも、「悲しき玩具」は啄木の逝去後そのノートのまま刊行されたもので、校正もされなかった。これについて歌集の後ろに土岐哀果が、啄木が「生きていたら訂したいところもあるだろうが、今は何ともしようがない」と書いている。つまり、「悲しき玩具」は啄木の草稿なので、中に推敲が必要なものが入っていても不思議ではない。土岐らが啄木の遺作をノートのままで出版させたことはそれなりの価値があるが、厳選した啄木の歌を「満洲国」の読者に紹介するのも取るべき態度と思われる。

つまり、古丁が六首の歌を落としたのは、「魯迅著書解題」と同じく検閲を心配したためではなく、彼なりの文学の芸術性から判断したことであろう。その芸術性へのこだわりは、彼自身の翻訳にまで及ぶ。「前書き」に、古丁は、自分の翻訳は「音も色もなく、形

しか残っていない」「詩の翻訳はほとんど不可能」であることが分かったと結論づける。確かに、原文に比べたら、日本語の流暢なりズム感と分かりやすさは生かされていないかもしれない。が、訳文だけを読んでみても必ずしも悪いとは思われない。例えば、一四三頁の例②からみれば、原文は体言止めで一つの文章になっているが、翻訳文には二つの文章が並んでいる。中国語には体言止めの文章も無いし、長い限定語を持つ文章も洗練されていない。そのため二つの文章になる。この場合、二つの文章の相関関係が説明されなければならぬ。しかし、詩であるから、接続詞を入れると説明的になってしまう。関係不明のまま並んでいる二つの文章は、理解するには少し難しいが、できないわけではない。そこに、かえって訳詩らしいモダンな感じが出てくる。これは原詩にない趣である。言い換えれば、この短歌の翻訳は、原文より劣ったところもあれば、原詩にはない効果が出たところもある。古丁は原文への忠実性を追求していたからこそ「詩の翻訳はほとんど不可能」との感慨が生まれたのではないかと思われる。

「魯迅著書解題」と「悲しき玩具」、つまり、「満洲国」における古丁の第一段階の翻訳の特徴は次のようにまとめられる。

二つの作品とも現実に対する抵抗が強く出たものである。そこに古丁の左翼時代の情熱が冷めていないことが読み取れる。「魯迅著書解題」の左翼的、反日的と思わせることを削除したり書き替え

たりしたことは、自分の目的（翻訳した文章を読者に届ける）を実現するために、戦略的なこと（削除したり書き直したりして、その左翼的な情熱を隠す）を考えていたと見られる。この二つの作品から同じキーワード「希望」を見出したことから、古丁の抑圧と苦悶、絶望を乗り越え、「明日への希望」のために闘おうとする意欲が読み取れる。これは後の彼の行動につながる。翻訳方法は、基本的に原作に忠実な直訳である。また、「悲しき玩具」の翻訳から作品の芸術性を重視する傾向がうかがえる。

（二） 第二段階（一九三八年～一九四一年）の翻訳

この段階は満洲文壇のいちばん活発な時期である。古丁をはじめとする「芸文志派」と山丁をリーダーとする「文選派」との間に、「郷土文学」に関する論争が起こり、それはまた創作と出版の競争に発展していく。『芸文志』『文選』等文芸雑誌が相次いで創刊され、優秀な作品が数多く刊行される。山丁らのグループは、「描写真実」「暴露真実」のスローガンを掲げ、「文選刊行会」を組織し、「文選叢書」を出版する。一方、古丁のグループは、「方向なき方向」（「没有方向的方向」）に向かい、「書く」と刷る」（「写与印」）を主張し、「城島文庫」「駱駝文芸叢書」等を刊行する。この二つのグループはそれぞれのスローガンを掲げていて、いかにも文学態度が違うように見えるが、実は、その作品に表れたのはいずれも「満洲国」の

「暗さ」で大した違いがない。古丁個人は、一九三九年一月に短編小説集『奮飛』で盛京文芸賞、一九四〇年四月に長編小説『平沙』で民生部大臣賞を受賞する。それによって、彼は「満洲国」の「満人」作家の代表と見なされるようになる。古丁は、第一段階で苦悶して「希望」を強調していたが、この段階になると、文学上ある程度の成功を収めたためか、前のような絶望で苦しそうな調子がなくなり、そのかわりに、「心に無限大の希望が溢れ」るようになる⁽³⁴⁾。

この時期、古丁は「ユーゴリ(Nikolai Vasilievitch Gogol 1809-1852)の『狂人日記』(Zapiski sumasshedshego, 1835)やモーパッサン(Henri Rene Albert Guy de Maupassant 1850-1893)の『ボーイ、ビールをもう一杯』(“Gargon, un bock!” in Miss Harriet, 1884)、『ガルシオン(Vsevolod Mikhailovich Garshin 1855-1888)の『夢がたり』(To, cheno ne bylo, 1882)、『アッタレーア・プリンケプス』(Atalaa princes, 1880)を含め、数多くの作家の作品を翻訳した。古丁はゴリのものに「内心の苦痛を隠し、ユーモアと風刺とで、彼の一人民としての気持ちに叙べる」手法を見出した⁽³⁵⁾。そして、「狂人日記の主人公はまだ我々の現実社会の中に生きている。(略)『お母さん、この哀れな倅を助けてください！』という叫びはまだ人の心に痛ましく響く、私は文学の『不朽』が分かったようだ(狂人日記の人物仍然活在我们的现社会里、(略)『母亲、救救你的可怜的儿子罢！』却仍然读来令人沉痛、我仿佛明白了文学的『不朽』⁽³⁶⁾。モーパッサ

ンの「ボーイ、ビールをもう一杯」は、貴族の家庭に生まれた主人公が、幼い時、父親が母親を殴る場面を見てショックを受け、大人になって毎日ビールに溺れながら日々を送る人となる話。ガルシンの「夢がたり」と「アッタレーア・プリンケプス」は「動植物界を借りて語る童話式小品」⁽⁴⁷⁾である。これらの翻訳から古丁が様々な文学の手法、題材、ジャンル等に対して関心を持っていたことがうかがえる。しかし、この時期、古丁の関心はそこにとどまっているわけではない。次に夏目漱石の『心』と武者小路実篤の「井原西鶴」を通してその特徴を見る。

1 『心』

古丁は生涯二つの長編小説を翻訳した。その一つは、夏目漱石著『心』である。古丁の翻訳活動の第二段階においては、『心』の翻訳は大きな出来事である。もう一つは、一九七九年に出版された葉山嘉樹（一八九四—一九四五）の『海に生くる人々』の翻訳である。後者については「満洲国」時代の古丁翻訳を対象とする本稿では触れない。中国語版『心』は、一九三九年十月に「東方国民文庫」の満語書籍として満日文化協会より出版された。小宮豊隆（一八八四—一九六六）の「解説」と古丁編「夏目漱石伝略」がつけてある。これは夏目漱石の『心』の最初の中国語訳による単行本となる。この本の出版に至る経緯が、その「訳後小記」の中に記されている。

『心』を翻訳し終わったら、長編であるため出版元が問題になる。辛嘉に文協の杉村さんを紹介してもらい、やっと出版されるようになった。

月刊満洲社は一九三八年九月まで雑誌「明明」を出版したが、『心』を出版してくれない。その理由は、『心』が売れなくて儲からないと判断されたためであろう。⁽³⁹⁾その時、満日文化協会が「東方国民文庫」を出しており、『心』はその一冊として出版されるようになる。

「訳後小記」には『心』の翻訳の経緯も述べてある。古丁は、満中学堂時代から漱石を愛読し、それを紹介しようと思った、という。それから『草枕』の冒頭の一節を引用してから、

私は文学を愛する。特に文学の中の哲学を愛する。彼の『草枕』の第一章の冒頭にはこれほど綺麗な文章が書かれ、これほど奥深い哲理が導き出されている。私はむしろ『草枕』を読んではから詩と画を愛するようになった。しかし、今私には詩も画もない。（我愛文学、尤其愛文学之中的哲学、他的「草枕」的开宗明义第一章、就写着这样美丽的文章、就道着这样奥蕴的哲理。诗和画——我毋宁是读了「草枕」才特别爱起来、但是我现在无诗也无画。）⁽⁴⁰⁾

ここで古丁は漱石に惹かれる理由として、その文学の中の「哲学」「奥深い哲理」をあげている。「哲学」や「哲理」は、この時期古丁の文章（「消閑雜記」⁽⁴⁾）の中にも、古丁を評する文章（辛嘉「關於古丁」⁽⁴⁾）の中にもよく出てくることばである。そして、場合によってその「哲学」の意味が微妙に違う。ここに出てくる「哲学」や「哲理」については、具体的な説明はないが、『草枕』の冒頭の引用から見れば、それは「人生の道理」として理解しても大した間違いがないと思われる。「人生の道理」は「階級的観点」とは違う。「階級的観点」は左翼文学のいちばん大きな特徴で、左翼作家、特に中国左翼作家聯盟の作家たちは、それをういてあらゆる社会現象を分析する傾向がある。古丁の左翼作家聯盟時代はもちろん、「満洲国」での最初の作品の主題も「階級的観点」に沿ったものが多い。⁽⁴⁾ 階級的観点は古丁の今までの「哲学」と理解できる。「消閑雜記」の中で、文章を書きだせない古丁は、『大夢記』『江山』『艷歌』『九歌』『君子行』『美人行』『悲回風』『劉伶飲酒』『青草』、のようなタイトルだけたくさん書き出したが、その主題、つまり哲学が見つからないと言っている。この「哲学」の意味ははつきりと「主題」が含む思想的内容の意味で用いられている。また、「夏目漱石の長編『心』を翻訳してから、私の哲学が一掃されてしまったようだ」とも書いている。すなわち、『心』を翻訳する段階にな

ると、古丁は「階級的観点」ではなく「人生の道理」を追求するようになる。これは大きな変化である。その変化の背景には、もちろん「満洲国」の厳しい取締りがあるが、そのほかに、魯迅の文学思想の影響も無視できないと思われる。

魯迅は中国左翼作家聯盟の旗手と言われるが、一九三〇年代初頭の左翼青年たちのなかには、その作品をしつかり読んだ人がそれほど多くないと思われる。なぜなら、抗日宣伝や国民党政府への抗議デモで忙しく、彼等にはあまり時間がないからである。古丁の場合は亡命中の生活の心配もあつただろう。しかし、一九三七年に日本で出版された『大魯迅全集』の解題を翻訳することを契機に、古丁は魯迅をじっくり読み、その精神を掴み、魯迅に対する認識と理解を深めた。いや、寧ろ魯迅精神への理解と認識を深めた上で、その「解題」を翻訳する気になったと言つたほうが正しいかもしれない。

魯迅は、創造社メンバーから、一九二八年に始まつた「革命文学」に関する論争によつて左翼に「転向」したといわれるが、魯迅自身はそう認めなかつた。魯迅文学の内核は、中国伝統文化の中の負の一面を批判し、それによつて阿Qを代表とする中国人の麻痺、無知の精神世界を改造しようとするものである。この中国文化批判は階級的視点をはるかに超えたものである。魯迅の左翼への接近は、中国人の精神世界を改造するための方法の模索の過程に過ぎない。つまり、魯迅の闘いの目的は、無産階級革命の勝利を獲得するよ

り、むしろ中国人の精神世界を近代的に改造するところにある。このような魯迅精神の影響はその後の小説『新生』等にも見られる。右に述べてきたように、この時期の古丁の文芸思想は左翼文学思想から魯迅式「人生の道理」へと変わった。また、この「転向」はいきなり起こったことではなく、南満中学位時代から愛読した漱石の影響もあると考えられる。

「訳後小記」にはその『心』の翻訳に至る経緯が続けて語られている。

最初に紹介しようとするのは『虞美人草』で、(中略) 思わずその俳句が連なつたような文章にぶつかり、私は訳しては止め、止めては訳し、結局(前へ進むことが出来ず)最初の計画をあきらめなければならなくなつた。そして、本箱の中から『心』を捜し出した。その小さな本の上に「一九三二年読」と書いてあるが、その時から既に八年も経つたのだ。これを翻訳してみると、さほど難しく感じなくて、そのまま翻訳していった。(起初想介绍的是「虞美人草」、(中略) 却不料那句是俳句的文章、使我译而复辍、辍而复译、终于抛掉了原来的计划、才从书箱里翻出来「心」。那本小书上写着「一九三二年读」、距今已有八年了、译起来很省力、就译了开去。)⁽⁴⁴⁾

古丁は『虞美人草』を翻訳しようとしていたが、挫折してしまつて、『心』に変わったのである。なぜ『虞美人草』なのか、その理由についてははっきりした説明が示されていない。しかし、以下のいくつかのことを合わせて考えてみればその理由は分からないでもない。

前に触れた山丁の「文選派」と古丁の「芸文志派」の間で行われた「郷土文学」に関する論争は創作と出版の競争に発展していく。古丁らは長い小説を書くこうとして『明明』で「百枚小説」を提唱し、一卷第六期に小松の「洪流の陰影」と古丁の「原野」が発表された。次第に彼らは百枚小説には満足できず、さらに長編小説を書くこうと考えるようになった。しかし、その時、古丁は書き出せなかつた。

小松と私は仲のいい文字パートナーで、我々は同時に「百枚」を書き始めた。(中略) 彼が『泰東日報』で『無花的蔷薇』という三百枚の小説を連載した時、私は書き出せないため、同じく三百枚くらいの『心』を翻訳した。彼が『蒲公英』を書いた時、私は『平沙』を書いた……(小松跟我是很好的文件、我们同时写起了「百枚」。(中略) 他在『泰东日报』连载「无花的蔷薇」这约三百枚长篇的时候、我因为写不出来、就译了也是三百枚的长篇「心」、他写「蒲公英」我写「平沙」)⁽⁴⁵⁾

長編を書きたいが、書きはじめることができない。それで漱石の小説を翻訳した。つまり、古丁は創作の代わりに『虞美人草』を翻訳しようとした。『虞美人草』は新聞連載小説で漱石の最初の長編である。登場人物は藤尾を中心に、小野清三、甲野欣吾、宗近一、小夜子、糸子など十人あまり、それぞれ違う性格を持つ。また、小説の中には伝統と近代、利己と徳義等いくつかの衝突の線が走っている。物語はこれらの衝突の線に沿って登場人物の相互作用のドラマを展開する。『虞美人草』は一九三五年十月に溝口健二監督で映画化されてもいた。古丁は『虞美人草』の翻訳を、その長編小説の展開の仕方等を学ぶために行おうとしたと思われる。

しかし、「訳後小記」によれば、『虞美人草』の文体は難しく、古丁は手に負えなくなる。それで手元の『心』を翻訳するようになる。『虞美人草』とは違って、『心』はドラマチックな物語ではなくて、人間の内心世界を深く細かく描くものである。当時の満洲文学は素材主義にとどまっておろ、文学者が心理描写の技法をマスターしていなかった。古丁は『心』の翻訳を通して心理描写の技法を学ぼうとしたと考えられる。それは、『心』の翻訳後に発表された『平沙』（一九三九年十二月）に、その前に発表された『原野』（一九三八年三月）より、心理描写の内容が明らかに増えたことから分かる。

また、『心』の翻訳に古丁は文学的な工夫を凝らした。その特徴

を明らかにするために、次に『心』の古丁訳を戦後の周炎輝訳及び周大勇訳と比べて検討してみる。

① それでも今厄介になっている私だって同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めから能く分かっていると辯解して已まないのです。

又頂嘴道那么现在住着的我不也是一样吗、但是却辩解着起初就知道我的根性而不已。(G)

我反问她说、开头对于我这个来借住的人不也一样不了解吗？她辩解说从一开始就很

了解我的性格。(H)

我逼问一句……“那么现在住着麻烦的我、不也是一样吗？”她说、我的性情脾气、一开始就知道得很清楚的。(Y)

日本語では主語がよく省略される。しかし、中国語では主語が明記されないと動作主を特定することができない。それで主語はほとんど省略されない。例の文章のように、二人が交替して動作を行う場合は、なお省略できない。周炎輝訳にも周大勇訳にも「我」、「她」がはっきり記されているが、古丁訳だけが日本語のまま省略されている。

② 貴方の大事な御父さんの病気を其方退けにして、何であなたが宅を空けられるのですか。

扔开你敬重的父亲、你怎么能够离开你的家呢？(G)

我怎么能够让你丢下你至亲的父亲病于不顾、从家里跑出来呢。

(H)

你怎么能够把紧要的父亲病扔在一边、离开家呢？(Y)

これは動作主と動作の問題である。一人の動作主「貴方」に「其方退け」にし、また「空けられる」という二つの動作が伴っている。この場合、中国語文法の習慣に則る処理なら、周炎輝訳のように話手の「我」を持ち出して使役形の文章にするか、周大勇訳のように主語を二つの動作の前に持つていくか、どちらかである。しかし、古丁訳は原文のまま、動作主は二つの動作の間に置かれている。

③ 私にそれが出来なかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自ら一種の情性があつたため、思い切つてそれを突き破る丈の勇氣が私に缺けて居たのだという事をここに白します。

我没能这样去做、我要在这里告白这是因为学問的交際构成着基础的两人的交情上自然有着一種情性、所以我竟缺乏着决意突破这情性的勇氣所致。(G)

我坦白的对你说、我之所以没能这么做、是由于我们两人的友谊是以学問上的交往为基調的、在这里自然产生了一种因循、而我缺乏下決心突破它的勇氣。(H)

我在这里自己坦白说了吧、我没有能那样做、那是由于两人的亲近是把学問上的交往作为基調的、这就自然而产生了一种情性、因此我缺乏大胆的去突破它的勇氣。(Y)

原文の学問の交際が基調を構成しているは「二人の親しみの限定文となるが、中国語に訳される時、「以……为」の文型になったほうが文法のルールを守っていると思われる。古丁訳は日本語文章の並び方のままで、中国語文法としては違和感を感じる。

④ 私はあなたに対して此厭な心持を避けるためにでも、摺いた筆を又取り上げなければならぬのです。

我即便是为着对于你避免着厌烦的心情、便不得不又提起来摺下了的笔。(G)

哪怕是為了避免这种对你负疚的心情、我也必須把摺下了的筆重新拿起來。(H)

為了避免对你产生这种不痛快的心情、我也非得把摺下的筆重新拿起來不可。(Y)

これは限定語と被限定語の問題である。「あなたに対して此厭な」は述語「避ける」の目的語「心持ち」の限定語である。この場合、中国語の文章の中では、限定語のすべては述語の後ろ、目的語の前に来るべきである。しかし、古丁の訳文は日本語の並び方のままである。

⑤ そう云う奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になっていたのです。

那般说的太太的可以看做唯一的夸耀的小姐的毕业、也不久就要轮到班儿了。(G)

因为太太的掌上明珠——小姐的毕业不久也紧接着要来了。(H)
而可以看做这个太太唯一值得夸耀的事——小姐的毕业、也不久就要轮到。了。(Y)

日本語にはしばしば長くて複雑な限定文が出てくるが、中国語には長い限定文が少ない。この場合、周訳のようにアレンジし直さなければならぬ。しかし、古丁訳は逐語訳で全く原文のままにされている。

⑥ 然し其先を何しようという分別は丸で起こりません。
然而将来该怎样办的处置却简直没想到。(G)

但是、我完全不知道以后该怎么办。(H)
然而以后怎么办呢？这却完全没有想到。(Y)

これも限定文の問題である。日本語の「分別」にぴったりする中国語はない。周訳には「分別」そのものが翻訳されていない。その代わりに疑問文が使われている。しかし、古丁訳は先ず「分別」を「处置」に翻訳して、また「何しよう」を「办」にした。同じ意味での重複となる。

⑦ 一度貰って仕舞へば何うか斯うか落ち付くものだ位の哲理では、承知する事が出来ない位私は熱していました。

一旦娶过来管好顾歹是会有着落的——这一类哲理并不能使我心安理服那般我在热着。(G)

我当时正是热血青年、是决不会同意那种只要娶到手就总会安下心来逻辑的。(H)

我热信这种想法、到了连一旦娶到手以后迟早会安定下来的这点哲理都不知道了。(Y)

これは語彙の翻訳問題である。「熱」は中国語でも動詞として使われるが、現在進行形としては使われないし、「熱望する」も意味しない。古丁訳の「热着」は動詞「熱」の現在進行形でそもそも文

法ルール違反である。

⑧ 私はこの点に於いても充分私の我を認めています。⁽⁴⁶⁾

我既在这一点上也充分的承认着我的我。⁽⁴⁷⁾

在这一点上、我对自己知道得很清楚……⁽⁴⁸⁾

在这一点上、我也充分地认识到了我的自私。⁽⁴⁹⁾

これも語彙の問題である。日本語の「私の我」の中の「我」は、ここでは「エゴ」「意地っぱり」等の意味であるが、中国語での「我」は普通第一人称だけに使われる。中国文学の中には「自我」が確立されていないとよく言われるが、そのせいか、この場合の日本語の「我」にびったりする中国語は今もない。周訳のように「私」「自己」とするしかないであろう。古丁は直訳主義を貫いて日本語の「我」をそのまま中国語に持ち込んだと考えられる。

このように、古丁訳は、中国語文法の述語が目的語の前に来るという大きなルールを守っているものの、ほかのルールはほとんど無視しているように見える。これは、古丁が中国語文法をくずしても原文への忠実さを徹底したためと思われる。古丁はなぜこれほど日本語の文法、日本語語彙をもち込んだのであろうか。この問題を考察する前に、古丁訳のもう一つの特徴を見てみる。

① 我读到那封信之后、本想替你觅一觅来的、至少也以为倘不写信未免失礼来的。

② 说实、我是正在烦恼着把自己怎样处才好的当儿。

③ 只是家里有着一件不老好的事。

④ 然而我却讨厌被人引诱受欺、上人家的套儿。

⑤ 甚至说道想要订的话多咎都能定。

⑥ 然而太太却说拉倒吧。

⑦ 虽是一种无聊的勾当、我却想了想这勾当。⁽⁵⁰⁾

例に引いた「…来的」「…当儿」「不老好」「上人家的套儿」「多咎」「拉倒吧」「勾当」はすべて方言か俗語である。これらのことばの使用により、「先生」の手紙の切々とした訴えが、まるで読者の耳元で囁かれているような効果を持ち、小説『心』の表現がいつも豊かになる。ところで、これらのことばはどこから来たのであろうか。『心』を翻訳するところに、古丁は小説を書き出せなくなっていたため、色々な本を耽読していた。中国の古典、特に明、清の白話小説をよく読んでいた。古丁は言語問題を論じる時『聊齋志異』の作者蒲松齡等に言及していることからそれはわかる。⁽⁵¹⁾これについて辛嘉が前出の「古丁に就いて」という文章の中で「それに支那の『才子書』から、多くの活きた語彙を取り入れ、表現力は一層強く鋭くなっている」と評価している。⁽⁵²⁾例の中の傍線部のことばは、

ほとんど明清小説から借りてきたものと思われる。明清白話小説に出てきた山東地方などの方言は、生き生きとして表現力が強い。一地方の方言とは言え、小説に書かれたことばであるため、白話小説が読まれたところならどこでも通用する。そのことばの一部分は、今でも中国人の言語生活に生きている。

古丁の翻訳は基本的に直訳である。北平時代のそれは、文章の構成に初心者らしい幼稚さ、あるいは物足りなさも感じられるが、それに対して、『心』の直訳は寧ろよく考慮した上での作業である。中国語の中に対訳語がない場合に限られているが、日本語の語彙の直接使用もしている。これは北平時代の翻訳にも見られるが、それほど多くは無かった。また、明清白話小説からの口語の借用は今まで見られなかった特徴である。では、どうして古丁はこのようにしなければならなかったのか。

ただ私の愛する漢話を、一層豊富に、一層精細且美麗にした
いからこそ、外との通路にある門を明けて、出来るだけ寛容鄭
重に彼女以外の言語を迎えたい。そして迎えた彼女の語彙ばかりでなく、
語法も語脈も吸収したい。(中略)若し漢話の中に
溶解できないものは、自然に淘汰されその余剰のものばかりが
漢話中の話に溶解されるからだ。そうなれば、これはもう漢話
以外の言語でなく、私達の愛恋する漢話となり切っているのだ。⁽⁵³⁾

(傍線は筆者が引いた)

右は「話の話」という文章からの引用である。この中で、古丁は漢話を「豊富に精細且美麗」にするために、語彙だけでなく、語法も語脈も吸収したい、漢話に溶解できないものは自然に淘汰される、という見解を示している。似たようなことは魯迅も言った。

そうした翻訳書は、新しい内容を輸入するにとどまらず、新しい表現法をも輸入しているのです。中国の文章や言葉は、じつさい規則があまりにも粗雑すぎます。作文の秘訣は、よく使われる文字は避け、虚字は削ること、そうすればよい文章だというわけですし、講演するにしても、意思が伝わらないことがしばしばで、つまり言葉が貧しいのです。そこで、教師が教える際も、チョークの助けを借りなければなりません。こうした語法の粗雑さは思考の粗雑さを示すもので、換言すれば、頭脳がいささかぼけているのです。かりにいつまでもぼけた言葉を使っているようであれば、たとえすらすらと読めたにしても、結局のところ得られるのはやはりぼけた影でしょう。この病いを治すには、しばらく苦勞をつづけて、古いもの、よその土地のもの、外国のものなど、違った句法をつめこむしかなく、やがてそれを自分のものにすればよい、とわたしは思いま

す。

(略)

わたしはやはり直訳を主張します。わたし自身の訳し方は、たとえば、「山背後太陽落下去了」というのはこなれてはいませんが、これを「日落山陰」に改めることは、決してしません。というのは、原文では山を主としているのに、改めると太陽を主とすることに変わってしまうからです。創作にあっても、こうした区別をつけるべきだと、わたしは思う。どんどん輸入し、どんどん消化、吸収し、使えるものを次に伝え、滓は過去に取り残されるままにしておけばよいのです。

(略)

いまはまだ口語——各地のさまざまな地方語——と一体化するわけにはいかず、ある種の特別な口語とするか、ある地方の口語に限定するほかはありません。後者は、その地方以外の読者には理解できません。広く流布させようとするれば、いきおい前者を使うこととなりますが、そうなることややはり特別な口語ということになり、文語の要素も増えてきます。⁽⁵⁴⁾

(傍線は筆者が引いた)

右の引用で議論された主な内容は二つある。一つは、中国語文章の粗雑な語法は中国人の「頭脳がいささかぼけている」ことの表れ

である。それを改善するために、中国語に新しい内容と表現法を輸入し、違った語法を詰め込む。「どんどん輸入し、どんどん消化、吸収し、使えるものを次に伝え、滓は過去に取り残される」。

古丁の直訳と漢語改造思想は、明らかに魯迅の影響を受けたと思われる。ただ、古丁の直訳は、思考回路の中で「山を主とする」か、「太陽を主とするか」の問題に止まらず、それは中国語文法を無視するほどの日本語文法の書き写しである。古丁の直訳は、魯迅の意味の直訳よりもっと徹底しており、中国語の日本語を受容する限界を試しているように見える。また、口語語彙に関しては、魯迅は「文語の要素」も取り入れるのに対して、古丁は明・清白話小説から口語の語彙を借用している。分かりやすさから言えば、古丁のほうが魯迅よりさらに進歩したといえる。引用した二人の文章には、もう一つの違いがある。それは、古丁が漢話への愛着を強調していることである。ここでは古丁の漢語に対する態度が表れている。この点については本章の(四)で考察する。

従って、古丁の『心』の翻訳については以下のようにまとめられる。

長編小説の書き方を学ぼうとして漱石の長編を翻訳した。それは原文への忠実さを徹底させた直訳で、中国語文法を無視するほど日本語文法をそのまま移植しようとするものであった。また、中国語で直訳ができない日本語のことはそのまま中国語に持ち込んだ。

同時に、明清時代の白話小説からの口語の借用も多く見られる。このやり方は、いわば、古丁の漢語改造の一つの試みと思われる。彼は、中国語はどこまで日本語を包容することができるのか、その限界を試していたように見える。このように、古丁の『心』の翻訳には、文学技巧を追い求めると同時に、言語運用上の革新の試みも見られる。

2 『井原西鶴』

『明明』停刊後、一九三九年六月に月刊満洲社から「芸文志事務会」編の『芸文志』が創刊された。そして、一九四〇年六月の第三号は「日本紀元二千六百年記念特輯」で、中に在満日本人の小説の翻訳のほかに、森鷗外（一八六二—一九二二）や山本有三（一八八七—一九七四）等の小説や芭蕉（一六四四—一六九四）の俳句と古事記の翻訳等が発表されている。古丁の武者小路実篤著「井原西鶴」の中国語訳も載せてある。「井原西鶴」は武者小路実篤が一九三一年に書いた西鶴の伝記である。早くから古丁は「竹林七賢人の物語を書きたい」と言っていたが、なかなか書かなかつた。一九四二年五月に竹林七賢人の伝記「竹林」⁽⁵⁶⁾がようやく発表された。古丁が「竹林」を書く際、その手法は「井原西鶴」を参考にしたと思われる。この意味で言えば、「井原西鶴」の翻訳は『竹林』の執筆の準備となる。

武者小路実篤の「井原西鶴」は『時事新報』に最初に発表された時、三十三章あつたが、⁽⁵⁷⁾一九三九年九月に甲鳥書林から刊行されたものは二十八章となっている。原書には本文のほかに「序」「伝記小説に就いて」「西鶴のことを一寸」もあるが、翻訳の中には本文しかない。これについて古丁はその「小記」に以下のように書く。

原書にはまた「序」「伝記小説に就いて」「西鶴のことを一寸」があるが、私は暮らしのために忙しいため、（その翻訳は）将来単行本を出す機会を待つ。（原書本还有「序」、「关于传记小说」、「稍微写一点西鹤的事情」、我因为忙着度日、只好等待将来有出单行本的机会再说了。）

つまり忙しくて翻訳が間に合わないのである。中国語版『井原西鶴』の単行本については、「新現実文芸叢書」（十二冊 新実主編 興亜雜誌社）の十二冊目として出版される予定とされていたが（辛嘉『新現実文芸叢書 草梗集』 興亜雜誌社 一九四四年四月）、実際刊行されたかどうか確認されていない。

「小記」にはまた、この伝記の翻訳経緯が書かれている。

この小説の翻訳は偶然に思いついたものだ。去年末、大連行き列車の中で一気に読み終えてすぐに翻訳しようと思った。しか

し、手をつけてみれば、一気に訳し終えることが出来なかった。引用された西鶴の文章に引っかけたのだ。(西鶴の)その文章は私の最大の敵となった。(翻訳这篇小説、是偶然想起的、去年底在去大连的车中、一气读完、就想要译出、但是一经译起、却不能一气译完、因为其中引用西鹤的原作之处、便是我的大对头)。

では、この「大敵」はいかに打倒されたのか。

私は木崎龍さんに感謝しなければならない。彼の詳しい指導のおかげで、漸くこの大敵を克服した。彼は訳文の中の誤字を添削し、間違った箇所を訂正してくれた。これでどうやらその大體の意味が伝わるようになった。そのため、ところどころはわざと逐字訳を避けた。(我要感谢木崎龙先生、蒙他对我详加指教、才能把这些大对头克服了。他替我校正了书中的讹字、为我指点了好多错误、才能好歹把意思传达出来、有许多地方、我故意避免了逐字译。)

西鶴の文章は木崎龍(一九一一年—一九四三)の協力によって困難を乗り越え、逐語訳でない方法で翻訳した。これは『心』の翻訳とは違うやり方で、古丁の翻訳技巧の変化と思われる。では、訳文を原文と対照しながらその翻訳の仕方を検討する。

先ず小説の内容から見る。

小説の一〇八章までは西鶴が大作『好色一代男』を書くことを述べている。九〇十二章は二万句の俳諧の大矢数をやることについて書いてある。十三〇十九章は近松と対決するために書いた浄瑠璃の台本が失敗に終わってしまい、近松を認めるようになるまで。二十〇二十三章は、「芭蕉は人間世界からはなれた。だが、私は人間世界の一番キタナイ処を見て、其処でつかむものをつかもうと思っているのだ」と弟子に言い、自分と比べて芭蕉を認める。二十四〇二十八章は金銭、名誉、征服欲のためでなく、「良心」と「神経」に導かれて書くようになる。

一人の文学者が金銭、名誉、征服欲のために書くことから、「良心」と「神経」に導かれる創作へと変化する物語である。西鶴の負けず嫌いな性格と小説を書く時の孤独な内心世界がよく表現されている。この小説の中には、文学の目的、創作する時誰も理解してくれない内心の動き、ライバルとの関係、文学の最終到達目標、等の問題が提出され、それに取り組む西鶴の真剣な姿勢が示されている。また、そこから西鶴が民衆の低俗趣味に合わせず自分の心の中の芸術を追求する精神が表れる。文学の道の方向はどこに向かうべきか、そこに到達するためにいかに歩いたらいいか、等の問題は、一九三九年前後満洲文壇で頻繁に議論されていた。古丁の「方向なき方向」は本当に方向がないのか、或いは今文学の方向を模索している

ところなのか、或いは、方向はあるが明言することを避けているのか。

しかし、この小説の中の西鶴の芸術方向ははっきりしている。俳諧も浄瑠璃も書きたいが、それぞれの分野に芭蕉と近松のような超えられない大物がいるのでそれを避けて、ひたすら好色物を書く。芭蕉が俳句界で達した境地のように、西鶴も人に見捨てられても人間世界の「真心」か何かをつかもうとしている。それは西鶴の精神つまり、西鶴の文学についての「哲学」ではないであろうか。古丁が、この小説から受けた感銘、また、それを満洲文学者に翻訳紹介しようとする動機はそこにあつたかもしれない。

次は、古丁の翻訳について検討する。

この翻訳の一番著しい特徴は、その二十余りの註にある。よく見れば、これらの註の果たした役割は、①原文の引用。これは翻訳文をよく理解してもらうためである。例えば、「古潭蛙跃入、水声响静」の後ろに（註）「古池や蛙とび込む水の音」とつけてある。②背景や知識の紹介と日本特有のことばの説明。これは註の中にいちばん多い。例えば、（註）昔男乃「伊勢物語」之首句「昔有男焉……」、概美男子之意也。③日本語の語彙の説明。原文のことばをそのまま使用して、その後ろに括弧をつけて説明する。例えば、是饥饿于真心（誠）哪、「真心」は原文で、「誠」は古丁の説明）のように分けることができる。

註をつけるのは、翻訳の内容の正しさを追求するための作業でもあり、日本の古典文化に詳しくない読者のための親切な態度でもある。この読者の立場に立つやり方は今まで古丁の翻訳の中にはあまり見られなかった。これは、『心』の翻訳に見られる言語的な実験が終わり、読者を重視するようになったことを意味しているかもしれない。

次にその「大敵」とされる西鶴の文章の翻訳について検討する。第一章で、西鶴が『好色一代男』を書く時、このような引用がある。

夕陽端山に影くらく、むかいの人来りて里に帰れば、秋の初風はげしくしめ木にあらそい、衣うつ槌の音物かしましう。はしたの女まじりに絹はりしいしを放して恋の染衣、「これは御寮人さまの不断着、此のなでしこの腰形、くちなし色のぬしや誰。」と尋ねけるに、『それは世之介のお寝巻』と答う……

その翻訳、

夕陽落山、影暗昏黄、家人来迎、世之介即同归里。秋初风劲、捣衣槌喧。亦有婢女杂聚其间、卸却护簷、收拾染衣。問其「此乃令夫人之便衣、此梔子色之抚子花柳腰形之衣服之主人、其为

誰欤？答謂、此乃世之介之睡衣」……

また、第六章のところにもこのような引用がある。

神代このかた、又類なき御傾城の鏡、姿を見るまでもなし、髪を結ぶまでもなし、地顔素足の尋常、はずれゆたかに、ほそくなり、恰合、しとやかに、ししのつて、眼ざしぬからず、物ごしょく、はだへ雪をあらそい……名譽の、好にて、命をとる所あつて、あかず酒飲で、歌に声よく、琴の弾手、三味線は得もの、一座……

訳文は、

神代以还、傾国傾城、既不整容、亦不结发、脸不敷粉、脚不修饰、体式丰细、举止娴雅、肉腴眼秀、腰肢婀娜、肌肤争雪……
既佳、销魂荡魄。复能善饮、歌喉圆润、弹琴弹三味线均其拿手、
待客殷勤、文章品尚……

この訳文で先ず気づくのはその文体である。この四字駢体に散文を混ぜる文体は、古丁が主張してきた新文学の散文体とは違う。この文体は、辛亥革命後の中華民国初期に流行っていたもので、当時

の小説、特に後「鴛鴦胡蝶派」と呼ばれる恋愛哀情小説にはよく使われていたものである。その代表として一九一二年上海の『民報』に連載された徐枕亜著『玉梨魂』があげられる。例えば、『玉梨魂』の第一章にはこのような文章が書いてある。

嗟嗟、匆匆短梦、催醒东风、渺渺相思、恨生南国。地老天荒、可怜人会当此日、蜂愁蝶怨、伤心者何以为情。……梦霞乃含悲带泪、招花魂而哭之曰、「冢中之花乎、三生痴梦、醒乎？否乎？汝命何短、我恨方长。香泥一掬、以安汝骨、芳草一丛、以伴汝魂、惨酒一杯、以为汝奠、凄禽一声、以为汝吊。……（ああ、束の間の夢が春風を運んできたが、お前への想いが南国に無念となつて残つた。地が老いても天が荒れても愛は変わらぬと誓いあつたのに、悲惨なことにこんな今日となつてしまった。蜂も憂い蝶も怨み、私も慙愧に堪えない。……夢霞（主人公の名）は悲痛を忍んで涙を零し、花の魂に泣きながら訴える。塚の中の花よ、三世の痴夢から覚めたのか、どうか。お前の命は短く、私の恨みは残る。一握の香泥でお前の骨をやすらげ、一叢の芳草をお前の魂の伴にする。一杯の苦酒でお前を祀り、寂しい鳥の一声でお前を弔う。）

古丁は西鶴の好色物を「鴛鴦胡蝶派」の文体を借りて翻訳した。西鶴の書く放蕩する男の主人公の遊里での好色修業と、愛し合いな

がら結婚できない男女の怨恨とは違うが、二つは同じく男女の感情を描いていて、その民衆の娯楽のためという性格は変わらない。古丁のこの翻訳を読んで、西鶴のことを全く知らない読者でも、その作品は『玉梨魂』に近いと理解するであろう。この翻訳には古丁の井原西鶴に対する認識もあらわれている。

まとめてみれば、「井原西鶴」の古丁の翻訳におけるもつとも顕著な特徴は、①動機はおそらく伝記文学の書き方の勉強と、小説家西鶴の文学や性格に惹かれたためと思われる。②より正確に原文の意思を伝達するために、また、読者によく理解してもらうために、多量な注釈をつけている。これは古丁の今までの翻訳の中には見られないものである。③「井原西鶴」も基本的に直訳であるが、西鶴の原文の引用は、中国風（「鴛鴦胡蝶派」風）にアレンジしている。ここからも、古丁の態度が『心』の翻訳時に行われた中国語文法を無視するほどの漢語改造から、読者の立場を考慮するものに変わり始めたといえるであろう。

それで、「満洲国」時代第二段階の翻訳の特徴は次のようにまとめられる。第一段階にみえた左翼傾向がこの段階に来るとすっかり消えてしまい、この段階では、文学の技法を身につけるために翻訳したと思われる。『心』の翻訳では中国語の文法を無視するほどの直訳を行ったが、それは漢語改造の実験とも思われる。これには魯迅の影響もある。また、明清白話小説からの口語の借用も目立つ。

「井原西鶴」の翻訳には、『心』で見られた漢語改造の試みがなくなり、註をつけたり、訳文を中国風にアレンジしたりする努力が見られる。そのやり方には古丁の文学に対する考え方に変化が起り始めたためと思われる点があり、その変化はすなわち、古丁の文学的立場が作者・翻訳者中心から読者中心のほうへとシフトしはじめているように思われる。これは、その後の通俗文学の提唱に繋がると考えられる。

(三) 第三段階（一九四二年～一九四五年）の翻訳

第三段階の翻訳の数は少ない。大川周明著『米英東亜侵略史』、高村光太郎の詩「殲滅せんのみ」、吉川英治著「宮本武蔵」だけである。そのうち、古丁一人で翻訳したのは「殲滅せんのみ」しかない。この三つの作品はいずれも左翼傾向的なものでも、いわゆる純文学的なものでもなく、「大東亜戦争」に関係すると思われる。このようなテキストの選択は当時の社会環境に関係している。

日中戦争が全面化した一九三七年、「満洲国」國務院所屬の弘報処が設立され、出版、文芸界への統制がいつそう厳しくなった。一九四一年三月に『芸文指導要綱』が發布され、同年七月に満洲文芸家協会が設立され古丁はその委員となる。委員長は転向作家の山田清三郎（一八九六―一九八七）である。また、一九四一年十二月末に「治安維持法」が公布される。一方、一九三八年十一月近衛内閣

が日、満、華の連携による「東亜新秩序の建設」の声明を出し、一九四一年十二月八日に真珠湾攻撃で、対米英戦争を始める。一九四二年に入ると、日本軍が太平洋・東南アジアで次から次へと勝利をおさめる。一九四二年はまた「満洲国」建国十周年にあたり、その時から、「満洲国」では、一九三七年七月に始まった四年半の中日戦争は東亜新秩序建設のための戦いであり、満洲建国はアジア解放、米打倒の準備のために行った、「民族協和」は「大東亜共栄圏」の精神であり、共栄圏ということばこそ用いていないものの、満洲建国は大東亜共栄圏の実行である、と関東軍の将校から日本文化人まで盛んに言うようになる。⁽⁵⁹⁾ それによって、「大陸侵略について多くの日本人が抱いてきたモヤモヤした気分を払拭し、日本が最初から正しい道を行ってきたことを証明するかのような役割を果たしたのであり、関東軍や『満洲国』建国事業を担ってきた人びとにとっては、自分たちの努力がようやく報われたという気分させるものだったのである」⁽⁶⁰⁾。また、それ以前、一九四〇年六月、「満洲国」皇帝溥儀が日本を訪問し、日本皇室から三種の神器を持ち帰り、「建国神廟」を建てて、天照大神を拜むようになった。「満洲国」建国十周年には、「太平洋戦争のただなかで、戦争指導のスローガンに押し出されていた大東亜共栄圏確立のための、その既成の一翼として満洲国を誇示するため」⁽⁶¹⁾に、日本と関内を含め、各地の有名な芸能人を「満洲国」の都新京に呼び込み、「満洲国」政府は大々的に

その慶祝気分をあおり立て、「民族協和」の成功を内外に示した。満洲文芸家協会は『建国十周年慶祝詞華集』を編集し、山田清三郎編『建国列伝』が『満洲新聞』で連載されはじめる。

一九四三年に入ると文芸家協会が改組され、大東亜連絡部が新設され、古丁はその部長となる。古丁が上記の三作を翻訳したのは、このような社会風潮の中でのことであった。

1 『米英東亜侵略史』

『米英東亜侵略史』は、大川周明が一九四二年十二月十四日から二十五日までの十二日間に行ったラジオ放送の速記に加筆したもので、一九四二年一月、第一書房から初版二万部、刊行された。その目的は序に書かれているように「主として米英両国の決して日本及び東亜と並び存すべからざる理由を明らかにするためである。その内容は「米國東亜侵略史」と「英國東亜侵略史」の二つの部分に分けてある。米國のアジア侵略は主にペリー来航から、満洲鉄道等滿蒙の權益を巡る日本との争奪についてであるが、英國のアジア侵略はインドの植民地化とアヘンの中国への輸出について書かれている。最後に、日本の中国に対する思いが述べてある。

日本が支那の領土保全を不動の国是として来たのは、其の奥深き根底を、日本人の真心に有しております。(中略) それ故に

何はともあれ、黄河、揚子江の流域が他国の手に奪われるに忍びない、飽くまでも之を漢民族の手に保存させて置きたいというのが、自ずと湧き上がる日本民族の赤誠であります。(中略) 王精衛氏以下の諸君は、興亜の戦に於いて我らと異体同心になつておりますが、支那国民の多数は其の心の底に於て尚お蔭政権を指導者と仰ぎ、日本の真意を覚らんとせず、却つて日本に反抗しつつあることは、悲痛無限に存じます。さりながら明治維新を顧みましても、各藩に勤皇佐幕の対立抗争あり、勤皇諸藩の間に反目嫉視あり、最後に薩長相結んで幕府を倒すに至るまで、如何に多くの高貴なる鮮血が流されたかを思えば、これ亦止むなき次第であります。⁽⁶²⁾

アジア主義者大川周明は、この本の中で、米英は如何にアジアを侵略し、日本は如何にアジアを解放しようとしているか、蒋介石は如何に日本の赤誠を知らず米国の援助で抗日戦争に迷走しているかを説き、そのため、対中戦争には明治維新の如く「高貴なる鮮血が流され」ることはやむをえない、と述べている。つまりアジアを、日本をリーダーとする一つの国のように考え、対中戦争を明治維新に喩え、対米英戦争、対中侵略戦争を合理化するものである。

大川周明はこの本で日本国内を巡回講演し、対米英戦争の熱狂の渦の中に迎えられた。その単行本が出版されてから僅か三ヶ月後の

一九四二年四月に、芸文書房からその漢語訳が「満洲国」の読者の前に届いた。この本は、一九四四年十二月まで、初版二回、再版二回、三版も二回と度重ねて印刷され、これまでの古丁の翻訳の中には、いちばん売れたものとなる。この本の読者はそれぞれいかなる心情でそれを読んだか分からないが、当時「満洲国」で対米英戦争への関心が高まっていたことは事実であった。

対米英戦争が始まってから、「大東亜共栄圏」内の北平、上海各地の芸文界で、民衆と兵士の「鬼畜米英」に対する敵愾心を鼓舞するために米英のアジア侵略の罪悪を暴露する宣伝が盛んに行われている。禁煙英雄林則徐に関する映画の上映、劇団の巡回公演とともに、『英米罪惡史』のような本の編輯出版も行われる。大東亜共栄圏建設の先駆けと自負している「満洲国」でも盛んに行われていた。そして、これらの対米英戦争を宣伝する本の翻訳出版の責務は、言うまでもなく文芸家協会会員、満系作家の代表、満系出版社芸文書房の社長としての古丁の肩にかかってくる。古丁がやりたいかやりたくないかにかかわらず、この翻訳は急いでやらなければならなかったに違いない。翻訳者に芸文志派の主要メンバー爵青(一九一七—一九六二)と外文が名を連ねていることも、それを語つていよう。この本の翻訳も直訳の方法を取っており、初めから終わりまで作者大川周明の意思に忠実に訳している。この直訳の方法は今までの古丁の翻訳と同じである。ただ、違うのは、この本の前にも後ろに

も翻訳経緯等を記した「前書き」や「訳後小記」、つまり翻訳者のことばが掲載されていないことである。ただし、本の最後に「新嘉坡陥落之夜訳竟」の一文が加えられている。シンガポール陥落によって日本はマラッカ海峡の主導権を握ったことを記している。

『米英東亜侵略史』の翻訳者は古丁だけではないが、最後の仕上げは責任者の古丁であり、「新嘉坡陥落之夜訳竟」の一文は古丁が書いたものと思われる。果たして翻訳者はその勝利を祝うためにその一文をつけたのであろうか。

実は、シンガポール陥落の日の一九四二年二月十五日の夜に、古丁は新京の最高級のレストラン「香蘭」で日本人作家林房雄と対談していた。二人の対談の記事は、四月号の『芸文』⁽⁶³⁾に載った。対談の内容は「大東亜戦争の構想」「満洲文化の転換期」「漢民族を認識せよ」「郁々たる日本文化」「硬派文学への提唱」「語系と民族の問題」「一流の憂国者たれ」と小さな項目に分けてある。林房雄の発言は「満洲事変の時に既に日本側の指導者には大東亜戦争の構想があったんですね」と述べているような「新発見」から、「満洲の魯迅になれよ」⁽⁶⁴⁾というような古丁個人に対する要請にまで及ぶ。この対談の中では、太平洋戦争緒戦での勝利で興奮した林房雄と、林の矢継ぎ早の質問に慎重なことばを選びながら答える古丁の態度とが対照的である。例えば、

事（満洲建国）に携わった中心人物は欧米勢力、特にその最後のな力としての米国の打倒によるアジアの解放を目標とし、米
国と闘う準備の下に満洲建国に臨むと云う事をはっきり言っ
てあるのですよ。現在では大東亜戦争も幸いに勃発した。これは
満洲建国の最初の理想であり最後の結論でもあります。

と、林は見解を述べ、そして、

これは是非（満人に）しらせなければならぬですよ。最初から
知って居たらどうだったろう。

と質問する。

知って居たら今迄の満系官吏は、今迄以上に働ける様になる
のではないかと思います。目的がはっきり示されて、それに向
かってはつきりした目標がある訳ですからね。⁽⁶⁵⁾

と古丁が答える。この対談は、日本人作家が一方的に質問し、「満
人」作家がひたすら答える、という日満作家交流のいつものパター
ンで行われているが、その問答には「満洲国」建国に対する日本人
作家と「満人」作家の態度の違いが出ている。古丁は満洲建国の最

初の思想がそのように掲げられていたわけではないことを逆にはつきりさせているようにも読める。

また、対米英戦争の始まりは、「満洲国」在住日本人の文化人にとって「自分たちの努力がようやく報われたという気分させる」ものであったかもしれないが、「満人」は、必ずしも日本人と同じ視線で見えているわけではなく、その思いはもっと複雑である。彼らが米英を相手に戦争の勝利を収めつつある日本にびっくりしたのは事実であるが、長期戦も予想している。例えば、満洲芸文聯盟の機関誌『芸文』（一九四二年三月号）に解半知の「第一建国より第二建国へ」⁽⁶⁶⁾という文章が載せてある。その中で、「戦争は剛開始した許りであるが、我々その長期化を想せねばならぬし、又其の為めの準備をせねばならぬ」（ルビ原文どおり）と言い、シンガポール陥落の勝利は戦争の始まりで、これからの長期戦のために準備しなければならぬと、冷静に戦況を見ている。また、解半知は続けて言う。「我々は建国以来十年、色々の試練を経たが始終共同敵人に逢着せず患難を共にする機会を有たなかつたため、我々各民族は未だ真々に協和しなかつたのだ」と、鋭く指摘してから「我々は『打开窗户说亮话』を以て十周年慶祝、第二建国の口号としたら好^{どう}不好？」と、「満人」に意見なり、要求なりを言おうと呼びかけ、この契機によって日本人と「満人」との真の民族協和を図ろうとしている。つまり、この文章は、満系も日系も力合わせて戦争の勝利

のために頑張ろうとも呼びかけるものであるが、いちばん訴えたいポイントは「真の協和」である。

この解半知という筆名を用いているのが、古丁である可能性が高い。解半知は、満洲文芸家協会のメンバーであること、漢語の俗語に詳しい、つまり満系であること、日系と満系両方の思いに詳しいこと、言語に関心を持ち、特に漢語の漢字に日本語の意味のルビを振っていることなどから考えれば、古丁ほどふさわしい人がいないように思われる。また、かつて『一知半解集』（一九三八年）というエッセイ集を出したことから、「解半知」なら古丁が採用しそうなペンネームとも思われる。いづれにしても、多くの日系は「大東亜共栄圏」の中の満洲建国の合理性を見つけ「報われたように」思っているのに対して、満系はこれから何が起こるか冷静に目を見開いている。（解半知の戦況に対する見方は、一九四二年二月号の『麒麟』に載った文章「解半知先生一夕談話記」を参考にすることもできる。）また、解半知には、これを契機に、「満人」が積極的に発言して日本民族と対等になり、真の「民族協和」を実現しようという希望を持つている。これらのことばから、古丁の一貫した「満人」の民度を高めようとする意欲が読み取れると同時に、彼の民族対等の要求もうかがえる。

シンガポール陥落の夜、林房雄と対談してから帰宅した古丁は、いろいろなことを考えながら『米英東亜侵略史』の翻訳作業を続け

たと思われる。そして終わってから「新嘉坡陥落之夜詠」を記した。実は、「陥落」ということばの意味は中国語と日本語とは微妙に違う。中国語では、「淪陷」ということばもあるように、普通、領土が敵に占領されて失われることを「陥落」と言う。この意味で使ったなら、古丁はイギリス側の立場に立ち、シンガポールを失うことを惜しむことになる。または、イギリスの味方までにならず、ただ日本がそれほど強くなることを望んでいない、それへの対処に困っている、とも考えられる。ただ、当時日本語新聞を始め各新聞に「新嘉坡陥落」と書かれているから、古丁もそれに従う可能性がある。ゆえに、彼は中国語の意味で使ったとは言い切れない。一方、もし、古丁はシンガポール陥落を喜んで勝利として祝おうとすれば、何故その気持ちをいつものように「前書き」か「訳後小記」の中で表さないのか。つまり、「新嘉坡陥落之夜詠」という一言しか記していない古丁には、シンガポールでの日本の戦勝を祝おうとする気持ちまではなかった。この一言は、「満人」としての古丁のこの戦争に対する複雑な心境を表している、『米英東亜侵略史』は自分から進んで翻訳したのではないと語っている、と考えられる。古丁はこのような複雑な心境を抱えたまま対米英戦争の流れに乗ってしまったと思われる。

2 「殲滅せんのみ」

一九四三年五月に文芸家協会が改組され、大東亜連絡部を新しく設け、古丁はその部長に就任する。十一月に文芸家協会の機関誌として中国語雑誌『芸文志』が漸く芸文書房から創刊される。そして、一九四四年五月に刊行された第七号は「奏凱歌而後已」（凱歌を奏するまで）という詩歌特輯号である。この特集の「言公」という欄に「我々の片言も思想戦と神経戦の弾丸に成らなければならぬ。作家はすなわち思想戦と神経戦の戦士である」と書いてあり、この特集の性格を表している。文芸家もまた武装しなければならぬ。では、どのように武装するのか。

- 一 大敵愾心を昂揚する。一 必勝の信念を起こす。一 敵の謀略を破る。一 民族協和を徹底する。一 大東亜共同宣言を闡明する。一 増産、勤労、貯蓄するように国民道徳を昂揚させる。一 民衆防衛を徹底する。一 同盟国の紹介——これらの課題、我々の主張はすべて作家それぞれの筆によって描き出してもらわなければならない。

という。

この特輯号に「必勝吟」「詩人評伝」「詩作」「ドイツ戦争詩抄」「詩劇」等の欄が設けられている。「詩作」欄は創作詩で、中に成絃

（生没年不明）の「国土頌」、石軍（生没年不明）の「過渤海国宮殿」（渤海国の宮殿を通る）、冷歌（生没年不明）の「松花江」が掲載されている。この三つの詩はどれも満洲の土地を詠うもので、露骨な戦争スローガンのような文句はほとんど出ていない。「詩人評伝」欄は「愛国詩人」と評されてきた「屈原」のことが書かれている。

「詩劇」欄は「大地の女兒」（大地の娘）という詩で書かれた脚本で、都市で放浪していた青年が田舎の親と恋人の元に戻る、という物語である。そのほかに、「東亜的古詩源」「詩話」など詩に関する文章が載っている。これらの欄の作品は対米英戦争にまつたく関係がないか、それほど関係がないと思われるものである。そのサブタイトル「奏凱歌而後已」の「戦争勝利まで戦う」という意に添ったのは、「必勝吟」欄と「ドイツ戦争詩抄」欄である。

「必勝吟」欄に掲載されたのは小松の「鉱山行き」、春明の「開拓村」と甘川の「民防衛」で、いずれも戦時情況に緊密に繋がっている。これらの詩の前には日本人の詩人江口隼人（一九〇五—）の「躍起・青年アジア」、西條八十（一八九二—一九七〇）の「国民総意の歌」、武富邦茂（生没年不明）の「太平洋を守る」、と高村光太郎の訳詩が掲載されている。このうち「殲滅せんのみ」はいちばん先頭に掲げられており古丁の訳である。

石川啄木著『悲しき玩具』を翻訳することによって、「詩の翻訳はほとんど不可能」であると感嘆した古丁は、他の詩作をほとんど

翻訳していない。高村光太郎のこの詩は彼の二度目の詩の翻訳となる。

高村光太郎のこの詩は、一九四三年三月の『中央公論』に最初に発表されたが、一九四四年詩集『記録』に収録される。その時前書きが付けられ、中に「ガダルカナル島の米兵わが兵を猿とよび残虐驚くべく、聞く者憤懣せざるはない。一月九日中華民国国民政府対米英宣戦布告、日華共同宣言発表⁶⁷」など詩が書かれた時の社会背景が記されている。訳詩の中にはこれらの記述が入っていない。

詩全体は十九句で、「軽蔑するものは軽蔑せられる」で始まり、「幾千年の歴史今日に集中し、神よびたまひ、われら答え、猛然たる鬱勃の気 今やただ彼等を压倒せんのみ」で結ぶ。我々の「神の兵」は「野獣」の「鬼畜米英」を殲滅しようという主旨の作品である。戦時中活躍していた高名な詩人高村光太郎の詩は、この特輯号を代表するものといえる。

満洲芸文聯盟の機関誌とは言うものの、一九四四年五月『芸文志』は、第七号が「出版用紙を節約するために」分量を百二十頁に減少しなければならなくなっていた。この「編後」にあたる「小大由之」の中の一言から当時雑誌の経営の難しさが読み取れる。実は満語『芸文志』（一九四三年十一月創刊）は、そもそも紙の問題等で日本語版機関誌『芸文』よりずいぶん遅れて創刊された。一九四四年五月の時点になると、『芸文』と比べると、『芸文志』には出版用

紙だけではなく、創作が少なくなり執筆者が足りなくなる問題もある。それは日本の敗色が濃くなり、対米英戦争を謳う「満人」作者が少なくなっているためと思われる。しかし、「満洲国」が続いている限り、満洲芸文聯盟の機関誌としての『芸文志』は継続させなければならぬ。責任者として古丁は途中でやめてはならない。その理由としていくつかのことが考えられる。一つは、杜白雨が言ったように、戦争の状況が悪ければ悪いほど、憲兵、特務の監視が厳しくなる。それは日本の敗戦にそなえて、反日活動が活発になるのを抑えるためである。ゆえに文化人はますます不自由になり、古丁には別の選択肢がなかったと⁽⁶⁸⁾考えられる。もう一つは、先に述べたように第七号の内容には、戦争関係以外の作品も掲載されていた。それは主な中国語雑誌として「満洲国」の「満人」の読書生活に役立つと考えられる。その意味でもこの時期の『芸文志』の存続が必要となる。それゆえ、「詩歌特集」を打ち出し、その中に高村光太郎作「殲滅せんのみ」を翻訳するという古丁の苦心が見えてくる。

3 「宮本武蔵」

一九四四年十月に『芸文志』第十二号が刊行される。これは一九三九年六月創刊の芸文志事務会編の雑誌とは同じ名称を使っているから前の『芸文志』の引き継いだものとも思われるが、それにはそれなりの理由がある。前者は満日文化協会とのかかわりがあるが、

発行所は芸文志事務会となっていて基本的に同人誌の性格を持っていた。後者は満洲芸文聯盟の満語機関誌として出版され、「満洲国」国策を宣伝する戦時下の文芸雑誌である。しかし、誌名も同じであるし、関わっている人もいっしょで、責任者も同じ古丁である。

『芸文志』の創刊号の編輯後記は、雑誌の内容について、以下のよう述べている。①文芸作品のほかに学芸論文も掲載する（文芸作品之外、我們计划添进一些学艺的论文。内容は文芸理論に限らず、芸文各分野に関するものなら採用する。②毎号に日本文学の名作を翻訳紹介する（其次、我們想在这里每期介绍一篇日本文学的名作）。つまり前の『芸文志』と同じように創作をしたり翻訳したりする方向にむかう。

翻訳された日本文学作品として、第一号に芥川龍之介著「地獄変」、第二号に芥川龍之介著「芋粥」、第三号には森鷗外著「山椒太夫」が続く。そして、第十号（一九四四年八月）に載ったのは吉川英治著「宮本武蔵」である。その翻訳者には古丁と爵青と二人の名前が並んでいる。

なぜ「宮本武蔵」を翻訳したのか。『米英東亜侵略史』と同じように、それを説明する前書きも訳後小記もついていない。また、この期の編輯後記に当たる「小大由之」の中には、本集の他の作品についてはほとんど触れているが、「宮本武蔵」については何も記載されていない。この「小大由之」は古丁自らの執筆で、わざと「宮

本武蔵」についての言及を避けたのではないかと思われる。その無言は何を語っているのであろうか。

ところが、次号十一号（一九四四年九月刊行）には爵青と田郷の対談「談小説」（小説を論じる）が掲載されており、その中で爵青が翻訳者の一人として「宮本武蔵」の翻訳について語っている。

まず、翻訳者は二人になっているが、実はその時、爵青が病気にかかっており、あまり仕事が出来なかった。そのほとんどは古丁が翻訳したという。

また、「宮本武蔵」を翻訳した理由として爵青は主に次の三点を述べている。①今まで日本の純文学を翻訳紹介してきたが、それは一部の文学青年にしか読まれていなくて、一般民衆にはなかなか受け入れられなかった。しかし、「満洲国」には日本文学を吸収する義務がある。それで純文学の代わりに大衆文学を翻訳しようと思いついた。②宮本武蔵は一剣客であるが、その剣術の中には日本の武士道精神がこめられていて、日本の国民的英雄である。「満洲国」は親国日本と一体同心であるため、日本の国民的英雄はすなわち満洲の国民的英雄である。③日本の歴史を理解してもらうため。日本の歴史を紹介する本はたいがい理論的で難解なものが多いが、「宮本武蔵」の中には徳川幕府時代の背景知識がたくさん書かれていて、それは簡単で分かりやすい、という。

以上三点は、戦時下の「日満一体同心」の「満洲国」では、とて

も立派な理由になっている。古丁にとっては、特にその①大衆文学への切り替えは確かである。

前の「井原西鶴」の翻訳を論じた時、一九四〇年ころの古丁の文学態度の作者・翻訳者中心から読者中心への変化を確認してきた。ここで古丁の創作態度の変化について少し触れておく。

満洲文壇に登場してから間もない古丁は、「評『紅樓夢別本』」等の文章を書き、新文学と文壇を争奪するいわゆる「鴛鴦胡蝶派」等通俗小説を厳しく批判していた。また、彼は「人に好感と美感を起すもの、何を言っているかわからないもの、人を樂觀させるものを書かない」（不写让人读了起好感或美感的東西、不写让人读了莫名其妙的東西、不写让人读了东观的东西⁶⁹）という創作信条を守った。しかし、一九四三年九月の『青年文化』に、「文芸の実用性はもろろん必要だが、いちばん肝心なのは面白さだ」（文艺之有用固然也必要、而最要紧的、却是有趣）、「世界でいちばん偉大な作品は、往々にしていちばん通俗な作品である、なぜなら、いい作品にはたくさん読者がいるからだ」（世界上最伟大的作品、往往是最通俗的作品、是因爲好的作品、差不多要有多的读者的缘故⁷⁰）と言い、民衆が読んでくれるような作品を書き、民衆に読書生活を促すことを主張し、中国語での通俗文芸を提唱した。ゆえに、この視点から大衆文学『宮本武蔵』を翻訳する可能性が十分考えられる。

爵青の話によれば、長編小説『宮本武蔵』はすべて翻訳されたよ

うであるが、『芸文志』という雑誌にはもちろんその全編を掲載することが出来ない。発表されたのは、『宮本武蔵』のごく一部、「水の巻・優曇華」(二〜四)だけである。この部分は、四条道場の開祖吉岡家が田舎ものの宮本武蔵の挑戦を受け、対決して負けてしまったところから、吉岡清十郎が武蔵への対応に悩み、古参の門人に武蔵をだまし討ちにさせようと決めるところで終わる。これだけの内容では、宮本武蔵の国民的英雄ぶり、武士道精神等は、はっきり出ていないし、日本歴史の記述もそれほど多くはない。爵青が言った「日本国民英雄の回顧」と「日本歴史の理解」という二つの目的はなかなか達成できないと思われる。そもそも『宮本武蔵』を翻訳した動機は爵青の言ったとおりかもしれないが、それは、『芸文志』に載せる時、どの部分を選んで発表するかの基準にはならなかった。つまり、古丁がこの部分だけの内容を選んで発表する理由は別にありと考えられる。では、その理由は何なのか。

掲載された部分の内容は、四条道場を創った兵法名譽の家門で、その宏壮な邸も弟子の数も日本一の京都において随一と言われる吉岡家が、侮辱を受けた。田舎者の挑戦者宮本武蔵に負けてしまい弟子六名が重傷を負い、そのうち二人が死んだのである。挑戦者の相手の宮本武蔵はいかなる人物か。また、吉岡家はいかなるものか。宮本武蔵は作州吉野郷宮本村の牢人で、父や村に来る兵法者、また樹木や山霊に習う武者修業の、間抜けに見える若者である。彼はま

だこれという師もなく流派もないのに、将来吉岡流の一派をなした拳法先生の如く宮本流を創りたいという志の持ち主として登場する。

一方、負けてしまった吉岡家は、先代の吉岡拳法は偉い人で、彼は吉岡流小太刀を創り四条道場を開いた。その人間と徳望は今の弟子門人にも慕われていた。しかし、「塀の内人間が誇ったり、慢じ合ったり、享樂したりしている数年の間に、思い半ばにすぎるような推移をとげていた」⁽¹⁾。若先生の清十郎は父親の死後、修業を怠って、武蔵による侮辱を受けた当日は芸者遊びで外泊していた。帰ってきた清十郎は武蔵と対決しようとするが、無名の牢人宮本武蔵とは言え、既に弟子に数名の死者が出た。清十郎の敗北を危惧する古参の門人が武蔵を騙し打ちにすることを決めた。それを聞いて、清十郎は面は堪えがたい辱めをうけて汚れたが、内心では修業の怠りを省みる暗い気持ちであった。

以上が『芸文志』に発表されたすべての内容である。先代開祖の人間のすばらしさで徳望と名声を手に入れた吉岡家であるが、子孫の墮落と無能さにより衰弱していく。一方、田舎出身で無名でありながら自らの努力によって力強くなり、旧家に挑み、それを破った武蔵がいる。このような墮落して衰退していく旧家と自ら努力して強くなる新人の対照は、五千年の文明を誇りながら列強の餌食になってしまった中国と、遠い海のかなたの島国にもかかわらず明治維新を通じて自ら強くなった日本とを対比する構図のように思われる。

この一段の中では、吉岡家の挑戦者武蔵に対する傲慢な態度、負け後の門人たちの反応、清十郎の外剛内弱な性格等が詳しく書かれている。それはアヘン戦争以降列強にやられつばなしの中国の中で一部の人の墮落ぶりと重なる。そのところが古丁が読者に示したかったものではないであろうか。

「満洲国」の民度は古丁が関心を持つ問題の一つである。一九四〇年の秋、新京で流行したペストのため、古丁一家は一ヶ月近くの病院隔離生活を強いられた。隔離病院の中で彼は日系と比較しながら、満系民衆の民度の低さに驚き、民衆を啓蒙して、その民度を高めることの必要性を痛感した⁽⁷²⁾。それで、彼は通俗文学の提唱を含めて、この問題の解決策を模索していた。この模索は『芸文志』の中で農村、鉱山、鉄道で働いている人の詩を募集したことも繋がるし（勿論これらの詩の掲載は大東亜戦争の弾丸の役割を果たすことを第一の目的としているが）、戦後古丁脚本の編集活動（中華人民共和国成立後、古丁は評劇劇団に入り、農村を題材にした脚本を多く集めて編集した）にも繋がると思われる。今でも中国政府を困らせている農村の教育問題からみれば、この問題に対する古丁の先見の明は認められなければならない。

このように、古丁が吉川英治著『宮本武蔵』を翻訳した理由として、爵青が語ったように日本の国民的英雄を回顧し、日本の歴史を知ってもらう面もあるかもしれないが、実際雑誌に抜き出され、発

表されたものには、中国の墮落と後れ、民度の低さに対する古丁の一貫した批判がうかがえる。

第三段階での古丁の翻訳についてまとめると、第三段階では、大川周明著『米英東亜侵略史』、高村光太郎著「殲滅せんのみ」、吉川英治著『宮本武蔵』を翻訳した。これらは、いずれもいわゆる「大東亜戦争」に協力すると思われるものである。そこから満洲文芸家協会の一会員として「満人」作家代表としての古丁の時局の流れに乗る姿勢が見える。ただ、これらの翻訳の内容を詳しく検証してみれば、古丁の「大東亜戦争」の熱狂の潮流に流されながら、冷静に戦争の行方と時局の発展に目を見開き、終始満系民衆の民度を問題にしている、という姿勢が見えてくる。

(四) 言語の問題から見た古丁の翻訳

古丁の翻訳の理由として、岡田英樹は「文学の質を向上させる」とこと「漢語（中国語）を近代語として成熟させる」ことの二つを指摘した⁽⁷³⁾。それはこれまでの考察からも、その通りであるとうなずけるものである。しかし、さらに、古丁の翻訳を「満洲国」の言語問題において考察してみれば、また別の一面がみえてくるのではないかと思われる。

日本は植民地の台湾と朝鮮では、一九三七年から「皇民化政策」を実施し、領土内で国語として日本語の教育を強制する。「満洲国」

は、表面的に独立した国家の形が取られているので、終始「民族協和」をスローガンとして掲げ、台湾や朝鮮と同じ政策を押し通したわけではない。「満洲国」は一九三七年五月に「勅令」により「学制改正令」や「学制要綱」等学校令を公布し、一九三八年から日本語を「国語の一つ」として国民学校等で教授する。清朝以来の蒙古等少数民族居住区では、国語としては中国語が教えられていたが、これらの学校令によって、これらの地区で次第に中国語をやめて日本語を教えるようになる。⁽²⁴⁾ 事実上、日本語は各民族の共通語となり、その第一国語の地位が確定されている。

一九三九年九月、民生部、建国大学、満日文化協会の発起によって満洲国語研究会が設立される。この会の目的は二つある。一つは「国語」の研究、つまり日本語と「満語」の標準語の語彙の整理、発音の統一、外来語の制限や統制等々を調査して研究することで、もう一つは「国語」の普及である。主に日本語の普及に力を入れている。「満洲国」には二千万人以上の「満人」がいて、その大部分は農村に分散している。都市部の子供なら学校で日本語教育を受けることが出来るが、農村部には学校が少ないので、日本語教育が問題となる。農村の人たちに何らかの形で日本語に触れさせようと色々な考案がなされている。

「満語」つまり中国語の発音の表示法については、中華民国では注音符号を使っていた（台湾では現在も使われている）。「満洲国」で

も、一九三八年までは注音符号が使われていたようであったが、それ以後、廃止されて、学校の教科書においては日本語のカナに切り替えた。また、満洲帝国民生部国語調査委員会が注音符号の代わりに日本語のカナで「満語」の発音を表示することがどこまで可能なのか、について調査していた。そして、一九四一年十月に注音符号の使用が禁止され、さらに、一九四四年文教部から「満語カナ」が公布された。「満語カナ」とは、中国語の発音を表す日本語のカタカナである。例えば「満洲帝国」(man zhou di guo) はマヌ デオウ デイー ゴラ(その上に四声を示す印がつく)と読まれるようになる。⁽²⁵⁾ 「満語カナ」を使用することによって日本語を普及させようとする「満洲国」政府の思惑が込められている。

このような一連の動きに対して、「満人」はどのように考えていたのか、ここで古丁の態度について考察する。古丁の言語に対する態度は、夏目漱石の『心』の翻訳に見られるように、日本語文法の取入れと日本語語彙の借用を積極的に行った。しかし、そこに止まっていたわけではない。

1 言語に対する態度

①作家は母国語で創作するべき

満洲国語研究会は『満洲国語』という雑誌の満語版と日本語版を発行する。その満語版(一九四〇年六月〜一九四一年三月、全八号)

の編集者は陳松齡（辛嘉）で、古丁のグループの一人である。その内容を見れば、専門論文「方塊字与文化」、「方塊字改革談」等もあるが、日本語講座、検定試験の問題と合格者一覧表がその主な内容を占めている。全体的に「満語」専門家が少なく、その調査・研究に関する論文らしいものが少ないという印象を受ける。第三号（一九四〇年八月発行）の史立文「方塊字改革談」では、漢字の注音の模索の歴史を辿っている。「わが国の新字運動史は決して日本より遅れているわけではない。明万曆年間、欧系人利瑪竇（Matteo Ricci 1552-1610）がローマ字を使って漢字の発音を表示したことがある」と回顧してから、民国七年（一九一八年）教育部が注音字母を發布したと、注音符号の成立の経緯を紹介した。

史立文のこの文章の前に古丁の「話的話」が載せてある。この文章の日本語バージョン「話の話」は『満洲国語』日本語版第五号（一九四〇年九月発行）に掲載された。

この文章の内容は『心』の翻訳を検討する時も触れたが、古丁は最初に「漢話」に対する感情を訴えている。「勤務中に『漢話』の話をすることが非常に少なく、求智的には退庁してからも『漢話』を読む時間が少ない」ので、「『漢話』に侘しい郷愁を感じる」。なぜなら、「私は『漢話』を離れては無一文になる文学者だからだ」「私の詩も漢話の中にある」。しかし、古丁は日本の文化人、特に「内地」から来た作家に、日本語で書かないのかとよく聞かれる。

「最近時々私達に対して呼びかけられる言葉を聴く、それは日本語で書けという註文である」。古丁はその呼びかけに反対する態度のほうに共鳴を覚える。なぜなら、「私は言語技師だと認識している。その技師は自己の母国語さへ創造出来ないのだから外国語で何が創造できよう」と思うからである。

古丁は、自分の詩が漢話にあると言い、漢話で創作することを主張する。実は、日本人作家の中にもその主張を支持する人もいる。

一九四〇年「満洲国」の使節として日本紀元二千六百年の記念式典に参列することを契機に、古丁は『文学界』の第七卷第四号（一九四〇年四月）に「満洲文学通信」という文章を寄稿した。その中に「ことばに関する問題に就て島木健作氏、小林秀雄氏が満洲語で書くのが当然であると言われ、林房雄氏は五十年後は日本語で読み書きをするであろうと言われた」と書いてある。古丁が共感を覚えるのは、島木健作（一九〇三—一九四五）や小林秀雄（一九〇二—一九八三）等の意見である。古丁は日本語で書けと呼びかけた人を「ジャーナリスト的文豪」とし、それに対しては「ただ随機応変文化の刺激を追求するを知るだけで、どうして文化建設に参加すべきかを決して知らない。若し根本から文化建設の意欲が無ければ又自ら別論すべきである」と鋭く批判している。満洲芸文聯盟の機関誌『芸文』の一九四三年八月号に、「小林秀雄を囲む」という座談会が載っており、「満人」作家側に古丁と爵青が出席していた。この中で

小林が「僕はジャーナリズムから遠ざかった」と発言する。⁽⁸⁰⁾古丁のこの「ジャーナリスト的文豪」に対する批判も小林秀雄と一致している。このように、古丁は日本語でエッセイを書くが（『朝日新聞』『文藝春秋』『芸文』『満洲国語』日本語版への寄稿）、小説などの創作は漢語でなければならないという態度を守っている。他の日本人作家との対談の中にもその態度を表している。⁽⁸¹⁾

② 文学者は言語の探検をしている

「話の話」で、古丁は、言語の技師である文学者は「話」を発掘し、彫塑し、描写し、弾奏している。小松の感覚の探検が語脈を豊富にし、爵青の文章の探検が語法を精密にする。また、石軍の聴覚の探検が語彙を活発にする、と言う。しかし、漢字自身に欠点があり、「漢字はもう私達の文学的表現を十分に満足せしめることが出来なくなつた」とも言っている。そして、古丁は、山東訛りで書かれた蒲松齡の鬼狐伝や「金瓶梅詞話」に登場した音を表す漢字（擬音語）を例に、漢字で音を表す場合その読み方を表す注音符号がないと意味がないと言い、注音符号の必要性を訴える。また、注音符号はカナより優れていると、長谷川如是閑（一八七五—一九六九）等の文章を引用して説明する。六朝を訪れた日本の留学僧が漢字から仮名を作り、その仮名は又中国に逆流入して注音符号となる。「併し、『拼音』上では『注音符号』は『カナ』に勝っている」と長谷

川の意見を述べる。「『カナ』を漢音の音標としてもかならずしも日本語の普及を成しとげることが出来ない」と、「満語カナ」のような動きに反対する。「話の話」は一九四〇年九月に書かれたもので、その一年後に注音符号は禁止される。

実は古丁が注音符号に関心を始めたのは一九三八年で、ちょうど新学制が実施される年である。その時、古丁は史之子の筆名で『月刊満洲』に「注音符号のこと」という文章を発表した。この文章によれば、一九三八年に注音符号はすでに廃止された。「教科書を見ると確かに見当たらない。何でも仮名で置き換えるそうだ」。⁽⁸²⁾古丁は「私は注音符号というものには原来、愛も憎しみもない。私は寧ろ漢字廃止論者に好感を持っている方だ。だが、廃止しない以上は、矢張り幾千年の歴史を辿つて来た注音符号で、漢字の音を表した方が無難である」と述べている。⁽⁸³⁾また、この文章から、古丁の注音符号に関する知識はほとんど黎錦熙（一八九〇—一九七八）の『国語運動史』（一九三五年）から得たと分かる。

廃止から禁止、注音符号はすっかり「満洲国」から姿を消したのである。しかし、古丁はまだあきらめない。『芸文志』第五号（一九四四年二月発行）「翻訳特集」の「思無邪」欄の中で、古丁は「注音符号の問題（注音符号の問題）」という短文を発表する。この中で、「もちろん、『注音符号』も漢字を置き替える可能性はあるが、それより、その表音における役割が大きい」（固然、注音符号也有代替漢字的企

図、还是在注音方面所收的实效较为巨大)。表音には、注音符号はカナより優れているにもかかわらず、「近来、『カナ』で漢字の音を表すことについては調査されてきたが、注音符号の欠点については何も指摘されていない。これは明らかに『拼音』から『読若法』へ歴史的に逆戻りしている」(近来、较以假名称音汉字、进行调查、但并没有对于注音符号的缺点加以人和指摘。这显然是由拼音复归到读若法)と指摘する。「大東亜宣言には各民族の伝統を尊重すると声明しているので、漢字は廃止できない。そうすれば、五万個の漢字の発音を表すためにただ四十個の注音符号を、たとえいくら思いつきり援用しても何も都合が悪いことはないだろう。おまけに、この四十個の注音符号は日本のカナに学んで作られたものである」(大東亜宣言已經声明尊重各民族的传统、汉字既然不能废止、而区区的给无虑五万个汉字标音的四十个注音符号、即令毅然决然的援用、又有何不可?况且、这四十个注音符号又是学日本的假名而造成⁽⁸⁴⁾)と力説している。漢語で創作する態度を崩さない古丁には、カナで読む漢語は、もはや漢語ではないと思われるであろう。ここで、古丁の注音符号を使うべきだという論点は、「大東亜宣言には各民族の伝統を尊重すると声明している」という基礎の上で成立する。「各民族の伝統を尊重する」とは、「大東亜共栄圏」が掲げていた美しい理念である。当時多くの日本の知識人は、それをよしとしていた。一九四三年八月の第二回大東亜文学者大会に、横光利一(一八九八—一九四七)が

「各民族の伝統を尊重しよう」と挨拶するし、前に言及した「小林秀雄を囲む」という座談会の中で、「満洲の文学がどうなるか」との質問について、小林が、「とにかく満洲の民族を非常に愛する、同情するということさえ作家にあれば、その中からきつと何かが出てくる⁽⁸⁵⁾」と言う。小林秀雄らは、「民族を愛する」「各民族伝統を尊重する」ことを正しい理想とするからこそ「大東亜共栄圏」に協力したと考えられる。古丁の「民族協和」の提唱にもその一面がある。ただし、「満洲国」で注音符号が禁止されていることから、この美しい理念は現実に実現されることが不可能だ、という事実は、古丁の目には明々白々であろう。ここに、「満人」としての古丁と日本人としての小林秀雄らの違いがある。しかし、それにしても、あえて注音符号のことを言い続ける古丁の姿勢には、その「満洲国」の文化政策に些かなりとも対抗心がうかがえる。

実は、「満語カナ」が公表される前に、『東亜カナ一覧表』⁽⁸⁶⁾「仮名反切満華語」等中華民国の注音符号に近いカナも公表されていたが、結局採用されなかった。つまり、漢字の表音問題について主に日本人が考案しており、中には「満語カナ」に反対することを含め色々な意見がある。「満人」古丁の声はその反対意見の一つにすぎず、ほとんど影響力を持たないと思われる。おまけに、古丁の文章は日本人がほとんど読まない満語雑誌『芸文志』に載っている。この文章が発表された後、「満語カナ」が公表されることになる。

2 翻訳における姿勢

① 国立編訳館

古丁は早くから翻訳の必要性を訴えていた。また、チャンスがあれば、国立編訳館の設立も呼びかけた。一九三九年十二月『文藝春秋』第十七卷第二十四号に「満洲文学雑記」を寄稿し、その中に「私は満洲の現段階に於ける文学を限定版文学と称したい」と述べ、限定版を普及版にするために、「文学に限らず、文化全般に互って斯る大出版をやろうと意気込んでいることは全く喜ばしい。しかし、これは単に民間営利事業とせず、国家的事業として、編訳館の如きものを置いて、之に当らせるのが一番望ましい」と、満洲文学を発展させるために国家事業として編訳館の設立の希望を表す。また、前にも触れた「満洲文学通信」という文章の中に、「仏典の翻訳が曾て支那文学に寄与したように、翻訳文学も満洲文学に寄与し得るであろう。(略)機会がある毎に満洲国に於て国立編訳館の如きものを置いて、一大国家的事業として日本其他外国の文化を紹介する事に就て愚見を述べて居ったが、そのこともこういう意味で言ったのであろう」、と続けて満洲文学のためにまた編訳館の設立を呼びかける。⁽⁸⁷⁾

また、「林房雄・古丁対談」の中で、

林・小説に関しては、自分たちがほしいと思う高い水準に達しなければ、国産品たりともこれを否定すると云う覚悟が必要ですよ。日本文学でも、ロシア文学でも、英文学でもよい、今満洲国の文学に対して必要な、或は満洲に居る文化人がこれをよいと思ったものを翻訳紹介するだけでもよいのです。それをやらなければだめである。

古丁・同感です。僕は機会ある毎に言っているのです。国立編訳館と云うものを作って大量的に日本を始め、世界各国の文学を紹介するのだね。⁽⁸⁸⁾

と国立編訳館の必要性を述べていた。

また、第二回大東亜文学者大会の分科会では、古丁は、「国家的常置機関たるべき『大東亜翻訳館』を大東亜中心たる東京に設置され、その分館を新京、南京、北平に設置し大東亜文化ないし文化の伝○⁽⁸⁹⁾たらしめんことが望ましいのであります。これを可及的速かに実現せられんことを切望して止まない次第であります」と大東亜文化ないし文化交流のために編訳館の設立を提言する。この提言は採択され、大東亜編訳館の創設(翻訳委員会の設置)は第二回大東亜文学者大会の議決事項として実践的な解決を約束された。⁽⁹¹⁾そして、実際「大東亜共栄圏」内の北平では国立編訳館が設立され、『国立華北編訳館館刊』(二九四二年十月創刊)という雑誌まで出されてい

た。「満洲国」でも、満洲芸文聯盟の中にも翻訳部門が設置され、杉村勇造がその責任者となる。このように国立編訳館の設立準備が進んでいたが、設立寸前に中止させられた。その理由ははっきり分かっていないが、敗戦に向かって追い込まれている時期で予算がつかないことも考えられるし、国務院の弘報処の統制のためとも考えられる。これで、「満洲国」国立編訳館はとうとう設立されなかった。

一九四四年九月号の『新満洲』（満洲図書株式会社）に「満洲編訳館の創立」（満洲編訳館の創立）という特輯が出された。大内隆雄が「關於満洲編訳館之創立」（満洲編訳館の創立について）という文章を書き、その中で、「我々は現段階の満洲国では、民間団体の編訳館の創設が求められていると主張し、今簡素な機構として満洲編訳館を創設した」と述べる。古丁らはあきらめずに、結局国立の代わりに民間的な編訳館を設立したというのである。

② 翻訳と「民族協和」

「満洲国」では国立編訳館のような機関が望ましいと思う人がほかにもいた。『満洲国語』日本語版 第七号（一九四〇年十一月）には筒井俊一の「翻訳論」が載っている。

同文同種とはいえ語族的には全く別人である満語満文と日語日

文とが歩みよって、何か日満協和語などというものが出来るなどとはとんでもない話である。

（略）満洲文学が日系の満語小説である筈もなく、満系の日語小説である筈も亦ないのである。（略）協和とは相互理解の上のみなりたちうるものである。日滿人の結婚や日系の滿人化、満系の日人化は民族協和の本旨でない。

（略）文学が民族の生命であるとすれば、他の如何なるものよりも文学と文学との接触・交流こそが何よりも先ず活発豊饒になされねばならない。その為には現在の如く家内工業的翻訳労作では多くを望めない。（略）翻訳家こそは組織化され国家的事業化されねばならぬ。⁽²⁾（略）

満語と日語とは語族が全く違うから歩みよることが出来ない、「協和とは相互理解の上のみなりたちうるものである」、そのため組織化された国家事業として翻訳を行わなければならない、と筒井は自分の意見を述べている。いわば、「民族協和」のための翻訳といえる。つまり、「民族協和」という国家政策から国家事業としての翻訳を行うべきだと言っている。

『芸文指導要綱』が公布されてから、古丁の翻訳についての訴え方が少し変わってくる。一九四一年十月に刊行された芸文志事務会編「訳叢」は、古丁、小松、疑遲、爵青等の翻訳短編小説集である。

中には日本を始め、フランス、ロシア、イギリス等の作品が載せてある。「序」は「翻訳研究会」⁽⁹³⁾の中心人物大内隆雄が書いたもので、中に「世界芸文の精化を紹介することが我々の芸文創造に欠かせない重大な任務である。これについて、先日発表された『芸文指導要綱』にも明示された」(紹介世界芸文の精華、是为了充实我们艺文创造所不可缺的重大任务。关于这些、在头些日子发表的艺文指导要纲里也有所明示。)とような文章がある。そして、目次の後、本文に入る前に「須以移植我国土之日本文艺为经、原住民族固有之文艺为纬、取世界文艺之粹、而造成浑然独特之文艺为目标。——『芸文指導要綱』——」(此の国土に移植されたる日本文艺を経とし、原住諸民族固有の芸文を緯とし、世界芸文の粹を取り入れ織り成したる渾然独自の芸文たるべきものとす)という『芸文指導要綱』の内容を引用し、特に「取世界文艺之粹」を太字にしている。古丁らはいかに『芸文指導要綱』に従って翻訳しているかを示しているように見える。『芸文指導要綱』については、「林房雄・古丁対談」の中で、古丁は「その理念は非常に結構なものだと思っているが、やり方として日系方面のものを主にやるという事は考え物である」と発言している⁽⁹⁴⁾。古丁のこの一言は、スローガンや理念を高く美しく謳い、実際にはスローガンや理念と違うやり方で行う、という「満洲国」の政策の本質を暴露したと言える。

一九四二年以後、「満洲国」は満人に聖戦完遂のために勤劳奉公

せよと要求する。そのため、「民族協和」というスローガンはもっと高く掲げられるようになる。前に触れた解半知の「第一建国より第二建国へ」という文章もこのような社会背景の中で書かれたものである。

一九四三年「駱駝文芸叢書」の一冊として芸文書房から大内隆雄の漢語エッセイ集『文芸談叢』が出版された。これを契機に、古丁は「用漢文写」⁽⁹⁵⁾という短文を書いた。文章は大内隆雄の地道な翻訳活動を評価しながら、「日本人は漢文で書く歴史が長いが、漢文の白話で書くのが、私の寡聞の限りそれほど多く見られない。大内氏のこの文集は一つの始まりとなるかもしれない」(日本人用漢文写、有很悠久的历史、而日本人用汉文的白话文写、在我的寡闻里、却不多见、也许大内隆雄氏此集竟是一个开端)と述べ、「文人の魂と魂の交流は、先ず筆と筆の交流だ。相手の言語で書くことは、相手の言語を翻訳することと同じく有意義だ」(文人的魂和魂的交流、须先有笔和笔的交流。彼此用对方的语言文字来写和彼此用自己的语言文字来译、都同样是有意义的工作)という意見を述べ、日本人知識人と魂の交流を望んで、そのために、自国のことばでの翻訳と相手のことばでの執筆が同じように重要だと言っている。

前に言及したが、満洲国語研究会の目的の一つは「国語」の普及である、と規定されている。その普及は、主に満系に日語を教えることであるが、基本的に日系も「満語」を習う必要がある。また、

三 結 論

一九四三年八月に発布された「協和会運動基本綱領」にも、日系の課題として「満語」の習得を掲げている。このような政策背景の中で、大内隆雄のこのエッセイ集は、まさに日系の「満語」学習の模範となり、それを賞賛する古丁は、協和政策に則っていることとなる。「満洲国」の中では相手の言語を学ぶことは、すなわち相手の民族を尊重することである。ここでも、前の注音符号のと同じように、古丁の些かな反抗が見え、漢語と漢語文化を守る姿勢が見える。

このように、古丁は翻訳と国立編訳館設立を一貫して主張してきたが、「満洲国」の政策の変化にともないその目的が少しずつ変化している。満洲文学の質の向上から、『芸文指導要綱』にそって、そして「民族協和」へと次第に変わる。支配されている「満人」として、古丁は、その翻訳の理想を実現させるために「満洲国」の文化政策に追随し、それに乗る。解半知が「自信があり理由がたつものなら、何故主張せぬのか？ 人家面前は聴かないと云う前に、主張する熱意のない傍観的な不協力態度を反省しよう」と「満人」に言っていたが、古丁は注音符号についても国立編訳館についてもはっきり主張してきた。

古丁は長春の町で満鉄の公学堂と中学堂の教育を受け、日本文学や文化への親しみが培われた。一九三二年九月の満洲事変により、古丁は北平に亡命する。そして、一九三二年新たに北京大学に入學して、一九三三年中国左翼作家聯盟北方部に入り、組織部長に選ばれる。そして、日本プロレタリア文学作品、朴能著小説「味方——民族主義を蹴る——」、岩藤雪夫著小説「紙幣乾燥室の女工」と、古川莊一郎著論文「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」を翻訳した。

この時の古丁は、当時の中国共産党指導下の無産階級革命現実の必要に応じてテキストを選び、その基準としては、日本文学を紹介することより、現実の中国革命に役立つかどうか優先していると思われる。それゆえ文戦派岩藤雪夫の小説を翻訳しながら戦旗派の蔵原惟人の論文も翻訳する。この時、古丁は「味方——民族主義を蹴る——」を翻訳して無産者階級の国際連帯を訴え、「紙幣乾燥室の女工」の翻訳を通して中国女工の闘いを応援する。また、「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」の紹介により中国の左翼文学理論建設のために尽力する。

この時期の翻訳の方法は、初心者がよく行うような直訳であるが、中には中国の現実にあわせるために中国風にアレンジしたり原文の

内容を増やしたり減らしたりすることもあった。これらの作品の翻訳から、古丁は左翼革命に燃えているが、弾圧に備える構えができていない。そのためか、彼は逮捕されたらすぐに変節してしまった。

「満洲国」では、古丁は数多くの日本語作品を翻訳した。そのテキストの傾向からその翻訳は三つの段階に分けることが出来る。すなわち、第一、現実への抵抗の態度が窺えるものを翻訳する段階（一九三七年）。この時期彼は「魯迅著書解題」と石川啄木著「悲しき玩具」を翻訳した。北平から帰って間もない古丁は、逮捕によって負ってしまった心の傷と「満洲国」の抑圧された社会環境のため、不自由を感じ、苦悶する。彼は絶望に瀕し、一生懸命に希望を見出そうとする。そのような心情の表れとして、この段階の翻訳のキーワードは「希望」であり、彼はそれを以て自分自身と満洲の文学青年を励ます。

この時期の翻訳も基本的に直訳である。しかし、左翼や反日と思わせる単語や文章を削除したり書き替えたりする。それは「満洲国」の厳しい取り締まり政策に対応しながら、魯迅を満洲の読者に紹介するための戦略でもあった。

第二段階（一九三八年～一九四一年）は、いわゆる文学作品の翻訳を主とする。主に夏目漱石著『心』と武者小路実篤著「井原西鶴」を中心にその特徴を検討した。この時期の古丁は、小説創作に精力を打ち込んでいるため、翻訳も小説の技巧を学ぶために行ったと思

われる。『心』の翻訳から心理描写を学び、「井原西鶴」から伝記の書き方を習う。

作者への忠実さを徹底させた『心』の直訳には、漢語に日本語文法と語彙を取り入れる実験が見られ、明清時代の白話小説からの口語の借用も目立つ。しかし、「井原西鶴」の翻訳は読者の立場に立ち、「註」をつける等読者により理解してもらおうための工夫が見られる。『心』から「井原西鶴」まで、古丁の文学的立場は作者・翻訳者中心から読者中心へと変わり始めていると見られる。

第三段階（一九四二年～一九四五年）で大川周明著『米英東亜侵略史』、高村光太郎著『殲滅せんのみ』、吉川英治著「宮本武蔵」を翻訳した。これらのテキストは、左翼傾向的なものでもなければ、純文学的なものでもない。表面的にみれば、いずれも時局的なもので、いわゆる「大東亜戦争」に協力するものとなる。これらのものの翻訳から、「満人」文芸家代表、満系出版社芸文書房の社長として、古丁は確かに「鬼畜米英」との戦争の潮流に乗り「民族協和」宣伝の国策の先頭に立っていた、ということが言える。また、『米英東亜侵略史』の翻訳から、「大東亜戦争」に複雑な心境を抱えながら時流に乗っている古丁像が浮かびあがる。「殲滅せんのみ」の翻訳には、『芸文志』を継続させるために苦心する古丁も見える。「宮本武蔵」の翻訳のうち、雑誌掲載分には、古丁の作品の一貫した「満人」の性格と民度に対する批判が読み取れる。

古丁の翻訳活動を「満洲国」言語問題の中において見ると、一九三八年から「満洲国」政府は学校の中で国語としての日本語教育を強化するとともに、「満語」を日本語と何らかの関係付けをしようとする。それで、中華民国で使われている注音符号が禁止され、日本語のカナで漢字の発音を表す「満語カナ」が公布される。それに対して古丁は、「満人」作家は漢語で創作しなければならぬ、しかし、漢語の中には欠陥があるから、翻訳を通して新しい語彙と語脈を取り入れる必要がある、新しい語彙を作る場合にも、注音符号が必要である、また、表音の役割において、注音符号は日本語のカナよりすぐれている。「大東亜宣言」には各民族の伝統を尊重すると声明している」ので、漢字が廃止されない限り、注音符号は使われるべきであると主張しつづけていた。これほど注音符号にこだわる古丁には、日本語普及の強い勢いの中で漢語と漢語文化を守る姿勢がうかがえる。

「満洲国」時代、古丁の日本文学と文化への理解は、一部の日本の文化人の考え方への共感を生み、彼等といっしょに文学や文化事業を行うようになった。「各民族の伝統を尊重する」という理念をよしとするから「大東亜共栄圏」に協力する一部の日本の文化人と同じように、古丁は「各民族平等」「魂と魂の交流」という真の「民族協和」を望む。しかし、「満洲国」で美しい理念と現実のやり方との間のギャップをはっきり見ている古丁は、その美しい理念の

実現の不可能性を知っている。これは、彼と、ふだん「内地」に閉じこもり、その理念の実現の方法に詳しくない日本文化人との違いである。これは宗主国の文化人と植民地の文化人との違いでもある。

注

(1) 「満洲国」では中国東北地方に住んでいて中国籍を持つ人は民族を問わずに「満人」と呼ばれる。そして、中国語(漢語)は「満語」と呼ばれる。ゆえに、「満人」にはエスニックの満洲民族の人が含まれているが、漢族等の民族も含まれている。「満語」も満洲族の言語ではない。これらは日本人が「満洲国」を中華民国から切り離そうとするための政治性が込められた呼称である。

(2) 岡田英樹「日本語と中国語が交差するところ——『満洲国』における翻訳の実態」「満洲国の文化——中国東北のひとつの時代」、西原和海・川俣優編、せらび書房、二〇〇五年三月二十五日、七二—九〇頁

(3) その研究の目的は論文「古丁と大東亜戦争——大東亜文学者大会と三つの作品をめぐる」(国際日本文化研究センター『日本研究』第三十二集、角川学芸出版、二〇〇六年三月 一一九—一四八頁)の中で説明したので、ここでは省略する。

(4) これについて鉄峰の論文「古丁的政治立場と文学功績」(『北方論叢』一九九三年第五期 哈爾濱師範大学北方論叢編輯部)を参照した。また、私は古丁の妹徐青氏に電話インタビューし、古丁が東北大学に一年間在学していたという証言を得た。東北大学は満洲事

変後、北平に引越したことから古丁の一九三〇年秋の東北大学への入学が確実となる。

- (5) 「(一九三三年六月) 左聯常委改組。新参加の徐突微が組織部の責任を持つ(組織部長となる)。(陸万美「憶戦闘的、北平左聯」和「北平文総」)「北方左翼文化運動資料汇编」中共北京市委党史研究室等編、一九九一年六月、北京出版社、三五—頁)

- (6) 本論文の引用などについて、日本語は新字新仮名、中国語は簡体字とする。

- (7) 朴能「味方——民族主義を蹴る——」『プロレタリア文学』一九三二年九月号、七四—七五頁

- (8) 前掲、朴能「味方——民族主義を蹴る——」七五頁

- (9) 『文学雑誌』第二号、一九三三年五月、一三五頁

- (10) 「発表年月日と掲載文献」『日本プロレタリア文学集・十「文芸戦線」作家集・(一)』新日本出版社、一九八五年十一月、四〇—頁

- (11) 原文 岩藤雪夫「紙幣乾燥室の女工」『改造』、一九三二年、五月。①八九頁②③九五頁④八九頁⑤一〇四頁⑥一〇二頁⑦⑧八九頁⑨一〇三頁

訳文 『文学雑誌』第三・四合併号、一九三三年七月。①一五五頁②③一六一頁④一五四頁⑤一六八頁⑥一六七頁⑦⑧一五五頁⑨一六八頁

- (12) 「办横死小林遺族募捐启」『文学雑誌』第二号、西北書局、一九三三年五月、一二—五頁

- (13) 上海『中華日報・十日文学』第五号

- (14) 原文 古川莊一郎「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘

争——忽卒な覚え書——」『ナック』、一九三二年十一月号。①一〇頁②一頁③二頁④一三頁⑤一四頁

訳文 「在艺术理论中的列宁主义的斗争」『水流』第二卷一期、北平水流社、一九三三年七月。①二三頁②二四—二五頁③二六頁④二七頁⑤二九

- (15) 古丁の就職は難しく、たくさんの人に頼んだ。結局、公学堂時代の先生のコネで国務院に就職するようになった——これは古丁の妹徐青氏の証言である。五歳偽り云々は、疑遲(李青訳)「雑誌『明明』の回想」(『文学・社会へ 地球へ』三一書房、一九九六年九月)によるものである。

- (16) 満人官吏日本留学の件 陸軍省——関東軍参謀長 西尾壽造 昭和九年九月二十五日

アジア歴史資料データベース <http://www.jacar.go.jp/DAS/meta/listPhoto>

- (17) 疑遲の回想によれば、芸術研究会の最初のメンバーは古丁、外文、疑遲三人で、後辛嘉が加わって四人となった。(前掲、疑遲・李青訳「雑誌『明明』の回想」四三四頁)

- (18) 前掲、疑遲(李青訳)「雑誌『明明』の回想」四三二頁

- (19) 古丁「奮飛・自序」、月刊満洲社、一九三八年五月

- (20) 本文表参照。

- (21) 『芸文指導要綱』(一九四一年三月公布)

- (22) 東方国民文庫は満日文化協会から出版されたもので、日語部と満語部がある。同じ本のそれぞれ日語版と満語版が刊行されることもある。例、藤山一雄著『新満州風土記』、武藤富雄著『発明と自

由恋愛』。

- (23) 黒竜江民報事件…一九三六年六月十日関東軍が『北滿共産党全面逮捕の命令』を出して、『黒竜江民報』の社長の王甄海とその文芸欄の編輯者金劍嘯がそれぞれチチハルと哈爾濱で逮捕され、七月他の二十九名と軍事法廷で裁判される。そのうち、王、金ら五人が死刑を執行される。口琴社事件…一九三七年四月、『哈爾濱口琴社』のメンバー侯小古等が『瀋陽の月』等抗日の歌を歌ったため、十八日哈爾濱警察庁特務科に逮捕され、九月に刑死した事件。
- (24) 「評『紅樓夢別本』」「一知半解抄」、月刊満洲社、一九三八年、一一―二四頁
- (25) 陶明濬『紅樓夢別本』『大北新報』連載、単行本出版年月、出版社不詳。受賞のことは一九三六年十二月十五日『盛京時報』に発表。
- (26) 『奮飛・自序』、月刊満洲社、一九三八年五月
- (27) 前掲『奮飛・自序』
- (28) 原文 『大魯迅全集』第四巻、改造社、一九三七年。①四九六頁②③四九七頁④四九七―四九八頁⑤四九八頁⑥五〇〇頁
- (29) 古丁「大作家隨話」「一知半解集」、月刊満洲社、一九三八年、三八頁
- (30) 于耀明『周作人と日本近代文学』、翰林書房、二〇〇一年十一月、五三一―六〇頁
- (31) 古丁訳「悲哀的玩具」『明明』第二巻第三期「日本文学紹介特輯」一九三七年十二月、七頁
- (32) 前掲、疑遲（李青訳）『雑誌『明明』の回想』、四三四頁
- (33) ほかに「偶感偶記並余談」（「一知半解集」、月刊満洲社、一九三八年）に「由他去罢」、「心」訳後小記に「也由他去罢」等がある。
- (34) 古丁「墨書」『浮沈』、満日文化協会・詩歌叢刊行会、一九三九年十二月、九一頁
- (35) 辛嘉（大内隆雄訳）「古丁に就いて」『滿洲浪曼』第三巻、滿洲文祥堂、一九三九年／呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修（『滿洲浪曼』第三巻）、ゆまに書房、復刻版、一一九頁
- (36) 古丁訳、ゴーグリ著「狂人日記・後記」『明明』第二巻第四期、月刊満洲社、一九三八年一月 三三頁
- (37) 『訳叢』、芸文志事務会編、芸文書房、一九四一年十月、五四頁
- (38) 文協は満日文化協会のことで、杉村さんは杉村勇造のことである。杉村は一九二四年から三年間北平に留学し、金石学と書誌学を学ぶ。一九三二年満洲に渡り、満洲国立博物館、満洲国立図書館などの設立に携わる。一九三三年から満日文化協会の設立に従事。その後、満洲の文化事業に尽力。戦後、中国書・画・陶磁器等芸術に関する著書が数多くある。
- (39) 疑遲がその回想録にこう述べる。月刊満洲社社長城島舟礼（一八九二―一九四四）は、自己宣伝が好きであるが、ケチである。「城島文庫」が出版された時、名前は貸してくれたが、実は金は一文も出していない。（前掲、疑遲著・李青訳「雑誌『明明』の回想」、四四三頁）
- (40) 夏目漱石著古丁訳『心』訳後小記、満日文化協会、一九三九年十月、二六四頁
- (41) 古丁「消閑雜記」『文選』第一輯、王秋蜜編、文溯書局、一九

- 三九年十二月
- (42) 辛嘉「關於古丁」陳因編『滿洲作家論集』実業印書館、一九四三年六月、一〇三—一〇九頁
- (43) 短編集『奮飛』（月刊滿洲社、一九三八年五月）に収録された作品はほとんどそうである。
- (44) 古丁訳『心』、満日文化協会、一九三九年十月、二六五頁
- (45) 『譚 談四 友情・小松』、芸文書房、一九四二年十一月、五六—五七頁
- (46) 夏目漱石『こゝろ』、一九一四年九月、岩波書店、夏目漱石『こゝろ』漱石文学館名著復刻、日本近代文学館、一九七六年六月。
- ① 二九七頁② 二二五頁③ 三二九頁④ 二二七頁⑤ 三二三頁⑥ 三四七頁⑦ 三四一頁⑧ 二六頁
- (47) 『心』古丁訳、満日文化協会、一九三九年十月。① 一八〇頁② 一三六頁③ 一九七頁④ 一三七頁⑤ 一八九頁⑥ 二〇七頁⑦ 二〇三頁⑧ 一三六頁
- (48) 『心』周炎輝訳、瀛江出版社、一九八三年十月。① 一八三頁② 一三四頁③ 二〇二頁④ 一三五頁⑤ 一九二頁⑥ 二二二頁⑦ 二〇八—二〇九頁⑧ 一三四頁
- (49) 『心』周大勇訳、上海訳文出版社、一九八三年一月。① 一八三頁② 一三五頁③ 二〇一—二〇二頁④ 一三六—一三七頁⑤ 一九三頁⑥ 二二二頁⑦ 二〇八頁⑧ 一三六頁
- (50) 前掲、古丁訳『心』① ② 一三五頁③ 一六六頁④ 一六七頁⑤ 一七〇頁⑥ 一七一頁⑦ 一七四頁
- (51) 古丁「話の話」『滿洲国語』日本語版第五号、滿洲国語研究会、一九四〇年九月、二三頁
- (52) 前掲、辛嘉「古丁に就いて」、一二〇頁
- (53) 前掲、古丁「話の話」、二〇頁
- (54) 「翻訳にかんする通信・返信」『二心集・南腔北調集』魯迅全集』第六卷、竹内実・吉田富夫訳、一九八五年四月二十五日、二一〇—二一八頁
- (55) 前掲、古丁「消閑雜記」、一二二頁
- (56) 『麒麟』創刊一周年記念号、滿洲雜誌社、一九四二年六月
- (57) 紅野敏郎「解説」『武者小路実篤全集』第十卷、小学館、一九八九年六月、六六七頁
- (58) 古丁「小記」『井原西鶴』『芸文志』第三輯、一九四〇年六月、三九頁
- (59) 「建国を語る」『芸文』三月号、芸文社、一九四二年三月、一七八—二〇〇頁
- (60) 鈴木貞美 解説「臨時増刊『大東亜戦争号』」『芸文』第二卷、呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修、株式会社ゆまに書房、二〇〇七年七月、六頁
- (61) 山田清三郎「転向記（第二部）・嵐の時代」、理論社、一九五七年九月、一一五頁
- (62) 大川周明『米英東亜侵略史』、第一書房、一九四二年一月、一五八—一六〇頁
- (63) 「林房雄・古丁対談」『芸文』四月号、芸文社、一九四二年四月、一四六—一五六頁
- (64) 前掲「林房雄・古丁対談」一四六頁、一五五頁

- (65) 前掲「林房雄・古丁対談」一四六頁
- (66) 解半知「第一建国より第二建国へ」『芸文』三月号、芸文社、一九四二年三月。
- (67) 『高村光太郎全集』第三卷、筑摩書房、一九五八年二月、四七八頁
- (68) 二〇〇七年八月、筆者が杜白雨をインタビューした時、終戦直前の古丁の「協力」問題について質問し、杜がそのように答えた。
- (69) 古丁「偶感偶記併余談」『知半解集』、月刊満洲社、一九三八年、六七―六八頁
- (70) 「誌上聚談」『青年文化』一卷二期、満洲青少年文化社、一九四三年九月、四一―四三頁
- (71) 吉川英治「宮本武蔵・一」、『吉川英治全集』十五、講談社、一九八〇年二月、一三二頁
- (72) 梅定娥「古丁と『大東亜戦争』」『日本研究』第三十二集、二〇〇六年三月、一一九―一四八頁参照。
- (73) 前掲、岡田英樹「日本語と中国語が交差するところ——『満洲国』における翻訳の実態」、七二―九〇頁
- (74) 于逢春「『満洲国』の蒙古族に対する日本語教育に関する考察」『広島大学大学院教育学研究科紀要』、二〇〇二年二月、二〇〇頁
- (75) 安田敏朗「帝国日本の言語編制」、世織書房、一九九七年十二月、二五七―二五九頁
- (76) 史立文「方块改革談」『満洲国語』満語版、第三号、一九四〇年八月、一一頁
- (77) 古丁「話の話」『満洲国語』第五号、一九四〇年九月、二〇頁
- (78) 古丁「満洲文学通信」『文学界』第七卷第四号、一九四〇年四月、一七一頁
- (79) 前掲、古丁「話の話」、二二頁
- (80) 前掲「林房雄・古丁対談」、六四頁
- (81) 浅見淵「文学と大陸」、図書研究社、一九四二年四月、二〇頁
- (82) 史之子(古丁)「注音符号のこと」『月刊満洲』第十一卷第八号、月刊満洲社、一九三八年八月、一六一―一六二頁
- (83) 前掲、史之子(古丁)「注音符号のこと」、一六二頁
- (84) 丁(古丁)「思無邪」『芸文志』第五号、一九四四年二月、引用順で六頁、六頁、七頁
- (85) 「小林秀雄を囲む」『芸文』第二卷第八号、満洲芸文聯盟、一九四三年八月、七二頁
- (86) 前掲、安田敏朗「帝国日本の言語編制」、二五五頁
- (87) 古丁「満洲文学雑誌」『文藝春秋』第十七卷第二十四号、一一〇頁、一七一頁
- (88) 「林房雄・古丁対談」『芸文』一九四二年四月号、芸文社、一五三頁
- (89) 読み取れない文字。
- (90) 古丁(大内隆雄訳)「第三分科会 翻訳委員会の設置」『文学報』、第三号八面、一九四三年九月十日
- (91) 山田清三郎「実践議決事項について」『満洲公論』第二卷第十号、満洲公論社、一九四三年十一月
- (92) 筒井俊一「翻訳論」『満洲国語』日語版第七号、一九四〇年十一月、一六一―一七頁

- (93) 「翻訳研究会」の活動は大内隆雄を中心に行われ、古丁等がそのメンバーであるというくらいは分かっているが、それ以上の詳細は不明。
- (94) 前掲「林房雄・古丁対談」、一五〇頁
- (95) 『芸文志』第五号、芸文書房、一九四四年二月、一〇―一一頁
- (96) 前掲、解半知「第一建国より第二建国へ」

野口米次郎のラジオと刊行書籍に見る「戦争詩」

——『宣戦布告』と『八紘頌一百篇』を中心に

堀 まどか

はじめに

野口米次郎が「戦争詩」を書いて「戦争協力をした」ことは、広く知られてきた。このことは、野口自身や彼の日本語詩歌に対する否定的評価を決定づけてきた。「戦争詩」といえば、そこに犯罪性の所在やプロパガンダとしての有用性を云々する論評が支配的だったことは、ひとり野口に限らない。しかし、「戦争詩」にも戦時期の思想哲学同様に、それ以前からの系譜があり、モダニズム思想・モダニズム文学との連携がある。そうした背景に目配りしない限り、日本近代文学史における「戦争詩」を説明することにはならないだろう。

野口米次郎は、敗戦後に吹き荒れた「文学者の戦争責任」糾弾によって、『侵略戦争のメガフォン』として『文学上の生命を葬』ら

れてきた詩人である⁽¹⁾。現在においても、野口はその戦時期言説に対する嫌悪と軽蔑の評価軸から解放されていないといっても過言ではない。戦争詩を個々の詩歌の検証とその近代詩歌史における位置づけという両面から繙いた『声の祝祭』(一九九七)の中で坪井秀人氏は、野口米次郎を『戦争屑詩を量産した拙劣な詩人』と呼び、⁽²⁾ 次のように評価している。

高村光太郎とともに重要な戦争詩人に数えられる一人に野口米次郎がいる。重要、というのは彼がすぐれた戦争詩を書いたからではもちろんない。英語で詩を書き始め日本人としては恐らく最初に欧米の文壇からお墨付きを貰ったヨネ・ノグチの詩は、日本語で書かれた物について見るかぎり読むにたえるものは少ない。彼が戦争詩の文脈の中で重要なのは、『二重国籍者』と

いう過剰な選良意識が〈大東亜〉建設の選良意識にスライドしている点(彼には「起てよ印度」なる著作がある)、第二に翻訳調の妙なポーズが全き日本語に豹変して熱烈な愛国詩を書き、その多くが朗読されている点からである。(括弧内、坪井氏)⁽³⁾

坪井氏は、《彼は戦争詩を書いたがそれによって彼の詩業の価値は些かも損なわれるものではない》式の評言⁽⁴⁾は、《見苦しい弁明》どころか《罪深い》と述べているのだが、本論は、詩人が「戦争詩」を書いたことの「罪」の是非などには全く囚われない。「戦争詩」イコール「戦意昂揚詩」と捉えて「犯罪性」「暴力性」を見るといった従来の戦争詩評価の認識を離れ、むしろ「戦争詩＝戦意昂揚詩」のレットルで顧みられなかった詩人個人の多義性を解明したい。読むに堪えない「戦争詩」と一括してしまったことで、声を制限された詩人たちの生命を賭けた一篇を見てこなかったのではなにか、と考える。無論、一篇の知られざる詩篇によって、戦時期プロパガンダとしての公的役割と責任が解消されるなどと考えているわけではない。時代と文化の総体を捉えるために、必要な検証ではないかと考えるからである。

いうまでもなく、この時期の検証は、野口米次郎個人の再評価のためにも避けて通ることはできないが、日本の近代文学の歴史にとっても重大な課題である。検証すべき課題は数限りなく出てくるの

だが、本稿では、野口米次郎の知られている側面(ラジオ放送への関与)と知られていない側面(戦時下で刊行された書籍)をいくつか具体的に取り上げて分析することにより、今後の研究の指針と手がかりを示したいと考える。

本稿では、一九四〇年代、野口が詩作を通してどのような時勢に関与したのか、またその時流を逸脱していたのかについて考察する。特に、GHQに没収されることになる『宣戦布告』と『八紘頌一篇』を中心にして詩歌を考察する。

一 「戦争詩」というジャンル

ここでまず、「戦争詩」というジャンルとその定義について、確認しておきたい。戦争をテーマとする詩は、古今東西、叙事詩をはじめとして幅広く存在する(二〇世紀初頭には、日本の「短歌」や「俳句」が自然ばかりをテーマにして戦争や勇士などを詠っていないことを理由に、正統な文学とはいえないと論じる傾向も強かった)⁽⁵⁾。戦争を題材とする詩歌は、日本の近代詩(当初は新体詩)と近接した存在であったと考えるのも良いのかもしれない。日露戦争の頃にも多くの作例がある。⁽⁶⁾

しかし、現在の日本で「戦争詩」というときに想起されるのは、第二次世界大戦期の詩歌である。この「戦争詩」というタームは、戦時期に「愛国詩」「国民詩」と呼ばれていたものを、戦場体験や

戦闘を素材とする「戦争詩」に含めていう呼称である。つまり戦後に、戦時中に作られた詩の全てが、「戦後詩」に対比させる形で「戦争詩」と一括して扱われ、現在に至っているのである。「愛国詩」「国民詩」「戦意昂扬詩」などの境界線は、確かに曖昧ではあるが、「戦争詩」の全てが「戦意昂扬」を目的としてはいないということ、を、まず基本として意識しておかねばならない。

日本の近代詩は、一九三〇年代から四五五年にかけて「愛国詩」「国民詩」「戦争詩」の量産された時代を迎える。いうまでもないが、この時代は、ラジオの全国普及と重なる。このラジオ放送の視点から、つまり「戦時期の新メディアと戦時期詩歌の相関関係」といった観点から考える場合に、戦意昂扬と政治性、犯罪性や「声の暴力性」といった結論が導かれることには、それなりの説得力がある。実際、当時は、文化的なものが政治的に配置され、詩歌が朗読とからまって戦争遂行を鼓舞する力となり得ていた。

ただ、ラジオ放送の視点のみから考えると、「愛国」や「国民」をうたった詩の背後にあったはずのもの、即ち当時代に生きる人々が戦意昂扬に託した理念や、「戦争と文学」に関するさまざまな議論、個々の詩人がそこに至る必然と葛藤などは、全く無視される。ラジオの機能性や政治性に乗ったものばかりが、恣意的に抽出されたにもかかわらず、これが戦時期の詩歌の全てであるかのような認識が拡がっているのではないだろうか。

戦時期に立ちあつた当時代の詩人たちの「戦争詩」についての意識や認識を、再吟味しておきたい。

一九三七年七月七日に「盧溝橋事件」が起こり、七月十一日には近衛文麿内閣が対中方針を発表する。「支那事变」（日中戦争）以降、時代における文学者の位置が頻繁に議論されるようになっていた。⁽⁷⁾一九三七年十月頃の文芸雑誌には、「戦争と文学」というタイトルでの寄稿が多く見られる。⁽⁸⁾戦争に詩人がどのように対峙していくべきなのか、困難な状況下で如何に折衝していくべきなのか、といった議論や座談会が次々と繰り返されている。⁽⁹⁾こういった議論は、詩雑誌などで精力的に或いは悶々と繰り広げられた議論であり、新聞やラジオなどの新しい大衆メディアには表出してこない。

モダニスト詩人・安藤一郎（一九〇七—一九七二）⁽¹⁰⁾は、一九三八年、雑誌『蠟人形』⁽¹¹⁾への寄稿文の中で、「戦争詩」を《野蠻とも言えるほど荒々しいリアリズム》で、詩歌として堪えうるものではない、期待するのは無理だといながらも、戦争詩の役割を三つ挙げている。①愛国的なりリズムに依って大衆を鼓舞するもの、②直面した悲劇と惨禍を《冷静且つ刻銘》に写実するもの、③思想の観点に立って皮肉や風刺に近づくもの、の三つである。⁽¹²⁾

メディア研究を主軸にして「戦争詩」を捉えようとする場合、安藤のいう①の役割認識は非常に強い。②も部分的には認識されているだろう。が、③についての認識、あるいは①と③、②と③の混合

地帯がありうるという、「戦争詩」の持つ多層性に対しての認識と関心が薄いのではないだろうか。或いは、ラジオなどのメディアに出ないところで、どの段階で何が言われて何が言われなかったのか、という時代状況と戦況に即した検証が必要ではないだろうか。これを、個々の詩人の人生を通して変化を含めて検証してみると、①としか見えなかったものが①と③の混合物であったり、個人の思想が戦争とは別次元で貫かれた上での①であったりすることが見えてくる場合もあるだろう。本論が目指すのはこの検証である。この検証は決して「弁明」でも無価値な下位分類でもなく、文化史の系譜を探る研究であると考えている。

さて、戦争詩の三つの役割を述べた安藤一郎は、《戦争詩は、戦争そのもの、反映に終らず、戦争の後に残つていかに處すべきか、を暗示するところまでの意義があつて欲しいと思ふ》¹³と述べている。戦争詩に期待できないと言いながらも、戦後にまで展望を持ち、時局を相対化する視点を意識していたことは、注目したい。

また、同じ一九三八年の雑誌『蠟人形』で岡本潤（二九〇―一九七八）は、当時の詩人たちが蒙っている《外部の壓制的な力》には、《露骨な政治的なもの》と《文化現象一般のかもしれない霧圍氣》との二つがあることを言っている。そして、岡本が常にいうのは、詩人の《批判的精神》と《抵抗》である。岡本の認識では、戦争という震撼的事実の前で、詩人は《時勢に雷同して聲高らかに歌ふ

者》と沈黙する者とに分けられるが、両者ともに政治的なものの影響で詩精神を抹殺されている、という。¹⁴

アナーキスト詩人・岡本が高く評価していたのが、野口米次郎である。岡本は、大正末には野口に批判的な発言をして萩原朔太郎と乱闘騒ぎになったこともあったが、一九三九年には、詩人の「抵抗」「批判的精神」などを論じる中で、野口の詩歌を「見直した」と言い、高く評価している（戦後の吉本隆明などからすれば、岡本潤の抵抗も「欺瞞」ということになるのだろうが、岡本は少なくとも一九四二年までは抵抗意識を貫いていた詩人である）。後述するが、岡本は当時、時代に迎合する高村光太郎を批判し、野口米次郎を高村とは異なる方向にあるとして高く評価していた。

戦時下のラジオ放送や新聞などでの活躍ぶりから見れば、高村と野口は同様の立ち位置に見え、また現に並列して批判されてきたのだが、同時代の詩人たちの目から見れば、随分と違ってみえていた場合もあったことになる。その事実をふまえて、次に、「戦争詩」とラジオ、モダニズムの関係について考えてみたい。

二 戦争詩とモダニズム

周知のように、現在、メディア研究は盛んに行われており、特に戦争とメディアとの相関関係を考察する研究が進んでいる。¹⁵新聞、ラジオという二つの大衆メディアは、戦争に密接に関与して成立発

展し、ゆえに戦時体制下のメディアにおける政治性や国家戦略の実態を導くことは難くない。

日本のラジオ放送は、「世界で最初の成功した国際交換放送」¹⁷元年と言われた一九二五年に始まり、当初は国内放送だったのだが海外でも受信されて、初期から国際性を獲得していた。¹⁸一九三一年の満州事変を契機にして、ラジオ放送は、国民の戦意と国威昂揚に全力で協力するようになり、一九三二年六月一日には、J O A Kは《日本の輿論と立場》を英語で発信する必要性を感じて英語ニュース「カレント・トピックス」の放送を開始し、一九三五年には海外放送が開始される。¹⁹この国内を対象を留めないラジオ放送に、詩人たちが協力を始めるのだが、もちろん野口も例外ではない。

野口米次郎は一九〇四年秋に帰朝して以後も、海外の新聞雑誌への数々の寄稿や英米での講演旅行を精力的に行い、それ以上に多く国内新聞雑誌へ寄稿している。大正期から昭和初年にかけての野口は、象徴詩派、民衆詩派、モダニズム詩（プロレタリア詩も含む）の日本近代詩歌の系譜の中で、無党派的に、かつ各々に敬意を払われつつ孤高を保ち、独自の「日本詩人」としての立場を確立していたといえる。野口の執筆範囲は、詩作や文学論のみならず美術や演劇、日本の思想政治など多岐にわたった。国際的な観点での「日本主義」を主張し、英語ができ、また実際に海外で顔が良く立場であったため、日本の政治的立場の発信を目的とする国際ラジオ放送に

不可欠であったことは、容易に想像がつく。ラジオにおける活動や協力は、野口が日本に住む限り必然である。野口がアメリカの聴衆に向けて自然美を語った放送（『六月の母国便り』一九三七年）が、特に意義深く心を打ったものだったという感想も出ていた。²⁰

では、「戦争詩」は「モダニズム」なのか「反モダニズム」なのか。日本近代における詩の「朗読」や、詩と音楽・舞踏・体操または写真・映画などの知覚表現活動を組み合わせた歴史と政治性についての研究から「戦争詩」をとらえた坪井氏は、次のように述べている。

戦争詩は折からの国語醇化運動や反モダニズム（＝反西欧・反近代）的な言説と手を携えて朗読運動、さらには普及し始めていたラジオ放送と緊密に結びついていく。大政翼賛会は文化部長の岸田国士の提唱によって〈朗読研究会〉を発足させ、それが日米開戦を契機として〈愛国詩献納運動〉によるテキストの整備を経て、さらに愛国詩の朗読放送のレギュラー化へと発展していくわけである。ナチス・ドイツに倣ってラジオ放送は〈国体明徴〉の方便・プロパガンダの道具に利用され、詩人たちもまたそれに利用されたのだ、と言えば言える。しかし実情は詩人たちも放送メディアを利用したのである。（中略）
放送ネットワークによる国民管理に便乗して、詩人たちがへ説

者」ならぬ「聴取者」との強い絆を獲得し、それまでの象徴主義——モダニズム時代の現実遊離や読者大衆からの孤立感から一挙に脱却する陶醉をひととき味わったであろうことは推測するに難くないのである。⁽²¹⁾

この系譜の検証は精査に行われており、国語醇化運動や伝統回帰運動⁽²³⁾や朗読運動とあいまって戦争詩がラジオ放送と結びついていくとの認識には筆者も異論はない。しかし、坪井氏は、「声への回帰」は反モダニズム的な文脈を形成してそのまま京都学派の「近代の超克」に接続する反動性を包含⁽²⁴⁾していたとして、モダニズムそのものに内在する表現意識の脆弱さを論じている。これに関しては別の見方をしたい。つまり、坪井氏の《不毛な戦争詩の時代に転落していく一九二〇～一九四〇年代の近代詩の過程ほどモダニズム運動の崩壊の過程を典型的にあらわしているものはない》⁽²⁵⁾という認識には異を唱えたい。

国際的な文化思潮から考えた場合、「声への回帰」は、単に反モダニズム的な系譜と繋がっているわけではない。⁽²⁶⁾日本のモダニストたちが伝統回帰や古神道信仰や日本主義への回帰を辿った道筋は、モダニズム崩壊ではなくてモダニズムの追究であったはずだからである。瀬尾育生氏の『戦争詩論』(二〇〇六)には、次のような視点が示されている。

モダニズムが敗北してナショナルなものが露出してきたのではない。モダニズムは、帝国主義時代に獲得した方法の機能的な普遍性、かつては国民批判として機能したそのイデオロギーとフォルマリズムによってこそ、戦争詩のウルトラナショナルリズムに合流する。戦争詩は、抒情を敵とし地方性・風土性を排除して、テクノロジーの「世界」性に加担してきたモダニズムの方法の、挫折ではなくて、完成なのである。⁽²⁷⁾

国際的な思想文化潮流から考える場合、こちらの認識のほうがより妥当する。ちなみに瀬尾氏は、モダニズムやマルクス主義がインターナショナルであるように、《帝国主義国家が繰り出すさまざまな理念も、ナショナルな語彙によって彩られながら、本質的にインターナショナルである》と述べており、日本の大東亜共栄圏構想や、「八紘一宇」理念も、ドイツの地政学やドイツ史学、マルクス主義インターナショナルリズムの影響をうけて立ち上がっていることを述べている。⁽²⁸⁾

以上のように、「戦争詩」におけるモダニズムと伝統回帰認識の関連性については多少の異論はあるものの、坪井氏の「音声」から読み解く「戦争詩」の系譜は、「戦争詩」の時代の最も重要な局面を総体として表し得ている。大正期に活性化する音楽・美術・演



図1 『国民歌謡』第37輯、社団法人日本放送協会、1938年、筆者蔵

劇・文学といった芸術の総合化の指向性が、朗読運動からラジオ放送に結びついていき、対米英戦争を契機にして愛国詩献納運動へ、「戦争詩」朗読のレギュラー放送の時代へと進む。野口米次郎もまた、この系譜につらなっている。

既に述べたとおり、野口米次郎は、美術や演劇、文学など幅広い著作を持ち、もともとマルチカルチュアルな存在であったため、ラジオやミックスメディアの時代にも感応しやすい感覚の持ち主であった。野口は既に大御所詩人でもあったが、若い世代の詩人たちとも忌憚なく付き合っており、国内外を問わず詩人以外との付き合いも幅広かった。この野口が持っていた性質は、坪井氏も指摘するような一九二〇年代からの朗読会参加にあらわれており、一九三〇年

代から四〇年代にかけてのラジオ放送への関与に続いていく。さらに一九四四年に伊藤道郎らと企画する「大東亜舞台芸術研究所」も、このマルチカルチュアルな指向性のあらわれである。⁽³⁰⁾

周知のように、「戦争詩」は音楽とも結びついてラジオ放送にのせられていく。野口の詩歌も作曲されており、日本放送協会（放送局）が一九三六年以来、ラジオテキストとして発行した「国民歌謡」⁽³¹⁾には、第三七輯「国に誓ふ——国民精神作興歌」（野口米次郎・詩、信時潔・曲⁽³²⁾）と第五〇輯「興亜奉公の歌」（野口米次郎・詩、信時潔・曲）に収められている。これらはピアノ伴奏付きの合唱用楽譜である。「国に誓ふ——国民精神作興歌」（一九三八年一月五日）の最終聯は、「たてはらからよ言葉あり／ゆるがぬ富士に墓場をゆだね／永久の誉に生命をかへよ」である。詩人たちからみれば、浅薄な使い廻された語句の羅列でも、音楽の力を借り、また「合唱」の持つ威を借り、楽譜として頒布され、教育現場で反復されることにより、幾重にも増強されたのであろう。

「興亜奉公の歌」は、「宣戦布告」に収録されている詩で、内閣の命で「興亜奉公日」⁽³³⁾が選定された際に、日本放送協会から委託をうけて書かれたものであった。《天に二つの、太陽は照らず、／理想の道は、一つなり、／築け東亜の、新天地、／勇者の歴史、君を待つ。》といった定型が四番まで続く。

「興亜奉公日」の一九三九年十月一日、国際放送の「北米西部向

け」において「興亜建設国民歌謡集」が放送されたのだが、その内容は、「朝」（島崎藤村作詞、小田進吾作曲）、「海ゆかば」（信時潔作曲）、「国に誓ふ」（野口米次郎作詞、信時潔作曲）などと続き、最後が「興亜奉公の歌」（野口米次郎作詞、信時潔作曲）であった。「銃後国民の意気を歌曲にお伝えしたいと思ひます」とアナウンスされた。³⁴

一九四五年の敗戦直前には、「米英撃滅の歌」（野口米次郎作詞、山田耕筰作曲。伊藤久男・波平暁男歌）がコロムビアレコードから出ている。³⁵この詩は、『八紘頌一百篇』に収録されているものである。野口の詩に音曲がつけられて流行歌になっているというのは、西條八十らに比べれば少ないが、国際的知名度のある野口の役割は重大であろう。このように、当初は朗読運動や詩音楽の総合芸術化の路線にあったラジオ放送への関与は、戦局とともに、国内外の情報戦略の国家政策への全面協力の方向につながる。

野口のラジオ協力と政治性ということを考えるときには、対インド政策と大東亜共栄圏の理念という視点が不可欠になる。野口の戦時期の政治的発言としては、インドに関する言説がほとんどである。ラジオの国際放送と対インド政策というものが、野口の言論活動と国際平和の理想にどう重なっていたか。またその野口の言論が、日本の思想家やインドの急進独立派、或いはタゴールやガンジーらの思想家とどう折衝したか。野口・タゴール論争に代表される日印摩擦が、世界にどのように伝えられたのか。資本主義や社会主義を超

える新ビジョンを求めるムーブメントのヨーロッパ中心の世界潮流が、どうモダンイズムにつながっていたのか。これらの点を抜きにしては、野口のメディア協力の総体を把握しきれない。ラジオ国際放送の経緯と、重要視されていたインド西南アジア向けの政策と戦況の上に、野口の戦時協力があつたという見方も可能だろう。だが、これについては別稿に廻したい。ただ、野口の場合は、国際的な文化人たちとの直接の親交があり、架け橋としての自覚の意識もあり、また象徴主義から日本主義に繋がる思想経緯というものがあつたことには注意を喚起しておきたい。

三 『宣戦布告』の両義性

野口の戦時活動といえ、ラジオ放送や新聞での活躍が非常に目立ち、もっぱらそればかりが注目されてきたわけだが、一九四〇年代に入っても九冊の書籍を刊行している。³⁶詩集としては『宣戦布告』（二九四二）、『八紘頌一百篇』（二九四四）の二冊があり、ここにはラジオ放送や新聞紙上ではみられないような、詩人の別の側面が垣間見られる。

まず、『宣戦布告』（道統社、一九四二年三月十五日）からみてみたい。装幀は川端龍子である（図2）。タイトルからしても明らかのように、戦時色の強い作品集であり、戦後にはGHQから没収扱いとなる一冊である。



図2 『宣戦布告』道統社、1942年、筆者蔵

「自序」は、《人生は永劫の宣戦布告なり》ではじまる。《戦争と平和は二にして一なり。われ一生を詩歌に捧げ來れど、今日國家の重大時局に際會して戦争を支持謳歌する所以自ら明かなり。生を日本に得て壯嚴無比の今日をまのあたりに見る嬉しき、涙なくして感謝すること能はず。昭和十七年一月五日》と記されている。この、「戦争」と「平和」が二つにして一であるという認識は、『伝統について』でも語られていることである。

『近代戦争文学事典』（一九九五）には、野口の『宣戦布告』の項目で、次のような書き方がなされている。

その大部分は時局に乗じた翼賛の詩であり、国民詩、朗読詩などと称してJOAKにより放送され、あるいは新聞などに掲載されたものが多い。一巻さながら御用詩人の叫びである。⁽³⁷⁾（中略）しかし、著者に牢固たる国体の

観念があるでもなく、大東亜経綸の方策があるわけでもない。その時において耳障りのよい観念語の跳躍にまかせた喧騒詩にすぎない。かような詩人をお抱えにした放送局も、責任の一半を負うべきであろう。⁽³⁸⁾

しかし、野口に国体の観念がなく、大東亜経営の方策があるわけでもないのは、野口に即して考えれば、むしろ首尾一貫した事態だった。野口本人が述べていたことだが、海外生活の長かった野口に国体の観念は希薄であった。⁽³⁹⁾ 戦時に求められる《耳障りのよい》言葉を使用していることも、それはラジオ局からの要求を考えれば当然であるとみるべきだろう。

重要なのは、国際的に知名度のある野口をお抱えの《御用詩人》にすることが、放送局や国家政策にとっていかに有益だったかという認識であり、野口個人の国体に対する忠誠の有無などは当局にとっては関係なかったという事実だろう。へ野口を起用した愚かさなどという見解は、完全に筋違いなのである。野口こそ、国外への発信を意識した音声メディアの隆盛期つまり国際ラジオ放送の時代に必要で相応しい人物であり、放送する側が野口の名前を使わねばならなかったのである。

また、『宣戦布告』が《一巻さながら御用詩人の叫びである》という認識は、正確なのだろうか。次に、その検証を試みたい。

表1 「宣戦布告」——ラジオ曲や新聞メディア、教育政策の一部として作られた詩作品の一覧

収録順の 通し番号	詩篇のタイトル	各詩篇に附された「註」より	堀による追加 事項
1	「荒行者」	昭和17年元旦の作、読売紙上発表、JOAKより丸山定夫氏朗読放送。	読売新聞 1942/1/6
2	「宣戦布告」	都新聞で発表後、JOAKより国民詩として放送。さらに、丸山定夫氏朗読によりコロムビアレコードに吹き込まれる。	都新聞 1941/12/11
3	「一億の決死隊」	帝国蓄音機会社の委嘱により作。	
4	「破竹の突撃」	群読詩としてJOAKにより放送。	
5	「語を同胞に寄す」	宣戦布告の数日前に書く、読売紙上発表。	
7	「全亜細亜民族に叫ぶ」	JOAKのための朗読詩。	
8	「真珠湾の炸裂」	日日新聞紙上で発表、JOAKでは国民詩として朗読放送。	
10	「神の膺懲」	JOAKのための朗読詩。	
11	「落ちゆく血達磨」	本紙は香港陥落を歌ったもの、読売所載。	読売新聞 1941/12/22
14	「英霊に捧ぐる歌」	慶應大学大講堂での日支事変戦没学生追悼会にて合唱される。	
15	「國に誓う」	JOAKの委嘱による作、国民精神作興歌として放送。作曲家は信持潔氏。	
16	「日本創造」	宮城道雄氏外社中の伴奏により、歌謡譜としてJOAKより朗読放送。昭和17年1月27日夜本篇の第三回朗読放送が行われた。	
17	「東亜の暁」	「日本創造」の姉妹篇、同じく宮城道雄氏外社中の伴奏により歌謡譜としてJOAKより朗読放送。放送時、削除あり。	
18	「妹より出征の兄に送る手紙」	日支事変酣なる頃、JOAKの委嘱により実際の経験を織込んで仮想的に書いたもの。昭和15年1月13日夜活動女優山路ふみ子嬢同放送局より朗読放送。	
29	「米国人に與う」	週刊朝日昭和16年3月2日号所載	
34	「海に呼ばれて」	JOAKの委嘱により作。	
35	「南進國是」	台北某学校の委嘱により校歌としての作。	雑誌『詩洋』 昭和15年8月号 掲載。
38	「興亜奉公の歌」	内閣の命による興亜奉公日選定に際し、日本放送協会の委嘱を受けて作る、作曲家信時潔氏。	
39	「紫色旗の下に」	東京市立某中学校の校歌として作る。	
40	「壽く言葉」	昭和3年11月10日帝都某紙所載。祝天皇陛下御即位の大儀に際して。	
41	「國土礼讃の歌」	皇紀二千六百年記念のための作。英語に移植され廣く世界に頒布された。	
43	「一億一心」	JOAKの委嘱により作。	

ラジオ局（J O A K）や新聞メディア、教育政策の一部として作られた詩作品を、表1にあげた。表のとおり全五四篇中の二二篇がJ O A Kなどの放送向けに作られたものであることが自註に明記されている。たとえば、詩篇「宣戦布告」は《われ聲を大にして殉國の秋を叫ぶ……／ああ、来る可きもの遂に來れり。》⁽⁴⁰⁾と始められ、「二億の決死隊」では《國難ここに、天暗し、／往く一億の、決死隊／國に捧げし、熱血の、／杯あげて、命を待つ、／誓やかたし、護國軍、／己を捨てて、身は輕し。》⁽⁴¹⁾とある。没個性の言葉の羅列であり、絶叫調の朗読を前提とした大衆操作のプロパガンダ詩になつてゐることは、いうまでもない。太平洋戦争開始と同時に始まる「絶叫調」⁽⁴²⁾のラジオ放送に適した七五調である。

この二二篇の他にも『宣戦布告』には、ラジオ局（J O A K）や新聞メディアや教育政策の使用目的が明確ではないが、明らかに戦意昂揚のプロパガンダとして作られている詩もみられる。6「時事述懐」（本詩も日・米英戦以前、日支事変收拾かならず国民の意気暗澹たるの時の作」との註あり）、9「還らぬ荒鷲（布哇襲撃の飛行勇士を弔ふ）」、12「神風」、13「召集令」、19「幻（新体制準備会修了の日作）」（『読売新聞』昭和一五年九月二〇日）などである。

その中の「召集令」を挙げてみよう。

召集令が伴に下つた……／粗末な紙の一片、卓上に燃える赤の

炎！／書齋の夜は嚴かに沈黙は深まりゆく、／私は聲を聞く、／「國のお召しだ、伴の體を捧げよ、伴の魂を捧げよ！」／私は外國に聖戦を説いた、／東亞の新建設を説いた、／どんな犠牲も辭しないと説いた、／最後の肋骨一つも、最後の血一滴もいらないと説いた。／人は私の言葉に文學を見た、／雄辯の連鎖を見た。／だが、今、伴は私を恥辱から救つて呉れた、／彼は私の文に、魂で體で、／連帶責任の判をぺたつと捺した。
(以下略)⁽⁴³⁾

この詩は、息子の正雄が召集令を受けたときの作である。一九三八年十二月下旬の作で、『読売新聞』（一九三九年一月六日）紙上で発表された。一九三九年春には作曲（呉泰次郎・作曲）されて東京中央放送局から放送された。⁽⁴⁴⁾また、大政翼賛会文化部編の朗読詩集『詩歌翼賛第二輯』（一九四二年三月三十日）、その修正再版である『常磐樹』（一九四二年十月五日）⁽⁴⁵⁾にも掲載された、当時有名な一篇であった。

野口の「召集令」について、『常磐樹』の「解説」には、《飾り氣なく素朴に然し堂堂と幅廣な發聲法をもつて讀む時に、この詩の美と滋味とは流れ出るやうに思はれる。》⁽⁴⁶⁾と附されている。この一篇について、坪井秀人氏は『声の祝祭』の中で、次のように批判している。

無力な言葉の代わりに息子に來た赤紙が彼のやましさを救出する。もちろん《倅》の価値はおカミへの供出品以外には何もない。彼はそれを《捧げる》ことよつて、まるで免罪符を手に入れたように一篇の詩を書くことが出来るようになる。(中略) 息子の人身御供で手にしたこの詩は活字の公開(一九三八年作『読売新聞』に発表)だけでは済まされず、作曲されて東京中央放送局から放送までされている。(『常磐樹』解説)それは詩の中の《倅》当人の声を抹殺することと引換えに手にされた権力の《声》以外の何物でもない。⁽⁴⁷⁾

確かに、家族の死や、子の兵役を自らの国家帰属の見返りにしているのは事実で、坪井氏の指摘はそのとおりである。そこに描かれているのは、親の自分本位な観点であり、息子の命を楯にして自分の正当化・自己弁護を行っている酷い親の姿である。

しかし、これは見方を変えれば、野口はどれだけ時局に合わせた戦意昂揚詩を書き、また「聖戦」の論理を主唱し、後世の文学研究者からは「声の権力者」と糾弾されたにせよ、実は自らの言論にまったく責任をもてず、《恥辱》と自己嫌悪に悩まされ続けていたこととの表明になっている。聖戦を説いている自己を、《雄弁の連鎖》を起こしている自分の言説を、どう肯定するのかという問いに苛ま

れているのである。ここには詩人が、矛盾と自己嫌悪に責め悩まされる自分を、「日本人」の一員として国家帰属意識に還元し、市民となつて愛する息子の召集に応じることで、自分自身に無理やり納得させようとしている姿が露呈している。坪井氏の評は、はからずも野口の詩のなかにこの真実の表明を見ていたことになる。

国民国家が個人に課している「国のために生命を投げ出す」という行為を遵守することで、個人が「国家」に帰属することができる。人々が様々に抱える両義性や違和感や戸惑いにふたをし、全てを同一化して国民共同体に与させるのが、《連帯責任の判をぺたつ》なのである。もとより「二重国籍者」を自任する野口にとっては、国家帰属は特別な意味をもつものだった。⁽⁴⁸⁾

では、帰属感と自己評価を求めて、詩人は完全な国家帰属の達成を得ているのかというと、「召集令」にはどこか釈然としないものが残る。つまり、息子の召集を前にした人間としての野口に「欺瞞」と見苦しさがにじみ出てしまっているからである。しかし、夜、書齋に座つて、大事な息子の赤紙をみつめるほとんどの両親は、戸惑い、自己弁明し、内心に見苦しさを残したのではないだろうか。野口がもつ欺瞞は、確かに「声の権力者」としての欺瞞であろうが、同時にそれは、強迫的な国民共同体に言葉を奪われて為す術を持たない多くの者が、召集令状を前にして味わつた欺瞞(意識的であれ無意識的であれ)を代弁したものではなかつただろうか。

音声メディアに現れる野口の活躍をとらえれば、確かに坪井氏の論じた以上のものではないだろう。詩「召集令」を耳にするラジオ聴衆には、〈往け、往け〉の愛国ムードと絶叫しか伝わらなかつたかもしれない。だが書籍として刊行される詩集『宣戦布告』を手にする読者には、その野口の両義性と戸惑いを解する余地が残されていた。なぜ、このように野口を弁護するような方向で読み解こうとするのか。それを不適切に思われる読者もあるかもしれない。だが、これから説明するように、この詩集『宣戦布告』に通貫するムードは〈往け、往け〉の戦意昂揚の調子の一色ではない。特に後半には戦意昂揚とはかけ離れた詩歌が多く収録されている、という事実をいかに解釈するかという問題があるからである。(また本稿では扱わないが、野口は一九二〇年代後半から一九三〇年代後半にかけての日本詩壇で時局への「抵抗」を示す詩人として認められていた事実もある)。

野口米次郎は一九四〇年代に入っても、ラジオで発表される「声の権力者」、「朗読」のための表現者としての側面だけではなく、「書く」ことにも精力を傾けた詩人である。野口の紙の上に書かれた詩作品には、想像力が萎縮するどころか、制限された中ではありながらも想像力の限りを尽くして表現を模索しており、その言葉の限界の裏には大きな可能性も胚胎していたのではないだろうか。

いくつかの詩を参照してみたい。

実は『宣戦布告』は刊行の一ヶ月後に、32番目「倫敦炎上」(一

三〇—一三三頁)が削除処分になっている。⁽⁴⁹⁾一九四二年は、もはや多くの作家たちが検閲に萎縮し、時局に統合され迎合していた時期といつて良い。出版規制の状況を知りすぎるほど知っているはずの野口が削除処分になるような作品を発表していたということ自体が興味深い。次のような詩である。

「倫敦炎上」

私は庭にすだく虫の音を聞いてゐる、

古い昔倫敦で、これを聞き、自然の聲はいづこも一つだと感じた、

歲月流れて四十年になるが、今なほ倫敦の虫は、同じ聲で鳴いてゐるだろうか？

鳴いてるだらう……炸裂する爆弾を餘所に、

我關せずコロコロと、

あるはまた、傷つき倒れた人間の着物の下で。

私は今、連夜の空襲を想像する……おお、物凄い倫敦炎上、

雨とふる油入焼夷弾、恐ろしい時計仕掛爆弾、

天地も裂けよとばかりの強爆發性爆弾、

何たる生活機能の破壊よ、

何たる戦闘力の強迫よ、驀進よ！

おお、青赤黄の稲妻が亂舞する、

天は八裂けになりて火の海になる！

地上の闇黒をかけ廻る消防隊、

警備團、あるは警察吏、

市民は防空の洞穴に潜り込み、

耳を抑へ、目をつぶり、

急に思い出した神様へ祈禱する、

彼等は従來の誇りを捨てた穴居人だ、

彼等は世界支配者たりし夢の精算を強ひられた敗北者だ、

私は今庭の虫を聞き乍ら、この光景を想像して悲痛に打たれてゐる。

昔ネロは妻を殺した、都會を焼いた、

秦の始皇帝は學者無數を穴埋めにした、

その時私のやうに悲痛を抱いて、秋虫を聞いた詩人がゐるたであらうか？

彼等も新秩序を夢見る當然の行為であつたかは知れないが、

今日ではその暴威と無慈悲だけが人に記憶されてゐる、

そしてヒトラーも千年後には、倫敦を焼いたことだけしか残らないかも知れない。

お悠悠たる自然よ、

變轉定らない人生よ！

人間は今日處理だけすればよろしいか？

曰くよろし、

私共は現實に生きるもの、

明日のことなど、神様か犬か猿に、食はせておけ！

これは、戦争を賛美してはいないどころか、ストレートに戦争批判を申し立てている。どのような大義名分があるにせよ、戦争や制裁行為はくだらないと述べているのである。この作品が「削除」扱いはなつたという事実は、「声の権力者」であるはずの野口米次郎のこの詩が、反戦詩・時局批判の一篇として評価されていたことを意味する。

この「倫敦炎上」の他も、詩集『宣戦布告』では特に後半には、「建て前」の目的とはそぐわない、逸脱を辞さない内容をうたった詩篇が多い。

一九四一年春に作られたとされる第50番「⁽⁵⁰⁾敵火山の鶯」も同様で、「大東亜戦争前の作」と本人の註が付けられている。註記は、大東亜戦争を直接批判しているのではない、との言い訳であろう。

この詩は三つのパートで構成される。はじめは、庭の鶯のへもの静か／＼な純潔な声に耳を傾ける。《鶯は何か私に告げんとしてゐる、／＼齎らした消息はもつと豊かな世界のことかも知れない、》と鶯の声に対する描写が続く。次のパートは、鶯の声に集中してい

るうちに《眼前がぱつと》開けて、《昔の世界が詩の扉を開け》、
《失った人間に崇高がもどつて来るやうに感ずる、／魂の混亂が淨
化されるやうに感ずる。》と過去の世界、野口の理想とする世界に
意識が飛んでゆく。野口が鶯の声とともに空想する昔の平安とは、
畝傍山、檀原の宮である。いうまでもないが『日本書紀』には、
「初代」とされる神武天皇が、畝傍山東南の檀原宮で即位したと記
述されている。野口の庭へ来た鶯一羽は、そこから来た一羽であり、
《私は昔檀原の宮を稱えた聲に耳をそばたててゐるのだ、／建國の
初め國の將來を稱へた聲を聞いてゐるのだ。》と認識される。そし
て、最後のパートには、次のようにある。

物的争奪に心が顛倒して仕舞つた、

世界は血の池地獄を描いてゐる、

昔豫言者だつた為政者は大衆の奴僕となつて仕舞つた、

創造者だつた彼等は模倣者となつて仕舞つた、

なるほど、彼等の意志に根強いものがあるか知れない、

外的通俗性に若干の價値もあるだらう、

だが私はもつと偉大なものを期待して來た、

恐らく彼等の耳に、鶯の聲が通じないであらう。

庭の鶯は鳴き止んで仕舞つた、

どこかへ行つて仕舞つた、

ああ、二度と私の庭へ來ないかも知れない、

鶯は警告が無駄だと思つたかも知れない、

痺れたものに神秘の音信は分らないと思つたかも知れない。

ああ、誰が今朝私と等しくこの聲に、

崇高な暗示を聞いたであらうか、

だが心のなかにそれを秘めねばならないもの、私獨りであらう
か。

壮大な時間空間をさまよいながら、現状の挫折を絶望的に嘆き、痛
烈な国家批判をおこなっている。鶯の声は、初代天皇の建国理念と
平和の理想が、現在全く異なる方向に向かつているということを警
告する声である。この一篇は、鶯の批判と忠告とを聞きながらも、
どうすることも出来ない個人の悲哀を謳つたものである。心の中に
叫びたい認識と理性がありながらも、それを人にも語らず無言で生
きる詩人の苦悩が表出されている。最後の行では、苦悩を《秘め》
ているのは《私獨りであらうか》と他者の共感を誘い、多数の覚醒
を促そうとしたともいえるのではないだろうか。

次に、第52番「海」を挙げてみたい。

血に塗られる、生臭い、

嵐に苛まれる、凄絶また凄絶、

陸はまるで屠殺場だ、

神はこれを豫期し給ひしや、

神心あらば、陸を海に返し給ふの時だ。

死骸山を築く、

花咲く春を培う役に立たない、

飛行機空を走る、

鳥に進路を教へるのでない、

ああ、世は刈菰と亂れる、暗い、

人間はまさに血迷ふ羊だ、

我等に責任あれど、是正の路を知らない、

聲小さくて、眞理を語るに無力だ、

ああ、天地創世の神様こそ誤り給ふた、

陸に混沌へ返れと叫び給ふの時だ。

(以下略)

ここに戦争賛美をみるのは無理な相談だろう。この一篇は、戦争状況に対する疑問と嫌悪感を濃厚に感じさせる詩である。戦争という殺戮の現場を描くさまも、戦意昂揚を意図するような性質ではない。これは、雑誌『文藝』(一九四一〔昭和十六〕年四月一日)に掲載された詩である。

一詩集としての『宣戦布告』には、この詩に対して、「昭和十五

年冬から翌年春にかけ英獨死の戦を心に思つて作れるもの」との注記が付けられている。わざわざ注記を付けて、批判を牽制しているといえるのではないだろうか。つまり、日本ではなく、英獨の戦争状況をテーマにしているのだと言つて、検閲者に対して弁解しているのである。

では、次に、『宣戦布告』の最後の二篇「青いお椀」「壁」を挙げたい。「青いお椀」は雑誌『蠟人形』(一九四二年三月一日号)に、「壁」は雑誌『文化組織』(一九四〇年十一月号)に掲載された詩の収録である。

「青いお椀」(二〇四―二〇六頁)

私は見たり、完全な空の形、

青いお椀、大地をふせたり、

大地に一本の木なく、草なく、

ただ赤い土、大海の如くに、

空の音律に答へたるのみ。

今日日本に歸りて、私は見る、

山嶽高く空に迫りて、その髻をつき、

樹木背のびして、その乳房をいぢる。

ああ汝、何故に空の形を損なはんとするや、

われ故國の自然を禮讚し來れど、

今汝の無體を罵る。

山よ、ひれ伏して平面の土にかへれ、
樹木よ、自らを無にして薪になれ。

私は願ふ、再び印度にかへり、

ハイドラバットの海の岡、

赤き砂塵に身を埋め、

全き形の空をかぶつて、

その朗朗たる音律に和し、

赤き砂塵の一粒たらんことを。

この作品について、小野十三郎が雑誌『文化組織』（一九四一年五月号）の中で、「日本を大きくするものは、野口の詩のこの憤懣だと思ふ」と述べて推奨し、それを受けて岡本潤も、同感を示している。⁽⁵¹⁾ 岡本は《詩は理屈なしに政治に對する抵抗素を持つものである》⁽⁵²⁾と主張していた者である。

ハイドラバッド (Hyderabad) は、野口の古くからの友人サロジニ・ナイドウの自宅があるインドの都市である。サロジニは、野口と同時期にロンドン詩壇で評価を受けた女性詩人であり、この当時は独立運動家としてガンジーと共に歩調を進めていた。野口はかねてから、ハイドラバッドの風物に想いをめぐらせており、⁽⁵³⁾一九三六年のインド訪問時には現地訪問を果たしている。⁽⁵⁴⁾ 「ハイドラバッド」

には、言葉のリズムの良さだけでなく、思想的な意味を込めた場所への追慕の意図が含まれるであろうことを注記したい。

「青いお椀」に《抵抗》をよみとった岡本潤は、次に挙げる野口の「壁」という作品について、《歴史的な混沌のなかに身をさらし、精神の危機の如きものを通過しつつ……》⁽⁵⁵⁾、それを密度と陰影と脈動をもつて表現している、として高い評価を示している。岡本は、

《高村の作品に飽き足らないのは、ちやうど野口の場合と反對の現象が高村にあらはれてゐるからだ》と述べている。高村の詩は《大向うをねらふ政治家の雄辯術に近い》《トリック》であり、《国民詩人らしいゼスチュア》であり、《われわれの期待するものとはまるで反對のものである》⁽⁵⁶⁾というのである。詩歌の政治的抵抗を訴える岡本が、野口を高村光太郎とは全く異なる方向の詩人とみていたことは、重要視したい。その「壁」という作品は、次のようである。

「壁」(二〇七—二〇九頁)

確に私の詩は終つた、

疲れてゐるのでない……

私の書いた詩が何だつたかを辿ることが出来ない。

私は床の間を眺めて坐つてゐる、

床の間には錆色の壁だけで何物もない、

開いた部屋の障子から庭の樹木が見える、その間から青空が見

える、

私はもう幾時間坐つて、壁を見詰めたかを知らない。

恐らくこの部屋は人生の避難場であらう、

だが私は神の譴責を忘れるのでない、

私は思ひきり罪を犯すことが出来なかつた。

血と後悔で自らの價値を高めることが出来なかつた。

私は今から床の間を見詰めてゐると、

壁が、この壁が、私の心の壁であるのを知つた。

(中略)

私は澤山の人を愛した、

最も愛したものに眞實を語ることが出来なかつた、

私は詩を書いたが、本當の詩は書けなかつた、

私は今人生の結論を與へねばならない場合にある、

心の壁に映つた影の場面は一つ一つ消えてゆく。

私は壁の彼方に、もつと廣くもつと深い人生があるやうに感ずる、

私は壁に秘密の門があるやうに感ずる、

私は立つて床の間に上り、これに觸れようとする、

門がない、ただ平たく擴つてゐるのみだ。

《壁》を前にして、大きな挫折と閉塞感に打ちひしがれた詩である。

《私は詩を書いたが、本當の詩は書けなかつた》、つまり、本當に書

きたい詩を書けなかつたということである。なぜ書けなかつたのだろうか。

たとえば戦時下で富士山麓に隠れて反戦の意志を密かに書きつづけた金子光晴には、他人もしくは人間存在に對する不信感が根底に存在する。もちろん金子を批判するつもりは毛頭ないが、著名人であり大家族であつた野口には、金子のように一人息子を徴兵から回避させて家族三人で山に隠れて過ごすような選択はたとえ望んでもできなかった。野口が《私は澤山の人を愛した》といっているが、これこそが彼の本懐ではなかつただろうか。野口は、人間を愛し、家族を愛し、他人に對して不信感を突きつけられない人間だつたのではないだろうか。

既に老成した野口の場合、世俗への反抗心も政治的抵抗も大きく表出しないが、自己内部の問題に収束させて内省する。覚醒している自分を、自己規制の中で処理していくようなところがある。《壁に秘密の門》を探すが触れられない、といったところに、不合理な運命を憂うる敗北感を漂わせる。

「壁」という詩のモチーフに限定して類例をみるならば、同じ一九四二年、プロレタリア詩人の壺井繁治は、《壁いつばいに張られたる世界地図／地図は私に部屋の狭さを忘れさせる／まんまんと潮を湛えたる太平洋／おお、壁の中から浪音がきこえて来る》¹⁷⁾と、アジア各地の侵略に《こころ躍ら》せる高揚感をうたっている。同じ

《壁》に向かいながら、野口米次郎は、壺井繁治とは全く違う感情を見ていたのである。野口は外に対する激しい叛逆を起こすような強さは持たない。だが、検閲の制限のある中で精一杯の叛逆をしているのではなかっただろうか。

以上のような作例の検討をふまえて本節の最後に、『宣戦布告』の最終（つまり最後の詩「壁」の後）に置かれている「跋にかへて」に触れておきたい。この「跋にかへて」は、一九四二年一月十九日夜、JOAKにより野口が放送したものの全文の収録である。大東亜文化建設の確立と意義について述べたラジオ用プロパガンダといえるが、従来の指摘では疎かにされた局面もみえてくるはずである。野口は、一九四一年十二月八日の「御詔勅」⁽⁵⁸⁾が、決死を呼びかけた《宣戦布告》であったのは事実だが、もつと重要な意味は《八紘為宇の大義》と《東亜永遠の平和》を期した点だといっている。⁽⁵⁹⁾野口は、《神は成功のみ稱讚し給はず失敗を深く愛しみ給ふといふ言葉があるが、この意味は失敗の中に成功以上の教訓がある、失敗は更に成功へと進む重要な一階段であるといふことに相違ない。（中略）私共の大事業、大東亜建設に於て失敗を見る場合、私共は失敗に感謝して更に勇往邁進の道を切り開かねばならぬと信じます。要するに理想の有無が先決問題である》⁽⁶⁰⁾と述べている。対米英開戦によって「大東亜共栄圏」という世界観が明示された野口は述べ

ている。このことによって、多くの国民が重い憂鬱から抜けて、興奮状態にあった。長い滞米生活の経験をもつ野口は、アメリカの合理性と産業能力の高さを見知っていたし、英米の友人もたくさん持っており、対米英開戦に対しては個人的には複雑な心境だっただろう。だが、ラジオ放送では、「成功」しなくても《理想の有無》が重要問題である、と述べて民衆に語りかけたのである。

四 『八紘頌一百篇』の両義性

『宣戦布告』の出版のあとも、野口の《戦時メガフォン》的役割はもちろん続き、益々拡大していったと考えても良い。しかし、そこへ「抵抗」を書きつけることを停止しているわけではない。

大東亜文学者大会では、初日「發会式」（一九四二年十一月三日）に、久米正雄の開会挨拶後に、情報局、陸軍省、海軍省、翼賛会からの祝辞が述べられ、引きつづいて詩歌の朗読が行われているのだが、その朗読を行ったのは野口米次郎、佐佐木信綱、高浜虚子である。つまり、野口は近代詩の代表者として選ばれている。また、日本文学報国会の名譽会員でもあった。⁽⁶¹⁾だが野口は、このような活動を喜んでいたわけではない。

一九四三年に刊行されている随筆集『伝統について』には、カーライルの言を（《略》）僕は不愉快にも筆を握らねばならない。元來僕は文章の人間でない。僕の本領は人を指導し命令するにある。僕

だって何か実際の仕事が出来る筈なのだが……政府は人を使う道を知らない。」と挙げて、次のように書いている。

今わが日本に於ては大政翼賛会が若干の文化人を入れている。

また政府の肝煎りで文学報国会が出来て、私共文筆の連中も実際の仕事に参加して忠節を誓っている。然し私や私とほぼ同年配の友人達がカーライルであつたならば、恐らく名誉会員の光栄を蹴つたであらう。また文学報国会の全会員が三千名もあつては、歌舞伎芝居の顔見世狂言に見る並び大名などの騒ぎでない。⁽⁶²⁾

要するに、くだらないと言い、政府のやり方を批判しているのである。『伝統について』は、別稿で詳述する予定であるため本稿では扱わないが、戦時下において、体制迎合や国策宣撫とは著しく異質な言論を含んだ著作物であるといえよう。とはいえ、この著も戦後には『宣戦布告』『八紘頌一百篇』とともにGHQによつて没収された本である。

本稿では次に、その『八紘頌一百篇』（富山房、一九四四年六月二十八日）を検討したい。

まずタイトルだが、〈八紘一字〉⁽⁶³⁾をタイトルにする書籍は、当時

にあつては珍しいものではない。一九四〇年に、近衛内閣が〈八紘一字〉の精神で大東亜新秩序を建設することを宣言する以前より、この理念は書籍のタイトルに多く挙げられていたのであり、むしろ、一九四四年六月という時期は、この種のタイトルの書物としては最後の時期といつて良い。「頌」の字は、「褒め称える」の意味であり、〈八紘一字〉の思想を褒め称える、或いはそのイデオロギーを再確認するような意味になる。一九四四年には日本の敗戦は事情に通じた識者たちには既に明らかとなつている。とくにラジオに関わる者たちは、既に敗戦を実感していた。（さらに前述したように野口は最初から「失敗」を暗示しており、日本の勝利には疑問を感じていたと考えられる。）この詩集のタイトルには、敗色濃い時期に、〈八紘一字〉の理想をうたつた日本の戦争イデオロギーを改めて褒め称えようといったメッセージがこめられている。

この野口の刊行書籍は、ラジオ放送と戦局の推移の中でどのような位置づけにあるのだろうか。ラジオの放送指導や放送番組編成が、戦局の推移と密接に関わることを論じる竹山昭子氏は、この推移を「第一段階」（一九四一年十二月〜四二年五月）ハワイ真珠湾攻撃による開戦、マレー沖海戦で英戦艦を撃沈、グアム島占領、フィリピン上陸。東はニューギニアから西はビルマ、南はジャワ島にいたる広大な地域を占領し、日本軍の一方的勝利の段階、「第二段階」（一九四二年五月〜四三年二月）五月に珊瑚海海戦・ミッドウェー海戦で日本軍は惨敗。



図3 藤田嗣治《嵐》『八紘頌一百篇』口絵、1944年、筆者蔵

八月に米軍がガダルカナル島に上陸し、激しい攻防戦。連合国軍の反撃開始と日本軍の戦略的持久の段階、「第三段階」（一九四三年二月〜四月）に連合艦隊司令長官山本五十六が撃墜される。その後、アッツ島、サイパン島など次々と玉砕の悲劇が展開される段階、「第四段階」（一九四四年十月〜四五年八月・フィリピン沖レイテ海戦で日本の連合艦隊は壊滅状態。神風特別攻撃隊の攻撃。日本軍の絶望的抗戦の段階。）と分類している。⁽⁶⁶⁾これに対応させると、野口の『宣戦布告』は第一段階、『八紘頌一百篇』は第三段階にあたる。では、内容をみてみよう。

『八紘頌一百篇』は、三部に分けられている。第一部が四二篇、第二部が二九篇、第三部が三〇篇。「百篇」といながら、一〇一篇の詩が収められている。扉には、藤田嗣治の「嵐」(図3)が飾られている。どのような作品群な

のか概観してみたい。タイトルからも想像できるが、これも『宣戦布告』と同様に戦時色の濃い作品集で、既述したように、戦後にGHQから没収扱いを受ける。第一部は、全てが戦意昂揚詩であり、松竹大船撮影所のために作ったものや、ラジオ放送や新聞向けの競争プロバガンダとしての役割を担っている詩である。⁽⁶⁷⁾

たとえば、「マニラ陥落」(九二―九四頁)は、J O A Kの委託により書かれたもので、一九四二年一月三日夜にマニラ陥落の報道後、丸山定夫朗読で全国に放送された。⁽⁶⁸⁾この詩は、『女性時代』(一九四二年一月一日号)や『放送』(一九四二年二月一日号、日本放送協会が発行する雑誌)にも収録されている。「シンガポール陥落(一)」と題した詩は「読売新聞」(一九四二年一月十六日)に掲載、「シンガポール陥落(二)」と題した詩は、一九四二年二月十六日にJ O A Kから全国放送された陥落祝賀のものである。⁽⁶⁹⁾「蟬丸」や「明治神宮参拝」は一九四二年二月六日に、野口自らがJ O A Kで朗読放送している。もはや繰り返すまでもないが、ラジオ番組や戦況報道と密接に繋がっている野口の詩歌が、『八紘頌一百篇』においても散見される。

「死地に乗入る二千數百」(三五―三八頁)は、求められて英訳も行っており「TWO THOUSAND IN THE VALLEY OF DEATH」(三八―四〇頁)が掲載されている。註には、「昭和十八年五月三十日、アッツ島守備隊山崎部隊長以下二千有餘の殉國勇士、

無念にも玉砕せりと大本營より發表さる。本詩は同盟通信社の依頼を受けて筆者自ら英譯し、南方諸國印度その他歐米にも、電送された。《と記されている。要するに、海外でも著名な日本詩人である野口は、日本の國際放送戰略の主軸として活躍を求められている。

この詩の冒頭は《最後の命は下つた、／彼等は死地に乘入つた、》と始まり、《我等が米英撃滅の決、／天地も如何ぞそれを奪はんや。》と結ばれる。この部分が英訳では《The last order was bid-
den/In the valley of death they charged.》《Oh, our resolve to
crush and conquer the enemy of the west./ Powerless would be
heaven and earth to bid us to break it.》となつてゐる⁽⁹⁾。日本語詩の「米英撃滅」という過激な調子が、英詩になると失われており、「the enemy of the west」と東洋対西洋の対立構造に抽象化・概念化されている。また英詩の最後の行が「Powerless」で始まつていることも、日本語詩とは異なる雰囲気全体に醸し出していることの実証といえよう。本稿では詳述しないが、野口のこのアツツ島を題材にした日英の両言語で書かれた詩歌は、藤田嗣治の描いた「アツツ島玉砕」（一九四三年）などと共に、戦時下の芸術と表象という点から検証される必要がある。

このように『八紘頌一篇篇』第一部は、日英言語の差異の問題はあるとしても、ラジオ放送向けの戦況伝達を兼ねた戦意昂揚詩がほとんどを占めるのだが、第二部になると、しかし趣が変わってくる。

「心境」（一七二—一七四頁）という詩では、《表現を禮讚にのみ限つた》ことに対するジレンマが表出される。《誰が理知の中止は蠻的行爲だといふ、／誰が想像の羽を断ち切るは殺人犯だといふ。（中略）私は今三であり五である豊富な言葉の資産を捨てて、／ああとのおおの貧しい歎声しか出せない啞の子になつたかも知れない。》⁽¹⁰⁾とうたっている。前述した「壁」と同様の主題である。このような野口の自己言説に対する弁解と悔恨は、《一字》の下にある諸民族全てに向けて発信されている詩にもみえかくれすることに注目せねばなるまい。「諧律」（一七五—一七七頁）では、《共榮圈内の諸民族よ、》と呼びかけて、老齡の松の描写や桜の樹木を燃料の為に伐採したことなどに還元して、共存共榮の道を哀切な調子で説いている。「破壊」（一七八—一八一頁）は、燃料の為の樹木伐採、自然破壊を深く後悔し罪悪・譴責を感じていたが、春に伐採した樹木に新しい小枝が芽を吹き復活していることに《意外の神秘を見た》《魔法》を見た、と感動する内容である。そして《破壊》されても《復活》する自然の摂理をひいて、国家も破壊なくしては《新體》が有り得ないと結論づけている詩である。野口は《破壊》によつて靈的脱皮を遂げるであらう。／國家は受難に身を洗つて鏤骨の路を求めらるであらう。》という。このような詩は、自然の摂理で読者の共感を盛り上げて、民族共生の理想を獲得するための戦争であり破壊である、と巧みに理解を得ようとするもの、戦争遂行目的と合致するものと

も受け取れる。だが、自らの《啞》ぶりと非力さをうたう詩「心境」のすぐ後に置かれており、単純な宣撫とは受け取れない。

『八紘頌一百篇』第三部になると、さらにこの傾向、つまり戦意昂揚詩ではない詩歌の比率が高まる。ここでは紙幅も限られているので、第三部の最後の三篇を紹介したい。この三篇が『八紘頌一百篇』の最後の三篇でもあり、単純な戦争讚美とはいえない強い印象と深い余韻を与える詩である。

「花」(二八七―二八九頁)

花よ、

お前は梅でも牡丹でもない、

私に永劫を暗示する神秘の門だ……

お前は二つの世界が分れる所、

目標となつて、

虚實の境に立つてゐる。

耳あるものはお前の音譜を聞いて、

自然の母胎に歸るであらう、

目あるものはお前の色に酔つて、

夢の微笑に觸れるであらう、

私はお前の香氣を嗅いで、

人語の賤しい分散を恥ぢる。

花よ、

私はお前を眺めて、

人性を寸断し、

土壤に捨てて、

風と共に、胡蝶と共に、

お前の隠れた門を潜つて、

永劫の旅に上るであらう。

最早や私に知性の遊戯はない、

感情の起伏はない、

私は黙々として、

無限の召喚に答へるであらう。

かつて「秘密の門」を見つけられず「壁」の前に絶望し疲弊していた詩人が、「花」に「隠れた門」を見つけている。死と生、虚と実、理想と現実の「境界」にある「花」を前にして、人間性を捨て、感情を捨て、知性を捨てて、無言で「永劫の旅」に出よ、と喚起している詩である。この悲劇的な詩は、いわゆる戦意昂揚詩とはいえないが、「死」と「破壊」への悲劇的讚美とは受け取られるだろう。「死」への欲動に接近したファナティシズム礼讚は、「玉碎」讚美であり、戦争協力になりうる。では、この「死」と「破壊」衝動の問題は、最後の二篇でどう考えられるのだろうか。

「笛の音」(二九〇—二九二頁)

笛の音は私を呼んでいる、

更けゆく夜の書齋は寂しい、

私は読みかけの本を閉ぢ耳を敬てる。

笛は何を私に叫んでゐるだらうか、

暴風雨來を警告してゐるのか、

津波だ津波だと叫號してゐるのか、

それとも人性の破産を豫言してゐるのか、

信念の缺乏を嘲つてゐるのか、

本能の墜落を嘆いてゐるのか、

青春の頽廢を悼んでゐるのか。

笛の音は私を呼んでゐる、

私は黙々と机の前に坐つて耳を敬てる。

笛は何を私に叫んでゐるだらうか、

肉體の老を悲しんでゐるのか、

靈の涸渴を戒めてゐるのか、

それとも世界の滅亡を宣言してゐるのか。

ああ、笛の音は恐怖か脅迫か、

それとも歡喜か禮讚か。

私は立つて書齋の窓を開けて外を眺める、

闇い空に無数の星が煌いてゐる、

闇い庭に櫻の花弁が散つて雪のやうだ。

「笛の音」に、自らを嘲笑し糾弾する声を聞き、自らの「信念の缺乏」、「本能の墜落」、「青春の頽廢」を悔やみ、「恐怖」と「脅迫」を感じるという内容である。しかし、「世界の滅亡」が「恐怖か脅迫か、それとも歡喜か禮讚か」という部分においては、フアナティシズム禮讚につながつてもいく。特に最後の二行で、それまで切々と訴えてきた悔恨と恐怖がすべて「破滅」の美学の上に、華麗なほどこに印象的に昇華されている。最後の詩はどうだらうか。

「虹」(二九三—二九四頁)

私は手足を崖に横たへる、

人は私の格好のいいのを褒める、

そしていふ、

『なんとといふ見事な曲線だ、新月と雖も争ふことが出来ない。』

私は影を海上に流れさす、

これが棚引く、箒星のやうな動きをみせる、

人は私の體に寄り添つて、

私の閃めく胸に觸れる、いい氣持で心を天に上らせる。

だが、おおだが『空中の美觀』だなどと褒めることは止めて下

さい。

誰が精神を盡したものの悲しい犠牲を知つてゐよう？

みぢめなもの、これが私だ、大空に最善を蕩盡して、

人々の餓が満たされたが最期、

私は無言に消えなければならぬ。

この「虹」と題した詩篇では、自らの「最期」と無言消滅を確か述べており、「崖」「海上」「箒星」「空中」といった単語だけを集めれば「玉砕」讚美や自殺補助を助長するイメージに繋がる詩ともいえる。だが、この詩の主題はあくまでも「詩人」としての自分自身の「悔恨」と「消滅」とをいつているに過ぎず、単純な「玉砕」讚美とはなり得ていない。野口は「崖」のような際どい地点に体を横たえて詩を書いてきた自分に対する、社会的な評価を批判し嫌疑をかける。「見事」にみえる自分の詩歌の、裏の「犠牲」と「欺瞞」を告白する。美しくなどない、ただ「みぢめ」だ、と自供する。「人々の餓」に屠られて、つまり社会的要求を満たすための詩を書いたに過ぎない自分は、もはや無言のうちに自然消滅する、と自覚する内容が、「虹」の主題である。「虹」のように儂い虚像に、自らが「みぢめ」に「最善を蕩盡」し、また自分を眺める読者も「蕩盡」したことを、詩人は知っている。その幾重もの人間の精神と欺瞞に、自らを奪い尽くされ消滅させられていくことを是と受け

入れていることを宣言した内容である。

この最後の詩に関しても、「死」への悲劇的讚美であり、破滅の美学をうたったもの、と指摘することはできる。いくら個人的なものであったとしても「死」や「破壊」の悲劇的な感情をうたうことは、多数の破壊衝動を肯定することであり、戦争という蛮行に対する悲劇的讚美や美化になりえる。また詩の内容がどれだけ反戦的・厭戦的なものであったとしても、刊行許可を与えた権力や媒体が、それを戦争遂行目的に合致したものととして許容した瞬間に、詩人の良心の有無や作品の是非などは無意味となる。そしてさらに重要なことに、戦争詩において「死」や「破壊」をうたうことの文学的な問題は、日本文学に伝統的に培われてきた敗者の美学とも関わり、近代に形成された日本主義とも関わり、非常に複雑で深淵なものである。これは野口個人や一九四〇年代の戦争詩に限定して総体的解決が導けるような問題ではない。

本稿では、以上のような『八紘頌一百篇』の最後の三篇が、本書の前半の、使い廻された語句の羅列に過ぎない戦意昂揚詩とは完全に異質な詩歌であり、そこには野口の肉声が真実味を帯びて聞こえてくる、ということを立て証するに留めたい。ラジオでは「頹廢なもの」は厳禁されていたが、みてきたように刊行書籍の中には、「頹廢」や「厭戦」や「死」と悲劇性が詠いこまれている。つまり『八紘頌一百篇』の中に、メディアの中の野口には見られない、野

口独自の詩歌世界がある。《戦争屑詩》と一括して捨て去るわけにはいかない、戦時下の詩歌と文化があることを証明している。

刊行された詩集を手にした国民や詩人たちの中には、ラジオに表象される「声の権力者」としての野口とは異なる、詩人の実像を見ていた者もあった可能性がある。もちろん、ラジオや新聞に顕れない詩雑誌や書籍の出版というものが、戦況下の時代と国民大衆にどのくらい反映しえたのかということは考慮すべきだが、しかし日本における音声と文字の比率は、たとえば戦時期メディア研究でしばしば対照となるナチス・ドイツよりも高かったことは事実である。⁽¹³⁾

まとめ

本稿で明らかにしたいのは、野口もまた内部に両面性を持たざるをえなかった近代日本の知識人の一人であるといった単純な構図のみではない。野口の帰国（一九〇四年）後の活動に関して、従来の研究は「ナシヨナリズムに走って戦争詩を書いた」という一面的評価で終始してきた。だが、野口米次郎の文化ナシヨナリズムも「戦争詩」執筆も、そんな単純な構造のもとに成立したのではない。本稿では、『宣戦布告』と『八紘頌一百篇』に論証を限定した。そのため野口の戦時期思想に至る変遷の全体がなお論じきれしていない。だが、国際的な文化の運動性の中で、また日本主義・アジア主義の経緯や戦時期戦略の段階と連動させて検証するならば、野口像が従

来認識されていなかった様々な側面を表出させる。

かつて吉本隆明は、高村光太郎論の中で、『高村が反抗をうしなつて、日本の庶民的な意識へと屈服していったとき、おそらく日本における近代的自我のもつともすぐれた典型がくずれだったのであり、おなじ内部のメカニズムによつて日本における人道主義も、共產主義も、崩壊の端緒にたつた』⁽¹⁴⁾と述べた。また、『現実社会におけるすべての矛盾や混乱と対決することをやめて、いわば伝統の花鳥風月的な「自然」の讚美にまで退化した悲惨な事実』⁽¹⁵⁾を、高村の詩を挙げて述べた。しかし、かつて吉本がいったような「伝統の花鳥風月的な「自然」の讚美にまで退化した悲惨」といった文学史観は、後世からの一方的な糾弾ではない。

国際的な文芸思潮やモダニズムとの連携の中で日本文壇や詩壇が求めてきた「伝統」と「日本主義」は、少なくとも当事者たちにとっては、革新を意識したことでこそあれ、「退化」ではなかった。そのことは、近年、次第に明らかにされてきていることだが、野口米次郎を通して鑑みても明白といえる。国際的なラジオの時代が来て、モダニズムの方法を国際的な方法に普遍化しようとする試みの時代が来て、世界戦争の時代に重なる。日本の詩人たちも、その方策を試み、実験し模索していった。また時局に制限があることは自覚しながらも、戦後までを見据える視点をもって「戦争詩」を意識していた事実があった。

現在も、戦時下の詩歌に対しては、無意識のうちに前提となっている評価認識にとらわれて、犯罪性や暴力性や公共性を抽出して終わる傾向が、なお大勢を占めている。戦争とラジオ、また戦争と朗読運動といった方法からの戦争詩の検証は非常に盛んとなっており、それは重要な研究であるが、ただ、そこでは近代詩歌のたどった歴史観への論及が希薄になりやすい。また詩人個々人のたどった葛藤の歴史が抜け落ちていくことにはほとんど注意が向けられてこなかった。

本論で明らかにしたのは、「帝国メガフォン」と呼ばれる野口米次郎の「戦争詩」は、決してその全てが「熱烈な戦争賛美詩」や「戦意昂揚詩」だったわけではなく、ラジオなどの音声メディアに載せた詩歌や論説には見られない特異な表現が、詩雑誌や刊行著作などには表出しており、それらはより精緻な理論的見地に立った再検証に値するだけの内実を宿している、ということである。一九四二年、一九四四年という厳しい出版制限の中で刊行された『宣戦布告』『八紘頌一百篇』には、確かに多くのラジオ放送用・新聞用に作られた戦意昂揚詩が収録されてはいる。だが、その中に混じって挫折感や抵抗感、疑問や矛盾の心境をうたったものも収録されている。それらは、註記などの手段に訴えて、批判の矛先をかわそうとする痕跡は残しつつも、しかし印象的な配置によって、詩人の「肉声」を響かせている。それらは、詩人の時局迎合や愛国的狂信とい

った解釈にはとても収まらないだけの、屈曲し、複雑で、奥深い迫力をもった作品群である。

注

(1) この言葉を用いたのは小田切秀雄（一九一六—二〇〇〇）である。小田切は野口米次郎ら二十五名を名指して糾弾し、戦前の大御所作家たちの文学者生命を駆逐することを民主主義文学の出版の目的であると宣言した（小田切秀雄「文学における戦争責任の追及」『新日本文学』一九四六年六月）。

(2) 野口や佐藤春夫、三好達治、藏原伸二郎などを挙げて『戦争屑詩を量産した拙劣な詩人』は、『戦前／戦中／戦後に（変節こそあれ）変質はなかった』と述べている（坪井秀人『声の祝祭——日本近代詩と戦争』、名古屋大学出版会、一九九七年、一六一頁）。

(3) 坪井秀人『声の祝祭』、二一六頁。

(4) 坪井秀人『声の祝祭』、一六一頁。

(5) 拙論「野口米次郎の英国講演における日本詩歌論——俳句、芭蕉、象徴主義」『日本研究』二〇〇六年三月、五一、五八、六三頁。

(6) たとえば、『帝國文学』明治三十七年四月号には、坪井九馬三、上田万年、芳賀矢一、土井晩翠が、五月号には夏目漱石が『従軍行』などの戦争詩を書いている。

(7) たとえば、伊藤整「戦争と神秘主義文学」『月刊文章』一九三七年十一月）、服部嘉香ら十八名による「戦時に際しての感想」『日本詩壇』一九三七年十一月）、草野心平「戦争と詩壇」『月刊

文章』一九三七年十二月)など。

(8) 以下、「戦争と文学」というタイトルでの寄稿をした人物と雑誌媒体を挙げてみる。河上徹太郎『文藝春秋』、室生犀星『改造』、本多顕彰『新潮』、西村伝七『若草』(以上、一九三七年十月)。山本恵一『詩と歌謡と』(一九三七年十二月)。今日出海『新潮』(一九三八年九月)。保田与重郎『日本文学』(一九三八年十一月)。小宮豊隆『日本評論』(一九四〇年四月)。

その他、青野季吉「戦争と文学について」(『政界往来』一九三七年十月)や、阪本越郎「戦時の詩文学」(『小学校体育』一九三八年一月)、新居格「戦時文壇推進力」(『月刊文章』一九三八年一月)などもある。

(9) 日夏耿之介「将来の日本的詩歌」(『中央公論』一九三八年四月)、徳田秋声他「時局と文学の使命(座談会)」(『新潮』一九三八年十月)、古谷綱武「時局下文学者の反省すべきこと」(『新潮』一九三八年十二月)、青野季吉ら他「時代と文学者の生きる道(座談会)」(『新潮』一九四〇年九月)、上泉秀信「時局下の文学と文学者」(『文芸情報』一九四〇年十月)、河上徹太郎他「文学と新体制(座談会)」(『文学界』一九四〇年十一月)、丹羽文雄他「転換期における作家の覚悟」(『新潮』一九四〇年十二月)などがある。

(10) ジェームズ・ジョイスやヴァージニア・ウルフなどの英文学に造詣が深かったモダニスト詩人(ちなみに、野口米次郎がジョイスを日本に最初に紹介した人物である)。

(11) 雑誌『蠟人形』は西條八十が主宰の雑誌で、野口の寄稿も幾つもある(編集後記などには、野口「先生」として扱われている)。

(12) 安藤一郎「戦争詩といふもの」『蠟人形』一九三八年三月、一七頁。

(13) 安藤一郎「戦争詩といふもの」、一九頁。

(14) 岡本潤「今日の詩感」『蠟人形』一九三八年五月、二二―二四頁。

(15) 一九二六年の中央亭事件を指す。

(16) 戦争とメディアの研究は、佐藤巧己氏や竹山昭子氏らの仕事に詳しい。ただし、佐藤氏はナチス・ドイツのラジオ戦略と比較して、日本での「国民化される大衆」を論じているが、ドイツでの声の力による「大衆の国民化」を、日本のそれに単純に当て嵌めることには異を唱えたい。日本の場合の「帝国民化する」ということは、アジア主義やインターナショナルリズムの中でのコスモポリタン化を指したし、当時の日本国民の識字率の高さからいっても、声と文字の比率がドイツの場合とは異なるからである。

(17) 一九二五年は、ザルツブルグからモーツァルト祭がヨーロッパ各地に中継されて「世界で最初の成功した国際交換放送」元年と呼ばれた(『日本放送史』上、一九五一年、五二―五六頁)。

(18) 東京中央放送局(JOAK)が仮放送を始めたのが一九二五年三月二十二日で、同年七月十二日には愛宕山から本放送が開始される。この放送は、本来意図していなかったことだが、海外(アラスカやカリフォルニア、オレゴン、オーストラリア)でも受信され、聴取報告が届いた。つまり、日本の国内放送は最初から国際性をもち、対外放送、海外放送の意味をもった。

(19) 「ラジオ東京」として知られる日本の海外放送は、一九三五年

六月一日に開始され、その後いくつかの段階を経て、満州、朝鮮、台湾などの植民地、さらにアジア各地の占領地から、海外放送、対敵放送が行われていく。これに関しては、『ラジオ・トウキョウ』（北山節郎著、田畑書店、一九八七年、一頁）など多くの研究がある。

(20) 《六月十五日及び十七日に日本の自然詩人ヨネ・ノグチ氏が例の豊かな氏特有の細かい自然美の観察を米國へ贈られた。六月の母國便り、氏の自然美への熱心な探求と、海外人に日本の自然のみがもつ美を傳へんとする詩的努力は俗人は知らぬながら必ずや詩人の心に相觸れたと思ふ》（最所フミ子「海外放送」『放送』七巻七号、一九三七年七月、六三頁）。

(21) 坪井秀人『声の祝祭』、一六三—一六四頁。

(22) 坪井秀人には『声の祝祭』の他、『感覚の近代——声・身体・表象』（二〇〇六）、「抒情」と戦争——戦争詩の主体における公と私』、『動員・抵抗・翼賛（岩波講座 アジア・太平洋戦争3）』（二〇〇六）などがある。

(23) 坪井のように《反モダニズム》というと、伝統回帰の主張が「モダニズム」に反する潮流のように聞こえるので、ここでは敢えて、伝統回帰運動という。

(24) 坪井秀人『声の祝祭』、一六一—一六二頁。

(25) 坪井秀人『声の祝祭』、七頁。

(26) たとえば、イタリアの未来派がオノマトペを愛好して騒音音楽を生み出し、あるいは、一九二〇年代のロシア・フォルマリズムが詩の朗読や音声の表現形式に関心を示したことを考えてみても分かる。

るように、モダニズムは「音」を重視するパフォーマンス的な志向性と無縁ではない。

(27) 瀬尾育生『戦争詩論——一九一〇—一九四五』平凡社、二〇〇六年、一二四頁。

(28) 瀬尾育生『戦争詩論』、七八—七九頁。

(29) 一九二四年十月十九日、築地小劇場で朗読会「詩人の日」（小山内薫のよびかけ・詩話会の後援）が開催され、佐藤惣之助、島崎藤村、与謝野寛、与謝野晶子、野口米次郎、川路柳虹、富田碎花、福田正夫、白鳥省吾、尾崎喜八、野口雨情、深尾須磨子、山田耕柊らが参加した大盛会だった。また一九三七年七月には、新宿大山で「詩朗読コンクール」が開催され、河井醉茗、野口米次郎、佐藤惣之助、福田正夫、白鳥省吾、吉田一穂らが参加した（当然ながら、一九二〇年代以降は、これ以外にも多数の朗読会が開かれているのである）。

(30) 「大東亜舞台芸術研究所」は、伊藤道郎を中心にして一九四四年に創設された組織で、野口米次郎、山田耕柊、藤田嗣治（美術）らが顧問として名を連ねた。戦局の厳しい中、ダルクローズ学院のような、アジア諸民族の舞台芸術を一つに束ねるような国際的芸術学校の建設が夢想されており、「太陽の劇場」構想と呼ばれた。

(31) 一九三六年十一月十六日発行より、一九四一年九月二十日発行の第七八輯までがある（もともと大阪中央放送局が歌謡曲を「浄化」しようとして始めたものである）。楽譜の頁数は七頁で、多くが二曲ずつ収録されているが、第三七輯のように一曲のみ収録のものや、三曲収録の例も一件ある。このシリーズには、最初の頃には、

第三輯「椰子の実」（島崎藤村・詞）や第一六輯「奥の細道」（齋藤四郎・詞）のように、戦争や愛国を直接的な主題にしないものの方が多かったのだが、次第に第二六輯「愛国の花」（福田正夫・詞、古関裕而・曲）や第三三輯「万歳ヒットラー・ユーゲント」（北原白秋・詞、高階哲夫・曲）、第三五輯「遂げよ聖戦」（柴野為亥・詞、長津義司・曲）といった、戦時を反映した曲目になってくる。

(32) 信時潔（一八八七—一九六五）は、戦時歌謡曲「海ゆかば」などの作曲家。「海ゆかば」は日本放送協会の依頼により「万葉集」の大伴家持の長歌の一節に曲をつけたもので、一九三七年十月から「国民唱歌」として、一九四一年十二月以降は「国民合唱」として放送され、戦局が傾くと日本軍玉砕のニュースと共に放送された（竹山昭子『史料が語る太平洋戦争下の放送』世界思想社、二〇〇五年、一八二頁）。

(33) 一九三九年の欧州大戦勃発と同時に、戦時下の国民生活の刷新強化をはかるための「興亜奉公日」が定められ、毎月一日に行われた。

(34) 北山節郎『ラジオ・トゥキョウ』、三〇〇頁。

(35) 「米英撃滅の歌」コロムビアNo:100902（コロムビアレコード流行歌年表）「CD昭和の流行歌」（一九九八年・日本コロムビア）資料編による）「米英撃滅の歌」というタイトルのものは一九四三年に、矢野峰人作詞、山田耕筰作曲、伊藤武雄歌、で別作品が存在する（コロムビアNo:100761）。

(36) 『藝術殿』（一九四二年）、『詩歌殿』（一九四三年）、『文藝殿』（一九四三年）、『想思殿』（一九四三年）、『伝統について』（一九四

三年）、『聖雄ガンジー』（一九四三年）、『起てよ印度』（一九四二年）、詩集では『宣戦布告』（一九四二年）、『八紘頌一百篇』（一九四四年）がある。

(37) 矢野貫一編『近代戦争文学事典』第四輯、和泉書院、一九九五年七月十日、一三七頁上段。

(38) 矢野貫一編『近代戦争文学事典』、一三七頁下段。

(39) 拙論「野口米次郎の一九二〇年代後期の指向性——雑誌『國本』への寄稿を中心に」（『総研大文化科学研究』第四号、二〇〇八年三月、八七—九五頁）を参照。

(40) 野口米次郎「宣戦布告」抜粋『宣戦布告』、七頁。（この詩の丸山定夫による朗読は、坪井秀人『声の祝祭』に収録されたCDの中に収められている）。

(41) 野口米次郎「一億の決死隊」抜粋『宣戦布告』、一〇頁。

(42) 絶叫調の朗読に関しては、ラジオ放送のアナウンスが、それまでの〈淡々調〉（話しかけ調）から〈雄叫び調〉に変化したのは一九四一年二月の開戦を機にしていることが知られている（これについては、北山節郎『ラジオ・トゥキョウII』（三六三頁）、竹山昭子『史料が語る太平洋戦争下の放送』（一一〇—一二四頁）などに詳しい。アナウンスの問題に関しては、当時、現役アナウンサーたちが雑誌『放送研究』（一九四二—一九四三年）で議論を尽くしている）。

(43) 野口米次郎「召集令」抜粋『宣戦布告』、四三—四五頁。

(44) 「解説・召集令」『常磐樹』大政翼賛会文化部編、一九四二年、三〇頁。

- (45) 『常磐樹』は五万部のベストセラーで、野口の他十二名の詩が一篇ずつ掲載され、高村光太郎、島崎藤村、北原白秋、萩原朔太郎、そして宮沢賢治の「雨ニモマケズ」などが収録されている。
- (46) 「解説・召集令」『常磐樹』、三〇頁。
- (47) 坪井秀人『声の祝祭』、二二六―二二七頁。
- (48) 野口は自らのことを「二重国籍者だ、笑つてのけろ」と詩に詠い、地域主義者であり国際主義者であると論説し、常に境界者の立場を重要視する議論を続けてきた詩人である。
- (49) 『宣戦布告』（道統社、一九四二年三月十五日）は、四月十六日、「倫敦炎上」が削除処分となった（『近代出版側面史』『日本近代文学大辞典・索引篇』、一八九頁）。
- (50) 野口米次郎「畝火山の鶯」抜粋『宣戦布告』、一九〇―一九四頁。
- (51) 岡本潤「断想」『蠟人形』、一九四一年七月、一二―一五頁。
- (52) 岡本潤「断想」、一二―一五頁。
- (53) 《百合の花は、一花瓣一花瓣私の心の血で織られ》、《小さい震える諸鳥は私の霊が音楽と権化したもの》で、《重々しい香氣は私の感動が溶解して空氣性の精氣となったもの》で、《この燃える緑と黄金の空は「眞の私」で》といったサロジニの書簡を紹介して、野口はハイドラバッドの家の芸術的風物を想像していた（野口米次郎『印度の詩人』第一書房、一九二六年、八二頁）。
- (54) 野口米次郎『印度は語る』第一書房、一九三六年、一九九―二〇三頁。
- (55) 岡本潤「渾沌のなかの素朴」『蠟人形』、一九四一年一月、一〇頁。
- (56) 岡本潤、「断想」、一二―一五頁。
- (57) 壺井繁治「指の旅」『文藝』一九四二年七月、第十卷第七号、四二―四三頁。（もちろん、壺井には壺井独自の詩歌の系譜があるので、この一篇だけから比較を試みるのは誤解を招きかねないが、あくまでも詩のモチーフから対照している。）
- (58) 十二月八日の朝七時に、NHKラジオの臨時ニュースで米英との開戦が国民に知らされ、正午に「宣戦の詔書」が朗読された。それに続いて、東条英機首相の「大詔を拝し奉りて」と題する談話が発表された。
- (59) 野口米次郎「跋にかへて」『宣戦布告』、二一九―二二〇頁。
- (60) 野口米次郎、前掲、二二〇―二二二頁。
- (61) 「日本文学報国会」は太平洋戦争開戦と同時に大政翼賛会文化部と文壇側とが協議を重ねて、『挙国一致体制整備』の促進のために企画した文化組織である。徳富蘇峰を会長に、各分会に分かれていたが、野口は詩部会の名誉会員であり、外国文学部会の会員となっていた。ちなみに詩部会の会長は高村光太郎で、理事は川路柳虹と佐藤春夫、野口の他の名誉会員は、蒲原有明、河井醉茗、薄田泣菫、土井晩翠の四名であった（『社団法人 日本文学報国会会員名簿 昭和十八年版』、新評論、一九九二年五月）。
- (62) 野口米次郎「伝統について」、牧書房、一九四三年五月二十日、二五三―二五四頁。
- (63) 《八紘一宇》は、「全世界を一つの家とする」という意味である。《大東亜共栄圏》とともにスローガンとなっていたものである。天

皇を中心に一つの家とするという意味にも、日本を中心にアジア世界を一つの家に、という意味にも受け取られる。当時は、世界の歴史性を意識した家族の序列（親子関係や兄弟関係）をアジア民族に当てはめて、「八紘一字」の共存共栄の在り方を説いていた。大東亜共栄圏の民族間に親子関係のような指導の在り方は存在するが、支配被支配の構造はない、という考え方であった。

(64) 一九四〇年に第二次近衛文麿内閣が、「基本国策要綱」を決定し、「皇国の国是は、八紘を一字となす肇国の精神に基づく」と発言した。

(65) 同じようにGHQに没収された本として、『八紘一字』（大道重次、立山塾、一九三八年六月三日）、『八紘一字之精神』（宇都宮謙・藤波則之編、弥栄会本部、一九三八年十一月三十日）、『八紘一字の教育』（川崎利市、明治図書、一九三九年三月二十日）、『八紘一字』（大河平隆光、人生創造社、一九三九年九月十五日）、『八紘一字』（里見岸雄、錦正社、一九四〇年二月八日）、『八紘一字 附戦争と平和』（大河平隆光、大日本法令出版、一九四〇年三月十五日）、『八紘一字ノ大詔 紀元二千六百年紀元節ノ詔書謹解』（三浦藤作、東洋図書、一九四〇年九月二十日）、『八紘の家』（今成覚禪、平凡社、一九四〇年十月二十日）、『八紘為宇の御精神の明日と日本』（二荒芳徳、湯川弘文社、一九四一年六月五日）、『八紘一字史の發足』（加藤一夫、龍宿山房、一九四二年四月二十日）、『八紘為宇の大籌』（有賀成可、日本文化研究会、一九四三年二月十一日）、『八紘為宇の大生命』（本間俊平、協和書房、一九四三年六月二十日）がある。

(66) 竹山昭子『史料が語る太平洋戦争下の放送』、一六一―一七頁。

(67) 冒頭の詩は「神風萬里」、二番目は「祖国禮讚」（これは、『伝統について』（一九四三年）の序詩に掲げられたものの再録）である。三番目の、『天に代つて、敵を打つ（中略）米英撃滅、時は今、罪膺懲の、樂は鳴る。』とうたった「米英撃滅歌」（八一―一〇頁）は、『松竹大船撮影所のために作ったもの』と注記されている。この詩「米英撃滅の歌」は山田耕筈の作曲で歌曲にもなったものである（『戦時女性』一九四四年十月一日号に掲載）。その他、「故山本元帥挽歌」（一・二）や「軍神加藤讚仰」（一・二・三）などがある。

(68) 情報局次長奥村喜和男が「マニラ占領の意義」を語り、その後「野口米次郎の詩「マニラ陥落」が丸山定夫によつて朗読された（北山節郎『ラジオ・トウキョウII』、七三頁）。

(69) 一九四二年二月十六日の高村光太郎と野口米次郎の「シンガポール陥落」の朗読（山村聰）は、シンガポール占領の最初の報（前日の夜十時過ぎ）の翌朝のニュースのあとに放送された。その夜は、谷崎潤一郎の「シンガポール陥落に際して」を和田信賢が朗読し、一七日の夜は、志賀直哉の「シンガポール陥落」を浅沼博が朗読し、一八日には、室生犀星作詞、山田耕筈作曲、独唱伊藤武雄、合唱放唱、管絃楽放響へ日本放送交響楽団、指揮山田耕筈「シンガポール陥落す」の豪華企画であった。ラジオでは祝勝番組が連続で放送された（北山節郎『ラジオ・トウキョウII』、一〇六一―一〇七頁）。詩の言葉が《あたかもニュース解説のコメンテーターのごとく振る舞つ》ていたのであり、『ラジオというメディアの情報伝達の速度性にあわせて朗読詩の作者たち』も素早い対応が期待されていた。

野口と高村の「シンガポール陥落」朗読は、《その最初の顕著な例》といえる（坪井秀人『声の祝祭』、二四五頁）。

(70) 野口米次郎「死地に乗入る二千數百」『TWO THOUSAND IN THE VALLEY OF DEATH』より『八紘頌一百篇』、三五一—四〇頁。

(71) 野口米次郎「心境」より『八紘頌一百篇』、一七二頁。

(72) 一九四二年十月には東京都市通信局放送課によって、「頹廢的なるもの」は嚴禁と明記されている（竹山昭子『資料編』『史料が語る太平洋戦争下の放送』、二五二頁）。

(73) 江戸時代の藩校・寺子屋の制度につづいて明治期の学制発布（一八七二年）以降、日本国民の識字率は世界的にみて最も高い水準にあったことが、戦後のロナルド・ドーア氏（Ronald Dore）の *City Life in Japan, 1958* によって示されている（ドーア著、青井和夫・塚本哲人訳『都市の日本人』一九六二年、岩波書店、一五一—一五四頁）。

(74) 吉本隆明『高村光太郎』講談社文庫、一九九一年、一四五—一四六頁（これは『吉本隆明全著作集8』（一九七三年）を底本にしたもの。吉本の『高村光太郎』は、一九五八年十月に初版、一九六六年二月に決定版、一九七〇年八月に増補決定版が出ている）。

(75) 吉本隆明『高村光太郎』、一四九頁。

附記

本稿は、日文研・共同研究会「出版と学芸ジャンルの編成と再編

成」で口頭発表した「野口米次郎と戦争——ラジオと出版物にみる戦争詩」（二〇〇六年十一月十八日）と、日文研・横断シンポジウム「戦争、メディア、ジャンル」（二〇〇七年一月二十六日）での坪井秀人氏「記憶装置としての戦争詩——Before and After Dec. 8th 1941」へのコメントライターを務めた時の発表資料に基づき、まとめたものである。御教示いただいた方々に心より感謝申しあげたい。

異郷での彷徨

——「上海」の一解法

比類のない巧みな群衆描写と、例えば、「世界の実行力の中心点は黄色人種にあるといふことになる」(二二八)などのように危うい記述との評価軸の間で多くの批評の栄に浴して来た「上海」(昭和三年十一月～六年十一月、『改造』)は、しかし、それが仮令作者横光に対して好意的な読みの場合であっても、内容的・構造的批判を微塵も随伴しないものは、ほぼ絶無であった。

新感覚派的描写法の達成、否その終局、発表状況の複雑さと改稿の問題、(一)小説との呼称の付与の困難性、「機械」(昭和五年九月、『改造』)に顕在化する自意識点描の萌芽、史実との一致と不一致など、様々な問題を論者に吐露させつつも、そこに非難の要素を含ませる事を忘れなかった。換言すれば、「上海」は、前記評価の揺れを前景化させる事により、読者を多く「論ずる」という場を引き出して来たテキストであると言えよう。

中川 智 寛

本稿においては、主要登場人物の造型分析に軸心を置きつつ、先行研究が言及していない諸要素についても、可能な限り述べて行きたい。

一

確証は得られないものの、中心人物は、恐らく参木だと思われる。しかし、参木と作者横光とがほぼイコールであるとの見解は、やや性急な結論に思え、安易に肯定出来ない。

参木の特性としてまず挙げられるのは、「だんだんと死の魅力に牽かれてい」き、「一日に一度、冗談にせよ、必ず死ぬ方法を考へ」(一一)ている人物だという事である。人生の中に積極的に生きる目的を見出せず、「——俺の生きてゐるのは、孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。——」(一一)

とまで割り切つて考えている。このような参木の思考形態は、作中でほぼ一貫されていると見る事が出来、物語全体に退廃的な気配を充溢させるのに寄与している（もつとも、「死にたい」という言葉は、参木の影響を受けてか、お柳が発話する箇所もある）。

トルコ風呂（原文通り）の店主お柳は、どこか参木の事が気に入っている様子でもあるが、参木は、「まだ一度もお柳の誘ひを赦したことがない」（二三）。一方、お杉の事は参木自身、かなり心配しているようであるが、そのお杉に対しても、「参木は前に行く彼女の身体に手が延びさうな危険を感じ」（二〇）ると、お杉を一人で先に帰らせるなどして自らの身を律しており、ある意味で潔癖であると言える。

当初勤めていた「常緑銀行」を専務との確執により誠首された後、高重の紹介によって「東洋綿糸会社の取引部」に再就職する（一九）。ある日、工場を高重に案内されていた参木は、そこで芳秋蘭を見付け、彼女について高重から説明を受ける。その後の、次のような記述は重要であろう。

参木はその逆巻く棉にとり巻かれると、いつものやうに思ふのだ。——生産のための工業か、消費のための工業か、と。さうして、参木の思想は、その二つの廻転する動力の間で、へたばつた蛾のやうに、のた打つのだ。（二三）

単に退廃的・虚無的と見えていた参木の胸に、資本主義経済の構造への深い懐疑の念が封じられていた事が分かる。ここで、参木は「支那（原文通り—中川注、以下同様）の工人には同情を持」ちつつも、「埋蔵された原料を発掘する」事の優先性を思う。一方、「工人達」の「反抗」もあり得ると考えていて、冷静な視点も持ち合わせている。

また、参木は、ナシヨナリスティックな思考を体现する人物という点においても、非難の対象となる場合がある。例えば、以下のやうな記述。

彼は自分の身体が、母の体内から流れ出る光景と同時に、彼の今歩きつつある光景を考へた。その二つの光景の間を流れた彼の時間は、それは日本の肉体の時間にちがひないのだ。そして恐らくこれからも。しかし、彼は彼自身の心が肉体から放れて自由に彼に母国を忘れしめようとする企てを、どうすることが出来るであらう。だが、彼の肉体は外界が彼を日本人だと強ひることに反対することは出来ない。心が闘ふのではなく、皮膚が外界と闘はねばならぬのだ。すると、心が皮膚に従つて闘ひ出す。（三五）

すると、彼は彼をして空腹ならしめてゐるものが、ただ僅に自

身の身体であることに気がついた。もし今彼の身体が支那人なら、彼は手を動かせば食へるのだ。それに——彼は領土が、鉄よりも堅牢に、自身の肉体の中を貫いてゐるのを感じないわけにはいかなかった。(四〇)

いずれも、上海という異国の地における参木の肉体感覚と、「領土」への省察が吐露されている箇所である。恐らく、これまでこれらの描写が批判されて来た事由は、参木の心内表現の中の「領土」や「身体」という語が着目され、参木が自身の立っているその場を日本の「領土」と見做す、そのような考えが帝国主義的である、といったような文脈がそこに見出されていたからだろう。しかし、特に後者の引用部前後を精読してみると、そのように簡単には概括出来ない事に気付く。これらの場面において参木が発する「領土」という語は、中国から篡奪し得る土地というような単一的な意味ではなく、「自分自身の帰属すべき国・地域」といった意も含めた、より複層的なものとして理解されるべきであろう。

参木は、従来論じられて来たような、一語(例えば、「ドン・キホーテ」など)で統括可能な人物ではなく、様々なヴェクトルを包摂した、複雑な人物として造型されていると考えられる。女性関係という点においても、真に想っているのは競子(これもしばしば指摘されている事だが、この女性は、作中でその実際の姿を一度も現さない)

であるとの記述があるが、芳秋蘭に一目惚れしたり、結末近くではかなりお杉に傾斜したりという風(5)に定まりを見せておらず、先述の潔癖な要素と、どこか背反している。

二

参木以外の主要人物についても概観しておきたい。

甲谷は、暗闇の中でお杉の貞操を奪っておきながらも、それを金銭で解決出来ると信じて微塵も疑わぬ人物である。銭石山との経済議論(二八)の中では、中国が、自分で自分の首を絞めているとの見解を示し(これには銭もある程度同調している)、金銭の権化であるかのような描かれ方がなされている。しかし、同じくこの銭との応酬の中では、中国を賞揚する言辞と批判する言辞とを混淆させて応戦しており、強かな一面も見受けられる。

また、甲谷は、どこか浮薄な感じが否めず、参木と釣り合う程の描写はなされていない。後年の所謂純粹小説群、またはそれら以後の横光の作品であれば、この甲谷の立場の人物のテクスト内での濃度が高められ、主人公と対等の位置に立って議論したりする素地を与えられるのであろうが、本作では、主人公とそれに比肩するライバル的位置の人物造型という点に限れば、純粹小説群への試行段階であったと見做されよう。

甲谷は更に、宮子に言い寄る際にはシンガポールへ行っても良い

と話すなど、参木とは異なる意味で、舞台上海には根差していない。お杉に対してもだが、上海という生活の地自体を、極めて軽く考えているのである。

高重は「国粹主義」、山口卓根は「アジャ主義」の役割をそれぞれ割り当てられ〔四〕、特に山口は、後半、甲谷が自分の元に逃げ込んで来た時に、地下の死体に溢れた「製作所」を披露する〔四二〕など、グロテスクな一面も強調されているが、それぞれがどこかアンバランスな記述がある事も否めず、作中で重要な役割を付されていない。殊に高重の描写については、それが後半で今少し盛り込まれていれば、小説はより精彩を帯びたのではないかと思われる。

お杉については、貞操を奪われた直後の段階では、その犯人が参木か甲谷か明らかにはされておらず、その謎が物語展開の一つの軸心となる可能性が匂わされるが、その犯人は甲谷である事が程なく作中で明かされる為、その謎の要素も消滅する。誠首にレイプという過酷な運命を強いられたお杉は、しかし、春婦となる事を自分で決意してからは、都市の陥穽に沈降するかのようになり、一旦作中で描かれなくなる。そして、結末近く（加筆された部分）で再び盛んに描かれる事になり、参木の想う対象がお杉に移って行ったかに見える、一つの要因となっている。特に、お杉についてのこの加筆がなされた理由は、田口律男の指摘の通り、そこに反国家的な傾向を植

え付ける必要性があったからであろう。亡夫（お杉の父）の恩給で辛うじて生計を立てていたお杉の母が、突如として支給「不正当」との事由によってその恩給全額の返却を要求され、それを苦にして自裁した事が書き加えられたのは、単にお杉の人物像の悲劇的色彩を濃くする為ばかりであつたとは考えられない。わざわざ恩給という要素も付加してこのような形象を与えられる事で、お杉は、参木や甲谷とはまた異なる位相において、特定の国家や地域に帰属しない（出来ない）根なし草としての立場を明瞭にされたのである。そして、改稿部分も加えた「上海」全体において、参木・甲谷と同等の（あるいは、甲谷に対してはそれを凌ぐかも知れない）位置を付与されたと思える事が出来る。

そして、作中で異色の光彩を放つ芳秋蘭だが、暴動の後に参木に対して「でも、それ（暴動・罷業——中川注）はあたくしたちの手で起きなければ、あたくしのやうに、お国の方に御迷惑をおかけするやうな結果になるだけだと思ひますの」（二四）と言ひ、革命家としての矜持と自尊心を示したり、群衆描写の際に多く介在したりという風に、物語の大きな駆動源となっていると目されるのだが、高重同様、後半でその描写が漸減化して行ったとの感はある。参木と男装した芳秋蘭とが奇跡的に再会した後は、秋蘭の死の情報だけが参木に齎され、その情報の当否は明らかにされないままに物語は終わるのだが、生きる方途を見失ってしまった参木と、

革命家として生命を賭している芳秋蘭との遣り取りが、もつとふんだんに加えられるべきだったと考えられるのである。しかし、その生死が曖昧にされる事で、芳秋蘭もまた、帰着点を持たずに一瞬一瞬を生きて行く人物として点描されているのである。⁽⁷⁾

芳秋蘭とは描かれ方が大きく異なるが、「モスコウ」への郷愁の念を露わにしつつ(「二二」)、後半(「四三」)でもその苦難の逃走の顛末を甲谷に話すオルガも、舞台上海に定着しておらず、そこからの脱却を常に夢見ている事が、特性として見受けられる。

今までに挙げた人物達と比べ、かなり違った描かれ方なのは、宮子である。上海が混乱の極みに達している事を甲谷から指摘され、共にシンガポールへ逃げる事を求められた際の、宮子の回答。

だつて、あたしにや此の街ほど大切な所はないんですもの。
 あたしここから出ていつたら、鱗の乾いたお魚みたいよ。もう
 どうすることも出来なくなれば、あたし死ぬだけ。あたし覚悟
 はいつだつてしてるんだけど、でも、あたし此の街はやつぱり
 好きだわ。(「三七」)

少なくともここでの宮子の発話からは、彼女が上海という土地にかなり拘泥している事が分かる。これまで述べて来たように、小説「上海」の主要登場人物は作品の舞台上海に根差しておらず、嫌気

を示している者さえいる。そんな中であつて、このような感情を発露する宮子は、異色であるとも言える。小説「上海」において、その舞台上に最も執着しているのは宮子であり、ある意味で、そうではない他の主要人物を相対化する存在なのである。

三

以上見て来たような、登場人物達とその作品舞台との拮抗は、小説内の言語という問題点においても、作品の中かなり影を落としている。

参木とオルガとの遣り取りの中で、オルガがあまり英語が得意でない為、「参木はもう三日間、ブロークンな英語の整理に疲れてゐた」(「一二」)との記述が現れる点からは、参木が日常会話程度の英語(勿論、ここでの「英語」は、作中の上海で通用しているもの、という意味である)に支障がない事が示されている。また、宮子が参木に対して「あたし、甲谷さんの好きな所は、御自分の英語の間違ひも御存知にならない所だけよ。あれならきつと奥さんにおなりになる方だつて、お幸せにちがひないわ」(「二九」)と指摘する箇所からは、参木とは対照的に、甲谷が英語を不得意としている事が窺える。

一読して分かるこれらの要素以外にも、「上海」には、言語を巡る様々な戦略が張り巡らされている。これまでの研究では、黒田大

河が登場人物達の身体性の問題と関連付けた指摘を行い、また、金槓⁸によって、関わりの深い語同士の呼応関係が見出されたりといった成果が上げられているが、これらの論及と関係性があると考えられる箇所として、数例を引く。

①此の馬車を動かす蒙古馬の速力は、刻々ニューヨークとロンドンの為替相場を動かしてゐるのである。馬車は時々車輪を浮き上らせると、軽快なヨットのやうに、飛び上つた。その上に乗つてゐる仲買人達は、殆ど欧米人が占めてゐた。彼らは微笑と敏捷との武器をもつて、銀行から銀行を駆け廻るのだ。
(一七)

②「われわれは支那人の排英にはもう賛成しませんね。支那人に出来るのは、排支だけだ。」

「廃止か。」(三二)

③「(略) 凡そ今回の事件は、中、英、国際の紛争に非ずして、実は黄白消長の関鍵であり、之を換言すれば、即ち、(以下略)」「(四三)、傍点いづれも中川

①は「微笑」と「敏捷」、②は「排支」と「廃止」、③は「関鍵」と「換言」という風に、意味は全く異なりながらも発音が同じ(または似ている)語を並列させている事が分かる。

①は、甲谷が「村松汽船会社」へ向かつている車の中から、「並列した銀行めがけて、為替仲買人の馬車の密集団が疾走してゐる」のを目撃する箇所であり、後の罷業・暴動の場面程には大々的でないが、「上海」における群衆描写の一環と見る事が出来る。甲谷はここで、「彼等の株の売買の差額は、時々刻々、東洋と西洋の活動力の源泉となつて伸縮する」と感じ、そこに国際的な経済活動のエネルギーを感じ取っている(しかも甲谷は、この「為替仲買人になるのが理想であつた」)。

②は、前者がアムリの発話、後者が山口の発話であり、山口の方が文字通りのダジャレで応じたものである事が分かるが、この遣り取りの前後には、暴動の原因となつた「発砲」の犯人推理を巡る会話があたり、「ガラス台の下の寶石類」の出所についての話があったりと、複雑な国際関係問題という枠組みの中で話されたものである事が分かる。

③も同様であり、これは、李英朴から山口宛ての手紙の一部分である。甲谷が「名文」と評価するその内容は、欧米の帝国主義的政策を「滅種計画」として鋭く非難し、「願くば君吾が説に賛成するならば、共に起ちてこれを図り、併せてわが民族の救援につき討論せんことを請ふ」と結ばれている。母国の現状と未来を強く憂慮しつつも、何とか希望を見出そうとしている。

①から③は、いずれも緊張した国際関係が記述されている箇所

あり、そこに併せて前記のような掛詞的言辭が配されているのは、偶然と言うよりは寧ろ、作者横光の強い意図がそこに籠められていると考える方が自然だろう。地の文・会話文・手紙文と、わざわざ異なる位相でこのような表現を盛り込んだのは、この小説の言説レヴェルの全てにおいて、登場人物がそれぞれの言語感覚を動員し、自らの発語・語感を異郷において確認している事を示していると読み取れる。⁽¹⁰⁾それは、自己の発する言語の確実性を常に模索している試みとも見え、その要素がアムリや李英朴など、作中ではやや周縁的な位置に置かれている人物にも据えられている点に、注意の必要があるだろう。

主要登場人物が自分達の帰属すべき場所を求め続けている様は、それぞれが発する言語面においても、そして更には地の文においても示されており、作中でしばしば記述される切迫した国際情勢と対応する形が取られているのである。

これについては、横光自身の文字への眼差しが顕在化している好例であるとも理解できよう。横光は、「文字について―形式とメカニズムについて―」⁽¹¹⁾において、

文字は物体である。(中略)しかし、文字は物体である以上、メカニズムに従へば、内容を持つてゐる。さうして、その文字と云ふ物体の内容は、どこから測定するか。即ち、われわれは

その内容を、われわれの感覚と知覚とに従つて、その文字である物体の形式から、山なら山、海なら海と云ふエネルギーを感じるのだ。その場合、われわれが、その文字である物体の形式から、何の特別なエネルギーをも感じないとすれば、その感じ得られなかつたその者の感覚と知覚に、何らかの欠陥があつたので、それはその文字である物体としての形式そのものには、何の責任もないのである。

と述べている。

引用部から、横光が、文字に対して自律性と質料性の双方を認めるといふ、独特の考えを持つてゐる事が分かる。この文章が、まさに「上海」の連載期間中に発表されたという事にも注目しておこう。「上海」における先述のような試行は、この論理の直線的な実践というよりは、これが更に変化したものであろう。引用部の後には、文字と作品内容との関連の重要性、文字のエネルギー、形式主義などへと話題が展開され、文字というものに対する、横光の並々ならぬ関心が窺える。この文章の中で「音響」への言及がある事からも分かる通り、この種の意識は、「雅歌」(昭和六年七月一日〜八月十九日、『報知新聞』)などにおける聴覚表象の試行や、「旅愁」(昭和十二年四月〜二十一年四月、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』『文藝春秋』他)で批判の対象となる淫祠の場面などとも、密接な関連があると

思われる。

結 語

これまで述べて来たように、「上海」の主要登場人物達は、宮子を例外として、舞台上海に執着していない造型であるという事が指摘出来、そしてそこからは、人は土地・国家に固着すべき存在ではないという事を描出したとした作者の意図が見える。

参木に部分的な資本主義批判の要素を盛り込みつつも、それを巧妙にオブラートし、参木を含めた多くの主要人物に故郷喪失者としての造型を行う事により、作品はその目的に近接して行った。その試行は、本論で触れた言語面の描写、あるいは、しばしば指摘される水・流れの記述、そして「雛」や「子供」の死体の描写（これは、しかるべき場所に埋葬されていないという点において）などとも、緊密に対応している。

作者横光は、当初この物語に「上海」というタイトルを冠する事を嫌気し、「ある唯物論者」としたい心算であった⁽¹²⁾というが、その理由の一端は、ここで論及して来た事を考え合わせると、窺い知る事が出来よう。上海という地名は、この小説においては、登場人物達が様々な事情によって脱却を模索していた場所を示しており、彼らに取ってそこは、超越すべきものの象徴であったとも言える。主要人物の多くが執着を見せていないその地名を表題にするのは、相

応しくないと横光が考量した可能性はある。その点においては、「唯物」の要素は参木ばかりでなく、甲谷やお杉にも見られる事から、「ある唯物論者」の方が適していたのではないかという感はある。

また、舞台である上海という都市を一つの器と見立てた場合、その内部で活動する参木・甲谷・芳秋蘭らに作用する時間と、その器が呑まれている激流の速さとは、あまりにもその速度が異なっていたのではないか。当然の事ながら、「上海」という小説の描写対象は主として前者に置かれたが、後者との圧力差によって、小説全体の軋みの音が次第に大きくなって行っただと思われる。その影響も最も多大に受けたのは恐らく参木であり、それは、彼の描かれ方の変化の中に顕現して来る⁽¹³⁾。この、作品舞台内外の時間の位相差を考えるという上でも、「ある唯物論者」という題の方が好適であったであろう。

今日ではそのタイトルで通用している「上海」という言説空間に対し、様々なレベルでの読解を試みないと、読書行為そのものが空洞化してしまう可能性をも、この小説は示していると考えられるのである。

注

(1) 「上海」の引用は、『定本 横光利一全集』第三卷(昭和五十六年九月、河出書房新社)によるが、同書の「上海」の底本は、昭和七年七月に改造社から出された初刊本である。引用に当たっては、漢字は現行の字体に改め、仮名遣いは原文を尊重した。他の横光の文章についても、同全集によった。

(2) 昭和三年十一月から昭和六年十一月まで『改造』に連載され、昭和七年六月発行の『文学クォーター』第二輯に「午前」が発表された。

昭和七年七月に先掲(1)の初刊本が刊行されたが、初出と初刊本との間には、多くの異同がある。昭和十年三月には書物展望社からも刊行された(「定本版」などと呼ばれる)が、初刊本とこの書物展望社版との間にも、異同が多い。

これらの、諸本の異同や作品のタイトルの問題、またはそれらへの作者横光の意図を考える文献としては、保昌正夫「編集ノート」(昭和五十六年九月、『定本 横光利一全集』第三巻所収、河出書房新社)、和田義一「原上海」と「上海」について(昭和三十八年十二月、福井大学『国語国文学』)、江後寛士「横光利一「上海」改稿の意味」(昭和五十八年十二月、『近代文学試論』)、祖父江昭二「上海」論——初出と初版本との比較を中心に——(昭和六十一年十月、伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編著『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史——』所収、汲古書院)、福田要「横光利一『上海』論——〈未完〉と改稿における政治的意味」(平成元年三月、『南山国文 論集』)などがある。

(3) この点については、前田愛「SHANGHAI 1925——都市小説としての『上海』」(昭和五十六年八月、『文学』)、後、諸本に収録、國松昭「『上海』論」(昭和六十一年三月、『東京外国語大学論集』)、館下徹志「横光利一『上海』の五・三〇事件——歴史叙述の反証可能性——」(平成十年九月、『昭和文学研究』)、同「横光利一『上海』における「在華紡」——擬制としての受難／熱情の発動——」(平成十五年二月、『横光利一研究』)、趙夢雲「上海・文学残像——日本人作家の光と影」(平成十二年五月、田畑書店、「現代アジア叢書35」)などに考察がある。

(4) 菅野昭正『横光利一』(平成三年一月、福武書店)など。

(5) 先掲(3)前田愛は、その論の結末部において、これら参木の恋愛(その感情も含めて)対象となった女性達をも図式化しているが、本論で述べたように、参木は、ある女性から次の女性へとというように対象を規則正しく変換しているのではなく、寧ろ、様々な女性に想いを残しつつもそれらの間で揺れ動いている、という読みが正確かと思われる。「上海」に記述されている実際の地名が「四川路八号十三番の皆川」しかないとの指摘など、前田論には卓見と評価される示唆も多いのだが、肝心の前記結論については同意しかねる。

また、参木が「表層から深層へ」と移動して行くという見解にも、疑義を示さざるを得ない。例えば、「旅愁」で描かれたような、有閑階級の神学論争的な不毛の議論を「表層」と呼ぶのならともかく、「上海」の主要人物達は、一貫して都市の「深層」を生きていたのではなかったか？

(6) 田口律男「横光利一『上海』論の試み(一)——娼婦へお杉の

意味——」(昭和六十年十二月、『近代文学試論』)。

(7) 沖野厚太郎『上海』の方法」(昭和六十三年十月、『文芸と批評』)は、同時期のドイツ映画「メトロポリス」(フリッツ・ラング監督)の偽マリア像と芳秋蘭との共通性を指摘した上で、「上海」に横溢している水の描写についても、そこに「破壊」と「建設」の両義、即ち「革命」の喩えを読み取っている。

また、李征「横光利一『上海』における五・三〇運動の描写をめぐって——同時代関係史料との比較をとおして——」(平成八年三月、筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集』)は、作中の「若干史実に反する」芳秋蘭の発話について、そこに「作家の意図による日本ナショナリズムへの配慮」があると指摘する。

更に、李征は、「身体性の表現と小説の政治学——横光利一『上海』における外国人表象——」(平成九年三月、筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集』)において、銭石山の「醜悪」と対比して描写されている、芳秋蘭の「エキゾチズム」の要素に着目し、その造型法の中に、「上海」を「ロマンチックな大衆小説としても読ませたいという横光利一のねらい」を読み取っている。

(8) 黒田大河『上海』試論——身体と言語をめぐって——」(平成七年七月、『阪神近代文学研究』)。

(9) 金楨薫『上海』における様々な「場」の意味——「他者」を「表現」するということ——」(平成十五年二月、『横光利一研究』)は、「金の相場が銅と銀との上で飛び上った」、「悲鳴を裂いて鳴り続けた」、「沸き上がる魚のやうに、沸騰した」(傍線いずれも金)などの表現技法に着目し、「前のことはが後のことはが生成す

る源泉として機能し、そのようにして形成されたことばとことばの相互結合によって、一つの比喩的言語空間が形成されていく」と指摘した上で、これらの用例が「二三」章に類出する事に注意を促している。

(10) ここで、中村三春「非構築の構築——横光利一『上海』の小説言語——」(昭和六十二年三月、弘前学院大学・弘前学院短期大学『紀要』)で述べられている、「登場人物すべてが等しく分有している逃走劇」という要素を気に留めておく必要がある。この場合の「逃走」とは、稿者が述べて来たような、帰属すべき場所を希求しての彷徨という事と、無縁ではあるまい。

そしてこれは、横光自身が「新感覚論——感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説——」(大正十四年二月、『文芸時代』、原題は「感覚活動(感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説)」)において述べていた、「自然の外相を剝奪し、物自体に躍り込む主観の直感的触発物」、あるいは、「一切の形式的仮象をも含み意識一般の孰れの表象内容をも含む統一体としての主観的客観から触発された感性的認識の質料の表徴」などの要素の部分的実践と見る事も出来、「上海」において新感覚派期の描法が多く生かされているという事の、証左の一つとなるであろう。

(11) 横光利一「文字について——形式とメカニズムについて——」(昭和四年三月、『創作月刊』、原題は「形式とメカニズムについて」)。

この文章は「三月号評論」の項目に収められているが、当該項目内で横光と勝本清一郎の主張とが対蹠的となった事について、「編

「編集後記」(「発行兼編輯人」である菊池寛の筆か)では、「(略)該主義の主張論者と反対論者とが期せずして相對峙し、論戦に火花を散らした形である」とされている。「三月号評論」は、他に吉村鉄太郎が執筆。

(12) 水島治男『改造社の時代 戦前編 恐慌より二・二六事件まで』(昭和五十一年五月、図書出版社)。

(13) 十重田裕一「横光利一〈ある長篇〉の覚書」(平成元年五月、『繡』)は、当初それ程目立っては描かれていなかった、参木における「〈外部〉―〈内部〉の関係」が、「持病と弾丸」や「海港章」周辺で顕著になると指摘し、そこに「遠近法の関係」や参木の「見る」行為を関連付けていて示唆に富む。

松村謙三グループ…自民政権の対中パイプ

——一九五九—一九七二

翟 新

一 はじめに

一九四九年中華人民共和国成立後、中国共産党政府は平和共存原則に基づいて日本との国交回復を画策していた。しかし、一九五二年、吉田茂内閣が米国の圧力により台湾側といわゆる「日台条約」を結んだため、日本政府と中国共産党政府の国交問題交渉の門戸は、法理上閉ざされることとなった。こうして保守党政権は、その後一九七〇年代初めまで、対中政策と日中関係問題処理において、アメリカの戦略を基本ラインとしたが、その一方で戦後の日本社会には幾つかの政党や団体による日中親善、さらに国交回復をはかる勢力も存在した。中でも対中政策への影響の重大性を考えれば、長い間中国と経済や文化の交流を担った自民党の一部国会議員の役割には特に注目すべきであると思う。これらの保守政治家が、日米安保体

制の制限下で反対意見を排除して対中接触を続けたことは、日中間の貿易と文化交流の維持だけでなく、両国の政府と与党間の政治的意思を疎通させる面においても、自民政権の対中パイプの機能を果たした。このパイプを利用して具体的に対中交流活動を推進したのは、自民党顧問である松村謙三をはじめ、高碓達之助、古井喜実、竹山祐太郎、田川誠一、藤山愛一郎ら自民党議員と岡崎嘉平太ら実業家を主なメンバーとする対外団体であった。ここで、筆者は、それらを称して「松村謙三グループ」とする（以下、松村グループと略す）。ちなみに、このグループは、いわゆる自民党内の派閥政治グループとは同義ではなく、主に、相前後して松村の下に集結し対中経済や文化交流に参与し、松村の死後もその対中理念と基本的な立場を堅持して日中関係の正常化に尽力した集まりを指す。

松村グループは、長期間にわたり、まずは貿易振興、それに続い

て国交を回復することを対中活動の基本方針かつ政策目標とし、また、漸進的な積み上げ方式によって日中関係の発展を進めることで、両国の国交回復に多大な貢献をした。特に日中関係が不安定になった時期、松村グループは両国の政府と与党の間にある程度の政治的な意思疎通を図るためのパイプを維持し、重大な問題や突発事件の発生を回避する面で存在感を示した。また、松村グループは、日本国内で、政府及び自民党執行部の対中政策を転換させるため、対外政策の調査研究を展開すると同時に、政策評議などの形で外交政策制定の主体に影響を与えた。そして、著書や講演などを通じて対中理解と日中国交回復を支持する世論を起こすことにも寄与した。したがって、このグループの行動を、政治外交史的視点から総合的に分析し、位置づけることは、両国の関係正常化問題の歴史的前提を明らかにするために有意義であると思われる。

むしろ、これまでも松村グループの対中活動に関連する研究は多く存在する。⁽¹⁾ 最も代表的なものとして、添谷芳秀の日本外交研究の枠組みでなされた論考が挙げられるであろう。氏の論点によれば、自民党親中派である松村らによる対中活動は日中関係の改善や、それに続く国交回復に何らかの役割を果たしたことは認められても、自民党に対する影響力は微弱であり、アメリカと台湾に協調する立場をとった自民党執行部と全面的に対抗する力にはどうしてもなりえず、それが日中関係を好転させたのは、かならずしもその自覚的

な行為の結果ではなかったとしている。また、松村らと自民党政権が対立する側面を重視することによって、国交回復まで松村グループが推進した日中貿易の性格の評価については、常にその民間性または経済性を強調するとともに、交流活動に内在した政府や与党との関連性は弱いと見ており、その対中活動の動機を解釈するとなると、いわゆる「アジア主義」または「親中的感情」の影響を受けたものにはすぎないとしている。⁽²⁾ しかしながら、このように、松村グループの対中活動の背後にある、想像以上の政治的思惑および政府や与党と連携していたことを看過してその対中活動を支えた思想的動機を単なるアジア主義のように捉える観点は、いずれも松村らの国際情勢に対する認識そのものに基づいて分析した結果とは言いがたく、説得力にやや欠ける。

本稿では、日中関係正常化のプロセスにおける松村グループの自民党政権外交での位置づけを明らかにする目的で、主に松村グループの言動を示す外交史料などの一次資料を利用して同グループの対中活動を東アジア国際政治と日中関係正常化の過程の中に据え、その展開と特質、特に歴史的役割および思想的基盤について検討していきたいと思う。

二 松村グループの登場

1 松村謙三の早期の対中認識

一九五〇年代末、松村グループが対中関係問題に目を向け始めた主な背景としては、中国がアメリカの反対によりサンフランシスコ講和会議に参加できず、その後日本政府が台湾当局を交渉相手にし、また「日台条約」に調印したことで、長らく日中間の国交がない状態に至ったということがあげられる。それにしても、松村らはなぜこの時点で対中関係問題に関心を持つようになったのか。この問題を検討する前に、主に一九五〇年代末までこのグループの中心的存在であった松村の対外観の原点ともいえるべき中国認識を見ていこう。

松村謙三は一八八三年富山県西礪波郡福光町（現・南砺市）に生まれ、祖父と父が漢詩人という環境で育ち、少年時代から中国文化に惹かれていたといわれる³。一九〇四年十二月、早稲田大学政治経済学科二年生だった松村は、「早稲田清韓協会」のメンバーとして中国語講師青柳篤恒について大陸への修学調査旅行に参加、これが最初の中国訪問となった。当時日露戦争中であったため、訪中の目的地は武漢、上海などに限られたが、道中に目にする中国の現実が松村の思想に与えた衝撃は小さくなかった。つまり、松村の中国の古代文明に対する憧れが完全に覆されただけでなく、理想の中国像が崩壊したことで、「今日唯無意味に清国の保全を説けるの人よ。卿等はいかかす獸的慾望の外何等高尚の希望と嗜好とのなき、この国

民が果して保全せらるるを得るを信ずるか。はた又保全する価ありとするか。支那清国を保全するは此れ罪惡を保全するなり。人類向上の精神よりして之を見れば、吾人はかかる墮落極まる國民の滅亡を祈らざる可らず」と、極端な中国批判論を展開するに至った。その一方で、彼は中国の鉱産物質の豊かさや日中貿易の進展に十分に留意して、中国の豊富な資源と市場の価値を再確認した⁴。このような対中観が以後の松村の対外活動に大きな影響を与えたのは当然のことであろう。

一九二三年夏、富山県議会議員だった松村は再び大陸に足を運んだが、同行者の一人に早稲田大学の先輩である永井柳太郎がいた。前回の訪中と異なる点は、中国の山東、天津、北京および東北地方で目にした政治腐敗や道徳的退廃に対して、今回は冷静に観察するのみであり、憤慨絶望の感情を持つには至らなかったことである。既に地方政治家になっていた松村の対外問題に対する視点は、大学時代のそれとは根本から変化したのである。この訪中において松村が最も関心を寄せたのは、日本と欧米諸国が中国市場をめぐる激しい争いを繰り返していたことである。そのため松村は、当時中国に蔓延していた日本製品ボイコットに見られるような反日風潮については考慮の必要はなしとした。というのは、松村の対中観によれば、それは国民国家のまだ形成されていない段階で各軍閥が民心を争奪するために作り出す茶番に過ぎず、また、中国の中央政治の

舞台で主導権を争っていた奉天派と直隸派に対しても、「然して今日支那の政治上の此の二派を支配するものは日本でなくてはなりません。英も駄目です。日本が金を出さなくとも、又兵を出さなくとも、一方に加担したと声明するならば他は潰えるのであります」という情勢判断があつたからである。⁽⁵⁾つまり、松村によれば、欧米に対抗するためには「日支提携」が必要であるが、これは日本の中国に対する支配を前提とするということである。この時点の松村の時局認識は、米英などの在中影響力が一層増大してきたことに対する危機感は相当強くなつても、彼の考える日中関係の構図では、依然として欧米に対抗するための日中連盟によるアジア主義的原则と、日中両国間で日本側の支配を堅持する拡張主義原則という二つの原則が両立している。むしろこれは、中国を日本と対等の近代的国家とは見なさず、ただ利用価値のある物理的空間としてのみ認識するという、当時の日本社会に主流として存在した対中観と基本的に合致したものであつた。しかし、一九一九年中国の五四運動勃発後、日本の言論界でも石橋湛山らが中国民衆による列強への抵抗活動を「民族の覚醒」の象徴として肯定する視点が現れたことから、松村の対中観の保守性が明らかに見られる。⁽⁶⁾

松村の三度目の訪中は、彼が民政党の衆議院議員になつて間もない一九二八年であつた。もともと政友会政権を非難するための政治闘争の目的による出張であつたが、済南事件を詳しく調べた松村は、

その後この件に関して書いたものの中で、日本軍が山東省出兵で起こした惨事についてはほとんど触れなかつた。⁽⁷⁾また、済南事件調査を終えた松村一行が奉天を経由して帰国する途中、関東軍の大佐である河本大佐らによる張作霖爆死事件が発生したが、早稲田大学の先輩であり、奉天総領事でもある林久治郎からそれは「陸軍の連中がやったんだ」という知らせを受け取つた松村は、この事態に対しても独自の対応を見せた。帝国議會で民政党衆議院議員の中野正剛、永井柳太郎が張作霖爆死を政友会内閣の重大な失政として猛烈に追及したのに対して、逆に現地調査で事件の真相を掌握した立場にある松村は、密かに民政党総裁の浜口雄幸に報告するにとどめたのである。⁽⁸⁾ここにも、対外関係に関しては、野党議員であつても、所属する政党の利益より国家全体の利益をもっと重視すべきという松村の政治姿勢が特徴的に表れている。太平洋戦争勃発後、翼賛政治会の政務調査会長を務めた松村は、国の代表としていわゆる「満州国」成立十周年と食糧援助問題のため二度大陸に渡つたが、それはいずれも政治的訪中であつた。⁽⁹⁾

戦後になつて松村が対中問題に関心を示したことを記した史料は、筆者の管見の及ぶ限り、非常に少ない。一つは、一九四八年一月、公職追放令を受けて政治家生活を離れた松村が、わざわざアメリカ人と親交を持ち、中国東北地方とソ連の状況を熟知した高橋達之助を訪ねた際の発言である。会談中、国民党側の勝利を望む松村は、

中共の政権奪取に成功すれば中国がソ連の排他的市場になる可能性があるという情勢判断に立って、アメリカが蒋介石援助で全くの無力を露呈したことを批判しつつ、当面の急務としてアメリカの新式武器と旧日本軍将校での国民党支援を強化して満州と中共およびソ連との繋がりを断つべきであると高確に言及した⁽¹²⁾。そこでも相変わらず大陸市場に対して高い期待を寄せていることが印象的である。

もう一つは、それから数年後の一九五七年一月であった。『石橋湛山日記』によると、松村は石橋首相に対し中共に台湾の独立を認めさせるために自ら訪中したいという要求を出したとある⁽¹³⁾。当時松村が、中国に台湾独立を是認させるよう画策することを日中関係正常化実現の前提にしようとした政策観を持っていたことが明らかであり、この点で、彼の認識は「一つの中国」を主張する中国の立場との間に距離があつたと指摘せざるを得ない。また、このことから、その後松村が保守陣営で同志を集め対中交流活動に努めるようになった理由が主として当時の日本国内の情勢に基づいていたことがわかる。

2 松村が対中活動に転身した原因

一九五九年の自民党総裁選において百六十六票対三百二十票で岸信介首相に完敗したが、松村が権力争奪をあきらめて対中関係問題に尽力することを決意する契機になつたと思われる。それ以外

に、以下のような政治状況がその決意を固めさせたと考えてもよからう。

まず、一九五八年長崎国旗事件などによって日中両国の経済と文化の交流が中断された後の情勢であった。当時経済面で損失を受けた日本側の対応としては、自民党執行部から政府当局に至るまで、強硬論といわゆる「静観」とされたもの以外に、何ら有効的な措置は見られなかった⁽¹⁴⁾。そして、日本の外交当局によって、台湾を中国から切り離すことで大陸との政治関係を発展させようという、現実性のない案までもが考え出された⁽¹⁵⁾。これによって、政経分離政策の非合理性が露呈されるとともに、自民政権と中国共産党政府との間に両国関係問題を取り扱うための政治的な意思疎通を図るパイプが全く存在しないことも明らかになつた。そこで、松村は、日本が政経分離政策をそのまま維持することを前提に、対外交渉の体制とメカニズムにおいて対中交流の脆弱性を克服し、率直に中国側に日本の訴えを伝えるためにも、適当な政治家が顔を出し、両国の指導者の間で橋渡しの役を果たすことが必要であるという考えを示した⁽¹⁶⁾。また、一九五九年八月、松村が当時中国側の対日関係担当幹部の一人、廖仲愷への書簡の中で、「両国親善ノ恢復、世界平和ノ保持ノ為ニ多少ナリトモ寄与シ得ルナラバ小生ノ本懐此レニ過グルハナク、全力ヲコレニ竭クス覚悟アリマス」と述べ、この認識が見てとれる⁽¹⁷⁾。

次に、日本側が以上のような消極的な対中政策を取った原因としては、岸内閣にとって切実な外交課題は、対中貿易を禁止する立場にあるアメリカとの関係を強化して安保条約の改定という目標を達成することにあるものの、逆に日中関係があまりにも悪化すれば、中国が安保条約に反対する勢力を支持することで改定の局面がますます困難になったということがある。そこで、自民党政権に日本の利害関係に大きな制約を与える日中関係を根本から調整することは期待できないという状況から、安保条約の必要性も否定しなかった松村は、改定に利する状況を現出させるために、「安保条約ばかりにのぼせてしまつて、世界全体の動きが分からないということじやだめだ。安保は別として、それと切り離してでも中国の問題を考えなくちゃならない時期がもう到来しておる」とし、安保と対中関係を両立させる認識を示した上で、直接、中国共産党政府の指導者に説明して、安保条約が与える中国への刺激を最小限にとどめることを当面の対中関係上の急務であることを強調したのである。⁽¹⁸⁾つまり、安保条約の維持と対中関係の改善とは関連した事項であるというのが松村の認識であつた。

さらに松村は、日米安保条約改定後、岸内閣が長く存命することはないとし、ポスト岸時代には対中関係調整が避けられない課題となるが、現状のように、日中関係に問題があつた際、常に民間人や野党が前面に出て交渉に応じるのは適切ではないので、今からその

後の自民党政権内に対中パイプを設けておく必要があるということ(19)を主張している。松村は、当時の自民党内において対中パイプ作りのリーダーシップがとれるのは、石橋湛山と自分をおいて他にはないと考えたが、石橋は体が弱く、また前首相であり既に政治の表舞台を離れた人物である上、中国側との接触も形式的なものが多かつたことから、自民党顧問として幅広く仕事ができる条件を備えた自分こそが対中関係上でより責任感をもつて与党内の他の者ができない仕事を遂行すべきであると自覚していた。⁽²⁰⁾この際、松村が石橋からの共同訪中の要請をそれぞれの使命の違いがあるとして断つた理由も、このような認識の延長線上にあつたと考えられる。⁽²¹⁾

3 松村グループの形成

松村グループが一体いつごろ形成されたかという問題に関して、筆者は、一九五九年と推定し、それは、松村らが同年中国政府の招きに応じて戦後初の訪中を実現したことに象徴されると考えている。その主な理由は次の通りである。

まず、松村らがその後長らく対中活動に努める思想的基盤となつた対中観は、基本的にこの訪中過程を通して確立された。一九五九年十二月、帰国後間もなく松村は、岸首相に訪中報告をした際、その新たな対中認識について次のように言明した。第一に、中国の産業と交通などの発展状況から、その中央集権的国家は統一が強化さ

れつつあるので、国土がアメリカとほぼ同じで、かつ民族的意識が非常に高揚しているこの国を国際社会が無視することはできず、同じくアジアに存在する日本がこれを無視する理由は特に見当たらないこと。第二に、現在中国問題の解決を避けていては世界の情勢を論議することができないばかりか、本当の世界平和を維持することもできないので、日本が中国の早期承認問題に臨む場合はその対応案を構想する必要がある、また日中貿易のみを推し進めるのではなく、世界諸国との関係やアジア全体でのバランスを保つという広い視野から対策を練らなければならないこと。第三に、中国側はすでに、政治体制を互いに尊重し、内政干渉しないことを基本に日中間の経済交流と文化交流の振興を認めているという三点であった。だが、確実に両国の政治体制を尊重するために、相互の信頼関係が基礎の前提として欠かせない。日中間には誤解が数多くあるので、今後日本側も努力して対中政策上の重要な課題として、積極的な対中策である相互信頼の増進を構築すべきである。⁽²²⁾

松村は、訪中によって形成されたと見られるこの対中政策観において、日中の国交回復の具体的日程や進行方式などについては直接明言することを避けたが、対中関係問題が日本にとって最も重要で切迫した外交課題であることを明確にし、誠意ある対話が双方の信頼関係を増進するという国交回復実現までの比較的現実的なアプローチを示した。

次に、この訪中によって松村の周辺で対中交流を志す政治家を主体とした団体が結成された。後に松村グループの代表的人物となる衆議院議員の古井喜実、竹山祐太郎、田川誠一らが松村と一緒に訪中したが、他にもこのグループの重要人物として、衆議院議員の高崎達之助、企業家の岡崎嘉平太らもこの時点で松村と約束し、かつ、間もなく対中活動に身を投じるようになった。⁽²³⁾ その後長い期間、松村は政治、高崎は経済を扱うという分業体制が形成されたことで、具体的に対中交流および関連の交渉活動を推し進めてきたのである。⁽²⁴⁾

三番目の理由として、松村らの訪中から始まった対中交流が両国の政府と与党に政治的に認められたことが挙げられる。中国側の態度については、周恩来が指摘しているように、松村らの訪中は両国の相互理解に役立つばかりでなく、その交流を進展させるものとして、高い評価と期待が寄せられた。⁽²⁵⁾ 日本側も同様で、自民党幹事長の川島正次郎は松村らの訪中直前、松村らの訪中団は与党を代表する資格を持っていないが、責任ある保守党政治家として、日中関係に困難が生じた際には、中国側に日本の国民性と政治事情を説明することで「日中両国のためになる」という趣旨を含む見解を発表した。⁽²⁶⁾ 当初松村らによって設定されたグループの政策目標は、両国の与党と政府の政治的な意思疎通を図るために仲介の役割を果たすというものであったから、以上のように、この訪中を通じて両国の指導者によって認められたことは、同グループが正規のルートに沿っ

て出発したと判定する上で重要であると思われる。

三 松村グループの対中活動とその特性

1 対中活動の内容

一九五〇年代末、東アジア国際政治に登場した松村グループが日中国交回復までに推進した対中活動は、主に、次のような領域に及ぶものであったことが考えられる。

第一に、中国側と協議して総合貿易体制を確立・維持させたことである。一九六二年に松村グループは中国の関係部門と繰り返し交渉した結果、五年を期とする長期的総合貿易（「LT貿易」という）体制を正式に定めた協定に調印した。これは、漸進的な積み上げ方式で両国関係を発展させるという原則に従って、具体的な取引の条件や品目、数量などを規定するのみならず、プラント輸出の承諾や延べ払いの供与などの優遇についても明文化して中国側に示したものであった。⁽²⁷⁾その後、このLT貿易は友好的団体による「友好貿易」と一緒に日中貿易の二つの柱となり、両国間の経済貿易関係の発展を支えた。⁽²⁸⁾特に、中国の対日貿易の依存度は一九六二年の三一・五％から一九六五年の二二・六九％に増えたことから、当時中国の輸出入業全体や国民経済に対して極めて大きな役割を持ったことがうかがえる。一九六八年以後、松村グループが中国側と何度も交

渉した結果、LT貿易体制は一年間を期限とする短期的総合貿易（「覚書貿易」という）体制に変わった。当時の両国の国内事情と日中関係の緊張にしたがって、この新しい通商ルートを通じた両国間の貿易規模は縮小したが、この協定は、国交回復後に廃止されるまで、両国間の基礎的交流事業として日中関係の発展において無視できない存在となったのである。⁽²⁹⁾

第二に、日中両国に通商代表部の設立と記者の相互交流を実現させた。通商代表部の設立であるが、一九六四年に松村らの努力によって設立されたこの機構は、国際事務を取り扱う機能もあつたことから、単に通商事務を処理する窓口というより、むしろ幅広く両国関係問題を取り扱う機能を有する外交機構に近いものであつたと言えよう。これは、両国間の甚だ曖昧な政治関係を進展させる点において、意味のあるものであつた。一方、同年に松村グループと中国側が記者の相互交換について合意したことで、ついに日中両国の長期にわたる相手国への新聞雑誌社や通信社の記者の派遣が実現した。⁽³⁰⁾これによって、中国の『人民日報』、新華社などの七名の記者と日本の『朝日新聞』、共同通信社などの十四名の記者が長期派遣されることになった。⁽³¹⁾日本にとって初めての社会主義国への記者派遣は、日本社会、特にメディアによって高く評価された。⁽³²⁾

第三に、訪中期間、中国政府の指導者との交流を通じて、両国政府と与党の間に政策および政治的な意思疎通を図るための橋渡しを

したことがある。松村自身、国交回復前に代表団を率いた訪中を五回も実現し、その間周恩来ら中国政府の指導者と会談を重ねたが、松村の後にグループの総帥となった藤山愛一郎もまた二回の訪中期間、何度も周恩来らと会談し腹を割った対話を行った。また、グループの主なメンバーである高橋達之助、古井喜実、田川誠一、岡崎嘉平太らは、集団あるいは単独、両方の方法によって中国政府の指導者と意見交換を行った。とくに国交回復の前夜、古井らは田中角栄首相と大平正芳外相の依頼で周恩来と国交回復関係の事項について協議し、国交回復交渉を順調に推進することに力を添えた。³³

松村グループが国内で日中関係正常化に利する環境づくりのために行った動きについては、主に次の通りである。

まず、与党国会議員の地位と影響力を利用し、著述や講演、座談会の開催などの形式で、対中関係改善問題というテーマをめぐり積極的に世論形成と宣伝活動を行った。たとえば、一九六六年、松村は、政経分離政策をとっている自民政権の対中姿勢では、近い将来、政府が対中積極策に変更する可能性は少ないという見通しをもつて、「国交回復をはかるためにはまずこれを強く推進するための世論を形成する必要がある」と強調した。³⁴同年の六回目の訪中までに、この世論形成を目的に発表された主要な論文、講演などは次の通りである。³⁵

講演と論文

「中国帰国報告」一九五九年十二月十一日、自民党日中貿易特別委員会

「中国より帰って」一九五九年十二月十一日、早稲田大隈講堂
「日中問題の基調」一九六一年五月一日

「日本の前途を憂える」一九六二年二月二十六日、ホテル・ニューヨークパン東新館

「中国の現実を見て」一九六二年十一月十五日、永楽倶楽部
「私のアジア観」一九六三年十一月十日

「これは我が日本民族不易の国是」一九六四年二月十八日
「世界の中の日本と中国」一九六四年十一月十三日

「米、中の調停者たれ」『中央公論』一九六五年二月号
「アジア人の立場にたつて」『世界』一九六五年五月増刊号

対談と座談

「中国訪問を前にして」（松村謙三／堀田善衛）『世界』一九五九年十一月号

「世界は変わっている……日本はどう進むべきか」（松村謙三／河野一郎）『日本経済新聞』一九五九年十二月十三日

「日本外交に注文する」（松村謙三／岡崎嘉平太／西春彦／松本重治）『世界』一九六三年六月号

「アジアの平和と日本の立場」(松村謙三／永井道雄)『世界』
一九六四年四月号

「中国問題と日本の外交」(松村謙三／岡崎嘉平太／西春彦／松
本重治)『世界』一九六四年七月号

「日中関係への提言」(松村謙三／岡崎嘉平太／竹山祐太郎)『世
界』一九六六年八月号

また、一九七一年五月、国交回復を支持する勢いがますます強くなつたことに応じて、藤山が中心となり日中国交回復促進議員連盟を創立した。この連盟は中国側との交流を強化すると同時に、札幌、仙台、新潟、金沢、東京、名古屋、大阪、広島、福岡、高松で講演会や報告会を開催して国民に国際事情と中国状況の理解を促し、さらに国交回復の動きを国民的運動に発展させることを推し進めた。³⁶

次に、松村グループの主なメンバーは、自民党の非主流派または反主流派として、終始党執行部と主流派に堅持されたアメリカ追随と中国軽視の外交的立場を牽制するため、党内のアジア・アフリカ問題研究会や外交調査会など政策集団の主要幹部となる機会を利用して、自民党の幹部および国会議員に説得を行い、自らの対中政策観に共鳴を求めた。³⁷たとえば、一九六六年夏、松村は公に「積み上げは限度にきている」ので、政経分離の方針で対中関係問題を扱うのはもはや時代遅れであることを主張して、日中両国の国交回復を

対中交流活動の目標にすべきであると提唱するとともに、³⁸対中外交の調整を政策論争の焦点にして自民党議員のなかに反佐藤陣営を集結しようと働きかけたのである。³⁹同年に行われた自民党総裁選で松村グループの支持を受けた藤山愛一郎は佐藤栄作に八十九票対二百八十九票で敗れたが、与党内で一定の支持を得たこの結果は、松村グループの政策的活動が、自民党政権の対中政策を実際に揺るがすほどのものとなったことを示している。

さらに、国交回復直前に対中活動の戦略を転換し、日中関係正常化を目指す超党派の活動を展開させた。松村グループは、長い間与党以外の政治勢力と協調しない姿勢を取っていたが、日中関係正常化がますます注目されるにつれて党派を超越する国交回復運動に転向することになった。一九七一年アメリカのニクソン(Nixon, Richard M.)大統領の訪中決定が発表されると、佐藤栄作首相は早速対中関係を重視し、さらに中国大陸の国連への加盟も支持するという発言をしたが、⁴⁰同年開かれた中国問題を主なテーマとする臨時国会においては、対中局面を打開することに関して新たな政策を作り出す意向は何ら示されなかった。そこで、松村グループの主要なメンバーであり日中国交回復促進議員連盟理事でもある田川誠一は「日本国と中華人民共和国との国交回復に関する決議案」を起草して、立法の形で自民党政権の対中政策を徹底的に転換させようとした。この田川決議案では、迅速に中国との国交回復を実現させるこ

と、両国間に存在するすべての問題を解決すること、間もなく開かれる国連総会で中華人民共和国の地位を承認することが核心の内容であったので、当時の政界においては勇気を示す対中政策案であったと言える。この法案は連盟内の意見のズレのため予期した結果を得られなかったが、与党国會議員が党外での立法活動によって党執行部を対外政策の調整に追い込む先例となった。そして、一九七一年秋、佐藤首相が再度アメリカと協調して台湾を国連から追放することに反対する態度を示すと、藤山らは即刻日中国交回復促進議員連盟の名義で、中国側と共同して自民政権の対中政策と真つ向から対決した「日中復交四原則」を発表し、⁽⁴³⁾ 国交回復を押し進めることができないう理由で佐藤首相に退陣を求めた。⁽⁴⁴⁾ このように与党国會議員として国内外の政治舞台で政府首脳の辞任を党首に求めたことは、自民党史上でも前代未聞のことであったと思われる。

当然ながら、松村グループは岸内閣の対中政策を批判し、明確に国交回復を最終の政策目標として対中活動を出発させたが、それはこのグループが当初から自民政権の対外政策と完全に対立する立場をとったことを意味したわけではなかった。実際、松村グループも長い間政経分離の方針と政策によってアメリカ、台湾と中国大陸との関係を取り扱うことを主張していたのであり、自ら提出し、⁽⁴⁵⁾ ある程度中国側にも認められた漸進的な積み上げ方式によって、⁽⁴⁶⁾ 両国関係を発展させるパターンの背後には、政経分離を政経不可分を実現

する前提と過渡的条件としてとらえる政策観があった。また、松村グループがこのような政策的選択を行ったのは、もともと保守党政家からなるグループであったため、対中政策の出発点や利害判断の根本において、自民政権の認識と実質的に差がなかったことが原因である。

つまり、松村グループと自民政権は最大限に国益を守るという時局認識の基本を同じくし、日本が西側諸国と提携しアメリカと強力な同盟関係を結ぶことを主張したので、同じ自由主義陣営に属する台湾と政治外交関係を維持しなければならないという立場に立っていたのである。したがって、松村グループが日中間の経済と文化交流を押し進めたことは、保守政界のタブーを犯した政治行動というよりもむしろ、別の形で自民政権の外交需要に応じたものであった。即ち、中国大陸とある種の関係を維持しつつ日本社会の通商と安全保障問題に対する要求を満足させるということである。池田勇人首相も自分自身がアメリカに向けた「顔」となると同時に、日本政府の代わりに、松村らが中国に向けた「顔」として活動するよう依頼したことから、⁽⁴⁷⁾ 自民政権の外交に、対米、対台と対中関係が入り込んだ多元的構造が存在していたことがわかる。その一方で、松村グループによる対中活動は自民政権の外交構造の中で日本の対米外交と対台外交を均衡させるものとして使われたにすぎないという位置づけも明らかに見られる。それゆえ、LT貿易の体制形成

に関する交渉計画はほとんど事前に日本の外務省によって周到に検討された上で作成されたが、その後の「覚書貿易」体制をめぐる交渉および実施も同様に、対中問題で強硬な立場にあるとされた佐藤首相の支持を得ていた。⁽⁴⁹⁾ さらに松村本人は周恩来と会談した際、中国側に批判された日本政府の「中国敵視」論を何度も真っ向から否認して、直接自民政権による対中政策を代弁した。⁽⁵⁰⁾ 古井も交渉の場で、しばしば中国側の対日批判が基本的に「誤解」によるものであるという見方を示した。⁽⁵¹⁾ このように、重大な対中問題において、まさに自らを自民政権の立場と一致させることで、中国側と政治的な意思疎通を図るという目標に沿って、外交面でのパイプの役割を確実に果たすことができた。

2 対中活動の特質

ところで、松村グループが担当した、日中両国の政府と与党の間で、政策と政治の意思疎通を図るという役は、主に直接中国政府の指導者と会談し、また両国間の経済と文化交流を推進することによって具体的に実現された。この中で、日本側の主体となった松村グループは、常に二重の身分を持っていた。つまり、政府と与党の正式な交渉代表の資格をもっていない一方、松村グループの多くは与党国会議員の政治的地位を有しており、自民政権との特別な関連性を有していた。日中間に国交がないことから、その活動が民間的

な性格をもつ点は、その政策目標を政治過程で達成する際にも都合のよいことであつた。松村グループはまさしく自らの国際社会における特殊な地位を利用して、対中活動の中で巧みにその政治意図を実現させていこうとしたのであり、これも、後に述べるように同グループがいくつかの対中政策問題において自民政権と意見が一致しないという特質が生じた原因の一つであろう。この特質に関して、次の二点を指摘しておきたい。

まず、松村グループは対中活動において、両国の総合貿易体制を維持するため、国際情勢に従って、自民政権による同貿易体制に対するコントロールの突破を試み、結局この貿易体制に政治的意味を与えることになった。例えば、一九六二年にLT貿易体制に関して協議した際、外務省が交渉する範囲についてアメリカと台湾の反対に配慮してプラントの輸出に関することを協議しないという原則を定めたが、⁽⁵²⁾ 実際高碕らの調整で最終的に中国側の要求を受け入れて調印された覚書には、一九六三年から一九六五年まで毎年中国に総額約百万ポンドものプラントを輸出することが明記された。⁽⁵³⁾ これは明らかに外務省が設定した交渉の枠組みと規制を超えたものである。また、一九六八年以後、覚書貿易の延長に関する交渉に際して、ぜひともこの貿易ルートを継続させるといふ認識に基づき、古井と藤山らは自民党執行部からの警告をも無視し、即ち台湾問題や日米安保条約に関する政府の基本的政策に束縛されることなく、中国側

の見解に理解を示したことで、⁽⁵⁴⁾ 国交回復前、この貿易体制の年々延長が確保された。

次に、対中関係問題を取り扱う際、松村グループは基本的に自民政権の外交原則に則って自身の対中政策観を構築したが、以上のような限られた範囲で中国の対日政策との共通点を探りながら、両国の指導者間での橋渡しの役割を果たした側面もあった。たとえば、池田内閣時代、日中両国の政府はいずれも経済と文化の交流に積極的であったことから、松村グループは主として政経分離政策の枠組みで、具体的な項目に従って確実に活動を推し進めることに専念した。しかし、佐藤内閣の対中姿勢が消極的になり、中国側も「文化大革命」で、その対日認識および外交立場が強硬になってくると、総合貿易体制の断絶を避けたい松村グループは、対中交渉の場面で次のようなことに直面せざるを得なかった。つまり松村グループが、中国側の政策や立場に完全に妥協すれば、自民党や外務省内の強硬派の反対により自らの対中交渉を展開するための政治的基盤を弱めてしまうが、中国側の意見や立場を全面的に拒否すれば、交渉そのものを続けることが困難になってしまう。これは、いうまでもなくそのパイプ役を期待する自民政権の不満を招くと同時に、自らの対中交流事業の活動の舞台を失う恐れが出てくる。こうした状況の下、松村グループは、相当限られた政策的空間で中国に対する立場を転換させた。一九六六年の第四回訪中後、松村グループは自民党

政権の総合貿易維持という狙いを利用して、同貿易体制の継続を前提に、自ら長く堅持してきた政経分離の対中政策への調整を主張しつつ、中国側が強調する政経不可分の原則を受け入れて日中関係を発展させる基本的方針による考えを示した。⁽⁵⁵⁾ また、この方針転換の意義は、古井によって、対中活動が経済と文化の交流から両国の国交回復を目指す国民運動へと転向する意味を持つに至ったとされた。⁽⁵⁶⁾

但し、松村グループの中国に対する方針転換を説むにあたっては、転換した中国に対する立場の具体的な内容より、むしろこの方針転換の出発点と目標の方にもっと注目すべきであろう。つまり、松村グループはあくまで日中間の総合貿易体制の維持を通して両国の国交回復を実現させることを最も国益にかなうことと認識し、その対中活動を推進した。この点で、この政策転換の目標に連続性と一貫性があることが明らかになった。古井は中国政府が主張する政経不可分政策と日本政府が堅持する政経分離政策との間に、両国関係を促進させた点で相違はないとした。ここからも、松村グループが、対中政策において原則そのものより、もっと原則がもたらす社会的結果という価値判断基準を重要視したことがうかがえる。そこで、松村グループと自民政権との間の対中政策観に関する相違点と、中国側へのいわゆる「迎合」性を相対化させるといふ分析の視点をもつ必要があろう。

四 松村グループの対中活動の意義

以上のように、松村グループは対中活動において保守党国会議員を主体とする対外活動団体として、既定の外交目標を達成させるために自民政権の対外政策とむしろ一致していったということができ、この点について、革新勢力の対中政策方針と比べるとその保守性は明らかに見てとれる。たとえば社会党は、対中関係問題について以下のような二つの基本的立場を堅持していた。第一に、中国の政経不可分の原則を採択すること、このためにまず「日台条約」を撤廃し「二つの中国」問題を解決した上で日中国交回復を実現させるといふものである。第二に、日中関係の正常化が実現されていない状態で日米安保条約による両国の同盟関係を持つことは中国に安全保障上の威嚇ととられてもしかたがないというものであった。⁽⁵⁷⁾これに対して松村グループは、長い期間、政経分離の原則及び漸進的な積み上げ方式をもって日中関係問題に取り組んだにすぎず、あくまで両国の交流活動を経済と文化の領域に限定しながら、日中関係と日米安保問題を並行させて取り扱おうとした。⁽⁵⁸⁾このグループの主なメンバーが、思想的に政経不可分の原則を受け入れ、台湾は中国の一部であり、また中国共産党政府は中国を代表する唯一の合法的な政権であるという立場を認めたのは、一九六六年の四回目の訪中を行った際のことである。⁽⁵⁹⁾

それにもかかわらず、自民党内にあまり見られない政策集団として、松村グループが国家外交に参与した影響は、野党や一般的民間団体にはとうてい及ぶことのできないものであった。したがって、松村グループの対中活動の戦後日本外交史における位置づけについて、筆者は次のように結論づけたい。

第一に、松村グループが保守政界において長期間、日中関係正常化に努め、数少ない対外グループとして展開した対中交流は、バランスのとれた外交局面の形成に寄与したということである。国交回復前、対中政策を制定、実施した過程を見ると、対外政策制定の三つの主体といわれた自民党、官僚機構、特に外務省、財界のうち、⁽⁶⁰⁾自民党はより積極的だったという特徴があったと言える。このことは、松村グループが自民党の政策活動に働きかけたことに少なからず関係する。たとえば、池田内閣時代、松村グループは、両国の指導者に相手の政策および外交的立場を説明し、互いの認識の相違を縮小させたことで、池田内閣がしばしば大陸に接近する動きを見せるための政治的条件を備えた。佐藤内閣になってからは、同グループは総合貿易体制を守るために、中国側の立場を理解することから出発して、自民政権に中国に対する立場の転換を促すだけでなく、公に政府と与党主流派の政治態勢批判さえも敢行したのである。したがって、松村グループの対中活動参加以後も、日中間に問題は絶えなかったとはいえ、長崎国旗事件のように一旦事件が発生した

ら交流関係が即断絶するというようなことは二度と起こらなかった。

第二に、松村グループが推進したことにより自民政権に日中関係問題に対してある程度関心を持たせたことは、日中関係の現状に不満を持つ民意を抑えることに利するだけでなく、自民政権の外交政策の支持基盤の強化にも繋がった。また、同グループによって長期にわたり行われた対中関係の重要性に関する啓蒙や宣伝は、国内で日中関係正常化の実現にとつて有益な社会条件を漸進的に積み上げることとなった。言い換えれば、松村グループの対中活動とその影響は、ある意味で自民政権によって国民の国交回復要求という政治圧力を緩和させるものとして巧みに利用されたのである。⁽⁶¹⁾ こうして、松村グループの対中活動はアメリカや台湾に傾いた外交路線に対する日本社会の不满を解消するために効果的な役割を果たすほか、自民政権と国民との間で特定の対外政策をめぐるバランスを保つという、政府の政策的空間と支持基盤を広げる効用があったのである。

第三に、松村グループの対中活動は、時には自民政権のアメリカと台湾を牽制する外交カードとしても使用された。たとえば、池田勇人が首相になる前後、日本が六億もの人口を持つ中国と国交関係にないことは正常とは言えず、しかも中国大陸が国連に認められることはすでに時間の問題のみであると認識し、組閣後まもなく、台湾の独立性を維持しながら大陸を国際社会に復帰させるといふ政

策を図った。⁽⁶³⁾ この政策構想に対して、松村グループと中国側にできたLT貿易体制や日中間の記者互換などは、次のような役割を果たした。つまり、池田内閣によって日本の対中交流を阻止するアメリカに対抗する道具として、⁽⁶⁴⁾ 自らが中国の正統な政権であるとの立場を堅持する台湾当局に、現実的ではない時局観の放棄を迫ることに使われたのである。⁽⁶⁵⁾

五 松村グループの対中活動の思想的基礎——結語に代えて

以上のように、松村グループの対中活動は特別な政治環境の下に展開したが、複雑な外部条件に基づく対中交流は、常にジレンマに直面した。主に与党国会議員からなるグループとして自民政権の政策を守らなければならないという立場は、中国側によって日本の政府と反中勢力の弁護者と批評される一方で、政府の方針の限度内で政策的空間を広げようとすれば、国内の一部からは「容共主義者」や「売国奴」と攻撃され、⁽⁶⁶⁾ また国際的にも「排他的アジア主義者」と非難されることさえあったのである。⁽⁶⁷⁾ しかし、松村グループは、様々な交渉、特に政治会談で自らの政治生命を犠牲にするリスクを伴い、さらに中国側の意見を取り入れるなど、妥協と言われることについても、自らの原則を譲らぬ立場を見せた。たとえば、古井は、日中間で協議された結果は常に中国側の政治原則に従うものではなかったという主張を行ったが、⁽⁶⁸⁾ 松村もまた自らの思想行為に

レットルを張られることに反発し、自分が「親中派」ではないことを明言している。⁽⁶⁹⁾ それゆえ、このグループのメンバーの言動に見られる矛盾した事象を理解するために、その活動を支えた思想面の動機に触れなければならない。

確かに、松村グループは、日本の発展の必要性から、積極的に対中関係問題に取り組みに至った。このような中国観には、松村グループの多くが戦前あるいは戦中、大陸で仕事をしてきたという経験によるところも大きかったが、前述の松村のように、中華人民共和国成立後の社会的変動に感銘を受けることによって新たに構想された点も見受けられる。それは、松村らが指摘した「われわれは自由国家群の一員であると同時に感情や生活に共通性をもつアジア民族の一員であり、互いに助け合って繁栄していかなければならない。これがわが国の宿命でもある」⁽⁷⁰⁾ や、「中国との関係は、貿易が目的で、すべての焦点をそれに合わせるつもりはない。(中略)だから中国と常に『君子の争い』をする。中国も負けないだろうが、日本も負けない。共に励まし合いつつ、アジアの中心にどっかりと位置しなければならぬ。これが日本の運命だ」という一般論のほかに、⁽⁷¹⁾ 中国の共産主義理念はソ連のイデオロギーと違い、あくまで一種の高揚的なナショナリズム精神にすぎないという見方にも示されている。⁽⁷²⁾ 松村グループの中国社会に対するこのような読みは、もちろん冷戦下のイデオロギー対立を回避して自らの対中交流活動を正当化

したいという考えもあつたが、同グループの対中活動の流れから、それが確かに基本的な対中観と情勢判断によるものであつたことがうかがえる。ある意味で、以上のようにナショナリズムを賛美したところに、このグループが対中活動を維持させた精神的原点、または中国側との付き合いを前向きな姿勢で推進した思想的接点があつたといえよう。しかしながら、松村グループの対中活動の出発点と政策観を根本的に決定づけたのは、決してそのアジア主義的な発想や観念ではなく、現実的な政治と国益からの要請であつた。

松村グループのメンバーのほとんどは自らの政治家生涯が下り坂にある時点で日中交流にかかわり始めた。したがって、対中活動は彼らにとって、これまでの政治活動とは違う意味で、その政治的抱負と社会貢献を実現させる重要な場であり、チャンスであるという意義をもつた。松村は、一九五九年一月に自民党総裁選で落選した直後、政治活動のエネルギーを対中交流事業に注ぐと決心したのであるが、一方で、自らの対中活動は依然として保守政界の改造を進めることであると位置づけた。つまり、日中交流の実績を積み上げることを通して、政策面において自民党執行部および主流派と競争するに足る新しい勢力をつくりだそうとしたのである。⁽⁷³⁾ 松村に次いで同グループの総帥となつた藤山もまた、自民党総裁選で二度も佐藤栄作に敗れ、政府首脳ポスト争いを放棄してこのグループに身を置いた。ところが、一九六〇年代末、藤山がこの選択をした背後に

は、ベトナム戦争終結後、日中関係正常化が日本社会にとって必ずや最重要国政問題になるという情勢判断があつたのである。⁽⁷⁴⁾このことから、対中活動に転向する諸要因のひとつに、それを通して中央政界の発言権を増強させたいという策略が動いたことが見てとれる。それゆえ、対中関係問題において松村グループは自民政権としばしば違った認識と姿勢を見せたが、その政策論争はあくまで党内における政策集団として自らの政治的主導権や存在感を高めようとするものであつた。

こうして、中国大陸が経済と安全保障において日本に対して絶大な意義と重要性をもつことを確信した松村グループも、対中交流活動を発展させたことを利用して対米一辺倒であつた自民政権の対外政策に時に牽制を試み、穏健に外交局面を処理することに努めた。その結果、松村グループによる対中交流と自民政権による対米協調とは、互いに牽制しあつて日本の外交を展開させるにあたり適所を得るものとなつた。一見すると、対外認識がかなり中国寄りに思われる保守政治家を主体としたこのグループは、日本がアメリカに追随して「二つの中国」をつくる活動に参加しない立場を堅持する⁽⁷⁵⁾一方、他方で日米の提携を日本国家の基本的戦略とするというような重大な問題に及ぶと、終始一貫して日米安保条約を肯定する立場に立つたのである。従つて、松村グループは、中米が対立しては日本の安全保障が確保されないという認識から、中米関係問題に至つ

ては、中米間における日本の役割を「調停者」と位置づけ、それによつて対中関係改善という外交目標を達成しようとした。換言すれば、ナシヨナリズム、さらにはアジア主義的な思想や観念より、まさに政治過程の中で日米関係と日中関係を並行して進めつつ、前者を対外政策の基盤にした上で、国益の増大を追求しようとする意図と活動が、松村グループの対中交流の政治的地平をなすとともに、その対中政策観の射程をも規定したのである。

注

- (1) たとえば、古川万太郎『日中戦後関係史』(原書房、一九八八年)、添谷芳秀『日本外交と中国 一九四五―一九七二』(慶応通信、一九九五年)などが挙げられる。
- (2) 添谷芳秀『日本外交と中国 一九四五―一九七二』一八七頁。
- (3) 遠藤和子『松村謙三』、KNB興産出版部、一九七五年、五六頁。
- (4) 木村時夫編著『松村謙三 明治三十七・八年中中国旅行記(上)』『早稲田人文自然科学研究』第三五号(一九八九年三月)。
- (5) 木村時夫編著『松村謙三 伝記編(上巻)』櫻田会、一九九九年、四三四―四三七頁。
- (6) 増田弘編『小日本主義 石橋湛山外交論集』草思社、一九八四年、七八―八〇頁。
- (7) 松村謙三『三代回顧録』東洋経済新報社、一九六四年、一二五

- 頁。
- (8) 松村謙三、前掲書、一二五頁。
- (9) 木村時夫編著『松村謙三 伝記編(下巻)』櫻田会、一九九九年、一二頁。
- (10) 松村謙三、前掲書、一二八―一二九頁。
- (11) 木村時夫編著『松村謙三 伝記編(下巻)』一五五―一六三頁。
- (12) 木村時夫、前掲書、二七六―二七九頁。
- (13) 石橋湛山・伊藤隆編『石橋湛山日記 下』みすず書房、二〇〇一年、八四―一頁。
- (14) 「『静観』変らず」『朝日新聞(夕刊)』一九五八年六月二十日。「『中共静観』は適切」『朝日新聞』一九五八年七月十四日。
- (15) 「わが国の対中国政策(長期基本政策)」(一九五九年七月十四日)『日本・中共関係雑集 第三巻』、外務省外交史料館所蔵。
- (16) 政策研究大学院大学COE・オーラル政策研究プロジェクト編『田川誠一 オーラルヒストリー(上巻)』政策研究大学院大学、二〇〇一年、一二二頁。
- (17) 松村正直他編『花好月圓―松村謙三遺文抄』青林書院新社、一九七七年、二二二頁。
- (18) 松村謙三「日中関係をどう打開するか」『朝日ジャーナル』第二巻第一号(一九六〇年一月)。
- (19) 田川誠一『松村謙三と中国』読売新聞社、一九七二年、四八頁。
- (20) 田川誠一、前掲書、七六―八〇頁。
- (21) 古川万太郎『日中戦後関係史』原書房、一九八一年、一七四―一七五頁。
- (22) 「松村氏、岸首相に報告」『朝日新聞(夕刊)』一九五九年十二月十五日。
- (23) 岡崎嘉平太『財界人の昭和史 2 終りなき日中の旅』原書房、一九八四年、一八五頁。
- (24) 高碕達之助集刊行委員会編纂『高碕達之助集 下』(非売品)東洋製罐株式会社、一九六五年、三三四頁。
- (25) 田桓主編『戦後中日関係文献集一九四五―一九七〇』北京・中国社会科学出版社、一九九六年、四六五―四六六頁。
- (26) 「『訪中は結構』川島幹事長談」『朝日新聞(夕刊)』一九五九年八月二十七日。
- (27) 田桓主編『戦後中日関係文献集一九四五―一九七〇』四六五―四六六頁。
- (28) 鹿島平和研究所編『現代日本の外交』鹿島研究所出版会、一九七〇年、二九九―三〇〇頁。
- (29) 田桓主編、前掲書、七四六頁。
- (30) 「廖承志办事处和高碕達之助办事处關於中日双方交換新聞記者的会谈紀要」『人民日報』一九六四年四月二十日。
- (31) 「日本と中共、月内に記者交換」『朝日新聞』一九六四年九月二十六日。
- (32) 「日中記者交換と貿易連絡員の駐在」『朝日新聞』一九六四年四月二十一日。
- (33) 田川誠一『日中交渉秘録 田川日記―一四年の証言』毎日新聞社、一九七三年、三六六―三六七頁。古井喜実『日中十八年―政治家の軌跡と展望』牧野出版、一九七八年、二二八頁。

- (34) 「積重ね方式改めよ、村松氏が見解」『朝日新聞』一九六六年六月五日。
- (35) 木村時夫他編『松村謙三 資料編』櫻田会、一九九九年、一八三―四六八頁。
- (36) 「日中議連が活動計画」『朝日新聞』一九七一年五月二十八日。
- (37) 「外交調査会を拡充自民松村・藤山氏ら顧問に」『朝日新聞』一九六五年二月二日。
- (38) 松村謙三「私の意見」『日本経済新聞』一九六六年六月六日。
- (39) 「積重ね方式改めよ、村松氏が見解」『朝日新聞』一九六六年六月五日。
- (40) 「米に同調、軌道修正」『朝日新聞』一九七一年七月二十二日。
- (41) 「日中国交回復の決議案」『朝日新聞』一九七一年七月二十一日。
- (42) 「共同提案に踏切る」『朝日新聞』一九七一年九月二十二日。
- (43) 「議連代表団、中国と共同声明」『朝日新聞』一九七一年十月三日。
- (44) 「藤山氏、首相に退陣を要求」『朝日新聞』一九七一年十一月二十八日。
- (45) 松村謙三「日中関係をどう打開するか」『朝日ジャーナル』第二巻第一号（一九六〇年一月）。
- (46) 「周恩来総理重申中日両国関係の原則」『人民日報』一九六二年九月二日。
- (47) 木村時夫編著『松村謙三 伝記編（下巻）』櫻田会、一九九九年、四二八―四二九頁。
- (48) 「外務省の日中貿易に関する見解」『高橋・廖覚書交換』外務省外交史料館所蔵。
- (49) 「覚書貿易政治会談が妥結」『朝日新聞』一九七〇年四月十七日。
- (50) 田川誠一「日中交渉秘録 田川日記―一四年の証言」四八頁。
- (51) 「古井氏の努力評価」『朝日新聞』一九七〇年四月二十日。
- (52) 「外務省の日中貿易に関する見解」『高橋・廖覚書交換』外務省外交史料館所蔵。
- (53) 日中国交回復促進議員連盟編『日中国交回復 関係資料集』日中国交資料委員会、一九七二年、二二二頁。
- (54) 古井喜実「日中隔てる二つの山」『朝日新聞』一九六九年四月九日。「藤山氏に役職停止処分」『朝日新聞』一九七二年一月三十一日。
- (55) 松村謙三「私の意見」『日本経済新聞』一九六六年六月六日。
- (56) 古井喜実「避けられぬ政経不可分」『朝日新聞』一九六八年三月八日。
- (57) 「石橋氏、日中打開を強調」『朝日新聞』一九五九年九月二十七日。
- (58) 松村謙三「日中関係をどう打開するか」『朝日ジャーナル』第二巻第一号（一九六〇年一月）。
- (59) 松村謙三「私の意見」『日本経済新聞』一九六六年六月六日。
- (60) 細谷千博・綿貫讓治編『対外政策決定過程の日米比較』東京大学出版会、一九七七年、五頁。
- (61) NHK放送世論調査所編『図説 戦後世論史』日本放送出版協会、一九七五年、一八三頁。
- (62) 五百旗頭真編『戦後日本外交史』有斐閣、一九九九年、一二八

頁。

- (63) 外務省アジア局「対中共方針（方案）」（一九六一年三月三日）、『日本・中共関係雑集 第四巻』外務省外交史料館所蔵。
- (64) 遠藤和子『松村謙三』二二九頁。
- (65) 外務省アジア局「池田、ケネディ会談要領（案）」（一九六一年四月六日）、『池田総理米加訪問関係一件』外務省外交史料館所蔵。
- (66) 遠藤和子『松村謙三』二四〇頁。
- (67) 松村正直他編『花好月圓——松村謙三遺文抄』三三四頁。
- (68) 古井喜実「避けられぬ政経不可分」『朝日新聞』一九六八年三月八日。
- (69) 松村謙三「中国問題と日本外交」『世界』第二二三号（一九六四年七月）。
- (70) 「松村氏、公選」への所信『朝日新聞』一九五九年一月二十三日。
- (71) 竹山祐太郎『自立』竹山祐太郎自伝刊行会、一九七六年、三四一頁。
- (72) 松村謙三「中国帰国報告」木村時夫他編『松村謙三 資料編』一八三—一八九頁。
- (73) 古川万太郎『日中戦後関係史』二五〇頁。
- (74) 「古井氏、中国首脳と会って」『朝日新聞』一九六九年一月十六日。
- (75) 岡崎嘉平太『中国問題への道』春秋社、一九七一年、二九—二九二頁。
- (76) 松村謙三「米・中の調停者たれ」木村時夫他編『松村謙三 資

料編』一八三—一八九頁。

付記

本稿作成にあたって、上海交通大学外国語学院の鍋倉紀子先生に日本語表現について校正をしていただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

〈研究資料〉

オイゲン・ヘリゲル著

「日本民族の生活と文化における伝統」全訳と解題

翻訳・秋沢美枝子、解題・山田奨治

解題

近年の日本国内でのオイゲン・ヘリゲル（二八八四―一九五五）研究の進展や武士道ブームを受けて、ヘリゲルの足跡を見直す動きがみられる。⁽¹⁾ヘリゲルの著作権が二〇〇五年末に消滅したことを受けて、『弓と禪』⁽²⁾（一九四八）を『無我と無私』⁽³⁾（二〇〇六）というタイトルで新たに翻訳し直した本が出版された。二〇〇七年末の時点で二六〇万部のミリオンセラー『国家の品格』⁽⁴⁾（二〇〇五）を書いた藤原正彦（一九四三―）が監修し、夫人の藤原美子が翻訳していることが話題を呼んだ。稲富栄次郎（二八九七―一九七五）らによる旧訳と較べて現代人には読みやすい文章になっていることもあって、この新訳は日本の読書界に一定の浸透をしているようである。しかしながら、旧訳を下敷きにしたうえで英語版からの重訳であるゆえに、旧訳での誤訳がそのまま残っている点や、「訳者あとがき」で事実関係

を誤認している点⁽⁷⁾があり、学術的な意義は疑問視せざるをえない。とはいえ、「『品格のある日本人』に出会える感動の書！」（同書帯）という触れ込みからもわかるように、「品格ブーム」「武士道ブーム」に安直に反応する人口が日本国内に増えている。そうしたブームに影響された読者を惹きつけている。ことヘリゲルにかんじていうならば、日本文化の理解者、西洋への禅の紹介者としての彼のイメージは、彼のライフ・ヒストリーのなかのそれにふさわしくない部分を隠蔽して成立してきたものだった。『日本研究』第24集に採録された論文で、解題者はヘリゲルが一九四五年以前に執筆した論文のうち、未訳でありかつその存在がほとんど知られていないものがあることを指摘した⁽⁸⁾。それら未訳論文のうち、「国家社会主義と哲学」⁽⁹⁾（二九三五）「サムライのエトス」⁽⁹⁾（一九四四）の全訳と解題が『日本研究』第32集に掲載された。ここに紹介する資料は、残る未訳論文のうちのひとつ、「日本民族の生活と文化にお



写真 Herausgegeben von Richard Foerster.
Kulturmacht Japan. Die Pause, 1942.

ける伝統」(一九四二)である。この論文は、先に訳出した二論文とともに、ヘリゲルが戦中に表明していた日本文化観をあまりににするうえで欠くことのできないものである。

「日本民族の生活と文化における伝統」は、リハルト・フェルスター(Richard Foerster, 1879-1952)編による『文化大國・日本』(一九四二年)⁽¹⁰⁾に収められている(写真)。編者のフェルスターは海軍の軍人だった。⁽¹¹⁾一九三三年に海軍司令官になり、軍を退役したのち、一九三七―四五年のあいだベルリン独日協会の会長を務めた。⁽¹²⁾フェルスター自身には日本文化にかんする本を編集するだけの経歴はない。じっさいに編集したのは独日協会に所属していた無名の担当者で、フェルスターの名前は「お飾り」であろう。

本書には駐ドイツ大使だった大島浩(一八八六一―一九七五)が序文を寄せている。収録されている論文と執筆者は、つぎのとおりである。

- ワルター・ドーナト⁽¹³⁾「日本 その民族存在の原理」
- オイゲン・ヘリゲル「日本民族の生活と文化における伝統」
- カール・ハウスホーファー⁽¹⁵⁾「文化大國・日本 文化大國としての日本の政治的歩み」⁽¹⁶⁾
- レオポルド・G・シャイデル⁽¹⁷⁾「日本 国と民族」⁽¹⁸⁾
- マックス・ヒンダー⁽¹⁹⁾「日本人」⁽²⁰⁾
- ウィルヘルム・グンダート⁽²¹⁾「日本文学作品の頂点」⁽²²⁾
- オットー・キュンメル⁽²³⁾「日本の芸術」⁽²⁴⁾
- 守屋謙二⁽²⁵⁾「日本の生活様式のなかの美術工芸」⁽²⁶⁾
- ゲオルグ・シュルネマン⁽²⁷⁾「日本の音楽」⁽²⁸⁾
- ゼンイチ・ヤマニシ⁽²⁹⁾「日本の演劇」⁽³⁰⁾
- 邦正美⁽³⁰⁾「日本の舞踊」⁽³¹⁾
- ヨハネス・バルト⁽³²⁾「日本映画界の動向」⁽³³⁾
- 村田豊文⁽³⁴⁾「日本の青少年教育」⁽³⁵⁾
- マックス・トレープスト⁽³⁶⁾「ドイツのなかの日本」⁽³⁷⁾

『文化大國・日本』は、日本文化の総合的な紹介本として作られている。数多くの写真を掲載し、グラフ誌のような構成になっているが、オリエンタルを強調した図版ばかりが選択され

ている感は否めない。これらのなかにあつてヘリゲル論文は、日本文化の伝統性・精神性、花見の美学、輪廻、天皇崇拜、犠牲死の賛美について論じている。本書の出版時にヘリゲルはエランゲン大学副学長の職にあり、本論文はナチ政権下の大学で同盟国・日本の国家体制を独特の解釈を交えて讃える内容に終始している。その最大の特徴は、彼の信念であつたはずの日本文化に禅仏教論には触れずに、そのかわりに国家神道を日本文化の精神的な支柱に位置づけるといふ、体制迎合的な姿勢をとっている点にある。このあたりに、その時代を生きたヘリゲルのしたたかさが垣間みられるといつては言い過ぎだろうか。

本論文が収められている本のタイトルが『文化大国・日本』であることも興味深い。今日では「文化大国」の用語は、「軍事大国」あるいは「経済大国」の対語として用いられている。「軍事大国・日本」が終わり、「失われた十年」を経て「経済大国・日本」も終わり、これからは「文化大国・日本」を目指さなければならぬといった論調をよく耳にする。平成十三年に設置された文化審議会の第一回議事要旨をみても、「諸外国に日本に対し敬意と友情を抱いてもらうためには、文化大国としての評価を得なければならぬ。そのためには、伝統文化を次世代へ継承していくとともに、万国共通のルールに基づいた文化を伸長しなければならない。」「伝統文化に限らず、現代の文化や、お茶・お花等の生活文化も含めて日本文化に対する海外の興味・関心は高く、もっと自信を持つてもいいと思う。日本

は文化大国たる可能性を有しており、そうした文化を今後一層発展させていくことが大切である。」といった発言がみられる。⁽³⁸⁾しかし、そうした「文化大国」論は、一九四二年の本書においてすでに試みられている。

『文化大国・日本』をみる限り、「軍事大国」と「文化大国」とは共存しうるものであり、一九四〇年代に日本を「文化大国」と評価する動きがドイツにあつたことが、本書から窺える。日本にとつて「文化大国」といふ評価は過去の栄光でもあり、決して未来志向の政策標語とはいひ切れぬ。「軍事」「経済」「文化」のいずれであろうが、「大国」といふ接尾語が喚起するヘゲモニー意識をもっと自覚すべきではないか——『文化大国・日本』は、そんなことを思い起こさせてくれる歴史的な書物である。

日本民族の生活と文化における伝統

オイゲン・ヘリゲル

日本民族は、非常に古い、何千年を通してその存在が一度も根底から危険にさらされたことのない伝統のあることを当然誇ってしかるべきである。中国文化の摂取や、またわずかに、三世代にも満たない以前の、ヨーロッパの学問及び技術、そしてまたそれと同時にヨーロッパの生活様式の摂取のような、日本民族の生活様式を根本から覆すような変化をもたらした時代で

さえも、この伝統の深部に手をつけることはできなかったのである。日本民族は、その並外れてしつかりした本能で、自分たちと与えられた撰取の可能性が限界に達したと感付くたびに、つまり、もしその限界を超えると、外国の新しいものが一つでも増えるにつれて、自分たち固有のものを失うという代価を支払わねばならないということに感付くたびに、氣力を奮い起こして、その限界を超えて踏み出した最後の一步をひっこめ、いっそう注意深く我に立ち帰り、精神集中のために一時休んだあとで、自分の道を見付けたのであった。世界中で日本民族ほど、疑いもなく自分たちの伝統に結び付いている民族はいないが、ちょうどそこにこそ、日本民族の強さの秘密と、自分たちの永遠なる使命へのゆるがざる信念の秘密とがあるのだ。

ここで、私は、この「とこしえに続いている」伝統について論じてみようと思う。この「伝統」のかたわらに、歴史的な発展の途上で形づくられたいくつかの特別な「伝統」があるのは自明のことである。それらは、それ自身の中に、それぞれの状況からのみ理解が出来、かてて加えてさまざまな影響を受けて変化した意味内容を含んでいる。その二、三の例をあげると、手工業、芸術また宗教生活の分野などにみられるいくつかの特別な伝統がそうである。そしてそれらを究明するのは魅力のあることであるし、またそうすることによって教えられるところも多いであろうが、しかし別な特殊な研究を通してのみそれが可能となるのだ。その場合には、これらの特別な伝統から、伝

統の日本的な概念を著しく豊かにするような、その典型的なさまざまな特徴がはつきりと見えて来るかも知れないし、また日本民族の生活そして日本文化のすみずみまで光を当てることができるかも知れない。そして結局我々は、仏教に起源をもつが、宗生活以外にも行われて、その矛盾した表現形態のゆえに局外者には全く近寄りたがいが、内部の人には「偉大な芸術」の究極をさとらせるような、例の「秘伝」(“geheimen” (Traditionen)) の諸伝統をも詳しく論じなければならぬことになるであろう。しかし、これらに我々が取り組むのは当然不可能なことであつて、簡単に輪郭を描いたところで、それだけではほとんど何もたらさずに終わってしまうであろう。それがある程度読者に理解してもらうためにも非常に詳しい説明が必要となるであろう。

ところで、先ずここで指摘しておかねばならないことは、日本民族の生活と文化には、ややもすると対立概念に硬直化しかねないような教条主義的な規定を本能的に避けるような姿勢があらわれているということである。言うまでもなくこの姿勢は東アジア全般にみられるものであつて、ただ単に日本にのみ見出されるものではない。しかし、日本を見ると、その姿勢が特に目立ってくるのである。というのも、日本はヨーロッパの学問を取り入れ、それとともに概念のきびしい識別の必要性をも徹底的に受け取った東アジアの唯一の国であるからである。それにもかかわらず、日本人 (the Japanese) ^(訳注1) は、その存在の理解

(*Geistverständnis*) において根本のところでは外部に惑わされる
 ことがなかった。彼らは、自然と文化、あるいは自然と人間の
 精神とをはっきり区別はするが、この便利な概念的区別が現実
 の区分につながるとは信じないのである。それで彼らにとって
 文化とは自然と対立するものでなく、つまり自然全体より優れ
 ている人間の精神の王国であるということの意味せず、自然の
 切れ目のない連続であると思われるのだ。それゆえ、人間のす
 べての文化的な行いは、結局、自然が糸を垂れたところでも
 糸を拾い上げ、自然をただ人間自身の中で完結させる、とい
 うところにあるのだ。彼らにとって人間の精神というものは、い
 わばただ自然の手をとって、しかも自然を、精神が自然そのも
 のを感知してそれを完成させる時だけ、正しく導くと言えるの
 である。

このことからはじめて、日本人(*der Japaner*)^(訳注)が、日常の所
 作といえども精神的なものを強調するという、日本人に際立っ
 ている願望が正しく見えてくるのである。日本人がそうするの
 は、そうしなければ物足りないからではなく、それらの所作に
 本質として潜在しているものがそこから取り出され、明らかに
 されると考えるからである。こういう作業にかくれているもの
 は、特に活発な、さまざまな遊びごころの造形衝動ではなく、
 遠慮がちな補助だけで満足するよううやうやしい観照の姿勢
 である。このようにして、文化生活と精神生活の崇高な現象で
 すらも、種々の段階でその母なる大地と結び付けられるので、

どこにも内部分裂が生じることにはあり得ないのである。

さくらの花の美しさを心から賞でて毎年行われる花見の宴ほ
 ど、このことが美しくまた明白に表れることはないようである。
 それはまるでさくらの花を咲かせる力が人間の精神に乗り移っ
 たかのようなのである。その花見の宴は、全く各自が自由で、少し
 も強制されるところがないにもかかわらず、讚嘆の気持ちを共
 同で味わうという浮き浮きした楽しみとなるのである。この振
 る舞いに、うらやむべき子供らしさと幸せな素朴さ以外のなに
 ものをも見ない人は、あるいはそれは結局ただ単に自然に向か
 って喜んで花見の宴を「催す」人間に過ぎないのだと思ひ誤る
 人は、この喜びが、自然そのものの祝典を精神的に反映する以
 外のなものでもないという、まさにその決定的なことを見過
 ごしてしまうのである。この花見の宴をたびたびそして開かれ
 たところをもって経験することの出来た人は、日本人がその宴
 をそのように見ているということが分かるのである。

だが、ちょうどこれとの関連で、その伝統の更なる特徴が指
 摘できるのである。それはこの花見の宴がさくらの花の美しさ
 を観賞するに尽きるということである。さくらの花が爛漫と咲
 き誇っている枝に手をかけて折り取る者などはいない。自分の
 部屋を木の花や草花で飾りたいと思う人は、それらをていねい
 に扱う花屋で求める。日本人は、子供の時からさまざまな機会
 を通して、ただ花を賞でるだけで気持ちが悪されることを学ん
 でいる。日本人は、すでに実行された確実な行動があるにもか

かわらず、また緊急の場合には素早くそして容赦なく行動する能力があるにもかかわらず、この観想的氣質を捨て去ることなく、観想と行動をこれ以上なくうまく結合させているのである。日本では、しばしば何時間にもわたる精神の集中と沈思（たとえば茶室での喫茶と結びついた）の後にきわめて重大な結果を招来するような決定がなされるが、ここではそれが無理なく説明できるのである。

このように自然と文化、自然の生活と精神生活が継ぎ目のない統一を形作っているので、日本人がそれ以外にも通常の規定・区別をすることには、たとえそれがどれ程世間でさわがれていても、たいした興味を示さないだけでなく、実生活ではそれをますます顧慮していかないということが理解できるのである。その結果、日本人の生活している領域は、当然我々のそれよりもはるかに漠然としているが、その代わりより豊かなのである。日本人は生がこれ以上なく満たされた、また充実した現実のなかで行動しているので、現実を発見し、また現実に関与するためにまれに訪れる靈感を待つ必要もないのである。つまり彼の日常の生活が生の実実を彼にたえずはつきり見せているのである。というのは日本人が「存在する」ことは、ただ一つの輪から輪へと将来に連なっていく鎖の輪のひとつとして存在するという意味なのである。日本人は自分の人生で過去の人生、つまり祖先のそれを生き、引き続きまだ未知である将来に向かってその人生をもっていく。だが、その際日本人は、祖先というも

のはただ影のように暗い過去から合図するものだとは思わず、自分をその祖先よりも「実在する」ものとも思っていないのである。彼はその肉体的実在のすべてにおいて、実際はただ単に意識のひかりがあてられたひとつの移行現象にすぎないのである。そして日本人の現実には、その肉体の実在に、つまり捉えられ、また感じられるものにかかるものではなく、彼を通過して行く過去と未来を結び付けるものなかに、つまり血の徳と精神のもろもろの力の中に求められるべきものなのだ。

祖先崇拜をとつても、もしそれをただ美しい風習であるとか、敬虔な気持ちのあらわれであるとか、象徴的に高められた追悼であるとのみ見なすならば、それをあまりに軽く理解してきわめて表面的に説明することになる。日本人にとつては、自分があらゆる面でヨーロッパに啓蒙されたにもかかわらず、祖先は故人となつて消えたものでなく、生きて現存するものなのである。祖先は、つまるところ、現在その家族生活を担う人たちよりもより一層現実的なのである。現在の人たちは、ただすでにしかれた道を先に進むが、道そのものではなく、自分たちは道のほんの一部をなすだけで、代々の鎖の輪に輪を付け加えることによつてはじめて祖先の現実に参加するのである。彼らの、祖先との親密なきわめて「人間的な」交わり、つまり、特定の機会に祖先に家族に関するすべてを報告する義務（そうしなければ祖先がそれについて何も聞き知らないというのではなく、そこで自分自身を伝えることでもある生き生きした繋がりがうすれない

ために)、結局、これらに於いて、現在と過去、故人と現在に生きるものとの間に区切りなく存在する真の生命の繋がりが維持されるのである。

日本人は、親子の関係、きょうだい同士の関係、また知り合いとの関係をきわめて真剣に、また良心的に保とうとする義務感を抱いている。とはいっても、日本人にとって祖先に対する責任は、それに勝るとも劣らぬ重要性をもっている。その祖先の代々の列を損なうことなく続けること、自分自身ではなくその代々の列に奉仕することが、日本人の心を占める最大の心配事なのである。そんなふうには自分は列のただ一つの輪に過ぎないゆえに、「自分であること」、つまり自分の個性を主張しようとする誘惑にかられることがないほど、なによりも「全体」が強調されるのである。彼らは先賢の生活の知恵を肝に銘じて、一切の個人的な痕跡を残さないようにする。しかし、自分たちが生命の流れに、そしてそれと共に家族の生きている伝統に溶け込みながら、それらを高めて子孫に伝えていくということ、それが日本人には自分の人生の真の意味であると思われるのである。そしてもし名譽と名声が与えられるようなことになっても、それらは彼ら個人についているものではないのである。もし罪になるようなことが起こっても、一切彼が個人的に責任を負ったり、贖ったりすることが出来ないのと同じように。

ところで「五常」(Fünf Beziehungen) (徳性)の第一は、臣下の天皇

に対する関係である。この天皇に対する関係には、日本の伝統に従えば、日本の一つ一つの家族はその中心を自分のなかにもっているのではなく、自分の中から生きて行動するのでもないという基本的な事実が表明されている。家族の真の中心は天皇(Tenotum) (親性)にあるのだ。そして天皇は、その神々しい祖先の列を続けて、日本民族全体の神々しい起源の代表となるのである。そしてこの起源のゆえに日本民族ははじめて自分を「民族」と感じるのであり、天皇とその神々しい使命のゆえに、帝国は日本民族にとってはじめて真に「帝国」となるのである。天皇は彼の祖先に民族の運命を報告することによって、同時に大司祭にもなるのである。そして彼が聖地である伊勢に大司祭として民族の祈願を述べる時に、天皇と民族のこの一体を奉じ、その統一によって民族はただひとつの家族にされるのである。

天皇(Tenotum) (親性)というものは、日本人にとっては、天皇の伝説的な意味を意識しているような(たとえただ心中ひそかにであるとしても)、単なる美しい観念ではないのである。日本人にとって、天皇は、自分の家族生活を支える祖先崇拜と同じく、天皇(Tenotum)と結びついた理念が、ひとつの現実そのものの表れであり、絶対的な存在の象徴なのである。つまりここにも、その存在の理解(Seinsverständnis)の根底に、すでに何回も強調してきた、自然的なものと神的なもの的一致するという統一の観照(Einheitschau)があるのだ。それは、その趨勢が未知数であるイギリスとアメリカ合衆国に対する軍事的

諸成功が、ただ単に兵士の勇敢さと指導部の深謀術策に帰せられるだけでなく、天皇の「高貴な徳性」に求められているということを、決して古代から引きずってきた言いまわしとしてはなく、最も活気ある、そして最も誠実な確信の表現であると見るべきだというところに、上記の存在の理解の意義の重大さが最も明確にあらわれている。

この天皇 (Emotum) の現実とその神々しい高みから湧き出る生の大河に、この「とこしえに続いていく伝統」は根ざしているのである。かむながらの道が同時に天皇の道であることよって、この天皇の道は全日本民族の道となるのである。しかしそれはもちろん自然のことではなく、また必然のこともなく、ただ民族が自分の生まれながらの身分、つまり天皇の民族であるという信念を表明し、その信念を疑いのない服従と絶対的な忠誠をもつて確証する場合にのみなのである。服従と忠誠は、その後この上ない究極の犠牲、つまり生命自体を賭すことも辞さないという覚悟のある場合にのみ、本物となるのである。そういうことで、以前武士によって実践された武士的・軍人的な基本態度が全民族の生活の理想像となるのである。そして日本民族には、この疑問の余地のない死の覚悟は、ただの可能な限り従わなければならない基本的な思想なのではなく、自明の行動となるほど、この理想は現実的に理解されているのである。生命を犠牲にすることによってはじめて生そのものが生かされ、犠牲死がもつとも実り尽くしている実であるという

基本的確信は、この思想と行動の統一に由来しているのである。日本人は、生に対するおろかな無関心からではなく、その生のこれ以上ない充足を知っているからこそ、死の恐怖を知らない一人も生きて帰れない軍事行動に参加するのは、日本の兵士にはこれ以上ない普れと思われるのである。

というのは、日本のとこしえの伝統は、二本の柱、つまり日本の理念である伊勢と武士的・軍人的精神の現実とに支えられているのである。

原題 Eugen Herrigel, "Die Tradition im japanischen Volks- und Kulturleben." *Kulturmacht Japan*. Herausgegeben von Richard Foerster. Wien: Die Pause, 1942, pp. 14-15.

翻訳 秋沢美枝子

解題注

(1) 謝辞 本稿執筆にあたって、ウォルフガング・シャモニ氏ならびにマルクス・リュッターマン氏より多大なご教示を受けたことを感謝します。

たとえば、朝日新聞二〇〇七年二月六日の夕刊の記事『「弓と禅」で知られる独哲学者 ヘリゲルに再び脚光』など。

(2) Eugen Herrigel, *Zen in der Kunst des Bogenschusses*. Otto Wilhelm Barth-Verlag, 1948.

(3) オイゲン・ヘリゲル (藤原正彦監修、藤原美子訳) 『無我

と無私——禅の考え方に学ぶ』ランダムハウス講談社、二〇〇六年。

(4) 藤原正彦『国家の品格』新潮新書、二〇〇五年。

(5) オイゲン・ヘリゲル(稲富栄次郎、上田武訳)『弓と禅』協同出版、一九五六年。(現在は福村出版から刊行されている。)

(6) たとえば、藤原は“Grose Lehre”の語を稲富らの訳を引き継いで「奥義」としているが(『無我と無私』七頁)、この語はヘリゲルの師匠の阿波研造(一八八〇—一九三九)の独自思想だった「大射道」と訳するのが正しい。

(7) ヘリゲルのベルリン独日協会での講演を一九三九年、阿波研造の没年を一九三〇年としている点(正しくはそれぞれ一九三六年、一九三九年)は誤植だとしても、講演の演題が「弓と禅」だったとしている点、岩波版の『日本の弓術』を改訂したのが『弓と禅』で、一九八一年に福村出版から出たとしている点は誤解である。ヘリゲルの一九三六年の演題は「騎士的な弓術」(“Die ritterliche Kunst des Bogenschessens”)であり、それを邦訳したものが岩波版の『日本の弓術』である。『弓と禅』は『日本の弓術』を下敷きにはしているものの、それとは独立に執筆されたものである。加えて『弓と禅』の初版は一九五六年で、協同出版から出されている。

(8) 山田奨治「オイゲン・ヘリゲルの生涯とナチス—神話としての弓と禅」(2)『日本研究』第24集、二〇〇二年、二〇—二二六頁。

(9) 秋沢美枝子、山田奨治「オイゲン・ヘリゲル著『国家社会主義と哲学』『サムライのエトス』全訳と解題『日本研究』第32集、二〇〇六年、二八五—三一五頁。

(10) Herausgegeben von Richard Foerster. *Kulturmacht Japan. Die Pause*, 1942.

(11) さなみじ、Deutsche National Bibliothekのデータベースでは、同名同名の文献学者(一八四三—一九二二)と混同されている。

(12) *Deutsche Biographische Enzyklopadie*. 2nd ed. Vol. 3. Saur, 2006, p.41.

(13) Walter Donat (1889-1970) 井原西鶴や川端康成の翻訳で知られる日本学者。

(14) “Japan-Die Prinzipien seiner volkischen Existenz.”

(15) Karl Haushofer (1869-1946) 地政学者。彼の理論はヒトラーの政策に理論的な根拠を与えたともいわれている。

(16) “Japans politischer Werdegang als Kulturmacht”

(17) Lepold G. Scheidl

(18) “Japans Land und Volk.”

(19) Max Hinder

(20) “Japaner.”

(21) Wilhelm Gundert (1880-1971) 東洋学者。中国仏教、日本仏教が専門で、『碧巖録』の独語訳がある。

(22) “Hohepunkte japanischer Dichtung.”

(23) Otto Kummel (1874-1952)

- (24) “Kunst in Japan.”
- (25) 美術史学者（一八九八—一九七二）。
- (26) “Kunstgewerbe im japanischen Lebensstil.”
- (27) Georg Schunemann
- (28) “Musik in Japan.”
- (29) 生没年不明。
- (30) 舞踊家、本名は江原正美（一九〇八—二〇〇七）。
- (31) “Japanisches Theater.”
- (32) Johannes Barth (1891-1981)
- (33) “Japanisches Filmschaffen.”
- (34) 倫理学者（一九〇三—一九九七）。
- (35) “Japanische Jugenderziehung.”
- (36) Max Trebst
- (37) “Japan in Deutschland.”
- (38) 第一回文化審議会議事要旨
http://211.120.54.153/b_menu/shingi/bunka/gijiroku/001/010201.htm（二〇〇八年三月二十四日閲覧）。

翻訳注

〔1〕〔2〕 原著者は、注1の箇所日本人を「die Japaner」と複数で表しているが、注2の箇所からは最後まで一貫して「der Japaner」と単数で表現している。単数にした場合には、日本人全体があたかも一人の人格をもつ固体であるかのような意味合いを帯びてくる。しかし翻訳ではその違いが表現出来ない

いので、文章の流れから適宜「日本人」または「彼」と翻訳しておいた。

〔3〕 ドイツの中国学では、以前から「五常」の訳語として *fünf Beziehungen* という語が定着している。ここではもちろん孟子の説く人間関係で守るべき道である儒学の「五常」に日本的な解釈を与えているのである。

〔4〕 ヘリゲルは、天皇に関して、Kaiser, Tenno, Tennotum という三つの異なる語を用いている。前二語の訳語は「天皇」で問題ないが、Tennotum の訳語はいささか問題である。この語は、天皇にまつわる制度的、思想的、宗教的なことを総合して表現する用語であり、いちおう「天皇制」という語が訳語として考えられるが、政治的意味合いのつよいことではあるのでここでは「天皇」と訳した。しかし、原文にTennotum とある箇所はそれを明記した。

〈共同研究報告〉

共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」報告（二）

鈴木貞美

序にかえて

日文研共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」（二〇〇四―二〇〇七）の報告集を、『日本研究』第37集の小特集、共同研究報告（二）について、共同研究報告（二）として掲載いたします。

共同研究報告（二）の前書きにも書きましたが、出版史と学芸ジャンル史とを総合する共同研究では、多岐にわたる有意義な報告がな

されたものの、出版におけるジャンル編成の変化に焦点を絞ってゆく運営はできませんでした。そして、この報告（二）も、学芸ジャンルに関するもの（依岡論文）、出版史に関するもの（甘露論文）、そのどちらにも属さないもの（小谷野論文）など統一感のないものになりましたが、いずれも今日の学術上、専門を同じくし、また近接する領域の諸氏の関心を引き、学術上、大いに意義のあるものと判断し、共同研究会の代表の責任において、ここに掲載いたします。

共同研究報告

ドイツ・ハイクの生成と俳句再評価

依岡隆児

はじめに

ドイツにおいて、「ハイク」はいまや詩人なら一度は試みたと言われるほど、抒情詩の一ジャンルとして定着している。最近でも、詩人グリーンバインが二度来日し、俳句風の作品を残しているし、⁽¹⁾ギュンター・グラスの最近の詩にも「ハイク」らしき短詩が散見する。グラスは見開きにアクリルの水彩画に自筆の詩も書き込んだ詩画集『本を読まない人への贈り物』(一九九七)の詩を「ハイクの」な詩とも呼んだ。⁽²⁾また、単に日本学の研究領域であるにとどまらず、一般市民の愛好家が実際にドイツ語で「ハイク」を作り、すでにハイク集も出している。ケルンやフランクフルトなどでハイク愛好グループも結成されたり、学校で教育の一環として導入されるなど、「ハイク」はドイツですっかり定着している。

こうしたドイツにおける「ハイク」の広がり始まりは、十九世

紀末からのドイツ人日本学者による俳句紹介と一九一〇年代からのドイツにおけるフランス・ハイカイの受容を通して、俳句が間接的にドイツ語圏へ伝えられたことにある。やがて俳句はドイツにおける短詩形式の抒情詩と融合し、独自の「ハイク」となり、近代詩の表現形式(リルケの事物詩、ウィーン・グループのコンクレート・ポエジーなど)にも刺激を与えていった。

だが、イギリスやアメリカ、フランスにおける俳句受容とその独自の展開については、研究の蓄積があるが、ドイツ語圏に関しては、こうした「ハイク」の広がり割に研究が少ない。他の国における俳句受容とドイツ語圏のそれとはどう関連し、どう違っているのかを明らかにする必要があるだろう。

一方、日本の俳句に触発されたドイツの「ハイク」という「モダニ」な詩が、今度は日本に逆輸入されて日本の文学において受容され、影響を及ぼしていった。こうした交流から、新たに「ハイク」

の文芸ジャンルとしての可能性（自然詩・生活詩としてのハイク、連詩的「座」の形式）も生まれているのではないだろうか。そこでここでは、こうしたドイツと日本における文学の交流（交感）のあり方を、「ハイク」という文芸ジャンルを通して考察し、モダンと伝統の出会いや、海外からの評価をきっかけとした自文化や民族性の意識化という問題に言及してみたい。以下、ドイツ語圏における俳句受容を概観し、次に「情調」と「象徴」という概念との関わりを中心に、ドイツ語圏での俳句評価を基にした日本における俳句の再評価の動向を跡づけ、最後に「ハイク」の国際化とその近代詩変革への影響を見ていくことにする。

一 ドイツにおける「ハイク」

俳句はドイツでどのように受容されてきたのだろうか。ここではドイツ語圏における俳句の紹介と模倣、ならびにフランスの「ハイカイ」經由の影響、さらには第二次世界大戦後のドイツ・ハイクの自立の動きを、概略的にみている。

一 俳句受容略史

加藤慶二『ドイツ・ハイク小史』⁽³⁾によると、ドイツでの最初の俳句受容は、アルノー・ホルツの『ファンターゴス』（一八九八―一九〇九）に俳句的表現を使ったこととされる。ただ、これに関しては、彼は「ハイク」を作ったというより、俳句に刺激されて書いたとい

うべきであるという見方もある⁽⁴⁾。俳句に較べれば彼の詩は雄弁であるし、日本の詩人の詩的なつまじさには欠けているとされている。さらに、P・エルンストの詩集『ポリメーター』（一八九八）にもハイクの影響がある。

日本学の方では、K・フローレンツが『東方からの詩人の挨拶——日本の詩集』（一八九四）で万葉集・古今集などを紹介している。彼は後にハンブルク大学日本学科主任教授になり、弟子としてツアハルトらを育てた。彼はここで、イマジニストに影響を及ぼす荒木田守武の句（「落花枝に帰ると見れば胡蝶かな」）を紹介している（イギリスのアストンの『日本文学史』（一八九九）でも「ハイカイ」が紹介され、ここにもこの荒木田の句の訳があった。ちなみに、フローレンツの『日本文学史』（一九〇九）から俳句の三行形式での独訳が始まったとされる。さらに、『ドイツ・ハイク小史』によると、アントン・ライザー⁽⁶⁾が「古代日本の春の詩」（雑誌『自由の地』一九〇四年六月号）で俳句を紹介しているが、これはアストンの『日本文学史』からの重訳である。またライザーは日本の感情と想念を誤って判断したとみられている。P・エンダアーリング『日本の短篇小説と詩歌』（一九〇五）でも「花見」についての誤解が指摘されている。O・ハウザー『日本の文学』は一九〇四年に出され、俳句を紹介しているが、J・クルト『過去千四百年間の日本抒情詩』（一九〇九）は、日本人の協力で書かれたが、ここでは短歌と俳句はジャンルとして区別されていない。日本学研究者ではなかったクルト

は、短歌(ウタ)を五行三十一音節の形式に、「発句・俳句・俳諧」ならば、三行十七音節の形式に移したのである。ちなみに、俳句を三行で訳したフロレンツは俳句を警句(エピグラム)と見、ハウザーは芭蕉を格言詩人と呼んだ。⁽⁷⁾

その後、J・バーブやハウザー『日本のウタ』(一九二二)も俳句を扱った。また、クラプントの「芸者お仙の歌」(四行)(一九一八)は、ドイツ語のハイク風の短詩である。療養中に知り合った日本人医師の影響とみられる。彼は日本と中国をしばしば混同しており、俳句とは程遠く、観念的である。H・ペトゲの『日本の春』(一九二二)は、日本の抒情詩は墨絵のようであると、暗示する力、印象主義的性格を強調しているが、個々人の性格は強く表現されないとした。また、俳句は中国の文芸と正反対だとみなしていた。⁽⁸⁾

このように、ドイツ語圏における俳句受容の初期には、外国経由の間接的なものがあるなど、不完全な紹介や誤解が多く、体系だった紹介というよりは、東洋趣味の一種として、もしくは短詩型の新しい詩形式のひとつとして受け入れていたと考えられる。

一ニフランツ・ブライ、イヴァン・ゴル、ライナー・マリア・リルケ
一九一〇年代から二〇年代にかけては、フランス経由での俳句受容が見られる。ブライ、ゴル、リルケの三人を中心に、この時代のドイツ語圏での俳句受容の動向をみてみる。

ゾンマーカンフ⁽¹⁰⁾によると、フランスの印象主義の影響を受けた

Hai-Kai-Modeは二十世紀初め、リルケのほか、ブライ、ゴルらによって担われた。ゴルは、ハイクは遊びを有したセンチメンタルな三行詩であるとした。⁽¹¹⁾リルケは禅に近づくなかでフランスのハイカイに出会った。そしてドイツ・ハイクはブライとゴルの出版物で頂点に達したのだ、としている。

ちなみに、この三人はドイツ語圏とはいえ、その周縁の地の出身で、バイリンガルだった点で共通点を持つ。こうした「周縁性」が日本の俳句を新しい刺激として受け入れることを可能にしたのではないだろうか。この三人については、ビュアシャーパーも同様にドイツ・ハイク形成の中心だったと見ている。彼女によると、フランスの印象主義のドイツ文学への影響で、一九一〇年から一八年の間の時期に、日本の「Hai-Kai」詩についての知識がドイツへ届いたという。「ハイカイ」と呼ばれるフランスのハイクを推進していたクーシュー、ヴォーカンフらは『新フランス評論』(一九二〇)などに依拠していたが、このグループと関係を持ったのが、フランツ・ブライ(一八七二—一九四二)だった。ビュアシャーパーはブライについてこう述べている、「ハイクの背景に、私たちは絵に通じた人と、内容的結びつきと形式的な構造に対する繊細な感覚を感じる。ドイツのハイクの普及については、フランツ・ブライの一九二五年刊行の論文“Haikai”が大きな役割を果たした。彼はハイクについて『ほんのわずかな空間をもつ小さな絵によって三行、もしくは二行でも、的を射たアクセントを有している』(Sakanishi, 1978,

S45) とする。彼の理論的な発言では自作による例示がなされてい⁽¹³⁾た」。このように、「ビュアシャーパーはブライのドイツ語圏俳句受容の先駆性を指摘している。さらに、当時の俳句受容をめぐる一般的状态について、「ここから読み取れることは、(中略) ドイツのハイク普及と、両大戦間の同盟関係にあった若者たちの中に、それが押し入ってきて、作用していたということである⁽¹⁴⁾」としている。

イヴァン・ゴルも一九一九年にパリへ行き、日本の詩について示唆を受けている⁽¹⁵⁾。ゴルは世界大戦中、チューリッヒに、そして、一九一九年にパリへ行き、シャガールやブルトン、自動筆記で知られるパウ・エルワール(二八九五—一九五二)と知り合った。エルワールはハイカイ詩人の一人で、彼に日本の詩を示唆したとされる。ゴルは『ノイエ・ルントシャウ』誌(一九二二)に「日本の詩は世界を表明するために、僅か三行の詩句で事足りる」と書いている⁽¹⁶⁾。ただし彼はここでは俳句とは言わず、日本の短歌のこととして述べている。堀口大学のフランス語の詩をドイツ語に翻訳紹介して、「日本タンカの簡潔性」を主張したのである。シュースターは「シユルレアリスムを先取りする詩は今日ではさほどインパクトはない。しかし、興味深いのは、ここでは——パリとロンドンにおいてと同様に——日本の詩の力を借りて、自分たちの詩を改良しようとしていたことである。翻訳、翻案詩、オリジナルなインスピレーションがひとつになってニュートラルな創作プロセスになる⁽¹⁷⁾」として、ゴルが日本の「タンカ」をヨーロッパのモダンな詩の運動に対して大

きな影響力を持つていたと解釈している。そのゴルは「ハイ・カイ」(『文芸世界』四十六号、一九二六)で“Zwölf Hai-Kais der Liebe”を含む自作の「ハイク」を披露し、「ハイク」を「詩的Epi-gramm」で、可能なかぎり少ない言葉で可能なかぎり集中したイメージと、広やかな感情を呼び起こすもの」と定義している。ちなみに、この論文は日本の俳誌『層雲』でも引用されている⁽¹⁸⁾。

「ハイク」はライナー・マリア・リルケ(二八七五—一九二六)によっても試みられた。リルケは北斎によって日本に関心を持ち、一九〇五年から十年間東京で暮らしたネルケ夫人やその家政婦松本朝子から俳句について聞いていた。「茶の本」を薦められてもいる。その後、彼は『新フランス評論』(一九二〇年九月号)とクーシューの『アジアの賢人と詩人』(一九一六)を手に入れ、フランス経由で俳句を知り、自らもハイク風の詩を作るようになる。ビュアシャパーはこれらの「ハイク」について、このジャンルの形式的・内容的判断基準はあまり知られなかったのだろう、としているが、一方で彼女は、リルケだけが「ハイク」に秘められた禅精神に非常に近づいていった、と評している⁽²⁰⁾。リルケが禅の文脈でハイクを捉えていたとする指摘は興味深い。リルケのハイカイ詩(「ハイク」は一九二〇年にドイツ語による一句、フランス語による一句、二六年にフランス語による一句の計三句だが、さらに二五年の遺書にある「墓碑銘」も、後述するように、「ハイク」と見なす説もある。

その他、クラブントは「ハイク」を書くという意図のもとすでに

作っていた自作の詩を、「日本人の抒情形式の模倣」と呼んだ。また、第一次世界大戦で日本で俘虜となったハンス・カンツイウス（一八七七一—一九六九）は、一九一四年から二〇年に東京、神戸に住み、ハイクを試みているというが、詳細については不明である。

一三 第二次世界大戦後

第二次世界大戦後のドイツでは、俳句受容とドイツ・ハイクの展開はどうだったのだろうか。⁽²¹⁾ まず、マンフレート・ハウスマンが『愛と死と月夜』（一九五二）で俳句の独訳アンソロジーを出したが、注目に値する。その序で加賀の千代女の句を引き、電報のようだが、これが詩なのか、と戸惑われるかもしれないが、俳句では形式と内容は分けられない。日本の詩の特性は象徴と暗示であり、俳句がその中心的役割を果たしてきた。だが、ドイツ語の Dichtung も圧縮するものが「詩」であることを語源的にとどめている、と述べ、「花を種子に遡って、ドイツの精神の土壌に種子として移植する」ことがこの訳詩集の目的であるとしている。彼は日本と西洋の詩形式の比較をしながら日本の詩を象徴、暗示という点で捉え、それがドイツにおいても形式は違っても詩表現の根源においては通じ合える、と考えていたのである。

一九七九年の『ヨーロッパ俳句選集』⁽²²⁾ は、フツズイの博士論文「ドイツ近代抒情詩と東アジア」からの成果も取り入れて、日独両サイドの共同作業として画期的な業績である。ドイツの「ハイク」

について歴史的に概観するエッセイと二百五十句の選出されたハイク。それらの句にはドイツ語の原文と二人の俳人による日本語訳を併記している。二、三種類の訳を俳句として翻案して訳することで、相対化しつつ、詩心の共有を図り、いわば言葉を越えた連句的試みを行った。「ドイツ俳句は、日本俳句をもつばら模範とするという状況から解放され、今日かなり自立したものとなった。俳句がドイツ語のなかで将来にわたり一層磨かれ育てられてゆくことは確かである」（ゲロルフ・クーデンホーフ・カレルギーの序文）とあるように、現代におけるドイツ・ハイクの自立の証として、このアンソロジーは意図されていた。第二部は「季節ごと」と題して季節ごとに句を並べて紹介している。ただし、多くのドイツ語ハイクは四季の観念が希薄である。エッセイ「ヨーロッパにあたえた日本の刺激」には、俳句から影響を受けた例として、ビアバウム、リルケ、クラブント、モンベルト、ホルツ、ダウテンダイ、フロレンツ、ベトゲなどが挙げられている。

さらにフツズイは、形式として世界最小の抒情詩形式がドイツの詩人たちにはとくに魅惑的だったが、ドイツ語ハイクがドイツ人の耳にリズム感をあたえることはない。日本の詩は無韻だからであると述べる。また、翻訳・移植に際しては、二行の格言的短詩 Epigramm、一行の短唱句 Spruch、叙情的箴言 Lyrischer Aphorismus、三行詩のリトルネル Ritornell が頼りうる足場となるだろう。ブルンスやクーデンホーフ・カレルギーの俳句の形式理論もあるが、

第二次世界大戦後、俳句への関心が高いのは、その凝縮、簡潔、具象、自然との密着、透明感、パラドクシカルな暗示などによる、とされている。選句された中には、ホルツ、モンベルト、カンツイウスがあり、ハイカイの人々として、ブライ、ゴル、リルケも選ばれている。さらに四〇年代末には俳句を取り上げようとする様々なグループが出現しているとして、ウィーン・グループのアルトマン、オコペンコ、ヴァイセンボルンなどを入れている。日本に来たことのあるギュンター・アイヒの「ハイク」も入っている。ただ、どの詩を「ハイク」と認定するかという基準は厳密ではないし、必ずしもここではそれを明確にしようともしていない。

最近では、特に俳句の協働性への関心がドイツでも高まっている。文学活動を朗読会やワークショップの場で行うことを好むドイツでは、閉じられた文学空間から開かれた空間へ文学を解放するという意味での日本の俳句が新鮮であるようで、実際にその実践も試みられている。たとえば連詩の試みでは、大岡信、カリン・キヴス、川崎洋、グントラム・フェスパールによる『ヴァンゼー連詩』⁽²³⁾がある。また、大岡信、谷川俊太郎、H・C・アルトマン（ウィーン・グループ）、O・パステイオールの『ファザーネン通りの縄ばしごベルリン連詩』⁽²⁴⁾は、西ベルリン市ベルリン文学館における一九八九年十一月九日の連詩創作の記録である。さらに、「ハイク」を生活詩、自然詩と位置づける試みも出てきている。

以上のことから、ドイツでは十九世紀末から俳句は紹介され、その後、一九二〇年にフランスのハイカイ・ブームの影響でブライ、ゴル、リルケらが「ハイク」に取り組むようになり、近代詩改革のひとつのきっかけにしてきた。そして、戦後は五〇年代に本格的俳句受容があり、やがてドイツ・ハイクが自立していったと考えられる。

二 ドイツとの関わりで見た日本における俳句 ——「象徴」「情調」を中心に

前章で、ドイツにおける俳句受容とその「ハイク」としての自立を概略してきたが、一方、こうしたドイツの俳句受容と関連して、日本での俳句評価はどうだったのだろうか。両者の間には何らかの連動性があるのだろうか。一九二〇年代になると、ドイツ語圏における俳句受容の情報が日本にも知らされるようになった。たとえば、萩原朔太郎は「象徴の本質」でドイツ語圏での俳句評価を取り上げ、ゴルの言葉を俳句の前衛性の根拠とし、表現主義の詩が対象の本質を直感的に把握し、提示する東洋の象徴主義に近づいている、と解釈していることを取り上げている。⁽²⁵⁾一方、寺田寅彦は、西洋人には俳句は理解できないとして、俳句は日本独自のものと主張し、岡崎義恵は俳句を「情調象徴」として美学的に位置づけようとした。こうした主張からは俳句を国際的な抒情詩ジャンルの中で再考する

ことで、それを「日本的なるもの」の発現のきっかけにしようとしていたことが読み取れる。また、これと並行して俳句界でも、たとえば『層雲』がドイツ系の新ロマン主義を介して象徴主義を受容し、さらに表現主義的傾向も俳句の中に取り込もうとした。ここではいわば、西洋的前衛が日本の伝統と出会うことによって近代詩における短詩型ジャンルの革新がもたらされていたとも考えられる。以下、ドイツの俳句受容と関連させて、日本における俳句再評価と近代詩の成立・発展について考察してみる。

二― 近代詩としての俳句

―― 俳誌『層雲』とドイツ系象徴主義・新ロマン主義の受容

俳誌『層雲』⁽²⁶⁾（二九二―四四、四六一）の明治・大正期では、主宰者荻原井泉水のほか、雪山曉村（俊夫、ドイツ中世文学専攻）、三橋麻太郎、小牧健夫（海潮音）、青山郊汀（延敏、ドイツ・中欧抒情詩専攻）らがドイツ情報、特に、ドイツ・オーストリアの文学動向を紹介した。ホフマンスタールやヘルマン・バルなどの新ロマン主義や象徴主義的傾向を取り上げており、俳句を象徴主義的に捉えようとしていたとみられる。また『層雲』には最初の一年だけ大須賀乙字がいたが、彼は二句一章論を展開、碧梧桐に影響を与えた。一九〇八年の「俳句界の新傾向」で彼は、井泉水からドイツの言語学者ヘルマン・パウルの『言語学概論』における「言語は暗示にすぎず」という話を聞き、俳句は「暗示 Suggestion」である、と主

張するようになったと述べている。ただ、彼は漢詩の素養があり、古俳句の造詣も深かった。伝統の方からも同じような発想があるなかで、彼の主張が展開されたということは、興味深い。関連して、一九〇六年、島村抱月が「俳句的標象」（『東京日日新聞』十月一日）で、客観を合図として主観の深さを示唆することを俳句的とした。これもヨーロッパの象徴主義からの流れを受けていると考えられる。

『層雲』の中でドイツの「ハイク」事情について論及したものは、第十五巻第五号（二九二四）の青山郊汀「俳句の欧語訳に就いて」と第十六巻第十号（一九二六）の同じく青山の「Hai-Kai (イヴァン・ゴル)」がある。前者は俳句の翻訳についての文章で、言葉よりもリズム、内容より詩、概念より生命を重視すべきとする。また、最近の流行の一連詩や一句詩、表現派やダダの詩風にも通じるものがあるとし、俳句の世界文学としての可能性を示唆している。後者は、前述したイヴァン・ゴルの論文の訳とその解説である。「俳句は日本のもののみではなく、世界のものであるといふ事実」を認めていこうとする。また、「日本趣味に捉れないで、世界的でありたい」として、俳句を日本という民族性から解放した地点から表現すべきことを、このゴルの論を引き合いに出して主張している。後述する朔太郎の俳句「日本性」という民族主義的方向でのゴル解釈とは一線を画した、コスモポリタンの俳句理解といえる。

『層雲』の内容分類を追っていくと、ジャンルとしてはアフオリズムや断片が目につく。ドイツ系の作家たちの格言的、箴言的断片集

におけるアフォリズム形式（ゲーテ、ノヴァーリス、シュレーゲル、ヘッベル、ニーチェ、ショーペンハウアー、ハイネ、リヒテンベルク、クラウス）が俳誌の中で好まれたというのも、短い形式という点でアフォリズムが俳句を受け皿にして受け入れやすかったためではないだろうか。

ちなみに、『層雲』の構成は「感想、論（評論）」「俳論、俳談」「小説、紀実（戯曲、小説）」「長詩、短歌（詩歌、俳句）」「俳句」「紀行、日記」「漫談、消息」「雑録、選評」というものが基本である。アフォリズムは「長詩、短歌（詩歌、俳句）」の項目に入れられているので、アフォリズムが彼らの主張する自由律俳句と類縁なものとして受容されていたといえよう。また、ここでは西洋の近代詩の翻訳も積極的に紹介されていたので、俳句を短詩型の近代詩と位置づけようとしていたこともうかがえる。

二二二 日本のなるものⅡ俳句

——萩原朔太郎、寺田寅彦、岡崎義恵

昭和期になると、萩原朔太郎は「象徴の本質」〔『詩論と感想』、素人社、一九二六〕でイヴァン・ゴールを引用し、日本文芸の「象徴」がヨーロッパの前衛である表現主義と近似性があると主張した。それどころか、『詩の原理』（第一書房、一九二八）の第五章「象徴」では、日本には早くから象徴が発達していた。西洋は近代に至って初めて象徴度の弱い浮世絵を通してはじめて象徴に目ざめた。本物

の象徴は日本にあるのであつて、象徴主義は偽物でまだまだ説明的だ、としている。

また、寺田寅彦は「俳句の原理」（一九三五）で俳句における日本独特の自然観、季節の重要性、民族的記憶、形式の必然性を主張した。「連句の独自性」（一九三一）では、さらに西洋人は俳諧を理解しえない、特にドイツ人は、と述べている。しかし他方、「映画と連句」（一九三二）では映画が連句と同じ発想であることに着目し、新しい時代における俳句の可能性を指摘している⁽²⁷⁾。

文芸学者の岡崎義恵は「日本詩歌の気分象徴」（一九一六、卒論⁽²⁸⁾）で「象徴」の訳語の由来を説明し、「情調（気分）象徴」をヨハネス・フォルケルトの感情移入説（『悲劇美の美学』、鷗外訳「審美新説」）や厨川白村の『近代文学十講』を参照して、論じている。「ヨーロッパ象徴思想の移入と伝統的象徴精神の覚醒」⁽²⁹⁾では、大正末に短歌・俳句に象徴主義が浸透したとしている。そして、それが日本の伝統を生かす一つの原理としての面を持つこととなったとし、やがて彼は日本固有の象徴主義を主張するようになる。近代抒情詩における象徴主義的傾向を、『新古今』からの白萩、『万葉』からの茂吉、幻想的・音楽的情調を信奉する朔太郎、水穂、無季・自由律の井泉水、イマジニズム、フォルマリズムの影響がある誓子、と分類している。また、「俳句の本質と近代の抒情」⁽³⁰⁾では、複雑な現代に對して、簡潔、スピード、映画的、絵画的な形式が求められるが、それに俳句が適しているとして、俳句の近代的スピード文明の文芸

形式としての可能性を示唆している。

こうした大正から昭和にかけての詩人やドイツ系理論を受容した文学者・文芸学者による俳句再評価は、ドイツ語圏モダニズムにおける俳句受容とその「ハイク」としての展開と連動していたことが推測される。『層雲』では俳句を西洋の新ロマン主義や象徴主義、あるいはアフォリズムの移入によって改革しようとする意図がうかがえるし、「ハイカイ」の紹介もあった。また、岡崎は象徴精神において俳句をとらえ、西洋の美学理論からそれを説明しようとした。朔太郎は俳句の前衛性を、ゴルを引き合いに出して論じている。こうした俳句の「モデルネ」との関連付けが日本における俳句再評価に投影され、日本的なるものの意識化をひき起こし、その核としての侘び・さび・幽玄の強調、あるいは日本文化の禪的理解、象徴主義的理解を促進したと考えられる。

ちなみに、東北帝国大学には芭蕉研究会があり、ドイツ文学教授だった小宮豊隆が『芭蕉研究』（一九三三）を著している。また、同じく東北帝国大学に一時期いた木下柰太郎は、かつてドイツ系新ロマン主義を受容したが、「俳諧と自然」（『俳句研究』、一九三五年三月号）で芭蕉を自然詩人だが、人間も閑却しないと、その描写はしばしば高級の象徴主義になっているとしている。岡崎義恵も東北帝国大学にいたので、彼らの俳句理解に関連性があるのも決して偶然ではないだろうが、これについてはまた改めて論じてみたい。

三 「ハイク」の国際化と近代詩の変革

国際化が進むなか、日本の俳人が世界的ハイク普及に触発されて、俳句ハイクの世界性・国際性を強調することもあった。ここでは、「ハイク」の国際性の主張と試みを概観し、俳句と日本における近代詩の変革との関連を中心に、「ハイク」の可能性を考えてみる。

三― 「ハイク」の国際化

高浜虚子は一九三四年渡欧した。『渡佛日記』（一九三六）によると、フランスで詩人ヴォーカンスに会うが、ベルリンでも講演会を行っている。帰国後、一九三八年に『ホトトギス』の後進として俳誌『俳諧』を創刊し、そこに「外国に於ける俳句及びHAIKAI」の項を設ける。ベルリン在住の山口青邨せいせんが「伯林使り」も連載した。虚子の句の仏、英、独語による解釈と翻訳が出され、独訳は手塚富雄（杜美王）とツアハルトが担当した。ちなみに、山口青邨の「ベルリン日記」は最近ドイツ語に訳された。彼はベルリンの工科大学に客員聴講生として留学、ナチスのドイツを体験している。

虚子は一九三六年のドイツでの講演のことを、こう述べている、「ベルリンでは、ベルリン大学の日本語学科の教師や生徒が、俳句の話聞きたくて要求を持ち出しまして、日独協会の会長であったベンケという人を初めとして多くの人々の集まった中で俳句の話をしました³¹」。さらに彼はこのヨーロッパでの「ハイク」についても

考察している。それによると、外国人に俳句を教える際に一番難しいのは「季題」であるとしている。西洋ではもっぱら音節の数のことが問題にされるが、季題のことは無視されることが多い。それは四季の移り変わりや自然の変化が世界的に見ても日本ほど恵まれた所はなく、日本では国民の間で四季や風景に対する関心が極めて高いためである。「それがつまり風景美であり、四季の変化をうたふのを専らにしてゐる俳句といふものを生んだ原因」(「日本独特の俳句」)だからだ、とする。彼はこのように、ヨーロッパの「ハイク」に触れることで日本の独自性を考察するようになり、そこにあらためて日本の「自然」の独特さを再確認したのである。だが、渡欧前には虚子は、西洋人が俳句がわからないという考え方は、否定していた。むしろ、日本人で誰がそれをわかっているのかと問う。また、過去、西洋人によって日本の美術工芸の価値が発見されたことを挙げ、西洋人でも日本をよく理解するようになれば、俳句はできるようになる(と述べていた(「西洋人に俳句の趣味は判らぬか」(一九三〇年九月)³³)。したがって、渡欧によって虚子はこうした俳句の国際性に対して限界を感じるようになったのではないだろうか。なお、虚子のドイツ旅行に際しては「素人」こと、独文学者の藤代禎輔のアドバイスを受けている。ベルリンではベルリン大学の日本の学生「ヒュルガ姉妹」ともめぐり合う。またそこで、日本に来て「パンの会」に関わり、第一次世界大戦中は大分と習志野の俘虜收容所にいたフリッツ・ルンブにも会っている。³⁴

虚子はこのように、俳句の国際的普及を図るが、ただ季題・季語の希薄化は批判した。やはり、日本的なるものへのこだわりは強かったといわざるを得ないだろう。

戦時中では、詩による「交感」が日独同盟という政治的背景のもとに起こる。青山延敏(郊汀)編著『日獨詩盟』(南山堂、一九四三)には、ヒトラーと林銑十郎による序がつき、青山による「Hi. Kai」、川路柳虹の「フランスに於けるHAIKAI」が収録されている。青山は、ハイカイから日本文化や民族性、伝統へまなざしを向け、古人の俳境を継ぐことを主張、日独の詩による交感をここで演出している。また、ドイツ・「ハイカイ」成立に貢献した者としてザイデル夫人、ゴル、ゲオルゲを挙げている。青山は詩人ゲオルゲから直接、教えを受けたと述べ、第一次世界大戦では、久留米のドイツ人俘虜收容所に通訳として勤務し、ドイツ人(カンツイウスか?)と「ハイク」を試みた(と述べている)。

このように、この時代にはドイツと日本のハイク交流とそこに通底する情調的結びつきが政治的に利用されるということもあった。

次に、戦後のドイツ文学者のドイツにおける俳句受容への評価をみてみよう。『俳諧』のドイツ語訳者・手塚富雄は「日独修好百年と文学」で、「若いゴスマン氏は、ドイツ文学に俳句のジャンルを立てようと唱導し、実行している。翻訳するのではなく、ドイツ語で俳句的発想の短詩をつくるのである」³⁵と述べて、「ジャンル」としてのドイツ・ハイクの質に疑問を呈している。

また、同じ手塚富雄は「二つの詩世界」（一九五八、初出未詳）では「マンフレート・ハウスマンが日本の伝統短詩をドイツ語に訳した『愛と死と月夜』(Liebe, Tod und Vollmondnacht, übertragen von Manfred Hausmann, S. Fischer Verlag 1952) (……) 私たちがそれを読むと、ものたりないところが非常に多い。原作にくらべると、いったいにひからびていて趣きがない」と述べ、さらにドイツ語訳はエピグラムのようになっていて、一般的な人間感情に関するエピグラムであり、原句のもつ特殊な情趣はすべて捨象されており、ここにあるのは普遍的な人生観である、としている⁽³⁷⁾。このように手塚は「ハイク」に対して、やはり物足りなさを感じており、逆に西洋的発想との違いの大きさを自覚し、そこから日本的なるものの再評価へと向かっていったと考えられる。ドイツ文学に造詣が深いが故に彼我の間のギャップの大きさが人一倍見えていたためであろう。ドイツの近代詩に触れてきたがゆえに、逆に、日本の詩・句の独自性を意識するようになるという日本のドイツ文学者たちの姿が見える。

また、同じく独文学者の高安国世は「リルケと日本人」⁽³⁸⁾の中の「リルケと日本人 補遺—リルケと俳句」で、オランダの独文学者ヘルマン・マイヤーが『繊細な経験』の「可視的なものの変身」という章で、リルケ自らが俳諧について語った言葉と、リルケ最晩年のフランス語の詩との関連に触れていることを、紹介している。

高安によると、リルケがもつとも俳句に関心を示したのは一九二〇年のN・R・F（『新フランス評論』九月号である。クーシュー

ら十人の詩人が俳諧と称する詩を発表し、巻頭にジャン・ポーランが日本の俳句紹介文を掲載していた。リルケはそれに刺激されて、Hai-Kaiと銘打つフランス語の三行詩を書いたとしている。しかし、高安はこれらの句に日本の俳句的要素を感じないし、手塚と同様、一般に欧米のハイクには日本の俳句とは異質なものを感じ、「理解し合うと言っても、結局は自分の体質になかったものだけを撰取し、異質なものはどうにもならないのではあるまいか」と述べている⁽⁴⁰⁾。

しかし、リルケにはとにかく俳諧の特徴を、彼の念願する芸術の究極的な価値や使命に合致するものと解していたことがうかがえるとして、マイヤーが最晩年のリルケのフランス語詩の特質を、一見形式では貧弱にみえても、単純なひかえめな形の中に充実がひろがり、超地上的な輝きに照らされている。目に見える世界がここでは、あとかたもなく精神的なものへと溶かされ、「内面的に変身」させられており、この意味において「目にみえないもの unsichtbar」となっていることと解釈したことに言及している。そして、リルケ自身も最晩年に、「目に見えるものがひとつの確かな手に取られ、熟した果実のように摘みとられる。しかしそれはすこしの重みも持たない。というのは、それはそつと下に置かれるや否や、目に見えないものをあらわすように強いられる」からだとしている。高安はこのように、リルケの晩年の詩に俳句的要素を見て取り、そこに単なる形式模倣ではない、深い照応があることに注目していたのである。

以上のことから、俳人たちは俳句の国際化を唱えながらも、一方

で俳句の日本的なる特質にますますこだわったし、独文学者たちはドイツの「ハイク」の実践について形式的な面で厳しい評価を示したが、リルケ研究の進展などを通して、徐々に「ハイク」の近代詩革新の役割に注目し始めていったといえるだろう。

三二 ハイクの日本回帰と詩の変革

——リルケの「墓碑銘」翻訳比較を例に

Rose, oh reiner Widerspruch, Lust

Niemandes Schlaf zu sein unter soviel

Lidern.

このリルケの「墓碑銘」はハイクであるという説がある。一九二五年の遺書に入れられたこの詩は、作られたのがリルケが「ハイク」を試みていた時期でもあるし、内容的にも対象に拘泥し、内と外、生と死の合一を表現していて、日本の俳句を彷彿させる。そこでここでは、このリルケの「墓碑銘」の日本での翻訳の変遷を例にとり、それをリルケ受容との関わりで跡付け、ハイクが日本の近代詩・現代詩の変革にも影響を与えていったことを示してみたい。

戦前にはリルケ受容は意外と多くない。茅野蕭蕭の『リルケ詩抄』（一九二七）には「墓碑銘」は入っていない。堀辰雄の「リルケ年表」（一九三五）にこの詩の訳があるが、彼はこれを二行で訳

している（「薔薇よ、おお、純粹な矛盾、幾重もの臉の下に、／誰れでもない眠りを味つてゐる悦び」。「リルケ雑記」『堀辰雄全集』第三卷、筑摩書房、一九七七。初出「リルケ年譜」『四季』、一九三五）。ただ、堀はリルケを西洋近代の詩人として理想化するばかりで、一方通行の受容だった。また、片山敏彦の『リルケ詩集』でも二行で翻訳している（『リルケ詩集』新潮社、一九四二）（「薔薇の花よ、おお、純粹な矛盾よ／たくさんの臉の下で、誰の眠りでもないことの逸楽よ。」）。片山もこれを「ハイク」とはみていなかったが、リルケ自身の東洋的・仏教的背景は指摘していた。堀と片山が二行詩で訳したのは、一時期この詩をドイツ語で二行で出版した詩集があったためと考えられるが、リルケ自身は実際は三行で書いていた。当時フランスのハイカイが三行で書かれていたこととの関連がうかがえる。

戦後になると特に六〇年代にリルケと「ハイク」との関わりについての研究が進み（富士川、高安、マイヤー）、訳も簡潔になっていく。ただし、大山定一は四行で訳していた（『リルケの薔薇』、創元社、一九五二）（「おお薔薇 純粹なかなしい矛盾のはなよ／はなびらはなびらは 幾重にもかさなつて眼蓋のやうに／もはや誰のねむりでもない寂しいゆめを／ひしとつつんであるうつくしき」）。

星野慎一は最初の訳（『リルケ詩集』岩波書店、一九五五。『晩年のリルケ』河出書房新社、一九六二）（「薔薇よ、おお きよらかな矛盾よ、／誰が夢にもあらぬ眠りを あまたなる臉の陰にやどす／歓喜よ。」）では、リルケは西洋の詩人で理解がむづかしいと述べていたのに、や

がてこれは「ハイク」ではないかと思うようになる。これもリルケと日本との関係が明らかになったためであろう。神品芳夫は「ドイツと俳句とリルケ」で「リルケは日本の近代詩に大きな影響をおよぼした人だが、リルケと日本との関係がすくなくとも完全に一方通行でなかったことを知るのには、やはり愉快なことである」（『詩と自然 ドイツ詩史考』小沢書店、一九八三）と述べている。他の訳では、句読点の使い方も個々の訳者で違うし、漢詩調のものもある。

Niemandの訳し方（「誰の「眠り」でもない」「誰でもないものの「眠り」」）にも違いがある。富士川英郎訳では（『リルケ選集』第二巻詩集二、新潮社、一九五四。手塚富雄編『リルケ』筑摩書房、一九五九。『リルケ詩集』新潮文庫、一九六三。『世界の詩29 リルケ詩集』弥生書房、一九六五。富士川英郎『芸術と人生』、白水社、一九九七）（『薔薇のおお 純粹な矛盾 よろこびよ／このようにおびただしい臉の奥で なにびとの眠りでもない／といふ』、三行目を「といふ」として余情を残すことを試みているが、こうした試みもこの詩を俳句的に訳そうとする意図からなのかもしれない。さらに、最近では『ヨーロッパ俳句選集』などのように、俳句に翻案して訳すという試みも見られる（生と死の矛盾嬉しや薔薇の花」内田園生（『世界に広がる俳句』角川書店、二〇〇五））。

このように、リルケの翻訳者たちはリルケが代表するヨーロッパの近代詩が東洋的・日本的要素と交感しあうことの再評価の過程で、

自分たちの持つ詩形式にリルケのこの詩を近づけようとしていることがみて取れるだろう。一方で、西洋における俳句受容と「ハイク」の実践が日本で知られるようになる、日本の詩人たちが自らの中にハイクの要素を意識化し、それを自分たちの新しい詩や翻訳に導入しようとして、近代詩自体を「日本的なるもの」にしていったことも、推測できるのである。

おわりに

以上、本論では、ドイツにおける俳句受容とドイツ・ハイクの生成・自立、ならびにそれと連動する日本における俳句再評価を考察してみた。ドイツ・ハイクについての研究はまだ少ないが、実際にはそれはすでに一つの文芸ジャンルとして独自の形で定着している。必ずしも、日本の俳人たちが期待する伝統的俳句観に基づくものではなくしたが、他方で、こうした「ハイク」の展開をみながら、日本の俳句がより自己意識を強めてゆき、さらには、その可能性に新たに気づくこともあったし（座としての文学、自然詩、生活詩としての俳句）、ときに日本回帰や民族主義的な主張につながることもあった。またその反面、リルケの「ハイク」の日本での受容の変遷にみられるように、ドイツでろ過されたハイク的特性がより普遍的な形で日本に回帰し、日本の俳句、ならびに日本の近代詩を革新していくひとつのきっかけとなったともいえる。日本の文芸ジャンルとしての俳句も、「ハイク」によって変容していったのである。

日独における俳句の影響と「ハイク」の発展にみるように、一般に異文化での自文化の評価が、自文化の特性を意識化させ、それを実体化するということもある。その意味では、自文化は異文化と表裏一体の関係にあるといえる。それは、文化は相互の影響と交流において相互照射することではか発現しない、ということの一例ともいえるだろう。こうした双方向の影響関係をみる試みは、文化同士が相互照応しながら、個々の文化で自己意識を高める様を映し出すとともに、文化間に通底する要素を発見するのに有効であるともいえるのではないだろうか。

注

- (1) ドゥルス・グリューンバイン (Durs Grünbein, 1962-) は旧東ドイツのドレスデン生まれの詩人で、一九九五年にドイツで最も権威ある文学賞をすでに受賞したドイツで最も注目されている詩人である。彼は一九九九年と二〇〇二年に来日している。彼は日本の印象を俳句風の短詩にして発表している。(『ドゥルス・グリューンバイン詩集 墓碑銘・日本紀行』縄田雄二編訳、中央大学出版部、二〇〇四)
- (2) Günter Grass: *Funfsachen für Nichtleser*. Göttingen 1997. 田舎の自宅での四季の風物にかこつけて心境を短詩で表現。三〜五行が多い。タイトルをつけている。
- (3) 加藤慶二『ドイツ・ハイク小史』、永田書房、一九九六。なお

- シュースターにも同様の解説がある。Ingrid Schuster: *China und Japan in der deutschen Literatur 1890-1925*. Bern 1977, S.11~S.55.
- (4) Hans Dieter Zimmermann: Ein Kuckuk ruft. Asiatische Einflüsse in der Lyrik von Arno Holz. In: *Text + Kritik* 121.
- (5) 加藤、前掲書、一五頁。
- (6) 『インゼル』に狂言の「花子」の翻訳がある。一九〇二年四月五月合併号。『インゼル』の編集者の一人で、かつ日本文学についての紹介も行っていたフランツ・プライのペンネームか？
- (7) 加藤、前掲書、一四―一四頁。
- (8) 『層雲』(復刻版、不二出版、一九九六) 第五卷第三号「詩作と郷土」にストゲ「フスラム附近にて」あり。
- (9) 加藤、三三頁。
- (10) Sabine Sommerkamp: *Die deutschsprachige Haikai-Dichtung. Von den Anfängen bis zur Gegenwart*. 1984.
- (11) Iwan Goll: Hai-Kai. In: *Die literarische Welt* Bd. 2, H.46, 1926, S.3.
- (12) Margret Bierschaper: *Das deutsche Kurzgedicht in der Tradition japanischer Gedichtformen Haiku, Senryu, Tanku, Renga*. Göttingen 1987.
- (13) Bierschaper, a.a.O., S.95.
- (14) Ebd.
- (15) Vgl. Schuster, a.a.O.
- (16) Iwan Goll: *Das Wort an sich.: Neue Rundschau*. Nr.32. Berlin

- n. Leipzig Oktober 1921.
- (17) Schuster, a. a. O., S.52.
- (18) 『層雲』、前掲書、第十六卷第十号（一九二六年三月）
- (19) Buerschaper, a. a. O., S.94.
- (20) Vgl. Sommerkamp, S.37.
- (21) ハイク実作者のハイク集については、既出の加藤『ドイツ・ハイク小史』のほか、林正子「ドイツの俳句——ドイツ語圏の俳句受容とドイツ語 Haiku の展開」『國文学』（特集「俳句・世界の HAIKU」）、学燈社、二〇〇五年九月号（第五卷九号）に詳しいので、ここでは割愛する。
- (22) 坂西八郎、H・フツズイ、窪田薫、山陰白鳥編著『ヨーロッパ俳句選集』デイルーマン、一九七九。
- (23) 大岡信ほか『ヴァンゼー連詩』岩波書店、一九八五。
- (24) 大岡信ほか『ファザーネン通りの縄ばしご』ヘルリン連詩』岩波書店、一九八九。
- (25) 参照、鈴木貞美『日本の文化ナシヨナリズム』平凡社、二〇〇五。
- (26) 『層雲』、前掲書。
- (27) 『寺田寅彦』ちくま日本文学全集、一九九二。
- (28) 岡崎義恵『日本詩歌の象徴精神古代篇』（『岡崎義恵著作選』）、宝文館出版、一九七〇。
- (29) 岡崎義恵『日本詩歌の象徴精神現代篇』（『岡崎義恵著作集』第八卷）、宝文館出版、一九五九。
- (30) 岡崎義恵『近代日本の詩歌』（『岡崎義恵著作集』第十卷）、宝文館出版、一九六二。
- (31) 高浜虚子「俳句の講演」、『俳句の五十年』中央公論社、一九四二。
- (32) 『定本高浜虚子全集』第十四卷紀行・日記集、毎日新聞社、一九七四、二四二頁。
- (33) 高浜虚子『俳談』岩波書店、一九九七、五五頁。
- (34) 『定本高浜虚子全集』第十四卷紀行・日記集、前掲書。
- (35) 『手塚富雄著作集』第五卷、中央公論社、一九八一、四二二頁。
- (36) 『手塚富雄著作集』第七卷、中央公論社、一九八一、一一二頁。
- (37) 同書、一一四頁。
- (38) 高安国世『リルケと日本人』第三文明社、レグルス文庫、一九七二。
- (39) 参考、リルケとハイクについては、Herman Meyer (Amstelveen): Rilkes Begegnung mit dem Haiku. In: *Euphorion. Zeitschrift für Literaturgeschichte*. 74. Band 2. Heft. Heidelberg 1980. de、マイヤーがリルケの詩への日本の俳句からの影響について詳細な分析を行っている。
- (40) 高安、前掲書、一六八頁。

〈共同研究報告〉

歴史書の剽窃

——田口卯吉『支那開化小史』偽版訴訟事件の考察

甘露純規

はじめに

明治二十四年十一月、田口卯吉は、明石孫太郎『新体支那歴史』を自著『支那開化小史』の偽版であるとして告発した。この事件については、すでにいくつかの先行研究がある。まず大家重夫「1田口卯吉『支那開化小史』事件(2)(刑事)」^①があげられる。しかしこれは、二つの書物の類似点についての対照表(後述)と判決文を掲載するに止まり、この訴訟がどのように進められたものなのか、明らかにするものではない。次に吉村保「田口卯吉『支那開化小史』偽版告訴事件」^②があげられる。吉村は被告明石孫太郎の逆転勝訴となった二審の判決文を取り上げ、判決の根拠が明らかではないと言う。しかしこの訴訟の公判記録は一部を除いて『東京経済雑誌』(六〇一・六〇五〜六〇七・六三一・六五五)に掲載されており、この記録を読めば、被告を逆転勝訴へと導いた判決理由も理解出来

る。

この公判記録を取り上げたのは、稲岡勝「蔵版、偽版、板権——著作権前史の研究——」である。稲岡が指摘するように、この裁判は「意匠」歴史の見方についての見識、卓見」の剽窃をめぐる争われた事件であった。しかし、この事件に対する稲岡の関心は、明石と書肆大倉保五郎の間に結ばれた印税契約の問題を明らかにすることにある。本稿では、稲岡の論考において指摘に止まった、この事件における「意匠」の剽窃の問題を詳しく取り上げたい。この時期、「意匠」は美術・文学・歴史の領域にまたがり重要な役割を果たしていた。歴史の領域で、書物間の差異が問われる場合、この「意匠」はどのように機能したのだろうか(資料を引用するに際し、通行の新漢字・平仮名を用い、私に句読点を補った)。

一 田口卯吉『支那開化小史』

田口卯吉『支那開化小史』は、經濟雜誌社から分冊出版された。

一卷は明治十六年十月、二巻は十八年四月、三巻は二十年一月に、四巻は二十年四月に出版されている。明治二十年十二月には、一卷から四巻までの合本⁽⁵⁾が出版された。その後二十一年一月には、この合本に五巻が加えられ、再版されている⁽⁶⁾。また明治二十四年には「文部省検定済尋常中学校教科用図書／文部省検定済尋常師範学校教科用図書」として再版されている⁽⁷⁾。

『支那開化小史』は、『日本開化小史』（明治十年九月〜十五年十月）の姉妹編であった。よく知られているように、この『支那開化小史』は、ギゾーの文明史の影響を受けたものだった。『支那開化小史』の序言を見てみよう。

史を記するの体三種あり。曰く編年体、春秋の類是なり。曰く記事体、史記列伝の類是なり。曰く史論体、過秦論、封建論の類是なり。此諸体各々適する所あり。封建潰乱の事実を表示するは編年体に如かず。人の履歴を記するは記事体に如かず。社会の大勢事情變遷を記するは史論体に如かず。

史と論とは異なり、論は所見を述ふるものなり。史は事実を記するものなり。故に支那の史家史論体を以て史と称せざるなり。（中略）蓋し此等の事實は歲月の以て明に之を期すべきなく、

且つ数多の事實湊合して一頭像を為すものたるを以て、史家各々所見を異にするの弊あるを免かれず。然れども之か為に所見を交ふべからずと云ふは、其變遷を記すべからずと云ふなり。則ち社会の史を記すべからずと云ふなり。史豈に論と異ならんや。共に所見を述ふるものゝみ。（例言）『支那開化小史』一頁（二頁）

この序言からは、従来、事実の叙述すなわち〈史〉から、個人の見つつまり〈論〉として区別されていた史論体を〈史〉の中心に位置づけることにより、新たな歴史学を構築しようとする田口の企図がうかがえる。こうした田口の企図は、明治二十年前後における、年代記と歴史学を区別する歴史改良論の一つの現れであった⁽⁸⁾。この歴史改良論の中では、諸事実を時間的順序に配列しただけの年代記は単なる資料として扱われ、事件の原因と結果を明らかにする観点から資料を取捨選択することこそが歴史学だとされる。十九世紀の欧米において、事件の原因と結果の有機的な記述を目指す、こうした歴史学の姿勢は新たな小説の創造に大きな影響を与えた⁽⁹⁾。田口らの歴史改良の動きも、こうした欧米の歴史学の動きに影響を受けたものであった。

『支那開化小史』の内容を見てみよう。『支那開化小史』は、開闢から明の滅亡までの中国の歴史を、一章から一五章に分けて記述している。例えば第一章の構成は、①「支那の地勢」②「封建の起

源」③「帝都の変遷」④「一統の企図黄帝に発す」⑤「堯舜禹の政略」⑥「夏后氏諸侯を制する能はず」⑦「殷室諸侯を制する能はず」⑧「周室諸侯を制する能はず」となっている。歴史的な変遷を政治・宗教・文学等の領域から総合的に捉える文明的な記述を標榜するにもかかわらず、政治的な変遷のみを記述していることが分かる。こうした記述の偏りについては、早くから島田三郎や末広鉄腸からの批判もあつた。この批判に対して、田口卯吉は次のように答える。

恐らくは世間開化史の名を聞き、専ら文物の変遷を記するものなりと誤認するものあらん、故に茲に之を弁ぜざるを得ざるなり。蓋し開化史は社会の史なり、抑々人間社会には大理あり、封建の破るゝゆえん、郡県の興るゆえん、専制政府の腐敗するゆえん、叛民の蜂起するゆえん、衣服飲食住宅の盛衰するゆえん、皆な源因なくして発するものにあらず、而して是又他の源因とならざるなし。之を称して大勢といふ。(中略)西洋に於ては此大勢多く文物の進歩の元素を有し、支那に於ては多く政治権力の元素を有す。是れ二開化史をして異相を呈せしむるものならざるべからず。¹⁰⁾

一般の文明史理解と田口の理解には隔たりがある。田口が依拠するギゾーの「文明史」は、歴史的な変遷を左右するものとして政治

的な要因を最も重視するものであつた。この意味で『支那開化小史』はギゾーの「文明史」の影響を色濃く受けた書物であつた。¹¹⁾ こうした「文明史」理解と、社会の発展が政治により決定づけられるという、田口の中国理解を考慮すれば、『支那開化小史』は政治史であるがゆえに「文明史」であると言えるのだ。

二 明石孫太郎『新体支那歴史』

明治二十四年五月、明石孫太郎『新体支那歴史 上巻』が大倉保五郎から出版された。著者明石孫太郎は安政三年に熊本に生まれ、二十二年には東京英吉利法律学校に学び、この時期、第一高等学校の教師を務めていた。¹²⁾ この『新体支那歴史』は、その扉を見ると「中学校及師範学校用書」と銘打たれており、中学校や尋常師範学校の歴史教科書として出版されたものであつた。その序言を見てみよう。

西洋にては何事にまれ、凡ての事物に原因結果あるは、一般普通の定理とせり。故へを以て西洋古代の史乗は姑らく舍くも、近古以来の歴史は、概ね皆ナ原因と結果とを主とし、之に加ふるに自己の意見を附して、前後の関係を明らかにせざるはなきなり。且つ夫れ古今の事跡なるものも、僅かに是レ王家の日誌や、英雄豪傑の軍記のみに限りしものにあらず、普く社会万般の事物に涉りて、復々遺憾すべきなきものなり。(中略) 輓近

をなしたり。呂后の技倆凡て如是の憚るべく畏るべきものあるを以て、高祖は則ち其権を殺かんと欲せしや已に久し。高祖嘗て意らく、「呂后生む所の太子盈は、其人となり仁弱なるを以て之を廢し、戚夫人生む所の趙王如意は、その己れに類せるを以て、立て、太子となさん」と。然レども呂后の権強きと、大臣の服せざりしとを以て、之を止めたりき（『新体支那歴史』二三三―三四頁）

訴訟において、明石はこの箇所は『支那開化小史』ではなく、『史記』を典拠にしたものと主張する¹³。しかし『史記』の左の該当箇所を見ると、『新体支那歴史』の記述との類似点は少ないことが分かる。

呂太后は、高祖の微なりし時の妃なり。孝惠帝・女魯元太后を生む。高祖漢王と為るに及びて、定陶の戚姫を得、愛幸し、趙の隠王如意を生む。孝惠、人と為り仁弱なり。高祖以為へらく、我に類せず、と。常に、太子を廢して戚姫の子如意を立てんと欲す。如意は我に類す、と。戚姫幸せられ、常に上に従ひて閨東に之き、日夜啼泣し、其の子を立てて太子に代らしめんと欲す。

呂后、年長じ、常に留守し、上に見ゆること希に、益々疏んぜらる。如意、立ちて趙王と為る。後幾ど太子に代らしめんとす

る者数々なり。大臣之を争ふと、留侯の策とに頼り、太子、廢せらるること母きを得たり¹⁴。

『新体支那歴史』は『支那開化小史』と異なる編纂法を用いながらも、『支那開化小史』の字句を大幅に無断借用して書かれた書物だったのである。

三 歴史書の「意匠」

明治二十二年には、歴史書の剽窃事件が頻発した。同年の『出版月評』（五月二十五日から六月二十五日）において、大瓠子は、那珂通世編『支那通史』（同年五月、中央堂刊）と市村瓚次郎・瀧川亀次郎合著『支那史』（同年四月、吉川半七刊）について、「何ゾ其ノ印行ノ歲月ノ相近ク、而シテ編修ノ体裁ノ相似タルヤ」とその類似性を指摘している。さらに『出版月評』二五号（十月二十五日）では、大瓠子は、北村三郎著『支那帝国史』（五年二月、博文館刊）について、「支那帝国史ハ前二著（※『支那通史』と『支那史』）ヲ生吞踏襲セシモノアリ。何トナレバ則チ支那帝国史ノ編制体制ハ殆ンド前二著ト異ナラザルヲ以テナリ」と非難している。

こうした中で無慮散人（志賀重昂）は、『出版月評』（十二月二十七日・翌二十三年一月三十一日・二月二十五日）において、松井広吉著『日本帝国史』（二十二年八月、博文館刊）について次のように批判する。

此書ノ嵯峨正作氏編ノ日本史綱ト酷類セルヲ知レリ。(中略)
独リ以為ラク、日本帝国史ノ意匠組織ハ日本史綱ヨリ脱胎スル
者ノ如ク、而シテ此嫌ヲ避ケン為メ、日本帝国史ノ著者ハ故ヲ
ニ日本史綱ト紀事排置ヲ少変シ、時ニ或ハ蛇足トモ想フベキ自
家ノ意見ヲ附添シ(後略)

ここでは歴史書の差異が問われる場において、「意匠」というもの
に関心が注がれていることに注意したい。『日本帝国史』の著者
松井は、後年、この無慮散人の批判の背景には、廉価で歴史書その
他を出版していた博文館への反発があったと回想している⁽¹⁵⁾。松井は
この批判に対して、『日本帝国史』を絶版とし、示談によつて解決
した。同じ博文館出版の『支那帝国史』も、博文館の編集に携わつ
ていた坪谷善四郎と相談の結果、やはり示談で処理されたという。
こうした博文館出版の歴史書に対する批判を受けて、坪谷善四郎
は、明治二十五年三月十日、『日本之法律』三号において「版權侵
害を誣えて、其の被告が迷惑を感じるを奇貨とし、之によりて不正
の利得を貪ぼらんと欲する者亦恕すべきにあらず」とした上で、次
のように言う⁽¹⁶⁾。

元来、歴史地理等の版權は、他書の版權とは異にして、其範圍
は稍々狭かるべきものとす、何となれば、他書にありては其の

書する所の事実と、議論と、文章と、將た全篇の構成に至るま
で、大抵著者の脳漿中より絞り出す所の学識によるものにして、
盡く之を私有すべきものなり、然れども歴史地理に至ては、其
の記する所の大部分は全く事実にして、世人の一般に共有する
所のものなり(中略)然れども其の之を記せる所の文章が、著
者自身の手になれるものなるときは、他人故なく之を取るこ
とを得ず、而して亦た其事実を排列するにも、斬新警拔の機軸
を出し、之れによりて便を読者に与ふるときは、其の意匠は著
者の私有物にして、他人は決して奪ふこと能はず、況んや其事
實の關係に就きて著者が下す所の論断は、若し前人の未た言は
ざる所ならんには、是れ著者の創意なり、此の創意は亦著者の
私有に属し、他人は其の承諾を得ずして之を借用することを得
べからざるなり、但し此の如くに説くは、版權の性質を尤とも
厳格に解釈したるものなり、故に唯々他人の記事を、自家の考
証の為に、少部分引用するに過ぎざるが如きは差支無かるべし。

坪谷によれば、「意匠」とは、諸事実の間に結ばれた創造的な関
係を指す。こうした「意匠」への注視は、まず明治十年代半ばに美
術の領域で行われた。美術の領域で「意匠」とは、美の核心とも言
うべき、形式と内容双方に実現された各部分の有機的な關係を指し
た。この「意匠」への眼差しは、明治二十年前後に文学の領域にも
取りこまれた。文学の領域においては、「意匠」とは、場面や登場

人物の設定における各部分が構成する有機的な関係を指した。こうした「意匠」をめぐる動きは田口にとっても無関係ではなかった。明治十八年八月八日から九月十二日にかけて『東京経済雑誌』上で、田口は演劇・音曲・文学・工業・風俗にまたがり、「意匠論」を展開している。田口も小説の「意匠」に大きな関心を持っていたのである。

明治十九年、東海散士は服部撫松『通俗佳人之奇遇』を自作の『佳人之奇遇』の偽版であると告発した。この訴訟において主な争点となったのが、この「意匠」の剽窃であった。この訴訟は大審院にまで上告され、『読売新聞』『東京朝日新聞』などにより広く報道された。明治二十三年五月二十九日、大審院は、『通俗佳人之奇遇』を「意匠」の剽窃を行った偽版として、服部敗訴の判決を下している。この時期の文学の領域では、小説はたとえ先行の小説を踏襲していたとしても、先行の小説とは異なる新たな「意匠」を持つていれば、先行の小説と同じように差異を持つ、つまりオリジナリティを持つと認められるが、認められなければ先行の小説の盗作として否定されたのである。^①「意匠」は小説間の差異を計る主要な物差しとして機能していた。歴史書の差異が問われる場で、「意匠」というものが問題となっていた時期、文学の領域においても、同じように「意匠」が問題となっていたのである。

ここで十九世紀の欧米において、歴史学が諸事実の有機的な因果関係の記述を重視し、小説に大きな影響を与えたこと、明治二十年

前後の日本の歴史改良論も、こうした動きに影響を受けたものであったことを思い出したい。この時期の日本では、こうした歴史改良がすすむ一方で、文学の領域においては、欧米の、歴史学から諸事実の有機的な因果関係の記述を学んだ小説に範をとりながら、新たな小説の創造が行われていた。とすれば、美術の領域に現れた、諸要素の間の有機的な関係^②「意匠」への注視が、時期を同じくして歴史と文学の領域に、書物間の差異を計る尺度として取りこまれた理由も理解出来よう。

しかし坪谷の反論に話を戻せば、歴史の領域に取りこまれた「意匠」は、文学の領域のそれとは扱いが異なる。書物の「意匠」は創造的であるがゆえに、作者の所有の対象となる。が、歴史書の場合、諸事実はもちろん、その間に発見された「意匠」もまた事実であるがゆえに、こうした理屈を厳密に適用するわけにはいかない。ここには同時期に歴史と文学の領域で注視されながらも、所有の対象とはなり得ない、歴史書の「意匠」の特殊な性格が浮かび上がる。

四 一審と訴訟

明治二十四年七月十七日の『読売新聞』紙上に、『新体支那歴史』について、次のような批評が載せられた。

先には田口氏日本開化小史の著あり、北村氏支那歴史の著ありたれども、何れも完備に近きものとは云ひ難し。此書は明石中

和氏の著述になり、勉めて新体の編纂法によれるものなれども、事実の精疎編述の順序等に関しては多少不完全の所なきにあらざ。事に文章の□□にして文学の不□化な□等、欠点を挙げれば随分少からざるにあらざれども、西洋流に支那歴史を書きたるものの少き今日にあつては、先づ／＼上出来の方と云ふて可なるべし。殊に著者が最も力を用ひたるは、教科用書に適せしめんとするにありたるが如くなれば、初学者の為に便益ある事少からざるべし（『読売新聞』明治二十四年七月十七日）

同年八月二十二日の『東京経済雑誌』（五八六号）の「新体支那歴史を読む」によれば、田口はこの批評をきっかけとして『新体支那歴史』を読み、自著からの無断借用に驚いたという。田口は『新体支那歴史』を次のように非難する。

今ま其著者明石中和氏が余の支那開化小史より文章を抄出する事此の如き多きに就いては、一応は余の承諾を求むること礼なり。然らざるも原書の名を記することは至当の手續なるべし。然るに今ま明石氏は此の如き手續を為さざるのみならず（中略）氏は必ず其記する所を以て自説なりと云ふなるべし。然らば則ち余は氏と共に此思想の権利を争はざるべからず。夫れ単に史を記するは易々たるのみ、然れども従来記する所の事實に因り、社会の大勢を観察し其原因結果を対照するに至りては、

十分なる考究を要することなり。余の支那開化小史に於ける思想を費やしたる所は実に之にあるなり。

田口は、約二十箇所にわたる剽窃について両書の対照表を作成した。『新体支那歴史』に対する田口の批判は単に誌上の批判に止まらなかつた。明石の剽窃に対して、「意匠」の権利を主張する田口は訴訟を決意する。田口に訴訟を促した背景には、頒発する歴史書の剽窃事件に対する「近時文学士の徳義地に墜つるを悼む」という啓蒙的な意識の他に、前述の教科用図書として再版された自著の売上の問題があつたと思われる。

明治二十四年十一月二十七日、一回目の公判は東京地方裁判所内麹町区裁判所出張所において開廷された。⁽¹⁸⁾ 訴訟は、田口卯吉が提出した『東京経済雑誌』の対照表をもとに行われた。川谷勝文判事は「田口卯吉の著述にて明治二十一年二月大成したる支那開化小史なるものがあるが其方は見たることありや」と問うが、明石は「見しことあり、併し其れを取りて拵へるなど、いふことは致しませぬ」と答える。

この対照表をもとに判事と検事は性急に審議を行おうとする。川谷判事は「事實は最早分明なれば、弁護人の請求するが如き取調の必要なしと思ふ」と言い、川村亨検事は「経済雑誌に載せたる点を以てするも、田口卯吉の申す如く被告に於て剽窃せしことは十分明ならん」と断言する。これに対して、明石の弁護士宮城浩蔵は「田

口卯吉の開化小史は史論体にして論理に渉るものゆへ、何れか意匠の剽窃にして何れか文章の剽窃なりと明示されるは弁解の道も立つ次第であります」と反論した。

明治二十四年十二月二十五日の午前九時半、二回目の公判が始まった。⁽¹⁹⁾ 争点となったのは、その編纂法と意匠の問題であった。明石は次のように反論を開始した。

抑も支那開化小史は政治部内の一部分に於て、即ち内政の変革を論述したり、而して新体支那歴史は内政は勿論外政……外交上の関係、開化の事実及其沿革等一々記述せざるは無く、天下の広き盲者を除くの外、開化小史と新体支那歴史と同一なりと云ふものは万々之れ無かるへし、若しありとすれば是れ恰も「ス」氏の万国史と「ギ」氏の文明史と同一なりと云ふと同く天下の僂笑を免れざるへし（中略）新体支那歴史は「フリーマン」の説に基き支那古今社会の事実及世界の大勢を洞察し、以て盛衰隆替に関する原因結果の関係を明にすべき事実を撰取し編述したるものにして、毎篇毎章其原因結果の由る処を明にして大勢の推移を舒べたる所謂大領觀察なり（中略）支那開化小史は史論体によりて社会の大勢事実の変遷を記したるは、是れ開化小史の謬見に坐したるものにして其觀察たるや一個觀察なり、其訳如何となれば開化小史は社会の大勢事情の変遷を一個々に舒述したればなり、是れ二者其觀察の最も相違したる

点なりとす、縦令意匠を剽窃したりと云ふも社会の成行の上に於て多少同一の点を生ずるも必竟一定不易の事実につき述ぶるの結果なり、又其事実とても政治の変遷を記するや必要にして之を記せされは社会の成行を記する歴史は決して作ること能はざるものなり

明石は、『支那開化小史』は、政治的な変遷の原因・結果のみを叙述するというものであるのに対して、『新体支那歴史』は、政治・外交・文化の領域にわたりそれぞれの原因・結果を一つ一つ叙述するというものであり、編纂法に明らかな違いがあると主張する。また明石は、『新体支那歴史』中の記述は、確かに『支那開化小史』中の政治的な変遷の因果関係の記述を剽窃したように見えるが、それは二つの書物が似たような先行の歴史書に基づいて作られたために生じた、必然的に避けられない「類似」だと抗弁するのである。前述のように、『新体支那歴史』は『支那開化小史』中の記述を無断で借用していた。が、明石はその事実を否定し、対照表であげられた「類似」箇所について、次のように反論した。まず『支那開化小史』を見てみよう。

(A) 人口漸く増殖し邑を成し都を成し、境域相接するに及びて、此等の氏族の内、干支を制するを以て尊ばれて王たるもの天皇氏あり。歳月を制するを以て王たるもの地皇氏あり。九州

を分ち君臣男女の制を立つるを以て王たるもの人皇氏あり。木を構へて巢を作るを教へたるを以て王たるもの有巢氏あり。民に火食を教へ結繩の政を行ふを以て王たるもの燧人氏あり。

(中略) 蓋し此渺茫たる広野に散在せる氏族の中にて、最も智力あり威力あるもの、交々立ちて王となりしなるべし。伏羲氏より以前に於ては(B)王者の国都何処なりしや今ま知るべからず、意ふに彼の二水の間を介せる沃野の内に住居せしものならん。(C)司馬遷、貨殖伝に於て書して曰く「楚越之地、地広人稀、飯稻羹魚、或火耕而水耨、果隋贏蛤、不待賈而足、地勢饒食、無饑饉之患、以故皆窳偷生、無積聚而多貧、是故江淮以南、無凍餓之人、亦無千金之家、沂泗以北、宜五穀桑麻六畜、地小人衆、數被水旱之害、民好蓄藏、故秦夏梁魯、奴農而重民、三河宛陳亦然、加以商賈、齊趙設智巧仰機利、燕代田畜而事蠶」と。茲に江淮以南と称するは、今の湖北、安徽、江蘇、諸省以南の地にして、江水の南北一帯を云ふなり。又た沂泗以北とは今の山東、河南、陝西、以北の地にして河水の南北一帯を云ふなり。実にや歴代の帝王若くは強諸侯の都城を定めたる地は概ね河水の沿岸にあり。此地方外部の事情能く人智をして発達せしむるものありと見えたり。(支那開化小史 卷之一)三一(六頁)

これに対応する『新体支那歴史』の箇所は次の通りである。

一 (C) 江河二水の間は土壤豊腴にして、中和温暖の氣候に属せるが故へに、人民の生活に於ける、素より天授の場所柄なりとす。夫レ人民の当初、此世界に現出するや、始めより食ふべく衣るべきの必要物を産し得べきものにあらず。必ずや天授の場所を捜求して、天授の品物を仰がざるを得ざるは、其レ猶ホ嬰兒の始めて生るゝや、誰レ教ゆるとなく、呱呱として母氏の乳房を捜索し、天授の食物に是レ依るが如くなるべし。

二 凡そ世界人種の起源は、西北亞細亞(崑崙山の北方を斥すに在りと云ふは、西洋博言学者の喋々して止まざる所なり。又た英人ケプテイン(氏は嘗つて久しく支那内地に遊びし人にして、最も史学に精しく、随つて往々定見の説ありと云ふ)の説に云ふ、(C)「支那の人民は、初め西北地方即ち崑崙山の北方より転移し、沙漠不毛の地を過ぎ、遂に黄河地方に來りて占住せり」と。(中略)

四 斯くて一群の人類は相集りて一社会をなし、而して其人類の漸く繁殖するに従ひ、(A) 其中にて最も智力あり威力あるもの、交々立つて王となりしは、是れ自然の勢なり。於是乎干支を制するを以て、推されて王たるものあり。天皇氏と曰ふ。歲月を制するを以て王たるものあり、地皇氏と曰ふ。人倫を制するを以て王たるものあり、人皇氏と曰ふ。作巢の法を教ゆるを以て王たるものあり、有巢氏と曰ふ、火食の術を教ゆるを以

て王たるものあり、燧人氏と曰ふ。

五 (B) 以上五帝の国都は、旧史に之を記載せずと雖へども、上文数項に論ぜし所を以て考ふれば、矢張彼ノ二水の間に介せる豊腴地内に住居せしに相違なかるべし。(『新体支那歴史』五五―五九頁)

明石によれば、『新体支那歴史』と『支那開化小史』は確かに同一の字句(A)と(B)を用いており、「類似」している。しかし『支那開化小史』は(B)の記述を、(C)の「貨殖伝」から導かれた推測としているのに対して、『新体支那歴史』は(B)の記述を、(C)という、社会学の道理から導かれた推測なのだとする。明石は(A)・(B)は、同一の字句を用い非常に「類似」しているが「双方の思想及據り所の異なる」、つまり「意匠」が異なるのだと主張するのである。

弁護人宮城浩蔵は、あくまでも「類似」であつて剽窃ではないと抗弁する明石とは異なり、剽窃であることを暗に認めながら、偽版のカテゴリをめぐり弁護を行う。宮城は、歴史の「意匠」は個人的な所有を許されない事実であるがゆえに、「意匠の剽窃は道理上有り得へからざることにして、又版權条例中にも意匠の剽窃は立法者の眼中に存在せざりしことを断言すべし」と述べる。宮城によれば「第一条は有形的の場合を罰するものならん、茲に甲の書籍を乙の書籍に於て有形的に同一の文章を以て記載したる場合、之を偽版

と云ふ」。こうした偽版の定義に従えば、字句の剽窃を即偽版と断定することは出来ないはずなのだ。偽版とはあくまでも「版」の権利に対する侵害に他ならないと主張する宮城は「文章相同じからざればこそ、言を卓見意匠等の文字に仮りて剽窃と云へるならん歟」と、「意匠」の剽窃を訴える原告側を非難するのである。

告発の妥当性をゆさぶる宮城の弁護に対して、川村検事は次のように反論する。

譬へは有名な画工が、月痕の隈を巧みに写出したる工夫を窃写するものあれば、詰り高妙なる意匠の有形に凶画に表はれたるものを剽窃したるに外ならざるべし。弁護人は無形の物は盗む能はずと云ふも変して有形に文章若くは凶画となる以上は、之を剽窃するに容易なるものなり。⁽²¹⁾

川村検事が歴史書の「意匠」の剽窃について、モデルケースとして絵画をあげて論じている点は、「意匠」を注視する眼差しが、元来どのような領域で用いられてきたものなのかを示しており興味深い。が、絵画の「意匠」を参照しながら行われるこの反論は、川村検事にとって歴史書の「意匠」と美術品の「意匠」が明確に分節化されていないことを示している。その上で川村検事は「本件は必竟意匠の剽窃と編纂の剽窃との二に帰着すべし」とした上で、対照表中の同じ字句を「御一覽あれば、自ら意匠の剽窃其中にあることを

知るに足らん」と断じる。川村によれば、現行の著作権条例第十九条⁽²²⁾の範囲で、「意匠」を支える字句の剽窃は十分罪となるはずなのである。偽版のカテゴリに「意匠」の剽窃は含まれるのか否かをめぐり、検事と弁護士は真つ向から対立するのである。

五 二審と判決

明治二十四年十二月二十八日に、麹町区裁判所は被告敗訴の判決を下した。明石や宮城らの反論にもかかわらず、『新体支那歴史』を『支那開化小史』の「意匠」の剽窃と考える川谷判事の先入観は覆らなかった。その判決文⁽²³⁾を見てみよう。

右版權侵害被告事件の公訴審理するに、被告明石孫太郎は明治廿四年五月中曾て田口卯吉が著述したる支那開化小史を骨髄とし、之れ絵画を加へ、条章字句を増減変換し、新体支那歴史と題する同一種の歴史を出版したるものと認定す。其証憑は田口卯吉代理人高梨哲四郎の告訴証拠物件として提出したる、支那開化小史新体支那歴史東京経済雑誌第五百八拾六号及公廷の弁論に徴し充分なり。之を法律に照すに其所為版權条例第十九条⁽²⁴⁾第廿七条に照し、被告を罰金五十円に処し、大倉保五郎の手に現存する新体支那歴史百五十冊を没収し被害者田口卯吉に下付す。

こうした被告の敗訴という判決には、前述の東海散士『佳人之奇遇』偽版事件の影響があつたと思われる。この裁判は大審院にまで上告され、その訴訟の過程は多くの新聞により広く報道されていた。偽版のカテゴリに抽象的な「意匠」の剽窃も含まれるという判断を示したこの事件の判決を、麹町区裁判所の判事も有力な判断材料として意識していたと思われる。小説の「意匠」をめぐるこの判決を参照するにあたっては、歴史書の「意匠」と美術品の「意匠」を分節化しない前述の思考が大きく作用したと思われる。しかし歴史書の「意匠」をめぐる訴訟は、小説の「意匠」をめぐる訴訟とは対照的な結末を迎える。

この判決に対して明石は控訴を決める。争いの場は東京地方裁判所に移った。二審は明治二十五年七月一日に開廷された。開廷までに半年近くかかった理由としては、被告側の控訴の準備期間ということもあつたであろうが、明治二十四年七月三日・四日の『読売新聞』で報じられるように、東京地方裁判所において事務の渋滞が常態化していたことを考えれば、裁判所側の事情もあつたと思われる。二審では、一審について「此被告事件はどの点が果して剽窃したるものであるか、どの点が偽版であるかと云ふことは始めから明示されぬ⁽²⁵⁾」と不満を述べる被告側の主張に鑑み、湯浅裁判長・長森藤吉郎検事は、一審が性急に判決を下した点を考慮、裁判のやり直しが行われた。明石はあらためて一審での主張を繰り返した。現在の調査では、七月六日以降の公判記録は見つけることが出来なかった。

が、二審の展開は明石側の主張を十分に考慮したものであったと思われる。

明治二十五年十二月十七日、東京地裁は次のような判決を下した。

被告人孫太郎が明治二十四年五月中印刷発売セル新体支那歴史ト題スル書籍ハ、其行文字句ノ間ニ於テ、往々田口卯吉カ版權所有ニ係ル支那開化小史ト同一又ハ類似スル所アリト雖モ、新体支那歴史ハ其全体ノ編制方法ニ於テ、全ク支那開化小史ト異ニシテ、支那開化小史ヲ骨髓トシ、条章字句ヲ増減変換シ、之レニ絵画ヲ加ヘタルモノニアラザルヲ以テ、版權条例第九条（※十九条の誤りか）ヲ通用ス可キモノニ非ズ。（中略）原判決ヲ取消シ、更ラニ判決スルコト左ノ如シ。被告人明石孫太郎ハ無罪。⁽²⁶⁾

ここにおいて明石の主張は認められ、『新体支那歴史』は編纂法の違いを理由に無罪が宣告された。しかしこの判決文中には、「意匠」に関する文言は見当たらない。歴史書の「意匠」をめぐる論争は、どのように決着したのであろうか。

結 び

明治二十五年十二月二十一日の『読売新聞』が報じるころによれば、田口は二審敗訴の後、東京控訴院に上告したと言うが、現在

の調査では、田口が実際に上告を行ったのかどうか、明らかにする資料を発見出来ていない。

田口はこの事件の顛末を改めて『東京経済雑誌』六五二号（明治二十五年十二月二十四日）と『史海』一九卷（同二十五年十二月）に掲載した。そこで田口は二審判決に対する不満を激白する。

蓋し古書の字句を抄録して以て新史を編製す何の労か之あらん。一写字生の任のみ。然れども旧史記する所の事実に拠り、社会の大勢を觀察し、其原因結果を対照するに至りては、十分精密なる考察を要す。余の勤勞は専ら此処に存す。（中略）且つ此の如き剽窃の文章にして果して我版權条例の禁制する所とならざる以上は、余は実に版權の必要を感じざるものなり。夫れ編制方法を變換するが如きは易々たるのみ。文士の最も苦心する所は文章にあるなり。（中略）余が親く高梨氏より聞く所に因れば、検事長森藤吉郎氏は「明に学士一たび真理を社会に表白する以上は、其真理は社会の共有物なり。他人之を伝唱するも妨げなし。譬へば宮城が法律上に於て新見を講演せば、他人更に之を講演するも妨げなし。是れ社会の公利なり」と論告したりと云へり。然しながら版權条例は然らざるなり。恰も専売特許条例と同一にして、一定の年限間は之を發明者の専有となすことなり。⁽²⁷⁾

原告代理人高梨哲四郎が伝える長森藤吉郎検事の発言は、この二審の法廷において、歴史書の「意匠」をめぐる論争にどのような判断が下されたのかを端的に物語る。歴史家が最も心血を注ぐ、諸事実の有機的な因果関係の記述の剽窃を憤る田口をよそに、この二審では、歴史書の「意匠」は、前述の坪谷の主張のように、それもまた歴史的事実であるがゆえに、小説の「意匠」とは異なり所有の対象とは認められなかったのである。田口はこの判断に対して、専売特許条例下の発明品の保護をあげながら反論している。田口は、あらためて、その創造性により作者の所有が認められる小説の「意匠」と歴史書の「意匠」を分節化しながら、歴史書の「意匠」は、新たに発見された科学的な原理を応用した発明品が保護されるのと同じ意味で保護されるべきだと訴えたのである。

注

- (1) 大家重夫『最新著作権関係判例集VI』（一九九〇年三月、ぎょうせい）七二―八三頁。
 (2) 吉村保『発掘 日本著作権史』（一九九三年十一月、第一書房）七二―七七頁。
 (3) 『研究紀要』二二二号（一九九二年三月、東京都立中央図書館）八二―八九頁。
 (4) 稲岡勝氏所蔵本・早稲田大学所蔵本（請求記号78―415）による。

- (5) 国立国会図書館所蔵本（請求記号37-144）による。
 (6) 国立国会図書館所蔵本（請求記号222.01-Tal57S）による。
 (7) 谷川恵一氏所蔵本による。
 (8) 吉岡亮・島田三郎『開国始末―開国始末井伊掃部頭直弼伝』——歴史・伝・小説——（前）『国語国文研究』一一二二号（二〇〇二年十一月、北海道大学国語国文学会）四四―五二頁。
 (9) 亀井秀雄『小説論——小説神髓』と近代——（一九九九年九月、岩波書店）五三―八八頁。
 (10) 『鼎軒田口卯吉全集 第二卷』（一九二七年七月、大島秀雄）二九〇―二九二頁。
 (11) 同「解説」二二―三四頁。
 (12) 『教育家銘鑑』（『教育人名辞典II 下巻』（一九八九年十一月、日本図書センター）八四九頁。
 (13) 『東京経済雑誌』六〇六号。
 (14) 「呂后本紀第九」（『新釈漢文大系 第三九卷 史記（二）』（一九七三年四月、明治書院）五八八頁。
 (15) 松井広吉『四十五年記者生活』（一九二九年、博文館）三五―三八頁。
 (16) 浅岡邦雄氏の御教示による。
 (17) 拙稿「『通俗佳人之奇遇』の失墜——戯作から「盗作」へ——」（『名古屋大学国語国文学』八〇号（一九九七年七月）一五―二八頁）参照。この事件に対する博文堂の対応については、拙稿「書肆に偽版告発をうながすもの——明治二〇年前後の博文堂の対応から見えるもの——」（『中京大学 図書館学紀要』二六号（二〇〇五年

五月) 六六一九〇頁) 参照。

(18) 「支那開化小史偽版告訴事件」(『東京經濟雜誌』六〇一号〔明治二十四年十二月五日〕)。以下掲載紙誌名を示さないものは同記事による。なお、この公判記録は、同年十一月二十九日から十二月一日にかけて『読売新聞』に掲載された。

(19) 「支那開化小史偽版告訴事件(接第六百一号)」(『東京經濟雜誌』六〇五号〔明治二十五年一月九日・十六日〕)。以下掲載紙誌名を示さないものは同記事による。

(20) 版權条例第一条は以下の通り。「第一条 凡ソ文書図画ヲ出版シテ其利益ヲ専有スルノ權ヲ版權ト云ヒ、版權所有者ノ承諾ヲ經スシテ其ノ文書図画ヲ翻刻スルヲ偽版ト云フ」。

(21) 『東京經濟雜誌』六〇六号、明治二十五年一月十六日

(22) 版權条例第十九条は以下の通り。「第十九条 版權所有者ノ承諾ヲ經スシテ版權所有ノ文書図画ヲ翻訳シ増減シ、註解附録繪図等ヲ加ヘ、若クハ其未タ完結セサル部分ヲ続成シテ出版スル者及本条例第一五条ニ違フ者ハ偽版ヲ以テ論ス。他人ノ講義又ハ演説ヲ筆記シ其許諾ヲ經スシテ出版スル者亦前項ニ同シ」。

(23) 「支那開化小史偽版告訴事件の判決」(『東京經濟雜誌』六〇七号〔明治二十五年一月二十三日〕)。

(24) 版權条例第二十七条は以下の通り。「第二十七条 偽版者及情ヲ知ルノ印刷者販売者ハ一月以上一年ノ重禁錮若クハ二十円以上三百円以下ノ罰金ニ処スノ但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論スノ偽版ニ係ル刻版及印本ハ其何人ノ手ニ在ルヲ問ハス之ヲ没収シ其既ニ販売シタルモノハ其売得金ヲ没収シテ併セテ被害者ニ下付ス」。

(25) 「版權侵害事件」(『東京經濟雜誌』六三一号〔明治二十五年七月九日〕)。

(26) 「明石孫太郎著新体支那歴史…対…田口卯吉著支那開化小史の判決に就いて」(『史海』一九卷〔明治二十五年十二月〕)。

(27) 前掲『史海』記事から。

付記

本稿は「出版と学芸ジャンルの編成と再編成——近世から近現代へ——」(第二回共同研究会(二〇〇三年六月二十二日・於国際日本文化研究センター)での口頭発表とその際にいただいた数々の御教示に基づいている。また執筆にあたっては、浅岡邦雄・稲岡勝両氏に多くの御教示をいただいた。記して厚く感謝申し上げます)。

本稿は、その後『日本出版史料』九号(二〇〇四年五月)に掲載された。再録にあたっては、標題を改め、若干の加筆を行った。

〈共同研究報告〉

岡田美知代と花袋「蒲団」について

小谷野 敦

一

田山花袋の「蒲団」が発表されて、今年でちょうど百年になる。そういうことを言えば、昨年は「坊っちゃん」や『破戒』百年だっただけで、大東和重の『文学の誕生』（講談社選書メチエ、二〇〇六）が、明治三十九年前後を、いわゆる「日本近代文学」の誕生の時期と位置づけていることを思えば、「日本近代文学は百歳になった」とも言えるだろう。

「蒲団」は、日本近代文学史に屹立する短編である。しかし、その評価は、今なお、まるで近年の新作であるかのように、定まることがない。中村光夫はこれを、日本近代文学の方向を歪めたものとして否定し、柄谷行人^{からたにこうじん}は、花袋はとるにたらないことを告白しただけであり、もっと悪いことをしているはずだと述べた（『日本近代文学の起源』一九八〇、のち講談社文芸文庫）。私は柄谷に対して、もっ

と悪いこととは何か、そんなものはありえないと駁論し、花袋はセーションを巻き起こして一躍文壇の支配者となることに成功したのだと書いた（『男の恋』の文学史）朝日選書、一九九七および、『明治の文学 田山花袋』解説、筑摩書房、二〇〇一）。ただし後段は平野謙説をくり返しただけだ。すると柄谷は、花袋はその野心を隠したのだと述べた（『必読書150』太田出版、二〇〇二）。私は追って、当時の作家が、野心を隠す必要などどこにもないと反駁した。どうやら「蒲団」は、もて男の神経を逆撫するようなところがあつららしく、ドン・ファン的人間であることを自認するヨコタ村上孝之は『色男の研究』（角川学芸出版、二〇〇七）で、「蒲団」が発表されても、岡田美知代は自分がモデルであることに気づかなかつた、とふしぎなことを書いている。どうやら、花袋の「恋情」がフィクションだと思っていたということらしいのだが、その問題はあとに譲るとして、仮に花袋が本当に美知代に恋慕していたとしても、美

知代自身がそれを当初否定したのは、自己の体面を守るためだったろうし、ヨコタ村上のように、だから花袋はコミュニケーション能力を欠いていたのだと途方もない結論へ持つていくのは、論外である。

「蒲団」は、どうやら、冷静な文学論の対象というより、個々の読み手の、人間としての本性を剥き出しにさせる性格を持つていらしい。それが、この作の名品たるゆえんである。なおついでに言えば、小林信彦の『うらなり』に対して、日本近代文学研究の泰斗とも言うべき平岡敏夫は、その詩集『明治』（思潮社、二〇〇六）で怒りを表明している。私はこの件では、平岡の側に立つ。

「蒲団」に対しては、近年、「喪男」と自称する「もてない男」たちが、密かな関心を抱いている。「横山芳子」という名は、あたかもベアトリーチェのように、もてない男を袖にする女の代名詞として使われている。柄谷やヨコタ村上が、こうした男たちに抱く感情は、ちょうど、西洋人が日本人に対して抱くそれに似ている。オランダ人たちは、日本人のような黄色人種が、自分たちからインドネシアを奪ったことを生意気だと感じており（カウスブルック『西欧の植民地喪失と日本』草思社、一九九八）、イスパニアの独裁者フランコは、第二次大戦で黄色人種をやっつけたといっているので、英国首相チャーチルを尊敬していた。それと同じだ。

「蒲団」に描かれた竹中時雄の恋慕が、事実なのか虚構なのかについては、長いこと議論が続けられてきた。その様子は、加藤秀爾

編『近代文学作品論叢書 田山花袋「蒲団」作品論集成』全三巻（天空社、一九九八、以後「集成」と略）に詳しい。昭和十四年六月の『中央公論』には、「蒲団」発表後の、花袋と美知代の両親との間に交わされた書簡が、実名を作品中の名に変えて掲載され（「集成」所収）、平野謙はこれを見て、花袋の恋慕が事実であれば三十年（一年）。しかし、多くの資料は、あまり人目につかないところにある。モデルである岡田美知代は、一冊分になるほどの小説を発表しているが、これを集めたものはないし、「田中秀夫」のモデルの永代静雄についても、『不思議の国のアリス』の翻訳もしていることなど、あまり知られていない。花袋研究学会というのもあって、学会誌を出しているものも知られておらず、館林市の田山花袋記念館が刊行している資料も、知られていない。なかんずく、二〇〇三年に同市が出した『「蒲団」をめぐる書簡集』（以下、「書簡集」と略）は、驚くべき資料集であり、花袋研究の第一人者たる小林一郎の詳細な解題がついているのだが、まるで話題にもならず、ヨコタ村上のように適當なことを書く者がいる。そこで、この資料を踏まえて、改めて岡田美知代の生涯を辿り、「蒲団」の事実と虚構について述べてみたい。

二

美知代は、明治十八年、広島県甲奴郡上下町に、富豪の岡田胖十

郎、美那夫婦の長女として生まれた。父は桜屋という老舗の油店の当主で、県会議員を務め、備後銀行を創設し、のちこれが山陽銀行となった。土地の有力者である。七つ年上の兄実麿は、同志社、慶応義塾を卒業して時事新報の北京特派員となり、明治三十三年に米国オハイオ州オベリン大学に留学、三十五年から神戸高等商業学校教授を務めていたが、その後夏目漱石の後任として第一高等学校の英語講師となり、明治大学教授も務め、ポオ、シェンキエヴィッチ、メリメなどの翻訳を出し、英語の教科書を数多く刊行している。次兄束稲は出来が悪かったようで、妹万寿代は、北大教授、庄原市長を務めた八谷正義に嫁いだ。ほかに弟の三米がいた。母の美那は尾道市の豪商の娘で、同志社に学んだ敬虔なキリスト教徒だったという。つまり素封家でもあり、知的階層に属する兄もある、恵まれた境遇の少女だったわけだ。のち夫となる永代静雄は一つ年下なので、谷崎潤一郎と同年に当たる。

美知代は、どこへ行くにも召使がついていくというお嬢様育ちで、尋常小学校高等科を卒業、神戸女学院に入学したが、当時、神戸山手通にあった女学院へ通うため、現在の神戸市兵庫区にある奥平野の兄の家に住んでいた。「蒲団」では、女学生から入門志願の手紙が来るが、美知代がこれを出したのは神戸からで、明治三十六年七月に出されている。美知代は数えて十九歳、神戸女学院の三年生だった。母が嫁に来るとき持ってきた『女学雑誌』や『小公子』を読むことから文学に関心を深めたが、当時のミッシヨン系の学校のこ

ととて、文学などは墮落への道と見なされており、美知代には窮屈だったようだ。美知代はこの年一月の『中学世界』に、岩谷敏雄の筆名で「小使」という作品を投稿して掲載されていた。

花袋田山録弥は明治四年の生まれだから、美知代との年齢差は十四である。若い時から、柳田國男、ついで国木田独歩を友人としていた。数え二十九歳で、太田玉茗の妹里さ（利佐子、りさ）二十歳と結婚、その頃三人目の子供を妻が懐妊していた。「蒲団」で、いささか不自然と思われるのは、文学者としてはさして名も知られていないように描かれている竹中時雄に、地方の少女が弟子入り志願する点だが、花袋は当時、少女趣味とも言うべきロマンティックな作風で、それ相応に文学少女に人気があったのである。中でも『ふる郷』（新声社、明治三十二年）は、若者たちに大きな影響を与えており、これはのちの伊藤左千夫の「野菊の墓」の原型のような中編である。また花袋は、西洋の小説を英訳などで数多く読んでいることでも知られていた。晩年の太った写真ばかりが流布しているが、若いころの花袋は、美男ではないが背も高く風采もそう悪くない。それから花袋と美知代との間に、小説通りの手紙のやり取りがあり、翌年、父に連れられて上京するのだが、三十六年暮れには、美知代は手編みの毛糸のシャツを花袋に送っている。花袋は、東京で女子大学に入学したいという美知代のために、日本女子大学の規則書などを調べている。

ただ、「蒲団」でも『縁』でも、娘は思いのほか美しかったと書

いてある。私が、「蒲団」に描かれた、花袋の恋慕は虚構であると論じたのは、これが事実とは思えないからである。当時の美知代の写真を見ても、若ければこそその愛らしさはあるが、妻子ある花袋が本気で迷うほどの美貌とは、とうてい言えない。

ところが、美知代が上京してほどない三十七年三月から、花袋は日露戦争に記者として従軍しており、このことは「蒲団」からはまったく省略されている。そして、この時に、花袋と美知代の間で交わされた書簡が、「書簡集」で初めて明らかにされた、少々驚くべきものである。三月二十八日付で、広島に滞在中の花袋に宛てた美知代の手紙は、候文で書かれているが、

何卒く

御身をいとはせ玉ひ面白き材料を沢山に御あつめあそばして一日も早く御帰り被下候やうそのみ御待ち申候

かなしかりきさきくとばかりもの云はず西行く君を見送りし夕

未来に栄ある君の御いでたちにてかなしき訳はなき筈なるを、

別れといえばかなしくて……せめて涙は御免し被下度候。(略)

そして、「一入師の君恋しう存候」「君は今西へ四百里春の日を此身涙にも思ひ暮らす」などとあるのを、小林は「恋文」だということ。これに花袋は感奮し、長い返事を書いている。これは封筒がなく「二日」とのみあるので四月二日と推定されているが、内容は「如

何なる縁ありて御身とわれとかくまで相触るゝ師弟の關係を生したりけむ御身は美の神の使者——われを昔のうつくしき夢のさかひに引もとさんとする美の神の使者」などとしているが、後で気がさしたのか、最後に「この手紙妻にも御見せ被下度」などと書いている。

現在でも、十九くらいの子大生が、三十代前半の教師に対して、尊敬の念を取り違えるような形で媚態めいたものを示したり、それを恋だと思ひ込んでしまったりすることはよくある。この時は、出会ってすぐ、また戦時下であるゆえに、両者とも興奮していたと見るべきだろう。だが、引き続いたの書簡のやり取りの中で、美知代はさらに驚くべきことを言い出す。花袋が、引き受けたばかりの美知代を置いていってしまうのは無責任で申し訳ないと丁寧に書いたのに対して、美知代は、候文ではない、口語文で「愈々御出征、万歳！万歳！！万々歳!!! だが拾日も海の上に居らつしやいましては、嘸かし御疲れ遊ばしたでせう先生！ どうか国家のため、我文壇のため御自愛あそばして……私はそればかりを祈つて居ます」などと始まるのだが、最後に突然、ヒステリーでも起こしたように、

泣き度いわ、——先生の御手紙！ 私口惜しいのよ 何故つて

先生、無責任だの何だのと、私存ませんよ、あんまりですわ、

水臭い！もうく／＼そんな水臭いことを仰るんなら、私死んじま

うわ 私先生を、……却つて失礼でせうけれ共師の君だと心

から身も魂もさ／＼げて事へてるのですよ、私の不束なため先生

からあんな水臭い事を言はれるのでせう けれ共私は口惜しい、
 どうか先生再びあんな事を仰つて私をお泣かせ被下いませんや
 うに……今年は上野も向島も存ませんで花を散らしましたが、
 来年はおともさせて頂戴な、まつて居ますよ、では呉れくも
 御自愛あそばせ、さよなら

というのだが、確かにこれでは「恋文」だ。ただ、美知代が逆上
 しているのは、その前の「無責任」云々の手紙というより、それよ
 り前の、「美の神の使者」と書きながら、妻にも見せるようにと書
 いた手紙のせいではあるまいか。これに対する花袋の返事は飽くま
 で冷静だが、それも、妻が見る可能性があるからだろう。そして、
 美知代のこうした手紙をみて初めて、「蒲団」の冒頭部分が理解で
 きるのだ。

……あれだけの愛情を自分に注いだのは単に愛情としてのみで、
 恋ではなかつたらうか」

(略) 妻があり、子があり、世間があり、師弟の関係があれば
 こそ敢て烈しい恋に落ちなかつたが、語り合う胸の轟、相見る
 眼の光、其底には確かに凄じい暴風が潜んで居たのである。

(略)

……あの熱烈なる一封の手紙、陰に陽に其の胸の悶を訴へて、
 丁度自然の力が此身を圧迫するかのやうに、最後の情を伝へて

来た時、其謎を此身が解いて遣らなかつた。女性のつゝましや
 かな性として、其上に猶露はに迫つて来ることが何うして出来
 やう。

というあたりである。「蒲団」は、芳子と具体的にどのようなや
 りとりがあつたかを書いていないので、通読すると、この所が時
 雄の妄想のように思ってしまうのだが、美知代が現にこのような手
 紙を出していたと知れば、この書き出しの意味ははつきりすぎる
 ほどはつきりする。「書簡集」が明らかにした事実のうち、最も重
 要なのは、これである。花袋と美知代の間には、そのような情熱的
 な何ごともなく、これは片思いだったのだという見解は、事実に関
 していえば、これで修正を余儀なくされるだろう。

さて、「蒲団」にも、芳子がほどなく竹中家を出たとあるが、実
 際にはこの頃、美知代は夫人のりさの姉浅井かくの所に転居してい
 るが、そこからりさ宛に出した葉書の文面が、妙に馴れ馴れしく、
 「奥様先日は失敬！」と始まり「思召の品を調べてお置きなさい」
 と終わっている。小林も言うとおり、美知代は、自分が花袋の恋人
 であるかのような気分に入り、ためにりさとの間に確執が生じてい
 たようだが、それも、花袋の態度からというより、美知代のこうし
 た姿勢が大きかつたのではないかと思われる。りさは美知代の五つ
 年上で、まだ二十代で、客観的には美知代よりずつと美貌である
 (花袋や妻の若いころの写真は、『日本文学アルバム 田山花袋』〔筑摩書

房、一九六八)にある。美知代が来た時も妊娠中だったが、その後も続いて何人も子をなしており、妻の妊娠中は花袋は性欲に苦しんだとされている。

美知代は津田英学塾の試験を受けたが通らず、予科に通い始めている。またその六月二十二日付と推定されている美知代の手紙に、森田という青年が「美知代といふ女は我儘の口惜しかりの負け惜みの仕方もなき女殊にはでな氣にて文学者にハ適せず政治家の妻君より外用ひ道のなき女だと申され候由」とあるのは、その性格をよく言い当てていると言えよう。さらに美知代は「私も御手紙さし上度存候も余り度々にて戦争の処へのんきらしく御らんあそばし候がうるさくてハとわざと差ひかえ居候らひしが先日御手紙にてハ左様にてもなきやう故この後ハ度々さし上べく候もし御いそがしき時ハかくしの中にまろめおきて淋しく御用のなき折りとり出して御覧被下度それにて私も満足致し候」と花袋に書いている。意味としては、忙しくて手紙が読めないようなら、ということだが、「淋しく」などがあるから、淋しくなったら私の手紙を読んで慰めにして頂戴ネ、という感じで、やはり恋文めいている。この後美知代は、予科が夏休みになったため上下町に帰省しているが、そこから出した七月二十八日付の手紙は、花袋の帰国が近いのを知って「もはや御拝眉の日も近く相成りうれしく嬉れしくうれしく候ふ昨年今日此頃ハ失礼なる文奉りて、御返事を今日か明日かとまち侘びつゝもしお怒り遊ばさば如何に等案し煩ひ候らひしが、今年の今日ハ斯く敬愛

なる師の君よと仰ぎて文奉り得ること、思へばうれしう有難う候今宵はわけて種々なる追懐に眼も冴えて眠られず師の君恋しう懐しと思ふ情ハ格も潮の海門に押よせ候が如く激しき勢もて胸をつき、まこと堪え難く孤燈の下に此文認めて御膝下にさげ候ふ」などである。

若い娘からこんな手紙を立て続けに貰ったら、たいいの男は意馬心猿となるだろう。そして逆にいえば、のちに「蒲団」が出たとき美知代は、花袋にこうした手紙を握られているだけに、こうした手紙のことまで書かれては大変だという思いにもなり、花袋と友好な関係が続けることに腐心したのもあろうと思われる。

花袋が帰国して東京に着いたのは九月十九日で、美知代の上京の日付は不明だが、上京した美知代はやはり浅井方に寄宿しており、十二月二十四日付で花袋が手紙を出しており、「私は貴嬢をすくれた詩人に為たいと思つて居りますばかり、父君にもこの事はよく御含みを願つた筈です。(略)ですから、私が貴嬢をあしかれと思つたことなどは少しもないので、もし其女(学生)とかがそんな風なことを噂して、貴嬢を私が内々困つて居るなど、言つたのが知らぬ、それは、ほんの噂、齒牙にかけるほどのことも無いのですから安心してください。(略)それから、貴嬢に一つ御忠告し度いのは、あまり深くも性質を知らない友人に、くたらぬことを言はぬやうに為さい。(略)私はかう見えても文壇の上では清い健全な考を抱いて居るので、此頃よく耳にするやうな手合とは訳が違ふつもりです」

などとある。美知代が、花袋との関係を割に軽薄に友人に話し、愛人だといった噂を聞かされて花袋に訴えて来、自分のために先生が迷惑をこうむるのは心苦しいか何か言って、花袋に甘えてみせたの
だろう。

和田芳恵が、昭和三十二年、『婦人朝日』連載の「名作のモデルを訪ねて」で、妹の家に住んでいた美知代を訪ねて聞いた話では、この当時、やはり投書家の文学青年の、春潮松本修二という者から呼び出され、九段靖国神社の大村益次郎の銅像のところであつたが、春潮がもしもして何も言わず、日が暮れてきたので美知代は断つて帰ってしまった、失恋した春潮は帰郷した、とある（『集成』所収、和田『おもかげの人々——名作のモデルを訪ねて』〔講談社、一九五八／光風社書店、一九七六〕がある）。

三

翌明治三十八年に、美知代が永代静雄と知り合う。永代は明治十九年二月、兵庫県美囊郡前田村（現吉川町）に、天津神社神官長谷川順の三男として生まれた。吉川町は神戸の北隣である。明治三十一年、父の死に伴い、父の生家東林寺の住職だった永代義範の養子になった。伯父永代義融の養子となっていた長兄大円（齋）とともに大日本進学会を結成し、雑誌「千代の誉」を刊行していたという。ほかに次兄庸雄は上岡家の養子となり、母と妹のぶえは近藤家に籍を置いた。三十五年に牧師になるために神戸に出て神戸教会に属し、

関西学院神学部に入ったが、翌三十六年、京都の同志社神学部に転学したという（静雄については、田山花袋記念館の「永代静雄展」（一九九二）のパンフレットを参照した。友人露律中山三郎の「花袋氏の作『蒲団』に現はれたる事実」（『新声』明治四十年十月、「集成』所収）によると、永代は優れた伝道家で、村松吉太郎が見込んで同志社へ送り込んだのだという。神官の家に生まれ、寺の養子となりながらキリスト教の道を選んだわけだが、美知代も神戸教会に属していたのが二人の接点だった。

だが、二人が正確にどのよう知り合ったのかは、中山も詳しくは知らないと書いている。中山によれば、明治三十六年十月に中山が永代に会って、美知代が花袋の弟子になった話をしたところ、永代は「そうかい、あれがそうだったかい」と言ったが、翌三十七年夏、神戸に帰省中の永代に会いに行った時、永代から広島へ帰省中の美知代宛の手紙の投函を託されて驚いたという。そしてその同じ夏、関西学院で開かれたキリスト教の夏季学校で二人は出会い、「密シークレットの如き恋を二人は囁いたのであつた」とある。和田の取材によれば中山は十四歳の頃から美知代と知り合いで、この時二人を引き合わせたというから、手紙のやり取りのみあって、実際に会ったことはなかったのだろう。しかしこの時の語らいは「ラブ」ではなく、ラブになったのはその後の手紙のやり取りの中であつたと、和田の取材に答えて美知代は言っている。

だとすると、美知代から花袋宛の手紙の恋人気取りの調子が、み

ごとにこの三十七年夏以降、消えているのと符節を合わせている。これ以後美知代は病気がちになり、三十八年五月には上下町へ帰っている。花袋は六月七日、美知代に宛てた手紙に、ロマンティックな長い詩を載せ、「新詩一篇入御覧候」としている。中途から引くと、

さひしさのわが胸

あゝさひしさのわか胸

白き其影今行くよ

天馬の手綱つめのおと

もえるる血汐も濁る黄や

大空夢も地の闇

ひとり住み、ひとり悶へ、ひとり狂ひ

——みだれ御魂の消えにし今、

といった具合で、小林は、花袋が「欲情」をぶつけており、美知代はどう思っただろうか、としているが、事態は明白で、恋人のできた美知代がかつて見せたような媚態を見せなくなり、梯子を外された形になった花袋は、改めて美知代に恋慕の情を抱き始めたので、よくあることだ。だが、美知代はこれに答えない。二十日の絵葉書では「岡田刈萱女史」と宛名を書いている。説経節「かるかや」は、

加藤繁氏という武士が、妾を迎え、しかし正妻と妾の間の憎みあいを知って出家し刈萱道心と名乗る話だから、花袋は妻と美知代をこれになぞらえて、遠回しに恋情を伝えたのかもしれない。ただ、後で永代も美知代宛の葉書に「かるかや」と書いている。

花袋は七月六日の手紙でも、より長い詩を書いており、何とか美知代との間の恋愛遊戯を復活させようとしているようだ。その間、六月に、花袋が江見水蔭に苦悩を打ち明けたことが、水蔭の『自己中心明治文壇史』（博文社、昭和二年）に書いてある。伊香保での文学会に出て、汽車で帰る途次であろう、「車中で花袋が自分に向つて——人生の寂寞——に就て煩悶に耐えぬ。何んとかして救はれる道はあるまいか、と訴へた。／自分は、頭脳が悪いので、それは何か趣味に隠れたら好いだらう。我々の遺跡探検に加入し給へ、なんど云つて慰めたが、豈に凶らんや此時代には、例の『蒲団』事件の最中なので、彼の訴へたのと、自分の慰めたのとは、全然喰ひ違つてゐたのを後で知つて『何んだ、馬鹿にしてるやアがる。』然う口走つて苦笑したのであつた」とある。

こう見てくると、「蒲団」は虚構であるという私の意見は、やはり修正しなければなるまい。ただ、始めに猛烈に働きかけたのは美知代で、それがストンと永代のほうへ行つてしまったために心理作用で花袋が失恋したような気になつたという留保つきで、である。そして九月に美知代は上京してくるが、この時、神戸の兄宅を発つたのが十日、東京へ着いたのが十四日であることが分かつてしまい、

京都で永代に会い、一夜を過ごしたことがばれてしまう。美知代の
 上京は、日比谷焼打事件の五日後である。この後は、ほぼ「蒲団」
 の記述通りで、文学を志す永代は十月に上京して来、花袋に会う。
 この時花袋は、美知代の父宛の手紙で、永代との間に体の関係はな
 いと主張したが、父親はそれを疑っている。そして翌三十九年一月
 十六日に父親が上京して相談し、「蒲団」では芳子が「私は墮落女
 学生です」という、京都で肉体関係があったことを明かす手紙を花
 袋に渡すことになっている。遙か後年の昭和三十三年に美知代が
 『婦人朝日』に書いた「花袋の『蒲団』と私」(『日本文学研究資料叢
 書 自然主義文学』〔有精堂、一九七五〕所収)では、そのような文言
 のない手紙が示されているが、内容としては、やはり永代と同棲し
 たい、未まで添い遂げたい、退京させてほしいというものだった。
 しかし、その後の花袋が、永代を、何度か「処女の節操せうさうを破った」
 として責めていることからすれば、この手紙が現物そのままである
 かどうかは別として、何らかの形で、肉体関係があったことが告白
 されたと見るべきだろう。

かくして美知代が父親に伴われて郷里へ帰ったのは一月二十日
 であった。これが、「蒲団」の結末である。小林が詳細に書いている
 が、「蒲団」の結末近く、駅での芳子の出発を陰で見送る田中の姿
 に、時雄が気づかなかつたという、一瞬だけ視点が時雄を離れる場
 面があるが、これも事実であった。永代がいることに気づいたのは
 父親で、それを後で花袋宛の手紙で知らせてきたことが、花袋の手

紙で分かる。

その三月、花袋は『文章世界』を創刊するが、これがのち、自然
 主義の牙城として、文壇に君臨する花袋の本拠地となるのである。
 その創刊号に、美知代は「葉女史」の名で創作「戦死長屋」を載せ
 ている。以後も美知代はいくつかの創作を発表しているため、年代
 順に載せておく。

明治三十九年三月「戦死長屋」葉女史 『文章世界』

四月「雪」 『新声』

六月「長女」 『新声』

「一本榎」 『文章世界』

九月「下賀茂の森」 『新声』

十月「森の黄昏」(「下賀茂の森」と同じ) 『文藝倶楽部』

十一月「月下の森」 『新声』

十二月「姑ごころ」 『文藝倶楽部』

「里居」 『新潮』

四〇年一月「家庭」 『新声』

三月「籠灯籠」 『新声』

四月「わか草 処女の日記より」 『新声』

五月「御おとづれ」 『新声』

七月「亀さ」(岡田美知代) 『新声』

十月「土手三番町」(岡田美知代子) 『新声』

『蒲団』について（横山よし子） 『新声』

四一年四月「老嬢」 『文章世界』

四三年九月「ある女の手紙」（以後、永代美知代） 『スバル』

十月「里子」 『スバル』

十二月「一銭銅貨」 『中央公論』

「岡澤の家」 『ホトトギス』

四四年四月「清のぐるり」 『ホトトギス』

大正二年九月「冷い顔」 『婦人評論』

三年一月「郷里のをんな」 『婦人評論』

六月「蛙鳴く声」 『新小説』

四年九月「蒲団」 『縁』 及び私 『新潮』

十二月「秋立つ頃」 『希望』

『新声』は、「青年機関」と副題があり、明治二十九年に隆文館から刊行され、明治四十三年まで続いた、文学青年の投稿雑誌である。美知代のもものは全体として、日常生活に取材したもの、老嬢の悲しみや儂い恋の物語程度のものだが（なお「書簡集」解説で「処女の日記より」が「御おとづれ」に付いているが誤り）、「御おとづれ」は、花袋からの手紙に対する感懐を描いている。

さて、永代は早稲田入学を志し、この年、早稲田高等予科文科に進学している。当時、正式な大学に入るには、高等学校を出るか、予科に学ぶのが一般的だった。その一方、『新声』に「紫津夫」の

名で新体詩などを投稿し、五月には『新潮』に創作を発表している。

『新潮』はその後も延々と続いて今でも文藝雑誌の最老舗だが、当時はこうした無名の新人の作でも載せていた。その間、広島的美知代との間には、激しい恋の書簡がやり取りされる。だが永代は苦学のためか体をこわし、十月、早稲田を除籍となっている。花袋は、美知代やその両親にしばしば書簡を送り、十月には山陰旅行に出かけて、上下町の岡田家に二日滞在している。その後の十二月十六日の美知代から花袋宛の手紙は、永代との間を裂かれたことを悲しむもので、「果して恋愛が這麼風なものとすれば、ねえ先生、妾本當に悲しう御座います。永代の目的の定まらぬのハ、要するに生活の痛さに堪え切れぬからなので、妾にハよく解つて居ます、女々しいの薄志弱行のと口惜しがつても見ますけれど、考へて見れば濟まないのは、けつく私です。妾のために永代も散々苦しんで、あげくの果ハ如何でせう、一月廿日の彼の儂い別れです」云々と泣き言を並べている。これでは、花袋はひたすら永代に嫉妬の炎を燃やすばかりで、美知代は自分が花袋の感情を弄ぶ結果になっていることに気づいていないようだ。そして最後に「いづれ其内妾も死ぬ迄にハ、拙いながら妾等二人を種の小説でも書きまして、是非先生に見て頂くつもりで御座います」とあるが、すぐに、小栗風葉の『青春』に倣い、永代とのことを描いた「青春譜」という小説を花袋に送ったらしい。明けて明治四十年の花袋の書簡で、見たけれどもこれを書くにははまだ客観性が持っていない、時期尚早ではないかという意味

のことが書かれている。

美知代は相変わらず、永代と添い遂げたい、永代以外の人には嫁ぐつもりはないといった手紙を書き、花袋は四月三十日付の手紙で、長々と永代を攻撃しているが、その筆頭に来るのが「処女の節操を破りたること」である。ところが、五月六日のものと推定される、

美知代の母・ミナ宛の書簡（『中央公論』掲載）では、「既に霊肉共に其人に許し候上は」「今のやうに山中に空想的不健全な生活を送らしむるよりは」「小生の結論は、兎に角二人をして東京に新生活を始めしめ」るのがよいだろうと書き送っている。小林が、このすぐ後の五月二日の手紙と推定しているものでは、しかし、やはり結婚には反対だと言っている。だが、これは封筒もなく、「小生の意見は前便にて」とあるのを、三十日の書簡と考へてのことで、内容から推すに、もっと早い時期のものではないかと思う。一方静雄は、群馬で新聞記者をして糊口を凌いでいた。

こうして、花袋が、永代と美知代の結婚を許してもいいと思ひ始めた頃、花袋の「少女病」が発表されている。そして七月末に、『新小説』の山岸荷葉から小説を依頼されて、十日ほどで書いたのが「蒲団」なのである。『新小説』は、反自然主義を掲げる後藤宙外が主宰であり、その前年三月、『文章世界』創刊と同時に、花袋の旧作「魔国」を無断掲載して抗議を受けている。ただ、自然派と反自然派の角逐というのは、よく分らないことが多く、この依頼もやや不思議なところがある。そこで花袋は「かくして置いたもの、

壅蔽して置いたもの、それと打明けては自己の精神も破壊されるかと思はれるやうなもの、さういふものをも開いて出して見やうと思つた」（私のアンナ・マアル）と『東京の三十年』（大正六年）で回想している。

私のアンナ・マアルは其時故郷の山の中に帰つてゐた。私はそれをその前の年の秋に、旅行の途次訪問した。私の心の中の女の影は愈濃かになつた。書かうか。書けばその恋をすつかり破つて棄てることを覚悟しなければならぬ。書くまいか、そしてその恋の時機の来るのを待たうか。

長い間この二途に迷つてゐたが、『新小説』への約束の期限と、何かしつかりしたものを書かなくてはならなくなつたハメと、新しい機運の動いて来てゐるのが、私にそれを書かせるべく決心させた。

この回想もまた、事実なのか、それとも虚構をさらに虚構で固めたものなのか問題になつてきたが、ここまで辿つてくれば、当初、美知代を郷里へ帰した花袋が、美知代が永代を諦め、また前のような恋文めいた手紙を書いてくれることを期待、妄想しており、それがありえないと分かつた時点で、美知代と永代の結婚を認め、かつまた自然主義の頭目の地位を占めることになるとの「賭け」の意味も込めた作を書くことにしたのである。つまり、「書けば恋を破つ

て棄てる」というより、既に望みがないと分かつて、執筆に踏み切ったのだと言える。

当初、「恋と恋」という題を考えていたが、小杉天外にその題のものがあるので考えあぐねていると、博文館へ宙外から電話があった題を訊かれたので、「蒲団」と答えたという。「蒲団」の載った『新小説』九月号が出たのは九月一日である。

四

美知代は、「蒲団」と自分との関係について、三回活字にしている。最初が、「蒲団」発表直後の『新潮』十月号に「蒲団のヒロイン 横山よし子」名義で書いた『蒲団』についてである。これは「新小説を開いて目録を見ました時の嬉れしさ！ 否、自分の事を書かれてるなどと、如何して神ならぬ身の夢更知らう筈がありません。……併し一頁二頁三頁ならずして、私は、ハッ、としました。段々読み行くに従つて、愈々酷くなつて来ますので、私とても浦若い女の身です。恥かしい味気無い思ひは胸一杯に込上げて嫌な嫌な嫌な気持ちに泣きました。其上、久しく姉妹とも許し合つた親しい親しい友達からだしぬけに、あなたのやうな女を姉妹としたかと思ふと口惜しい、もうもう大嫌ひ、大嫌ひですと云つた調子で絶交状を寄せられては、心から情けなく」と続き、「ですけれ共考へて見ますと、藝術ですもの、仕方がないではありませんか」といったところへ落ち着く。「中には、時雄が芳子に対する情緒、それを直ぐ

事実と見なし、時雄は即ち作者自身で、『蒲団』は実に花袋先生の大胆なる表白である等と云つて居る人もあります相で、馬鹿々々しい、そんな事があつて堪るものですか」と、これが虚構だと主張している。もつとも、友達の絶交というのは、永代と肉体関係を持ったことによるものだろう。むしろ、「蒲団」の「あの男に身を任せ居た位なら、何も其の処女の節操みさまを尊ぶには当らなかつた。自分も大胆に手を出して、性慾の満足を買へば好かつた」というあたりが、美知代の両親からすれば衝撃的だろう。

「私のアンナ・マアル」には、「やがて山の中のアンナ・マアルから悲しむやうな泣きたいやうな腹立たしいやうな手紙が来た」とある。ただこれは「書簡集」には入っていないが、その代わり、「蒲団」を読んだ時の衝撃を小説にした「小夜子」が花袋宛に送られている。「あゝ最う先生！」と悲痛な調子で、小夜子ハ堪らず読みかゝつた雑誌の上に打伏した」と始まつており、「ふとん」を読み進めて「アラまあ如何しやう私、書かれちまつたわ」と、思はず斯う口に出して、急いで四囲を見返つたが幸聞く人も無かつたのでわななく胸にしつかと雑誌を抱えたまゝ」云々とあるが、その後、「けれ共果して、小夜子の関係した男、かりに田中と呼ばれて居る青年は、作者の描いたやうな、彼様なイヤミ沢山な男であらうか、小夜子はこれが不平で、自分のよし子を詩化し過ぎて、さもく立派な美しい女のかいであるのに引きかへ、これは又余り酷いと思はざるを得なかつた」としているのは、大正四年の『蒲団』

『縁』及び私』で初めて公にされる不満で、その後も美知代が不満とし続けたところである。

「蒲団」には、いくつかの手紙が引用されている。だが、赤裸々に書いてあるように見えながら、出征中の花袋に美知代が出した手紙のことは書かれていない。世間的には、今日に至るまで、美知代が花袋に出した手紙のことは、満天下に二人しか知らない秘事であった可能性も十分にあるのだ。そこから、花袋と美知代に実事があったと想像する人もあるかもしれないが、永代が「処女の節操を破った」と花袋が非難していることを見れば、可能性は低い。また、美知代宛の手紙に花袋が書いた詩が恋慕の情を表明していることくらい美知代も気づいていたはずだから、虚構だと美知代が書いているのは、世間体のためでしかない。美知代から花袋宛の恋文を省いたことで、花袋は美知代に貸しを作ったとも言える。その一方、美知代自身が書いた「青春譜」や「小夜子」は、花袋が握りつぶしている。だが後者には、師に対して尊敬と信頼の念を抱いていたが、「それは実際普通以上——恋であつたかも知れぬ。いや確かに崇拜の極、彼女は満身の愛を捧げた」とあつて、これを花袋が発表してしまえば、「蒲団」の、時雄の滑稽な片思いという側面は削ぎ落とされるはずだった。だが花袋はあえてそれをせず、「蒲団」は、目論見どおり評判になった。

毀誉褒貶は言うまでもなく、正宗白鳥によれば、当時在米の田村松魚から聞いた話として、「蒲団」を読んだ友人が「二階から笑ひ

ころげて下りて来て、『オイ見ろ、田山がこんな馬鹿なことを書いてる』と云つて、雑誌を突きつけた」という（『自然主義盛衰史』）。

花袋への個人攻撃も激しく、雑誌の六号活字で「色情狂」など書かれている。だが評判にはなつたし、花袋には『文章世界』があるから、いつでも、「蒲団」続編のような形で、美知代からの恋文を披露することもできる。むしろそれは、二人の間の暗黙の了解だから、花袋は謝罪の手紙を書く。「蒲団」は、すべてを曝け出しているように見せかけて、実は美知代の側からのアプローチの事実を隠蔽していたのである。花袋が隠していたことは、確かであつた。だがそれは、美知代との実事でも、野心でもなく、美知代からの恋文めいた手紙だつたのだ。美知代は同じ『新声』十月号には「岡田美知代子」の署名で、浅井家に寄宿していた頃の思い出を書いているが、同誌への投稿はこれが最後になつたようである。

兄の実鷹がこの秋から一高に英語講師として赴任した。三月で夏目漱石が辞職して朝日新聞社員となつた後任とされる。漱石は「蒲団」発表当時、初の新聞小説「虞美人草」を連載中だつた。さて花袋はその九月に、愛人となる芸妓飯田代子よねに出会っている。それから、美知代の再上京へ向けての動きが始まるが、この間、美知代が永代と引き裂かれた苦悩から自殺を考えたこともあつたようだ。花袋は花袋で、「蒲団」を読んだ両親が悪くつていないか、気にしている。美知代は大正四年の文章で「蒲団」の副主人公だと云はれたために、永代はいろんな社会上の迫害を被つて、折角出来かゝ

つた職業など幾度崩されたか知れませんが、昭和三十三年のものではさらに詳しく、この時代のこととして、「就中残念だったのは、当時東京読売新聞の文藝主任、正宗白鳥氏から同じ理由で断られた、それでした」と書いています。しかし白鳥はそのことは書いていない。花袋は『縁』で、太田玉茗をモデルとした友人との会話で、

『君がああ作を公にした時、其男（永代）に対する観察が違って居るとか、あんな男ぢやないとか、随分いろいろな批評が出たが、実際何んな男なんだえ？ 有望な男かえ？』

『さうさねえ、僕にもよくは解らんがねえ。しかし出来の悪い男ぢやないんだらう。あの作には無論其男が十分に書いて居ない』

としている。あるいは、美知代と性関係があったと知れる前の美知代の両親宛の手紙では、花袋は随分永代の才能を保証している。花袋としては、嫉妬がからみつつも、できるだけのことをしたという印象を受けるのだが、『縁』を読んでなお、美知代は恨み言を言っている。

翌年明治四十一年三月、数え二十八歳の森田草平が、二十二歳の平塚明子と塩原で情死未遂事件を起こしている。草平はこれをもとに、師の漱石の推薦で「煤煙」を新聞に連載したが、今日ではあま

り読まれていない。近年、「蒲団」がベストセラーになったとか、この作のために、文学少女は墮落女学生だと思われるようになったとかいう文章を見かけるが、「蒲団」は『花袋集』に収録されただけで、当時一般人はそんな文壇小説は読まないし、煤煙事件のほうがよく世間に与えた衝撃は大きかっただろう。

四月、美知代は再上京し、兄の家に住んで、永代と行き来していた。四月には『文章世界』に美知代の「老嬢」が投稿作品として載っている。四月から七月まで、花袋は「生」を『読売新聞』に連載したが、六月には、親友国木田独歩の死という事件が起きている。

事件というのは、独歩がその前に出した短編集『運命』が、「蒲団」と並んで自然主義の傑作とされ、独歩の死はあたかも自然主義全盛の二つ目の機縁となったからである。二年後に花袋はこの時期のことを『縁』に描いている。八月、美知代が妊娠していることが分かり、九月には永代と二人で失踪し、以前永代が静養していた九十九里に隠れ住んだ。永代はこの年、実業之日本社の『少女の友』の一月号から、「須磨子」の名で『不思議の国のアリス』の翻訳と翻案を翌年三月まで十二回にわたって連載している。最初は、「黄金の鍵」、「トランプ国の女王」、「海の学校」で、これは翻訳だが、それ以降の「森の魔」、「底無沼」、「幸福の杖」などは、アリスをキャラクターとした永代の創作である。その後は「アリス物語」の表題の下に、「嫉妬の神」、「真珠の宮殿」、「大悪龍王」、「貞操の宝」、「宝の島のお正月」、「海の遊び」、「最後の勝利」と続く。実業之日本社

専属の挿絵画家でまだ無名の川端龍子が挿画を付けていた（楠本君恵『翻訳の国の「アリス」』（未知谷、二〇〇一）、また「トランプ国の女王」「嫉妬の神」は、『明治翻訳文学全集 サツカレー／キャロル集』（大空社、一九九九）に複製が載っている）。永代はその後も四十四年まで、この雑誌に児童読物を載せている。名義は、永代新川のほか、最後は本名で「幸福の秘密」がある（今田絵里香「少女雑誌にみる近代少女像の変遷」『北大大学院教育学研究科紀要』二〇〇〇）。文学志望者が児童読物で糊口を凌ぐのは、昔も今もよくあることだ。

花袋は美知代と永代を結婚させるほかないと考え、家柄が違うからと反対する美知代の父を、自分が責任をとるからと言って説得し、美知代を花袋の養女にして嫁がせることにして、中山三郎が彼らの居場所を教え、年末に二人は帰ってきた。永代は東京毎夕新聞に入社し、三郎と三人で同居を始めたのが大晦日のことで、年が明けた四十二年一月に二人は結婚した。ただし入籍はずつと後である。美知代は数えて二十五になっていたが、結婚挨拶状では「田山みちよ」となっている。三月に女兒を出産、花袋が千鶴子と名づけた。この年永代は『新島義言行録』を著して内外出版協会から刊行している。新島の伝と論である。同志社の関係だろう。

『縁』でも花袋は、「敏子」として登場する美知代に、未練があるようなことを「清」の感情として点綴しているが、「蒲団」の時とはだいぶ様子が違った書きぶりである。既に『生』『妻』などの長編は、藤村の『春』『家』などと同様に、事実を少し変えて淡々と

書くだけの退屈な小説になっており、これらの作が後年、自然主義といえど退屈なものだと思わせる結果をもたらした。五月に、水野仙子こと服部貞子ていこが花袋に入門した。明治二十一年の生れなので、美知代の三つ下だが、美知代とはさほど親しくならなかったようだ。だが永代との夫婦生活はうまく行かず、十一月には破局を迎え、美知代は仙子と同居して千鶴子を育てるようになる。破綻の経緯は

『縁』にも書いてあるが、美知代が家事がまるで駄目で、一緒に暮らしてすぐ赤ん坊ができたこと、二人の未熟さなどだろうが、伊藤整『日本文壇史』には、永代が酒に溺れていたと書かれている。だが美知代は、翌四十三年三月から八月まで花袋が『毎日電報』に連載した「縁」に描かれた自分たちの姿を見て、怒りを爆発させ、事実と違うと主張している。だが、和田の取材では、静雄は「深酒をおおるようになり、酒乱の狂態を演じ」たとある。美知代は「ラブのときは、猫をかぶっているし……」と言っている。『縁』によれば、永代（馬橋）と別れるという決意の手紙を花袋（清）によこしたのは十一月六日になっている。永代はそれから関西へ戻ったが、四十三年三月、花袋の義兄の太田玉茗が千鶴子を自分の籍に入れ、寺へ里子に出した。

この頃、『縁』の連載が始まるが、美知代は碌ろくに読まなかったと言っている。四月に永代が、仙子と暮らしている美知代の許に突然現れたが、「永代静雄展」の年譜によれば、「美知代、静雄から逃れるために、仙子と福島に身を隠す」とある。だが、このことは

『縁』には書いていない。その後、東京へ戻って、仙子と初台にいるところへ再び永代が現れ、二人の繕りが戻り、永代は富山新報の記者となって、二人で富山へ行った。

そしてその九月、美知代は初めて、花袋に反逆する。『昴』に掲載された「ある女の手紙」である。これは、整子とされている仙子と同居しているところへ、佐伯とされている永代が突然やってきて、やり直してくれないかと迫る場面から始まる。そして、「K先生」とされている花袋の最近の放蕩ぶりは酷い、と書き始める。

私が初めてK家へあがつた時分のK先生は、それはそれは藝術の権化かとも思はれる程純潔な方でしたが、此頃の醜態は如何でせう。藝者狂ひにうつつも抜けたか、毎日のやうに待合入りばかりして、……

そして、

……先生が恨めしくつて堪らない。恋の保護者だと自分からお誓ひなさるから、此方は一しよ懸命其つもりで、あらゆる秘密を打ち明けて手頼つて居ると、如何です、突然にお売りなすつたぢやありませんか。あの有名な先生の出世作△△で何も彼もお解りでせうから、私は面倒臭い事を今更何も書きませんけれど、あの作が出た時だつて、私はまだ先生を信じ切つて、恋

の保護者と頼んで居たんです。其後先生からのお手紙に、「自分が△△に書いた自分の心持は本当の事だ。」と書いて、「只その心持に支配されて了ふ自分か、自分でないかは貴嬢の判断にまかす。」と書き添へてあるのを見た時、私は無論先生を世にも尊い藝術家として仰ぎ見るばかりでしたが、……

とある。「心持は本当の事だ」と書いた手紙は見つかっていない。この作品については、光石亜由美「自然主義の女——永与美知代「ある女の手紙」をめぐって——」（『名古屋近代文学研究』一九九九）という論文があり、水野仙子の回想では、当時、花袋への復讐と見られていた、とある（ただしこの論文は、全体において永代が永与になつて居るほか、『蒲団』について）の掲載誌を『太陽』とする等、やや不備である）。

花袋の許を離れた美知代は、それから半年ほど、『スバル』、『中央公論』、『ホトトギス』に短編を発表しており、この時期が作家としての全盛期だったろう。翌四十四年三月には長男太刀男が生まれているが、この年、千鶴子が脳膜炎で夭逝している。それから永代の福岡、大分への転勤に従った後、四十五年（大正元年）上京している。なお和田の取材に対して、当時美知代は「新しい女」の一人と思われていたので、四十四年九月の、平塚らいてうの『青鞥』創刊に当たつても入会の勧誘状と執筆依頼が来たが断つたと言っている。

大正元年、永代は『アリス物語』を刊行しているが、これは以前

の翻訳・創作を纏めたものだろう。二年、永代はルネ・バザンの『都会病』の翻訳を出し、以後も探偵小説などを何点か刊行している。以下、永代の刊行書目である。

大正二年 逗子物語（不如婦小説叢書） 紅葉堂

五年 黒姫物語 少女小説 三芳屋書店

女皇クレオパトラ 奈翁

四年 独逸工業の発達（新知識叢書） 実業之世界社

五年 大ナポレオンの妻 実業之日本社

七年 透視液 探偵小説 忠文堂書店

天体旅行 自学奨励会（家庭自学文庫）

八年 外相の奇病 神秘探偵 実業之日本社

大正二年に永代は東京毎夕新聞社に再度入社し、七年に社会部長、八年に編集局長となるが十一月に退社、新聞研究所を設立している。この頃、広津和郎、三上於菟吉らが同社の記者をしており、広津の「神経病時代」の冒頭部にも、「社会部長の斎藤」として永代が登場している。だが永代の酒癖は治らず、大正十五年、美知代は永代と別れ、太刀男を連れて渡米したが、これはカリフォルニアにいとこがいて、その夫が成功者だったため頼って行ったのだと、和田の取材にある。のち太刀男は結核のため单身帰国し永代に引き取られるが、昭和七年、数え二十二歳で死去している。美知代は邦字新聞の

記者をしたり教師をしたりしていたが、米国で花田小太郎と再婚した。ただし、永代の籍に入ったのは大正六年、除籍したのは昭和九年である。

永代静雄は昭和二年、大河内ひでと結婚、八ころから伝書鳩を飼い始め、通信手段としての伝書鳩の普及運動を興して、十年、雑誌「普鳩」を創刊、八年続いた。美知代は、昭和十六年、日米戦争勃発のため帰国し、庄原の妹の許に住んだ。十九年、戦争の最中、静雄は数え五十九歳で死去、花田もこの年死んだ。

〈共同研究報告〉

和辻哲郎の哲学観、生命観、芸術観

——『ニーチェ研究』をめぐる——

鈴木貞美

はじめに

和辻哲郎（一八八九—一九六〇）の『ニーチェ研究』（一九一三）は、彼の哲学者としての出発点をなす書物であり、同時に、日本におけるはじめてのまとまったフリードリッヒ・ウィルヘルム・ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900）の研究書として知られている。本稿第一章「『ニーチェ研究』の立場、方法、意図」では、それらを分析し、和辻哲郎のその後の歩みにはたした意味をさぐりながら、「宇宙生命」を原理とする初期和辻哲郎の哲学観が大正生命主義の典型であることを明らかにする。第二章「『ニーチェ研究』まで」では、和辻哲郎の最初期の著作にニーチェへの接近の跡をたどり、第三章「内的経験、暗示象徴、永遠回帰、宇宙生命」では、それらのキーワードの考察を通して、同時代思潮との関連をさぐり、あわせて、初期和辻の哲学観（世界観、狭義の哲学観、

表現観）の形成過程を明らかにする。「結語」では、各章の結論をまとめ、その初期哲学が、和辻の後の歩みに、どのように働いているかを展望する。

なお、本稿は、和辻哲郎の「哲学」「芸術」観をめぐる点において、日本における学芸ジャンル概念編成の解明に資することを期す。また和辻哲郎の「宇宙生命」観念の形成過程をさぐる点において、二十世紀初頭の日本の生命観、とりわけ大正生命主義研究を増補するものである。

一 『ニーチェ研究』の立場、方法、意図

一九一三年に刊行された和辻哲郎『ニーチェ研究』は、彼の哲学者としての出発点をなす書物であり、同時に、日本におけるはじめてのまとまったニーチェ哲学の研究書として知られている。その本論第一章の冒頭には、和辻哲郎自身の哲学観が披瀝され、その

ような哲学の一例として、ニーチェの世界をあつかうことが明示される。

冒頭は「眞の哲学は単に概念の堆積や整齊ではなく、最も直接的な内的経験の思想的表現なのである」という断案にはじまる。その断案は「直接的な内的経験をもし直覚と呼ぶならば、この直覚は「生命そのもの」として生きることなのである」と受けられ、へもとより「宇宙生命」は不断の創造であるから、直接的な内的経験もまた創造的に活らる。自己表現はこの創造である。芸術や哲学は皆ここから生まれる」とつづく。この材料となつてゐる感覚思惟などもまた「根本力の創造」の産物であるゆえ、それ自体は「生の本質を暗示してゐるに過ぎない」、それゆえ「哲学者の直覚の表現」は「暗示的象徴的」になる、と述べ、そして、「眞の哲学者」たるものは「価値の根源たるものの一層完全な表現に努力し、観念や思想を役して常に流動し成長する者の歩む新しき道を開くのである」と結ぶ。その上で、その一例としてニーチェの哲学をあつかうことが表明され、原理によつて諸概念に統一を与える体系哲学^①に対して、「欲動の力の体系」から萌えいでたものとしてニーチェの哲学を対置し、和辻哲郎は、その「欲動の力の体系」の読み解きに着手してゆく。^②

若き日の和辻哲郎が、いかに早熟だったとはいえ、まだ、それほど参考になるニーチェの哲学の内実に入り込んだ研究書もなかったときに、一見、逆説を弄して、人を欺くかのような戯れに満ちたそ

の文章を、よく読みこなし、その論理のしくみに肉迫していること、しかも、ベルクソン『創造的進化』などとの比較も、微妙なちがひまで、よく理解をとどかせようとしていることは驚くほどだ。しかし、その理解には、歴史的限界にとどまらない、和辻哲郎という若き哲学者のもつバイアスも自ずと生じている。その分析を通して、彼の哲学観の特徴をつかみたいと思う。

まず、『ニーチェ研究』の立場、方法と意図について考えてみたい。

一 一 その立場

和辻哲郎は、「直接的な内的経験」は「直覚」によつて把握されるなら、「生命そのもの」であり、その「生命そのもの」は「宇宙生命」を根源にもつという世界観を示し、ニーチェも、そうした世界観に立つ哲学者のひとりであると述べたのち、すぐにベルクソン『創造的進化』(Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, 1907)の内に、カント(Immanuel Kant, 1724-1804)を批判した条を参照し、カントが「主観と独立に自存する物そのものと世界との関係をつけることができなかつたのは、彼を束縛する科学の知識が、彼をして知力以上の生の深みに突入する自由を失わしめたからであつた」と述べている。^③これは、いうまでもなく、ニュートン力学がカントを縛つたという見解である。そして、和辻哲郎の哲学においては、「生の深み」に入るによつて、「主観と独立に自存する物そのものと世界と

の関係がつけられる。「生の深み」は「内的経験」と「宇宙生命」とをつなぐ通路としての意味をもつ。つまり、和辻は、「世界」の根源に「宇宙生命」を想定することによって、主観と客観と独立に自存する物そのものをともに、「宇宙生命」の産出物と見なす立場をとっているのだ。

要するに、『ニイチェ研究』は、「宇宙生命」を原理とし、一切をその産出物とする世界観に立ち、「真の哲学者」は、その現れのひとつである「直接的な内的経験」を表現する者であり、その表現は「暗示的象徴的」なものになるといふ和辻哲郎の哲学観(世界観、狭義の哲学観、表現観)によって、ニーチェの世界を読み解こうとしたものといつてよい。

1-1-2 その方法

『ニイチェ研究』の方法は、著者が改訂第三版(一九四二)序に「ニイチェの哲学を体系的に叙述しよう」と試みたもの⁽⁴⁾と記しているように、ニーチェの世界を「欲動の力の体系」として把握しようとする意図によっている。これは、生成流動するニーチェの「体系」ならざる世界を、なお「体系」として把握しようとするものであり、言語矛盾ないしは形式論理上矛盾することをあえて行う試みのように見える。それは、はたして可能なのか。和辻哲郎は、それをどのような方法によって行ったのだろうか。

和辻哲郎『ニイチェ研究』の全体は、序論、本論第一「新価値樹

立の原理」、本論第二「価値の破壊と建設」に分かれている。「序論」では、ニーチェの境涯とともに、その著述のなりゆきについて概説し、本論第一では、ニーチェのいう「自己」なるもの、すなわち「権力意志」について、「認識」「自然」「人格」「芸術」の各相において解説してゆく。そして、本論第二では、ニーチェの「宗教批判」「道徳批判」「哲学批判」「芸術批判」「ヨーロッパ文明批判」「新しい価値標準」を展開する。

和辻『ニイチェ研究』の構成を知るために、ニーチェの作品史より、『ツアラツストラはかく語りき』(Also sprach Zarathustra, 1883-85)執筆後の歩みを簡単に紹介しておく。ニーチェは『ツアラツストラ』を執筆後、自らの哲学の理論的体系化を企て、『権力への意志——すべての価値転換』(Der Wille zur Macht: Die Umwertung aller Werte)を次のように構想した。

第一篇「ヨーロッパの危機について」、第二篇「在来の最高価値の批評」、第三篇「新しい価値樹立の原理」、第四篇「人を鍛錬する新しい哲学」。

しかし、この第一構想は、第一篇に着手したところで変更され、次に規模を大幅に縮小し、『すべての価値転換』と題するシリーズが計画された。

第一篇「反キリスト」(キリスト教批判)、第二篇「自由精神」(虚無的運動としての哲学批判)、第三篇「反道徳家」(道徳批判)、第四篇「ディオニソス」(永久回帰の哲学)。

しかし、この計画も、キリスト教を墮落した価値の源泉と論じる『反キリスト』(Antichrist)をまとめただけに終わった。ニーチェは、自身の仕事を振り返る自伝『この人を見よ』(Ecce homo)などを書きのこしたところで、知能の働きを失ってしまう。ニーチェが第一構想にそって書き残した草稿群は、歿後に妹の手によって整理され、『権力への意志』と名づけられ、刊行された。

和辻哲郎『ニーチェ研究』は、ニーチェの第一構想のうち、第三篇「新しい価値樹立の原理」を、本論第一として展開する。本論第二は、縮小された第二構想の配列を第一篇、第三篇、第二篇の順に並び替え、ニーチェの著作のうちに散乱する芸術論の諸断片についての解説を「芸術批判」として加え、さらに第一構想より第一篇、第四篇を加えて構成する。つまり、和辻は、ニーチェ自身が自らの思想の体系化を企てたときの意図を忖度しながら、ニーチェ作品群の底をなす「体系」を読み解こうとしたのである。⁽⁵⁾

一―三 『ニーチェ研究』の意図と意味

和辻哲郎は、初版「自序」に「自分がニーチェを読む時自らの教育者として認めるのはただニーチェだけである」⁽⁶⁾と記している。若き日の和辻哲郎の哲学観の形成に、彼がニーチェを読んだ経験が大きく与っていることは想像に難くない。つまり、和辻哲郎『ニーチェ研究』は、ニーチェの読書によって育まれた自らの哲学観によって、ニーチェの哲学を説くというトートロジーカルなくみになって

いる。

ニーチェがショーペンハウアーに教わりながら、その世界を内側から食い破るような批判を敢行したことはよく知られる。しかし、それに似たことが、ここで企てられているわけではない。和辻哲郎『ニーチェ研究』では、ニーチェの限界の指摘が行われているものの、それは、ニーチェのことは芸術的、すなわち認識において直観的であり、表現において象徴的であり、体系的連絡の能力に欠けている⁽⁷⁾、あるいは、感情にまかせて、「概念に関する不精密」におちいつているということに終始している⁽⁸⁾。そうした限界の指摘は、ルドルフ・オイケン(von Rudolf Eucken, 1846-1926)が『大思想家の人生観』(Die Lebensanschauungen der grossen Denker : eine Entwicklungsgeschichte des Lebensproblems der Menschheit von Plato bis zur Gegenwart, 1890)で、ニーチェの「学者としての無能力」を指摘したのを参照してのことだ⁽⁹⁾。

要するに、ニーチェの作品群に類まれなる哲学的思考と芸術表現の融合を見てとった和辻哲郎は、ニーチェ自身が体系化できなかったその世界を、ニーチェの身になりかわって「体系的に叙述しよう」としたのである。それは、たえず生成流動するニーチェの世界を、体系化を拒むものとは考えず、その底にある体系性を想定し、感情にまかせて逸脱したり、曇らされたりする芸術的表現の底に潜んでいるはずの概念を整序し、論証がなされていないことについては論証してみせるような作業となる。

たとえば、ニーチェ世界のキーワードである「権力意志」について、和辻はニーチェの著作をたどって、「欲動」の語が『曙光』(Morgenröte, 1881)あたりで明らかに、「力感」「力感の欲求」「権力意識」「権力の愛」「権力への努力」と変奏され、『ツアラツストラ』において「権力意志」に確定したと整理している。そして、「権力意志」については、力への最も深奥な核として彼の内的経験を表現するのに用いたと解説している。⁽¹⁰⁾

和辻哲郎がニーチェの世界の底に「宇宙生命」という概念を想定し、〈欲動の力の体系〉を読みとろうとするのは、このような企図に発していた。それは、ニーチェが自ら体系化をはたしえなかった原因を、彼の思考法の傾向、さらには病弱や神経症に帰し、いわば「学者の能力をもったニーチェ」を仮想するものだった。若き和辻哲郎は、それこそが、芸術鑑賞力をもち、かつ、概念的な思考力をもつ哲学者の任務と考えたのだろう。

そして、このような考え方には、和辻哲郎が、その長い研究生活を通じて、アーキタイプを想定したり、一種の構造主義的方法を見せたりすることの芽生えが見てとれる。その意味で、『ニーチェ研究』は、和辻哲郎の歩みの始原という意味をもっている。

さらにいえば、『ニーチェ研究』初版「自序」の最後に、自分は〈真正の日本人の血にニーチェと相通じるもののあることを信じている〉⁽¹¹⁾とある。ニーチェと相通じるものを、〈最奥神秘なる生の本質〉⁽¹²⁾のように考えるなら、それは普遍的なものはずで、日本に限

るものではない。それゆえ、和辻哲郎は、ニーチェが古代ギリシアのアポロンの明るい秩序を生みだす地盤として想定したディオニソスの観念、すなわち熱狂し、陶酔し、破滅にも向かう生命観に通うものを「真正の日本人の血」にも見いだしようと考えていたのかもしれない。そのような想定が、やがて彼を儒学や仏教の影響を受ける以前の日本へ、また日本における仏教文化へと赴かせる契機となったといってもよいだろう。

一四 なぜ、ニーチェだったのか

次に、和辻哲郎がニーチェの哲学史上の意味を、どのように考え、その研究を行ったのかについて探ってみよう。当時の日本では、思想としては「超人」の観念が、そして、それをよく示す詩作品としては『ツアラツストラ』はかく語りき⁽¹³⁾が、ニーチェの哲学を代表するものとされていた。和辻哲郎『ニーチェ研究』「序論」は、『ツアラツストラ』について、ニーチェの〈自由に意欲する自己〉「宇宙生命としての個人の生」の主張において、燃ゆるがごとき理想が科学の地盤の上に輝いていると簡潔にまとめている。これについて考えてみよう。

まず、「自由に意欲する自己」とは、自分を物質的、精神的に支配し、征服しようとするものどもから自由になり、反攻する力を発揮しようとする意志、すなわちニーチェのいう「権力意志」のことである。これには、さしあたって異論は出ないはずだ。

次に、「宇宙生命としての個人の生」という観念について。「宇宙生命」なる観念は、ニーチェとは無縁である。『ツァラトゥストラ』の、いや、ニーチェの作品群のどこにも登場しない。なぜなら、和辻哲郎自身も書いているように、ニーチェは、世界にしても自己にしても、活動そのもの、生成、流動がすべてであり、いかなる「実体」も「実在」も、フィクションにすぎないとするからだ。⁽¹⁴⁾

和辻哲郎は『ニーチェ研究』本論第一の冒頭近くで、へもとより「宇宙生命」は不断の創造」と述べていたが、「宇宙生命」なるものは、和辻哲郎その人がア・プリオリに世界の原基にすえた実体概念である。ただし、これには、「宇宙生命」は宇宙の創造性、活動性を概念化したもので、実体概念ではないという反論がなしうる。しかし、ニーチェは『権力への意志』の認識論において、「概念」も「存在の本質にふれることがない」ものとしている。「概念」は、「存在の本質」を「事物」化してとらえる認識の方法と考えるからだ。⁽¹⁵⁾

ところが、ニーチェも、ときに徹底しえない。和辻は指摘している。〈永久回帰をただ思想として論理的に検すれば、ニーチェがその認識論において斥けた多くの概念を再び宇宙の生に注入しているのを見いだすことができる〉と。同一、因果、必然、制限などの概念をあげて、そういつている。これは和辻の指摘のとおりだ。それゆえ、和辻は〈永久回帰は思想としてはニーチェ自らにとつても未熟〉といい、しかし、『ツァラトゥストラ』には、永遠回帰の神秘に

ふれる〈彼の直接的な、彼自らにとつて最も確実な、内的経験〉を表現しようとした跡があるとも述べている。⁽¹⁶⁾これについては、あとで検討するが、ここでは、このようにして和辻哲郎が、〈最も直接的な内的経験の思想的表現〉におけるニーチェの「失策」を救っていることを見ておけばよい。

和辻哲郎は〈原理によつて諸概念に統一を与える体系哲学〉——たとえばヘーゲル哲学のようなものを考えればよい——に対して、〈最も直接的な内的経験の思想的表現〉としての哲学を「真の哲学」として対置し、ニーチェの哲学も、そのひとつだと述べていた。実際は、そのひとつというより、彼の考える「真の哲学」の姿に最も近いものとして、ニーチェの作品群と取り組んでいることはあきらかだ。和辻哲郎は、そのような「真の哲学」たるニーチェの世界を、自分自身の「宇宙生命」という〈原理によつて諸概念に統一を与える体系哲学〉として解説してみせるといふ、論理的には実にアクロバティックなことを企て、実行したのである。

一―五 先駆者、ニーチェ

和辻哲郎は、ニーチェの哲学を、「宇宙生命」を原理とし、〈最も直接的な内的経験の思想的表現〉である「真の哲学」のひとつと述べていた。そう述べている以上、それに類する哲学の流れが想定されているはずである。

『ニーチェ研究』本論第一章では、ベルクソンの名があがって

いた。和辻がそこで参照していたのは『創造的進化』である。「創造的進化」は、まちがいでなく「宇宙の生命」を原理とする哲学体系である。ベルクソンは、エネルギーの語を用い、物質を貫きながら「生命」という「流動的な実在」(la réalité fluide)を「宇宙の生命」(Cell [la vie] de l'univers)と呼んでいる⁽¹⁷⁾。

和辻哲郎の「宇宙生命」なる観念は、ベルクソンによるものという推測がつく。だが、ベルクソンの哲学はへ最も直接的な内的経験の思想的表現」といえるだろうか。『創造的進化』は、二十世紀への転換期における生物進化論の動向について分析するところからはじまっている。

わたしは若き哲学者の片々たる措辞にこだわりすぎているだろうか。だが、ことは和辻哲郎の哲学観の根幹にかかわる。ニーチェ『ツァラトゥストラ』を紹介する和辻の一文を、もう一度、引く。〈自由に意欲する自己〉「宇宙生命としての個人の生」の主張において、燃ゆるがごとき理想が科学の地盤の上に輝いている〉。

〈理想が科学の地盤の上に輝いている〉とは、宗教や道徳の支配に対して自然科学を参照することで、それらの虚偽性を暴露し、しかし、その自然科学の限界をも指摘することで、「内的経験」のさらなる深みを探っていったニーチェの志向を指している。そして、和辻哲郎は『ニーチェ研究』本論第二章「認識としての権力意志」で、ミツバチの生活をつぶさに観察し、それに学んだメーテルランク (Maeterlinck Maurice, 1862-1949) の、「新ロマン主義」の

先駆者としての位置を、ニーチェに与えている⁽¹⁸⁾。

和辻は、また科学の解明する法則性をもフィクションと見たニーチェを、『創造的進化』において目的論と機械論とをもるともに超えたベルクソンの先駆者と論じている⁽¹⁹⁾。ベルクソンは、そこで、突然変異、すなわち偶然性を原理にしても、「進化」をいう以上、一定の目的を想定するため、目的論からの完全な超越とはいえないとことわっているが、その点について和辻は、闘争に向かう権力意志を説きながら、進化という「物語」を説かなかったニーチェを、より徹底していると評価している⁽²⁰⁾。それは、「精神の自由」と法則性ないしは自然科学的思考法との格闘の歴史の中に、ニーチェを位置づけ、評価するゆえである。

つまり、和辻哲郎は、主義主義のように片づけられたり、狂人の世迷いごとのようにささいいわれたりしていたニーチェの哲学を、二十世紀初頭の哲学や思潮の先駆と見、評価しているのだ。ここに和辻哲郎の『ニーチェ研究』の大きなモチーフがあった。

一六 意識について

本論第二章で和辻哲郎は、アメリカのプラグマティズムの流れに属するウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) の考えとニーチェのそれとの類似をも論じている。ヘニーチェが意識と呼ぶ者は感覚から資料を与えられて思惟によつて整理せられた者〉であり、それゆえ、彼は、意識とはへ幻影的な、生の本質と何

ら触るる所がないもの」と述べているとして、和辻は、これをジェイムズが「内部活動」そのものは意識ではとらえられないと述べていることと類似する考え方だとい²¹う。和辻のいう「直接な内的経験」の性格にもかわることなので、この点について考えてみたい。

和辻哲郎が依拠したのは、遺稿『権力への意志』の断片四七七（クレエナー・ポケット版の番号を用いる）だろう。へ私たちが意識するすべてのものは、調整され、単純化され、図式化され、解釈されている、——内的「知覚」のほんとうの経緯は、諸思想、諸感情、諸欲望の間の、主観と客観との間の因果的結合は、私たちからまったく隠されており——そしておそらくは一つの純然たる想像である²²う。

ここでニーチェのいう意識は、認識内容をつくりあげるはたらきを指している。「知覚」自体に、本人の自覚しえない因果的結合が働いているということだ。断片四七四にはへ私たちの意識するものの尺度は、意識化の粗雑な有用性に全面的に依存している²³とあり、断片四七六にはへ私たちの内的世界もまた「現象」である!²³とある。

ニーチェは、因果律も一つの迷妄とするので、断片四七七の「因果的結合」は、何らかの連関作用——どのような連関かは不明な——くらいの意味で考えてよい。実際には、生理的な働き（内的自然）との対応が想定されている。このようにしてニーチェは、科学的思考を導入し、形而上学の世界がフィクションであることを暴露

してゆく。

ニーチェは、「知覚」すなわち認識内容とは区別して、意識を、諸思想、諸感情、諸欲望が混沌として働く場のように考え、そして、いわば「意識以前」のものとしての「本能」と連続させているのだ。そこに、彼が学んだショーペンハウアーのいう「宇宙の意志」の影がさしていることはいうまでもない。また、ハルトマン (Karl Robert Eduard von Hartmann, 1842-1906) の無意識の哲学も参照しているかもしれない。

それに対して、ジェイムズ『心理学原理』(Principles of Psychology, 1890) は、「直接意識」と「反省意識」とを分けて考え、意識が切れ目なく流れていること、それゆえ意識の断片を取りだして論じても、意識を論じたことにならないことを述べ、「直接意識」(「直接経験」)を活動そのものとした。その切れ目のない意識の流れを「思考、意識、または生命の流れ」と呼ぶべきだと述べている。ジェイムズは、ここでは「直接経験」(direct experiences)の流れ——何かにとらわれている意識の状態——を抜け出て、いままで、わたしはどんな意識状態でいたかと振りかえっても、つまり反省意識によって、とらえうるのは印象の断片のようなものでしかないのだ、その流れはとらえられないということをいっている。意識のふたつの相のちがいに着目し、「直接経験」すなわち非反省的意識(non-reflective consciousness)の流れの内容は反省的意識ではとらえられないという関係を述べているのだ。つまり、意識を「生命」

現象として考えるとところは似ているが、ジェイムズは、ニーチェのように意識がいかにフィクションとしての世界像をつくるか、意識の欺瞞的な働きに関心を注いでいるわけではない。

和辻哲郎は、ヘンライチエが意識を表象や概念のみの世界²⁵に限り、「内部生命」から隔たったものとして説いているが、和辻はジェイムズの「意識の流れ」についても、それと同じような方向で理解していたにちがいない。

しかし、ニーチェは、意識すなわち感覚や心象、価値判断が、「表象」や「概念」、「存在」なるもの、すなわち固定した世界像をデッチアゲ、人びとを生命の流動から疎隔していることを暴露しようとして、そのようなことを起こす意識の働きを論じているのである。逆にして、意識を「内的経験」から分離しているわけではない。逆に、ニーチェは、そのような意識の虚偽をつくる働きの暴露を通じて、「生の原理」への接近がなしうる唯一の通路として「意識という現象」を設定しているのである。ニーチェは書いてある。〈意識とは——「印象」の並列や意識化として、まったく外面的にはじまりつつ——最初は個人の生物学的中心から最も遠ざかったものであるが、しかし、おのれを深化し、内面化し、あの中心にたえず近接する一つの過程のことである〉²⁶と。

なぜなら、そのような意識の欺瞞的な働きに気づき、それをはぎ取り、あるがままの意識に接近しようとするのも意識が行うことだからだ。〈生物学的中心〉とは、さしあたり、中枢神経ないしは

「本能」、〈あの中心〉とは自己すなわち権力意志のことと考えておけばよい。

このような意識についての見方は、ジェイムズよりも、ニーチェの同時代者、フランツ・ブレンターノ (Franz Brentano, 1838-1917) が、物理現象には見られない心理現象に固有の性質として、意識は何らかの対象に関係し、それに対する志向をもっていると言った「対象志向性」の問題に近接するものだった。その問題から出発して、フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) は、現象学への道をあゆみ、他方、やはりブレンターノに心理哲学を学んだフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) は、「意識の志向性」の問題を、シヨーパーンハウアーが無意識の底に見とけた「生の盲目的意志」、生きんとする欲望の働きに探って、「リビドー」の観念を立ててゆくことになる。²⁷

しかし、ニーチェは、それらもまた、世界についての解釈にすぎないとするだろう。そして、そのようにして、キリスト教の世界観にとつてかわるような世界解釈をなすこと自体を、彼は「権力意志」の現れと考えるはずである。

われわれは、和辻哲郎の指摘によって、ニーチェの意識に対する関心のあり方に注意を払い、ジェイムズらの関心のあり方と比較させて考えることができた。しかし、和辻哲郎自身のニーチェ理解の方向は、すべての意識を「認識」寄りに理解するもので、その意味で、和辻哲郎のいう「直接的な内的経験」とは、ジェイムズの「直接

「経験」の語を半ば借りてはいるものの、流動する内的経験を指していることになりそうだ。そして和辻は、その「内的経験」を「人格」と結びつけるところに向かっている。

実際、和辻哲郎『ニーチェ研究』「序論」は、ヘンリヒの哲学は……直接なる内的経験の表出である。あらゆる概念や思想の奥には彼の人格が強い必然的な動力としてはたらいっている」とはじまっている。そのすぐあとに「人格や深い内的経験」と並列関係で用いられている。そして、その人格を探るのに、病理学の方をとるような研究は「邪道」であり、「行き過ぎてはならない」とされ⁽²⁸⁾、ニーチェの哲学は、あくまでもニーチェの著作に探ればよいとしている⁽²⁹⁾。『ニーチェ研究』本論においても、和辻哲郎は、ニーチェの思想と精神障害とを結びつける見解を極力退けている⁽³⁰⁾。

これは、ニーチェについての病理学的な「研究」がドイツで出ていたからだ。その翻訳書も、和辻哲郎『ニーチェ研究』の刊行される一カ月前には刊行されていたP・メエビウス著、三浦白水抄訳『ニーチェの人格及哲学』警醒社書店、一九一三年九月。これについて、和辻は「友人の医者にその梗概を聞いたにすぎない」と記している⁽³¹⁾。

一七 真理について

和辻哲郎は、また「真理は生のために有用な観念」とするプラグマティズムの見解とニーチェの考えは、ほぼ一致すると述べている⁽³²⁾。

先に引いたなかにも、断片四七四に「私たちの意識するものの尺度は、意識化の粗雑な有用性に全面的に依存している」とあった。が、はたして、これは本当だろうか。

ウィリアム・ジェイムズは、論文集『信じる意志』（一八九七）で、知的領域で真偽を決めることのできない命題は、それを信じることによって初めて「真」になる場合があることを説いていた。宗教の価値が相対的に低くなっていたときに、信仰する人にとって、宗教は「真」であり、有用なものであるということを描的に説いたので、国際的に広く知られた。ここにも「真理」の相対化がなされているのはたしかだが、しかし、それは有用性をめぐる相対主義の立場である。

それに対して、そのような有用性の欺瞞を暴き、「真理」とは、所詮、そんなものでしかないというのがニーチェの立場である。「真理」の相対化とその有用性をめぐって、ジェイムズとニーチェは、ちょうど正反対の位置にいるのだ。

ニーチェが企んだのは、「真理」などということを志向すること自体を相対化することだった。それは彼が、自然科学が前提とする「法則性」をもフィクションだと主張するのとまったく同じことだ。

しかし、そのようにしてニーチェが権力意志の「真実性」を説くことをもって、和辻は、「権力意志」をニーチェの「絶対的真理」とみなし、ニーチェが観念論の説く「真理」をただ「真理」として攻撃するのは、用語法としては混乱におちいっていると述べている⁽³³⁾。

ニーチェは、遺稿『権力への意志』の「認識としての権力の意志」の章で、観念論哲学のみならず、ひとが、それまで「真理」として措定してきたことを、水準や位相や角度を変えて、次つぎに相対化してゆくが、何に対して「真理」や「真実」の語を用いているのかさえ考えれば、すなわちコンテクストによって読みわけさえすれば、読者は混乱などしない。

たとえば『ツアラツストラ』には「唯一の真理」の語が登場する。それは、ツアラツストラが自ら、阿呆であり、詩人にすぎないと嘆く歌のなかでのこと。ツアラツストラが「あらゆる真理から、追放された身の上」であるということ、そのことを指して「唯一の真理」といつているのだ。⁽³⁴⁾ また、ニーチェが発狂直前にあげた『この人を見よ』(Eccce homo, 1888, pub. 1908)のなかには、たとえば「古い真理はもうおしまいだ」とか、「数千年にわたる嘘を相手に真理が闘うのだから」とか、「これまで「真理」と呼ばれていたすべてのもものは嘘の最も有害で、最も陰険で、最も地下的形式だと看破せられて」⁽³⁷⁾などと記されている。

『権力の意志』の「認識としての権力の意志」の章に登場する「真理」は、『この人を見よ』から引いた三番目の「これまで「真理」と呼ばれていたすべてのもの」の意味であり、みなカッコつきである。われわれは、これらに登場する「真理」という語を読んで、概念が混乱していると感じるだろうか。和辻哲郎は、ニーチェが「真理」を相対化していることを十分承知しており、実際、読みわ

けていながら、にもかかわらず、和辻はそれを概念の「混乱」といい、それをニーチェの「芸術家的直覚」⁽³⁸⁾のなせるわざとする。同一の用語を多義的に用いていることをもって、「混乱」といつていることになる。同一の語は同一の意味で統一されていなくては体系として整っていないという考え、そして、体系には唯一の「真理」が貫いていなくてはならないという考えが、そういわせているのだ。つまり、その「混乱」を「混乱」たらしめているのは、和辻哲郎の「体系」というものに対する考え方の方なのだ。

これを、当時の和辻哲郎の年齢やニーチェ研究が緒にいたばかりという歴史的限界に帰すことはできない。哲学の「体系」のあり方についての考え方が和辻哲郎の考察を縛っていることを意味するからだ。逆にいえば、和辻哲郎は、自身の考える哲学「体系」のうち、ニーチェの生成流動する記述をおさめてしまおうとしたのである。

一八八 生命主義の哲学

『ニーチェ研究』にオイケン⁽³⁹⁾のニーチェ論が参照されていることについては先にふれた。が、最も多く参照されているのは、ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) の『ショーペンハウアーとニーチェ』(Schopenhauer und Nietzsche, 1907)である。つまり、ここに示された和辻哲郎の哲学観は、全体として、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) に代表される概念の哲学に対して、「生

の哲学」(Lebensphilosophie)の流れに立つことが明らかである。ヘーゲルもまた、実は「生の哲学」の流れと無縁ではないのだが、それは、ここでは問題にしないことにする。

「生の哲学」の流れは、ドイツのショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) ニーチェを先駆者とし、デイルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911)、オイケン、ジンメルと並べるのが一般的で、フランスではベルクソンに代表される。ただし、和辻哲郎『ニイチェ研究』にデイルタイの名は登場しない。

デイルタイは、ヘーゲルの絶対理性を「生命」で置き換えることを主張し、新しく精神科学の構想を立てた人で、東京帝国大学に専科生として、一八九一―九四年に籍を置いた西田幾多郎は、『善の研究』を前後する時期から参照しているが、「内部生命」の発現として「真の哲学」を考える和辻哲郎には肌があわなかったのかもしれない。

加えて、価値の転換をはかった哲学者としてニーチェをあつかう和辻哲郎の態度は、もちろん、ニーチェが『反時代的考察』(Unzeitgemässe Betrachtungen, 1873-76)の「ヨーロッパ文明の退廃を批判し、新たな天才の出現による価値転換を唱え、そして、その姿勢は終生変わらなかったからだ、新カント派とりわけ西南ドイツ派受容期の日本の哲学界の動きの反映とも考えられる。しかし、おもしろいことに、新カント派の哲学者、ハインリッヒ・リッケルト (Heinrich Rickert, 1863-1936) による「生の哲学」(一九二二)は、

ショーペンハウアー、シエリング、ニーチェ、ハルトマンらドイツの「生の哲学」の流れの一部と、フランスのベルクソン、アメリカのプラグマティズムのウィリアム・ジェイムズ、ジョン・デューイなどを一括して、生物としての生命を根本におく思想、すなわち“Biologismus”(生物学主義)と一括し、それ自体は文化的な価値を生まないと批判した。そして、それを田辺元(一八八五―一九六二)が「文化の概念」(一九二二)で紹介した。

リッケルトは精神文化の価値を説くために、否定的な意味で“Biologismus”の語を用いたのだが、しかし、田辺元は、それを「生命主義」と翻訳し、現代の思想を支配する基調として生命の創造的活動を重んずる傾向の存在すること^①を認め、生命主義の立場に於ける文化の意味^②を説いている。自然の「一成員として人間」が精神、物質の両面にわたって、生活内容を豊富にし、心身の欲求を自由に発揮できるようにすることが「文化」であるとい^③う。田辺元は、「生命主義」に立つ「文化主義」を唱えているわけだ。そのうえで、社会的な不正からの解放を求める闘争状態は「合法的理性」によって克服しなければならない、とつけ加えている。

和辻哲郎『ニイチェ研究』が、田辺元の唱える「生命主義」に立つ「文化主義」、すなわち大正生命主義の一翼を担い、それを先導した書物の一冊であることは、ここに明らかだろう。

二 『ニイチェ研究』まで

和辻哲郎『ニイチェ研究』は、「宇宙生命」なる観念を「真の哲学」の淵源にすえていた。「宇宙生命」なる観念は、いつたい、いかにして和辻哲郎のうちに胚胎したのだろうか。宇宙の目的をもたない活動性、流動性を唱えるニイチェの哲学からの刺戟も大きく働いたにはちがいないが、ベルクソンやジェイムズからの刺戟、そして、オイケン、ジンメルによるニイチェ解釈が働いていたことも、すでに明らかにしてきた。

『ニイチェ研究』は、先にふれたように、和辻哲郎の哲学的個性を築いたものでもあるが、同時に、ベルクソンをふくむ「生の哲学」の流れや「新ロマン主義」、「新カント派」の受容とともに、この時期の日本の哲学界の動きをよく映すものでもあった。それゆえ、ここに披瀝されている若き和辻哲郎の哲学観の形成について、彼のニイチェへの接近の軌跡という観点から概括しておこう。

日本におけるニイチェの紹介は、登張竹風（一八七三—一九五五）が一八八八ころに先鞭をつけ、ニイチェ歿後、一九〇一年に高山樗牛（しやうぶ）「文明批評家としての文学者」が喧伝し、その年、桑木巖賢（一八七四—一九四六）が概説書をまとめて開始された。和辻哲郎の出発期の著作に、この樗牛による喧伝のこだまが響いている。

二一 高山樗牛からショーへ

和辻哲郎が十八歳のとき、第一高等学校の『校友会雑誌』に寄せたエッセイ「靈的本能主義」（一九〇七）は、現代青年の課題を靈性（精神性）の改革にすえ、「個性の宗教」を訴え、低俗をのりつつたが、それには、高山樗牛（二八七一—一九〇二）が、「美的生活を論ず」（一九〇二）で「肉の本能」に立つことを主張したことに対する対抗意識がうかがわれる。⁽⁴²⁾ 樗牛の主張は、和辻哲郎より六歳上の一高の先輩、阿部次郎（一八八三—一九五九）らには、まるで「個人主義」のラッパのように受けとめられていた。⁽⁴³⁾ 日清戦争前後から知的青年たちを襲った「人生（ないしは人性、人間の本质）いかにあるべきか、いかに生きるべきか」の煩悶に強く訴える高山樗牛の筆の力を、早熟だった和辻哲郎が早くから指標として意識していたとしても不思議はない。

そして、樗牛の初期の評論「巢林子の人生観」（二八九五）は、近松門左衛門の浄瑠璃を題材にして、情死こそ、へ幸福なる愛の最後⁽⁴⁴⁾と論じているが、和辻哲郎も一高『校友会雑誌』一七七号（一九〇八年六月）の「前号批評」欄に、〈近代の物質的な虚無な思想の煩悶〉を書く「自然主義」は、現代日本にはますます必要だが、ロマンチックな情死文学は、それとは異なる方向にあり、へすべての情死は人情の勝利である、暗黒でなくて光明である〉と記している。⁽⁴⁵⁾ 情死を美化する点においては樗牛に賛同しつつも、高校時代の和辻は、精神性にかける方向を見せていたことになる。とすれば、和辻

哲郎がニーチェの名を知ったのは、やはり高山樗牛の文章にふれて、ということになりそうだ。

和辻哲郎のニーチェへの関心は、一九一〇年、「シヨールに及ぼしたるニーチェの影響」あたりから明らかになる。帝国大学に入学した時期の和辻哲郎は、小説や戯曲を書き、また内外の小説や戯曲、日本での演劇上演について、文科大学の同人雑誌『帝国文学』に、編集委員として執筆している。このエッセイはイギリスで人気の高い劇作家、バーナード・シヨール (George Bernard Shaw, 1856-1950) の戯曲を論じるにあたって、シヨールが『バーバラ少佐』(Major Barbara, 1905) の序文で、ニーチェの影響を否定していること⁽⁴⁶⁾にふれながら、しかし、シヨールの『人と超人』(Man and Superman, 1903) にしても『バーバラ少佐』にしても、ニーチェの『すべての価値転換』などを念頭において読むとき、生彩を放つものになると述べている。和辻哲郎は、ニーチェの遺稿を妹が編集した『権力への意志』などをナウマン・ポケット版(全十巻)で読んでいたと『ニーチェ研究』に記している。⁽⁴⁷⁾

歓楽の子、狂熱的な個性主義に憧れる和辻哲郎の当時の関心は、しかし、ニーチェよりも、シヨールの方が勝っていた。以後、和辻哲郎は、シヨールの戯曲の翻訳や、それにヒントをえながら、恋情を肯定する戯曲や小説を試みてゆく。イギリスの詩人、アーサー・シモンズ (Arthur Symonds, 1865-1945) の演劇論『Theatre; Poetry and Melodrama』の翻訳もある。一九一一年に、演劇ないしは戯曲、

小説を離れた関心といえば、「象徴主義の先駆者ウィリアム・ブレイク」(『帝国文学』二月号)と「田中王堂『書斎より街頭へ』について」(『帝国文学』六月号)の二篇くらいだろう。そして、この両者ともに、ニーチェが登場する。

前者は、ほぼ同時期のイギリス詩壇の若手詩人、批評家、ヒュネッカー (Huneker, 不詳) とイエーツ (William Butler Yeats, 1865-1939) によるブレイク論の翻訳紹介である。イエーツがブレイクとニーチェとの類似を指摘する条に和辻が惹かれたことによるものだろう。

二二二 ニーチェへの接近

「田中王堂『書斎より街頭へ』について」は、個人の具体的な生活欲を基礎に、各瞬間に個性の充実を目ざすことによって、普遍的な価値である真善美(科学・道徳・芸術、認識・実行・成美)の理想に向かうことを説く田中王堂(一八六七—一九三二)の著書の書評。田中王堂は、機能主義(プラグマティズム)と象徴主義(サンボリズム)を合わせた「人生論」、生活欲に発する文明批評にこのころから活躍していた。「人生論」は、日清戦争を前後する時期から盛んになる「修養」ブームのなかで流行を見せたもので、人間とは何か、人生、いかに生きるべきかをめぐり、宇宙の本体から生活の些事にわたって、哲学とも芸術論とも道徳論ともつかないようなエッセイ類が、そう呼ばれた。

和辻は、そこで、まず、『書斎より街頭へ』が「世の健全なる方面を代表しているいわゆる識者の一団に対し痛烈なる打撃を与えたこと」に「熱い感謝」を述べている。⁽⁴⁸⁾ 王堂の「クラシズム、ローマンチズムおよびシンボリズムに対する見解は、暗示に富んだ面白いもの」⁽⁴⁹⁾ともいうが、「道学者」に対する痛罵は基準が明確でない、威張っているわりに権威が足りない、もっと痛烈であってほしいと要望を述べている。このような体制派への反抗の姿勢、そして、痛烈な表現を好む和辻の姿勢は、「霊的本能主義」から、すでにうかがえる。

そして、和辻は、『書斎より街頭へ』に「四」として収録してある「ニイチエのザラツストラを論ず」(初出は『新小説』一九一〇年九月号)に着目している。というより、『ツアラツストラ』の「Grundstimmung」(根本をなす気分)に注目している。王堂の「ニイチエのザラツストラを論ず」は、ニーチェの説く「超人」の名ばかりが流行して、その意義がよく理解されていないとはじめてはいるが、『ツアラツストラ』について、要するに「超人」への憧憬ばかりが先にたつて、その基盤であるはずの社会改造、人格改造に向かっていないと批判している。⁽⁵⁰⁾ それに対して、和辻は、ニーチェの「立場には種々の矛盾」があるが、『ツアラツストラ』は「へいかにもチャーミングなドグマではないか」、王堂は、その芸術品としての鑑賞を怠り、ニーチェの「Grundstimmung」を「了解していない」、「超人」も「へなお、思想を形造るに至らない」の「Stimmung」ではない

だろうか」と述べている。⁽⁵¹⁾

このとき、和辻は、まだニーチェの著作の全容と正面から取り組んでいない。ニーチェについては、このころには、ドイツの批評家によるニーチェ論も少しずつ翻訳され、生田長江(一八八二—一九三六)がしきりに論じていた。それらに触れつつ、『ツアラツストラ』などを覗いてみた程度だったと思う。

ほぼ半年後、「シヨーとエデキントとの比較」(『帝国文学』一九一二年一月号)は、バーナード・シヨーとドイツのネオ・ロマンティズムの劇作家、ヴェデキント(Frank Wedekind, 1864-1918)を並べて論じたドイツの評論を紹介しながら、和辻哲郎はためらいなくシヨーに軍配を上げている。ふつう、ヴェデキントはニーチェの影響を受けて、性欲の力とそれがもたらす悲劇を書いた作家として知られている。和辻は、ヴェデキントの思想が性欲に限定されているに比べて、シヨーはちがうという。シヨーは宇宙根本の实在として「life force」というものを認めた。彼の「生活力」はちょうど「電子」とニイチエの「力」を調合したようなもので、昔の人の信じた神のような勢力を持っている」と。

「電子」は、当時では、宇宙の根本をなす微粒物質とされていた。それゆえ、シヨーは宇宙根本の实在として「life force」というものを認めた」という表現は、和辻哲郎の脳裏に「宇宙生命の力」という観念が宿っていたことを示している。

他方、和辻は、このとき、ニーチェの世界の原理として、「力」すな

わち「権力」を認識している。ニーチェの哲学の底には「欲動の力」があると考えるがすでに見てとれる。しかし、ここで和辻はそれを「生活の力」ないしは「生命の力」のようにも理解してはいない。ショーのいう「life force」は、それとも異なる世界原理だと述べている。すなわち、このときの和辻には、ニーチェの「力」を「宇宙生命」という観念と結びつける考えは芽生えておらず、したがって、ニーチェを「宇宙生命」なる観念を原理とする哲学の流れの一環とする考えにいたっていなかったと考えることもできるだろう。

ちなみに和辻の著作のなかに〈人類の普遍的生命⁵³⁾〉という観念が登場するのは、「イブセンの『野鴨』を讀みてまさに來たらんとする人の世の悲劇を思う」(『帝國文學』一九〇八年二月号)が最初だろう。一切の虚偽を打破して個性に生きることをよしとする思想を展開するなかで、その人生觀に對比してレフ・トルストイ(Лев Николаевич Толстой, 1828-1910)の人類愛を見ていた。「ショーとエデキントとの比較」において、和辻は、この個性と、そして人類を飛び越えた「宇宙生命」という絶対普遍的観念を、ショーの思想のうちに見ていたのである。

二一三 ニーチェ研究へ

「哲人主義の価値―田中王堂先生に」(『帝國文學』一九一二年九月号)は、それから、半年以上のちの文章。和辻哲郎は、王堂の近著

『哲人主義』を紹介し、その主張の全般は認められるとしながら、象徴的表現で、外形的な一般論にすぎず、欲望についても生理学や心理学の説明はないし、身体との関係も説かない、〈欲望の根底が明らかでない〉、〈内的經驗を顧みない〉、宗教の内容にもふれない、内的直觀を尊重しないなどと批判をならべている。そして、田中王堂による哲人主義は、多数者の愚昧に有効に働かないことを指摘している。

これは、すでにニーチェの著作についての研究が進んでいたことを示している。『ニーチェ研究』でも、「哲学者の直覺の表現」は「暗示的象徴的」になるとしながらも、その限界、すなわち概念の混乱を指摘していた。批判の型としては似ている。そして、本来、「現象界の総合的關係⁵⁵⁾」を洞察する天才者の鋭い直覺によつてはじめてなることは、民衆には届かないという意見も、ニーチェの『ツァラツストラ』を念頭においてのことではないか。

王堂の説く日本現代文明の批評に対しても、道德の改造、新道德の樹立をいうのはよいが、「忠孝」や儒教主義の復活など、個々の特殊問題について具体的な検討を加え、標準となる指針を与えよと注文をつけている。この部分には、岩波改訂版『全集』第二一卷の解説者、湯浅泰雄の指摘するとおり、後年、和辻哲郎の倫理学体系を育てることになる、その苗床、つまり国民道德論の原型があるといつてよい。⁵⁶⁾

そして、一九一二年、「評論の力」(『帝國文學』十月号)は、高山

樗牛の著作を読み返して、へたとえ彼の評論の内容が幼稚であったにしても、彼の信仰と態度には彼の評論を高むるある尊いものがひそんでいた⁽⁵⁷⁾と述べ、ひるがえって今日の批評家について、討議する態度の不足などを厳しく批判している。

樗牛の「美的生活を論ず」(一九〇二)などは、登張竹風によって先鞭をつけられたニーチェ紹介の一端を自己流に解釈したものにすぎず、この時期の和辻から見れば「幼稚」の一言でかたづけられて、不遜にはあたらないのだが、着目すべきなのは、このとき、和辻哲郎が高山樗牛の著作の一部に目をおしてみたという、その一事である。和辻哲郎のニーチェとの取り組みが本格化し、あるいは、すでに一段落ついたので、それがなされたという推測がなりたとう。和辻哲郎はニーチェの思想と格闘し、ほぼ、それを了解したと思つたとき、先輩、高山樗牛を踏みこえることができたと感じ、そして、読者に感銘を与える樗牛の筆の調子の高さに讃辞を贈つたのである。そこにはニーチェの詩的な散文の魅力を十分に味わつたことの影も認められるだろう。

そして、この年、「安倍能成氏の努力―オイケンの翻訳について」が書かれる。ルドルフ・オイケンは、ドイツの哲学者で、二十世紀初頭の哲学者としては、ベルクソンとならんで国際的にひろく知られ、一九〇八年にノーベル文学賞を受賞しており、日本でも注目されてきた。自然主義思潮に反対し、高い精神生活に価値をおいて「新理想主義」を唱えたオイケンによるヨーロッパの思想家たちの

精神生活史ともいふべき著作を『大思想家之人生観』(二八九〇)として、一高、東京帝国大学文科哲学科の先輩、安倍能成が翻訳出版したことについて、オイケンの著書が「内生活に窮迫を持つている人に」強く迫るであろうこと、翻訳が待たれていたこと、〈内面的情調がどれほどよく翻訳せられたか〉という観点から讃辞が述べられている⁽⁵⁸⁾。その第三篇第三章第四節は「实在論に対する反動、主観主義、ニーチェ」である。

和辻哲郎は哲学科の卒業論文をニーチェで書こうとして、主任教授、井上哲次郎(二八五―一九四四)から許されず、急遽、ジョーベンハウアー論(英文)に変更したと伝えられている。おそらく、一九一二年のうちに、ニーチェ論をまとめる用意は、整つていたと考えてよい。

まだ東京帝国大学が九月入学、七月卒業のときだから、和辻の著作の途切れる一九一三年の一月ころから卒業論文のジョーベンハウアー論に着手し、それを仕上げたのち、シヨアの戯曲「恋をあさる人」を翻訳、また『ニーチェ研究』の原稿をまとめて、十月に上梓するにいたるという運びである。

三 内的経験、暗示象徴、永遠回帰、宇宙生命

和辻哲郎『ニーチェ研究』を養つたのは、ベルクソン、ジェイムズ、オイケン、ジンメルらの海外の文献だけではない。日本の新しい哲学の動きなくしては、高山樗牛がそうしたようにニーチェを生

物本能主義のように解釈することなど幼稚と退け、いかなる宗教にも、自然科学にもよらずに、「宇宙生命」を世界の根源に想定する、いわば唯生命論こそが哲学であると宣言することなど、そして、そのひとつとしてニーチェを解釈する構えをとることなど、とうていできなかつたはずだ。

和辻哲郎『ニーチェ研究』は、不断の創造である「宇宙生命」を原理とし、一切をその産出物とする世界観に立ち、「真の哲学者」は、その現れのひとつである「直接的な内的経験」を表現する者であり、その表現は「暗示的象徴的」なものになるという和辻哲郎の哲学観（世界観、狭義の哲学観、表現観）によって、ニーチェの世界を読み解こうとしたものだった。そこで、「直接的な内的経験」について、そして、その表現が暗示的象徴的になるということ、「宇宙生命」という観念のそれぞれについて、同時代の日本の哲学・思想における位置を考察し、和辻哲郎のニーチェ解釈の特徴について考えてみたい。

和辻哲郎による哲学の定義の要になる「直接的な内的経験」の語は、ニーチェと同時代、また和辻哲郎と同時代の哲学者たちが関心を向けていた意識の働きを指すよりも、流動する内的経験の総体を指し、和辻哲郎は、それを「人格」と結びつけて語る傾向を示していた。その傾きと「哲学者の直覚の表現」は「暗示的象徴的」になるという表現観念とは、どのように関連するのか。またそれは、ニーチェの哲学のひとつの要諦をなす「永遠回帰」とは、どのように関連す

るのか。そして、最後に、ニーチェのものではない「宇宙生命」という観念について、考えてゆきたい。ニーチェの世界のキーワードをなす、「永遠回帰」にも「超人」にも、当然、ふれることになる。

三 一 一 内的経験の叙述

和辻哲郎の「直接的な内的経験」は、ウィリアム・ジェイムズの「純粹経験」の問題意識を受けたものではなかつた。彼は、おそらくジェイムズの「純粹経験の世界」(A World of Pure Experiences, 1904)を読んでいない。それはすでにジェイムズの遺稿エッセイ集『根本的経験論』(Essays in Radical Empiricism)に収録され、一九一二年には遺稿集として刊行されていたが。

一九〇七年、一高時代の和辻哲郎のエッセイ「靈的本能主義」には先に少しふれたが、そこには「内的生命」の語が登場している。〈吾人相互の尊卑はただ内的生命の美醜に定まる⁽⁵⁰⁾〉と。

一九一一年の「象徴主義の先駆者ウィリアム・ブレイク」の最後にも、〈彼の内部生命を輝らすものは、彼自身のほかにはない〉とある。文中、〈内部生命 (Essential)〉という表記も見えるが、日本語の「生命」には、ものごとの本質という意味があることを和辻が利用したものであり、「内部生命」は“inner life”の訳語だろう。これが北村透谷「内部生命論」(一八九三)に発することは、いうまでもない。そして、「安倍能成氏の努力」には、「内的生活」⁽⁵¹⁾ないしは「内生活」が登場している。「生活」は「生命活動」の意味である。

一九一二年のエッセイでも、田中王堂についての「哲人主義の価値」には、先に引いたなかに、「内的経験を顧みない」という用法が見られた。これは、もちろん、「外的経験」に対する語で、この時期の和辻哲郎はほぼ同じ意味を指すものとしてこれらの語を、文脈によって適当に使い分けていると考えてよい。つまり、和辻のうちで、「内的経験」を「人格」と結びつける方向は、すでに固まっていたと見られる。

それゆえ、和辻哲郎の「直接的な内的経験」という表現には、そのことばつきからして、阿部次郎のいう「内生活直写」が響いていると推測される。和辻哲郎が阿部次郎に関心を寄せないわけではない。阿部次郎は、安倍能成と同じで和辻より六歳上だが、一高文芸部委員、東京帝国大学哲学科、そして『帝国文学』編集委員としても先輩で、一九〇七年にスピノザ (Baruch de Spinoza, 1632-77) の哲学について論文を書いて卒業し、歌舞伎を趣味とし、「自由劇場」を創始した小山内薫(一八八一—一九二八)と親交をもっていた。和辻哲郎の初期の著作には、歌舞伎や「自由劇場」についてのエッセイもある。⁽⁶²⁾

一九一一年八月、阿部次郎「内生活直写の文学」は、文芸を作品の造形に心を砕く「アポロン型」と内面の蠢きを提示する「ディオニソス型」のふたつに類型化して、後者を「内生活直写の文学」と呼んで、内側から沸きあがってくるものの表出にける方向を訴えた。そして、翌年二月、「内生活直写の文学(再び)」によって、先

の主張を、より詳しく論じた。

「アポロン型」「ディオニソス型」がニーチェ『悲劇の誕生』(Die Geburt der Tragödie, 1872) によっていることはいうまでもないが、作品制作の意識の向きを読者に向ける外向性と、創作主体の内奥からの表出という意味での内向性とのちがいを際立たせるために用いたもので、本来の意味とは隔たっている。読者の鑑賞にたえうるように苦心するよりも、内心の不定形な蠢きを、いわばそのまま外に出すことに苦心するというのが「直写」の意味である。

阿部次郎は、作者が自身の心の動きを、半分ほど造形して提示することを意味する「浮彫り」に対して、この語を用いている。「浮彫り」は、もとより「丸彫り」、すなわち登場人物をそっくり客体として造形するのに対して、作家の身の半ばを土台から浮かせて造形する、というくらいの意味で、要するに、作家そのひとの一人称小説の書き方の案配をいったものである。のちに「私小説」と通称されるのが、これである。

その「浮彫り」に対して、阿部次郎のいう「内生活直写の文学」は、〈精神生活の内容〉そのものに価値を認めて、直接性を重んじ、自分の感興を直接盛る形式をいう。登場人物としての造形をほどこさないから、小説にも、〈中心情調〉をつくる工夫もしないので詩にも、もちろん論文の形式にも適合しない。⁽⁶³⁾

この「情調」は、ドイツの感情移入美学に基づき、日本では木下杢太郎(一八八五—一九四五)、北原白秋(一八八五—一九四二)らが

主張していた。和辻哲郎が田中王堂の「ニーチェのザラツストラを

論ず」を批判した際、ニーチェの「超人」もへなほ、思想を形造るに至らない一の Stimmung ではないだろうか⁽⁶⁴⁾と述べていたが、その「気分」(Stimmung)とあわせ、「気分情調」をつくりだすことを主眼とする詩の理念として尖端的な人びとのあいだでは流行語になっていた。

ここで阿部次郎のいう「内生活直写」は、やがて彼の『三太郎の日記』(二九一四)としてまとめられる随想シリーズを基礎づける主張であった。日清戦争前後からの修養書の流行を背景に、哲学とも、芸術論ともつかない「人生論」と呼ばれる随想がさかんに書かれたが、それを自らの内面の吐露として行うものと考えればわかりやすいだろう。これが作家の手になると、欧米でも中国でも小説とは認められない随筆型の、その意味で後に「日本に独自の私小説」と呼ばれる「心境小説」の流れとなる。なお、「三太郎」は愚鈍の代名詞で、当時情痴小説と罵倒された「私小説」に顕著な自己戯画化(セルフ・パロディー)の意匠を借りている。だが、青春の愚昧を自称した題名にとどまり、内容と文章に、その気配はない。

和辻哲郎が、「内的経験」を吐露するニーチェの作品群に、哲学と芸術の融合を見て、これこそが「真の哲学」の姿と論じてはばからなかったのは、このような背景があったのだ。

三十二 暗示象徴

和辻哲郎のいう「内的経験」が、ジェイムズらの意識の働きへの関心よりも、はるかに「人格」と結びつくものに向かっていたのは、阿部次郎の説いているような意味での「内生活」と同じためだろう。阿部次郎「内生活直写の文学」の主張は、芸術や哲学はへ根本力の創造の産物であるゆえ、それ自体はへ生の本質を暗示しているに過ぎない」という和辻哲郎の主張には、直接かさならないが、内心の動きをある何者かの「影」と呼ぶところもあるし、芸術を暗示象徴と見る見方には、これまで見てきた限りでは、田中王堂の象徴主義人生論の影響も考えられる。もう少しひろげて、和辻哲郎が「霊的本能主義」(一九〇七)のころから示していた神秘に向かう関心の傾向と関連させて考えてよい。和辻は一九〇八年、先にふれた「イブセンの『野鴨』を讀みて……」のなかで、こういつている。

科学はすべて仮説の上に立っている。その仮説を信ずるのは吾人の自由意志である。(中略)吾人は光の波や、音響の波や分子の力などを考える時、果して肉眼の認め得ざる奇しき力——神秘の力を感じざるを得るか。一つの電燈の光、そのエネルギーの出所は幾万年以前の太陽の光であるか解らない。この時と空間との「無限」は神秘の感を以てびしびしと身に迫るように覚える⁽⁶⁵⁾。

自然科学の仮説性にふれて、神秘に惹かれる心が躍動する。和辻哲郎は、このように、イブセン (Henrik Ibsen, 1828-1906) やメーテルランクからネオ・ロマンティシズムと呼ばれる思潮の精髓を述べていた。メーテルランクの自然科学思想と結びついた神秘哲学については、『ニイチェ研究』にも参照されていた。当然にも、メーテルランクの神秘的な象徴表現との関連が探られてよい。

そこで思い浮かぶのは、ヘーメルリンクの思想上の兄弟分⁽⁶⁶⁾を標榜するところからはじまり、「生々欲」を世界の原理におきながら、刹那の感情の燃焼こそがすべてと説く岩野泡鳴『神秘的半獣主義』(一九〇六)である。

三―三 岩野泡鳴の影

岩野泡鳴『神秘的半獣主義』は、「自然主義が深まると神秘に向かわざるをえない」という意味のことを述べている⁽⁶⁷⁾。十九世紀後半に自然主義の流れにくみしたヨーロッパの作家たちが、イブセンにしろ、ハウプトマン (Gerhart Hauptmann, 1862-1946) にしろ、ユイスマンス (Joris Karl Huysmans, 1848-1907) にしろ、みな神秘におもむいてゆくのをみてとつてのことである。その動きをドイツの美学者、ヨハネス・フォルケルトが『美学上の時事問題』(二八九五)で「後自然主義」(Nachnaturalismus)と名づけ、批判的に論じ、これを森鷗外『審美新説』(一九〇〇)が翻訳紹介していた。しかも、泡鳴は、その神秘的象徴主義から転じて、刹那の感情の燃

焼こそがすべてであるという「人生観」を披瀝していた。

そして、そのような立場は「人生観の自然主義」などと呼ばれ、泡鳴自身も島村抱月にならつて、「新自然主義」を名のつた。が、表現論としては実質的に象徴主義に属するものだった。なぜなら、その刹那の感情の燃焼も「絶えざる生々欲」の現れとされるからだ。何を書いても、それは「絶えざる生々欲」の象徴となる。そして、刹那の情念の充実にかける岩野泡鳴は、ニーチェとともに極力、概念化を嫌った。制度も概念も抜けがらにひとしいと泡鳴はいう⁽⁶⁸⁾。

ニーチェは、諸もろの観念で塗りこめられた汚らわしい世界を無垢に戻すことを企てた。何もかもが、すなわち世界は、個々人の生の意欲に発するという、そのことを主張した。それは、シヨープンハウアーの「宇宙の意志」なるものを、ひたすら自己の内へと帰す営みだったといえるかもしれない。ニーチェの「超人」の観念が「内在超越」となるのはそのためである。わたしはここで、泡鳴におけるニーチェの影と取り組むべきかもしれないが、たとえ、それがなしたとしても、瞬時の感情がすべてと主張する泡鳴の方が、ニーチェより、よほど徹底していたといえるだろう。

そして、和辻哲郎が日本古代文化に赴いたことにも、泡鳴の影が働いているのではないだろうか。先に「真正の日本人の血にニーチェと相通じるもののあることを信じている」という『ニイチェ研究』初版「自序」の最後の一言を引いた。そして、和辻哲郎には「武士道と報徳教との隆勢を極めて日本」⁽⁶⁹⁾への反発があり、湯

浅泰雄が指摘するとおり、和辻哲郎には加藤弘之、穂積八束（つつか）、寛（か）克（けい）彦（ひこ）らの国家神道による家族国家論との対峙という課題があった。⁽⁷⁰⁾

岩野泡鳴『神秘的半獣主義』は、イザナミ・イザナミのミトノマダワイを生々欲の発現の表象と見、それによって日本民族は生じたとする見解をとる。その後、それによって岩野泡鳴が寛克彦『続古神道大義』（一九一五）に食ってかかり、「寛博士の古神道大義」（一九一五、のち『古神道大義』）をものしてゆく成りゆきを、和辻哲郎が見ていなかったはずはないだろう。

三一四 永遠回帰をめぐる

若き和辻哲郎が〈各瞬間の絶対価値〉をもってニーチェの哲学の頂点と理解したことについて、わたしは「刹那の絶対」を説いた岩野泡鳴の影を見る。というのも、和辻哲郎『ニーチェ研究』本論第一章「自然としての権力意志」第四節「宇宙」において、ニーチェ哲学の頂点が、ニーチェが絶対にしないうるやうなやり方で説かれているからである。

知識、道徳、宗教すべての自由な生を抑圧するものを追い払い、永久の渾沌、争闘、征服、創造たる権力意志を赤裸々に肯定し、この純粹な生として、すなわち宇宙の本質と合一した生として、生きる所に、この生の永久がある。

かくのごとく、現前の瞬間において永久の生と個人の生とを

合一せしめようとする所に、ニーチェの此岸教がある。不斷に流動するこの生活に対しての強烈な愛情、絶えず経過する各瞬間の絶対価値、——これが彼の哲学の頂点である。⁽⁷¹⁾

和辻哲郎が、このように解釈したのは、『ツアラツストラ』の〈すべての刹那に存在は始まる。すべての「ここ」をめぐる「か」しこ〉の球は回転する。中心はいたるところにある。永遠のたどる小道は曲っている⁽⁷²⁾という一句、あるいは、それを受けたへおお、わが魂よ、わたしはおまえに、「将来」と言い「以前」と言うがごとく「今日」ということを教え、また一切のことをそことかしこを越えておまえの輪舞を舞い行くことを教えた⁽⁷³⁾という一句についてだろう。これは要するに「いま、ここ」が普遍的に存在するということを示した条である。

そして、和辻が「眼前の瞬間」の意義を大きく考えたのは、『ツアラツストラ』第三部2「幻影と謎について」に、「見よ、この瞬間を！瞬間という名のこの通用門から、一本の長い永遠の小路が後方へ走っている」云々という一節に着目したからだろう。これは、瞬時に永遠を感じる「永遠の今」に気づいた瞬間の「内的体験」を象徴的に記述したものと見てよい。

しかし、世界を流動する相貌に帰することに努力を傾けたニーチェが、あるいは「永遠回帰」の着想に狂喜したニーチェが〈各瞬間の絶対価値〉などということを行うだろうか。和辻哲郎が着目したと

思える条には、つづけて、ツアラツストラは、いまだへ事業のさなかにある」と書いてある。ヘツアラツストラは自分自身を完成させなくてはならない⁽⁷⁵⁾と。彼と共にへ創造するもの、共に祝う者⁽⁷⁶⁾を見つげること、また彼は、最終的な強さを身につけることに向かってゆく。つまり、「永遠の今」の感受は、きっかけであっても、ニーチェ哲学の頂点とはいえないのではないか。

ニーチェは、一八八一年八月、突如として「永遠回帰」の観念が、心に閃き、恐怖の戦慄を覚えたと言語。まるで突然の啓示を受けたかのように。「内的経験」を重視する和辻哲郎は、その表現にひきずられてしまったのではないか。その内的経験を疑おうというのではない。が、それはけつして啓示に類するものではない。ニーチェは『権力への意志』断片一〇六三に、こう書いている。

エネルギー恒存の原理は永遠回帰を要請する⁽⁷⁷⁾。

宇宙を閉鎖系と考え、その内のエネルギー総量が恒久不変であるという熱力学の絶対仮説がニーチェの「永遠回帰」に参与していることは疑えない。いや、この言い方は、自然科学の解明する法則をフィクションとするニーチェが、エネルギー保存の法則を世界の第一原理として受け入れたことを示している。この一言は、ニーチェもまた、世界をアトムではなく、エネルギーに還元する熱力学の時代の子弟であったことを映している。

ドイツにダーウィニズムをひろめたのはヘッケル (Ernst Heinrich Haeckel, 1834-1919) であり、ヘッケルは進化論をエネルギー保存則と同様に宇宙の第一原理としていた⁽⁷⁸⁾。ダーウィニズムに対しても、それがフィクションであると鋭く批判したニーチェは、それを知っていたはずだ。

そして、ニーチェが、このような断片を残しているからこそ、先に引いたように、和辻哲郎はへ永久回帰は思想としてはニーチェ自らにとつても未熟」と述べたのだろう。要するに、エネルギー保存則という熱力学の絶対仮説を知識としてではなく、身内に受け入れることによって、「永遠の今」および「いま、ここ」の生の普遍性の観念がニーチェの身内に宿ったのである。

三一五 超人、もしくは内在超越

『悲劇の誕生』(Die Geburt der Tragödie) 以来、経験を超越することを課題にし、「始原の一者」、「存在の深み」、「存在の根源」を求め、絶えず超越を心がけてきたニーチェが、その探究のさなかに、この諸々の生の瞬間が同一性をもっているという観念に行きあたったとき、彼の抱く超越を目指す「自己」の観念もまた、まったく凡庸な一現象に引き戻されてしまった。

わかりやすくいえば、自身の新しさの叫びが、繰り返えされる凡庸な新しさの叫びのひとつにすぎないということに気づいたのだ。「いまこそ新しい事態が起こっている」という叫びを、どれほど多

くの人びとが叫んできたか、そして、その叫びは、これからも繰り返されるだろう、彼らはみな、それぞれ異なる「新しさ」を主張しながら、「新しさ」を叫ぶことにはまったく同じなのだ。自分も、その一人にすぎず、その一人にすぎないことに気づいたのである。

それが自らの卑小さの自覚となり、深淵への下落の感じを覚えたとしても不思議はない。それは、自身に対する「吐き気」、下賤な者どもに対して覚える「吐き気」と同じ「吐き気」をもよおさずにはおかない。「永遠回帰」に伴って、ツアラツストラの覚える「吐き気」の表象は、自己の凡庸さへの下落によって起こる生理的反応であることを、誰しもが認めよう。

そして、それは、その自らの卑小さを自覚しつづけること、その生の凡庸さに耐えることができるなら、己の生は普遍性をもつものとなり、自由を獲得できるはずだという論理に移つてゆく。超越志向のはてに、訪れた生の普遍性、同一性という凡庸さに行きつき、そのようにして手に入れた「永遠回帰」の思想を、それに気づかぬ凡俗どもからの悪罵に耐えて説きつづける「超人」の観念が生じることになる。善悪をはじめとする諸々の観念につきまとわれた、「いま、ここ」の自己から、生の普遍性の自覚へと至りついた人、それが「超人」であり、したがって、それは自己の根底をなすはずの普遍的な生への内在超越となる。『善悪の彼岸』(Vom Guten und Bösen, 1886) が説くのは、このことだ。

『善悪の彼岸』を書き終わっても、ニーチェは、ツアラツストラの旅をつづけた。「未来の立法者」へ向かう旅だ。つまり、ニーチェの哲学の頂点は、「永遠の今」の感受にはない。それは、「いま、ここ」の瞬間が永遠の、その地点が無限のひろがりのひとつにすぎないという、きわめて凡庸な自覚の訪れにすぎない。「今を生きよ」などと、凡庸なことをニーチェが言うはずもない。

三六 宇宙生命との合一

ニーチェの「永遠回帰」は未完成の哲学とし、「いま、ここ」の普遍性をとくニーチェのことばに〈各瞬間の絶対価値〉を読み取り、それをへニーチェ哲学の頂点と見てとる和辻哲郎は、「現前の瞬間」における「永久の生と個人の生との合一」を説く。

いかなる人といえども、自由となり、自ら生き、宇宙生命と合一して生きる時には、真の個人となる。この時個人は真の生であり、全生命であり、主観客観を超越して永久に価値ある唯一実在として生きる。⁽⁷⁹⁾

これが和辻哲郎の説く「生の深み」の意味だ。では、〈主観客観を超越〉することは、どうして可能なのか。和辻哲郎は、それを「直接経験」における主客未分化の状態をもって説いている。⁽⁸⁰⁾

「直接経験」、つまりジェイムズの「純粹経験」に、禅の悟りとの

本質的同一性を見て、それをフイヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814) の「真生命」やシュライアーマハー (Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834) の「神との一瞬の合一」の観念を媒介として、人間の欲望の最高位としての「神との合一」、内面の底に現れる宇宙の「永遠の真生命」との合一と理論化したのが、西田幾多郎『善の研究』(一九二二)にほかならない。それ対して、当時、東京帝大文科大学哲学科大学院生の俊英、高橋里美(一八八六一—一九六四)が、「意識現象の事実と其意味」(一九二二)で、『善の研究』の意義を十分に認めつつも、西田がすべての主客合一の意識状態を「純粹経験」の展開のように論じていることについて、ジェイムズの「純粹経験」とのちがいを突いた。

ジェイムズは、「純粹経験の世界」では、「直接経験」にも、様々な相があることを論じている。ひとつの景色を見ながら、われわれは記憶と重ねて、同一性を確認したり、差異を認識したり、他者にも経験可能な知識に仕立てたりもする。そこでジェイムズは、それらを互いに隣接するものとして説いているのだ。西田幾多郎が「直接経験」と宇宙の「永遠の真生命」との本質的同質性を説くのは、かなりちがう。高橋里美は、その点を突いたのだ。

それに対して、西田は「高橋文学士の拙著『善の研究』に対する批判に答ふ」(一九二二)で、それは同質性(統一性)の側面で考えるか、ちがいが(差別)の側面で見えるか、その見方の相違だと弁解する。「多即一」の論理によって論難を逃れたのだ。このやりとりは、

当時の哲学界ではよく知られていた。⁽⁸¹⁾

和辻哲郎『ニーチェ研究』は、ニーチェが自己の分裂と流動融合の関係を「一即多」の論理で説明していると説いている。⁽⁸²⁾ここに登場する「直接経験」、「永遠の生命」との合一、「一即多」論理という道具立ては、西田幾多郎『善の研究』によく似ている。しかし、ニーチェの哲学は、ショーペンハウアーの説くニルヴァーナへの解脱を逆に折りかえし、権力の意志に向かおうとしたところに発するものであり、それゆえ和辻の読み解きにも、「権力意志」は、心の平安を望まず、〈永久に闘う者それ自身〉と記される。⁽⁸³⁾必ずしも、和辻哲郎は西田幾多郎『善の研究』を参照する必要はなかったかもしれない。なぜなら、ベルクソン『創造的進化』にも「宇宙の生命」や「一即多」の論理は、そろっていたからである。⁽⁸⁴⁾しかし、その「宇宙の生命」は、意識と物質など一切の本質的同一性として想定されているだけだ。つまり、『創造的進化』に、主体と「宇宙生命」との合一という観念は登場しない。

三二七 美について

和辻哲郎『ニーチェ研究』第五章「芸術としての権力意志」は、
 へ花を見て美しいと感ずるのは、その瞬間に花の生命と鑑賞者の生命とが交流するからである。かくのごとく生が、自由に流動し得るほど強烈でなければ、美感はない⁽⁸⁵⁾と説いている。その強烈さに「権力意志」の発現を見るからだ。そして、ニーチェは、生の根本

的な性格である創造性の直接の現れとして芸術を説いているという。

これはおそらく、若き和辻哲郎に起こったニーチェ受容の根幹を示している。〈路傍の小さい草花を見て〉、その美にうたれ、また一篇の戯曲に接して前後不覚の歓喜に入るといふこととき経験、いかえると自然に触れ、芸術にふれて味わう感動を、これほどよく解き明かす哲学はないと感じたがゆえに、和辻哲郎は、ニーチェ自らが体系的展開を放棄し、「芸術的」表現として残した世界の論理体系を再構成してみせたにちがいない。

和辻哲郎は、イプセンやメーテルランクラネオ・ロマンティシズムと呼ばれる思潮に惹かれていたところから、〈路傍の小さい草花を見て〉、瞬間的に宇宙生命との合一を感じるというごとき境地をよく説き明かすものとしてニーチェの哲学体系を論じるようになっていったという成りゆきである。

くりかえすが、そもそもニーチェは実体概念としての、あるいは活動概念としての「宇宙生命」など必要としていない。ニーチェの生は、ただの人間の生命活動しか意味しない。

もし和辻哲郎のいう「宇宙生命」が活動概念だとすれば、人間の「生命」もまた活動概念となり、その本質的同一性を説くことはできる。が、あらためて「合一」せしめる必要など生じない。

そして、オイケンも、ジンメルも、ニーチェの生を普遍的生命として説いたが、彼らの「生の哲学」の流れは、それを「自然の生命」に拡張する。たとえばジンメルは『カントとゲエテ——近代世

界観の歴史への一寄与として』(Kant und Goethe. Zur Geschichte der modernen Weltanschauung, 1906)で、カントが外部の素材に形式を与える主観を論じたことに対して、ゲエテは、そのような主客の対立をはじめから超えていたとし、その思想の核心に、神によって与えられた自然の「生命」という観念があると論じている。ゲエテの自然観は、しばしば汎神論的と見られてきたが、ジンメルはそれを汎「生命」論として論じている。そこにはもちろん、ニーチェの思想が響いているが、ニーチェは、その普遍的生命を「自然の生命」とも「宇宙生命」ともいわない。和辻はニーチェとベルクソンやジェイムズとの哲学の類似やちがいを考察しながら、体系性を欠いたニーチェの哲学の体系的理解を展開し、「宇宙生命との合一」を理想化する体系に達したのだ。やはり、その傍らには、岩野泡鳴『神秘的半獣主義』や、「永遠の真生命との合一」を説く西田幾多郎『善の研究』があつたと考えてよいだろう。

三一八 生命主義芸術論の流れ

例へば牡丹の花の生命に触れると云ふことは、其の牡丹の旺盛にして爛漫たる本性に自己の心を同化させるのである。⁸⁶⁾

自然界の現象は、たゞ単なる物の塊りでは無い。一木一草、一石一葩⁸⁷⁾、皆尽く宇宙の生命と声息を通はしてゐる。

これらはまるで、和辻の説く「路傍の小さい草花を見て、瞬間的に宇宙生命との合一を感じるというごとき境地」によく通うようなことばである。だが、和辻哲郎のことばではない。和辻哲郎よりひとまわりほど齡上の歌人、太田水穂（二八七六一―一九五五）によるもので、前は「心の静謐を保つのに要」（一九一五）、後は「万象の生意と詩人芭蕉の心」（一九一六）より。いずれも、和辻哲郎『ニイチェ研究』よりのちに記されたものだが、太田が歌の作法として説いている心は「心の静謐を保つのに要」であり、ニーチェのいう権力意志の闘争者のそれではない。

太田水穂は、日本歯科医学校（現・日本歯科大）の倫理学教授を務めていたひと。一九〇七年、『信濃毎日新聞』で「文芸時評」を担当していたときには、哲学、思想界の動きを視野におさめて、鋭い批評眼を發揮していた。その「文芸時評」のひとつに「宇宙の妙機に参せよ」という文章がある。その冒頭を引く。

人の性霊が絶大の美に対する時、造化の心は飽く迄人を牽引し左右し遂に心識全部を奪取せずんば止まざらんとす。即ち人は此の刹那造化の肚裏（と）に融会撰取せられて吾が心直ちに造化の心と成り了するなり。⁽⁸⁸⁾

「性霊」は当時の用語で、人間が本質的にもっている精神くらいの意味。信州の山に登って感じた、大自然に心が吸いこまれるような

気持をいつている。そして、すぐあとに、それを真、善、美の極致とし、芭蕉にふれ、アルフレッド・テニソン（Alfred Tennyson, 1809-1892）、ワーズワース（William Wordsworth, 1770-1850）の自然観照について語り、そして聖書の「野の百合」のエピソードにふれ、また釈迦に権威や権力、豪華な生活よりも自然を尊ぶ姿勢を見、それらを「宇宙の妙機に参する」ことだとまとめている。西欧ロマンティズムないしはスピリチュアリズムを受容して、「造化」の心と我が心が一体化する心持をいう伝統的観念を「真・善・美」の調和ないし一致という新カント派の理念を借りて述べていることになる。

太田水穂の場合には、それらのアマルガムのなかから、「宇宙の生命」との合一こそが美の神髄と説かれることになる。彼はそれを、まずは、朱子学を借りて理論化してゆく。⁽⁸⁹⁾ その過程にニーチェや和辻哲郎の『ニイチェ研究』の影響が、働いているのか、いないのか、判定はむづかしいし、判定してもたいした意味はない。和辻哲郎より一世代上の太田水穂の西欧ロマンティズムの受容に発する、短歌の「自然詠」の理論化と、小説や戯曲を読んだときの感動に発する和辻哲郎の芸術論の歩みとが、「路傍の小さい草花を見て、瞬間的に宇宙生命との合一を感じるというごとき境地」を説くところに向かったという点においては、一致したのである。それだけは確かにいえる。

斎藤茂吉が一九二〇年四月から翌年一月にかけて『アララギ』に

連載した「短歌に於ける写生の説」は、正岡子規の説いた「写生」の理念を尊重しつつ、「写生」の語を中国古代にさかのぼって、〈生氣の氣、神を伝へるぐらゐの意味〉を引きだし、「伝神写心」の觀念を原義とした。そして「第四『短歌と写生』一言」に、和辻哲郎『偶像再興』（一九一八）から、ロダン（François Auguste René Rodin, 1840-1917）の彫刻が「自然」すなわち「対象世界」のへんに活躍してゐる生そのものをも含んでいると述べた文章を引用しながら、次のようにいつている。

実相に觀入して自然・自己一元の生を写す。これが短歌上の写生である。⁽⁹¹⁾

ここには和辻哲郎の哲学の影が明らかだ。齋藤茂吉も、ナウマン・ポケット版でニーチェを読んでいた人。和辻哲郎『ニーチェ研究』にも接したにちがいない。だが、齋藤茂吉は伝統的な道教的觀念を「宇宙の生命」の觀念に導いている。そして、この「写生」の語の解釈をめぐっては太田水穂に論駁されることになる。⁽⁹²⁾

これらは、西欧新思潮を、伝統的觀念をリセプターとして受けとり、また、宗教的觀念や形而上学を「宇宙の生命」という觀念によって統一しつつも、それゆえに、その内部にさまざまな角逐をはらんで展開する大正生命主義の、ほんの一端を紹介したにすぎない。

ロダンの彫刻が「自然」すなわち「対象世界」のへんに活躍して

ゐる生そのものをも含んでいるとする和辻哲郎『偶像再興』の一節は、『白樺』ロダン号における、武者小路実篤（一八八五—一九七六）らの見解と照応することはいうまでもないだろう。そして、先に引いた阿部次郎「内生活直写の文学」には、明治末期、武者小路実篤、木下杢太郎のあいだに展開された、絵画表現とその評価基準をめぐる「絵画の約束論争」、制作における主観と客観の関係などのように考えるか、享受者を措定するかどうかをめぐる論議のさなかに、武者小路実篤のいう「自己のために描く」を応援するかのようない節も見えている。これもまた、「生命の象徴」として絵画を考へることを共通の基盤としていることにはかわりない。そして同時代の木下杢太郎、北原白秋らが主張していた「気分情調」も、ドイツ觀念論美学に立ちつつも、生命の象徴表現という觀念と密接に関連するものだったことは変わらない。

結 語

和辻哲郎『ニーチェ研究』は、不断の創造である「宇宙生命」を原理とし、一切をその産物とする世界觀に立ち、「眞の哲学者」は、その現れのひとつである「直接的な内的經驗」を表現する者であり、その表現は「暗示的象徴的」なものになるといふ彼の哲学觀によつて、ニーチェの世界を読み解こうとしたものだった。それは、〈原理によつて諸概念に統一を与える体系哲学〉に、〈欲動の力の体系〉から萌えいでたものとしてニーチェの哲学を対置し、生成、流

動し、体系性を欠くはずのニーチェ哲学に体系性を構築する試みだった。

そして、それは、主我主義のように片づけられたり、狂人の世迷いごとのようにさえいわれたりしていたニーチェの哲学に、二十世紀初頭の哲学や思潮の先駆という位置を与えようとする意図に発していた。和辻哲郎が、ニーチェの哲学ととりくんできつかけとしては、最初期の「霊的本能主義」に顕著な精神性の改革、すなわち「個性の完成」のために突進すべきであるという主張や、そこから必然化する「衆愚と少数者」の対立など、自身が抱えていた問題意識との同一性をニーチェの哲学のなかに見出したことも無視できない。しかし、最も大きく働いたのは、ニーチェの哲学こそが「路傍の小さい草花を見て、瞬間的に宇宙生命との合一を感じるといふとき境地や、一篇の戯曲に接して前後不覚の歓喜に入るといふごとき経験」を最も根本的に説きあかすものだという考えだろう。そうした境地や経験を、象徴の美学として論じることが、当時の芸術家たちのあいだにおこっていたからである。

しかし、和辻哲学が原理とする「宇宙生命」という観念は、生の活動性そのものを原理とし、実体観念を拒否し、一切の概念を「事物化」と考えるニーチェの哲学にはふさわしくない。それは、和辻哲郎の著作のうちには、まずは「シヨートとエダキントとの比較」（一九二二）のうちに、バーナード・ショアの戯曲に得た「宇宙根本の实在」としての「life force」という観念として登場する。そし

て、それは、彼がニーチェの哲学ととりくむうちに、オイケンやジンメル、ベルクソンらの哲学、すなわち二十世紀への転換期の「生の哲学」の流れから汲みあげられ、確立したものとみてよい。意識の流れを生命の流れと説くウィリアム・ジェイムズ『心理学原理』も、その形成には寄与していた。そして、それには、ヨーロッパやアメリカのロマンティズムやスピリチュアリズム、また、ネオ・ロマンティズムを伝統観念で受け取ることによってつくられた大正生命主義の流れが環境庄のように働いていたことだろう。つまり、『ニイチェ研究』は、ベルクソンをふくむ「生の哲学」の流れや「新ロマン主義」、「新カント派」の受容とともに、この時期の日本の哲学界の動きをよく映すものでもあった。

和辻哲郎の「直接的な内的経験」という表現には、ウィリアム・ジェイムズの「純粹経験」よりも、はるかに「人格」と結びつくものに向かっていたのは、阿部次郎のいう「内生活直写」の直接性の重視が響いていると推測される。和辻哲郎が「内的経験」を直接吐露する哲学こそ「真の哲学」であると考えた背景には、日清戦争を前後する時期からさかんになる、個人の心身を鍛えるための修養書の流行があり、その展開として「人生論」がさかんになり、そのひとつとして、著者自身の内面の動きを「直写」する阿部次郎『三太郎の日記』のような随想があったことが働いているように。そして、それは人格の向上をうたい文句にしていた。

それゆえ和辻は、意識の働きの向きには無頓着となり、ニーチェ

哲学の先駆性を説きたいという動機も働き、有用性に傾きがちな意識の働きに着目し、「真理」を生む意識の働きの虚偽性を暴くニーチェと、直接経験の把握の困難性を説くジエムズとの類似を指摘したのであった。それは、「真理」の相対的な有用性をとくジエムズと、ニーチェは、ちょうど正反対の位置にいてを度外視する結果になった。

和辻哲郎は「現前の瞬間において永久の生と個人の生とを合一せしめようとする所」にニーチェ哲学の神髄を見だし、「各瞬間の絶対価値」をもってニーチェ哲学の頂点とするが、これは、ニーチェの「永遠回帰」、時間的には「永遠の今」の誤解であり、ここには、刹那の感情の燃焼に絶対価値を置く岩野泡鳴『神秘的半獣主義』の影を見ることができらるだろう。

そして、和辻哲郎が「真の哲学」の原基にすえる「宇宙生命」は、ニーチェの普遍的生という観念の、いわば形而上化である。その観念は、ドイツの「生の哲学」の流れよりも、むしろ、エネルギー保存則を宇宙の生命エネルギーへと転換したベルクソン『創造的進化』より得たものといえよう。しかし、ベルクソンに「宇宙生命」との「合一」という命題はなく、そこには西田幾多郎『善の研究』が宗教の本質として説く「永久の真生命との合一」の影を見ないわけにはいかない。

この「宇宙生命」の現れである対象の「生命」と、同じく鑑賞者の「生命」との合一こそが、和辻哲郎の考える美の本質、芸術の本

質とされ、和辻哲郎によるニーチェの体系の理解は円環を閉じることになる。

このような和辻哲郎の「宇宙生命」を原基におく哲学体系志向は、生命の普遍性に最も近いものとして、ニーチェの「ディオニソス」像を想定し、それに類似のものを、中国から渡ってきた思想を受け取らない以前の「真正の日本人」像を探らせたり、また仏教彫刻の底に、類似の観念を探る方向に和辻を向かわせることになった。前者には、やはり、イザナミ・イザナギのミトノマグワイに普遍原理としての生々欲の現れを見る岩野泡鳴の『神秘的半獣主義』の影がはたらいっているといえよう。それはまた和辻が早くから、加藤弘之の家族国家論、穂積八束の血統国家論、寛克彦の神道国家論に対して反発を見せ、また中国思想の影響を説く津田左右吉の古代日本論に対しても反発し、独自の古代日本論を形成するところに向かう衝動と、その方向を決定したように想われる。

和辻哲郎『偶像再興』は、ニーチェが『ツアラツストラ』において、国家が作り出す「新しき偶像」に対して怒りをこめて糾弾することをふまえて、「新しき偶像」にとつてかわる古い偶像を復興する企てだった。

また、ここに示された和辻哲郎の体系化志向には、方法としては、アーキタイプを抽出したり、一種の構造主義的方法を見せたりすることの芽生えが見てとれる。アーキタイプの抽出とは、『原始キリスト教の文化的意義』（一九二六）、『原始仏教の実践哲学』（一九

二七)、『孔子』(一九三八)と続く仕事、一種の構造主義的方法とは、『続日本精神研究』(一九三五)で、他地域と日本とを相対的に比較するそれまでの方向から転じて、いわば日本精神を垂直に降りるような態度を見せ、その「日本文化の重層性」の章では、祖先崇拜や神社崇拜と仏教とが「重層的に統一」されたしくみを論じていることをいう。⁽⁴³⁾

要するに和辻哲郎『ニーチェ研究』は、同時代の哲学・思想をたつぷり吸いこみながら、以前から持ちあわせていた彼自身の志向を鍛え、また日本の芸術家たちに要求されていた象徴美学の新理論として、かつ当代哲学の先駆となる哲学のかたちを開示するものとして企てられ、彼の哲学の体系にあわせて、ニーチェの哲学的な文芸作品の背後にひそむ概念を整理したものであり、そして、そこには、その後の和辻哲郎の文化哲学の歩みの志向と方法の原基が胚胎していたのである。

ヴァイタリストとしてニーチェを肯定的に評価する最近の哲学の動きに照らしても、和辻哲郎『ニーチェ研究』は興味深い位置と意味をもつものといえよう。

注

(1) 『和辻哲郎全集』第一巻、岩波書店、一九六一、四一頁。本稿には、全集版所収のテキストを用いた。岩波版『和辻哲郎全集』第

一巻の金子武蔵「解説」には、改訂第三版(一九四二)と初版との異同について、〈誤植と妥当でない措辞とを訂正することが主であって、本質的な変化はなく圏点にいたるまで殆ど初版そのまま〉(六八三頁)と記されている。全集版『ニーチェ研究』は第三版を底本とし、新字新仮名にしたもの。

(2) 同前、四二頁。

(3) 同前、四三頁。

(4) 同前、三頁。

(5) なお、『ニーチェ研究』改訂第二版(一九二八)より、「付録『この人を見よ』について」が付された。これは『我等』一九二八年二月号に「ニーチェの自己観察」として発表されたもの。改訂第二版は、そのほかには誤植訂正を行った程度とされている。

(6) 『和辻哲郎全集』第一巻、前掲書、七頁。

(7) 同前、三七頁。

(8) 同前、三九頁。

(9) 同前、三五九頁。

(10) 同前、四七頁。

(11) 同前、九頁。

(12) 同前、九二頁。

(13) 同前、三二頁。

(14) 『ニーチェ全集』第二巻、理想社、一九六二、二七頁。

(15) 同前、三六頁。原佑訳。

(16) 同前、一四八頁。

(17) 鈴木貞美『生命観の探究——重層する危機のなかで』作品社、

二〇七、第三章三節を参照されたい。

- (18) 同前、七九頁。
(19) 同前、八九頁。
(20) 同前、一二一―一二二頁。
(21) 同前、五五頁。
(22) 『ニーチェ全集』第二卷、理想社、一九六二、一七一―一八頁。原佑訳。
(23) 同前、一七頁。
(24) 同前、七二頁。
(25) 同前、五七頁。
(26) 同前、三六頁。
(27) 鈴木貞美『生命観の探究』、前掲書、第三章五節3を参照されたい。
(28) 『ニーチェ全集』第二卷、前掲書、一七頁。
(29) 『ニーチェ研究』の時点で、和辻哲郎は、ニーチェの書簡に立ち入っていないが、これは和辻の作品世界を重んじる態度を示している。和辻の場合、ニーチェの人格研究の「行き過ぎ」は排除しても、彼の人格が現れた書簡の研究までを退けるものではなく、一九一六年に書簡の翻訳に着手し、順次、雑誌に発表、翌年には岩波書店より、『ニーチェ書簡集』として刊行している。
- (30) 『ニーチェ全集』第二卷、前掲書、三三八頁。
(31) 『和辻哲郎全集』第一卷、前掲書、三八二頁。
(32) 同前、九二、九六頁。
(33) 同前、九二―九三頁。

- (34) 『ニーチェ全集』第九卷、理想社、一九六九、四七六頁。
(35) 『ニーチェ全集』第一四卷、理想社、一九六七、一二九頁。
(36) 同前、一四二頁。
(37) 同前、一五一頁。
(38) 同前、九六頁。
(39) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、第二章九節2を参照されたい。
(40) 同前、四二〇頁を参照されたい。
(41) 『田辺元全集1』筑摩書房、一九六四、四二七―四二八頁。鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、四七六頁を参照されたい。
(42) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、三五八頁を参照されたい。
(43) 同前、三四六頁を参照されたい。
(44) 高山樗牛「巢林子の人生観」(近松巢林子が人生観)『樗牛全集』第二卷、博文館、一九〇五、八五頁。
(45) 『和辻哲郎全集』第二〇卷、岩波書店、増補改訂一九九一、八四頁。
(46) ショーは『バーバラ少佐』序で、自分はニーチェのキリスト教批判の文章を読んでいないと声明し、イギリスでは、ニーチェについて「金髪の野獣」というフレーズをふくむ文章ばかりが流布し、ショーペンハウアーと同じように生贄にされているといい、またニーチェが、わがままなごろつき (selfish bullying) を人生の原理として無意味に称賛するというヨーロッパ人の世評を得ていることと、「超人」という一語のもつ強さとの平仄があっていると述べ、自分が「超人」の語をニーチェから借りたのは、ナポレオンのような

- 「超人」的な独裁者から社会を救済するためであり、そうしたものに對する昔ふうの熱狂の馬鹿らしさを注意深く指摘したはずだ、と弁明している。そして、キリスト教に對する批判としては、その隆勢を一時期のものとするバックル(Henry Thomas Buckle, 1821-62)の進歩発展史観や、ニーチェとともにカール・マルクスなどの名をあげて論じてゐる。Major Barbara, Penguin Books, 1960, pp. 12-13.
- (47) 『和辻哲郎全集』第一卷、前掲書、三八〇頁。
- (48) 『和辻哲郎全集』第二〇卷、岩波書店、増補改訂一九九一、三五三―三五四頁。
- (49) 同前、三五四―三五五頁。
- (50) 『日本人のニーチェ研究譜』ニーチェ全集別巻、白水社、一九八二、三九七―四〇五頁に抄録。
- (51) 『和辻哲郎全集』第二〇卷、前掲書、三五五頁。
- (52) 『和辻哲郎全集』第二一巻、岩波書店、増補改訂一九九一、九頁。
- なお、シヨウの“life force”は、『人と超人』Act ThreeのDon JuanがThe Devilと交わりやりのなかで“Life Forth”なことは“Forth of Life”として登場する。そして、それは“the universal creative energy”と言ふかえられてゐる。“In the sex relation the universal creative energy, ……overrides and sweeps away all personal consideration.”とある。Man and Superman; A Comedy and a Philosophy, Penguin Books, 1946, p.161.
- (53) 『和辻哲郎全集』第二〇卷、前掲書、一四七頁。
- (54) 『和辻哲郎全集』第二一巻、前掲書、一八一―一九頁。
- (55) 同前、二三頁。
- (56) 同前、四〇七頁。
- (57) 同前、三八頁。
- (58) 同前、四八―四九頁。
- (59) 『和辻哲郎全集』第二〇卷、前掲書、二八頁。
- (60) 同前、二八七―二八八頁。
- (61) 『和辻哲郎全集』第二一巻、前掲書、四七頁。
- (62) なお、阿部次郎は一九一九年に『ニイチェのツアラツストラ解釈並びに批評』を刊行、一九三〇年には『悲劇の誕生』―その体験及び論理―を著すことになる。またなお、和辻の著作のなかには阿部次郎の名が現れるのは『ゼエレン・キェルケゴール』(一九一五)自序などがある。和辻は阿部次郎と長い親交を結ぶことになるが、安倍能成は、そのはじまりを和辻の大学卒業後のこととしている。安倍能成「解説」、『和辻哲郎全集』第一八巻、岩波書店、一九六三、四六三頁。
- (63) 『明治文学全集』七五、筑摩書房、一九六八、八九頁。
- (64) 同前、三五五頁。
- (65) 『和辻哲郎全集』第二〇卷、前掲書、一四六頁。
- (66) 岩野泡鳴『神秘的半獣主義』一九〇六、『岩野泡鳴全集』9 臨川書店、一九九五、四頁。
- (67) 岩野泡鳴『神秘的半獣主義』前掲書、二六頁。
- (68) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、第七章一節を参照されたい。
- (69) 『和辻哲郎全集』第二〇卷、前掲書、二二五頁。

- (70) 湯浅泰雄「解説」、『和辻哲郎全集』第二卷、前掲書、四〇七頁を参照。
- (71) 『和辻哲郎全集』第一卷、前掲書、一四八頁。
- (72) 『三・チェ全集』第一卷、前掲書、三四二頁。
- (73) 同前、三四九頁。
- (74) 同前、二四六頁。
- (75) 同前、二五一頁。
- (76) 同前、二五二、二五三頁。
- (77) 『三・チェ全集』第二卷、前掲書、四六一頁。
- (78) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、第二章九節を参照されたい。
- (79) 『和辻哲郎全集』第一卷、前掲書、一七五頁を参照。
- (80) 同前、五九頁。
- (81) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、四一六―四一七頁を参照されたい。
- (82) 『和辻哲郎全集』第一卷、前掲書、五九頁。
- (83) 同前、二五五頁。
- (84) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、第三章三節を参照されたい。
- (85) 『和辻哲郎全集』第一卷、前掲書、二〇六頁。
- (86) 『太田水穂全集』第三卷、近藤書店、一九五七、本の友社復刻版、一九九九、一二頁。
- (87) 同前、二八頁。
- (88) 『太田水穂全集』第五卷、近藤書店、一九五九、本の友社復刻版、一九九九、二二頁。
- (89) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、第八章五節を参照されたい。
- (90) 『斎藤茂吉全集』第九卷、岩波書店、一九七三、七六七頁。
- (91) 同前、八〇四頁。
- (92) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、第八章四節6を参照されたい。
- (93) 鈴木貞美『生命観の探究』前掲書、六二二頁を参照されたい。

**Watsuji Tetsuro's Idea of Philosophy, Life and Art
Concerning *A Study on Nietzsche***

SUZUKI Sadami

(Professor, International Research Center for Japanese Studies, Kyoto, Japan)

Key Words: WATSUJI TETSURO, NIETZSCHE, PHILOSOPHY/IDEA OF LIFE, UCHU SEIMEI (LIFE OF THE COSMOS), NAITEKI KEIKEN (INNER EXPERIENCE), ANJI SHÖCHŌ (SUGGESTIVE SYMBOL), EIEN KAIKI (ETERNAL RECURRENCE), IDEA OF PHILOSOPHY, IDEA OF ART, TAISHO SEIMEI SHUGI (TAISHO VITALISM), SHUYO (SELF-IMPROVEMENT), JINSEIRON (VIEW OF HUMAN LIFE)

A Study on Nietzsche written in 1913 by Watsuji Tetsuro (1889-1960) represents the starting point of his career as a philosopher and it is known as the first academic publication on Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844-1900) in Japan. In addition, Watsuji's thought as seen in this work had great relevance to his later development.

In the first chapter of this paper, Watsuji's position, method, and aims in *A Study on Nietzsche* are analyzed, and it is revealed that his idea of philosophy during his early years, based on the concept of uchu seimei ("life of the cosmos") was a typical example of Taisho Seimei Shugi ("Taisho Vitalism, or Life-centrism"). In the second chapter "Until *A Study on Nietzsche*," I traced his approach to Nietzsche in his early writings, and in the third chapter I considered the meaning of some key concepts such as naiteki keiken ("inner life"), anji shotyo ("suggestive symbol"), eien kaiki ("eternal recurrence") or uchu seimei ("life of the cosmos") and surveyed their relationship with contemporary ideas. In these two chapters, the formative process of his philosophy (the concept of philosophy, expression, and worldview) is revealed. In the last chapter, the conclusions of each chapter are summarized and the extent to which his early philosophy influenced his later work is discussed.

This research will shed light on the formation of conceptual systems in Japan at the beginning of 20th century through examining the relation between shuyo ("self-improvement") and jinseiron ("view of human life") in regard to Watsuji's concept of philosophy and art. In addition, it will fill the lacunae in the previous research concerning the idea of life early in the twentieth century, especially Taisho Seimei Shugi by means of surveying his concept of uchu seimei and its formative process.

model of Yokoyama Yoshiko in *Futon*, and rethink how Katai sincerely loved or desired Michiyo.

In *Futon* its narrator and hero Takenaka Tokio confessed his love or desire for his female disciple Yoshiko after she was brought with her father to her hometown in Chugoku District. For a long time, literary critics and scholars argued whether Katai really loved Michiyo or whether it was just a fiction. The critic Hirano Ken examined the published letters between Katai and Michiyo's father after the publication of *Futon*, and concluded it could not be real love, but rather a fabrication.

Certainly, after the publication of *Futon*, Michiyo came back to Tokyo, and by aid of Katai got married to Nagayo Shizuo, who was the model of Tanaka in *Futon*, as Katai's adopted daughter. But after a few years, she came to criticize *Futon* and Katai, mainly for its depiction of Tanaka. Nagayo was a Christian and wanted to become a man of letters, translated Lewis Carroll's *Alice's Adventures in Wonderland* for the first time in Japan, and wrote some books, and worked as a journalist. But in the final year of the Taisho era, Michiyo and Nagayo divorced.

In 1993, however, Tayama Katai Memorial Museum of Literature in Tatebayashi city, Gunma prefecture issued a book *Letters Around Futon*, edited by Kobayashi Ichiro, the authority of Katai. It had been known that soon after Michiyo came to Katai's house, Katai went to the Korean peninsula as a war correspondent during the Russo-Japanese War, although *Futon* omitted this fact. However, this book revealed Michiyo and Katai's correspondence during this term, in which Michiyo wrote love letters to Katai. Katai's letters were formal and always added they should be shown to his wife. One of Michiyo's letters says Katai is "mizukusai" namely "reserved." After Katai came back, however, Michiyo once went to her hometown and met Nagayo at a meeting at a church in Kobe and fell in love. Michiyo lived with her elder brother Jitsumaro who worked as a teacher of English in Kobe. But since Michiyo left Kobe, it took three days to travel to Tokyo, though it usually takes one day. Therefore, she was suspected to have made some overnight rendezvous with Nagayo. In *Futon*, Yoshiko admitted that she had slept with Tanaka and left Tokyo.

On the other hand, Michiyo's love letters to Katai stopped after she met Nagayo, and Katai began to write letters containing amorous poems addressed to Michiyo. From this sequence, it can be concluded that at first Katai only had caused interest for the young girl, but after the girl's love letters, ceased, Katai abruptly came to feel desire for her.

Katai afterwards wrote a short story "Pistol," in which the hero's wife witnessed the word "mizukusai" in her female disciple's letter and accuses him. However, the content of the letter had not been published. Michiyo seems to have been unsatisfied with Katai's attitude, but he, feeling jealous of Nagayo, did his best to have them married. And Michiyo, in her late years tried to deny the carnal relationship with Nagayo at Kyoto, but her explanation is not persuasive.

The Formation of German Haiku and the New Appreciation of Japanese Haiku

YORIOKA Ryuji

(Professor, Tokushima University, Tokushima, Japan)

Key Words; HAIKU, CULTURAL EXCHANGE, SYMBOLISM, TONE, GERMAN LITERATURE, COMPARATIVE STUDY, MODERNISM, LITERARY GENRE, CONCEPT, MODERN POETRY

The Beginning of German Haiku lies in the introduction of Haiku by German Japanologists and the reception of French Haikai. Haiku then became mixed with short style poetry to eventuate in an original German poetic form, which came to stimulate modern poetry in Germany. Meanwhile, German Haiku have been received in Japan as a symbolic expression. Such exchange has brought to Japan new possibilities of Haiku as a literary genre. My paper deals with such literary exchange between German Haiku and Japanese modern poetry, within which the encounter of modernity and tradition will be considered.

Taguchi Ukichi and Plagiarism

KANRO Junki

(Faculty of Letters in Chukyo University, Nagoya, Japan)

Key Words; AUTHORSHIP, PLAGIARISM

In the twenty fourth year of the Meiji era, Akashi Magotaro was accused of plagiarizing Taguchi Ukichi's *Shina-kaika-syoshi*. The text in question *Shintai-shina-rekish* created a gap between the traditional idea of authorship and the new one. This paper, based on both claims of Taguchi and Akashi, highlights the cultural meaning of this case of plagiarism.

Did Tayama Katai Really Love Okada Michiyo?

KOYANO Atsushi

(Novelist, Japan)

Key Words; FUTON, TAYAMA KATAI, OKADA MICHIO, NAGAYO SHIZUO, FICTION, SHI-SHOSETSU, LETTERS, BIOGRAPHY

Some scholars have made comments on *Futon* by Tayama Katai without referring to the important biographical researches, which are not generally known. In this paper, I recast the process of the formation of *Futon*, the relationship between Katai and Okada Michiyo, the

features in the story, and pointed out complex aspects about Sanki, who has a nihilistic character with unstable feelings for women. As for other characters, I especially focused on Miyako. She had a great attachment to the land of Shanghai. Through her existence in the story, other important characters become more objective. I also pointed out the similarities in pronunciation which are often used in the story, which contributes to the molding of characters.

Matsumura Kenzo Group: Japan's Diplomatic Pipe to China: 1959-1972

ZHAI Xin

(Associate Professor, Shanghai Jiaotong University, Shanghai, China)

Key Words; MATSUMURA KENZO GROUP, THE LIBERAL DEMOCRATIC PARTY GOVERNMENT, THE DIPLOMATIC PIPE TO CHINA, THE NORMALIZATION OF CHINA-JAPAN RELATIONS

To break the ice of diplomatic relations before the reestablishment, the political group organized by the representative of the Liberal Democratic Party, Matsumura Kenzo, had become the most significant power in the Japanese conservative camp during the normalization of China-Japan relations, due to its practice of economical and cultural intercourse with China and communication of political views between governments and ruling parties from both sides. He advocated that Japan should establish long-term and stable relations with China based on the Japan-US Security Treaty, and to serve the best interests of the nation. This stratagem fundamentally informed the whole of Japan's policy toward China.

Eugen Herrigel's "Die Tradition im japanischen Volks - und Kulturleben": Japanese Translation and a Comment

AKISAWA Mieko and YAMADA Shoji

(Independent researcher/Associate Professor, International Research Center for Japanese Studies, Kyoto, Japan)

Key Words; EUGEN HERRIGEL, ZEN IN THE ART OF ARCHERY, NAZISM, CULTURAL SUPERPOWER

Together we translated and examined an unknown article of Eugen Herrigel, published during World War II. The article discusses the tradition and spirituality of Japanese culture, the aesthetics of cherry blossom-viewing, metempsychosis, Mikado adoration, and the praise of self-sacrifice. His article is notable because he ranked State Shinto as the highest expression of the spirit of Japanese culture, while he remained silent on the theory of Japanese culture/Zen Buddhism, which was included among his own beliefs.

**The War Poetry of Yone Noguchi: *Declaration of War* 『宣戦布告』 (1942) and
Congratulations on the “Hakkou-ichi-u” 『八紘頌一百篇』 (1944)**

HORI Madoka

(The Graduate University for Advanced Studies, Kyoto, Japan)

Key Words; WAR POETRY, PATRIOTIC POETRY, NATIONAL EPIC, BROADCAST BY RADIO, MEDIA, MODERNISM, DECLARATION, *DECLARATION OF WAR* 『宣戦布告』 (1942), *ON TRADITION* 『伝統について』 (1943), *CONGRATULATIONS ON THE “HAKKOU-ICHI-U”* 『八紘頌一百篇』 (1944)

Being labelled “the writer of War Poetry” brought harsh assessment in the postwar era to all the Japanese-language-poetry by Yone Noguchi (1875-1947). Reading his wartime poetry has often been done in the light of his engagement with the media of the same era, such as his radio broadcasts, and it has been used to measure his “guilt,” in terms of its devious manipulation of the public (and its tendentious use as political propaganda during that imperialist era). It is true that the period of World War II and of the mass production of War Poetry was concurrent with the development of radio broadcasting. From the viewpoint of the relationship between the new media and War Poetry, all (that can be found) is a kind of “scissors-and-paste” poetry (the so called, “Rubbish Poetry”) with a brute, political voice-power. Whereas this “war poetry” is nowadays regarded as belonging to a single category, during the war it was referred to under various terms, such as “war poetry”, “patriotic poetry”, “the national epic,” and at the time the poets engaged in discussion of the various roles fulfilled by that wartime poetry. Furthermore, poets, even one such as Yone Noguchi, known for being actively propagandist, provided clear pacifist imagery in their work, and also were critical toward national politics in their poetry.

This paper aims to investigate both the well-known aspects and the unknown aspects of Yone Noguchi’s wartime poetry. While Yone Noguchi wrote in concert with his broadcast by radio and was involved in contributing to National policy, he also wrote poetry showing a degree of resistance and desperation, which fell foul of the censor. This paper discusses his *Declaration of War* 『宣戦布告』 (1942), and his *Congratulations on the “Hakkou-ichi-u”* 『八紘頌一百篇』 (1944), which were both confiscated by GHQ right after the end of the war.

A Wanderer in a Foreign Country: A Study on *Shanghai*

NAKAGAWA Tomohiro

(Nagoya Economical University Ichimura High School, Nagoya, Japan)

Key Words; YOKOMITSU RIICHI, *SHANGHAI*, FOREIGN COUNTRIES, WANDERING, IDENTIFICATION, INTERNATIONAL SITUATION, MATERIALISM, ELABORATION

This article treats *Shanghai* written by Yokomitsu Riichi, in which I analyzed the characters’

period also saw the decline of politically-connected businessmen as well as the appearance in the Tairen economy of leading business intellectuals and Japanese firms like the South Manchurian Railway Company. This new information network promoted the formation of a pragmatic new community in Tairen. It should also be said that the effects of the Tairen Industrial Exhibition were not limited only to Tairen city, but this period also corresponded with the time when public opinion came to its boiling point in calling for the unification of Mongolia and Manchuria by the Japanese government in Manchuria, and necessitated a radical new perception of Manchuria and Mongolia.

Change in Guding's Thought as Seen in his Translations

MEI Ding

(The Graduate University for Advanced Studies, Kyoto, Japan)

Key Words; GUDING, TRANSLATION, MANCHUKUO, THE CHINESE LEAGUE OF LEFT-WING WRITERS, THE GREAT EAST ASIAN WAR, RACIAL HARMONY

Guding translated Japanese works into Chinese throughout his life. His translations can be divided into three periods: the Beiping period, the Manchukuo period, and the People's Republic of China period. As this article is concerned with his translations in the Manchukuo period, Beiping period translations are mentioned, although those of the People's Republic period are not treated.

After the Manchurian Incident, Guding escaped to Beiping and joined The Chinese League of Left-Wing Writers. He translated works of Japanese proletarian literature as he supported the struggle of Chinese workers who were organized by the Chinese communists.

In Manchukuo, Guding translated some anti-socialist works such as *Sad Toyd* by Ishikawa Takuboku (1937). These translations display Guding's attempt to maintain hope in the midst of difficult circumstances. His response to the left wing atmosphere highlights the extent of the Manchukuo's repression of left-wing activity.

During the period of 1938-1941 he translated literary works such as Natsume Soseki's novel, *Kokoro*. Guding's attempt to master literary technique and reform the Chinese language can be seen in these translations.

During the period from 1942 to 1945 Guding translated works such as *The History of American and English Aggression in East Asia*, which are thought to have contributed to the propaganda of the Great East Asian War. These translations indicate that while Guding was aiding the Japanese cause, he was doing so with reluctance.

However, as seen in Guding's suggestion to form The National Institute of Translation and employ the Chinese pronunciation system Zhuyinfuhao, his efforts to protect and preserve Chinese culture against the policy of Japanese colonial cultural directives must be recognized.

ning. Between the success of department stores in Nihonbashi like Mitsukoshi and the closing of Shinbashi Station following the 1914 opening of Tokyo Station, Ginza was facing an unprecedented crisis. Shinzo made several pivotal proposals to allow the stores of Ginza to coexist and mutually prosper, including: a plan to create a “Greater Ginza” by doubling the number of blocks officially designated as “Ginza” from four to eight; plans for turning Ginza into a shopping arcade; and a proposal for Ginza stores to cooperate by improving the appearance of the district’s buildings and streets and working together to replenish stock.

Most of Shinzo’s proposals received newspaper coverage and were highly influential. Starting with the “Greater Ginza” plan, several of his projects came to fruition, laying the foundation for today’s Ginza. At the same time, Shinzo stressed that each of Ginza’s stores should become highly specialized and have a unique character. He argued that Ginza would only be able to compete with the department stores by transforming into an assemblage of distinctive shops. Shiseido itself made an effort to draw customers to Ginza by selling cosmetics and taking a variety of measures that emphasized its own unique ambience and that of Ginza, such as opening the Shiseido Gallery and the Shiseido Parlor.

Fukuhara Shinzo was clearly aware of the power that a city’s image could lend to the image of corporations and products. While paying close attention to the design and formulation of cosmetics, he worked hard to elevate the image of urban Ginza. The “Ginza” image, currently one of Shiseido’s most significant intangible assets, is founded on the efforts Fukuhara Shinzo made with Ginza in mind.

**Historical Research on the Industrial Exhibition in Tairen,
Held in the Northeast of China (Old Manchuria) in 1925:
The Presentation of Manchuria and Mongolia in Mass Media**

TAKEMURA Tamio

(Former Professor of Osaka Industrial University, Japan)

Key Words: TAIREN, INTERNATIONAL EXHIBITION, SOUTH MANCHURIAN RAILWAY COMPANY, COLONY, TOURISM, RADIO

The Tairen Industrial Exhibition was held in Tairen city on August 10, 1925. The exhibition highlighted the broad outlines concerning the connection between international exhibitions and colonialism. The exhibition was held in the same year (1925) that the new municipalization of Tairen had commenced. In addition, it also coincided with the May 30 Movement in Shanghai as well as the period of fierce international competition in capital investment in Manchuria. This crisis in Imperial Manchuria led to a shift in policy to a so-called “cultural control” combined with a “pragmatic” policy in Manchuria and Mongolia.

The Tairen Industrial Exhibition symbolized these contemporaneous phenomena. It also served as the occasion for the emergence of new modes such as tourism, radio, film, neon light, etc. that linked Japan, Manchuria, and Korea, as well as information on the nighttime ornamentation of urban space and other cultural accoutrements. Also speaking economically, this

SUMMARIES

**Image Genealogy and Allegory in the Pictures of the Octopus Entwining
around a Female Diver: The Shunga Expression of SEKAI and SHUKO**

SUZUKI Kenkou

(The Graduate University for Advanced Studies, Kyoto, Japan)

Key Words; SHUNGA, ENPON, UKIYO-E, K AidAN, HOKUSAI, KATSUKAWA SHUNSHO, KITAO SIGEMASA,WARAI,
SEKAI, SHUKO, NOH FARCE

This paper discusses the theme of the “Octopus and the Female Diver,” the most famous shunga of Hokusai, and I attempted to analyze the picture’s artistic expression. First, I supply a genealogy chart of the pictures that included the motif of “Octopus and the Female Diver.” I then applied the expressive methods of KABUKI and JORURI to the genealogy chart of the pictures. Through my research, I discovered that this Shunga includes the structure of SEKAI (a myth) and SHUKO (a device). At the same time, we can understand that the expressive structure of this Shunga is composed of elements of an old legend and many well-known folktales. This paper differs from previous Shunga research that tends to focus on sexual elements. Thus, it is hoped that this paper will reveal a new side of Shunga.

**The Birth of “Tokyo Ginza Shiseido”: Fukuhara Shinzo and
the Construction of Ginza’s Image**

TOYA Riina

(The Graduate University for Advanced Studies, Kyoto, Japan)

Key Words; SHISEIDO, GINZA, SHINBASHI, FUKUHARA SHINZO, FUKUHARA ARINOBU, TOKYO CITY PLANNING,
GOTO SHINPEI, BRAND IMAGE

Shiseido is the epitome of the many famous stores in Ginza. The “Tokyo Ginza Shiseido” trademark is widely recognized in Japan and overseas, but Shiseido was known as “Tokyo Shinbashi Shiseido” after Fukuhara Arinobu established the company as Japan’s first Western pharmacy in 1872. Arinobu’s third son Shinzo, who took over as company president, began selling cosmetics in earnest and adopted the “Tokyo Ginza Shiseido” trademark in 1921. Subsequently, a powerful image associating Shiseido with Ginza took hold. This article examines the circumstances behind the changing of the Shiseido trademark.

At that time, Fukuhara Shinzo was an energetic spokesman for Ginza, advocating for the district’s stores with Tokyo City and Home Ministry officials in charge of Tokyo city plan-

CONTENTS

SUZUKI Kenkou

Image Genealogy and Allegory in the Pictures of the Octopus Entwining around a Female Diver:
The Shunga Expression of SEKAI and SHUKO13

TOYA Riina

The Birth of “Tokyo Ginza Shiseido”:
Fukuhara Shinzo and the Construction of Ginza’s Image53

TAKEMURA Tamio

Historical Research on the Industrial Exhibition in Tairen, Held in the Northeast of China (Old
Manchuria) in 1925: The Presentation of Manchuria and Mongolia in Mass Media81

MEI Ding

Change in Guding’s Thought as Seen in his Translations121

HORI Madoka

The War Poetry of Yone Noguchi: *Declaration of War* (1942) and
Congratulations on the “Hakkou-ichi-u” (1944)187

NAKAGAWA Tomohiro

A Wanderer in a Foreign Country: A Study on *Shanghai*221

ZHAI Xin

Matsumura Kenzo Group: Japan’s Diplomatic Pipe to China: 1959–1972233

AKISAWA Mieko and YAMADA Shoji

Eugen Herrigel’s “Die Tradition im japanischen Volks - und Kulturleben” :
Japanese Translation and a Comment253

YORIOKA Ryuji

The Formation of German Haiku and the New Appreciation of Japanese Haiku265

KANRO Junki

Taguchi Ukichi and Plagiarism281

KOYANO Atsushi

Did Tayama Katai Really Love Okada Michiyo?297

SUZUKI Sadami

Watsuji Tetsuro’s Idea of Philosophy, Life and Art: Concerning *A Study on Nietzsche*315

SUMMARIES(Japanese)7

SUMMARIES(English) v

Contributors iii

◆所属並びに論文受付・受理日一覧

題 目	著 者	所 属	受付日	受理日
海女にからみつく蛸の系譜と寓意	鈴木 堅弘	総合研究大学院 大学	平成20(2008)年 3月26日	平成20(2008)年 6月17日
「東京銀座資生堂」の誕生	戸矢理衣奈	総合研究大学院 大学	平成20(2008)年 3月31日	平成20(2008)年 6月18日
1925年近代中国東北部(旧満洲)で 開催された大連勧業博覧会の歴史 的考察	竹村 民郎	元大阪産業大学	平成20(2008)年 3月31日	平成20(2008)年 6月23日
古丁における翻訳	梅 定娥	総合研究大学院 大学	平成20(2008)年 3月31日	平成20(2008)年 6月18日
野口米次郎のラジオと刊行書籍に 見る「戦争詩」	堀 まどか	総合研究大学院 大学	平成20(2008)年 3月31日	平成20(2008)年 6月16日
異郷での彷徨	中川 智寛	名古屋経済大学 市邨高校	平成20(2008)年 3月27日	平成20(2008)年 6月12日
松村謙三グループ：自民党政権の 対中パイプ	翟 新	上海交通大学	平成20(2008)年 2月4日	平成20(2008)年 6月16日
オイゲン・ヘリゲル著「日本民族 の生活と文化における伝統」全訳 と解題	秋沢美枝子 山田 奨治	翻訳家 国際日本文化研 究センター	平成20(2008)年 3月31日	平成20(2008)年 6月23日
ドイツ・ハイクの生成と俳句再評 価	依岡 隆児	徳島大学	平成20(2008)年 3月31日	*
歴史書の剽窃	甘露 純規	中京大学	平成20(2008)年 3月31日	*
岡田美知代と花袋「蒲団」につい て	小谷野 敦	作家	平成20(2008)年 3月31日	*
和辻哲郎の哲学観、生命観、芸術 観	鈴木 貞美	国際日本文化研 究センター	平成20(2008)年 3月31日	*

*は査読対象外の論文である

『日本研究』投稿要項

- 1. 刊行の目的** 『日本研究』は、国際日本文化研究センターが刊行する日本文化に関する国際的な学術誌であり、研究の成果を日本文にて掲載発表することにより、日本文化研究の発展に寄与することを目的とする。
- 2. 募集原稿** 原稿の種類は、次のとおりとする。
 - (1) 研究論文：オリジナルな研究を論文としてまとめたもの
 - (2) 研究ノート：研究の中間報告、覚書など
 - (3) 共同研究報告：国際日本文化研究センター（以下「センター」という）における共同研究の成果
 - (4) その他：研究展望、研究資料、調査報告、書評等
- 3. 投稿資格** 本誌に投稿することができる者は、次のとおりとする。
 - (1) センターの専任教員並びに客員教員
 - (2) センターが受け入れた共同研究員、外来研究員、特別共同利用研究員、及び、総合研究大学院大学国際日本研究専攻の学生
 - (3) 外国人の日本研究者、あるいは、海外在住日本人の日本研究者
 - (4) その他、編集委員会が適当と認めた者
- 4. 執筆要領** 原稿の執筆に当たっては、別に定める『『日本研究』執筆要領』による。
- 5. 原稿の提出** 投稿する場合は、原稿とその要旨（400語程度の英文および和文の要旨にそれぞれ10語程度のキーワードを添付のこと）各3部に所定の様式の送付状を添えて編集委員会宛に送付する。手書き原稿の場合は、必ずコピーをとっておくこと。
送付先：〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3丁目2番地
国際日本文化研究センター
『日本研究』編集委員会
- 6. 掲載の決定** 投稿された原稿は、査読委員の審査を経て、編集委員会が掲載の可否を決定する。編集委員会は、掲載に当たって最終的に原稿の種類を判定するとともに、著者に補筆や修正を求めることができる。
- 7. 著者校正** 著者校正は、原則として初校のみとし、誤植等の修正にとどめ、文章等、内容上の変更は行わない。
- 8. 本誌の配布** センターは、刊行した本誌を広く国内外の日本研究機関等に配布する。
- 9. 抜刷り等** 著者には、原稿掲載誌を3冊、及び抜刷りについては、50部までの希望部数を配付する。
- 10. 著作権** 掲載された論文等の著作権は、本センターに帰属するものとする。他の出版物への転載又は、翻訳・出版する場合には、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに当該論文等に初出は本誌であることを明示すること。
- 11. 掲載論文等のデータベース化** センターは、内外の研究者の利用に供するため、本誌に掲載された論文等をデータベース化し、公開することができる。

※投稿希望者は、『『日本研究』執筆要領』及び「原稿送付状」の用紙を編集委員会に請求してください。
あるいは日文研のホームページからダウンロードすることもできます。

<http://www.nichibun.ac.jp/>

日本研究 (NIHON-KENKYU) 第38集

平成20年 9月30日 初版発行

編集人 井上章一

発行人 猪木武徳

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町 3丁目 2番地

電話 075-335-2222 ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp/>

制作 株式会社 角川学芸出版

〒113-0033 東京都文京区本郷5-24-5 角川本郷ビル 9 F

電話 03-3817-8535

©国際日本文化研究センター 2008 Printed in Japan

ISSN-0915-0900
